
最強の勇者はヒーラーでレベル1

Crystal

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強の勇者はヒーラーでレベル1

【Nコード】

N39780

【作者名】

Crystal

【あらすじ】

王都の外へ出たくて冒険者になったスファレだったが、単独行動をするためには最低でもレベル20は必要だという。王都内で目標レベルまで上げるには何十年もかかることだろう。そこで考えたのがレベルの高い仲間を見つけること。そんな感じで王都内を歩いていると、ちょうどいいところに冒険者らしき少年の姿が……。

第1話 新人冒険者と謎のヒーロー

とある事務所の受付カウンターに座っている女性は、少女から受け取った書類に目を通した途端 その要求をきっぱりと拒絶した。

「ダメですね、許可できません……」

「ちよつ、どーしてダメなんですか！ ちゃんと検定に合格して冒険者になつたんだから、王都の外へ出て来ても良いはずでしょー？」

問答無用で下されたその決定に納得できないのは、二ヶ月ほど前に行われた今期の検定に合格して、晴れて冒険者の仲間入りを果たしたスファレライトという名の少女であった。

年の頃十五、十六歳ほどの可愛い女の子で、簡易な皮鎧を纏っていることから考えると職業は戦士であると思われる。そのスファレが受付のお姉さんへ難癖を付けるようカウンター越しに詰め寄っている。受付のお姉さんも、聊かうんざりした様子で対応していた。

「スファレライトさん……でしたね。確かに、今期の冒険者検定に合格しているようですが、それだけでは王都の外へ旅立つ許可を出すわけにはいきません」

「だから、どうしてダメなんですか！」

あくまでも納得のできないスファレは、カウンターをバンバンと叩きながら強く抗議する。端から見ると完全にクレイマーである。

しかし、これまでもこういう輩を数多く相手にしてきた受付のお姉さんはまったく怯まない。受付のお姉さんは、静かな口調で言い逃れのできない事実をスファレに突きつけた。

「戦士でレベル1……」

「はっつ！」

「しかも、たった一人で王都から出ようとするなんて……あなたは、外の世界を甘く見過ぎています。死ぬのがわかつているのに許可を出すわけにはいきません」

その拒絶するような強い口調にスファレは言葉を詰まらせる。そう、二ヶ月も前に冒険者となったにも関わらず　スファレは未だレベル1であったからだ。

「で、でも……。レベルを上げるにしたって外に出ないことには、王都の中でも経験を積むことは可能です。まずはレベルに見合ったクエストを受けてください。外界で単独行動するつもりならそうですね、最低でもレベル20は無いと……」

「れ、レベル20なんて、王都内クエストで上げるなら何十年かかる」と！

「それが嫌なら、レベルの高い仲間を見つけることですね」

「な、仲間……」

そんな受付のお姉さんの提案を聞いて、スファレは思わず絶句してしまうのだった。

今から五千年前に誕生した精霊界第四の聖界クリスタル

かつて滅亡の危機に瀕した人間界の代替として、精霊神クリスタルが創造した聖界である。

そのため、第四聖界クリスタルには精霊族の他にも数多くの人間族が暮らしていた。いや、人間族だけではない。表には現れないだけで、クリスタルには竜族や魔族、天空族といったような様々な種族も存在していた。

そんな混沌としている精霊界第四聖界……。そして、中央大陸に

位置するルチルクオーツ王国がこの物語の舞台であった。

ルチルクオーツ王国は、広い国土を有しているが、そのほとんどが未開の地である。

人が住めるのは王都と呼ばれる高い外壁に囲まれた巨大都市のみであり、その中で生産・流通・消費がまかなわれていた。

ほとんどの者は、外界へ出ることもなく王都で一生を過ごすことになる。王都こそがルチルクオーツ王国であるといっても過言ではない。人が生活する上で必要な全てが王都には揃っているのだ。

また、王都の外側……外界へ出る者は王室によって厳しく管理されていた。

外界へ出る者を極端に制限することは、ある意味正しい処置であろう。なぜなら、外界には魔物と呼ばれる凶暴な巨大生物が数多く闊歩しているからだ。

そのため、一部の王室関係者を除いて、住人が外界へ出ることは禁止されている。唯一の例外があるとするならば、ルチルクオーツ王室によって認定された冒険者たちであった。

冒険者の役割は、大きく分けて二つある。一つは、ルチルクオーツ王国に仇なす魔物を退治すること。もう一つは、広大な国土の中で魔物の影響が少ない土地を探し出すことだ。

近年、ルチルクオーツ王国は、人口の増加に伴い王都が手狭になってきた。王都周辺の土地を拡張する計画もされてはいるが、根本的な解決とはならないだろう。安全な土地を見つけて、そこに第二の都市を造る。今のルチルクオーツで急務とされている事業の一つだ。

それらの理由から、ルチルクオーツにおいて冒険者は何彼と優遇されている。優れた冒険者は、ルチルクオーツにおいて英雄と同位であった。

そんな冒険者に憧れる若者たちは多い。今期の冒険者検定で戦士となったスファライトも同じだろう。いや、確かに憧れてはいたが……厳密にいうとスファレは冒険者になりたかったわけではな

った。

外の世界を見てみたい　スファレの願いはその一点にあった。当然ではあるが、一般人が外界へ出ることは禁止されている。そこでスファレの取った行動というのが唯一外界へ出る資格を有する王室認定の冒険者になることであつた。

「ちえ〜っ、冒険者になりたてのレベル1の戦士を誰が仲間にしてくれるっていうのよ〜。やっぱり王都内でのクエストをこなして…
…地道にレベルを上げるしかないのかな〜」

通常、検定に合格した冒険者がまず行うことといえば、冒険者管理組合が提供している王都内でのクエストをクリアすることである。それにより経験値を得ることができて冒険者としてのレベルも上がっていく。冒険者パーティの仲間に入れてもらうにしても、レベルを上げないことには話にもならない。だが、スファレは冒険者になつてから一度も王都内でのクエストを受けたことがなかつた。

理由は単純明快…。スファレは、冒険者になりたかつたわけではなく、外界に出たいがためだけに冒険者となつたからだ。

もの凄い努力をして冒険者になつたというのに、外界へ出るためにはレベルを20も上げないといけない。これ以上そんな苦勞はしたくない　というのがスファレの本音であつた。

もちろん、冒険者管理組合の許可が下りなければ、絶対に外界へ出ることはできないのも事実である。スファレにしてみれば、今すぐにも外界へ出てみたいはずである。それを手っ取り早く可能にする方法があるとすれば、レベルの高い冒険者とパーティを組み……クエストと称して外界へと連れ出してもらつたことだつた。

しかし、そんな都合の良い冒険者など見つかるはずもない。

同期の冒険者を集めて新たなパーティを組むことも考えられたが、検定を終えてから二ヶ月も経っているためそれも難しそうである。皆、どこかのパーティに参加させてもらっているはずだ。

八方塞がりの状況にスファレは大きなため息を吐く。ここは冒険者管理組合のお姉さんが言ったように、大人しく王都内のクエストをこなして レベルを上げるしかないのだろうか。そんなふうに考えていると、遙か前方の屋敷の外壁……スファレの瞳にフードを被った少年の姿が映った。

少年は、何をすることもなく無言で外壁にもたれかかっている。整った顔立ちではあったが、その姿にはどこか陰のようなものが感じられた。

決して自分には近づくな

言葉にはしていないが、そんな意志のようなものが少年の全身から発せられている。それを感じ取ってか、誰一人として少年に近づこうとする者はいない。いまいち空気の読めない、ただ一人を除いては……。

「あのフードの男、気配からして間違いなく冒険者ね　しかも、暗そうな雰囲気からするとソロ冒険者！」

なんとも酷い言いようではあるが……スファレにしてみれば少年が何者であるかという疑問より、ソロ冒険者であるのかを確かめることの方が重要だったようだ。

「こいつは放っておく手もないよね。ちょっと、そこのお兄さん」
「……ん？」

何の警戒もなく近づいてくるスファレに少年も面食らっているようである。スファレは、フードに隠されていた少年の装備　腰に提げられた長剣を見てにんまりと微笑んだ。

「ねえ、あなた……冒険者だよね。その装備からして戦士系？
じつは、わたしも……」

「いや、戦士系じゃない　回復系だ……」

「えっ？　回復……って、あなたヒーラーなの……！」

予想もしていなかった返答にスファレは驚愕してしまった。

ヒーラーと言えば、冒険者パーティにおいて護りの要……。回復
の精霊術や精霊法を使って、傷ついた仲間を癒す存在である。

それは戦闘中においても同じで、ヒーラーの役割といえば後方支
援と相場が決まっている。少年のように長剣を携えているヒーラー
の話など聞いたことがない。しかも、少年が持つ長剣は鋼鉄製で、
スファレが武具屋で購入した剣より立派なものであった。

「ちよつ、何の冗談？　あなたのどこが聖職者！」

「そつちから声をかけてきたくせに、めちやくちや言うヤツだな」

スファレの失礼な物言いに少年はうんざりとした表情を浮かべる。
明らかに拒絶の意志を示しているのだが　鈍感なスファレには全
く伝わらなかったようだ。

「それで、ヒーラーっていうのなら……何信仰なの？」

「うっ……、それは……」

高位の回復者になると己の力を元にした精霊術も使うことはでき
るが、初級職業であるヒーラーの場合は崇める対象の御力を受けて
精霊法　奇跡の御業を代行して発動することになる。つまり、こ
の少年がヒーラーだというのなら、信仰している対象が存在するは
ずだ。

何気なく質問した内容ではあったが、口籠る少年の様子にスファ

レは興味を覚えた。いったい、どんな信仰対象が出てくるというのだろう。

一般的にヒーラーが崇める対象でいうと、この世界を創造したとされる精霊神クリスタルといったところであるうか……。だが、少年の口からは予想外の信仰対象が発せられた。

「え〜つと、精霊神……ファリスさま？」

「なぜ疑問系？　っていうより、ファリスってあの異世界の女神！」

同じ精霊神ではあるが　この聖界においては創造神でもあるクリスタルの方が圧倒的に有名である。それなのにファリスなどというマイナーな精霊神の名前を出してくるあたり、少年のヒーラーとしての能力も高が知れていそうであった。

「……ぷっ、あはははっ　どの面下げて精霊神信仰〜〜。しかも、精霊神ファリスを信仰しているなんて」

「ほっとけ……」

「っていうより、あんたならどっちかっていうと魔神信仰なんじゃないの〜？」

数回言葉を交わしたただけであんた呼ばわりする失礼な相手に、苛立ちを覚えたのか少年は大きなため息を吐いた。

「はあ〜……。どうでもいいから向こうに行ってくれないか〜？」

はつきり言って、うざい……」

「うざい……って、こんな可愛い女の子が声をかけているっていうのに、何がうざいか〜！〜！」

「自分で可愛い女の子……とか言うヤツが実際に可愛かった例は無い」

「なにを〜！〜！」

「やれやれ……。変なのに絡まれた……」

此れ見よがしに頂垂れる少年の姿を見て、スファレは頭に血が上ってしまふ。もはや、当初の目的　少年がソロ冒険者かどうかを確かめることさえ忘れていた。

「だいたい、ヒーラーってどうなのよ？　冒険者っていったら攻撃重視の戦士系が基本でしょ！」

「……戦士系？」

「今からでも遅くないから、戦士系に転職してみたらどう？」

「ふっ、何も分かっていないようだな。冒険者の基本はやはり回復系……、パーティに戦士がいなくてもヒーラーは絶対に必要だ」

「ぜ、絶対って……、回復ならアイテムとかを使えば問題ないでしょ！」

「アイテム所持には限度がある。それにアイテムを購入するには金も掛かるしな……」

「そんなこと言うなら、ヒーラーだって精神力が無くなったら回復出来ないじゃないのよ！　それに、ヒーラーなんて成長も遅いし体力も無いから、戦闘になったら即行で殺されるのがオチでしょ？」

一般的なヒーラーのイメージといえばスファレが語った通りである。しかし、どうやら少年の考えはスファレのそれと違っているようであった。

「それは、ヒーラーに限らず冒険者としての才能が無いだけだ。その程度で殺されるようなら、冒険者なんて辞めた方がいい……」

じつに見事な正論ではないか。スファレと二歳ほどしか違わないであろう少年ではあったが、言葉の重みというべきか……冒険者として培ってきた経験が違い過ぎているようだ。

所詮、スファレが口にしたのは冒険者のイメージでしかなく、どちらが正しいかは確認しなくても明らかであろう。まだレベル1のスファレは、まともに冒険したことすら無いのだから。

「へ、へえ〜言うじゃない……。そういうヒーラーさんは、さぞかし凄い冒険者なんでしょうね〜？ あんた……。レベルは幾つぐらいなのよ？」

スファレが質問した瞬間、少年の顔色がサツと青くなった。どこか拳動不審気味に視線を泳がせながら、なぜか冷や汗を掻いている。そんな様子をスファレが不思議に思っていると、覚悟を決めた少年は ゆっくりとその重い口を開いた。

「れ、レベルは……まだ1」

「……………。はあ？」

あまりにも予想外な返答にスファレは啞然としてしまう。

そう、この少年はヒーラーでレベル1 スファレと同じ、今期の検定で冒険者となった新人のようであった。

決して人のことは言えないが検定から二ヶ月も経っているというのに未だレベル1というへたれ具合……。スファレは思わず口走ってしまった。

「え〜っと……。見かけ倒し？」

「だから、ほっとけーーーーー!!」

初めて感情を剥き出しで叫ぶ少年にスファレは少し驚いてしまう。いや、先程までの遣り取りとは違い、ちゃんとコミュニケーションが取れているのではないだろうか。

そんな少年を前にして、スファレは無意識のうちに微笑んでしま

う。

これが謎多きヒーラーの少年と新人冒険者スファレライトとの初めての出会いであった。

第2話 レベル1な二人

運命的な出会いをしてそれほど時間は経っていない二人だが、これまでで判明している事柄を少し整理してみよう。

今期冒険者検定に合格して戦士となったスファレライト。他の若者たちと同様で冒険者には憧れているものの、自身が高みを目指すつもりは皆無で……クエストを受けたことも無いため検定から二ヶ月は経過しているにも関わらずレベルは1のままである。

驚くべきことに、彼女が冒険者になった理由は、外の世界が見てみたいというところでもないものであった。

一方、スファレが出会った謎の冒険者パロットクリソベリル。妖しげなフードを頭から被り、スファレより立派な鋼鉄製の剣を持つ見た目は戦士系の冒険者なのだが、其の実、職業はヒーラーであるという訳の分からない少年である。

ヒーラーの優位点を散々語った挙げ句、スファレと同じレベル1で今期検定を合格したばかりの冒険者だという。

そんなレベル1同士の二人が中央広場の一角を占領するように言い合い……いや、ある意味漫才を続けていた。

「えっ？ 王都の外へ出たいから 冒険者になつた？」

「そうよ。なんか文句でもある？」

少し照れているのか、スファレはムツとしながら視線を背ける。その頬は、ほんのり赤く染まっていた。

「わざわざ外へ出なくても、王都にいれば不自由しないだろ。なぜ、危険を冒してまで外界へ出ようとする？」

「ふっふっふっ、それこそ愚問だね。そこに外界が広がっているから……。それが冒険者の心意気ってもんでしょ。」

「はあ……。早死にするタイプだな……」
「な、なんですって……！」

まさに、開いた口がふさがらない状態である。スファレのあまりにも単純な考えに、パロットは頭痛を覚えていた。

冒険者といえば、若者たちが憧れであると同時に、死と隣り合わせの危険な職業でもある。冒険の最中に命を落とすかもしれないのはもちろん、有事の際には前線に出て戦うこともあった。

事実、ルチルクオーツ王国は十数年前まで他国と戦争状態にあり、当時は数多くの冒険者が命を落としていたという。

半年前に起こった国王交代劇により、ルチルクオーツ王国は近隣諸国との同盟を結び、平和への道を歩むことになった。そのため、戦乱によって死ぬことは無くなったが……それでも年間千人前後の冒険者がクエストの最中に死亡、もしくは生死不明となっていた。

ただの憧れだけでは冒険者にはなれない。それなりの覚悟も必要となってくるわけだが、驚いたことに目の前の少女は王都の外へ出るためだけに冒険者となったらしい。パロットには、スファレの思考がどうしても理解出来なかった。

「おまえは外の世界を甘く見過ぎている」
「うぐっ、それは受付のお姉さんにも言われたことだけど……っ
て、レベル1のヒーラーにそんなこと言われたく無いわね！ だいたい偉そうに言っているけど、あんたも外へ出たこと無いんでしょ！ どうして危険だってわかるのさ……！」

外界が危険であることは、小さな子どもでも知っている事実である。だが、まるで自分で見てきたかのように語るパロットをスファレは許せなかったのであろう。

そんなスファレの様子に、パロットはニヤリとほくそ笑む。

「誰が外に出たこと無いんだって？ おまえと一緒にするな……」
「えっ！ 外に出たこと……あるの？」
「ああ……。一応、単独行動を許されているんでね」

予想していなかった内容にスファレは啞然とした。

そう……。単独で外界に出るには最低でもレベル20は必要だとされている。スファレもつい先程、冒険者管理組合で王都外出申請を却下されたばかりなのだ。

「ちよつ、何よそれ……！ どうしてあなたには単独行動の許可が出てるのよ！」

「ふっ……。そんなこともわからないのか？」

「だから、同じレベル1なのに……いったい何が違うっていうのよ……」

「それは？」

「……？」

「オレがヒーラーだからさ」

「えええええ……」

とんでもない理由を聞いて驚愕するスファレ……。パロットは笑いを堪えるのに必死だった。

ちなみに、パロットが単独行動のライセンスを持っているのは本当だが、その理由がヒーラーだからというのは嘘である。しかし、あまりにもスファレの反応が良かったため、パロットの悪ノリはまだまだ続きそうだ。

「つまり、戦士と比べてヒーラーは優遇されているんだよ」

「って、どういうこと……？ ヒーラーに比べたら、戦士の方が絶対に強いでしょ？ なのに、どうしてヒーラーだけがレベル1でも単独行動を許されているのよ……」

「戦士はある程度の強さがあれば誰にでもなれる……が、ヒーラーは回復の法術が使えないことにはなれない。つまり、特殊技能！」

「と、特殊技能……！」

「就職活動とかでも聞かれるだろ？ 『何か資格はお持ちですか？』
って……」

「資格！」

「考えてもみる。どこかのパーティに入れてもらおうとしたとき、ただの戦士ですって言ったたらなんて思われるか……。レベル1の戦士なんて、初心者パーティでしか需要はない。その点、ヒーラーなら、弱くても回復法術が使える。だから、資格　特殊技能！」

「し、しまった！　選ぶ職業、間違えた……！」

頭を抱えて叫ぶスファレに、パロットは満足げに微笑む。その途端、周囲からドツと笑い声が上がった。

「……ん？」

パロットが辺りを見回すと、いつの間にか二人の様子を遠巻きに覗いている人集りができていた。人々は、なぜかパロットたちの遣り取りを見て拍手している。どうやら、道端で漫才の新ネタを練習している若手芸人と間違えられてしまったようだ。

中には、お捻りを投げてる見物客もいる

「あ、ああ……」

状況に気づいたスファレは、顔を真っ赤にして固まっている。可哀相に、スファレの身体はプルプルと震えていて、おそらく思考も完全に停止していることだろう。

次の瞬間、我に返ったスファレの目尻に涙が浮かぶ。そして、悲しみの声を上げながら笑顔で拍手する人混みから逃げ出した。

「で……、何だったんだ　あいつは？」

パロツトは、今更ながらスファレの名前も聞いていなかったことに気づく。……が、もう二度と会うこともないだろうと頭の中からスファレのことを消し去ることにした。

今のパロツトには、そんなどうでも良いことを考えている余裕はなかったからだ。

数日後……、スファレと再会することで話が思わぬ方向へと進むわけだが　それはまた次の機会に語られることだろう。

第1話 戦士でレベル1（前書き）

『ラズベリル ショート劇場』にアップされていた作品ですが、間に『月長石溪谷の鬼』や『鬼神伝』シリーズが入っていて読みづらいため、新たにタイトルを付けて分けることにしました。そのため、第1話から第25話までは再掲載となります。

第1話 戦士でレベル1

4コマ劇場 アイオライト―308・・・2010/01/12
シリーズ3

タイトル「戦士でレベル1」

1コマ

説明文「え、舞台設定を考えるのが面倒なので」

「仮に精霊界第四聖界クリスタルにあるルチルクオーツ王国と
します・・・」

ルチルクオーツ城にて・・・

受付

「許可できません(きつぱり)」

スファレライト 15〜16歳?

「ちよっ!」

「どーしてダメなんですか!」

「ちゃんと試験にも合格して、冒険者になったんですよ!」

「王都の外に出てもいいはずでしょー!」

受付

「確かに今期の冒険者検定には合格しているようですね」 書
類をチェック

「しかし、それだけでは国を出る許可は出すことができません」

スファレ

「だから、どうしてもダメなんですか!」

受付

「戦士レベル1・・・(ぼそっ)」

スファレ

「はうっ!!」
図星

受付

「しかも、たった一人で王都を出ようとするなんて・・・」

「死ぬのがわかってるのに許可を出すわけにはいきません」

「あなたは、外の世界を甘く見過ぎています」

スファレ

「で、でも、レベルを上げるに当たって外に出ないことには・・・

(汗)」

受付

「王都の中でも経験を積むことは可能です」

「まずは依頼をこなしてレベルを上げてください」

「外で単独行動をするつもりなら、最低でもレベル20はないと・・・

」

スファレ

「レベル20なんて・・・何十年かかると!」(大汗)」

受付

「それが嫌なら、レベルの高い仲間を見つけることですね・・・」

スファレ

「な、仲間・・・(ぐきぐきぐき)」

2コマ

ルチルクオーツ王都にて・・・

スファレ

「ちっ・・・（むかつ）」 てくてく歩いている

「冒険者になりたてのレベル1の戦士なんて」

「どこのパーティが入れてくれるっていうのよ」（はあ）

「あゝあ、やっぱり王都内で依頼をクエストこなして」

「地道にレベルを上げるしかないのかな？（しくしくしく）」

少年 17〜18歳？

「・・・」 腕を組んで建物の壁にもたれかかっている

スファレ

「はっ!？」

「あのフードの男は・・・気配からして間違いなく冒険者!!」

「しかも、暗そうな雰囲気からしてソコ冒険者!」 偏見です

(笑)

「見たところ戦士系みたいだし・・・」

「こいつは放っておく手はないかな」

「ちよいと、そこのお兄さ〜ん」

少年

「・・・」 (ぬ?)

スファレ

「あなた・・・冒険者だよな」

「装備からして戦士系?」 腰に剣を下げている

「じつは、わたしも・・・」

少年

「いや……」

「……戦士系じゃなく回復系だ(ぼそっ)」

スファレ

「……(大汗)」

「回復系って、ヒーラー!? (なに……!!)」

効果音「ずがが……」

3コマ

スファレ

「ちよっ、何の冗談!？」

「あんたのどこが聖職者!」

少年

「そっちから喋りかけてきたくせに……」

「非道い言われようだな(大汗)」

スファレ

「で、ヒーラーっていうなら……何信仰?」

少年

「……」

「ファリス……さま?(照れ)」

スファレ

「……ぷっ(笑)」

「あはははっ (大爆笑)」

「どの顔さげて精霊神信仰〜？（あははっ）」
「戦士系じゃなかったら、あきらかに魔神信仰じゃない
見た目」

少年

「……（はあ）」
「どうでもいいから、あっちに行ってくれないか？」
「はつきりいつて、うざい……ぼそっ」

スファレ

「うざ……（汗）」
「こんな可愛い娘こに声かけてもらって」
「何がうざいか……！！（うたや〜！！！！！！）」

少年

「やれやれ……」
「変なのに絡まれた（大汗）」

スファレ

「なにを……！！（むき……！！）」

4コマ

スファレ

「だいたい、ヒーラーってどうなのよ？」
「冒険者っていったら攻撃重視の戦士系が基本でしょ！」
「今からでも遅くないから、戦士系に転職したらどう？」

少年

「戦士系〜？」
「わかっていないな〜」（苦笑）」

「冒険者の基本はやはり回復系・・・」

「戦士はいなくてもパーティには必ずヒーラーが必要だ」

「アイテム所持にも限度があるだろう・・・(金もかかるし)」

スファレ

「ヒーラーだって精神力が無くなったら回復できないじゃない!」

「それに、成長も遅いし体力も無いから即行で殺されるのがオチでしょ?」

少年

「それは、ヒーラーに限らず冒険者としての才能が無いだけだ」

「その程度なら、冒険者なんてやめたほうがいい・・・」

スファレ

「へえ、言うじゃない」

「そういうヒーラーさんはさぞかしすごい冒険者さんなんでしょうね」

「あなた、レベル・・・いくつぐらいなの?」

少年

「うぐっ(汗)」

「レベルは・・・まだ1(ぼそっ)」
 今期の検定合格者?

スファレ

「・・・」

「見かけ倒し?(大汗)」

少年

「ほっとけーーーー!!!」(叫び)

効果音「ずがががー……………ん!!」

コメント

新作小説の準備4コマです

第2話 就活に有利です

4コマ劇場 アイオライト―309・・・2010/01/12

シリーズ3

タイトル「就活に有利です」

1コマ

ルルルクオーツ王都にて・・・

スファレライト

「あゝあ・・・」

「王都から外へ出ることが出来るから冒険者になったのにな」

少年

「・・・・・・・・・・」

「わざわざ外へ出なくても、王都にいれば一生不自由しないだろう」

「なぜ危険を冒してまで外界へ出ようとする？」

スファレ

「ふっふっふっ、愚問だね（にこっ）」

「それが冒険者の心意気つてもんでしょう」

効果音「ずががーーーーーん!!」

少年

「・・・・・・・・・・（はあ）」

「早死にするタイプだな・・・（やれやれ）」

スファレ

「なにを――――！！（むき――――！！）」

2コマ

少年

「おまえは外の世界を甘く見すぎている……（ギロリ）」

スファレ

「うぐっ！（汗）」 冒険者認定協会でも同じことを言われた

「レベル1のヒーラーのくせに……（涙）」

「だいたい、偉そうに言っているけど」

「自分だって外に出たことないんですよ！」

「どうして危険だってわかるのよ――！！！」

少年

「誰が外に出たことないんだって？」

「おまえと一緒にするな……（ぼそっ）」

スファレ

「え……？」

「外に出たこと あるの？」

少年

「ああ……」

「一応、単独行動を許されている」

3コマ

スファレ

「なによそれ――！！」

「どうしてあなたには許可が出るのよ――！！！」

少年

「ふっ・・・（微笑）」

「そんなこともわからないのか？」（にやり）」

スファレ

「だから〜！（涙）」

「わたしとあなた・・・」

「同じレベルで、いったい何が違っつて言うのよ〜！！！！
（泣）」

少年

「それは・・・」

スファレ

「それは？（ぐすっ）」

少年

「オレがヒーラーだからさ」

スファレ

「えええええ〜！！！！！！（叫び）」

4コマ

少年

「つまり、戦士と比べてヒーラーは優遇されているんだよ」

スファレ

「ちよっ！」

「ヒーラーに比べたら戦士の方が強いでしょ!？」

「なのに、どうしてヒーラーだけが!?!」

少年

「戦士はある程度の強ささえあれば誰でもなれるが」
「ヒーラーは回復法や回復術が使えないとなれない・・・」
「つまり、特殊技能!！」

スファレ

「なああああ—————!!」(叫び)

少年

「就職活動でも聞かれるだろう?」
「『何か資格はお持ちですか?』って・・・」

スファレ

「し、資格!?!」

少年

「考えてみる・・・」
「どこかのパーティに入れてもらおうとしたとき」
「ただの戦士ですって言ったらなんて思われる?」
「レベル1の戦士なんて、初心者パーティでしか需要が無いだろ?」
「その点ヒーラーなら、弱くても回復法術が使える・・・」
「だから、資格 特殊技能!！」

スファレ

「し、しまった—————!!」(叫び)
「選ぶ職業、間違えた—————!!」(うにゃ~~~~~
~~~~~)「」

効果音「ずが—————ん!！」

通行人×15

『な、なんだこいつら・・・(どきどきどき)』

コメント

RPGの主人公も、回復魔法が使えないとね

基本でしょ

(笑)

### 第3話 癒し系といえばファリスでしょ

4コマ劇場 アイオライト | 3 1 2 . . . . . 2 0 1 0 / 0 1 / 2 3  
シリーズ3

タイトル「癒し系といえばファリスでしょ」

1コマ

ルルルクオーツ王都にて・・・

???

「ちよいつとそこ行くお兄さん」

少年 17〜18歳ぐらい

「ぬ?」

ファリス

「ちよつと小耳に挟んだんだけど」

「あなた、冒険者のヒーラーで・・・」

「精霊神ファリスを信仰しているんですって?」

本人です

(笑)

少年

「なぜそれを!?!」

「って、なんなんだあんたは・・・? (どきどきどき)」

ファリス

「いいから、いいから」

2コマ

ファリス

「でも、どうして精霊神ファリス？」

「この聖界では、創造神でもある精霊神クリスタル（シヨウ）の方が有名だよね？」

少年

「確かに精霊神クリスタルを信仰する者は多いが・・・」

「クリスタルはどちらかといえば戦闘神だ」

「回復・・・癒しなら、どう考えても精霊神ファリスだろ？」

ファリス

「うんうん」

「癒し系キャラといえば、ファリスだよね」

少年

「癒し系・・・キャラ？（汗）」

「・・・信仰する精霊神の話し　だよな？（大汗）」

ファリス

「あたりまえでしょ（何言ってるのよ）」

少年

「・・・（どきどきどき）」

3コマ

ファリス

「なんにしても、わたしあなたのことがすっごく気に入っちゃった

」

「だから、あなたの仲間になってあげる」

少年

「はぁ？（汗）」

「な、なにいつてるんだこのお姉さん・・・（大汗）」

ファリス

「今ならなんと、わたしの五精霊もついてくるよ」

シヨウ、

アリス、ルウー、シン、ユウコ

「すっごくお得だね」

少年

「いや・・・」

「いまのところ、誰とも組む気はないから（ぼそっ）」

ファリス

「あら、良いのかしら？」

少年

「ぬ？」

ファリス

「そんなことじゃ」

「いつまで経っても、彼女の目を治せないわよ」

少年

「なっ!?!」

「ど、どうしてあなたがそのことを!?!」

ファリス

「ふふっ」

「癒し系をなめないでよね」（にこっ）

少年

「……………(だから何なんだよこの人?)」

#### 4コマ

ファリス

「あ、そうだ」

「ファリスを信仰してるんだから、あなたも何か精霊神を象徴するアイテム持つてるんだよね」

「回復法術使うとき、祈りを捧げたりしたりするやつ」

少年

「ああ……(いちおうな)」

ファリス

「どんなアイテムなの?(見せて見せて)」

「やっぱりあれかな」

「一般的な指輪とかペンダント?」

「わたし一押しは、ファリスを象徴する精霊石の埋め込まれた杖」

少年

「いや、それが……(汗)」

「精霊神ファリス信仰は少ないらしく、なかなか良さ気なアイテムが無くて(ごそごそ)」

「ファリスを模った女神像しか無かったんだよ……」  
懐か  
ら何かを取り出す

ファリス

「わっとうわっ、女神像」

「いや、なんだか照れちゃうな……って、えっ!?!?(どびつく

り」 女神像を見る

少年

「ちょくつと微妙な大きさで」

「持ち運びに苦労するんだけどね」（苦笑）」

ファリス

「あ……、ああ……（大汗）」

女神像？

『……』 全体的に茶色っぽい

『……』 なんか、ずんぐりむっくり？

『……』 どう見ても信楽焼のためき（置物）

少年

「しっかし、自分も信仰しているといえ」

「精霊神ファリスってのは、けったいな姿をしてるよな」（笑）」

ためきですから

「異世界の神様ってのは、みんなこんな姿をしているのか？」

ためきですから

ファリス

「って、それは精霊神ファリスじゃなく、精霊神ファロル！！（涙）」

「わたしのお母様！！（大泣き）」

少年

「は？（汗）」

「お母様……（この人、大丈夫か？）」

「あんた、どう見てもためきには見えないけど……」 ため

きですから

ファリス

「たぬきじゃなく、お母様ーーーー！！（叫び）」

少年

「あゝ……（大汗）」

理解不能

説明文「精霊神ファロル。歴代最強の精霊神と謳われており、現在は水晶像となつて封印されている」

「が……ラルドの策略により、水晶像とたぬきの置物とごっちゃにされている（笑）」

コメント

ファロル（たぬき）伝説再び！！（爆）

## 第4話 憧れのあの人は今日の敵

4コマ劇場 アイオライト | 328・・・2010/03/08  
シリーズ3

タイトル「憧れのあの人は今日の敵」

1コマ

ルチルクオーツ王都、酒場にて・・・

冒険者

「なに、オレたちのパーティに入れてほしい？」

「職業とレベルは？」

「戦士で レベル1」

「うーん、ヒーラーならレベル1でも入ってもらったんだが・・・

(汗)「

「悪いな、戦士系は間に合っている(苦笑)「

スファレライト

「そ、そんなあああーーーー!!!」

効果音「ずががーーーーーーーーん!!!」

2コマ

中央広場にて・・・

スファレ

「はあ・・・(汗)「 かなり落ち込んでいます

「やっぱりアイツの言うように、特殊能力が無いとキツイのかな

(涙)「

「このままじゃ、いつまで経ってもあの人に追いつけないよ〜」  
(うにゃ〜〜〜!!)」

効果音「ざわざわっ!!」

スファレ

「ん？」

「なんだろ、あの人集りは？」

「えっ！」 何かに気づく

「あれつてもしかして、盲目の精霊騎士ジエムシリカ様!？」

「すごい、初めて見た!!」

説明文「精霊騎士ジエムシリカ。盲目でありながら強さはルチルク  
オーツ最強クラス」

「スファレが憧れている女騎士である」

スファレ

「シリカ様、何してるんだろう・・・(汗)」

「はっ、もしかして次にする冒険の準備!？」

「よし!」

「ここでお近づきになって、なんとかシリカ様のパーティに入れて  
もらって・・・」

「ちよっ、アイツは!!」(どびっくり) 「シリカが喋っている相手に気づく」

3コマ

シリカ

「考えは・・・変わりませんか？」

少年

「ごめん、シリカさん・・・」  
「もう決めたことだから」

シリカ

「そうですか・・・（がっかり）」  
「でも、どうしてあなたがヒーラーなのですか？」  
「やはり、わたしの目のことが原因で・・・」

少年

「関係ないって言えば、嘘になるかな・・・」  
「でも、ヒーラーになることを決めたのは俺自身」  
「だから、シリカさんは気にしないでほしい」

シリカ

「・・・」  
「なら、パーティはどうするのですか？」  
「たとえあなたでも、パーティも組まずに王都の外へ出るのは危険です」

「ここは、ある一定レベルに達するまで」  
「わたしたちのパーティに戻るのが得策では・・・」

突然の登場

スファレ

「えええええー！！（叫び）」  
「こいつをシリカ様のパーティに入れちゃうんですか！？」（大汗）」

少年

「・・・（またお前かよ）」

シリカ

「……………(誰?)」

#### 4コマ

少年

「あ……………(良いこと思いついた)」

「シリカさん、じつはオレ」

「こいつとパーティを組むことにしたんだ」

シリカ

「……………(ぴきっ)」

スファレ

「つて、えええええー！ー！！(どびっくり)」

「なに勝手に決めて!? (大汗)」

シリカ

「あなた……………」

「お名前は?」

スファレ

「あっ、スファレライト……………スファレといいます!(ぴしっ)」

「わたし、ジェムシリカ様に憧れていて!」

シリカ

「職業……………レベルは?」

スファレ

「あ……………(汗)」

「じつは冒険者になりたてで」



「なんで……！！（叫び）」

少年

「うん……（汗）」

「ややこしいことになってしまった（大汗）」

説明文「ちなみにジェムシリカと少年の関係は、姉と弟のようなものです」

コメント

主人公の名前が決まってないので、なかなか進みませんね（笑）

第5話 無知って意外に最強!?

4コマ劇場 アイオライト― 3 2 9 . . . . . 2 0 1 0 / 0 3 / 1 0  
シリーズ3

タイトル「無知って意外に最強!？」

1コマ

ルチルクオーツ王都、酒場にて・・・

スファレライト

「ど〜してくれるのよー!」

「ジェムシリカ様に嫌われたじゃないのー!」 (涙)

少年

「嫌われた・・・というのは正しくない」

「お前はシリカさんの敵になったんだ・・・」 (ぼそっ)

スファレ

「よけい悪いわー!」 (怒)

効果音「ずががー!」

2コマ

スファレ 少し落ち着いた

「で・・・」

「確認しておくけど、わたしとパーティを組むってことで良いんだよな?」

少年

「ああ……」

「話の流れでそうなってしまったわけだが 仕方あるまい」

スファレ

「わたしは成り行きでシリカ様に嫌われたのか……(うぎぎや……  
!!)」

少年

「叫ぶな、うるさい……(ぼそっ)」

スファレ

「あんたねええええ!!(怒)」

???

「まあまあ」

「スファレさん、落ち着いて……」

少年

「ぬ?(誰?)」

3コマ

フローライト 13歳ほどの少女

「あ、はじめまして(ペー)」

「わたしはフローライト フローラと呼んでください」

「もしくは桜ちゃんです」

少年

「なぜ桜……って!(汗)」

「ぶ、フローライト!?(どびっく)」

スファレ

「あゝ」

「フローラとはさっき友達になっただけだ」

「この子にもパーティに入ってもらおうかなって思ってるの  
名案でしょ」

少年

「いやいやいや（汗）」

「入ってもらおうかなってとかじゃなく！」

「フローライトって……あれでしょ？」

「フローライト・S（おん）・ルチルクォーツ十三世……（大汗）」

フローラ

「はい、まあ、一応……（苦笑）」 この国の王様です

4コマ

スファレ

「え、なに？」

「あんだ、フローラのこと知ってるの？」（びっくら）

少年

「知ってるの……って（大汗）」

「知らないの、お前だけじゃないのか？（どきどきどき）」

フローラ

「あはは、あはははっ（苦笑）」

スファレ

「?????（そうなの？）」

少年

「でも、本当に良い・・・のですか? (汗)」 一応敬語?  
「大変失礼ですが、冒険なんてしている場合では無いのでは? (国王様でしょ?)」

フローラ

「はい(あ、喋るの普通にしていたただければ結構ですよ)」  
「いまうちの家族」 ショウたち  
「鬼神伝シリーズに出演中でほとんど留守なんですよ」

少年

「き、鬼神伝?」

フローラ

「4コマです (文字だけ4コマ)」

スファレ

「え〜っと・・・」

「何の話? (どきどきどき)」

説明文「4コマオリジナルキャラクターフローライト如月桜ちゃんがメンバーに加わりました」

コメント

はたしてこのシリーズ、4コマといえるのだろうか!?(笑)  
絵にしたら4ページ漫画か?

## 第6話 ヒーラーですから

4コマ劇場 アイオライト―331・・・2010/03/13  
シリーズ3

タイトル「ヒーラーですから」

1コマ

ルチルクオーツ王都、中央広場にて・・・

男の子

「いっくよ」

「えい！」 大きなボールを投げる

女の子

「あゝ！」

効果音「ひゅ〜っ、とん、とん、とん、しゅっ」 ボール  
はバウンドしながら古井戸に入ってしまう

男の子

「しまった」

女の子

「ボールが〜(汗)」

男の子

「う〜ん、どっしよ〜」 駆け寄って古井戸を覗き込む

女の子

「取れるかな？・・・」 同じく  
「・・・え？」

男の子

「わああああー！！（どびつくり）」

突然、古井戸の中から何かが現れる！

???

「があああー！！！！（叫び）」

説明文「井戸魔神？が現れた」 ドラクエか？（笑）

2コマ

効果音「わいわいがやがや、わいわいがやがや」

スファレライト

「ん？」

「なんか騒がしいわね・・・」

一般人1（声だけ） 遠くの方から声が聞こえてくる  
「おい、広場に魔物が現れたらしいぞ！！」

一般人2（声だけ）

「なにっ！」

「どうして王都に魔物が！！」

一般人1（声だけ）

「だ、誰か・・・」

「冒険者を呼んでこい！！」

一般人2（声だけ）

『やばい！』

『魔物の近くに子どもが！』

フローライト

「！！！」

「ちびっ子救助隊クリソプレーズ」  
長です

桜はクリソプレーズの隊

「・・・出勤します！！（たっ）」

突然走り出す！

スファレ

「ちよっ、フローラ！！（叫び）」

「あゝ、行っちゃった・・・（汗）」

「ねえどうする、魔物が出たって」

「でも、レベル1のわたしたちが行っても・・・って、あれ？（大汗）」  
「いつの間にかひとりぼっち

3コマ

一般人3

「魔物だ、逃げろーーーー！！！」

一般人4

「子どもが・・・ごどもを助けなきゃ！！！」

一般人5

「冒険者はまだかーーーー！！！！（叫び）」

井戸魔神？

「がぎゃあああああ！！（雄叫び）」

子どもたち

「「いやあああーーーーー!!!(悲鳴)」「

説明文「一瞬の間をつき、フローラが子どもたちの近くに駆け寄る」

フローラ

「あなたたち!」

「もう大丈夫だから!!(ぎゅっ)」 子どもたちを抱き寄せる

子どもたち

「「わああああ~~~~ん!!!(大泣き)」「

井戸魔神?

「ぐぐぐっ……」 子どもたちの悲鳴に反応する

「うがあああああ!!!(激怒)」 フローラたちに狙いを定め、巨大な腕を振り下ろす

フローラ

「し、しまっ……」 もはや逃げられない

スファレ

「ふ、フローラあああーーーーー!!!(悲鳴)」

効果音「どしっ……、ザクッ!!!」

4コマ

井戸魔神?

動きが固まる

「……」

フローラ

「……あ、れ？」

「わたしたち、生きてる……（大汗）」

井戸魔神？

「……うごっ（げふっ）」  
井戸魔神？が息絶えて倒れる

少年

「……………」  
巨大な剣で井戸魔神？を一刀両断

「ふう〜、大丈夫だったか〜（やれやれ）」

フローラ

「あ……」

「はい、子どもたちは無事です（にっこり）」

少年

「いや、そうじゃなくて……（苦笑）」

スファレ

「つて、ええええええ……………！（どびっくり!）」

効果音「すがが……………ん!……」

一般人1

「す、すげえ〜な……（汗）」

「あんな凶悪な魔物を、一撃で倒しちまったぞ（大汗）」

一般人4

「か、かつこい〜」

一般人3

「さぞかし有名な冒険者なんだろうな（うんうん）」

スファレ

「いやいやいや！」

「あいつヒーラーだから！（汗）」

「しかも、レベル1だし！？（大汗）」      パニックってます

「っていうか、あいつ本当にヒーラーなの……！？（何者！  
……！）」

コメント

ヒーラーとして戦っていないので経験値は入りません

第7話 少年の名前は……

4コマ劇場 アイオライト― 333……………2010/03/19  
シリーズ3

タイトル「少年の名前は……」

1コマ

ルチルクオーツ王都、中央広場にて……

スファレライト

「ちよー……っ!」(汗)

「あんな高レベルな魔物を一刀両断だなんて」(ヒーラーのクセに!)

「……」  
「いったいどうなっているのよ……!」(叫び)

少年

「あゝ、もあゝ、うるさいな……」(汗) 耳を塞ぐ

スファレ

「ちゃんと説明しろ……!」(むき……っ!)

突然の登場

ジエムシリカ 樹の陰から現われる

「ふふっ……」

「あなたは、彼のことを何も知らないのね」

スファレ

「じゃ、ジエムシリカ様!?(どびっくり)」 盲目の精霊騎

士

2コマ

少年

「あ……、シリカさん（汗）」

シリカ

「パロツトくん」

「その娘は、あなたのことをまったく理解していない」

「だからそんな娘とパーティを組む必要はありません」

「わたしたちのギルド、ユークレースに戻ってきなさい!!」

スファレ

「ゆ、ユークレース!?!」

「あの伝説の冒険者ギルド!!」

「精霊族の力を色濃く受け継いだものがほとんどで」

「中でも、突起した力を持つ者のことは」

「ナンバーズ、あるいはユークナイトと呼ばれ」

「わたしたち冒険者にとって憧れの存在!!」

シリカ

「そして、五年前……」

「最年少でナンバーズ入りをはたした少年こそ」

「アウインの称号を持つ勇者……パロツトクリソベルル!!」

「すなわち、パロツトくんなのよ」

効果音「ずががーーーーーん!!」

3コマ

スファレ

「な・・・(きよろっ)」

少年を見る

パロットクリソベリル

「・・・昔のことだ(ぼそっ)」

「そいつはある冒険の戦闘中、大切な仲間が大怪我をさせて」

「逃げるように冒険者ギルド、ユークレーヌから姿を消した・・・

(微笑)」

シリカ

「パロットくん」

「何度も言うようだけど、あれはあなたの所為じゃありません」

「他のユークナイトが何と言おうと無視すればいい・・・」

「当人が言うのだから、あなたが気にすることはないわ」

フローライト

「なるほど・・・」

「シリカさんの目を治すため、ヒーラーになったわけね・・・」

パロット

「ちよっ!!!」

「そんなんじゃないやねえ・・・ありません!(汗)」 一応丁寧語

?(笑)

「ヒーラーになったのは、オレ個人の問題・・・ですから」

シリカ

「愛があればこそです・・・(うんうん)」 姉弟愛

パロット

「し、シリカさ～～ん!(大汗)」

スファレ

「・・・ねえ？（大汗）」

パロット

「ん？」

シリカ

「はい？」

4コマ

スファレ

「え〜っと・・・（汗）」

「パロットって 誰？（大汗）」（オウム？）

シリカ

「・・・（大汗）」

「まずは、そこから ですか？（どきどきどき）」

パロット

「・・・わかり辛かったか？（大汗）」

フローラ

「そ、そんなことはないと思うんだけど・・・（苦笑）」

スファレ

「????（はてな？）」

説明文「主人公の少年の名前は、パロットクリソベリル（通称パロ  
ットくん）に決定しました」

コメント

宝石名もネタが尽きてきた・・・(笑)  
かですった気がする

パロットってどこ

## 第8話 女神像？

4コマ劇場 アイオライト― 334・・・2010/03/23  
シリーズ3

タイトル「女神像？」

1コマ

ルチルクオーツ王都、中央広場にて・・・

パロットクリソベリル

「とにかく！」

「今のオレはアウインの勇者じゃない・・・」

「精霊神ファリスさまを信仰する」

「単なるいちヒーラーなの！！（ばっ！）」  
懐から何かを取り出す

スファレライト

「そ、それは！？（どびっくり）」

パロット

「これぞ精霊神ファリスさまの像・・・」

「世の中に精霊神クリスタルさま関係のアイテムは数あれど」

「異世界の神である精霊神ファリスさまのアイテムは数えるほどしかない」

「なかでもこの女神像は！」

「精霊神ファリスさまの姿を忠実に再現した像だといわれている！  
！（えっへん）」

スファレ

「め、女神像って……(汗)」

「ただのタヌキじゃん(どきどきどき)」

パロット

「たぬきじゃねえ!(怒)」

「精霊神ファリスさまだ!!(むき——!!)」

信楽焼き

のためき(置物)

スファレ

「ええ……(汗)」

効果音「ずがが————ん!!」

ファリス(本人)

建物の陰から覗いている

「しくしくしく……(涙)」

2コマ

スファレ

「いやいやいや(汗)」

「どう見たってためきだから……」

パロット

「まだ言つか————!!(怒)」

フローラ

「パロットさん、ちょっと良いですか?(汗)」

パロット

「ぬ?」

フローラ

「せつかく手に入れて信仰心を込めているのに心苦しいのですが・・・」

「それは、ファリスさんじゃありませんよ（苦笑）」

パロット

「なに！」

「そうなのか!?(どびっくり)」

ファリス（本人）

建物の陰から覗いている

「そうよ桜ちゃん」

「ちゃんと説明してあげて」

3コマ

フローラ

「その像は、ファリスさんのお母さん」

「精霊神ファロルさまの像です（間違いありません）」

パロット

「な、なんだって!!」

「・・・そういえば」

「この前、声を掛けてきた女の人も」

「たしか、そんなことを言っていたような・・・(うん)」

スファレ

「ちよっ!」

「どーしてフローラの言葉はすぐに信じるのよ!!(むかつ!)(」

パロット

「そりゃ、お前とは重みが違うだろ・・・」

フローラはこ

の国の王様

スファレ

「なんですってー！ー！ー！！（怒）」

効果音「わいわいがやがや、わいわいがやがや！」

ジエムシリカ 盲目の精霊騎士

「え〜つと・・・（二人とも落ち着いて）」

ファリス（本人） 建物の陰から覗いている

「あの二人・・・」

「昔のシヨウくんとアリスにそっくりね」（苦笑）  
アリス  
の育ての親

4コマ

パロット

「しかし困ったな」（汗）」

「これがファリスさまの像じゃないなんて想定外だ（高かったのに）」

「この世界にファリスさま関連のアイテムが少ない以上・・・」

「これに代わるアイテムが見つかるなんて、とても思えない（うーん）」

スファレ

「信仰アイテムを持たないだなんて、とんだヒーラーだよな（ぶぶぶっ）」

シリカ

「パロットくん」

「これを機会に、もう一度勇者に転職を・・・」

パロット

「いや・・・」

「オレはどうしてもヒーラーを極めないと・・・」

フローラ

「・・・」

「しょうがないですね〜（やれやれ）」

「では、わたしが持っているファリスさんの像を」

「パロットさんに差し上げます」

パロット

「ほ、ほんとう・・・ですか？」  
一応丁寧語

ファリス（本人）  
建物の陰から覗いている

「あれっ？（汗）」

「桜ちゃん、わたしの像なんて持ってたかしら？（どきどきどき）」

5コマ

フローラ

「ファロルさまの像に負けない縁起物・・・」

「右手を挙げれば金運を招き」

「左手を挙げれば人を招く・・・」

「これさえあれば、商売繁盛間違いなし」

ファリス（本人）  
建物の陰から覗いている

「商売繁盛って」

「ま、まさか・・・（汗）」

フローラ

「これぞ真のファリスさま像！」 宣言

「ファリスさんといえば、この姿以外ありえませんか！」 懐か  
ら何かを取り出す

パロット

「おお！（汗）」

「それが、真なる精霊神ファリスさまの女神像！！（じゅん！）」  
感動しています

ファリス（本人） 建物の陰から覗いている

「なあああー！！！！！！（どびっくり）」

スファレ

「・・・って、ネコじゃん（ぼそっ）」

フローラ

「ネコじゃありません！」

「ファリスさんの女神像です！！（叫び）」 招き猫の置物（  
笑）

効果音「ずががー！！！！！！！！ん！！！！！！」

シリカ

「たしかに・・・」

「さっきのためきより可愛いかも」 一応、盲目です（不  
自由していません）

フローラ

「はい」

「一応、これ以外の候補としては」

「福助やビリケンなんかも上がってたんですけど」

「全国的な知名度を考えて、この女神像に決まりました」

### 突然の登場

ファリス

「決まりました・・・じゃないでしょ！（ずげっ！）」  
八  
リセンで突っ込みを入れる

フローラ

「あいたっ！（痛っ！）」

「って、ファリスさん！？（どびっくり）」

パロット

「あ・・・」

「この前のお姉さんだ・・・」

スファレ

「え、なに？」

「あなたも、わたしたちのパーティに入りたいの？」

ファリス

「入ってたまるかーーーーー！！（うにゃーーーーー！！）」

説明文「第四聖界では精霊神ファリスが商売繁盛の神として崇められるようになりました」

### コメント

久しぶりに5コマ目まで突入しました  
かも ) (6コマでも良かった

## 第9話 初クエストの目標レベルは50以上

4コマ劇場 アイオライト― 337・・・2010/04/12  
シリーズ3

タイトル「初クエストの目標レベルは50以上」

1コマ

ルルルクオーツ城、冒険者管理組合にて・・・

スファレライト

「え〜っと、こんにちは〜〜〜」

受付

「またあなたですか・・・(やれやれ)」

「何回来ても、王都の外へ出る許可は・・・って、パロットくん?」

パロットクリソベリル

「リユーコさん、お久しぶりです(ペ〜り)」

リユーコガーネット

「え、なに?」

「もしかしてパロットくん、この子とパーティ組んだの!?(びっ  
くり)」

パロット

「ええ・・・、まあ・・・(苦笑)」

リユーコ

「レベル1の戦士と組むだなんて」

「あなたも物好きよね〜」

「何の役にも立たないわよ（むしろハンデ？）」

スファレ

「って、ひどっ！…」

リユーコ

「だって本当のことでしょ？」

スファレ

「うぐっ・・・（汗）」

2コマ

パロット

「で、リユーコさん」

「こいつらを連れて外へ出ようと思っただけど」

「許可してもらえるかな？」

リユーコ

「う〜ん・・・」

「みんなレベル1ってのが引かかるけど」

「元ユークナイトのパロットくんが一緒なら心配なさそうね」

「ただし、パロットくんがしっかり護ってあげるのよ！（外出を許

可します）」

スファレ

「そんな、あっさりと！！（涙）」      さんざん断られていた

パロット

「ありがとう」

「それで、オレたちのレベルに見合ったクエストってあるかな？」  
「最初だから、なるべく簡単なのが良いんだけど……」

リユーコ

「そうね……(うん)」

「ちょうど王室から、パロットくんピッタリの依頼が来ているよ」

パロット

「お、王室……？(汗)」(嫌な予感が……)

3コマ

リユーコ

「いまだ冒険者が足を踏み入れたことのない未知なる地区……」

「エリアGの探索作業」

「そこに何かがあるのか、どんな魔物が生息しているのかを調べるクエストよ」

「パロットくんなら簡単でしょ」(にっこり)」

パロット

「未知のエリア探索って……(汗)」

「目標レベル50以上のクエストだろ！」

「リユーコさん、めっちゃくちゃ言っな……(苦笑)」

スファレ

「れ、レベル50!?!?(どびっくり)」

リユーコ

「でも、パロットくん一人だけなら楽勝でしょ？」

パロット

「いや・・・、まあ（汗）」

スファレ

「楽勝なのかよ！！（叫び）」

効果音「ずががーーーーーん！！！」

リユウコ

「とはいえ、パロットくん以外がレベル1つてのが気になるな」

パロットもレベル1です

「よし、特別にユークレースのメンバーからシリカにも同行してもらうことにしましょう」

「パロットくと冒険できるって知ったら、シリカも絶対に断らないでしょうし」

パロット

「ちよっ！！」

スファレ

「ええ～～～」

「あのジエムシリカ様と一緒に冒険ができるんですか～～～」

スファレ憧れの精霊騎士

リユウコ

「シリカにはわたしから連絡を入れておくね」

「パロットくんたちは、準備ができたなら街門に行つてちよっだい」

パロット

「そんな勝手に！！」

リユーコ

「それはそうと、パロットくん……(ぼそっ)」

パロット

「え？(なんですか?)」

4コマ

リユーコ

「あなた、うちの国の女王さまを」

「いったいどこに連れて行くつも……」

フローライト

「わああああっ、わわわあああああー!!」(叫び)

スファレ

「女……王？(はてな?)」

パロット

「あゝ、やっぱり気づいちゃいました〜？(あははっ)」

リユーコ

「桜さまも桜さまです!」 フローラのこと

「最近姿を隠されていると思えば、冒険者だなんて危険なことを!」

「いったい何をお考えなのですか!?(ダメでしょ!)」

フローラ

「いやゝ、成り行きってどうか〜(苦笑)」

「『月長石溪谷の鬼』や『鬼神伝』も、まだ終りそうにないし〜」

」（汗）」

リユーコ

「わけわかんないこと言ってもダメです!！」

フローラ

「って、わたしもどっちかっていえば巻き込まれただけで〜〜〜!  
!（涙）」

スファレ

「女王……」

「……」

「……国王様?（汗）」（え……フローラが?）」

パロツト

「ふう〜……（汗）」

「やっと気づいたか（やれやれ）」

説明文「フローライト（桜）ちゃんは、ルチルクオーツ王国の代表  
です」

コメント

フローラが国王になった成り行きは、同一作者小説「桜のひみつ」  
をご覧ください（笑）

## 第10話 イメージとのギャップ

4コマ劇場 アイオライト―338・・・2010/04/14  
シリーズ3

タイトル「イメージとのギャップ」

1コマ

ルチルクオーツ王都、南街門にて・・・

パロットクリソベリル 職業 ヒーラー、レベル 1

「え〜っと・・・」

「シリカさん、どこにいるんだ〜？（きよろきよろ）」（まだ来て  
ないのかな〜？）

スファレライト 職業 戦士、レベル 1

「ねえ、ちよつと疑問に思ったんだけどさ〜」

「ジエムシリカ様って、盲目なんだよね・・・」

「冒険だなんて、本当に大丈夫なの？（汗）」

パロット

「安心しろ・・・」

「視力が無くても、おまえより百万倍強い（ぼそっ）」

スファレ

「いや、まあ、それはそうなんでしょうけど・・・（苦笑）」

「でも、魔物とかが現われたら」

「ちゃんと戦えるのかな〜って（汗）」

「というより、ジエムシリカ様って本当に目が見えないの？」

「あのしつかりとした言動から考えて、とてもそうには思えないん

「だけど・・・」

パロット

「盲目なのは間違いない・・・」

「だが、シリカさんは全ての存在から気配を読み取って」

「あたかも目が見えているかのように感じる事ができるそつだ」

2コマ

スファレ

「つて、そんなことが可能なの!?(どびっくり)」

パロット

「可能だから、あんな状態なんだろ?」

スファレ

「ええ〜〜」

フローライト 職業 姫(えっ?)、レベル 1

「あはははっ(苦笑)」

「まさか、うちのお父さんと同じような人が」 ショウのこと  
です

「他にもいるなんて思わなかったな〜」

「まあ、うちのお父さんの場合・・・」

「平日の8時から20時までの間、呪いのメガネをかけていて」

「無理矢理に目を見えなくしているんだけど(それ以外はメガネ  
休暇)」

「それでも、普通の人以上に辺りの状況を把握できているよ」

スファレ

「変!」

「あなたとこのお父さん、変ー!!」

パロット

「あゝ・・・(変って)」

「フローラのお父さんっていったら、やっと呼びかになれた？」

「この世界を創造した精霊神クリスタルさまだぞ」

スファレ

「マゝジゝでゝゝゝ!!」

「ってことはつまり」

「わたしのジエムシリカ様は、精霊神クリスタルさまと同じ能力をお持ちってことだよな」

「さすがはジエムシリカ様」  
憧れています

パロット

「なんだ、わたしの・・・って(どきどきどき)」

「っと、そうこうしているうちにシリカさんが来たみたいだぞ」

「おゝい、シリカさん」

3コマ

ジエムシリカ 職業 精霊騎士、レベル 128

「・・・(きよろきよろ)」

「・・・(おろおろ)」

フローラ

「あ・・・れ?(汗)」

「なんだかシリカさん」

「様子がおかしくはないですか?(大汗)」

スファレ



パロット

「つて、シリカさん！」

「なに抱きついてるんですかーーーーー！！（みんな見てますよ！）」

シリカ

「良いではないか、良いではないか」

「減るもんじゃあるまいし〜〜（ぎゅ〜〜っ）」

パロット

「減ってる減ってる！？」

「精神が磨り減ってるーーーーー！！（涙）」  
ついでにHPも減ってます（爆）

シリカ

「でも、わたしは目が見えないの・・・（涙）」

「だから、全身の感覚でパロットくんを感じないと」

「不安で不安でしかたない・・・（しくしくしく）」

「だから、ねっ（にこっ）」

パロット

「ねっ、じゃねえええーーーーー！！（うにゃ〜〜〜〜あ！！）」

スファレ

「じえ、ジエムシリカ様・・・（汗）」

「・・・変？（どきどきどき）」

フローラ

「あ、あはははっ（苦笑）」

説明文「パロットくんは、昔からシリカさんのおもちちゃです」

#### コメント

パロットに関わっていなければ、シリカはスファレのイメージ通りの人です（笑）

## 第11話 外界には驚きがいっぱい

4コマ劇場 アイオライト― 339・・・2010/04/18  
シリーズ3

タイトル「外界には驚きがいっぱい」

1コマ

ルルルクオーツ平原にて・・・

スファレライト

「ああ、夢にまで見た外の世界・・・(うつとり)」

「こんな、果てしない大地が広がっていたなんて・・・」 (感動)

「」

パロットクリソベリル

「まあ、ルルルクオーツ王都なんて」

「(第四聖界)クリスタル全体に比べたら地図上にあいた針の穴程度  
の大きさ・・・」

「しかも、そのほとんどが未だ調査もされていない未知なる空間」

「冒険者とは、そんな未知なる大地に踏み入り」

「魔物が少なく、人が住めるような場所を見つけたのが・・・」

スファレ

「ああー！ー！ー！」

「<sup>モンスター</sup>魔物発見」 遠くの方に・・・

「よしっ、今こそこのスファレちゃんの力を見せるとき！」

「どりゃ〜〜あー！(どたどたどた)」 魔物めがけて走り出す

パロット

「・・・・・・・・・・（聞けよ）」

フローライト（桜）

「あゝ、行っちゃいましたねゝゝゝ（苦笑）」

ジェムシリカ

「えゝつと（汗）」

「パロットくん、蘇生呪文はゝゝゝ覚えていますか？」

パロット

「あはははっ（乾いた笑い）」

シリカ

「さあて・・・・・・・・」

「それじゃあ追いかけますか（やれやれ）」

フローラ

「いま戦えば、間違いなく殺されちゃいますからねゝ（苦笑）」

パロット

「やっぱり足手まといだよ・・・・・・・・（はあゝ）」

2コマ

スファレ

「ふふふつ、待ってるよ魔物ゝ（たつたつたつ）」

魔物に向

かって走っている

「この未来のユークナイト、スファレライトさまが（たつたつたつ）」

「だんだん魔物が見えてくる

「お前たちを倒し、このクリスタルを平和へと 導・・・・・・・・き？」

なにやら違和感に気づく

「・・・・・・・・・・え？（大汗）」

事実気づく

魔物

水牛のような巨大魔物（前脚から頭までが5メートル

ほど）

『ズモオオオオオ！』（雄叫び）』

スファレ

「えっ、あれっ！？（汗）」

「これってモンハン？（ときどきどき）」

「もしくはゴッドイーター！！（叫び）」（でかすぎだろ！）

パロット

追いついた

「はいはい」 スファレの首根っこを掴む

「後先考えずに突っ込まず、よく我慢しました（えらいえらい）」

スファレ

「えっ、ちよっと！？（汗）」 引きずられる

フローラ

「まあ、レベル1であのサイズの魔物に戦いを挑んでも」

「さすがに勝てそうにないですね」（苦笑）」

シリカ

「ささっ」

「気づかれる前に、早く退却をしましょっ（ぼそっ）」

スファレ

「ええ~~~~~！！」

「なんで~~~~~！！！！（叫び）」（戦うんじゃないのぉ〜！

！)

パロツト

「つて、叫ぶなあああー！！(しいーっ！！)」

3コマ

岩陰にて・・・

スファレ

「ちょーっーっつと、なんなのよアレはー！！(叫び)」

「あんな強そうな魔物、レベル1で倒せるわけないじゃないー！！」  
涙(」

パロツト

「ああゝ、もぉうるさいなゝゝ(汗)」

スファレ

「あんなでつかいの、反則よおーっー！！」

パロツト

「あのなあゝ・・・(やれやれ)」

「まさか、冒険者のレベルアップに合わせて」

「弱い魔物から順番に出てくるとでも思ってたんじゃないだろうな・・・(汗)」

スファレ

「違うの！？(どびっく)」

パロツト

「ゲームじゃないんだから」

「そんな都合の良いことあるかああああー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！(じぎぢぢー！ー！ー！)」

スファレ

「そ、そんなあゝゝゝ(しくしくしく)」

シリカ

「ちなみに、鈴木さんとガチンコバトルして勝利するには  
「最低でもレベル20は欲しいわね」

スファレ

「……………」

「……………(汗)」

「……………鈴木さん？(誰?)」

パロット

「いや……………(汗)」

「さっきの魔物(ぼそっ)」

スファレ

「どええええええー！ー！ー！ー！ー！ー！(叫び)」

効果音「ずががー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ん！ー！」

4コマ

パロット

「最初に説明すべきだったな……………(がさっ)」

ルチルクオ

「ツの地図を広げる

「えゝつと、ここが王都」 説明中ゝ

「でゝゝ、いまいるところがエリアAで」

「この辺りは鈴木さんのテリトリーだ」 指さし確認

スファレ

「だから、鈴木さんって？（どきどきどき）」

パロット

「オレたちが目指しているのはエリアGだから」（この辺ね）

「鈴木さんのテリトリーを越えたら」

「山田さん、斉藤さん、渡辺さんのテリトリーを通過して」

スファレ

「・・・魔物 だよね？（大汗）」

パロット

「・・・（やれやれ）」

「スファレ、冒険は遊びじゃないんだ」

「真面目に聞いておかないと死ぬぞ！！（怒）」

スファレ

「うぐっ！！（大汗）」

パロット

「・・・（じいじい）」（反省したか？）

「で、渡辺さんを越えた次はちよお〜難関・・・」

「小林さんのテリトリーだ（ごくり）」 緊張しています

「いいか、小林さんは気性が荒く」

「他の皆さんと違って見つければ確実に戦闘となる（ぼそっ）」

「だから、この辺りは小林さんに見つからないように通り抜けるのが・・・」

スファレ

「どうしてもギャグにしか聞こえないのは、気のせい？」（しくしくしく）

フローラ

「あはっ、あはははっ……（苦笑）」

説明文「この物語はフィクションです。実在の人物及び団体とは一切関係ありません（笑）」

コメント

桜って、こっちに来てから苦笑してばかりだね（苦勞をかけています）

第12話 遭遇・・・小林さん

4コマ劇場 アイオライト | 340・・・2010/04/27  
シリーズ3

タイトル「遭遇・・・小林さん」

1コマ

ルチルクオーツ樹林にて・・・

フローライト(桜)

「あ・・・(汗)」

ジェムシリカ

「うん・・・(見つかった)」

パロットクリソベリル

「うげっ!!(大汗)」

スファレライト

「こ・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・小林さんだあああああーーーー!!! (うぎゃー)

ーーーー!!!)」

小林さん? 5メートルほどの巨大ゴリラ(シルバーバック)

『うづうづうづうおおおおーーーー!!!』 鳴き声適

当

効果音「ポコポコポコ」

ドラミング

2コマ

スファレ 必死に逃げています

「なんなのよあれ、なんなのよあれ—————!? (泣)」

パロット 若干、逃げるのに余裕があります

「何って……」

「小林さんだろ?」

「しかも、シルバーバック……(群れのボスだ)」

フローラ 平然と逃げています

「スファレさん、そんなに恐がることはありません」

「少し大きな『エネゴリくん』と思えば」

「だんだん可愛く見えてくるんじゃないですか」

スファレ

「可愛くない、可愛くない!! (涙)」

「っていつか、エネゴリくんって何だ—————!! (叫び)」

フローラ

「知らないんですか?」

「エネファームうほうほです」

スファレ

「知るか—————!! (泣き叫び)」 (意味わかんねえーよ  
!!)

小林さん? 樹々を薙ぎ倒しながら追いかけてくる

『うづうづ、うづうづおおおお—————!! (激怒)』

鳴き声適当

3コマ

シリカ 楽勝で逃げています

「パロツトくん、このままでは逃げられそうにありません」

「ここは、みんなバラバラな方向に逃げて」

「小林さんの注意を逸らす・・・というのはどうでしょう？」

パロツト

「そうだな〜（それしかないか〜）」

スファレ 必死に逃げています

「はあはあはあ、シリカさまっ！（汗）」

「戦わないんですか、戦わないんですか！？（泣）」

シリカ

「彼らのテリトリーに入ったのはわたしたちですから」

「戦いはなるべく避けないといけません（うんうん）」

「というわけで〜〜〜」

「みなさん、散ってください」

効果音「ぱぱっ！〜！」 一瞬にしてシリカたちの姿が消える

スファレ 突然、ひとりぼっち

「……………（きょろ）」

「……………（きょろきょろ）」

「……………え？（どきどきどき）」 恐る恐る振

り返る

小林さん？

『うががあああああ————！！（大激怒）』 鳴き  
声適当

スファレ

「ぎゃああああああああああああああああ！！（悲鳴）」

4コマ

小林さん？

『うほうほっ、うほほ——————っ！！（ポコポコポコ）』

鳴き声適当

スファレ

「いひゃっ……（涙）」 追い詰められました

「たたた、助け……（がたがたぶるぶる）」

小林さん？

『うほっ、うほほ————っ （ぶっくん）』 ハンマーアッパ

ーカット炸裂

スファレ

「いやああああああ……（きらりん）」 遠くの  
彼方へぶっ飛んでいきました

小林さん？

『うほうほ、うほほ————っ』 勝利の雄叫び

フローラ 遠くから衝撃の光景を目撃

「……………（どきどきどき）」

パロット

「ちっ……」

「レベル1でも冒険者なら少しは反撃しろよ(ぼそっ)」

フローラ

「ちょーーーーーっ！(汗)」

シリカ

「スファレさん……」

「惜しい人を亡くしました……(しくしくしく)」

フローラ

「死んでない、死んでないですよあーーーーー！！(大汗)」

効果音「ずがーーーーー……………ん！！」

説明文「全国の小林さん……ごめんなさい(笑)」

コメント

フローラ(桜)は時空力が使えるので時間を止めて逃げました

### 第13話 当社比で数倍の効果があります

4コマ劇場 アイオライト―341・・・2010/05/10  
シリーズ3

タイトル「当社比で数倍の効果があります」

#### 1コマ

ルチルクオーツ、エリアGにて・・・

スファレライト 前回、小林さんに吹き飛ばされた(笑)

「う・・・うう・・・(だくだく)」 全身血だらけで倒れている(瀕死)

「げほげほっ・・・」 吐血

「わたし・・・、このまま死んじゃうのかな・・・」

パロットクリソベリル 幻影です

『ふう・・・』

『これだからレベル1の戦士は〜』

スファレ

「・・・(むかつ)」

#### 2コマ

パロット まぼろしです

『回復アイテムも無い、介抱してくれる仲間もいない・・・』

『こんなとき、ヒーラーなら』

『自分の傷もたちどころに治してしまうのにな〜 (あははっ)』

スファレ

「い、今はそんなこと……言ってる場合じゃ……早く回復を……」

パロット 実際にはいません

『そうだな……』

『どーしてもっていうなら助けてやらんこともない』

スファレ

「ああー！ー！！（怒）」

### 3コマ

パロット スファレの想像です

『さあ……、お前も心を改めて……』 何かを取り出す

『精霊神ファリスさまを崇めるのだ！！（叫び）』

精霊神ファロール像

『……………（どどー！ーん！ー！！） 例のためきです

スファレ

「ぶ、ぶさけるなー！ー！！（うぎゃー！ー！！）」  
怒りのあまり身体を起こす

「……………（汗）」

「あれ？（どきどきどき）」 身体に違和感を感じる

「痛く……ない、傷が治ってる!?!」

「う、嘘でしょー！ー！！……（どびっくく）」

効果音「ずががー！ー！！ん！ー！！」

### 4コマ

スファレ 辺りを散策

「いったいどういうこと？（汗）」

「まさか、幻のパロットが本当に回復してくれたなんてありえないし……」

「考えられることといえば、この地に特別な力が宿っていて」

「神様がこころ清らかなわたしの傷を治してくれたってことかな」

「

パロット まぼろしです

『けっ、なぐにを言ってるんだか……（にやり）』

スファレ

「……（怒）」

パロット 実際にはいません

『これぞ精霊神ファリスさまの奇跡の力！！（叫び）』

あん

た誰？（笑）

『見よ、ファリスさまの像が光り輝いているぞ！？』

スファレ

「だああああ、やかましい！」 耳をふさぐ

「幻の分際で、なにを好き勝手に！！（きよろっ）」 振り返る

「って……（汗）」 何かに気づく

「……（大汗）」 啞然

「……え？（ときどきどき）」 愕然

銀色のファロール像 すごい巨大（笑）

『……（うい~~~~ん）』 無言

『……（うい~~~~ん）』 ぴくりとも動きません

『……（うい~~~~ん）』 たぬきですから（爆）

金色のファロル像　　すげえ巨大(笑)

『……………(うい~~~~ん)』　　無言

『……………(うい~~~~ん)』　　光り輝いています

『……………(うい~~~~ん)』　　なにやら神秘的な力が

放たれています(爆)

スファレ

「……………あゝ(汗)」

「これが……………傷の回復した……………原因?(あははっ)」

「……………」

「……………本気でファリスさま信仰に改教しようかなゝ(ぼそっ)」

パロット　　スファレの想像です

『うんうん、それが良いそれが良い』

効果音「ずがが—————ん!!」

コメント

……………意味不明!!!(笑)

## 第14話 消えたスファレは無事なのだろうか？

4コマ劇場 アイオライト―342・・・2010/05/18  
シリーズ3

タイトル「消えたスファレは無事なのだろうか？」

1コマ

ルチルクオーツ、エリアGにて・・・

ジェムシリカ

「う〜ん・・・(困った)」 魔物たちから隠れている

「エリアG 予想以上に危険な場所のようね〜」(大汗)」

「フローラちゃんの時空能力『時間よとまれ』が無ければ」

「わたくしたちも全滅するところでした〜(フローラちゃん、えらい)」

フローライト(さくら)

「あ〜・・・(汗)」

「でも、そろそろわたしの時空力も尽きかけているので」

「そう何度も時間を止めることはできませんよ(気をつけてください)」

シリカ

「・・・わかりました(こくり)」

「パロットくん、このままではエリアGの探索なんてできそうにありません」

「一度、ルチルクオーツに戻ってはどのようでしょうか？」

「このエリアを探索するのなら」

「最低でもあと3人はユークナイトクラスの冒険者が必要・・・っ

て(汗)「

パロットクリソベリル

「……………(きよろきよろ)」

「……………(あせあせ)」

「……………(おるおる)」

シリカ

「パロット……………くん?(大汗)」

フローラ(さくら)

「ああ」

「パロットさんは、小林さんに吹っ飛ばされたスファレさんの心配をしているんですね」

パロット

「そ、そんなじゃねええええ……………!」(叫び)「本当は  
はすげえ心配しています(笑)」

効果音「ずがが……………ん……………!」

シリカ

「ば、パロットくん……………(涙)」

「わたくしより、あの女を選ぶんですか!?(しくしくしく)

パロット

「なんの話だあああ……………!!(じぎぎ……………!!)」

フローラ（さくら）

「それにしても、すこし意外です・・・」

「これまでのお二人の様子から考えると」

「『けっ、これだからレベル1の戦士は・・・』（はあ〜）『』」

パロツトの真似

「とか言つと思つていたのですが（苦笑）」

パロツト

「そ、その通り！」

「これだからレベル1の戦士は！！（やれやれ）」

「・・・が（ぼそっ）」

「リユーコさんにも、オレがしっかりと護つてやれって言われてい  
る・・・（汗）」

「だから、一応は捜し出して連れ帰らないといけない」

「まったく、はた迷惑なヤツだ！！（むっ）」

シリカ

「パロツトくん」

「悪ぶれていますが、根は良い人なんですよ（ひそひそ）」

フローラ（さくら）

「はい・・・」

「パロツトさんのようなツンツン系の人は見慣れていますから」

「本当は心配なのに素直じゃないってのはわかっています」

シリカ

「うん」

「フローラちゃん、人を見る目あるね〜（笑）」

フローラ（さくら）

「パロットさん、わかりやすいですから」 (あははっ)

パロット

「こ……こいつらうぜえ…… (照れ)」「 (聞こえてるんだよ！)」

3コマ

シリカ

「とはいえ、このエリアGには高レベルの魔物がうようよしています」

「スファレさんと合流するのは、かなり難しいでしょうね」

パロット

「それでも！」

「なんとかして、スファレを捜し出さないと！」

シリカ

「……」  
「とか言っている間に、どうやら魔物に見つかってしまったようです……」

「しかも この気配…… (汗)」

「これまで感じたことのない、凄まじく恐ろしいもの (大汗)」

パロット

「ああ…… (じくじく)」

「こんな恐ろしい気配 (汗)」

「修行時代、お師匠様に殺されそうになったとき以来だ」

フローラ (さくら)

「え……お師匠様? (汗)」

「でも、この気配って……（あれ？）」

パロツト

「来るぞー！！（叫び）」 大剣を両手で持って身構える

シリカ

「やっぱり剣を持って戦うのがお似合いですね、ヒーラーさん」

フローラ（さくら）

「あ……（汗）」

「いまいち、緊張感に欠ける会話ですね（苦笑）」

「まあ、何も心配は無いと思っんですけど」

パロツト

「え……？（）どういう意味だ！？（）」

効果音「みしみしっ、がさがさっ！」 樹々をなぎ倒して何か  
が現れる！

4コマ

突然の登場

『漆黒の毛並みで三つ目の魔獣  
が、がおおおお〜〜ん』

全長5メートルぐらい？

なぜか女性の声で遠吠え

パロツト

「あ……が！？（大汗）」

フローラ（さくら）

「や、やっぱり〜（苦笑）」

シリカ

「……………?」(汗)

リウム(魔獣型)

『さくらお姉ちゃん、みつけた (ギロリ)』  
強面だけで睨んではいません

フローラ(さくら)

「え〜っと(こっこの時代のリウムちゃんだよね?)」

「リウムちゃん、どうしてここに?」(大汗)

リウム(魔獣型)

『え〜っとね〜』  
『わたしはいつでもよかったんだけど〜』  
どうでもいいのか

よ(笑)

『なんか、アクアのやつがさくらお姉ちゃんを見つけて』

『絶対お城の仕事をやらせるんだって必死になっていて〜』

フローラ(さくら)

「あ〜……………(お仕事ね……………)」

「で、わたしを捜しているっていうアクアちゃんはどっしたの?

(汗)

リウム(魔獣型)

『……………はぐれた(ぼそっ)』

フローラ(さくら)

「あ、あはははっ(苦笑)」

パロット

「……………」

啞然

「……………」

呆然

「……………」

愕然

シリカ

「ど、どうやら敵ではなさそうですね（フローラちゃんのお知り合  
いですか？）」「

「……………？（汗）」

「パロットくん）どうしましたか？」

リウム（魔獣型）

『ぬ？』

『パロット？（はてな？）』

パロット

「お……（汗）」

「お師匠さま……………！！（叫び）」

リウム（魔獣型）

『あ、やっぱりパロットだ』

『いや、久しぶりだね』（笑）『5年ぶりぐらい？』

フローラ（さくら）

「ええ……………！！（叫び）」

「リウムちゃんが、パロットさんのお師匠様……………！！（  
どびっくり）」

パロット

「っていうか、フローラお師匠様と知り合いだったのか！？（大汗）」

」

リウム（魔獣型）

『こらパロット！』

『さくらお姉ちゃんを呼び捨てにするな————！！』（怒）

シリカ

「……………」（汗）

「……………でもいいですけど）ほそっ）」

「スファレさんを探さないんですか？）（どきどきどき）」

パロット&フローラ（さくら）

「あっ！？」

リウム（魔獣型）

『？（なんだ？）』

効果音「ずがが—————ん！！！」

コメント

この時代の（成長した）リウムちゃんは普通に喋ります

## 第15話 合流したのは白き聖獣

4コマ劇場 アイオライト―347・・・2010/06/08  
シリーズ3

タイトル「合流したのは白き聖獣」

1コマ

ルルルクオーツ、エリアGにて・・・

スファレライト

「はあはあはあ・・・(汗)」 魔物たちから必死に隠れている

「いったいなんなのよ、この危険地帯は〜!(涙)」 ひたす

ら小声で叫んでいる

「恐すぎて身動き取れないじゃないのよ〜〜〜!!!(小声)」

効果音「ずしん、ずしん、ぎゃーす!!」 凶暴な魔物たち

スファレ

「う〜ん、未来のユークナイトとか言っている場合じゃない・・・」

「このままじゃ、戦士のレベル2になる前に殺されちゃうよ〜!!」

(大泣き)「 まだレベル1です

?????

『あ〜、すみません・・・(ぼそっ)』

スファレ

「ひゃひっ!!!(びくっ!!)!!」

「.....(大汗)」

「……………」(そ〜つと)「 ゆっくりと振り返る

白い毛並みの巨竜(全長7メートルぐらい?)

『少しお聞きしたいのですが』

『さくらさん……もしくはフローラさんという名の困ったちゃんをお見かけしませんでし……』

スファレ

「ぎゃわあああああああ……!!(殺される……!!)」

白い毛並みの巨竜

『つて、なんですかいきなり……!!(どびっくり)』

2コマ

スファレ

「え……」

「アクア マリンさま?」

「ルルクオーツの王政とかやってる……あの?(大汗)」

アクアマリン 二十歳ぐらいの青年姿

「いや〜、驚かせてしまってますみません(ぼりぼり)」 頭を掻いている

「広大な土地を回るには、元の姿(光竜)に戻ったほうが便利でして〜(苦笑)」

スファレ

「……………」(じい〜っ)

「……………」(じい〜っ)

アクア

「あゝ、スファレさん？（聞いていますか？）」

スファレ

「か……、かつこいいゝ（ぽっ）」

アクア

「え？（汗）」

スファレ

「いえいえいえ！（大汗）」

「な、なんでもありません！！（どきどきどき）」

3コマ

数分後……

アクア

「そうですねゝ」

「スファレさんは、さくらさんと同じパーティで」

「小林さんの攻撃で離ればなれになってしまったわけですねゝ」

スファレ

「そうですねよゝ（にこっ）」

「もう、死んじやうかと思いましたゝ（にこにこ）」

「それで、一人になって心細かったところに」

「偶然……いや、運命的にアクアさまが現われてゝ（きやゝっ）

「アクアの腕にしがみ付く

アクア

「あゝ……（汗）」

「それではボクは、急いでさくらさんを捜さないといけないので」

「これで失礼しますね〜（大汗）」  
腕を失礼します・・・

スファレ

「……………（うるっ）」

「アクアさまは、か弱い女の子を」

「こんな危険な場所に一人置き去りにしてしまうのですか？（しくしくしく）」

アクア

「いや！」

「そ、そんなことは・・・（大汗）」（いちおう冒険者ですよね？）

4コマ

スファレ

「同じことです！」

「レベルが1しかないわたしをこんなところに・・・」

「か弱いわたしなんか、魔物に食べられてしまえばいいのです！（うるうるうる）」

アクア

「え〜っと、え〜っと（汗）」

「今までに無い性格の人だな・・・（大汗）」

「う〜ん、わかりました」

「確かに、スファレさんがこの地区を歩きまわるのは危険です」

「他のメンバーに合流するまで」

「ボクがスファレさんをお護りいたします！」

スファレ

「いや〜ん」

「アクアさま、かつこいい〜〜（にやり）」  
計画通り

アクア

「では、さっそく元の姿に戻って・・・」

光竜化

スファレ

「ダメー！ー！ー！ー！(叫び)」

アクア

「えええええー！ー！ー！(ダメって・・・)」

スファレ

「アクアさまはおつきくなるの禁止!」

「アクアさまは、今の人型しか認めません!」

アクア

「き、禁止って(汗)」

「光竜に戻ったほうが動きやすいし捜しやすい・・・」

スファレ

「だから絶対ダメっ!!(がるるっ!!)」

コメント

未来アクアを言葉巧みに仲間へと引きこみました (笑)

## 第16話 今回のラスボスは？

4コマ劇場 アイオライト― 348・・・2010/06/17  
シリーズ3

タイトル「今回のラスボスは？」

1コマ

ルチルクオーツ、エリアGにて・・・

アクアマリン

「エリアGの探索クエストねえ・・・」

「なるほど、そういうわけですか」

スファレライト

「そうなんです」

アクア

「ですが、この地区の探索は止めたほうが良いでしょう」

「人の身では危険すぎます」

スファレ

「た、たしかにわたしは戦士のレベル1ですが・・・（お恥ずかしながら）」

「わたしたちのパーティにはあのユークレースのナンバーズ」

「ユークナイトが二人もいるんです（元ユークナイトを含めて）」

「みんなと合流さえできれば、このエリアGの探索ぐらい・・・」

アクア

「いいえ、たとえユークナイト全員が揃っていたとしても」

「このエリアは手に負えないでしょう……（大汗）」  
「なぜなら？」

スファレ

「……………（じくり）」

2コマ

アクア

「この精霊界第四聖界クリスタルにおける」

「ラスボスが居城を構えているのですから……（どきどきどき）」

突然の登場

ラルド ショウたちの学校の校長先生

「おお、おつきい方のアクアよ」

「久しぶりだな～～」

スファレ

「ラスボス……！？（どびっくり）」

効果音「ずがが……！！」

アクア

「え、ラルドさま（汗）」（噂をすれば……）

「お久しぶりです（ぺこり）」

ラルド この人、どの時代にも同じ状態で存在しています（笑）

「ふむ……」

「で、何だその弱っちい娘は？」

スファレ

「弱っちい・・・(むかつ)」

「た、確かにわたしはまだレベル1だけど」

「いずれはレベル99のユークナイトになるんだからね!!(怒)」

ラルド

「無理だな(ぼそっ)」

スファレ

「即答かよー！！！！(うぎゃー！！！！)」

3コマ

アクア

「ら、ラルドさま(苦笑)」

「スファレさんもレベルを上げようがんばっているのですよ」

「まあ、さっき会ったばかりで、よく知りませんが・・・(ぼそ

っ)

スファレ

「アクアさま(涙)」(そんな・・・)

アクア

「それに、どんな冒険者であろうと」

「強くなる可能性を否定するわけにはいきません」

「彼女も死ぬ気てがなれば・・・(ちらっ)」 スファレを

ちら見

「・・・げふげふ(大汗)」

ラルド

「ああ、強くなる才能無いだろ」

「そいつ……(ぼそっ)」

スファレ

「ちよー……！！(涙)」

4コマ

ラルド

「まあ冗談はこれくらいにしておいて」

「このままじゃ、レベル2に上がるのだから無理だぞ」

スファレ

「ば、ばかにして！！(むき……！！)」

「いくらラスボスだからって許さないぞ！！(涙)」

ラルド

「いやいや、少し落ち着いて考えてみる……」

スファレ

「……ん？(ぐすん)」

ラルド

「こんなところでどれだけがんばろうが……」

「レベル1の冒険者に何ができる？(魔物に勝てないだろう?)」

「自分の冒険者カードをしてみる」

「経験値1ポイントも上がってないんじゃないか？」

スファレ

「ああ、ほんとだ……」 (笑)

効果音「ばきゅ〜〜〜〜〜〜ん」

アクア

「……………(ぶきゅぶきゅぶきゅ)」

コメント

スファレさん、いまだ経験値0です

## 第17話 低レベルクリア

4コマ劇場 アイオライト―349・・・2010/06/23

シリーズ3

タイトル「低レベルクリア」

1コマ

ルルルクオーツ、エリアGにて・・・

ラルド ラスボス？

「しかしなんだ」

「経験値がゼロにも関わらず」

「こんな所までやってくる冒険者も珍しい・・・」

スファレライト

「ほっというて(涙)」

ラルド

「よし！」

「お前はそのまま経験値を極力上げないようにしろ」

スファレ

「はあ？(何言ってるんだこのおやじ・・・)」

アクアマリン(青年型)

「なるほど」

「低レベルクリアですね」

ラルド

「くつくつくつ」

「その通り」

スファレ

「つて、ええええ！？（どついう意味！？）」

理解不能

2コマ

ラルド

「いいか？」

「RPGには、大きく分けて二通りの楽しみ方がある」

「ザコ敵を片っ端から倒してゆき、レベルや経験値を上げて」

「最高クラスの武具を買いまくってその街に留まり」

「準備万端で次の街へ向かいながら、最強状態でラスボスを倒すやり方と」

「その逆に、ザコ敵とは一切戦わず、中ボスとか強制戦闘でしか経験値を得ない」

「武具はダンジョンとかの宝箱で揃え」

「技や特技、アイテムなんかを駆使して、最弱状態でラスボスを倒すやり方だ！」

スファレ

「……………（大汗）」（いったいなんの話をしているんだろ  
う？）

ラルド

「まあ、低レベルクリアするためには」

「通常の数十倍はプレイ時間が必要だがな」（あははっ）」

アクア

「まあ、ボクとしては」

「限りなく最強状態で戦いに向かいたいですけどね」(苦笑)

ラルド

「そんな心構えだから」

「お前はアウインの勇者になれんだ・・・」(ぼそっ)

アクア

「そ、そんなーーーーー!!」(涙)

効果音「ずががーーーーーん!!!」

### 3コマ

ラルド

「聞くところによると、Crystal(原作者)の知り合いにこんなやつがいるらしい」

「むか～し、スーフアミ版ドラゴンクエスト6が発売されたころの話だ・・・」

「そいつのプレイスタイルは、ザコ敵と遭遇しても基本は逃げる!

「イベント戦闘しか戦わない・・・」

「そして、転職可能な状態までストーリーを進めておき」

「強い敵とスライムが同時に出てくる場所で戦いまくったという!」

スファレ

「すーふぁみ?(大汗)」

「すらいむ?(どきどきどき)」

ラルド

「しか～し!」

「ただ戦うだけではない・・・」

「倒すのはスライム1匹だけで、後は風神の盾なんかを多様して余

計な経験値が入らないようにする」

「そして、職業の熟練度だけを上げて、ひたすら特技だけを覚える  
！！」

「ドラクエ6は、特技さえ覚えればクリアできるそうだ！！」

「当然、戦闘終了時には全員生きている状態・・・」

「一定キャラだけレベルを上げての低レベルクリアは邪道だそうだ  
！！」

個人的見解です

「しかも、隠れボスを倒したレベルは20にも達していなかったと  
いう・・・（大汗）」

アクア

「おお~~~~（すげえ~~~~）」

スファレ

「い、いや、あの~~~~（大汗）」 話についていけません（  
笑）

4コマ

ラルド

「ポイントはパラディンの『仁王立ち』！」 意味不明（笑）

「ちなみに、1回の戦闘に2時間や3時間は当たり前だという」

「ボス戦は、さらに数倍・・・（ぼそっ）」

アクア

「・・・（大汗）」（そ、それはちょっと・・・）

スファレ

「もしも〜し（汗）」（仁王立ちって何のことだ〜！！）

ラルド

「というわけで」

「おまえも経験値を上げずにクリアしろ（真顔）」  
何を！（笑）

スファレ

「絶対にイヤー！！（叫び）」（こいつ、頭おかしんじゃない・・・）

アクア

「あははっ（汗）」

「さすがにゲームと同じわけにはいきませんよね~~~~」（苦笑）

ラルド

「何を言うっ！！」

「Crystal（原作者）なんて、ラングリッサーシリーズをプレイするときは」

「傭兵なんて1回も使ったことないんだぞ！！」  
マジです

アクア

「ええーーーーー！！（どびっくり）」（なぜいきなりラングリッサー！？）

ラルド

「メインキャラでしか戦闘はしない・・・」

「なんでも、傭兵を動かす時間がひたすら面倒だという（大汗）」

アクア

「ああ、わかる気がします・・・」

「シミュレーション系で、いちいち傭兵まで動かしていたら」

「時間がどれだけあっても足りませんからね~~~~」（苦笑）

ラルド

「このように、人それぞれのプレイスタイルがあり」

「戦闘に個性を持たせることで、特別なレベル1の戦士になることが・・・」  
もはや収集がつかません(爆)

スファレ

「わたしにもわかる話をしろよ・・・(大汗)」

効果音「ずががーーーーーん!!!」

説明文「ちなみに Crystal(原作者)は、どんどん戦闘をこなしてレベルを上げまくるタイプです」

コメント

しばらくすると熟練度が上がらなくなるため、色々な戦闘場所を探し出していたそうです。

でも、1回の戦闘で倒すのはスライム1匹だけ

## 第18話 リーダーは誰？

4コマ劇場 アイオライト― 355・・・2010/07/21

シリーズ3

タイトル「リーダーは誰？」

1コマ

ルルルクオーツ、エリアGにて・・・

パロットクリソベリル

「・・・・・・・・・・(いらいらいら)」

フローライト(さくら)

「あ・・・・・・・・(汗)」

「早いとこスファレさんを見つけないと」

「パロットさんのイライラが爆発しそうな勢いですね」(苦笑)

パロット

「なっ!？」 図星？

ジエムシリカ 盲目の精霊騎士

「・・・・・・・・・・(むっ)」

「あんな子、ほっとけばいいのに・・・(涙)」

パロット

「ちよっ、シリカさん!」

「そんなわけにはいかないでしょ!!」(大汗)

シリカ

「ああ……(涙)」

「わたくしのパロットくんが」

「あの小娘に取られた……！！(泣)」

パロット

「な、なんの話ですか……！！(叫び)」

リウム(成人バージョン)

未来のリウム

「いやあ」

「なかなか楽しそうなパーティだね」(笑)」

フローラ(さくら)

「まともりが欠けていて、大変なんですよ」(苦笑)」

パロット

「フローラ……、うるさい」(ぼそっ)」

フローラ(さくら)

「はっっ！」

2コマ

リウム

「パロット……(ぼそっ)」

パロット

「はい？」

リウム

「さくらお姉ちゃんをいじめるな……！！(がぶっ！)」  
パロットの頭に噛み付く

パロット

「なああああつー!!」

「お師匠さま、痛い痛い・・・マジで痛い!!」(がぎやあああつー!!)「」

シリカ

「まとまりが無いというのは」

「このパーティのリーダーが決まっていなからじゃないかしら?」

パロット

「リーダー?(しくしくしく)」

「そんなの、べつに決めなくてもいいんじゃないか?」

リウム

「そんなこと言っているから」

「みんな好き勝手に動いてバラバラになったんじゃないの?」

パロット

「うっ!!」(汗)「」

3コマ

シリカ

「ここは、パーティ名も含めてリーダーを決めるべきです・・・」

「わたくしは今回のクエストだけの助っ人ですから」

「まずは除外ですね」

フローラ(さくら)

「やっぱり、リーダーというのなら」

「パロットさんが良いとおもいます」

「……ヒーラーですけど(ぼそっ)」

シリカ

「そうです!」

「ここはひとつ、勇者に再転職してリーダーになるべきです!」

リウム

「えっ、パロツトって、いまヒーラーなの!?(どびっくり)」

パロツト

「はあ、いろいろありまして(苦笑)」

フローラ(さくら)

「じゃあ、リーダーはパロツトさんで決まりってことで!」

パロツト

「ちょっと待て!」

「なんでオレがそんな面倒なことを……もとい(ぼそっ)」

「リーダーなんてのは、もっと素晴らしい人がやるべきじゃないのか!?!」

シリカ

「そうは言っても……」

「このパーティ、メンバー少ないですよ(汗)」

パロツト

「ふっふっふっ(微笑)」

「みんな、忘れてないか?」

「このパーティには、リーダーに相応しい素晴らしい人がいることを!」

フローラ(さくら)

「ま、まさか、その人って・・・！(大汗)」

パロット

「その通り・・・(にやり)」

「みんなのアイドル、精霊神ファリスさまだーーーーー！！(叫び)

」

説明文「パロット、懐から女神像を取り出す」  
もちろん信

楽焼きのタヌキです

シリカ

「おお~~~~」

」

フローラ(さくら)

「・・・・・・・・・・」

リウム

「おお~~~~？(びっくり)」

効果音「ずがーーーーーん！！！」

4コマ

パロット

「リーダーに相応しいのはこの御方をおいて他にはいない！」

シリカ

「たしかに・・・」

「精霊神のパーティなんて、ちょっとかっこいいわね〜(どきどき)

どき)」

フローラ(さくら)

「パロツトさん、パロツトさん・・・(汗)」

「それって、精霊神ファロルさまの像だよ(ぼそっ)」

パロツト

「えっ?(汗)」

「あゝ、こっちの方だっけ?(大汗)」

説明文「パロツト、再び懐から女神像を取り出す」

今度のは、

招き猫の置物です

シリカ

「うゝん・・・(汗)」

「こうして並べてみても、どっちがファリスさまなのか見分けがつかないわね(大汗)」

パロツト

「そうだよな(大汗)」

「例えて言うなら、外国人の顔はみんな同じに見える・・・みたいかな?(苦笑)」  
おいこら!!

ファリス(声だけ)

どこかで覗いているようです(笑)

『しくしくしく(涙)』

フローラ(さくら)

「いやいやいや、全然違うでしょ!(大汗)」(見た目も色も!)

「・・・っていうより(汗)」

「そういえば、リーダーってこのパーティを立ち上げたスファレさ

んなんじゃ・・・？（大汗）「

パロット & シリカ

「「・・・あっ！ー！！」どびっくり（「「（そうだったー！！）

効果音「ばきゅ~~~~~ん

コメント

こうして精霊神ファリスさま（招き猫？）のパーティが誕生し・・・  
げふげふっ！！（大汗）

## 第19話 戦闘スタイルを決めよう

4コマ劇場 アイオライト | 356 . . . . . 2010/07/22  
シリーズ3

タイトル「戦闘スタイルを決めよう」

1コマ

ルルルクオーツ、エリアGにて . . .

スファレライト

「 . . . . . (汗) 」

「気のせいかな?」

「どこかで雑な扱いをされているような . . . (汗) 」

アクアマリン (成人バージョン) 未来のアクア

「いいえ、おそらく気のせいではありませんよ (大汗) 」

スファレ

「やっぱり? (どきどきどき) 」

ラルド ラスボス

「というわけで」

「スファレも我が弟子となったわけだが」

スファレ

「ちよっ!」

「勝手に弟子にするな————!」

アクア

「スファレさん」

「ラルドさまの弟子になることは、とても名誉なことなんですよ」  
「かの有名なアウインの勇者、シヨウさまやアリスさまを鍛えたの  
だって」

「ラルドさまなんですから」

スファレ

「ええー！ー！ーっ！」

「・・・マジ？（大汗）」

ラルド

「ふっ・・・（微笑）」

2コマ

スファレ

「・・・・・・・・（じいっ）」      ラルドを見つめる

「じ、じゃあ、ちよっくら弟子入りしてみようかな〜」（ぼそっ  
（

「      軽い気持ちで

アクア

「確実に強くなりますよ」

「まあ・・・、死ななければ      の話ですが・・・（汗）」

スファレ

「へ？（大汗）」

ラルド

「では修行を始める！」

スファレ

「ちよっ！」

「今、気になる内容が聞こえ……（汗）」

ラルド

「やかましい！（叫び）」

「修行に集中しろ！！（怒）」

スファレ

「ええ……！（涙）」

3コマ

ラルド

「つと、そのまえに」

「まずは、最終的に到達する戦闘スタイルを決めなくてはならない」

スファレ

「戦闘スタイル……ですか？」

ラルド

「うむ……」

「修行は、それに向けて行うわけだから」

「スタイルを決めることは重要なことだ」

スファレ

「ちなみに、どんな戦闘スタイルがあるのでしょうか？（汗）」

ラルド

「まずは、超獣神と呼ばれる巨大ロボットに乗って戦うスタイル」

超獣神グランゾル

スファレ

「……………」

「……………」

「……………はぁ!?(どびっくり)」

効果音「ずがが—————ん!」

4コマ

ラルド

「次に、退魔師と言いながら、実は忍者みたいな肉弾戦が得意なスタイル」 美咲ちゃんシリーズ

「ジューエルタイプの携帯端末を媒体に、パートナーと融合して戦うスタイル」 クラリオンアース

スファレ

「いやいやいや!(汗)」

「そんな特殊な戦闘スタイルじゃなく」

「もっと一般的なやつはないんですか!?(大汗)」

ラルド

「ん?」

「一般的なやつ……ねえ(うん……)」

「じゃあ、面白みに欠けるが、勇者とかにしとくか?」

スファレ

「それっ!」

「わたし、勇者を目指します!(で)、最終的にはユークナイトに……)」

ラルド

「……………(うむ)」 乗り気ではない

「まあ、こればかりは本人が決めることだから仕方あるまい(ぼそっ)」

「では、この3つのボールの中からすきなものを選べ……」  
赤白半々のボールを3つ並べる

スファレ

「……………え？(何ですかこれ?)」

ラルド

「モンスターボールだ!!(叫び)」 ポケモン

スファレ

「なんですかそれ……………!!(涙)」

「え、えっ?」

「わたしってば、勇者を目指すんですよ!？」

ラルド

「目指せへっぽこマスター」 空の星に向けて指をさす(笑)

スファレ

「なんですか、その妖しげな名前は!!(叫び)」

アクア

「……………なるほど(汗)」

「七瀬さんスタイルですね……(苦笑)」

スファレ

「ちよ……………っ!!(涙)」

説明文「ここに、新たなへっぴごマスターを目指す者が誕生し・・・  
げふげふっ！（大汗）」

コメント

経験値の代わりにへっぴご度が上がっていきます（笑）

## 第20話 パロットとシリカの記憶

4コマ劇場 アイオライト― 361・・・2010/07/31  
シリーズ3

タイトル「パロットとシリカの記憶」

1コマ

いまから約五年前、忘却の迷宮最深部に・・・

古の巨大魔蟲　　でっかい百足？

『ウゴオオオオーーーーーー！！（カシャカシャ）』　　牙を重ねる

ポルーサイト　　ユークナイトNo.9

「ちっ！（汗）」

「まさか、こんな化物が潜んでいたなんて・・・」

ジエムシリカ　　ユークナイトNo.5

「いま戦えば全滅は必至！」

「サイト、一度引きますよー！！」

サイト

「何言ってるんだシリカ！」

「オレたちは最強の冒険者ギルドと謳われたユークレース！」

「しかも、ここにはナンバーズ・・・ユークナイトが三人もいるんだ！」

「あんな化物、オレたちが本気を出せばイチコロだぜ」

シリカ

「って、そんなこと言っている間に他のメンバーが全滅しました！」

一般メンバー

「これは上位ナンバーズの命令です・・・撤退しますよ!」

サイト

「ちっ、しかたないな」

「おら、新入り!」

「そんなところで固まってないで」

「さっさと撤退するぞ!」

パロットクリソベリル      ユークナイトNo.13

「はあはあはあ・・・(がたがたぶるぶる)」      剣を構えて震えている

2コマ

説明文「狭い通路を巨大魔蟲が追っかけてきている」

巨大魔蟲

『ウゴオオオオーーーー!!(しゃかしゃか)』

シリカ

「・・・このままでは追いつかれますね」      必死に走っている

「ここは、わたくしが時間を稼ぎます!」      振り返って剣を構える

「あなたたちは早く逃げなさい!!」

サイト

「つて、シリカ!? (なにやってるんだ!)」

「おい新入り!」

「シリカを助けるぞ!!」      戦斧を構える

パロット

「う、うん・・・(汗)」

巨大魔蟲 身体を起こして咆える

『アガガアアアアー—————!』

サイト

「けっ!」 巨大魔蟲の下へ滑り込む

「いくら外装が固くても、腹の内側はどうかなっ!」

「うおりゃあ!!(かき————ん!)」 戦斧を叩きつける

「か、かてえく・・・(ビリビリ)」 手が痺れる

シリカ

「サイト!」

サイト

「うおっ!」 慌てて真横へ身体を投げ出す

巨大魔蟲

『ワギャアアア! (ずしゅん!)』 サイトを押しつぶそうとする

3コマ

シリカ 風のような素早い動きで巨大魔蟲を翻弄する

「頭を狙いなさいサイト!」

「こういつた魔蟲は頭さえ潰せば動きをとめるはず!」

「はぁあぁあっ!」 雷撃の精霊術を放つ

巨大魔蟲

『グゴオオオオ!』

雷撃を喰らって仰け反る

サイト

「了解だ！」

「おい新入り……」

「いいか、左右同時攻撃だ……やれるな？」

「つて、ちゃんと聞ってるのか？」

「新入り！！（叫び）」

パロット

「はあはあはあ！（がたがたぶるぶる）」

シリカ

「パロットにとって、これがはじめてのクエストになるのです」

リウムの修行を終えてメンバーになった

「……」

「仕方ありません」

「なんとかわたくしたちだけで魔蟲を退けますよ！（倒す必要はあ

りません！）」

サイト

「ちっ、役立たずが！！（怒）」

「おい新入り！」

「恐怖に震え上がっているのは構わねえ」

「だが、オレたちの邪魔だけはするんじゃないぞ！」

「どりゃあああー！！！！ 巨大魔蟲に突っ込む！」

パロット

「あっ……（汗）」

シリカ

「パロットクリソベルル……いいですか？」

「あなただけでも」

「逃げなさい（たっ！）」 巨大魔蟲に突っ込む！

パロット

「シリカ……さん……」 呆然

4コマ

巨大魔蟲

『ガギャー……！！（シャキンシャキン）』

シリカ

「うおおお……！！」 飛び上がって精霊力を高める

「真・無限斬……八式！！（えいやあ……！！）」 無数の斬撃が巨大魔蟲に襲いかかる

サイト

「おらおら、上ばかりに気を取られていると」

「下の防御がおろそかになるぜ！」

「おりゃああああっ、岩山砕き……！！」 戦斧を巨大魔蟲の顎へと振り上げる

巨大魔蟲

『ウオオオオ……ーン！』 悲鳴？

シリカ

「よしっ！」

「このまま一気に……って、えっ！？（びっくり）」

パロット

「うおおおおおー！ー！ー！！」  
巨大魔蟲めがけて突っ込んでくる

サイト

「てめえ！」

「邪魔だ、すっこんでろ！！（激怒）」

巨大魔蟲

『ゲフツ！ー！！』 パロットに向けて、緑色の液体を放つ

パロット

「あ．．．」

サイト

「やばっ！ー！（大汗）」

シリカ

「ぱ、パロットー！ー！ー！ー！！（叫び）」  
パロットを庇うため走り出す

パロット

「わああああー！ー！ー！ー！！（悲鳴）」

そして、現在のエリアGにて．．．

シリカ 現在の盲目の精霊騎士（ユークナイトNo.3）

「ごうして、わたくしとパロットくんの中に」  
なぜか紙芝居を読んでいる

「斬っても切れない愛が芽生えるのですた」

「めでたし、めでたし」

フローラ(さくら)

「うつつ……(涙)」

「感動の超大作でしたね〜」(うるうる)」

リウム この時代のリウム

「パロツト、ちょ〜へたれ……(やれやれ)」

パロツト

「ほつとけー！(怒)」

「つていうか、シリカさん！」

「いったいなにをやってるんですかー！(叫び)」

シリカ

「なにつて……わたくしとパロツトくんの愛の記録を……」

パロツト

「なにが愛ですかああー！(涙)」

シリカ

「第2弾につづく……(ぼそっ)」

パロツト

「つづかねえー！(うがー！)」

効果音「ずがー！」

コメント

シリカは巨大魔蟲の劇毒で盲目となりました

## 第21話 ポルーサイト

4コマ劇場 アイオライト― 362・・・2010/08/06  
シリーズ3

タイトル「ポルーサイト」

1コマ

ルルルクオーツ王都、冒険者ギルド『ユークレース』のアジトにて  
・

ポルーサイト ユークナイトNo.8

「ふう〜・・・(やっと着いた)」

「いま帰ったぞ〜」 単任務から

シトリン 事務の少年?

「あっ、サイトさん」

「お帰りなさい」

「任務の方はどうでしたか?」

サイト

「つていうか、要人の護衛なんて持つてくるなよな」

「そんなの騎士団にでも任せればいいだろ・・・(ぶつぶつぶつぶ)」

シトリン

「何言ってるんですか?」

「要人の護衛を任されるなんて」

「ユークレースが信頼されている証拠です!」

「冒険者ギルドとして、鼻高々じゃないですか」

サイト

「いや・・・」

「オレはもっとこう冒険者らしいクエストがいいな」

「ユーク雷斯結成当時の・・・ほら、未調査のエリア探索　　み  
たいな？」

シトリン

「あゝ、それなら一日遅かったみたいですね」

サイト

「ん？」

2コマ

シトリン

「昨日、冒険者管理組合から」

「レベル1の冒険者パーティが王室からの依頼でエリアGの探索を  
行うので」

「ユーク雷斯からジェムシリカさんに同行してほしいとの連絡が  
あつたんですよ」

サイト

「ちよっ！」

「なんだそれはー！ー！！（汗）」

「レベル1の冒険者パーティがエリアG・・・っていうより外に出  
るなんて」

「言い方がえると、ゆるやかな自殺じゃねえか！！（大汗）」

「しかも、王室からの依頼だなんて・・・（どきどきどき）」

「よくもまあ、リユーコが許したな〜」　　冒険者管理組合

受付のリユーコガーネット

シトリン

「いえ、それがですね〜・・・（パラパラ）」  
ク中〜

資料をチエツ

「その冒険者パーティのメンバーに」

「彼がいるみたいなんですよ〜」

サイト

「彼・・・って、まさか！」

シトリン

「はい・・・」

「元ユークナイトNo.13、パロットクリソベルルさんです」

サイト

「・・・（むっ！）」

「あのヤロ〜か！（怒）」

3コマ

シトリン

「行方不明だったパロットさんは」

「1ヶ月前、ふらりとルチルクオーツに戻ってきて」

「今期の冒険者検定を受けていますね〜（パラパラ）」  
資料  
「その後、同じく今期合格の初心者戦士とパーティを組んだよう  
です」

サイト

「なるほど・・・」

「リユーコも、ヤツがいるから外に出る許可を出したのか〜」

「・・・」

「それにしても、レベル1のパーティがエリアGの探索だなんて」  
「かなり無理があるんじゃない？(汗)」

シトリン

「だから、シリカさんに同行の依頼がきたんでしょっかね」

サイト

「いや……」

「たとえシリカが一緒だとしても」

「未知エリアの探索は何があるかわかりやしねえ」

「……(うん)」

「なあ、シトリン」

「ナンバーズが出向かないといけないような、緊急の依頼は入っていないよな？」

シトリン

「そうですね……」

「いくつか、あるにはあるんですが」

「No.8のサイトさんでは、手に負えないクエストばかりです」

サイト

「ちっ……(汗)」

「納得いかねえが、今回はラッキーだったってことで……」

「おい、シトリン」

「オレは、これから エリアGに向っ」

シトリン

「え、サイトさんが行っても」

「やっぱり、ゆるやかな自殺なだけですよ……(汗)」

サイト

「つて、うるせえーーーーー！（涙）」

効果音「ずががーーーーーん！！」

4コマ

シトリン

「でもまあ、王室に貸しを作っておくのもいいでしょう」

「では、ポルーサイトさん・・・」

「ユークナイトNo.1のシトリンが命じます」  
えっ！？（ど

びっくり）

「ジエムシリカさんと合流し」

「エリアGの探索クエストを完了させてください」

サイト

「りょ〜かい」

「ついでに、パロットのヤロ〜をぶん殴ってやる・・・（ぼそっ）」

シトリン

「サイトさん」

「パロットさんがいなくなったとき」

「そうとう落ち込んでいましたもんね〜（くすっ）」

サイト

「ちがっ！！（大汗）」

シトリン

「あ、そうだ」

「シリカさんも言っているとは思いますが」

「パロットさんに、ユークレースへ戻るように伝えてください」

サイト

「え〜っ・・・(汗)」

「あんな逃げ出したヤツを、またユークレースに入れるのか〜？  
大汗)」

シトリン

「また、心にも無いことを言っちゃって〜)(ぷぷぷっ)」

サイト

「うぐっ！！(大汗)」

シトリン

「読者の皆さん、知っていますか〜) 何を！！(笑)

「サイトさんって、パロットさんが姿を消してから」

「少なくとも二年間は、毎日愚痴を言ってたんですよ〜」

サイト

「なっ！！！」

シトリン

「どうでもいいと考えているのなら」

「姿を消しても無視すればいいだけです」

「それなのにサイトさんは、毎日毎日・・・(笑)」

「あっ、そういえば〜」

「あの頃のサイトさん、しょっちゅう休暇を取っていましたよね〜」

「やっぱりアレですか？」

「休みを取って、行方不明だったパロットさんを捜しに・・・(ぼそっ)」

サイト

「ちげえー……よ!!」(激怒)

説明文「いや、シトリンの予想は当たっていますよ」(笑)

コメント

シトリンは、ユークナイトの中で一番強いです

## 第22話 これも修行です

4コマ劇場 アイオライト―370・・・2010/08/25  
シリーズ3

タイトル「これも修行です」

1コマ

エリアG、ラルドの屋敷にて・・・

スファレライト

「し、師匠（汗）」 　なぜかラルドに弟子入りしました

「なにもするな・・・とは」

「いったいどういうことなんですか？（大汗）」

ラルド　　このシリーズのラスボス？

「うむ・・・」

「この聖界でもレア的な職業」

「へっぽこ勇者を目指すのであれば・・・」

スファレ

「そんなの目指したくありません（ぼそっ）」

ラルド

「め・ざ・す・のであればー！（ぎゅーっ）」　　スファレ  
の頭を鷲掴み

スファレ

「痛い、痛い、痛い！！（涙）」

アクアマリン 未来のアクア

「あ、あははっ……（苦笑）」

2コマ

ラルド

「基本、戦うな……」

「なにもせず、適当に相手の攻撃をかわしながら 最後には勝て

!!」

スファレ

「……」

「意味がわかりません（大汗）」（戦わずに勝て？）

ラルド

「まあ、実際に体験してみたほうが早いだろう」

「アクアよ……」

「その辺から魔物を一匹捕まえてこい」

アクア

「は、はい？（汗）」

スファレ

「あ、アクアさま……（涙）」（助け……）

アクア

「……（大汗）」

「なるべく弱そうな魔物を連れてきますね……（苦笑）」

スファレ

「アクアさま……!!（そんな……!!）」

3コマ

数分後……

スファレ

「……………」  
何かを見上げている

ラルド

「ほお、これは」

アクア

「すみませんスファレさん……」

「こんなのしか、いませんでした（あははっ）」

スファレ

「つて、ええええええ……………!!」（どびっくり）

竹内さん（飛竜）  
広げた翼が20メートルほど

『ぎゃあああああつ!!』  
奇声

効果音「ずがが……………ん!!」

スファレ

「ちよっ!?(汗)」

「じ、自慢じゃないですが」

「わたし、レベル1ですよ」

「あんなのと戦えるはずない……」

ラルド

「戦う必要はない……」

「勝て!! (叫び)」

スファレ

「だから、意味わかんないって!?(涙)」

4コマ

ラルド

「では、最初の修行を開始する・・・」

「スファレ、こいつを頭の上に乗せる」

スファレ

「・・・?」

「なんですかこれ?(大汗)」 お肉?

アクア

「ああ」

「ボク、それ知っていますよ」

「マンガ肉です」

スファレ

「はあ?(汗)」

「それを、どうして頭の上なんかに・・・?」

ラルド

「もちろん、エサだ!!(ぎゅっ)」 スファレの頭にマンガ

肉を縛り付ける(紐で・・・)

スファレ

「え・・・さ?(きよろっ)」 不意に空を見上げる

「って、ぎゃああああー!」(泣き叫び)」

竹内さん（飛竜）

『わぎゃー！ー！ー！ー！ー！ー！』

スファレめがけて急降下

効果音「ひゅー！ー！ー！ー！つ、ぎゅわん、がしっ」  
スファレの身体をがっちり掴む

スファレ

「ひゃうっ！！（涙）」

「た、たすけー！ー！ー！ー！」  
声が遠のいていく（笑）

竹内さん（飛竜）

『ぎゃわ〜〜（ばさばさ）』  
スファレを捕まえて飛び去

つていく

訳（今日はごちそうだ〜〜）

アクア

「……………（どきどきどき）」

ラルド

「しっかり、がんばれよ〜〜（叫び）」

説明文「ラルドの修行は意味不明に厳しいです（笑）」

コメント

スファレ、死ぬなー！ー！ー！ー！ー！ー！（爆）

## 第23話 いつのまにか召喚術士？

4コマ劇場 アイオライト― 371・・・2010/09/02  
シリーズ3

タイトル「いつのまにか召喚術士？」

1コマ

エリアGにて・・・

ポルーサイト

「はあ、はあ、はあ・・・(汗)」 魔物から逃げてきた

「さすがは未探索地区のエリアG(大汗)」

「シャレにならない敵が多いぜ・・・(どきどきどき)」

奇妙な魔物

『ぎゃーーーーーーーーーす!!(叫び)』

サイト

「それにしても・・・」

「アイツに会うのも久しぶりだな」

「ちゃんと冒険者を辞めずにいたとは・・・驚きだ(汗)」

「この五年間何をやってたのか色々と聞きたいところだが」

「まずは、ぶん殴るのが先だな・・・(にやり)」

突然の登場

竹内さん(飛竜)

『わぎゃーーーーーーーーー!!』

???

「だ、誰か——っ！(涙)」 上空の方から声が聞こえる

サイト

「ぬ？」 空を見上げる

2コマ

スファレライト

「ちょ——っ、助け——！！(大泣き)」

竹内さん(飛竜)

『がが——！！』

サイト

「………(汗)」

「なんだか知らんが、楽しそうな状況に陥っているな……(大汗)」

スファレ

「うにゃ——！！(涙)」

サイト

「つと、まあ見過ごすわけにもいかないか……」 拳大の石を拾う

「うおおおお——っ！」 なにやら妖しげな力を高める

「ふん——！(ぶうっうん——！)」 石を投げる

3コマ

スファレ

「ころさ・・・殺されるーーーーっ!!!(泣)」  
「って、えっ!? (大汗)」 何かに気づく

効果音「・・・・・・・・、ひゅ・・・・・・・・ーーーーっ!」

竹内さん(飛竜)

『ふにゅ?(なんだ?)』

『うげっ!!!(スコーン)』 石が頭に当たる

『ぎゃわん!!!(痛っ!)』 おもわずスファレを放す

スファレ

「・・・・え?(大汗)」 上空1000メートル以上?

「・・・・・・・・」

「って、ぎゃああああーーーー!!!(ひゅっっっーーーー!!

!)(」 落下開始

サイト

「あ・・・・やばっ!!!(大汗)」

スファレ

「喰われなかったけど、落下死だあああーーーーっ!!!(泣)

「た・・・た、・・・たっ!(泣)」

「助けて、ファリスさまっ!!!(叫び)」

突然の登場

サイト

「な、なんだーーーー!!?(どびっくり!!)(」

4コマ

金のファロルさん 巨大な信楽焼きのたぬき

『……………(ういゝゝゝん)』 神々しい光を放っている

銀のファロルさん 巨大な信楽焼きのたぬき

『……………(ういゝゝゝん)』 神秘の力でスファレの

身体を浮かす

スファレ

「うづうつ……………(涙)」 恐怖に瞳を閉じている

「え……………」 浮遊感を感じて瞳を開く

「ふぁ、ファリスさまあゝゝゝ!!! (た、助かった!!!)」

サイト

「つて、召喚術士!!! (汗)」

「しかも、たぬき召喚限定!?(叫び)」

「たぬき召喚士!!! (大汗)」

スファレ

「だれがたぬき召喚士か————!!! (むき————!!!)」

「それに、これはたぬきじゃなく」

「精霊神ファリスさまなの————!!! (むかつ!!!)」

サイト

「えっ、そのなか!?(どびっくり)」

突然の登場

ラルド

「いやいやいや……………」

「そいつはファリスじゃなくファロルだぞ（母親の方だ・・・）」

効果音「ずががーーーーーん!!!」

説明文「どうやらパロットよりスファレの方が精霊神のご加護があるようで（苦笑）」

#### コメント

今回は「超獣神グランゾル 鳳凰編」が2話ほど更新されます

## 第24話 知名度はそれぞれで・・・

4コマ劇場 アイオライト―378・・・2010/09/27

シリーズ3

タイトル「知名度はそれぞれで・・・」

1コマ

エリアGにて・・・

ポルーサイト

「災難だったな」

「ためき召喚士・・・(ぼそっ)」

スファレライト

「誰がためきかー！ー！(うにゃー！ー！)」

「わたしには、スファレライトって」

「ちゃんとした名前があるんだから！ー！(叫び)」

サイト

「あゝ、うるさいうるさい」 耳を塞ぐ

「じゃあ、まあ」

「スファレってことで・・・」

スファレ

「なんだかこの人」

「少しあいつに(雰囲気)が(似ているような・・・(どきどきどきどき))」

2コマ

サイト

「見たところ、冒険者　それも初心者のような感じが……」

「どういうわけであんな面白い状況になったんだ？」

「ビデオにでも撮っておけば」

「衝撃映像としてテレビ局に高値で売れるぞ（大汗）」　こら

こら（笑）

スファレ

「あゝ……（汗）」

「じつは変なのに捕まって」

「修行という名目で……無理矢理に」（苦笑）」

サイト

「なんだそれ（汗）」

「ヒドいな（大汗）」

「無事だったから良かったものの……」

スファレ

「あつ、助けていただいて」

「本当にありがとうございます（ぺこり）」

「わたし、今期の検定で冒険者になったスファレライトといいます

（あらためまして）」

サイト

「今期合格者って……マジかよ（大汗）」（レベル、いくつなんだ？）

「まあ、理由はそれぞれだしな（ときどきどき）」

「で、オレはポルーサイトっていうケチな冒険者さ（えっへん）」

「

スファレ

「ポルー・・・サイトさん? (どこかで聞いたことがあるな)」  
「え、サイトさんはお強いんですね」(にこっ)

3コマ

サイト

「・・・(汗)」

「あ、オレの名はポルーサイト」  
「聞いたこと・・・ない? (大汗)」

スファレ

「は、はい? (汗)」

サイト

「そ、そっか (かああああっ!)」  
「聞いたことないか」(汗)  
「当然、知っていると思っ  
ていた」

156

スファレ

「???? (はてな?)」

サイト

「これでも、ユークレースのメンバーで」  
「ナンバー8の称号をもらっている・・・(照れ)」

スファレ

「って、ナンバーズ!？」  
「サイトさんって、ユークナイトなんですかー!ー!ー! (どび  
っくり)」

サイト

「一応・・・な? (苦笑)」

4コマ

スファレ

「凄い!」

「ユークレースのメンバーってだけでも凄いのに」

「ユークナイト?」

「っていうか、ジェムシリカさまの他にもちゃんといたんだ・・・」

ユークナイト (大汗)

サイト

「いや、まあ (汗)」

「確かに、シリカは表にも露出が多いから有名だけど」

「ユークナイトは他にも十一人いるぞ・・・ (オレを含めて)」

現在はナンバー12まで

スファレ

「あ・・・ (そうだ)」

「ってことは」

「サイトさんは、パロットの元同僚? (汗)」

サイト

「ば、パロット!」

「おまつ! (がしっ)」      スファレの両肩を掴む

「パロットクリソベルルの知り合いか!? (叫び)」      前後に

揺する

スファレ

「あうあうあうっ! (大汗)」      前後に揺すられている

「ええつと！」

「この前、ぱ、パーティを組んで……（うぐっ）（気持ち悪  
っ！）」

サイト

「ま、まさかあのパロットが」

「シリカ以外とパーティを組むなんて……」

「こいつはびっくりだぜ（大汗）」

スファレ

「いや（汗）」

「シリカさまとパーティを組むのが嫌で」

「わたしと組んだみたいなもの……（大汗）」

サイト

「な、なんだそれ（大汗）」

コメント

本当になんだそれ（爆）

## 第25話 スファレとサイト

4コマ劇場 アイオライト― 379・・・2010/09/28  
シリーズ3

タイトル「スファレとサイト」

1コマ

エリアGにて・・・

ポルーサイト

「なるほどな・・・」

「パロットのヤツ、このためき召喚士とパーティを組んだのか（じろじろ）」

スファレライト

「ためきじゃねえええーし、召喚士でもないって！（叫び）」

「わたしはレベル1だけど戦士なのっ！！」

サイト

「レベル1の 戦士？（大汗）」

「おまえ・・・、何も考えずに職業選んだのか？」

「冒険者としてまず選ぶ職業といえは」

「特殊技能の使える回復系や法術使いとかだろ？」

「何も能力を持たない戦士、しかもレベル1だなんて」

「ほんと、なに考えて選ん・・・」

スファレ

「つて！」

「その話題を蒸し返すなーーーーー！！！！（うにゃーーーーー！！！！）」

「!」

2コマ

サイト

「なんにしても」

「おまえと一緒にいれば」

「いずれはパロットと会えるってことだな」

「よし」

「しばらくの間、オレがおまえを護ってやる」

スファレ

「ええ〜(どうしようかな?)」

「まあ、わたし一人じゃ、このエリアを探索できそうにないし」

「腐ってもユークナイトはユークナイトだし……(うん)」

サイト

「腐っ……(汗)」

「ひどい言われ様だな……(大汗)」

スファレ

「じゃあ、サイトさん」

「みんなと合流できるまで」

「よろしく願います(ペー)」

サイト

「よっしゃ!」

「オレに任せとけ!」

3コマ

突然の登場

ラルド

「それなら、修行内容のレベルも」

「大幅に見直さないといけないな!! (えっへん!)」

スファレ

「出た————!! (きゃ————!!)」

サイト

「つて、こいつ……どこから湧いて出やがった!! (大汗)」

ラルド

「いや……」

「さきほどから、すぐそばにいたぞ (ぼそつ) (前々回のラ  
ストに

スファレ

「そ、そうなんですか (大汗)」

ラルド

「そんなことより……」

「スファレよ」

「よくぞ竹内さん (飛竜) を倒した!!」

スファレ

「……」

「……」

「……」

「……はあ!? (大汗)」

4コマ

サイト

「竹内さんってあれか？」

「スファレを捕まえていた飛竜？」

スファレ

「ちよっ、待ってください!!!」

「あれはわたしが倒したわけじゃなく」

「ここにいるサイトさんが・・・」

ラルド

「いいや」

「あれはへっぽこ勇者の特殊能力の一つ」

「『なにもせず戦いに勝利!』だ!!! (叫び)」「へっぽこメータ  
ーも跳ね上がってるし」

スファレ

「だから、なんなんですかそれ————!!! (うにゃ————  
!!!)」

サイト

「えっ! (汗)」

「へっぽこ・・・へっぽこ勇者!?(どびっくり)」「

「す、スファレ!」

「おまえ、へっぽこ勇者だったのか!!! (すげえ〜!!!)」「(レア  
職業だぞ!!!)」

スファレ

「ちが—————う!!! (涙)」

ラルド

「いや、こいつは間違いなくへっぽこだー!!」

スファレ

「だ〜か〜ら〜!! (むきーーー!!)」

コメント

へっぽこ勇者は、ちゃんとした冒険者にとって憧れの職業の一つです

今後、この作品の更新ペースもゆるやかになります(笑)

## 第26話 場違いな遺物？

4コマ劇場 アイオライト― 384・・・2010/10/21  
シリーズ3

タイトル「場違いな遺物？」

1コマ

ルルルクオーツ、エリアGにて・・・

ジェムシリカ

「……………(きよるきよる)」 いちおう盲目です(笑)

「急に魔物の気配がなくなりましたね(大汗)」 辺りを探索

中

フローライト

「おそらく」

「リウムちゃんの内なる気配に脅えて身を隠しているのですしょう」

「魔物は、そういったことに敏感ですから」

パロットクリソベリル

「さすがはお師匠様(汗)」

「凶悪さならどんな魔物にも負けていない……………(ぼそっ)」

リウム 20歳ぐらいの女性姿

「パロット(にこっ)」

「しばらく会わないうちに言うようになったわね」

「もう一度、修行とか受けてみる？(うふふっ)」

パロット

「す、すみません、ごめんなさい!!」(涙) 「必死です(爆)

フローラ

「あははっ……(汗)」

「よほど修行が恐かったんでしょうね」(苦笑)

シリカ

「こんな素直なパロツトくん、はじめてです……(むっ)  
ちよっぴり嫉妬

2コマ

リウム

「とにかく、そのはぐれたスファレって娘を捜しながら」

「このエリアGを探索しているわけね」

パロツト

「そうなんだ……(汗)」

「大したレベルもないくせに外界に出たがって」

「それで迷っていたら世話がない(まったく困ったヤツだ)」

リウム

「っていうか……」

「そんな娘なら、あなたが護ってあげないといけないでしょ」

パロツト

「う……ぐ(大汗)」

フローラ

「おお〜(汗)」

「なんか、リウムちゃんがしっかりして見える」

リウム

「あははっ（苦笑）」

「そりゃ〜5千年も生きていれば」

「しつかりもしますよ〜」（さくらお姉ちゃん、嫌だ〜）  
「」

シリカ

「え？（汗）」

「ご、5千年・・・（大汗）」

3コマ

リウム

「それじゃあ、迷子は途中で捜すことにして〜」

「探索依頼の方は、どれくらい進んでいるの？」

フローラ

「え、ええ〜つと・・・（汗）」

パロット

「あ〜・・・（汗）」

「魔物が強すぎて、それどころじゃないってのが本音かな」（苦笑）

「

「しかも、エリアGへ入る前に、スファレが行方不明になっちゃっ  
てるし・・・（大汗）」

シリカ

「未探索地区の調査は」

「時間をかけて、地道に歩き回るしかありません」

「だからこそ、目標レベルが50以上に設定されているわけですか

ら・・・」

パロット

「うん・・・」

「せめて、エリアGの大まかな地形だけでもわかっていたら」

「探索もかなり楽になるんだがな」（目印になる山や河の位置とか・  
・・）」

リウム

「大まかな地形か・・・」 考え中

「それなら、なんとかなるかもしれないよ」

パロット

「ほ、本当ですか！？（どびっくり）」

4コマ

リウム

「わざわざ歩き回って調べなくても」

「いまある資料を使えばいいじゃない」 虚空から厚め板のよ

うな何かを取り出す

パロット

「えっ！」

「お師匠様、エリアGの探索をしたことがあるんですか！？（大汗）」

リウム

「いや、わたしが探索したわけじゃなく・・・」 横から半分  
に開く

「ネットを使えば簡単に調べられるじゃない」 電源スイッチ

を入れる

パロット

「・・・ネット? (大汗)」

理解不能

フローラ

「そ、それって!! (ノートPC!?)」

リウム

「・・・・・・・・ (え〜つと)」 検索中

「Googleマップの航空写真でいいよね?」

ノートPC

の画面に映った航空写真を見せる

パロット

「なああああーーーーー!! (どびっくり)」

当然、初

めて見る

シリカ

「す、す〜っ!」

「こんなに詳細な地図、見たことがない!!」

この人盲目で

す (爆)

パロット

「お師匠!」

「それ・・・えええええー!?!? (大汗)」

軽くパニ

ツク

リウム

「あゝ、YAHOO! 地図の方がよかったです? (どっちでも一緒だよ〜)」

パロット

「いやいやいやー！」

「そうじゃなくってーーーーー!! (叫び)」

フローラ

「リウムちゃん、リウムちゃん・・・(汗)」

「この時代、インターネット禁止 (ぼそっ)」

繋がるのか

? (爆)

リウム

「ええ~~~~~!」

「そんな~~~~~ (便利なのに)」

効果音「ずががーーーーーん!!」

説明文「インターネットは便利ですよね」(笑)」

コメント

場違いの遺物とはオーパーツのことです。

水晶ドクロとか

## 第27話 スファレ、レベルアップ!?

4コマ劇場 アイオライト―385・・・2010/10/22  
シリーズ3

タイトル「スファレ、レベルアップ!?!」

### 1コマ

エリアG、とある地下洞窟の入口にて・・・

スファレライト

「・・・え〜っと(大汗)」

ポルーサイト

「ちょっと待て・・・(おいこら)」

「おまえは、はぐれてしまったパロットたちを捜しているんだったよな〜?」

「それが、どうして洞窟探検ってことになっているんだ(はあ〜・・・)」

スファレ

「わたしに聞かないでよ〜〜! (涙)」  
ラルドの命令です  
(笑)

サイト

「聞くなって・・・(汗)」

「オレはさっさとパロットやシリカと合流してエリアGの探索を始めないといけないんだ」

「だから、おまえが洞窟に潜るっていつのなら」

「ここでお別れを・・・」

スファレ

「お願い！（泣）」

「見捨てないでー！！（一人にしないでー！！）（爆）」  
必死です（

サイト

「あ、ああ……（大汗）」（まいったな）

効果音「ずががー……ー……ー……ん！！」

2コマ

不思議のダン……洞窟、地下3階にて……

スファレ

「え〜っと、え〜〜と……（汗）」  
ノートに何かを書き込んでいる

サイト

「おお〜い、スファレ〜」

「ちゃんとマツピングしているか〜？」  
ダンジョン探索では基本です

スファレ

「いま話しかけないでー！！（叫び）」

サイト

「おおー！（大汗）」

スファレ

「ええ〜つと・・・」

「この空間からは通路が三方向に伸びていて・・・」

「ああ〜！（イライラ）」

「こんな作業、戦士がやることじゃないよお〜！！」（涙）  
細かい作業が苦手？

サイト

「・・・じゃあ」

「オレがマッピングするから」

「おまえが代わりに魔物と戦うか？（汗）」（どっちでもいいぞ）

スファレ

「がんばって地図製作に取り組みたいとおもいます（ぴしっ！）」

敬礼する（笑）

サイト

「あ〜、がんばれ・・・（汗）」

3コマ

不思議のダンジョン、地下7階にて・・・

スファレ

「お、おおおおおっ！！」（叫び）  
冒険者カードを見て  
いる

「レベルが・・・」

「わたしのレベルが11になってるーーーーー！！」（どびっくじり）  
（いつの間に！）

サイト

「まあ、あんだけ魔物と戦えば」

「レベルが上がらないほうがおかしいだろう(笑)」

「そろそろこのフロアなら」

「オレが手助けしなくても、一人で戦えるんじゃないか?」

スファレ

「じゃあ、サイトにはマッピングをお願いしようかな(るん)

」

サイト

「あははっ(苦笑)」

「調子に乗ってるんじゃないか(よほど嬉しいんだろうな)

」(うんうん)

スファレ

「えへへ(にこにこ)」

サイト

「おっ」 何かを発見

「上に向う階段だ!」

「なあスファレ・・・(提案なんだが)」

「一度、外に出て手持ちのアイテムとかを整理して」

「もう一度最初から潜ってみるのもいいんじゃないか?」

スファレ

「そう・・・だね(うん)」

「最初からでも、この階までなら楽勝で進めるだろうし」

「それもいいかも」

サイト

「それじゃあ」

「地上に向けてレッシュコー」

スファレ

「おお~~~~~」

4コマ

エリアG、不思議のダンジョン入口にて・・・

サイト

「あ~~~~(汗)」

「スファレ・・・さん?(どきどきどき)」

スファレ

「・・・・・・・・」 四つんばいになって落ち込んでいる

サイト

「まあ、なんだ(汗)」

「そんなに気落ちしなくても・・・(大汗)」

スファレ

「・・・いま」

「話しかけないで・・・(ずしーん)」 かなりショックを受けています

サイト

「あ、ああ・・・(どきどきどき)」

突然の登場

ラルド

「というか・・・」

「不思議のダンジョン（チュンソフト）では」

「ダンジョンの外に出ると、稼いだ経験値がなくなり」

「レベル1に戻されるのは、もはや常識だろう（ぼそっ）」

スファレ

「そんな常識、知るか—————！！（大泣き）」（うぎゃー—————！！）」

効果音「ずがが—————ん！！」

ラルド

「ちなみに・・・」

「ダンジョンへ入るたびに構造も変わるから」

「マッピングしても意味がないぞ（なんか、ノートに色々書いてあるが・・・）」

スファレ

「わたしの労力を返しやがれ—————！！（がああああああ！！）」

サイト

「あゝ・・・（大汗）」（この師匠、ひでえ）」

説明文「スファレのレベルは1に戻り、手書きの地図も無駄になりました（笑）」

コメント

最近の不思議のダンジョンは、レベル1に戻る方がオプシジョン設

定になっていゝるやうです。

## 第28話 ダンジョンクリエイター

4コマ劇場 アイオライト―387・・・2010/10/23

シリーズ3

タイトル「ダンジョンクリエイター」

1コマ

ルチルクオーツ、エリアGにて・・・

パロットクリソベリル

「・・・ん？」 何かに気づく

フローライト

「・・・?」

「パロットさん、どうかしましたか？」

パロット

「いや」

「なんだか・・・誰かが助けを求めているような・・・気が(汗)」

フローラ

「は、はあ？(汗)」

効果音「うごごごー！ー！ー！つ、わぎゃー！ー！ー！ー！」  
物の叫び声  
魔

?????

「わわわっ！(汗)」

「たたた、助けー！ー！ー！ー！(泣き叫び)」

パロツト

「あゝ、やっぱり(汗)」

予感的中

フローラ

「えっ、あれっ!?(汗)」

「この声って、スファレさんじゃないですよね!」

「どうして、未探索のエリアGにわたしたち以外の人が!!(大汗)」  
「基本的に立ち入り禁止です」

ジェムシリカ

「さすがわたしのパロツトくん」

「勇者リーダーは、まだまだ健在ね (にこっ)」  
困った人  
には敏感です

パロツト

「そんなリーダー、ついていません(大汗)」  
いや、標準装  
備しています(笑)

効果音「ずががーーーーーん!!」

2コマ

坂本さん まんまテイラノ(爆)

『あんぎゃーーーーー!!(怒)』

???? 見た目13才ぐらいの少年?

「ひやはっ!(ぜえぜえぜえ!)」  
大きなリュックを背負っ  
ている

「誰か、助けてーーーーー!!(涙)」

「っつて、えっ!?(大汗)」  
目の前の人影に気づく

パロット

「……………(すーっ)」

天に向けて右手を上げる

「え、ライトニング・バースト……(ぼそっ)」

右手を

振り下ろす

効果音「ずががっ！ どつがあーっーっーん！！」

落雷

が起きて大爆発

坂本さん

『わんぎゃあああーっーっー……(ひゅ……)』

明後日の方向へぶっ飛んでいく

???

「つて、ええええええーっーっー！！(どびっくり)」(うそー  
ー！！！)

フローラ

「……………(汗)」

「人を助けるためには容赦ありませんね……(大汗)」

シリカ

「パロットくん」

「やはりあなたは勇者であるべきです！！」

パロット

「あ、その話はまた後で……(大汗)」

この人、ヒー

ラーでレベル1 (笑)

説明文「もちろん、ヒーラーとして戦っていないので経験地は入り

ません(爆)」

3コマ

ロードライト

「た、助けていただいてありがとうございます(ペーリ)」「ボク、ロードライトといいます」

フローラ

「え〜っと、行商・・・さん?(同い年くらいだよね?)」「でも、行商さんがどうしてこんなところに・・・(汗)」

ロードライト

「あ、はい」

「じつは、護衛の冒険者とはぐれてしまいました(汗)」  
「後は皆さんのご存知の通りです・・・(苦笑)」  
追っかけられて逃げてきた

魔物に

パロット

「それにしても、盛大に逃げてきたもんだな〜」  
「気づいてないかもしれないが」  
「ここ・・・エリアGだぞ(ぼそっ)」

ロードライト

「え、エリア G(ぞぞ〜っ)」  
「それって、未探索地区の・・・(がたがたぶるぶる)」  
「契約した冒険者もないし・・・」  
「ど、どうしよ〜(涙)」「(確実に死んじゃうよ〜)」

シリカ

「大丈夫ですよ(にっこり)」

「このお兄さんが困った人を放っておくはずありませんから」

パロット

「あゝ……(汗)」

「まあ、そんなわけだから心配するな……(照れ)」  
そっ  
ぽを向く

ロードライト

「え……？(本当ですか!?)」

4コマ

パロット

「ところで、ロードライト……」

ロードライト

「は、はい(なんですか?)」

パロット

「おまえ、DC」  
ディーシー

「ダンジョンクリエイターだろ？(行商なんかじゃなく)」

ロードライト

「なあああああああ！?(どびっくり)」(なぜそれを!?)

フローラ

「ダンジョン……クリエイター？(なんですかそれ?)」

シリカ

「ダンジョンクリエイターとは」

「普通、表に出てくることはありませんが」

「冒険者にとっては無くてはならない存在なのです」

パロット

「冒険者つてのは、年々増えているわけだが」

「それに比べて、ダンジョンとかの数は限られている」

「そんな状態で冒険者なんかクエストやイベントとかを解いてしまつと」

「そのダンジョンは意味のないものとなつてしまつて　　宝箱も空っぽです」

「そこで出番となるのがDC　　ダンジョンクリエイターと呼ばれる存在……」

「DCとは、冒険者に気づかれぬよう」

「クエストやイベントを再設置するものたちのことだよ」

シリカ

「上位職業のDM　　ダンジョンマスターになると」

「魔王やラスボスの居城のイベントなんかを任されることがあるのよ」

ロードライト

「そ、そんなことまで知っているなんて……（大汗）」　　最重要機密です　　最

「お二人とも、いったい何者なんですか？（どきどきどき）」

説明文「目標レベルの低いダンジョンとかのクエストやイベントはDCが創っています」

コメント

DCやDMの存在は一握りの冒険者しか知りません

## 第29話 ヒーラーでレベル1

4コマ劇場 アイオライト―388・・・2010/10/25  
シリーズ3

タイトル「ヒーラーでレベル1」

1コマ

ルチルクオーツ、エリアGにて・・・

ロードライト

「あらためまして・・・(え〜)」 13歳ぐらいの少年？

「ダンジョン管理協同組合、ルチルクオーツ東三番街支部所属DC」

「なんだそれ？」(笑)

「ロードライト・ガネットといいます(ぺこり)」

「表の職業は商人で、この前レベル18になりました」

パロットクリソベリル

「レベル18・・・」

「その年にしては、なかなかの高レベルだな〜」

ロードライト

「いや〜(苦笑)」

「他のDCや、護衛に雇った冒険者が凄かっただけで」

「ボクのレベルはオマケで上がったようなものでして・・・(大汗)」

「

ジェムシリカ

盲目の精霊騎士

「いいえ・・・」

「たとえそうだとっても」

「あなたはそれだけの冒険に同行してきたわけですから」  
「自身を持ってても良いことですよ（にっこり）」

パロット

「まあ〜そついうことだ」

「あ・・・」

「オレはパロットクリソベリル」

「ヒーラーでレベル1だ（えっへん）」

ロードライト

「ヒーラーで・・・レベル1（大汗）」

「って、えええええー！！！！！！（どびっくり）」（嘘でしょ〜！！）

シリカ

「パロットくん（汗）」

「そこは、威張れるところろっではありませんよ・・・（どきどきどき）」

効果音「ずががー！！！！！！ん！！」

## 2コマ

説明文「自己紹介は無事に終わりました」

ロードライト

「まさかフローライトさまに・・・」この国の代表です

「お二人は、あのユークナイトだったなんて〜（大汗）」（DCの存在を知っているはずだ〜）

「お会いできて光栄です」

パロツト

「あゝ、オレは元ユークナイトだからな」

「今は、単なるいちヒーラーだ（間違えるなよ）」

ロードライト

「単なるヒーラーがエリアGの凶暴な魔物を一撃で倒せるなんて・

・（汗）」

「パロツトさんは、ボクと同じように隠し職業をお持ちのようですね（うんうん）」

シリカ

「パロツトくんは、アウインの勇者でもあるんですよ」

ロードライト

「おお〜〜」（すごい！）

パロツト

「だ〜か〜ら〜〜！」

「何度も言うつようだけどオレはヒーラーなの！」

「ちゃんとヒーラーとして扱え〜！〜！！（うにゃ〜！〜！）」

フローライト

「え〜っと、パロツトさん」

「ひとつ・・・いいですか？（大汗）」

パロツト

「ぬ？」

フローラ

「パロットさんは、自分のことを」

「ヒーラーだ、ヒーラーだと思いますが・・・」

「なんとというか」

「ヒーラーとして活躍しているところ」

「わたし、まったく見たことないんですけど・・・」(大汗)

パロット

「なああああーーーーー！！！」(叫び)

効果音「ずががーーーーー！！！」

フローラ

「どちらかというと」

「元ユークナイトの圧倒的な強さが目立っていて」

「ヒーラーとして、回復系法術なんかを」

「使おうとしたこともないように記憶しているのですが・・・」(汗)

「

「・・・」(じいっ)

「パロットさんって回復系法術、本当に使えるのですか？」(どき

どきどき)」

パロット

「う、ぐっ！」(大汗)

「いいだろう・・・」(ふっ)

「そこまでいうのなら、ヒーラーとしての力・・・」

「見せ付けてやる!!」 懐から二つの女神像を取り出す

ロードライト

「って、なんですかそれーーーーー!?!」(どびっくり)「(ためき

と猫の置物!?)

4コマ

パロット

「はぁ〜・・・ぶつぶつぶつ!!(汗)」「  
文を唱えている

意識を集中して呪

シリカ

「あ・・・ああっ! (びくっ!)」「  
そこ うっ (気持ちいい〜〜)」「

パロット

「どうですか、シリカさん・・・」  
「オレの回復の精霊法は!！」

シリカ

「う、うん・・・」  
「もの凄く・・・楽になったわ」  
「・・・」  
「・・・肩こりが (うつとり)」「

パロット

「見たかー!ー!ー! (えっへん!!)」「

フローラ

「いや・・・」  
「見たか とかじゃなくって (大汗)」「

ロードライト

「・・・」 (ぐきぐきぐき) (肩こりしてて (・・・))

効果音「ばきゅ〜〜〜ん (笑)

コメント

まだレベル1だから、法術とかほとんど使えません (爆)

### 第30話 伝説のへっぽこマスター

4コマ劇場 アイオライト―389・・・2010/10/28  
シリーズ3

タイトル「伝説のへっぽこマスター」

1コマ

エリアG、不思議のダンジョン入口にて・・・

ラルド

「スファレよ!」

「なかなかのへっぽこ具合だったぞ!!」(叫び) 「不思議の  
ダンジョンでの活躍?」(笑)

スファレライト

「何がへっぽこですか・・・」(しくしく)「わたしのレベル  
が・・・」

ポルーサイト

「っていうか」

「そろそろオレ・・・」

「パロットたちを捜しにいてもいいか?」

ラルド

「しかし、へっぽこの中のへっぽこ・・・」

「へっぽこマスターを指すのであれば」

「まだまだ甘いぞ!!」(うんうん)「

スファレ

「だから、そんなの目指す気はありません！」(泣)

サイト

「……………(汗)」

「軽く無視かよ……………(むかつ)」

2コマ

スファレ

「とにかく、こんな妙な修行はもうこりこりです！」(涙)

ラルド

「うむ……………」

「スファレよ、まだまだへっぽこ勇者の凄さを理解していないようだな」

「よし！」

「おまえに、真のへっぽこというのを見せてやるっ！」

スファレ

「へ？(汗)」

「真のへっぽこを……………見せる？(大汗)」

ラルド

「と、いうわけで」

「登場していただきましょう」  
なぜかマイクを持っている

(笑)

「精霊界の冒険者初級職業であるはずのへっぽこを」

「究極まで高めたへっぽこの中のへっぽこ……………」  
普通は早々に転職します

「へっぽこマスター青山七瀬だ……………！」  
勇者部の部

長さん

突然の登場

七瀬

「つて、あ……れ(汗)」(校長先生?)

「ここ、邪神殿じゃないですよね?(大汗)」  
邪神役で『鬼神伝』に出演中

スファレ

「誰ですか――――！！(どびつくり)」

効果音「ずがが――――！！ん！！」

3コマ

サイト

「ほお〜(じい〜っ)」  
七瀬を凝視しています

「かの有名な、へっぽこマスター青山七瀬とは……(汗)」

スファレ

「えっ！」

「サイト、この娘このこと、知ってるの!?(汗)」

サイト

「ああ……」

「全ての世界を創造せし神々……十四創神の御力をも凌駕したと謳われる伝説の勇者」

「それが、へっぽこマスター青山七瀬(大汗)」

スファレ

「か、神様より強いだなんて……(汗)」

「それって本当なの！（大汗）」

サイト

「まあ、五千年前の話だから、本当かどうか眉唾だがな……（ふっ）」

七瀬

「ええ〜っと……（汗）」

「いったい何のことでしょうっ？（どきどきどき）」（五千年前？）

サイト

「というわけで……（すっ〜っ……）」 戦斧を構える

七瀬

「ちよっ！（汗）」

「何ですか、その物騒な獲物は……！（涙）」

サイト

「おまえが伝説のへっぽこだというのなら……」 ジリジリ  
と七瀬に近づく

「その力……拝ませてもらおうかあ……！（うりゃ……）」 戦斧  
を振り下ろす

七瀬

「い、いやああああ……！！（泣）」 身体を縮こ  
ませる

スファレ

「ちよっ、サイト！（どびっくり）」

「ユークナイトであるあなたがそんな本気モードで攻撃したら……！！」

(叫び)「

効果音「すかつ……、どがが……ん!!」

戦斧が地面に突き刺さって大爆発

4コマ

スファレ

「……………(汗)」

「すかつ……?(大汗)」(なにやら奇妙な効果音が……)

サイト

「なん……だと!? (オレの一撃が……)」

七瀬

「あうあうあう……(涙)」 無傷です

「いきなりなにするんですか……(しくしくしく)」(この人、  
怖い……)

スファレ

「えええええ……!! (どびっくり)」

ラルド

「へっぽこ勇者の特殊能力その1」

『敵からの攻撃は一切あたりません!』 へっぽこレベルが上がる  
がれば

スファレ

「なんですかそれ……!! (うぎぎぎ……!!)」

サイト

「そ、そんなバカな・・・(大汗)」

「うおおおー！ー！ー！　　精霊力を高めている

「岩山砕き！ー！(びゅーん！)」　　空振り

「でりやでりやでりや！ー！　　戦斧を振り回す

「旋風激戦舞！ー！(ぶうんぶうんぶうん！)」　　かすりもしま

せん

「はあはあはあ(大汗)」　　もはや最後の手段・・・

「ひっさーっ・・・メガトククラッシャー！ー！ー！(ずどどー

ー！ー！ん！)」

七瀬

「・・・(汗)」　　微動だにしません(笑)

「ええーっど・・・(どきどきどき)」　　もちろん無傷

サイト

「そ、そんな・・・(ずー！ー！ん)」　　ショックを受けて

います

効果音「ひゅー！ー！ー！ー！っ・・・」　　メガトククラッシャ

ーで吹き飛んだ岩塊

「バシッ」　　木の幹に当たって弾かれる

「ごんっ、ビュッ！ー！」　　岩壁に当たって加速！

「どおおおおおー！ー！ー！ー！ー！ー！」　　風などの色々な要

素が加わって超加速！ー！

サイト

「はあはあはあ・・・え？(大汗)」(なにやら後ろから凄まじい

音が・・・)

「わぎやぎやあつ!!!(すごーーん!!)」 岩塊が超スピードで後頭部を直撃!

「ぎゃふっ!!」 まるで人形のように力なく吹っ飛ぶ

「あつ、あが、うう・・・(がくり)」 気絶しました

七瀬

「あ、あの・・・(汗)」(すごい音しましたけど・・・)  
「大丈夫ですか??」(どきどきどき) この人、何もしていません

ラルド

「これぞ、へっぽこ勇者の特殊能力その2!!」  
『何もしないで大勝利!!!』

スファレ

「凄っ!!(大汗)」

「へっぽこ勇者、めっちゃめっちゃ凄っ!!!(どびっくり)」

ラルド

「だろ??」(にこっ)

七瀬

「へっぽこいうな??!!(大泣き)」 へっぽこ度が大幅に上がりました

サイト

「・・・(ひくひくひく)」 死にかけのカエルのよ  
うに・・・(笑)

説明文「ちなみにへっばこ勇者の特殊能力その3は・・・」

「『自身の攻撃も敵には一切あたりません』です」  
意味

無し！（爆）

コメント

七瀬は1回限りのゲストキャラです

### 第31話 時空族の遺産

4コマ劇場 アイオライト―390・・・2010/10/29  
シリーズ3

タイトル「時空族の遺産」

1コマ

不思議のダンジョン、地下99階にて・・・

シンセティック DM・ダンジョンマスター

「わたしの創ったこのダンジョンを」

「よくぞこんな短期間でクリアしてくれました」

「さすがはラルドさまの認めたへっぴょ勇者候補ですね (にこっ  
っ)」

スファレライト

「…………… (涙)」 現在レベル32

「もう、二度と外へ出たくない…………… (ぼそっ)」 地上に出  
ればレベル1に (笑)

ポルーサイト

「スファレ……………」

「……………あきらめる (大汗)」

スファレ

「いや〜だ〜〜〜〜〜!! (涙)」 駄々っ子モード発動

シンセティック

「え〜っ…………… (汗)」

「わたしの話を聞いていただけませんか？」（大汗）

効果音「ずががーーーーーん!!」

## 2コマ

不思議のダンジョンを出て、エリアGにて・・・

スファレ

「あゝあ・・・（涙）」

「レベル32・・・、儂い夢だったな～～～（しくしくしく）」

現在レベル1（笑）

サイト

「あゝ、あははっ・・・（苦笑）」

「そんなことより」

「あのダンジョンをクリアしたご褒美アイテム」

「なんか凄そうじゃないか？」

スファレ

「え〜っと、時空族の遺産・・・だっけ？」

「発動させることによって5分だけ時間を戻すことができるレアアイテム」

「まあ、1日1回の使用制限があるらしいから、それほど使えるとは思えないけど」

サイト

「って、なに言ってやがる！」

「時空系法術の付加されてるアイテムって激レアなんだぞ！（汗）」

「しかも、1日1回とはいえ時間を戻せるだなんて・・・」

「王宮にでも売れば、一生遊んで暮らせるぐらいの金が入るん

「じゃないか？」

「くれぐれも、他人に見せるんじゃないぞ」

「そんなの持つてるなんて知られたら」

「間違いなく犯罪者が寄ってくる・・・」(大汗)

スファレ

「へえ・・・」

「こんなビー玉みたいな宝珠に、そんな価値があるのか？」

「でも、レベル1の戦士が持っていても何の役にも立ちそうにないかな・・・」(笑)

サイト

「そんな自虐ネタ・・・言ってる哀しくないか？」

スファレ

「そう思うなら聞くなー！！！！！！」(泣)「うにや～～～  
～～～!!」

「・・・って、あれは!？」 何かに気づく

サイト

「ふっ・・・」(微笑) サイトも気づく

「やっと見つけた・・・パロットクリソベリル」(にやり)「  
遠くの方に

3コマ

フローライト

「あっ！」

「あれって、スファレさんじゃないですか!？」(ほら、あそこ!)」

パロットクリソベリル

「なにっ！」

「ああ、たしかにスファレだ！」

「どうやら無事だったようだな……って、あいつは(汗)」

ジエムシリカ

「あら……」

「どうしてサイトが一緒なのかしら？」

この人、盲目のはず

なんです……(汗)

スファレ

「おお〜い」 遠くで手を振っている

「シリカさま〜」

「フローラ〜」

「パロット〜」 (と、もう一人、知らない人〜)

パロット

「ふっ……(微笑)」 表情に出さないが嬉しそうです

スファレ

「……へ?(汗)」 何かに気づく

「ちよちよちよっ!(大汗)」 突然焦りだす

「なあああー……!」 (叫び)「(上、上!……)」

必死に何かを伝えようと……

パロット

「ぬ?」

「何をそんなに慌てて……(ひょいっ)」 不意に真上を見上げる

「ひゃひっ……!(どびっくっ)」

効果音「ずどおおおおおーん、ぷちっ」  
て、何かがはじけるような音  
潰され

4コマ

フローラ

「なああああーん！！」

「パロットさんが、マンモス系の巨大魔物に踏み潰されたーん！！！！(涙)」

倉谷さん　でっかいマンモス？

『ずももおおおおーん！！！！』

効果音「ずががーん！！！！ん！！」

シリカ

「いやあああーん！！！！(涙)」

「パロットくんが・・・パロットくんが！！！！(大泣き)」

ロードライト

「は・・・ふ・・・くらっ」　あまりのことに気を失う

フローラ

「ぱ、パロットさあああーん！！！！(泣)」(死んじゃダメーん！！！！)

スファレ

「ああ・・・(汗)」

「もしかして、今こそ『時空族の遺産』の使い時？(どきどきどき)」

サイト

「って、落ちてないでさっさと使いやがれーーーー!!」(うぎゃーーーー!!)」

説明文「5分前に時間を戻し、なんとかパロットは死なずにすみました(爆)」

コメント

ちなみに、リウムはだいぶ前にアクアを捜しに行きました  
事後報告?(笑)

## 第32話 パロットとサイト

4コマ劇場 アイオライト―391・・・2010/10/30  
シリーズ3

タイトル「パロットとサイト」

1コマ

ルルルクオーツ、エリアGにて・・・

ポルーサイト

「な・・・に？（大汗）」

「アウインの勇者をやめて、今はヒーラーでレベル1だとおーー  
！！（怒）」

パロットクリソベリル

「ああ・・・」

「なにか、文句でもあるのか・・・？（ぼそっ）」

サイト

「って、この大バカやろう！！（うがー！！！！）」

「シリカの視力を回復させたいという気持ちは理解できるがな」

「おまえがヒーラーになってどうなるっていうんだ！！（怒）」

「ユークレースにいるプリーストやクレリックですら ヒー  
ラーの上位職？」

「シリカを治すことができなかつたんだ！」

「レベル1の・・・にわか回復系に何ができる！！」

パロット

「ああゝ、うるさいなゝ、もぉゝ（やれやれ）」

「できるかできないかは・・・」

「やってみないとわからないだろっ！（ずーーーーん！）」

サイト

「・・・って（汗）」

「この五年で性格はだいぶひねってしまったようだが」

「あいかわらず、妙なところだけ勇者気質な奴だ・・・（はあ）」

パロット

「はあ〜っ!?（むかつ）」

「なにがひねてだっぺーーーーん!!!（怒）」

効果音「ずががーーーーん!!!」

2コマ

サイト  少し落ち着いた

「まあ・・・」

「シリカが視力を失った原因の一端はオレにもある」  一緒に

戦っていた

「いずれは、シリカの視力を回復させたいとオレも思っている」

「だが・・・」

「回復させるのは、それほど急ぐ必要はない・・・とも考えている」

パロット

「ぬ?」

「どつという意味だ（ギロリ）」（返答によっては）

サイト

「おまえ・・・（汗）」

「あれが不自由しているように見えるか?（大汗）」

パロット

「あ、ああ……（そういつことか……）」

ジェムシリカ 食事当番のお手伝い

「え〜っと（ストストスト!）」 包丁を上下に高速で動かしている

「キャベツの千切りって、これぐらいでいい〜?」

フローライト

「ありがとうございます」

「あゝ、トンカツ置きますから」

「その千切りをお皿に乗せてもらえますか〜?」

シリカ

「わかったわ〜（にこっ）」 てきぱき

サイト

「……（大汗）」 シリカの様子を見ている

パロット

「……（どきどきどき）」 同じく

3コマ

サイト

「そ、それに……だな（汗）」

「視力を失ってからのシリカは〜」

「なんとというか、隠された能力のようなものが覚醒したらしく……」

パロツト

「隠された・・・能力？（なんだそれ？）」

サイト

「視力を失う前に比べて格段に強くなった・・・（涙）」

「それも・・・このオレが手も足も出ないほど（しくしくしく）」

「

パロツト

「あ・・・（汗）」

「それこそ、どうでもいいや（大汗）」（さすがはシリカさん）

サイト

「なにを—————！！（うが—————！！）」

効果音「ばきゅ~~~~~ん」

4コマ

パロツト

「あ・・・れ？」

「前より強くなったってことは」

「もしかして、ユークナイトのナンバーも上がった・・・とか？」

サイト

「そう・・・（汗）」

「今では驚きのナンバー3だ！（大汗）」

パロツト

「おお、すげえ！！（どびっくり）」

「5年で二つもナンバーを上げるだなんて」

以前はナンバー5

「シリカさん、どんだけ強くなってるんだよ！（大汗）」

サイト

「上位ナンバーになるほど昇級は難しくなるといふのにな」（苦笑）

「

パロツト

「と、いうことは？」

「サイト・・・も、2つ3つナンバーが上がったとか？（大汗）」

以前はナンバー9

サイト

「オレは、呼び捨てかよ・・・（むっ）」

「まあ・・・、オレのナンバーのことなんて」

「どうでもいいだろ？（大汗）」

シリカ

「サイトの今のナンバーは8よ」  
「遠くの方から

サイト

「って、突然会話に参加してくるんじゃないやねえええー！！（涙）」

「

パロツト

「伸び率、低っ・・・（ぼそっ）」

サイト

「ほっとけー！！！！（うがー！！！！）」（それが普通  
なんだよー！！）

効果音「ずががー……………ん!!」

コメント

スファレは料理が残念な子なので夕食の準備に参加していません

### 第33話 星空の下で・・・

4コマ劇場 アイオライト―392・・・2010/10/31  
シリーズ3

タイトル「星空の下で・・・」

#### 1コマ

深夜、エリアGの拠点にて・・・

スファレライト

「・・・・・・・・・・（ぼ〜っ）」 座って星空を見上げている

パロットクリソベリル

「・・・スファレ」

「どうした、眠れないのか？」

スファレ

「あ、パロット・・・」

「う〜ん、ちょっとね（苦笑）」

パロット

「・・・・・・・・・・」 スファレの隣に座る

「日が昇ったら、王都に向けて出発だ・・・」

「少しは眠っておいたほうがいいぞ（疲れてるだろ？）」

スファレ

「まあ〜、そうなんだけどね〜（苦笑）」

「でも、王都に戻るって・・・本当にいいのかな？」

「エリアGの探索、ほとんど っていうか全然終わってないんだ

よ？（汗）」

パロット

「はあゝ・・・（やれやれ）」

「未探索地区の調査ってのは」

「何ヶ月もかけて・・・時には1年以上かかるのが普通なんだよ！」

「むしろ、たった数日でこんなに判明したのって」

「奇跡的だぞ・・・（大汗）」（なんだよ、ラスボスの居城って・・・）

スファレ

「へえゝ、そうなんだゝ・・・」

パロット

「それに、迷い込んだロードライトも」

「王都に送りとどけないといけないしな」

スファレ

「そう・・・だね（苦笑）」

2コマ

パロット

「でゝ、どうだった？」

「冒険者として、はじめて王都の外に出た感想は・・・」

スファレ

「正直、甘くみすぎていた・・・かな（汗）」（受付のお姉さんが  
いったように・・・）

「パロットや、みんながいなければ」

「気づけば王都にいて、国王様に・・・」

『おおスファレよ、死んでしまつとは情けない！』  
「とかいわれてるでしようね」

パロット

「つて、なんだそれ？（大汗）」

「それに、国王様っていつたらフローラのことだぞ……（ぼそっ）」

「

スファレ

「あゝ、そうだった（あははっ）」

「とにかく……」

「パロット、ありがとう（ぺこり）」

パロット

「な、なんだよ、いきなり（どきどきどき）」

スファレ

「パロットが仲間になってくれなければ」

「こうして王都の外へ出ることはできなかつただろうし……」

「それ以外にも、いろいろと助けてくれたりして」

「本当に感謝してる（じいっ）」 パロットを見つめる

パロット

「はへっ!?!?（どびっくっ）」

3コマ

スファレ

「……（じいっ）」

パロット

「いや、その、なんだ・・・(大汗)」

「仲間になったからには」

「スファレを護る・・・のは、当然のこと・・・(うぐっ)」  
「そ、それに」

「リユーコさんにもぐれぐれもっていわれてるわけだし(照れ)」

スファレ

「まあ、主に護ってくれていたのは」

「アクアさまとサイトだったけど・・・(ぼそっ)」 冒険早  
々にはぐれた

パロット

「って!」

「持ち上げといて、一気に落とすな—————(わびぢゃ—————  
—————)」

スファレ

「いやいやいや!(汗)」

「本当に感謝しているって!!(あせあせ)」

効果音「ずが—————ん!..!」

4コマ

パロット

「と、とにかく!!(汗)」

「もう晚いんだ、お前も早く寝ろよ!!(叫び)」 去っていく

スファレ

「はぁ〜い」

「・・・って(苦笑)」

「あいつはわたしのお兄さんかよ(笑)」  
「さあ〜て・・・」

「わたしもそろそろ寝ようかな〜(うん)」 伸びをする  
「・・・!!!(ぞくぞくっ!)」 背後からの殺気に気づく

### 突然の登場

ジエムシリカ

「うふふっ」

「なんだか、楽しそうだったわね〜(に〜っ)」

スファレ

「じえ、ジエムシリカさま〜!!!(どびっくら)」

シリカ

「え〜、なに〜?(笑)」

「パロットくんがあなたのお兄ちゃんみたい〜って?(あははっ)」

スファレ

「なああああっ!!(汗)」

「お兄ちゃんみたい・・・って!?(そんなこと言ってますん!)」  
「わたしはただ・・・お兄さんかよって、つつこみを入れただけで  
!!!(大汗)」

シリカ

「いやいや、いいのよ〜」

「そっか〜(うんうん)」 去っていく

「スファレさんとパロットくんは兄妹か〜」

「あ・・・れ?」

「それなら、わたしにとってもスファレさんは妹?? (あれ?)」

スファレ

「…………… (汗)」

「シリカさまって」

「パロットのことになると変だよね…………… (どきどきどき)」

説明文「シリカはスファレが憧れている盲目の女騎士です (笑)」

コメント

次回から舞台がルチルクォーツ王都に戻ります (予定)

## 第34話 エラークエスト

4コマ劇場 アイオライト―393・・・2010/11/01  
シリーズ3

タイトル「エラークエスト」

1コマ

ルルルクオーツ王都にて・・・

ロードライト 13歳ぐらいの少年？

「みなさん、ほんとうにありがとうございます！(ペこり)」「  
おかげで、無事に帰ってこられました」

パロツトクリソベリル

「いや、なに・・・」

「オレたちも一度は戻ろうと考えていたところだったし」  
「気にするな・・・」

ロードライト

「パロツトさん・・・(じゅん)」

「ありがとうございます(ペこり)」 もう一度お礼

「もし、ボクの手が・・・といってもDCで商人なんです(苦笑)

「必要になることがあれば、連絡してください(これ、ボクの冒険者NOです)」

「必ず駆けつけますので！」 役立つかどうかは別にして(笑)

パロツト

「あゝ」

「そのときは、よろしく頼むな」（にこっ）

ロードライト

「はい（それじゃあ失礼します）」 人ごみに消えていく

スファレライト

「・・・うん」

「なかなか可愛い少年だったよね」（あははっ）（パロットになついていたし）

フローライト

「えっ？（汗）」

「ロードライトさんって・・・女の子ですよね!？」（大汗）

パロット

「な、なにっ!!」（どびっくり）

「・・・そうなのか?」（どきどきおどき）

スファレ

「えっ、えっ?（汗）」

「男の子・・・だよな?（あれ?）」

パロット

「し、シリカさん（汗）」

「ロードライトって・・・（男の子、女の子?）」

ジェムシリカ

「・・・さあ〜て（にやり）」 この人だけ気づいています  
「どっちでしようね〜」（うふっ）

効果音「ずががーーーーーん!!!」

2コマ

ルルルクオーツ城、冒険者管理組合にて・・・

スファレ

「え〜つと・・・」

「こんにちは〜〜」（汗）

リユーコガーネット

「ようこそ、冒険者管理組合へ・・・って!」（汗）

「あなたたちは!!!」（どびっくり）「急に立ち上がる

パロット

「リユーコさん」

「エリアG探索クエストの中間報告にきました」

リユーコ

「そ、そんなことより!!!」

「あなたたち、無事だったのね!？」

「よ、よかった〜〜」（大汗）「気が抜けたように椅子へ座る

スファレ

「・・・?（ぬ?）」（どうしたの?のお姉さん?）

パロット

「・・・?（大汗）」（さあ?）

3コマ

冒険者管理組合、会議室にて・・・

スファレ

「は？(汗)」

「エラークエスト・・・？(なんですかそれ?)」

「しかも、王室からの依頼でも・・・ない(大汗)」

リユーコ

「ほんと、ごめんなさい！(汗)」

「普通なら、依頼の内容なんかを下調べしてから登録されるはずなんだけど」

「どうやら王室からのクエストだっことで慌てちゃったみたいで」「調査部がたいして調べもせず回してきたみたいなの」(大汗)」

スファレ

「つまり・・・(汗)」

「どうということ？(はてな?)」

パロット

「エラークエスト・・・(はあ・・・)」

「依頼者も判明しない デタラメなクエストのことだ(やれやれ)」

「ちなみに、クエストを無事に成功させたとしても」

「当然ながら報酬はまるでない・・・」 性質の悪いイタズ

ラです(苦笑)

スファレ

「ええええええー！！！！！！(叫び)」

「つてことは、そんなデタラメなクエストの所為で」

「わたしは3回以上も死にかけたのかー！！！！(うにゃー」

ー！！！！)」

リユーコ

「だから、ゴメンって（苦笑）」

効果音「ずががーーーーーん！！」

4コマ

パロット

「リユーコさん」

「それじゃあ、エリアGの探索は中止ってことでいいんですね・

」

リユーコ

「そうね〜・・・（う〜ん）」 提出された資料を確認中〜

「基本的にエリアGは立ち入り禁止ってことになるんでしょうけど（危険だから）」

「あなたたちだけでこれだけの情報を集めたんだから」

「他の冒険者に探索を引き継がれるのも嫌でしょ？（完成度高っ！）」

」

「あなたたちのパーティには立ち入り許可を出すことにするから」

「正式なパーティ登録のメンバー表を提出してちょうだい」

一枚の紙を差し出す

「まあ、探索の方は、気が向いたときに再開してくればいいから・

」

スファレ

「ぱ、パーティ登録 ですか？（汗）」 自分のパーティを

持つこと

「ええ〜っと・・・いいのかな？」

「うちの正規メンバーって」 スファレ、パロット、フローラ

「いまだ、全員レベル1なんですけど・・・（どきどきどき）」

リユーコ

「……………」

「……………」

「……………え？（大汗）」

「レベル……上がってないの……………！！（どびっくり）」  
「一つも!?!」

スファレ

「ほっとけ……………！！（うにゃ……………!）」 本  
当ならレベル32以上?（笑）

説明文「みんな、まともに戦っていないので経験値は入りません」

コメント

王室の名を騙ったためクエスト登録者は指名手配されました  
見つかる可能性はかなり低め

### 第35話 冒険者カードの更新が必要です

4コマ劇場 アイオライト―394・・・2010/11/02  
シリーズ3

タイトル「冒険者カードの更新が必要です」

1コマ

冒険者管理組合、会議室にて・・・

リユーコガーネット

「未探索地区であるエリアGの調査をこれだけこなしているっていうのに」 目標レベル50以上

「レベルがひとつも上がっていないの!?(大汗)」

スファレライト

「う、うう・・・(汗)」

「まだその話をひっぱりますか・・・(涙)」

「そうですね」

「レベルどころか、経験値も全然上がっていませんよ」だ(しくしくしく)「

リユーコ

「ほ、本当なの?(どきどきどき)」

パロットクリソベリル

「ああ・・・(汗)」

「運が良いのか悪いのかはわからないが」

「経験値を稼ぐようなイベントは発生しなかったな」(あははっ)「

(魔物強すぎだし・・・)

「まあ、スファレの場合、早々にオレたちとはぐれて」

「不思議のダンジョンへ潜っていたらしい」

「一時はレベル32まで上がったらしいのだが……(大汗)」

リユーコ

「なるほど……(汗)」

「ダンジョンの外に出て、レベル1に戻ったわけね……(大汗)」

「もはや常識です」

スファレ

「……って(汗)」

「二人ともあのダンジョンのこと知ってるのかよ……(涙)」  
もはやトラウマ(笑)

2コマ

リユーコ

「そういうことなら……」

「経験値は上がってないかもしれないけど」

「他のパラメーターなんか変動している可能性もあるわね(汗)」

「スファレさん」

「あなたの冒険者カード、見せてもらえるかしら？」

スファレ

「え……(汗)」

「別に数値の変化はないとおもってますけど……(大汗)」

懐からカードを取り出す

「あ……、でも」 何かを思い出す

「なんかこの前から」

「右上のここが点滅してるんだよね……(苦笑)」 リユー

コにカードを差し出す

リユーク

「ちよっ!?!? (どびっくり)」

カードを受け取って驚愕!!

「…………… (大汗)」

パロットに視線を向けて、意見を求める

を求める

パロット

「マジ……………かよ (汗)」

「冒険者カード更新のお知らせ……………」

「冒険者になりたて レベル1の戦士のカードが」

「どうして更新の要求しているんだ!?! (大汗)」 (信じられねえ……………)

スファレ

「ぬ? (なにごと?)」

リユーク

「冒険者カードの更新って」

「普通は、職業を変えたりクラスアップしたり……………みたいな」

「カードの情報を大幅に変える必要のあるときにされるものなの」

スファレ

「ええっ!?!」

「それじゃあ、知らないうちにクラスアップ!?! (おおっ!?!)」

リユーク

「うん…………… (汗)」

「このカードの初期不良やバグって可能性の方が高いでしょうね…………… (大汗)」

パロット

「まあ、普通に考えればソレだろうな……（うん）」

スファレ

「そ、そんな……（涙）」

3コマ

数分後……

パロット

「しっかし……」 更新に行ったりユーコを待っている

「レベル1の段階で冒険者カードの不良が見つかってよかったぞ（汗）」

「レベルが上がってから見つかったりしたら」

「最悪カード交換とかがあったりして、もう一度レベル1からはじめることに……」

スファレ

「うう……（汗）」

「そんなの勘弁して……（涙）」

「……はっ！（あれっ!?!）」 何かに気づく

「もしかしてわたしのレベルが上がらなかったのは」

「冒険者カードがおかしかったから……とか!」（大汗）」

パロット

「いや……」

「単に経験値を稼げなかったただけだろ？」

スファレ

「ええ……」

「でもほら、カードのバグで経験値カウンターが壊れていたって可能性もあるじゃない」

パロット

「っていつか……」

「不思議のダンジョンでは、普通にレベル上がってたんだろ？（カウンの故障じゃなだろ）」

スファレ

「そ、そうだった……！！（涙）」

効果音「ずがが………ん！！」

4コマ

再びの登場

リユーコ

「おまたせ」

「冒険者カードのチェック、終了したよ……」

パロット

「リユーコさん、どうでした？」

リユーコ

「結論からいうと……」

「冒険者カードには何の不具合もなく」

「本当にカードが更新の要求をしていたみたい」

パロット

「え？（それってどういっ……）」

スファレ

「ほら、やっぱりクラスアップなんだよ」

「いや、まいったな」

「何もした覚えのないにクラスアップ？」 カードを受け取る

「戦士系だからやっぱり騎士とか？」 騎士に憧れています

「……って、職業 戦士(汗)」 カードを確認

「全然変ってないじゃん！(どういうこと!?)」

リユウコ

「あ……(汗)」

「今回の更新はクラスアップとかじゃなく」

「足りないパラメーター項目の追加だったみたい」

スファレ

「……追加のパラメーター？」 画面を切り替えている

「レベル1の戦士だっというのに」

「どんなパラメーターが追加になるっというんだよ……!」(涙)

「……って、え!?(どびっくり)」

パロット

「ほお……」 カードを覗き込む

「……へっぽこか(すげえ)」

リユウコ

「いや」

「まさかあなたがへっぽこ勇者候補になるなんて(びっくり)」

スファレ

「ちよっ!?!?」

「何ですかこれ……!!」

リユーコ

「見たまんまのへっぽこ度……」

「経験値とは別に特殊な条件で上がっていく数値よ」

パロツト

「ちなみに、へっぽこの付いている戦士はただの戦士じゃない」

「その名もへっぽこ戦士!!」

スファレ

「って、そのままなのかよ……!!」(うにゃ……!!)」

リユーコ

「ゆくゆくは勇者に転職して」

「へっぽこ勇者の誕生ね (わたしは歴史の目撃者となる……!!)」

スファレ

「へっぽこ嫌ああ……!!」(大泣き)」

効果音「ばきゅ……ん!!」

コメント

スファレはへっぽこ戦士になりました (笑)

### 第36話 ユークレースのギルドマスター

4コマ劇場 アイオライト― 395・・・2010/11/02

シリーズ3

タイトル「ユークレースのギルドマスター」

1コマ

ルルルクオーツ王都、冒険者管理組合からの帰り道にて・・・

パロットクリソベリル

「それにしても、オレはおまえを見直したぞ」

「まさか、へっぽこ能力を身に付けてくるなんて・・・(ほんと凄え〜)」

スファレライト

「いや・・・(汗)」

「褒めてもらっているのは理解できるんだけど」

「なんとなくバカにされているように感じるのは気のせい？(大汗)」

パロット

「なっ!?!」

「どこをどうしたらバカにするような要素があるっていつんだ!」

スファレ

「・・・」  
「・・・」  
「・・・」  
「・・・」  
「へっぽこ(ぼそっ)」

パロツト

「うぐっ・・・(汗)」

「た、たとえ現実世界では微妙な言葉だったとしてもな」

「こっちの4コマ世界では、間違いなく褒め言葉なんだよ!!!(大汗)」

スファレ

「現実世界や4コマ世界とかいわれても」

「わかんないし・・・(しくしくしく)」

パロツト

「あ、うう〜・・・(どきどきどき)」

2コマ

中央広場にて・・・

ポルーサイト

「おっ、やっと戻ってきたな」

「リユーコへの報告は上手くいったのか?」

パロツト

「・・・」

「なんだ、サイトか・・・(はあ〜)(「ユークレースに帰ったはずじゃ?」)

サイト

「て、てめえは〜!(怒)」 パロツトの頭を抱え込む

「いったいどうしたら、5年程度でこんなにひねた性格になるんだよー!...(ぎゅ〜っ!)」

パロツト

「う、わあああああー!! (痛い痛い)」

「てめえ、放しやがねーーーー!! (涙)」

スファレ

「ちょーーーーーっ!! (何してるのこの二人!!)」

突然の登場

???

「サイトさん、おやめなさい!」

サイト

「……ちっ (汗)」 パロツトを解放する

「わあ〜ったよ (やれやれ)」

パロツト

「サイト、てめええええ!! (怒)」 (すげえ痛かったぞ!)

「……って、おまえは (びっくり)」

3コマ

シトリン

「お久しぶりですね、パロツトさん (にこっ)」

スファレ

「おお〜、美少年」

「パロツト、知ってる子なの〜?」

パロツト

「こいつの名前はシトリン…… (汗)」 (シトリンだよな?)

「冒険者ギルド、ユークレースのリーダーにして」

「ユークナイトNo.1の称号を持っているデタラメなヤツだ（大汗）」

スファレ

「ゆ、ユークレースのギルドマスター……!?（どびっくり）」

パロット

「っていうか（ひそひそ）」 サイトに耳打ち

「どうしてオレのいた5年前と姿が全然変わってないんだよ！（ひそひそ）」

「たとえ純粋な精霊族だったとしても（ひそひそ）」

「20歳ぐらいまでは人間族と同じように成長するはずだろ!!（ひそひそ）」

サイト

「そ、そんなことオレに聞くんじゃねえ！（ひそひそ）」

「……っていうより（ひそひそ）」

「シトリンのヤツは、オレの知る限りでも（ひそひそ）」

「10年以上は同じ姿をしている……（ひそひそ）」

「他のユークナイト全員でかかって倒せない強さをしているわけだし（ひそひそ）」

「やっぱり化物なんじゃね?（ひそひそ）」

シトリン

「……（にこっ）」

「二人とも、聞こえていますよ（ははっ）」 怒らせたら怖いです（笑）

パロット&サイト

「ひゃひっ！！（大汗）」

効果音「ずががーーーーーん！！」

#### 4コマ

シトリン

「え、こほん（汗）」

「冗談はさておき・・・」

「単刀直入にいます」

「パロットさん、ボクたちのギルド・・・ユークレースに戻ってきませんか？」

スファレ

「なっ！？（汗）」

パロット

「・・・・・・・・」

シトリン

「パロットさんにもいろいろと事情があるとはおもいますが・・・」

シリカの目のこと？

「それは、ユークレースにいてもできること」

「いえ、むしろユークレースにいるからこそ可能になることはありませんか？」

「わるいことはいけません」

「パロットさん、ユークレースに戻ってきなさい・・・」

スファレ

「・・・パロット（汗）」

パロット

「……………(うん)」

「あ、ギルドマスター自身がそういつてくれるのはありがたいが」

「いまオレは、こいつとパーティを組んでるんだ(そっ)」  
スファレの肩を抱き寄せる

スファレ

「ちよっ!?(あせあせ)」

シトリン

「……………(じいっ)」

パロット

「たとえユークレースに戻ることがあつたとしても(そんなつもりはありませんが)…」

「こいつが一人前の冒険者になるまでは」

「パーティを抜ける気はありません(ペこり)」

スファレ

「ぱ、パロット…(ぼっ)」 少しでも好感度アップ!?  
(笑)

シトリン

「……………ですか(ふう)」  
「わかりました」

「今日のところは引き下がることにしましょう」

「でも、ギルドに戻りたいのであればいつでも来てください」

「その方が、シリカさんやサイトさんが喜ぶでしょうから」  
立ち去っていく

サイト

「って、誰が喜ぶかーーーーー!!! (うがーーーーー!!!)」  
シトリンを追いかける

パロット

「・・・はあ〜 (汗)」 (やっと諦めてくれたか・・・)  
「なんだか知らんが 緊張した〜 (大汗)」

スファレ

「って、いつまでくつついてるんだよ! (うにや〜〜!!!)」  
顔が真っ赤

シトリン 突然振り返る

「あ、そうそう (思い出した〜)」  
「パロットさん (お〜い、聞こえていますか〜)」 遠くから叫んでいる

「数ヶ月後に行われる毎年恒例のユークナイトナンバー決定戦に」  
「パロットさんもエントリーしておきますから (ギルドマスター権限で・・・)」

「か・な・ら・ず!!」  
「参戦してくださいね〜」 (にこっ) 「

パロット

「って、ちょっとまでーーーーー!!! (なんだそれはーーーーー!!!)」

「オレはもうユークナイトじゃ!!! (大汗)」 元ユークナイト No.13

シトリン

「参戦しないと」

「あなたの恥ずかしい過去を・・・ばらしますから」

パロット

「は、恥ずかしい過去・・・って！（汗）（そんなのあるはず・・・）

スファレ

「ほお、それは楽しみ・・・（ぼそっ）」

パロット

「おまえな—————!!（叫び）」

効果音「ずが—————ん!」

コメント

ユークナイトは、実力順に毎年ナンバーを決めています

### 第37話 シリカの命と忘却の迷宮

4コマ劇場 アイオライト―396・・・2010/11/04  
シリーズ3

タイトル「シリカの命と忘却の迷宮」

1コマ

冒険者ギルド「ユークレース」、シリカの個室にて・・・

ジェムシリカ ユークナイトNo.3

「はあ、はあ、はあ・・・」 壁にもたれかかる

「・・・うっ(汗)」

「けほつごほつ げほつ!!(ぴちゃっ!)」 吐血!?

「・・・(じいっ)」 自分の吐いた血を見ている

(盲目ですが・・・何か?)

「うん・・・」 額に手をやる

「カゼひいちゃったかな〜(まいったな〜)」

効果音「ばたん!!」 突然、扉が開く

ターフェアイト サポートチームのトップ?

『カゼひいちゃったかな・・・』

「じゃないでしょ!!(怒)」

シリカ

「ななっ!?(どびっくり)」

「ターフェ!(大汗)」

「あなた、何の断りもなく部屋に入ってくるなんて・・・」

「わたしがいけないことでもしていたら」 何を!?(笑)

「いったいどうするつもり!? (責任取ってよね!!)」

ターフェ

「はいはいはい! (怒)」 シリカの顔を鷲掴み

「いいから、さっさと寝る!! (バカなこと言っていないで!)」  
そのままベッドの上へ叩きつける

シリカ

「ひゃひっ!! (涙)」 なされるがまま

2コマ

ターフェ

「まったく・・・ (汗)」 診察中

「そんな身体で冒険に出るなんて、いったい何を考えているつもり!?」

「身体を蝕む毒素の影響で一步も動けないはずでしょ!..!」

シリカ

「そんな大げさなく (あははっ)」 ベッドに寝ている

「大百足の毒ぐらいで 動けなくなるはず・・・げげふっ!..!」

再びの吐血

ターフェ

「はあ・・・」

「まあ、あんな猛毒を喰らって5年も生きているなんて

「普通は信じられないんだけど・・・ (大汗)」

「でも、自分でも気づいているはずよね?」

「なんとか毒素を中和させない限り」

「あなたの命は、良くて残り1年ほど・・・」

「最悪の場合、今年のナンバー決定戦が始まる前に尽きてしまっ」

「あなたが無理をすることに、寿命はどんどん減ってしまつたよ！」

シリカ

「・・・ということは？」(うん・・・)」

「まだ2〜3ヶ月は問題ないってことよね (ぼそっ)」

ターフェ

「だ〜か〜ら〜！(激怒)」

「安静にしてろって言ってるでしょーーーーがあー！(うがー  
ー！)」

効果音「どががーーーーーん！！」 雷が落ちました

シリカ

「ひっ！！(びくっ)」(ターフェ、怖い！！)

3コマ

ターフェ

「・・・(やれやれ)」

「調査部の報告によると、忘却の迷宮がある地区の土壤には」

「微量ながら巨大魔蟲の毒素と同じ成分が含まれているらしいの」

「土壤調査の結果、それらの毒素は最初から少なかつたわけじゃない  
く」

「永い月日をかけて中和されていたそうよ(詳しくは不明らしいけ  
ど)」

「おそらく、あの辺りの地区は」

「数千年単位の昔、草木も生えない不毛の地だったのでしょーね」

(周囲の砂漠と同じように)」

「でも、現在は忘却の迷宮の周囲だけ森林化しているでしょ？」

「ってことは、つまり・・・」

シリカ

「忘却の迷宮に（汗）」

「毒素を中和させる何かがある……？（大汗）」

ターフェ

「あくまでも可能性の一つだけどね（限りなく低い……）」  
「でも、手掛かりもなく 何もしないまま寿命を向えるより」  
「よっぽど希望が持てるわ……」

シリカ

「忘却の迷宮ね（汗）」

「5年前は手も足も出なかったけど 20名で挑戦して生存者3名（うち、重傷者2名）」

「もう一度挑戦する価値はある……のかな？（苦笑）」（たくさん犠牲になりそうだし……）」

ターフェ

「ちよつ、シリカ！？（なんてこと言ってるの！）」

「あなたの身体を治すためなら」

「みんなだって協力してくれるはずよ！（もちろんわたしも協力する……！）」

シリカ

「……（うん）」

「やっぱり、ユークレースのみんなには無理してほしくないかな」  
「あそこは普通のダンジョンじゃないわけだし、何が起るのかわからない」

「わたしを治すためだけに、みんなが危険を冒す必要は……」

ターフェ

「シリカ！（叫び）」

「あなた、いい加減にー！（怒）」

突然の登場

シトリン

「では、ごうしまじょう」

ターフェ

「って、わあああっー！（どびっくり）」

シリカ

「し、シトリンさん……（大汗）」（いつのまに……）

4コマ

シトリン

「忘却の迷宮……」

「考えてみればちょうどいいかもしれませんね〜」

シリカ

「な、何がちょうどいいのですか？（どきどきどき）」

シトリン

「いや……」

「今年のユークナイトナンバー決定戦は」

「『挑戦！忘却の迷宮』にしましょう」      なんだそれ？（笑）

シリカ

「えええええー！ー！ー！ー！ー！（なんですってー！ー！ー！ー！）」

ターフェ

「ギルドマスター、ナイスアイデア（にこっ）」

シリカ

「ちよつ、シトリンさん！？（汗）」

「そんな、わたしのためにユークナイトのみんなが危険に晒されるのは……」

シトリン

「もちろん、シリカさんの身体のこともあります」

「が、それだけではありません……」

「忘却の迷宮は、ユークナイトの力量をはかるのにちょうどいいと考えたからです」（今決めました）

シリカ

「で、ですが……（大汗）」

「あの迷宮は 本当に危険で……」

シトリン

「それに……」

「参加を渋っているパロツトさんも」

「シリカさんを助けるためであれば、必ず挑戦することでしょう……（ぼそっ）」

シリカ

「え？（汗）」（パロツトくんが……？）

シトリン

「つまり……“愛する（にこ重要）”シリカさんを助けるため

「！」

「パロットさんは、危険を承知で忘却の迷宮に挑戦するのです!!」  
「やがて二人には、斬っても切れない絆が芽生え・・・(ぼそっ)」

シリカ

「えっ、ええ〜っ (にこにこ)」

「その続きは!?(二人はどうなるの〜)」

ターフェ

「・・・・・・ (大汗)」

「シリカ・・・、意外と元気じゃん(ときどきどき)」(死にかけのわりに・・・)

効果音「ずがが—————ん!!」

コメント

4コマ目の内容は、ほんとに今決めました  
手に決めた(笑)

シトリンが勝

### 第38話 やはりパーティの拠点は必要でしょう

4コマ劇場 アイオライト―398・・・2010/11/06  
シリーズ3

タイトル「やはりパーティの拠点は必要でしょう」

1コマ

ルルルクオーツ王都、中央広場にて・・・

スファレライト

「え〜っと・・・(汗)」

「冒険者管理組合への報告も無事に終ったことだし」

「これからどうしようか」(苦笑) 手持無沙汰

パロットクリソベリル

「そうだな」(フローラは王都へ戻ってすぐ、お城の連中に連れられていったし・・・)

「まずは、拠点の確保かな？」

スファレ

「拠点？」

「それって、住む場所のこと？」

パロット

「まあ、間違いではないが・・・(実際にオレは住み込むつもりでいるわけだし)」

「ユークレースで言うところの事務所的な場所かな？」

「たとえば、冒険者管理組合を通さず直接依頼がくる場合なんかの連絡先？」

「長期宿泊する宿屋でもいいけど・・・」

「せっかく正式なパーティとして冒険者管理組合へ登録するわけだから」  
メンバー表提出予定

「できれば、どこか間借りできるところを見つきたいな(うーん)」

スファレ

「ちよっ・・・(汗)」

「部屋を間借りするにもお金が必要でしょ？」(宿屋もそうだけど・・・)

「エラークエストだったエリアG探索の依頼料も期待できないわけだし」

「そんなお金、どこにあるっていうのよ!?(大汗)」

パロット

「あゝ・・・」

「そこは家主に専属契約してもらったことごとく」

「なんとかなるだろう・・・(苦笑)」

スファレ

「専属契約?(なにそれ?)」

2コマ

パロット

「えーっと・・・だな(汗)」  
説明は苦手

「家主は冒険者に活動拠点を貸し与える・・・」

「冒険者は、クエストで得た利益の一部を家主に差し出す」

「そうすることで、冒険者は無償で借りることができる」

「家主は冒険者の力量によって貸賃以上の利益を得ることができる・

・・・(相場は二割程度?)

「だから、優秀な冒険者なんかは家主の間でも」

「取り合いのようなことが発生しているらしいぞ」「（より良い場や条件なんかを提示したりして）」

スファレ

「おお」

「そんな素晴らしいシステムがあったなんて」

パロット

「もちろん、冒険者が頼りないようなら家主にも利益はない・・・」

「だから、専属契約契約できるのは」

「ある程度熟練した冒険者や、よほど将来性のある冒険者に限られてくる」

「それまでは、宿屋暮らしが普通かな・・・」

スファレ

「つまり、正規メンバーが全員レベル1のパーティなんかには・・・

（汗）」

パロット

「よほど物好きの家主としか・・・」（あるいはすげえ金持ちとか）

「契約はできないだろうな」（苦笑）「さあ、捜しに行くぞ」

スファレ

「って、意味ないじゃん!!」（涙）「慌ててパロットを追いかける」

効果音「ずがが—————ん!!」

専属契約契約してくれそうな家主を捜しはじめて数時間後・・・

パロット

「うん・・・」

「やっぱり、クエストを一つも攻略していない初心者パーティと」

「契約してくれるような家主はいなかったな」（あははっ）「（

予想はしていたけど・・・）」

スファレ

「っ、疲れた・・・（しくしくしく）」 王都中を歩き回った

「っていうか」

「ちよつとぐらい話を聞いてくれてもバチあたんないよねっ！」

相手にされませんでした（笑）

パロット

「まあ、専属契約も慈善事業ってわけじゃないからな」（完全に収益目的）

「契約してほしいければ名を挙げる・・・ってことなんだろうよ（苦笑）」

スファレ

「うう・・・（涙）」

「そんなやつら、こっちから願い下げだっ」（しくしくしく）」

「って、あれ・・・って？（もしかして？）」 人ごみの中に

誰かを発見

突然の登場

???

「それでね、パロットさんが」（にこっ）「 13歳ぐ

らしい女の子

シンセティック

「はいはい(苦笑)」

「あなた、戻ってきてからそのパロットって子のことばかりね〜)やれやれ(」

???

「そ、そんなことないよ〜〜!!(大汗)」

顔が真っ赤

4コマ

スファレ

「ああ〜!(どびっくり)」 シンセティックを指差す

「不思議のダンジョンにいた・・・お姉さん!!(どうしてここに!?)」

シンセティック

「え・・・?」 スファレに気づく

「あなたは、へっば候補の・・・」

「それに〜(じい〜〜っ)」 パロットを凝視する

パロット

「あ、ああ〜〜・・・(大汗)」 シンセティックの視線を

かわすように遠くを見つめる

???

「わわわっ (たっ たっ たっ)」 パロットにかけよる

「パロットさんだー!」 (ぎゅ〜っ) パロットに抱きつく

パロツト

「えーーーーっ! (汗)」

「なんだーーーー!! (どびっくり)」「誰!?(  
慌てふためく

???

「また会えましたねパロツトさん」  
抱きつきながらパロツトを見上げる

「でも、この東街地区に」

「いったいどんな用ですか? (にこにこ)」  
満面の笑み

パロツト

「いや・・・その」(汗)」

「ええ~~~~!?(大汗)」「だから誰!?(  
見覚えがありません (笑)

スファレ

「ぱ、パロツト・・・(あわわっ!)」

「あなた、そっち系ーーーー!?(ひゃわーーーーっ!!)」

パロツト

「って、どっち系だあああーーーー!!!(うがーーーー!!!)」

???

「え〜と・・・(なんの話ですか~~~~?)」

効果音「ずががーーーーーん!~!」

## コメント

専属契約の中には、武具屋が自分の店の商品を冒険者に提供して活躍してもらうことで宣伝する・・・みたいなものもあります（お店のネーム入り？）

### 第39話 元同僚は凄腕のダンジョンマスター

4コマ劇場 アイオライト―399・・・2010/11/07  
シリーズ3

タイトル「元同僚は凄腕のダンジョンマスター」

1コマ

ルチルクオーツ王都、東街地区にて・・・

パロットクリソベリル

「・・・へ?(汗)」

「おま、えっ!?(大汗)」

「ロードライトおーーーーー!!!(びびっへっ)」

ロードライト

「その反応・・・(むっ)」

「気づいてなかったんですか~~~~(ぶくっ)」 かわいいく  
頬を膨らませる

スファレライト

「あははっ(苦笑)」

「気づかなくても仕方ないって〜(わたしも気づかなかったよ〜)」

「冒険者姿のときは男の子かな〜って思ってたけど」

「いまは、完全にかわいい女の子だもん」

ロードライト

「あ〜、そういうことだったんですね〜(な〜んだ)」

シンセティック

「DCの特性上、一人でイベントの再設置に出ることが多いからね」

「女の子の一人旅は何かと危険でしょ」(護衛はつけるけど)

「だから、男装・・・とまではいかないけど」

「女の子とわからないような装備になることが多いのよ」

スファレ

「え？」

「でも、お姉さんはそのまんまの格好・・・でしたよね？」(汗)

パロット

「いや・・・」

「シンセティックさんの年じゃ」

「男装しても、すぐにバレるだろう・・・」(ぼそっ)

シンセティック

「あははっ (ぐりぐりぐり!)」

パロットのコメカミにう

めぼし攻撃

「大人の魅力を隠しきれない・・・って言いたいよね」 (ぐり

ぐりぐり) 」

パロット

「ああああっ、痛い痛い痛い!」(涙)

「そ、その通りです! ! ! ! !」(うにゃ! ! ! ! !)

シンセティック

「うんうん (りりりりりりりりりり) 」

怒っています

ロードライト

「あ~~~~ (大汗) 」(お、お姉ちゃん・・・)

2コマ

スファレ

「つて、パロットー!」

「このお姉さんと知り合いだったの!? (どびっくり)」

パロット

「ううゝ・・・(いたた)」

「例のごとく ユークレースの元同僚だ・・・(涙)」(一般メ  
ンバーな)

「シンセティックさんは、クリエイト能力を持っていて」

「ユークレースでは開発部に所属している(あゝ、まだ痛い・・・)  
」

シンセティック

「今はユークレースを辞めて、DMやってるんだけどね(汗)」

ヘッドハンティングされた

パロット

「た、確かにシンセティックさんのクリエイト能力を使えば」

「いままでに無かったような、すごいダンジョンとかできそうです  
ね」

スファレ

「・・・」

「・・・不思議のダンジョン とか?(ぼそっ)」

パロット

「おおゝ (なるほどー)」

スファレ

「わたしのレベルを返せーーーーっ！！（大泣き）」  
トラ  
ウマ発動！（笑）

効果音「ずががーーーーーん！！」

3コマ

ロードライト

「そっか」

「お姉ちゃんって・・・前はユークレースにいたんだよね」

「じゃあ、どうしてパロットさんのこと教えてくれなかったの？」

（もぉー！）

シンセティック

「いや、名前を聞いたときもしかして・・・って気がしたんだけど」

「まさか、あのパロットくんのことだったなんて思わなくて」（苦笑）

「あなた、パロットくんのことをかっこいいって言うてたでしょ？」  
ロードライトが慌ててます

「パロットくんがユークレースにいたときは」

「どちらかといえばかわいい系だったからな」（あはは）（ほんとかわいかったのよ）

パロット

「昔の話はするなーーーーー！（わ、わぁーわああっ！）（照れています）」

「・・・って、おまえら姉妹なのかよ！（どびっくり）」

スファレ

「おお〜〜（それはびっくりだ〜）」

「あ・・・れ？（汗）」 何かに気づく

「シンセティックさんって、パロットがいたころのユークレースメ  
ンバーだったんですね〜」

「それなら、どうしてサイトと会ったときに初対面みたいなこと言  
つてたんですか？」

「サイトの方も何も言っていなかったし・・・（汗）」

シンセティック

「サイト・・・？（誰？）」

パロット

「ポルーサイト・・・（汗）」

「ユークナイト ナンバーズの一人ですよ（大汗）」

シンセティック

「う〜ん・・・（汗）」

「ナンバーズでは、シリカやパロットくんとしてか面識なかったから  
な〜（苦笑）」

「っていうか、興味もないし・・・（ぼそっ）」

スファレ

「あ〜・・・（どきどきどき）」（サイト、悲惨ね・・・）  
本当にユークナイトなのか？（爆）

#### 4コマ

ロードライト

「ところで、話は最初に戻りますが〜」

「お二人は、どうしてこの東街地区にいらっしゃるんですか〜？」

「もしかして、こっちの方に住んでいるとか!？（ご近所さん）」

パロット

「あゝ、理由はまさにソレ(ぼそっ)」

「パーティの拠点探し・・・」

「専属契約してもらえそうな家主を見つけようとしていてな」(苦笑)「(お金は無いし)」

スファレ

「王都に戻ってきてから歩き詰めだよ・・・(しくしくしく)」「(っ、疲れた・・・)」

ロードライト

「そう・・・なんですか(うーん)」 何かを考えている

シンセティック

「ユークナイトでアウインの勇者だって説明すれば」

「そんな捜し回らなくても、すぐに契約できるはずでしょ？」(相手からよってくる・・・)」

パロット

「って、いまのオレは」

「ヒーラーでレベル1なの!!」(汗)「

シンセティック

「えっ!(汗)」

「パロットくんって、いまヒーラーなの!?(どびっくり)」「

「・・・そのわりに」

「装備なんかは、もろ戦士系だね・・・(大汗)」「(説明ないとヒーラーってわからない)」

パロツト

「ほつとけー！ー！ー！(うにゃー！ー！)」「(女神像は二つも持っているぞー！)」

スファレ

「あ、あははっ……(苦笑)」「(それ、行く先々で聞かれるね)」

ロードライト

「……(じいっ)」「パロツトを見つめている

「あ、あの……パロツトさん(汗)」

パロツト

「ぬ？(ロードライト、どうした?)」

ロードライト

「じつは……(汗)」

「専属契約してくれそうな家主に、心当たりがあるんですけど……

(ぼそっ)」

パロツト

「……」

「……って、本当か!?(がしっ、ぎゅっ!)」  
ロードライトの両肩をつかむ!

ロードライト

「ひゃっ、ちよっ……!」(汗)

「ぱ、パロツトさん……(ぽっ)」「(頬を染める

「こんなところじゃ、みんなが見えますよ(きゅっ)」「(照れています)

スファレ

「やっぱりパロツトてそっち系……!! (叫び)」  
「だ  
からどっち系!? (笑)」

パロツト

「って、おまえ!! (むかつ)」

「ちゃんと話を聞いてたか……!!? (うが……!!)」  
(家主の話だろ!!)

効果音「ずがが……!!」

コメント

引っ張っておいて、次回につづく! (爆)

## 第40話 立派な洋館と新しい仲間

4コマ劇場 アイオライト―400・・・2010/11/08  
シリーズ3

タイトル「立派な洋館と新しい仲間」

1コマ

東街地区、湖畔に建つ立派な洋館にて・・・

パロットクリソベリル

「へえ〜・・・(きよろきよろ)」

スファレライト

「おおおおおっ!!」 興奮気味

「本当に、ここを借りられるんですか!?(すっごい広い!!)」

ロードライト

「えへへ〜っ」

「1階は事務所や共同空間、2階は住居スペース」

「数十人規模のギルドになると手狭になるかもしれません」

「10名以下の個人パーティなら十分だとおもいます(にこ〜っ)」

パロット

「いやいや、初心者パーティには立派過ぎるだろ(汗)」

「こんな場所をオレたちに貸してくれるって家主・・・」

「本当に大丈夫なのか?(大汗)」

シンセティック

「う〜ん・・・」

「まだ、貸してあげるって決めたわけじゃないんだけどな〜（どうしよっかな〜）」

パロット

「……………」

「……え？（大汗）」（まさか、シンセティックさんが……？）

2コマ

シンセティック

「と、いうわけで〜」

「家主のシンセティックです（にっっ）」

ロードライト

「ここ、うちの持ち家の一つなんです」

「ほかに、冒険者に貸し出し中の家がいくつかあるんですよ〜」

スファレ

「え？（汗）」

「もしかして、二人ともいいとこのお嬢さま……？（大汗）」

ロードライト

「いいえ、全てお姉ちゃんの稼ぎで手に入れたものです」 D

C・DMになつてからの稼ぎ

「だから、ここの契約もお姉ちゃんの気持ち次第ってことになりま  
すね〜」

パロット

「え〜っと……、シンセティックさん（汗）」

「オレたちのパーティと 専属契約してください（ペこり）」

スファレ

「よ、よろしくお願いします!!」（ペニリ）」

シンセティック

「そうね〜・・・（じい〜っ）」　パロットたちの様子を見て  
いる

「パロットくんの実力はよく知っているし」

「スファレさんも、へっぽこ勇者候補として将来有望そう・・・」  
「専属契約してもいいかな〜」

スファレ

「それじゃ〜」

シンセティック

「ただし、条件があります!」

スファレ

「じよ、条件・・・ですか?（どきどきどき）」

3コマ

パロット

「うぐっ・・・（汗）」

「利益配分については7割でも8割でも（大汗）」

スファレ

「ちよっ!（何を勝手に・・・）」（せめて相談を!）

シンセティック

「利益配分?」

「そんなのはどうでもいいのよ」

パロツト

「・・・え？(汗)」

「じゃあ、その条件って・・・(大汗)」

シンセティック

「簡単なことよ(そんなに構えなくても大丈夫だって)」

「ロードライトがDCの仕事をするのを手伝ってもらっただけ」

「もちろん、時間の許す範囲でいいわよ」

スファレ

「つまり・・・ロードライトの護衛ってことですか？」

シンセティック

「そういうこと」

「魔物が現れたら、護衛対象を見捨てて逃げ出すようなへたれ冒険者に」

「これ以上、ロードライトを任せておけないわ(むかつ)」

ロードライト

「お、お姉ちゃん(大汗)」

パロツト

「それって、この前助けたときのことか？」

「たしか、護衛とはぐれたって聞いたけど・・・」

シンセティック

「それは違うわ・・・」

「やつらは、魔物に敵わないと気づいたとたん」

「ロードライトのことを囮にして、自分たちだけ逃げ出した・・・」

(怒)「

パロツト

「ほあゝ(それはそれは……)」

「シンセティックさん」

「ちよつと、そいつらの所在を教えてくださいませんか？」

「その腐った根性を叩き直してやる……(むかつ)(

シンセティック

「ああ、もういいのよ(にっこり)」

「わたしがもう叩き直しておいたから(うふふつ)(  
「  
の人強いです

パロツト

「ふっ……(微笑)」

「シンセティックさん、さすがですね(にやり)」

ロードライト

「ちよつ、お姉ちゃん!? (大汗)」

「そんなこと、聞いてないよ……!!(どびっくり)(

効果音「ずがが……」

4コマ

スファレ

「でも、まあ」

「その条件で専属契約してくれるのなら」

「願ったり叶ったりじゃない？」

パロツトに意見を求める

パロツト

「そうだな・・・」

「これ以上、ロードライトを危険な目にあわせられないし」

ロードライト

「パロツトさん（じい〜ん）」 感動しています

「で、でも・・・（汗）」

「ボクの都合だけでお二人にご迷惑をかけるわけにはいきません」

「だから、無理して護衛していただく必要は〜（大汗）」（条件についてはボクからお姉ちゃんに・・・）

スファレ

「う〜ん、一つ提案なだけで〜・・・（こんなはどう？）」

「ロードライトって、うちのパーティの正規メンバーになってみる気ない？」

ロードライト

「え？（汗）」

スファレ

「パーティに入れば、すなわち仲間だよな？」

「契約とか関係なく、仲間を護るのは当然のこと」

「もちろん、DCの仕事があるときはそっちを優先させるけど・・・」

「無いときは、ロードライトもわたしたちのクエストに同行してもらうってことでどうかな？」

パロツト

「ああ、なかなかいい考えじゃないか？」

ロードライト

「でも……(ちらり)」 シンセティックの様子を窺う

シンセティック

「うん、そうしてくれるとありがたいわ」

「わたしも仕事の関係で家を空けることが多いから」

「じつは、ロードライトのことが心配だったのよ(苦笑)」

「スファレさん、パロットくん……」

「妹のこと、よろしくお願いします(ペこり)」

ロードライト

「お、お姉ちゃ〜ん(汗)」 なにやら複雑な表情をしています

スファレ

「もちろん、正規メンバーになるんだから」

「ロードライトもわたしたちと一緒に、ここに住むってことでいいんだよね」

ロードライト

「は、はい……(汗)」

「それは別に構いませんが……(ぼっ)」 横目でパロットを見て照れている

スファレ

「じゃあ、気が変わらないうちにさっそく……」 メンバー登録用紙を取り出す

「え〜っと、ロードライトって職業商人でよかったんだよね(かきかき)」 書き込んでいる

「で〜、レベルはいくつ〜?」

ロードライト

「あつ、このまえ18になりました! (汗)」  
スファレより  
全然強いです (笑)

スファレ  
「じゅうは・・・ち(ぴきっ!)」  
なにやら固まって動きを  
止める

ロードライト

「??? (汗)」

「す、スファレ・・・さん? (大汗)」 (どうしましたか?)

パロット

「あゝ・・・ (汗)」

「レベルの話は、しばらく触れないでやってくれ・・・ (大汗)」

ロードライト

「は、はあゝ? (どぎどぎどぎ)」

シンセティック

「うふふっ (微笑)」

「なんだか、楽しそうなパーティね (にっこり)」

説明文「ロードライトがメンバーになったことで、平均レベルが上がりました」

コメント

ああ・・・、オチが オチがない!! (笑)

## 第41話 盗賊風の変なヤツ・・・

4コマ劇場 アイオライト―401・・・2010/11/08  
シリーズ3

タイトル「盗賊風の変なヤツ・・・」

1コマ

洋館の向かい側に建つ喫茶店にて・・・

エルバイト 見た目17歳ほど

『ふっ・・・(微笑)』 自分の世界に入り込んでいる

『オレの名前はエルバイト』

『今年の冒険者検定に見事合格したレベル4のレンジャーだ』

『まあ、本当は手先の器用さを生かしてシーフになろうと考えていたのだが』

『シーフという職業は微妙にイメージが悪い・・・(だって盗賊じやん)』 偏見です

『だから、シーフ能力を有していて』

『ちよつとかっこいいイメージのある』

『レンジャーを選んだってわけさ(ずずず)』 コーヒーをすすっている

店員A

『あのお客さん、またきてるよ(ひそひそ)』

『冒険者を装っているけど、完全に盗賊(犯罪者の方)だよね(ひそひそ)』(すっごく怪しい)

店員B

『毎日毎日コーヒー一杯で朝から夕方までいて・・・(ひそひそ)』

「ちょっと気持ち悪いよね〜」(ひそひそ)「見た目はそれほどでもないけど・・・」

店員A

「きつと、お向かいの洋館へ盗みに入ろうって魂胆じゃないかな〜(ひそひそ)」

店員B

「ええ〜〜っ！(ひそひそ)」

「王都警備団に通報しといたほうがいいかな〜(ひそひそ)」

エルバイト

『ふっ・・・(微笑)』 自分の世界に入り込んでいる

『お店のお姉さんたちが熱い視線を向けてきている・・・(まいっ たな〜)』

『だが、その気持ちにこたえることはできない!(すまない!)』

『オレには、既に心に決めた人がいるからだ!!』

『つと、そんなことを言っている間にあの人が現われた・・・』

喫茶店の窓に張り付く(爆)

『あの人は、日に一度、お向かいの洋館を見回りに来る』

『少し前に、やっと名前を知ることができた!』 ほとんどス

トーカー?(笑)

『シンセティックさん!!(ぽっ)(素晴らしい名だ!)

不気味に頬を染める

『いつか、お近づきになり・・・一緒にお話したい!』 声を

かける勇氣はありません

「つて、なんじゃありゃ〜〜〜!!!(怒)」 何かに気づく

店員A & 店員B

「「きゃあああ〜〜〜!!!(涙)」「「やっぱり犯罪者

よーーーーー!!」

お互いが抱きつく

2コマ

洋館の入口にて・・・

シンセティック

「それじゃあ、ロードライトのことをよろしくね (ニコッ)」

スファレライト

「任せてください」

パロットクリソベルル

「あ、それはそうとシンセティックさん・・・」

シンセティック

「ん？(なに?)」

パロット

「オレたちのパーティって、まだ人数少ないから」

「冒険には全員で行くことになると思うんですが・・・」

「その場合、この管理はどうしましょう? (汗)」

「あと、ロードライトを連れ出す時も」

「事前に報告もしたほうがいいですよね?」 (DCの仕事のこともあるだろうし・・・)

シンセティック

「確かにそうね (うん・・・)」

「それじゃあ、わたしの方で管理人を見つけておくことにするね」

「管理人がいれば、冒険に出ている間でもクエストの依頼を受ける

こともできるでしょ?」

スファレ

「おお、なるほど」

シンセティック

「すぐに・・・ってわけにはいかないかもしれないけど」

「建物だけじゃなくあなたたちの健康状態についても」

「しっかり管理してくれる人を捜してみるわ」

パロット

「・・・シンセティックさん（じゅん）」      なにやら感動しています

「何から何まで、ありがとうございます！（ペこり）」

「オレ、シンセティックさんのことを勘違いしていました」

シンセティック

「ぬ・・・？（勘違い？）」

3コマ

パロット

「ユークレースにいたときは」

「とっつきにくく、いつも怪しげな研究ばかりして」

「危険なアイテムや武具を開発・・・」      マッドサイエンティスト？（汗）

「拳句の果てに、オレたちユークナイトを」

「出来上がった危険物の実験台にしていたってイメージがあったんです」

「それは間違いだったんですね」

シンセティック

「いや……(汗)」

「別に、それで間違っていないと思うんだけど……(ぼそっ)」

パロット

「……え？(大汗)」

シンセティック

「一つ間違いがあるとするならば」

「実験台にしていたのはパロットくんだけ……(ぼそっ)」

「だってあの頃のパロットくん」

「めっちゃめっちゃかわいかったんだもん (笑)」

パロット

「つて、なんじゃそりゃー……！！(うがー……！！)」

「

シンセティック

「はいはい、そんなに怒らないの (ぎゅっ)」  
パロット  
を抱きしめる

パロット

「し、シンセティックさん！？(どびっくり)」

シンセティック

「あなたを大切だっと思ってた気持ちに嘘はないから……(じい  
っ)」  
真剣な眼差しで見つめる

パロット

「え……？(それってどういっ……)」(まさかオレのことを  
……)

シンセティック

「だって、パロットくんはシリカの所有物だったでしょ（あははっ）」　ぱつと離れる

「もし壊したりしたら、後でシリカに何言われるかわかったもんじやなかったし・・・（苦笑）」

パロット

「オレは、あんたらのオモチャじゃねえええー！！！！（叫び）」

効果音「ずががーーーーーん！！！！」

4コマ

シンセティックが立ち去った後の洋館前にて・・・

スファレ

「パロット・・・（汗）」

「あなたも苦労してたのね～～～（よしよし）」　背伸びして頭を撫でる

パロット

「って、そんな同情をするなぁ～～～！！（涙）」　（うにゃ～～～  
～～～！！）」

突然の登場

エルバイト

「ってことで、そのアサシン！（怒）」　パロットを指差す  
「オレと勝負だーーーーー！！！！（叫び）」　（シンセティックさんは

オレが護る！！)

パロット

「だいたい、シンセティックさんは」 アサシンじゃないので  
自分のこととは思っていません

「昔っからオレのことをからかいやがって……(むっ!)」  
洋館の中へ入っていく

スファレ

「いいじゃない」

「そのおかげで、この家の専属契約もできたんだから」 同  
じく洋館の中へ……

効果音「ばたん」 洋館の扉が閉まる音

エルバイト

「……………」 指差した状態で固まっている

通行人1

「やだ、なにあれ〜?(汗)」

通行人2

「無意味にあのお屋敷を指差したりして……ちょ〜キモッ(うえ  
〜っ)」

エルバイト

「お、おのれ……………(涙)」

「よくもやってくれたな……………!!(うが……………!!)」  
精神的ダメージ大

説明文「ほんと・・・、なんだこいつ（笑）」

コメント

エルバイトは、シンセティックに憧れています・・・彼女の性格の悪さ（？）は知りません（爆）

## 第42話 現われたのは才能の欠片も無いアルバイト？

4コマ劇場 アイオライト―402・・・2010/11/09  
シリーズ3

タイトル「現われたのは才能の欠片も無いアルバイト？」

### 1コマ

東街地区、拠点の洋館にて・・・（前回からの続き）

突然の登場

エルバイト

「つて、オレを無視してるんじゃないやねええええ！！（うがー！！）」

「 入口から飛び込んでくる

ロードライト

「ひゃっ！！（どびっくり）」 運んでいた鍋を落そうとする

パロツトクリソベリル

「・・・・・・（なんだ？）」

スファレライト

「え〜っと、どちらさま・・・でしょうか？」

「・・・・あつ、もしかして」

「クエストの依頼 ですか〜！？（やった〜）」

パロツト

「残念だったな」

「受付時間を、10秒ほど過ぎている」

「これからみんな夕食の時間なんだ」

「依頼なら明日にしてくれ・・・（そして、今すぐ帰れ・・・）」

スファレ

「ちよっ、パロット！！（汗）」（そんな邪険にしなくても・・・）

エルバイト

「つて、10秒過ぎた程度で受け付けできないって」

「てめえ何様のつもりだーーーー！！（叫び）」

「それに、オレは依頼に来たわけじゃねえ！！（怒）」

スファレ

「依頼にきたわけじゃない？（汗）」

「・・・（うん？）」

「・・・はっ！（汗）」

「ロードライト、下がって・・・」

「変質者よ・・・（ぼそっ）」（いかにも危なそう・・・）

エルバイト

「誰が変質者だーーーー！！（激怒）」

効果音「ずがーーーー！！ん！！」

2コマ

パロット

「依頼人でも変質者でもない・・・」

「じゃあ、おまえ何者なんだ（はあ～～～）」

疲れてきた

エルバイト

「ふふっ・・・（微笑）」

「何者かと聞かれたら答えなくてはならないな(にやり)」  
不気味な笑み

スファレ

「ひっ!? (ぞくぞく!)」 鳥肌が(笑)

エルバイト

「オレは、前期の検定で合格した冒険者・・・」  
「職業がレンジャーでレベルは4」

「その名も、エルバイトだーーーー! (ぴっしっ)」 決めポーズ

パロット

「・・・・・・」  
「・・・・アルバイトなら間に合っている(ぼそっ)」

エルバイト

「アルバイトじゃねええええ! (怒)」  
「エルバイトだーーーー! (わぎゃーーーー!!)」

効果音「ばきゅ~~~~ん!~!」

3コマ

スファレ

「え〜と・・・(汗)」  
「パロットもいったように、アルバイトの方は間に合っています(大汗)」

エルバイト

「だ〜か〜ら〜、アルバイトじゃなくって〜! (怒)」(しまい)

泣くぞー！)

「っっていうより、おまえらこそ何者だ！」

「ここは、シンセティック商会の持ち家のはずだぞー!!」

パロット

「ああ、よく知っているな」

「ここは、オレたちがシンセティックさんと専属契約して借りた家だ」

「なんか文句でもあるのか・・・(ギロリ)」

エルバイト

「なっ・・・(汗)」

「せ、専属契約・・・だと」(大汗)」

「ま、まさかシンセティックさんが」

「こんな素人丸出しの冒険者と専属契約を結ぶなんて・・・(涙)」

「オレが先に声をかけとけばよかったー！！！！(大泣き)」

パロット

「・・・(大汗)」(だから、何なんだよおまえ・・・)

スファレ

「ねえパロット」(ひそひそ)」

「やっぱり、早めにお引取りしていただいたほうが良さそうだね」  
(ひそひそ)」

パロット

「だろ」(ひそひそ)」

「こういう変なやつは、かまってやると調子に乗ってくるからな」  
(ひそひそ)」

エルバイト

「……………(汗)」

「……………しっかり聞こえてるんだよ(大汗)」

ロードライト

「あははっ(苦笑)」「(悪気は無いと思いますよ……………)

4コマ

エルバイト

「とにかく、そのアサシン!」 パロットを指差す

「このオレと勝負しろ!!」(叫び)「(己のプライドとシンセティックさんを掛けて!!)」

パロット

「……………(きよろっ)」 自分の後ろを確認する

エルバイト

「テメエだよ!!」(なめとんのか—————!!)」

スファレ

「あゝ、ちょっとよろしいですか」(汗)」

エルバイト

「ぬ?(なんだ、お嬢さん……………)」

スファレ

「こいつ、アサシンじゃなく ヒーラーなの(汗)」  
「しかも、レベル1……………(ぼそっ)」

エルバイト

「ヒーラーで・・・レベル1(汗)(その身なりで?)

「だが、これでオレの勝ちーーーーっ!!(よっしゃーーーー!)(!)(」

パロット

「・・・なにが?(いつ勝負したよ・・・)」

エルバイト

「オレ、レベル4」

「おまえ、レベル1・・・」

「どう考えても、オレのほうが強いだろ~~~~(あ~~~~はっはっ  
)(」

スファレ

「たしかに、数値的に見ると上回ってはいるけど・・・(汗)(」  
パロットって元ユークナイトだよ?)(

5コマ

パロット

「っていうか・・・」

「1年も経っているのにレベルが4にしかなくてないのなら

「才能無いから冒険者を辞める・・・(ぼそっ)(」

エルバイト

「なああああーーーー!!(ぐさっ!)(」 見えない剣  
が身体に突き刺さる

スファレ

「え~~~~と・・・(汗)(」

「才能無いの？（ときどきとき）」「レベル4だよ？」

パロット

「知っているとは思うが・・・」

「レベルつてのはだんだんと上がりにくくなる」

スファレ

「まあ、そうだね・・・」

「レベル1が2になると、レベル20が21になるのでは」

「必要になる経験値も全然違うし・・・」

パロット

「これは、師匠の受け売りだが」

「レベルの上がるペースというのは大体決まっている」

「当然、後半になるほど上がるスピードが落ちてくるわけだが」

「最初の頃にもたついていて、生涯上昇レベルも低いものになっ

てしまう・・・」

「1年間でレベル4しか上がっていないというのは」

「冒険にも出ずにサボっていたか、レベルを上げる努力を怠った結

果だ」

「つまり、冒険者としては才能の欠片も無い」

「だから辞める！！」

スファレ

「ま、そうだね・・・（うん）」

「不思議のダンジョンという特殊環境限定だったけど」

「わたしも数日でレベル32まで上がったわけだし・・・（チラ

リ）」「エルバイトをチラ見

エルバイト

「う、うぐう〜・・・」(じわり)「目じりに涙が浮かぶ  
「てめえら、これで勝ったと思うなよー！！！！」(涙)「  
身を翻して洋館を飛び出す

「バーカ、バーカ！！！！」(大泣き)「捨てゼリフ

パロット

「……………はあ……………」(やれやれ)「やっと帰ったか……」

「ロードライト〜、今日の夕食なに〜?」

ロードライト

「あっ、はい」

「今日はシチューにしてみました〜」

スファレ

「……………(うん)」

「……………(え〜っ)」

「……………(あれ〜?)」

「……………いまの誰!?」(どきどきどき)「(なんの用だったの!?)」

効果音「ずがが—————ん!!」

コメント

4コマでは収まりきれませんでした(かといって、もう1話  
続けるのはちょっと……)

### 第43話 壁に耳あり

4コマ劇場 アイオライト―403・・・2010/11/10

シリーズ3

タイトル「壁に耳あり」

1コマ

東街地区、拠点の洋館にて・・・

パロットクリソベルル 二階から降りてくる

「うう~~~~ん・・・(ふあ~~~~っ) 身体を伸ばしてあくび

ロードライト キッチンスペースから顔を出す

「あ、パロットさん」

「おはようございます〜」

パロット

「おはよ〜、ロードライト・・・って(汗)」

「もしかして、朝食の準備をしてくれているのか〜？」

「昨日の夕食といい、悪いな・・・」

ロードライト

「いいえ〜」

「ボクが役に立つのはこんなことぐらいですから〜」

「みなさんの身の回りのお世話は任せてください」

スファレライト

「いや〜、パロットくん 　まるつきり寝起きです

「いいお嫁さんもらったね〜〜」にやにや「手すりにも  
たれて二人のやりとりを見ている

ロードライト

「お嫁さんだなんて、そんな〜〜」くねくね「頬を染  
めて身体をくねらしている

パロツト

「って、何を言ってやがる！（汗）」そんなこと言ったらロード  
ライトに失礼だぞ！」

「そんなことより・・・」

「昨日から手伝いの一つもしない誰かさんはいいご身分だな〜!!」

スファレ

「ああ・・・（汗）」

「人にはそれぞれの得意分野というものがあった〜（大汗）」  
明後日の方向を見る

パロツト

「で・・・、何が得意なんだ？」

スファレ

「食べること、寝ること！」

「あとね〜〜」

パロツト

「おまえはもう喋るな!!（うが〜〜!!）」

効果音「ずがが〜〜〜ん!!」

2コマ

ジェムシリカ テーブルに着いて紅茶を飲んでいる

「でもね、スファレさん」

「料理はもちろんのこと、家事ができるのは己の売りになることなのよ」(男女問わず)

「それこそ、特殊技能なわけだし・・・」

スファレ

「ジェムシリカさまー！ー！(どびっくり)」

「あつ、わっ！(汗)」

「わたしったら、何て格好でシリカさまの前に！！(大汗)」  
慌てて部屋に戻る

パロット

「シリカさんより、オレの目を気にしろよ・・・(ぼそっ)」「(ほとんど下着姿だぞ・・・)」

「っていうか・・・(汗)」

「どうしてシリカさんは、当然のような顔で紅茶を飲んでいるんですか？(大汗)」

「オレたちがここに住みだしたこと」

「まだ知らせていなかったですよね」(どこから情報が・・・)「  
住み始めて一晩明けただけ」

シリカ

「ふふふん」

「お姉ちゃんのパロットくんリーダーをなめないでよね」

「・・・まあ、今回はパロットくんじゃなく」

「スファレさんに用事があったんだけど・・・」

パロット

「え？（汗）」

「スファレに……ですか？（なぜ？）」

3コマ

数分後……

シリカ

「スファレさん」

「エリアG探索クエストのとき」

「あなたと一緒に行動していたサイトから聞いたんだけど」

「不思議のダンジョンの最下層で、一つのアイテムを手に入れているわね……」

スファレ

「え、あゝ、はい」

「確かに、不思議のダンジョンをクリアしたご褒美ということで」

「シンセティックさんから、ビー玉みたいな宝珠をもらいました」

「なんでも、1日1回しか使えないようですが」

「5分だけ時間を戻せる時空族の遺産“時の宝珠”だそうです」

シリカ

「はあ……（あの子だったら、なんてモノを渡してるのよ……）」

「では、あの時……」

「パロットくんが巨大マンモス系の魔物に踏み潰されて死んだと思っ  
っていたら」

「次の瞬間、何事も無かったかのように生きていたのは」 サ

イトが助けに入った

「わたしたちの気のせいではなく、その宝珠を使った結果だということ  
ことですね？」

スファレ

「あ、そうです」

「パロットが魔物に潰されて、慌てて宝珠を使いました……（汗）」

「

シリカ

「あなたは、実際に時間が戻る現象を体感したということですね」

スファレ

「は、はい……（それがなにか？）」「（あれ、もしかして尋問されてる？）」

#### 4コマ

洋館の外側にて……

説明文「エルバイトが洋館の壁に耳を当てて、スファレたちの会話を盗み聞きしている」

シリカ（声だけ）

「つまり、あなたが手に入れたのは」

『真正銘のSA級のアイテムということになります』

スファレ（声だけ）

『SA……級？（大汗）』

パロット（声だけ）

『（読者が）わかるようにいえば国宝級』

『あるいは世界遺産……』

『まあ、例外はあるとしても』

『個人所有は限りなく制限されたもの凄いお宝ということだ・・・』

スファレ（声だけ）

『ええー！ー！ー！』（どびっくり）』

『このビー玉って、そんなに凄いものだったのー！ー！ー！』（大汗）』

パロット（声だけ）

『ビー玉って・・・（あのな・・・）』（オレも初めて見るお宝だぞ）

シリカ（声だけ）

『とにかく、一度王室に出向いて意見を仰いだほうがよさそうね・・・』

『わたしも付き添ってあげるから』  
『朝食後、ルチルクオーツ城まで向いましょう』

スファレ（声だけ）

『ええ〜！』  
『わたし、捕まっちゃうんですかー！ー！ー！』（涙）』

パロット（声だけ）

『いやいやいや、それは無いだろう（苦笑）』  
『別に、犯罪を犯したわけじゃないんだからさ〜（あははっ）』

エルバイト 壁に張り付いています（笑）

「・・・・・・・・・・」

「ほお〜・・・（にやり）」「（いいこと聞いた）

「時空族の遺産か〜〜」

「そんなに凄いお宝なら」

「ぜひとも手に入れてみたい……（ふふふつ）」（盗賊の血が騒ぐぜ！）」

突然の登場

店員 A      お向かいの喫茶店の店員さん

「警備兵さん、あの人はです！」      エルバイトが怪しい行動を取ったため通報しました

「あの人が、この辺りに出没している変質者です！！（間違いありません！！）」

エルバイト

「……はあ？（大汗）」（変質者？）」

警備兵長

「おい、その男……（怪しいやつめ！）」

「少し話を聞かせてもらおうか」（ギロリ）」      剣に手をかける

エルバイト

「ちよつ！」

「オレはただ、この家の住人の会話を聞いてただけで！！」  
「犯罪です（笑）」

警備兵長

「……」

「確保……！！」（叫び）」（逃がすな……！！）」

警備兵たち

「はっ！！（待て……！！）」

エルバイト

「って、オレは無実だーーーー！！（涙）」

脱兎

効果音「ずががーーーーーん！！」

コメント

エルバイト、どんどん変なキャラになっていきますね（苦笑）

## 第44話 譲れない戦いは・・・単なる勘違い

4コマ劇場 アイオライト―404・・・2010/11/11  
シリーズ3

タイトル「譲れない戦いは・・・単なる勘違い」

1コマ

ルチルクオーツ城正門付近にて・・・

ロードライト

「SA級アイテム 時の宝珠入手の報告にお城までやって来まして  
たけど(汗)」

「ほ、本当に大丈夫なんでしょうか？(大汗)」

「話も聞かずに門前払いされるような気がします・・・(どきどき  
どき)」

ジエムシリカ

「王室には、ユークレースを通して連絡入れておきましたから問題  
ありません」

「それに、フローラちゃんはあなたたちのパーティメンバーです」

「堂々としていればいいのですよ・・・」

ロードライト

「そっか(そっか)ええ・・・」

「フローライトさま フローラってこの国の代表だったんだよね  
(汗)」

パロットクリソベル

「まあ、フローラがこの国で一番偉かったとしても」

「フローラの迷惑になるから無茶はできないけどな」

「今後もフローラが女王様であることは」

「あまり意識しないほうがいいかもしれない・・・」

スファレライト

「えっ？（汗）」

「同じパーティの仲間だから、お城の出入り自由じゃないの！？（大汗）」

パロット

「当たり前だ！」

「っていうか、どうしてそんな考えになるんだよ！！（大汗）」  
「それこそ捕まるぞ！」

スファレ

「えっっ、お城の中がどうなってるか」

「探検してみたかったのになっっ（残念・・・）」

パロット

「はあ・・・（やれやれ）」

「バカなこと言っていないで行くぞ」

スファレ

「はあっい」

2コマ

ルチルクォーツ城内にて・・・

衛兵たち

「・・・・・・・・（じいっっ）」

パロットたちをガン見

している（笑）

スファレ

「なんとも・・・居心地がわるいね」（針の筵状態？）

パロット

「まあ、彼らはそれが仕事なんだから仕方ないだろう・・・って」  
「なんだ？（向こうの方が騒がしいぞ・・・）」

近衛兵1

「・・・、いらっしやったか！？（大汗）」  
慌しくして  
いる

近衛兵2

「いいや、こちらにはいらっしやらない！！（大汗）」

ロードライト

「なにか・・・あったのでしょうか？（汗）」

シリカ

「・・・あの様子からすると」

「ただごとではなさそうですね・・・（きよろきよろ）」  
辺  
りを窺っていますが盲目です（爆）

パロット

「・・・」  
気配を探っている

「そこか！！（ばっ！）」  
振り返る

突然の登場

フローライト

「た、助けてー！ー！ー！！」(涙)

パロットにしがみつく

パロット

「ふ、フローラー!?」(どびびっくり)

「おまつ、どうしたっていうんだ!?」(いったい何から逃げて・・・)

「

?????

「フローラー・・・」

「もう逃がさんぞ・・・」(ぼそっ)

パロット

「ぬ?」  
声の出所を見る

3コマ

アンデシン                      ルチルクォーツ王国騎士団長(諸事情で名前が  
変りました)

「さあ、フローラー・・・」(つかつか)                      フローラーに近づく

「こっちに来るんだ」(がしっ)                      フローラーの腕を掴む

フローラー

「ちょっと、アンデシンさん!」(汗)                      「痛いです!」

「嫌っ、はなして!」(涙)

アンデシン

「フローラー、いい加減にしないか!」(怒)

フローラー

「ひっ!!--!!」(びくっ)

効果音「ぱしっー!!」 アンデシンの手をパロットが叩きはらう

パロット

「……………(じい〜っ)

アンデシン

「……何のつもりだ?(ギロリ)」

パロット フローラを背後に隠す

「どういった理由があるかは知らないが……(すうーっ) 身構えて柄に手をやる

「フローラに危害を与えろというのなら ぶっ殺す……(ぼそっ)

アンデシン

「理由を知らないのであれば黙っていてもらおう……」

「これは、王政に関わる内容だ」

「冒険者風情が口を挟める問題ではない!!(怒)」

パロット

「そんなこと、知ったことではない……(キラリ)」 抜刀する

「フローラはオレたちの仲間だ」

「仲間の危機を、見過ごすわけにはいかないんでね」

アンデシン

「ほお、見上げた根性だ……(キラリ)」 大剣を抜刀する

「そこまで吼えたんだ」

「ここで殺されても文句は無いんだろうな(激怒)」

パロツト

「ふん……」

「はたして、死ぬのはどっちかな？（ジリジリ）」  
剣を構えて間合いを詰める

スファレ

「ちょー！（汗）」

「なんでこんなところでバトル始めてるのよー！（大汗）」

4コマ

パロツト

「うおおおおおー！……精霊力を高めている」

アンデシン

「はあああああー！……同じく」

効果音「ずごくおおおおおー！……精霊力がぶつかり合ってプチ台風状態」

スファレ

「つて、やめー！……（涙）」

ロードライト

「い、いったい何がどうなって!？（大汗）」（わにゃー！……!）

シリカ　この人、冷静です（笑）

「……」

「で……、何が原因でこうなったの？（どうして追われていたの？）」

フローラ

「あ……（汗）」

「ええ……と……ですね」（苦笑）」

「しばらく冒険に出ていた分、お仕事がたまっちゃって……（どきどきどき）」

シリカ

「それを処理するのが嫌で……」

「逃げようとしていた　と？」

フローラ

「まさに、そのとおり……（えへっ）」　可愛く微笑む

スファレ

「って、何よその理由！？（大汗）」

「あの二人、めっちゃめっちゃハイレベルで」

「殺し合いを始めてるんだよ……！！（大泣き）」

パロット

「どりゃ……！！（ガキン、キーン、ガシャッ、ドガガッ

！）」　騎士団長と互角の戦い

アンデシン

「ぶん、えりゃーっ！！（キーン、ババシッ、ガギューーン！）」

本気で殺しにかかっている

ロードライト

「動きが速すぎて、残像しか見えない!!」(どびっくり)  
「こ、これが高レベル同士の戦い!?」(どきどきどき)「(凄っ!)」

スファレ

「だ、か、ら、ら、ら!!」(汗)

「パロットは、ヒーラーでレベル1だって……!!」(うぎゃ  
—————!!)」

効果音「ずがが—————ん!!」

コメント

「桜のひみつ」を見直してみたら、騎士団長の名前がターフェア  
イトだった……

やっちまった~~~~(苦笑)

名前がダブっちゃった(爆)

第45話 パロットvs・アンデシン、勝者はどっち!?

4コマ劇場 アイオライト―405・・・2010/11/12  
シリーズ3

タイトル「パロットvs・アンデシン、勝者はどっち!?!」

1コマ

ルチルクオーツ城にて・・・

パロットクリソベリル

「うおおおー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！(叫び)」  
無数の剣激を放ちながら突っ込む

アンデシン                      ルチルクオーツ王国騎士団長

「はああああー！ー！ー！ー！ー！ー！(叫び)」  
全て受け止め反撃のタイミングを探っている

効果音「どががっ、どしー！ー！ーん、パラパラ・・・」  
激しくぶつかり合いながら壁につっこむ

ロードライト

「なあー！ー！ー！(大汗)」

「お城の外壁が崩れたー！ー！ー！ー！ー！ー！(どびっくり)」

スファレライト

「あははっ、もはや笑うしかないね〜(笑)」  
「パロット強すぎ(」

ジェムシリカ

「そうですね……(汗)」

「あの戦いを止めに入るのは、かなり難しいです……(大汗)」  
(下手すると巻き込まれます)

フローラ

「……つて!」

「みなさん、そんな落ち着いていないで!!(涙)」

2コマ

パロット

「はっ、だりゃー……!!(ぶーん!)」  
剣を振り下  
ろす

アンデシン

「ふん!(カキーン)」  
大剣で受け止める

「ふふっ、冒険者にはなかなかやるようだな……(にやり)」

パロット

「ちっ……(ガガガッ!)」  
罅迫り合い

「そっちこそ、いうだけのことはある……なっ!(ぱっ)」  
飛び退いて距離を取る

「おい、優男……そろそろ本気でかかってきたらどうだ?(ギロ  
リ)」

アンデシン

「ほお……(にやり)」

「まさか、気づかれるとは思わなかったぞ(ふふっ)」

「そういう貴様も……全力ではあるまい!!(びっしっ)」  
剣先を突きつける

パロット

「まあな……(にやっ)」

スファレ

「ちよっ!(どびっくり)」

「二人とも、あれが全力じゃないの!? (大汗)」

シリカ

「ただの剣と剣とのぶつかり合い……」

「この程度はまだまだ素人レベルです」  
えっ!? (大汗)

ロードライト

「つまり……(汗)」

「ここからパロットさんの」

「アウインの勇者としての戦いが始まるのですね……(じくり)」

フローラ

「うわっ、みなさん既に傍観者!? (涙)」

「パロットさん、アンデシンさん……」

「もう止めて……!……!……! (お城がなくなっちゃっよ

~~~~~!~!~)」

アンデシン

「はあああああ……!……!……!……!……!……!……!……!……!……!
精霊力をもの

凄く高めている

パロット

「うおおおおお……!……!……!……!……!……!……!……!……!……!
同じく

「……っ、え?(汗)」
何かに気づいて空を見上げる

アンデシン

「なんだ？(汗)」 つられて空を見上げる

「ひゃっ、なあああー！(どびっくり)」

効果音「ひゅ~~~~~~~~~~~~う……」 落下音？

3コマ

突然の登場

リウム(魔獣型) 三つ目の巨大な獣(額にある一つ目は暗

黒石)

『パロット~~~~~(ひゅ~~~~~)』 自由落下中

『いい加減にしなさい……ぱくっ』 大きな口を開けて、

パロットを銜え込む

パロット(声だけ)

『んんん！(大汗)』 一瞬にしてリウムの口

の中

スファレ

「なあああー！(どびっくり)」

「パロットが巨大な魔物に食べられたー！(ちょー

！)」

効果音「ずがー！(ん！)」

リウム(魔獣型)

『はむはむはむ……』 パロットを銜えてはむはむ

パロット(声だけ)

『んんん、んんんんん~~~~!!』(じたばたじたばた)
リウムの口から足だけ出ている(笑)

アンデシン

「な、なななっ……(大汗)」(り、リウム……さま!)

リウム(魔獣型)

額の暗黒石から女性の声が聞こえる

『アンデシン!(ギロリ)』(はむはむ)

アンデシン

「ははっ!!!(びっ!)」

背筋を伸ばして直立不動

リウム(魔獣型)

『あなた、自分の立場を忘れていったい何をやっているのかしら?』

(怒)『(はむはむ)

アンデシン

「いやっ、その……ですね(大汗)」

リウム(魔獣型)

『言い訳しない!!!(うがーーーー!!)』(はむはむ)

アンデシン

「も、申し訳ありません!!!(泣)」

パロット(声だけ)

『ん……ん……ん……ん……!!!(じたばたじたばた)』

窒息寸前です(笑)

リウム（魔獣型）

『騎士団長であるあなたがそんなことで』（はむはむ）

『いったいどうするつもり！！（ダメでしょ！）』（はむはむ）

『桜お姉ちゃんに迷惑をかけるようなら・・・（じいっ）』（はむはむ）

『あなたにも、はむはむを・・・（ぼそっ）』（はむはむはむ）

アンデシン

「そ、それだけは勘弁していただけないでしょうか！！（泣）」「（がたがたぶるぶる）

リウム（魔獣型）

『さっさと・・・（にやり）』（はむはむ）

『どうしようかな〜〜（ふふっ）』（はむはむはむ）

フローラ

「え〜と・・・（汗）」

「お話し中にすみません（ちょっとよろしいですか？）」「

リウム（魔獣型）

『え、桜お姉ちゃん、どうしたの〜？』（はむはむ）

フローラ

「あ〜、そろそろはむはむ攻撃止めないと〜（汗）」

「パロットさんが・・・（ときどきどき）」

リウム（魔獣型）

『あ・・・（忘れてた）』『（はむはむ）

パロット

『……………(びくびく)』 死にかけのカエルの
ように(笑)

効果音「ずがが—————ん!!」

リウム(魔獣型)

『ちっ……(汗)』(はむはむ)

『この程度でくたばるなんて(大汗)』(はむはむ)

『パロツトも鈍ったものね』(わたしのせいじゃないわよ!)『(デロリ) パロツトを吐き出す

パロツト

「……………」リウムのよだれでべちよべちよ

「……………」ピクリとも動きません(笑)

「……………」たぶん、絶命しています (爆)

ロードライト

「ぱ、パロツトさあああ〜ん!(涙)」

「ボクをおいて、死なないで〜〜!!(うわあああ〜ん!)

スファレ

「え〜つと、ええ〜〜つと……(大汗)」

「またもや、時空族の遺産の使い時!?(どきどきどき)」

シリカ

「いいから、早く使っちゃってください……(はあ〜)」「(やれやれ)

説明文「勝者……リウムちゃん (爆)」

コメント

時空族の遺産により、パロットはなんとか生き返りました。(笑)

第46話 身近にいた時空族と消えそうな命の灯火

4コマ劇場 アイオライト―406・・・2010/11/14
シリーズ3

タイトル「身近にいた時空族と消えそうな命の灯火」

1コマ

ルチルクオーツ城にて・・・

リウム（人型）

「てなわけで！（ぴしっ！）」 パロットたちを指差す

「わたしはもう行くけど」

「これ以上、桜お姉ちゃんに迷惑かけるようなら」

「今度こそ本気で怒るからね！！（うがーーーーー！）」 本
気じゃなかったのか！？

パロットクリソベリル

「は、はい・・・（しくしくしく）」（「めんなさい・・・」）

アンデシン ルチルクオーツ王国騎士団長

「申し訳ございませんでした！！（びしっ！）」 頭を下げる

リウム

「じゃあ、桜お姉ちゃん」

「まったね～～～（にこっ）」

フローライト

「あ、あはははっ・・・（苦笑）」 手を振っている

「なんかお～めちゃくちゃ・・・（どきどきどき）」 お城

もめちやくちやです (爆)

アンデシン

「おい、冒険者…… (汗)」「みっともない姿を見られて少しだけ気まずい

「おまえ、リウムさんと……どういう関係なんだ?」

パロツト

「リウムさん……」

「オレの師匠なんだ…… (あははっ)」「

アンデシン

「そう……か (大汗)」「

「おまえも、苦労してきたんだな (うんづん)」「パロツトの肩に手を置く

パロツト

「うづづづ (涙)」「

「わかってくれるのか!! (がしっ)」「アンデシンの手をしっかりと握る

説明文「なにやら、二人に友情なような何かが芽生えました (爆)

」

2コマ

SA級アイテム「時の宝珠」入手を報告中……

スファレライト

「ってなわけで」

「この時空族の遺産……どうしましょっ? (汗)」「

フローラ

「どうしましょう・・・って(汗)」

「それはスファレさんが手に入れたアイテムですよ〜」(不思議のダンジョンで・・・)

「これまで通り、スファレさんが持っていたらいいんじゃないですか？(大汗)」

スファレ

「って、フローラもさっきの宝珠の発動を見てたでしょ！？(汗)」

パロットを生き返らせた

「1日1回とはいえ時間を戻せるんだよ！！(5分間だけだけど・・・)」

フローラ

「・・・」

「まあ、確かに激レアアイテムではあるけど(うん)」

「別に時空間転移ができるほどの力があるわけじゃないし」

「それに、スファレさんならちゃんと管理してくれますよね？」(くれぐれも悪用はしないでくださいね)

スファレ

「でも、よく知らないけど 時空族ってやつ遺産なんだよ！」

「時空族なんて聞いたことないし、やっぱりもの凄く貴重なアイテムなんじゃ・・・(大汗)」

フローラ

「あ・・・(汗)」

「じつは、わたしも時空族だったりして〜(えへへっ)」

スファレ

「えええええー！！！！！！（どびっくり）」

効果音「ずががー！！！！！！！！ん！」

3コマ

フローラ

「種族としての時空族は確かに滅んでしまったようですが（あの二人を除いて・・・）」

「まれに別種族の中でも時空能力を持って生まれてくる場合があります」

「そんな時空力を持つ者のことを、現在では時空族と呼んでいるんです」

「とはいっても、この数万年の間で誕生した時空族といえは」

「わたしと、精霊神クリスタル・・・つまりお父さんの二人だけですけどね」（苦笑）」

アンデシン

「ちなみにフローラは」

「そんな時空力を使って、5千年前の時代と現在とを行ったり来たりしている・・・」

「王政をアクアマリンさまに任せっきりで、しょっちゅうな・・・（大汗）」

フローラ

「そして、この姿が（ぼむっ）」

発生した煙に包まれる

「あっちの時代でのデフォルト姿なのだ」

3歳児の如月桜に変身

スファレ

「なああああーーーーー！！！！（どびっくり）」「フローラが縮んだーーーー！！」

パロット

「なるほど……（大汗）」

「過去の時代へ渡ったり、姿をちびっ子に変えられたり……（すげえ〜）」

「そんなの聞かされたり見せられたりしたら」

「時の宝珠なんて、全然たいしたことないように思えてきた（どきどきどき）」

フローラ（桜）

「ちなみに、この3歳児姿の時は」

「桜って呼んでくださいね（にこ〜っ）」

パロット

「いやいや……（汗）」

「呼び方なんて、どうでもいいことだし（大汗）」

フローラ（桜）

「いいえ、名前の呼び方は大切なことです！」
優子にもらった大切な名前です

効果音「わいわいがやがや、わいわいがやがや！」

4コマ

パロットたちから遠く離れた大樹の陰にて……

ジェムシリカ

「はあ、はあ、はあ……（汗）」
胸を押さえている

「うつ！？」

「がはっ！！（べちゃっ！）」

大量の血を吐き出す

説明文「血のかかった草花が、含まれている毒素によって一瞬で枯れてしまう……」

シリカ

「うぐっ……（ぜえぜえぜえ）」 大樹の幹によりかかる

「ターフェの目算、間違っているじゃないのよ」（ううっっ）

「下手をすれば このままここで死んで……ぬ？（汗）」
何かに気づく

ロードライト

「……シリカさん（汗）」 大樹に隠れて様子を見ていた

「いったいどうしたっていうんですか！？（たたっ）」 シリカ
力の元に駆け寄る

「吐血するなんて、ただごとではありませんよ！！（だ、大丈夫ですか！？）」

シリカ

「と、吐血……」

「いったいなんのことかしら？（はてさて？）」

ロードライト

「ごまかしてもダメです！」

「ボク、ちゃんと見てたんですよ！！！」

シリカ

「……」

「イカスミも吐けるでゲソ （だらだらだら）」

口から血を

だらだらと（笑）

ロードライト

「って、何わけのわかんないこと言ってるんですかー！（汗）」
「完全に赤いでしょ！！（それ、イカスミじゃなく血ですよ！）」

シリカ

「……………」

「イカスミならいくらでも吐けるでゲソ（ぶっえ〜）」
口から血をだらだらと（笑）

ロードライト

「だ〜か〜ら〜！！（怒）」（意外と元気ですね・・・？）

効果音「ばきゅ〜〜〜ん！！」

コメント

侵略、侵略、侵略、侵略・・・次回に続く（ぼそっ）
意味
不明！！

第47話 旅立ち、忘却の迷宮へ向けて・・・

4コマ劇場 アイオライト―407・・・2010/11/15
シリーズ3

タイトル「旅立ち、忘却の迷宮へ向けて・・・」

1コマ

1時間ほど前、ルチルクォーツ城にて・・・

ジェムシリカ

「けほっ、ごほっげほっ！」 吐血

ロードライト

「し、シリカさん！（汗）」 シリカの背中をさする

「待っていてください・・・」

「いま、パロットさんたちを呼んできます！（さっ！）」 身を翻す

シリカ

「ロードライトさん！（ぎゅっ）」 ロードライトの腕を掴む

「お願い、パロットくんたちには黙っていて・・・（はぁはぁ）」

ロードライト

「黙っていてって・・・（汗）」

「そんなこと言っている場合じゃー！」

シリカ

「わたしは 大丈夫・・・」

「だから、これ以上あの子に・・・パロットに足かせを付けないで

あけて!!」 必死です

ロードライト

「……………(うーん)」

「それなら シリカさんの身体のことをちゃんと聞かせてください」

「その様子からすると」

「目が見えないだけじゃ……………ないですよね？」

シリカ

「わかりました……………(はあ) 少し落ち着いてきた

「手っ取り早く説明するので」

「まずはお手元に配られた資料に載っている文字だけ4コマ」

『第20話 パロットとシリカの記憶』

『第37話 シリカの命と忘却の迷宮』

「……………をご覧ください」

ロードライト

「……………(汗)」

「……………(大汗)」

「……………はあ?(どきどきどき)」(文字だけ4コマって?)

2コマ

東街地区、拠点の洋館にて……………

スファレライト

「結局、時の宝珠は持ち帰ってきちゃったけど……………」

「本当によかったのかな……………」(コロコロ) テーブルの上
で宝珠を転がしている

パロットクリソベリル

「まあ、フローラの許可も出たわけだし」

「何も問題ないだろう・・・」

「でも、使い時はちゃんと考えるよ」

「おまえ、考え無しで使いそうだし・・・」

スファレ

「って、これまで宝珠を使った2回とも」

「あんたを生き返らせるためだったんだけどな・・・」(じいっつ)

パロット

「その節は、大変ありがとうございました！」(ぺこり)

「って、まあそんなことはおいといて」(苦笑)

「おまえ、城から戻ってくるときのロードライト・・・どう思った？(汗)」

スファレ

「さすがは旦那さん・・・」

「お嫁さんのことはよぉく見てるね」

パロット

「バカなこと言ってないで・・・(汗)」(誰が旦那さんだ・・・)

「ロードライト、行きに比べてなんだか元気なかったように見えなかったか？」

スファレ

「うん・・・(汗)」

「お城で何かあったのかな・・・？」

「ジェムシリカさまも、いつの間にか消えていたし・・・」(どいへいっっちゃったのかな)

パロット

「あゝ、シリカさんは問題ないとしてゝ」（あの人、絶対無敵だから・・・）

「スファレもロードライトのこと気にかけてやってくれなゝ」

スファレ

「りよゝかい」

3コマ

ロードライトの個室にて・・・

回想中ゝ

ロードライト

「・・・忘却の迷宮」

「エリアDにある古のダンジョンですね（汗）」

「あそこは、ボクたちダンジョン管理協同組合の手も入っていない」

「まさに真のダンジョン・・・」

「いまだクリアした冒険者がいない超難関な地下迷宮」

「そこに、シリカさんを治すための何かがあるのですね？」

シリカ

「その可能性があるというだけで」

「実際に何かがあるかはわからない・・・」

「しかも、最深部辺りには不死系の魔物がたくさんいて」

「5年前に行ったユークレーヌの調査では」

「参加していた3人のユークナイトを除いて全滅してしまった（汗）」

」

「今年のユークナイトナンバー決定戦が忘却の迷宮に挑戦するみた

「いだけど〜」

『まあ、運が良ければ、毒素を中和する何かが見つかるでしょう
(3ヶ月後ね〜)』

ロードライト

『つて、そんな呑気なこと言っていていいんですか!?!』

『例えば、その何かというのが特殊なアイテムだったとして・・・』

『正しい使用法なんかを見つけないといけないわけですよね?』

『運良く手に入れたとしても・・・』

『その使用法が判明するまで、シリカさんの身体が保つとは限らない!!! (大汗)』

シリカ

「そのときは、そのときでしょう・・・」

「あ・・・(そうだ)」

「そんな感じで、もしものときがあったら〜」

「パロットくんには、わたしが遠くの国へ旅立ったとでも伝えておいてください(にこっ)」

回想終了〜

ロードライト 冒険用の装備に身を包んでいる

「・・・(がさっ)」 地図を広げる

「エリアD、確か砂漠地帯だったよね」

「その中心部に 忘却の迷宮がある・・・(ごくり)」

「・・・よし!(うん)」 リュックを背負う

4コマ

ルチルクォーツ王都、南街地区にて・・・

エルバイト レンジャーでレベル4

「あいつらぶざげやがっ~~~~」(怒)「(誰が変質者だ!)

「ちっ……、しばらくは東街にはいけやしねえ〜(うう……)」

「つてことは、シンセティックさんにも会えないってことだよな!

?(そんなアー!!)」

「……ぬ?(あれは……)」 何かに気づく

ロードライト(男装バージョン)

「……」 南街門で外出の手続きをしている

エルバイト

「あいつは、シンセティックさんと専属契約したヒーラーの仲間だったよな〜」

「見たところ同行する仲間もいそうにないし……」

「おいおい……(汗)」

「まさか、一人で外に出るつもりなのか?(大汗)」(冗談だろ?)

ロードライト

「……」 南街門を通って外界へ出る

エルバイト

「つて、マジかよ!(汗)」

「本当に一人で外へ出るつもりなのか!?(大汗)」

「……(う〜ん)」 何かを考えています

「ああ、もお!!(たたっ!)」 南街門へ向けて走り出す

警備兵

「ちよ、おい!(キサマ!)」 エルバイトを呼び止める

エルバイト

「あつ、オレはさっきのヤツの仲間なんだ!」

「だから急いでるんだよ!」(手続きは適当にやっとういでくれ)

「ロードライトを追って外界へ」

警備兵

「ま、待て!」(おいこら!」

効果音「ずがが!」

コメント

あれ? エルバイトって意外と良いヤツ!? (汗)

第48話 ロードライトの行方とリーダー問題

4コマ劇場 アイオライト―408・・・2010/11/15
シリーズ3

タイトル「ロードライトの行方とリーダー問題」

1コマ

ルルルクオーツ王都南街門、警備兵詰め所にて・・・

警備兵

「見てください・・・」 記憶石の映像を再生中

「これが、2時間前の映像です」

エルバイト（映像）

『あつ、オレはさっきのヤツの仲間なんだ！』

『だから急いでるんだよ！！（手続きは適当にやっといってくれ）』

『 脱兎』

警備兵

「この直前に」

「問い合わせのあった冒険者ロードライトが王都を出ています」

パロットクリソベリル

「こ、こいつは・・・（汗）」

フローライト

「パロットさん」

「この男に、見覚えがあるんですか？（汗）」

パロット

「ああ……（「くり）」

「昨日の夜、シンセティックさんから借りた洋館に現れた変質者だ・
・（大汗）」 違います（笑）

フローラ

「へ、変質者!？（汗）」

「じゃ、じゃあ」

「ロードライトさんは、この変質者に狙われて……（大汗）」

「ああ、ロードライトさん……どうかご無事で……（うるうる）」

「もはや祈るしかない」

2コマ

スファレライト

「ねえパロット……」

「いますぐ助けにいきましょう!」

パロット

「まあ待て……」（少し落ち着け）

「それで、ロードライトはどこへ向かったのか、わかりますか?」

警備兵

「え〜っと、それは……（ちらり）」 フローラに視線を向ける

フローラ

「これは人命にかかわる問題です」（プライバシーとかいっている
場合ではありません）

「外出申請書にある目的地を教えてくださいませんか?」

警備兵

「は、はい・・・(汗)」

「冒険者ロードライトの記入した目的地は」

「エリアDにある『忘却の迷宮』です・・・」

パロット

「なっ!?(大汗)」

「忘却の 迷宮だと(どびっくり)(どうしてそんなところに・・・)」

スファレ

「忘却の・・・なにそれ?(汗)」 よく知りません

パロット

「5年前、シリカさんがオレを助けるため」

「盲目になってしまった場所だよ・・・(ぼそっ)(思い出したくもない)」

スファレ

「えっ、ジェムシリカさまが!?(汗)」

3コマ

パロット

「とにかく、ロードライトが本当に忘却の迷宮にいったんだとすれば」

「オレたちのパーティだけじゃ力不足だ」(間違いなく全滅する)

スファレ

「ええっ!」(そんな危険な場所なの?)

「じゃあ、どうすれば!?!?」

パロット

「……………(うん)」

「やはりナンバーズに助けを求めるしかないか……」

「オレ、ちよつとユークレースにいつてお願いしてくる」(あまり顔を出したくはないが……)

スファレ

「ま、待って！」

「わたしも、わたしもいくから!!」

パロット

「……ぬ？」

「メンバーを派遣してくれるよう、頭を下げにいくだけだぞ(汗)(何も楽しくないぞ)」

スファレ

「ロードライトはわたしたちパーティのメンバーになった……」

「だから、これはわたしたちパーティの問題でしょ！」

「フローラもそう思うよね!!」

フローラ

「……え?(汗)」

「ロードライトさんって、わたしたちのパーティメンバーになったんですか?(大汗)」
初耳です

パロット

「あ……………(汗)」

「びみよくに話がかみ合っていないな(大汗)」

「おまえ、フローラに説明していなかったのかよ?(どきどきどき)」

「(ロードライトがメンバーになったって)

スファレ

「っていうか、そんなことリーダーであるパロットが説明しておくことじゃないの……(汗)」

パロット

「……は?(大汗)」(リーダー?)

4コマ

フローラ

「ええ〜っと、この際ですから最終確認しておきますね(汗)」

「わたしたちのパーティって……」

「リーダーはスファレさんですよね?(大汗)」

スファレ

「って、ええ……………!(どびっくり)」

「ちよっ!(大汗)」

「リーダーは、パロットでしょ〜!?(どきどきどき)」

パロット

「ちよっと待て(汗)」

「なんでオレがリーダーなんだ!」

「おまえが中心となって始めたパーティだろ?」

「当然、おまえがリーダーだ!!」

スファレ

「むりむりむり!(汗)」

「(読者の)みなさんお忘れかもしれませんが」

「わたしってば、戦士でレベル1なんだよ」

「リーダーだなんて責任ある立場、絶対に無理だつて！！（大汗）」

パロツト

「そんなこというなら」

「オレは、ヒーラーでレベル1だぞ・・・（ぼそっ）」

フローラ

「わたし、お姫さまでレベル1・・・？（汗）」 意味不明

スファレ

「・・・（汗）」（みんなレベル1）

「じゃあ、やっぱりレベルが一番高い」

「ロードライトがリーダーってことで・・・（ぼそっ）」 □
ロードライトは商人でレベル18

パロツト

「ああ、そうだな・・・」

K 「ロードライトなら適任だ（ぼそっ）」 自分じゃなければO

フローラ

「そうですね・・・」

「ロードライトさんがいない間に（意見を聞く前に）」

「リーダーに決めちゃいましょう（にこっ）」 ひどっ！！
（笑）

説明文「てなわけです、リーダーはロードライトに決定（ずが
がーーーーーん！！）」

コメント

はい、わかっております自覚しております。最近、微妙に笑いが少ないってことを・・・(爆)

第49話 依頼料は出世払いの方向で・・・

4コマ劇場 アイオライト―409・・・2010/11/16
シリーズ3

タイトル「依頼料は出世払いの方向で・・・」

1コマ

冒険者ギルド、ユークレースの事務所にて・・・

シトリン ユークレースのギルドマスター

「エリアDにある忘却の迷宮へ向かった仲間を助けるため」

「ユークナイトに同行してほしいと・・・？」

パロツトクリソベリル

「はい・・・(こくり)」

「知つてのとおり、忘却の迷宮はただのダンジョンではありません」

「オレたちのパーティだけじゃ、すぐさま全滅してしまう・・・」

「だから、ユークナイトの何人かに」

「ついてきてもらいたいのですが」(汗)

シトリン

「そう・・・ですか(うん・・・)」

「ですがパロツトさん・・・」

「ユークナイトを雇うのって、高いですよ(ぼそっ)() (依頼料払えるのですか?)」

パロツト

「う・・・ぐっ(汗)」

スファレライト

「えっ！（どびっくり）」

「お金いるの！？」（どきどきどき）」

シトリン

「はい、まあ」（もちろんです）

「ボクたちも、いちおう冒険者ですから」（ボランティアはやっておりません）

スファレ

「そ、そんな～・・・（涙）」（この前は二人もきてくれたのに）

2コマ

パロット

「いまは依頼料を払える余裕はない（汗）」

「だから、後から支払うってのは・・・ダメか？（大汗）」

シトリン

「はい」

「うちは即時払いをモットーにしていますから」（出世払いはダメです）

パロット

「そこをなんとか・・・お願いできないだろうか！（ペこり）
頭を下げる

「このままじゃ、ロードライトが危ないんだ！！（大汗）」

シトリン

「・・・（微笑）」（パロットに気づかれないように

微笑む

「では、ごうじましょう。」

「ユークナイトを無償で派遣する代わりに……」

スファレ

「無償！」

「やうた」

シトリン

「パロツトさん、あなたがユークナイトとして」

「このユークレースに戻ってきてください……」

パロツト

「……………(汗)」「やはりそうきたか……………」

スファレ

「って、ええ—————!!(どびっくり)」

効果音「ずがが—————ん!!」

3コマ

シトリン

「あなたがユークナイトに復帰してくださいれば」

「ボクたちも仲間として全面的に協力させていただきますよ」

パロツト

「う……………ぐ(汗)」

スファレ

「ぱ、パロツト……………(じいっ)」「心配そうに見つめる

パロット

「しかし、オレはもうスファレたちとパーティを組んでいる・・・
(汗)」

「こいつらを見捨てて、オレだけユークレースに戻るわけにはいかない(大汗)」

シトリン

「それで、いいのですか？」

「このままでは“誰も”助かりませんよ(ぼそっ)」

パロット

「……………(汗)」

シトリン

「そんなに難しく考える必要はありません・・・」

「ユークナイトに復帰してくれさえすれば」

「普段はどこにいようと黙認することにしましょう」

「あなたたちのパーティで、自由に冒険へ出ても構いません」

「ただし、月一のメンバー会合には必ず参加すること・・・」

「あと、ユークナイトとしての依頼があればそちらを優先させること・・・」

「これらを守っていただけさえすれば」

「いまのパーティに所属したままでも構わないことにします」(メインの所属はユークレースになりますか・・・)

フローライト

「なるほど・・・」

「破格の条件ですね・・・」

「つまりは、パロットさんがユークナイトに戻りさえすれば」

「全てが解決するということですね？」

シトリン

「まさに、その通り」

4コマ

パロット

「・・・ちっ（汗）」（足元見やがって〜）

「ロードライトのことを考えると悩んでいる場合ではないようだな（仕方ない・・・）」

「シトリンさん」

「オレとユークナイトの再契約をしてくれ！」

シトリン

「わかりました（にっこり）」

「では、あなたにナンバー13の位を与えましょう・・・」（ナンバーが上がるようがんばってください）

「そして・・・（ちらり）」 事務所の奥をチラ見

一般メンバー

「・・・・・・・・・・・」 大きな布のかかった何かを運んでくる

シトリン

「これは、ユークナイトを象徴する文様の入った簡易な騎士鎧です」

布を取る

「パロットさんには、常にこの鎧を纏ってもらうことになります」

「アウインの紋章も入った特注品なんですよ」

パロット

「って、なんでこんな大げさな鎧を・・・（ぶつぶつ）」 素直に鎧を身に纏う

「さあ、これで満足か?」(どうだ?) 「鎧姿を見せる

シトリン

「よくお似合いですよ」(にっ) 「

スファレ

「か、かつこいい」(うっとり) 「

「なんか、パロットじゃないみたい」(どきどきどき) 「

フローラ

「パロットさん、素敵です」

パロット

「あ、いや、まあ」(汗) 「

「なんにしても、ヒーラーでレベル1なんだけどな」(あはは) 「

スファレ

「ある意味、違和感バリバリのヒーラー誕生だね」(笑) 「(今まで以上に戦士系)」

シトリン

「あ……」(汗) 「(そうだ!) 何かを思い出した

「その、ヒーラーについても勇者への転職を希望……」

パロット

「あ、それは絶対に無理……」(ぼそ) 「(さっきの条件には入っていませんでしたよね?)」

シトリン

「し、しまった……!」(涙) 「(遅かった……!)」

効果音「ずがが—————ん!!」

コメント

タイトル変えないといけなくなるから、パロットはヒーラーのままです
(もちろんレベルも1のまま・・・)

第50話 挑戦！忘却の迷宮・・・前哨戦？

4コマ劇場 アイオライト― 410・・・2010/11/17
シリーズ3

タイトル「挑戦！忘却の迷宮・・・前哨戦？」

1コマ

ルルルクオーツ城、冒険者管理組合にて・・・

リユーコガーネット

「ん〜？」

「なんだか外が騒がし・・・」 ざわめきが聞こえてくる

突然の登場

パロットクリソベリル

「リユーコさん！（がちゃっ）」 扉を開けて飛び込んでくる

「預けておいたオレの剣・・・返してもらえますか！！」 5
年前旅に出る前に預けた

リユーコ

「パロット・・・くん？（汗）」

「えっ、なに！」（その姿・・・）

「パロットくん、ユークナイトに戻ったの！？（どびっくり）」
なるほど、だから外が騒がしかったのね！？（

パロット

「いや、まあ、そうなんです・・・」

「そんなことより、ちよつと忘却の迷宮へ行くことになって〜」（

急いでいるんですよ！)

「師匠から譲り受けた聖剣クリソベルルの力が必要になったんです！」

リユーコ

「つて、ちよつと落ち着きなさい！！(ばん！)」
机を平手打ち

パロツト

「うっ……(汗)」

リユーコ

「……………」

「ユークナイトに戻ったのなら、冒険者カードの書き換えが必要でしょう？」

「聖剣クリソベルルを取りにいっている間に更新できるから」

「さつさとカードを出しなさい……(さあ〜)」

パロツト

「いや、職業を変えたわけじゃないので」(転職手続きしてないでしょ?)

「カードの更新は必要ないと思うんですが……(汗)」(ほら、更新のお知らせは点滅していませんよ)

リユーコ

「……………(大汗)」

「あなた、ヒーラーのままなの?(どきどきどき)」(ユークナイトのくせに?)

パロツト

「もちろん、ヒーラーですよ」(それが何か?)
魔王退治できるヒーラーです
単独で

効果音「ずががーーーーーん!!」

2コマ

ルチルクォーツ王都、南街地区・街門前にて・・・

スファレライト

「冒険者の憧れ、ユークナイトのナンバーズで」 No.13

「かっこいい騎士鎧に身を包み、宝石のような刀身の聖剣を背負っている」

「でも、職業がヒーラーでレベルは1・・・(汗)」

「・・・・・・・・」

「あんなバカく?(ぼそっ)」

パロット

「ほっとけーーーー!!(うにやーーーー!!)」 通行
人たちに大注目されています

フローライト

「へえ・・・・・・・・」

「パロットさん、リウムちゃんから聖剣クリソベリルを譲り受けていたんですか・・・」

「アウインの勇者としては当然なのかもしれませんね」

「まあ、聖剣としての力は発揮できていないみたいですけど・・・

(ぼそっ)「 攻撃力の高いただの剣

パロット

「ん?」

「フローラ、何かあったか？」

フローラ

「いいえ、なんでもありません」（気にしないでください）

「そんなことより……」

「派遣されるユークナイトはどうなったんでしょう？（きよるきよる）」

突然の登場

アンデシン

ルチルクォーツ王都騎士団長

「……（ふっ）」 　　いつの間にかフローラの後ろに立っている

フローラ

「って……え！？（びくっ）」 　　アンデシンの存在に気づく

3コマ

アンデシン

「おいこらフローラ！（がっ）」 　　フローラを羽交い絞め

「おまえ、仕事もせずに」

「いったいどこへ行くつもりだ？（怒）」

フローラ

「ちよっ、アンデシンさん！」（はなしてください！）

「アンデシンさんの言いたいことは、よぉくわかります」

「でも、わたしたちの仲間が大変なんです緊急事態なんです――

――！！（涙）」

アンデシン

「ダメだ・・・(怒)」

「仕事が終わるまで・・・絶対に逃がさん(ギロリ)」
フロ

フローラ

「そ、そんなーーーーー!!!(涙)」

アンデシン

「だいたい、なぜオレがおまえのお守りをしなければならんだ・
・(ぶつぶつ)」

「オレにも騎士団長としての役目があるのだぞ!!(しくしくしく)
」

フローラ

「そ、それは・・・(大汗)」
アンデシンのいじごどぐらい
しか聞きません

アンデシン

「とにかくパロット・・・(おまえ、装備を変えたら雰囲気も変
わったな?)

「今回はフローラを同行させるわけにはいかん」
「理解してくれ・・・」

パロット

「あゝ、フローラの時空能力が無いのは痛いが(汗)」
時
間よとまれ

「夏休みの宿題があるなら仕方ないな・・・(うんづん)」
季節は関係なし

フローラ

「ちよつ、パロツトさ〜〜ん!! (涙)」「(夏休みの宿題じゃないですよ〜〜!!)」

説明文「フローラがパーティから外れました (ずががー)ー
ん!)」

4コマ

フローラがアンデシンに連れられていってから10分後・・・

スファレ

「ねえ〜、一緒に来てくれるユークナイト・・・まだなの〜?」
待ちくたびれた

パロツト

「う〜ん・・・(汗)」「(確かに遅すぎ・・・)」

「どうやらほとんどのユークナイトが出払っているらしく」

「手が空いているのは、シリカさんとサイト・・・」 昨日まで
一緒に冒険していた

「あと、ユークナイト・ナンバー11のシーライトってやつがきて
くれるそうだ」

シーライト?

「・・・・・・・・」 パロツトの真横に立っている

スファレ

「シーライト・・・」

「初めて登場するユークナイトだね」

パロツト

「最近、ユークレースのメンバーになったユークナイトだから」

「オレも、どんなヤツなのかは知らないんだ・・・」
「だから、シリカさんかサイトがきてくれないと」
「近くにいたとしても気づかない可能性があるな」
「まあ、ユークナイトなら装備のどこかに文様が入っているはずだから」

「注意深く捜してみれば・・・(きよろきよろ)」

シーラ？

「・・・・・・・・・・」
別に隠れているつもりはないが気づかない

ポルーサイト

「おゝい、パロット」
手を振りながら近づいてくる

ジエムシリカ

「お待ちせいたしました (にこり)」
「さあ、メンバーもそろっていることですし」(フローラちゃんは今回パスですよね?)
「早速、出発いたしましょうか」

パロット

「えっ?(汗)」

「まだ、シーライトってヤツがきてないですよ!?(大汗)」(後から追いついてくるんですか?)

サイト

「何いつてる・・・・・・・・」

「さつきから、おまえのすぐ隣にいるじゃないか・・・」

パロット

「ええっ？（どびっくり）」 慌てて真横を見る

「って、ほんとにいたーーーー！！（どびっくり）」

シーラ 16歳ぐらいの女の子（無口）

「……………（しゅたっ！）」 手をかざして挨拶をする

スファレ

「なんか、変わった子だね……………（どきどきどき）」（わたしと同じ年ぐらい？）

コメント

シーラの職業は……………忍者とかでいいか？

適当に決定

第51話 シトリン、驚きの職業

4コマ劇場 アイオライト―411・・・2010/11/18
シリーズ3

タイトル「シトリン、驚きの職業」

1コマ

ルチルクオーツ、エリアAにて・・・

シーライト てくてく歩いている(無言)
「・・・・・・・・」

スファレライト

「ねえ、パロット〜・・・(ひそひそ)」
「シーライト・・・シーラってユークナイトなんだよね〜？(じい
〜っ)」 シーラを凝視する

パロットクリソベリル

「ん？」
「ナンバー11のユークナイトで間違いないはずだが・・・(それが?)」

スファレ

「いや・・・」
「パロットやシリカさま、ぎりぎりサイトまではわかるんだけど〜
サイトはかなり微妙〜」

「シーラは、ユークナイトって感じがしないんだよね〜(苦笑)」
「どっちかっていうと、忍者・・・みたいなの？(大汗)」

ジェムシリカ

「スファレさんの予想通り」 会話に参加

「シーラさんの職業は忍者ですよ」

スファレ

「えっ、やっぱりそうなんですか!?(どびっくり)」

2コマ

パロット

「で・・・?」

「シーラは忍者ってことらしいが・・・」(見た目どおりなんだな・
・・)

「ユークナイトって感じがしない とは」

「いったいどういうことなんだ?」(間違いなくユークナイトだ
る?)

スファレ

「えっつとね(汗)」

「ユークナイトは、ユークレースの騎士って意味だよな?」

「ナイト・・・騎士って名乗っているのに職業は忍者なんだよ」

「それっておかしくない?(大汗)」(あんたはヒーラーでレベル
1だし・・・)

パロット

「なんだ、そういうことか・・・(はあ)」

スファレ

「ええっつ?」

「当然の疑問だと思うけどな」(汗)」

シリカ

「ユークナイトの全員が騎士というわけではありませんよ」

「どちらかというところ騎士は少数派ですね」 シリカは精霊騎士です

パロツト

「いまはヒーラーだけど、オレはもともと勇者だし」

「サイトは、変わってなければ槍斧戦士だな」

スファレ

「それって、ナイトじゃないじゃん!! (どびっくり)」

ポルーサイト

「ん〜? (なんだ?)」 名前が聞こえて反応した

3コマ

シリカ

「ユークナイト・・・というのは」

「周りの人々が呼び始めた名称なんですよ」

「ユークレースの中では、ナンバーで言い表すのが普通なんです」

「でも、最近はナンバーのことをユークナイトと呼ぶことが多いですね」 (その方がかつこいいですし)

パロツト

「ナンバーズは、純粹に強さの序列で、職業は関係ない」

「知ってるか？」

「ギルドマスターでナンバー1のシトリンさんの職業・・・ (汗)」

スファレ

「・・・? (汗)」 (シトリンって、あのちびっ子?)

「そんなことを聞くぐらいだから、よっぽどのおもしろ職業なんだよね？」(苦笑)

パロット

「面白い　っていうか、意味不明？(大汗)」　理解不能？

「シトリンさんの職業・・・団体職員なんだ(ぼそっ)」

スファレ

「・・・・・・・・」　啞然

「・・・・・・・・」　呆然

「・・・・・・・・」　愕然

「だ・・・、団体職員！？(大汗)」(な、なにそれ!?)

パロット

「そう・・・」

「・・・団体職員(大汗)」(まったく、どこの団体なんだよ・・・)

スファレ

「そ、それって？」(汗)

「もはや冒険者ですらないんじゃない？」(どきどきどき)」

シリカ

「それでも、他のユークナイト全員で戦っても」

「シトリンさんにはかなわないのよ」(強さの次元が違うみたい)

スファレ

「だ、団体職員すげええええー！！！！(どびっくり)」

効果音「ずががーーーーーん!!!」

4コマ

時を同じくして、冒険者ギルド ユークレースの応接室にて・・・

シトリン 職業、団体職員 (爆)

「わざわざお越しいただいてすみません・・・」

「じつは、あなたにお願いしたいことがあるのです」

???? 見た目13歳ぐらいの女の子

「えーっと」

「お願い・・・ですか?」

シトリン

「はい(にくり)」

???? 動きやすそうな巫女装束を着ています

「・・・?」

シトリン

「じつは、このユークレースに復帰したメンバーとその仲間が」

「忘却の迷宮と呼ばれる危険度の高い天然ダンジョンへ向かったの

です・・・」

???? 特徴のある腕輪をしています

「忘却の迷宮ってあそこですよね?」

「砂漠地帯の真ん中ぐらいにある古代文明系の地下迷宮」

シトリン

「ご存知でしたか・・・さすがですね」

???
緑色でボールのように丸いかっぱのぬいぐるみを抱
えています

「1300年ほど前に、一度潜ったことがあります」
え？
（大汗）

「あそこはモンスターがどうかではなく、怨霊のような思念が渦
巻いていて」（地下に進むほど）

「普通の冒険者では太刀打ちできないとおもいますよ」

シトリン

「まさに、そのことをお願いしたいんです！」

「どうか、忘却の迷宮へ出向いていただき」

「メンバーに復帰したパロットというユークナイトを助けていただ
けないでしょうか？」

???

時折、懐の中からチリンと鈴の音が響きます

「なにか、理由があるようですね？」

「・・・わかりました（すっ）」
立ち上がる

「お役に立てるかどうかわかりませんが・・・」

「そのパロットさんを見つけて、一緒に忘却の迷宮へ潜ることにし
ましょう」

シトリン

「まだ、彼を死なすわけにはいきません」

「どうかよろしくお願いします・・・」

「樹神こたま・・・美咲みさきさん」

美咲　見た目は13歳ですが、5千年は生きています　（消
滅した人間界出身）

「お任せください（にこっ）」

「パロットさんは、わたしが護ります!!（うん）」

説明文「伝説の退魔巫女（樹神の退魔師）、樹神美咲 見参!!

（ずががーーーーーん!!）」

コメント

今回の更新は・・・11月22日を予定しています この

土・日は更新できません（爆）

第52話 商人ならではの戦い方

4コマ劇場 アイオライト―412・・・2010/11/19
シリーズ3

タイトル「商人ならではの戦い方」

1コマ

パロットたちから先行すること2時間、エリアAにて・・・

突然の登場

エルバイト レンジャーでレベル4

「どっしえー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！(ずどどどっ！)」 全力で走
ってくる

ロードライト

「ん・・・？」 エルバイトに気づく

「あれって、昨日来たアルバイトの人・・・(汗)」(あるいは変
質者?)

「何をそんなに慌てて・・・って！(大汗)」 エルバイトの
背後の存在に気づく

「なあああー！ー！ー！ー！ー！ー！(どびっくり)」

エルバイト

「たす、助けー！ー！ー！ー！ー！ー！(いやあああー！ー！ー！)」

坂本さん 再登場のティラノ (爆)

『あんぎゃー！ー！ー！ー！ー！ー！(怒)』 エルバイトを追い回
しています(笑)

効果音「ずががーーーーーん!!!」

2コマ

坂本さん

『ぎゃーーーーーす!』

『がしつ、がしん!』

エルバイトを銜えようと何度も攻撃

エルバイト

「つて、冗談じゃねえ! (大汗)」 何とかかわしている

「まさか、外界がこんなに危険なところだったとは!!! (涙)」

初めて外に出ました

「こんなんじゃ、あのちびっ子も」

ロードライトのことです

「今頃、どこかで魔物の腹の中・・・ (涙)」

「そして、このオレも近いうちにあいつの腹の中~~~~ (しくしくしく)」

「とか思っていたら、前方にあのちびっ子を発見! (汗)」 (無事

だったのか!)

「お、おい!」

「早く、逃げ・・・ええ!? (どびっくり)」

ロードライト

「前回の冒険では食べられそうになりましたからね・・・」

なにやら筒状のパーツ類を組み立てている

「坂本さん対策は、ばっちりです!!! (かちやっ!)」 バズ

「カー砲みたいなのを担ぐ」

エルバイト

「ちよーーーーー!!! (大汗)」 (なにやら嫌な予感が・・・)

ロードライト

「目標 坂本さん……(ピュピュピュミン、ピューーッ!)」

ロックオン

「シンセティック・カノン」 武器名?(笑)

「ファイアー……!」 (かちっ) 「 発射ボタンを押す」

効果音「ずじじじじじ……!」 ミサイル

(?) が坂本さんめがけて発射される

3コマ

坂本さん

『……あぎゃ?(なんだ?)』 爆音に気をとられる

エルバイト

「なああああ……!」 (悲鳴)

「ちよつと、ちよつと……!」

効果音「がががつ、どっごおおおおお……ん……!」

坂本さんに着弾して大爆発

坂本さん

『あんぎゃ……!』 (涙) 爆風に吹き飛ばされる

エルバイト

「がぎゃ……!」 同じく

ロードライト

「……」

「……(汗)」

「……………(大汗)」
「…………あれ?(どきどきどき)」 思わずシンセティック・
カノンを見る

4コマ

エルバイト 上空に飛ばされる

「…………あが…………ぐえ…………(ひくひく)」 真っ黒焦げ

効果音「ひゅ〜〜〜〜〜〜…………ぐちゃっ」 落下して地面
に激突

エルバイト

「……………(だくだくだく)」 もちろん血だらけ

ロードライト

「ちよっ、えっ!?(汗)」

「あれっ、なんで!!!(大汗)」

「お姉ちゃん」

「麻酔弾だつて言つてたのに……………!!!(涙)」

エルバイト

「どこが麻酔弾じゃ……………!!!(しびれ)」

ロードライト

「え〜っつと、でも、ほら〜(汗)」

「みんな助かつたわけだし…………(大汗)」

「良かったね、アルバイトさん(にこっ)」

エルバイト

「良くねえ〜し、アルバイトでもねえええ〜！！！！！！（があああ〜！！！！！！）」

ロードライト

「あはっ、あはははははっ（苦笑）」　笑ってごまかそうと
しています（爆）

説明文「この物語はフィクションです。実在の人物及び団体とは・
・え、くどいですか？（笑）」

コメント

シンセティック・カノンは、シンセティックが創った・・・麻酔
弾です（爆）

第53話 ロードライトとエルバイト

4コマ劇場 アイオライト | 4 1 3 2 0 1 0 / 1 1 / 2 2
シリーズ3

タイトル「ロードライトとエルバイト」

1コマ

ルチルクオーツ、エリアAにて・・・

ロードライト

「ところでアルバイトさん」(よあしく聞いてくださいね)

「こんなボクが言うのはなんですが」(汗) 「ギリギリ単独
行動レベルに達している(レベル18)

「レベルも低いのに一人で外界へ出るなんて・・・危ないですよ
大汗)」(たしかレベル4でしたよね?)

エルバイト

「ああ・・・(汗)」

「冒険者管理組合の姉えちゃんが言った意味がよしくわかった
(大汗)」

「マジで死にかけた・・・いや」

「実際には、おまえに殺されかけたわけだが・・・(じいじいっ)

抗議の視線

ロードライト

「それはっ!(汗)」

「その・・・ごめんなさい!!」(ぺこり)

「ま、まさか、お姉ちゃんが創った麻酔弾 シンセティック・カ
ノンが」

「あんなに危険なものだったなんて思わなくて」（苦笑）
シンセティック本人は麻酔弾のつもり

エルバイト

「だ〜か〜ら〜、どこが麻酔弾だつて・・・あれ？（汗）」

「し、シンセティック・・・カノン？（大汗）」

「おまつ、もしかして!？」

「お前の姉えちゃんつて!!！」

ロードライト

「はい」

「昨日からアルバイトさんが口走っている」

「シンセティック商会代表のシンセティックです」 そのま

まかよ（笑）

エルバイト

「おおおおー！ー」（すげえ偶然!） この人、シン

セティックのことが大好きです（ストーカー?）

2コマ

ロードライト

「まあ、ボクのお姉ちゃんが誰かなんて」

「この際、どうでもいいことですけど・・・」

エルバイト

「いや、そんなことないぞ！（がばっ）」 ロードライトの肩

を掴んで前後に揺する

「むしろ、シンセティックさんの弟つてことが重要だ!！」

ロードライト

「あつあつ〜（ぐらぐらぐら）」 「目を回す

エルバイト

「そっか〜、シンセティックさんの弟か〜」（うつとり）「

ロードライトを開放して妄想の世界へ・・・

「この機会に、シンセティックさんと・・・お、お近づきに!〜!）
どきどきどき（き）緊張してきた〜!）

ロードライト

「あ〜、いちおうボクは妹なんですけどね〜（苦笑）」（別にいい
ですけど・・・）

エルバイト

「ん〜?」

「何か言ったか〜?」

ロードライト

「うん、なにも〜（あははっ）」

3コマ

エルバイト

「つとまあ〜、シンセティックさんのことは王都に戻ってからにし
て〜」

「おいちびっ子!〜」

「さっきのおまえの言葉」

「そっくりお前に返してやる」（ぐらぐらぐらぐら） 「必殺! コメ
カメラアタック!〜!」

ロードライト

「っつて、痛たたっ!（涙）」

「な、何をするんですかアルバイトさん!!(うにゃ~~~~!)」
(世が世ならセクハラですよ!)

エルバイト

「うるさい黙れ!!(怒)」「うが~~~~!!」

ロードライト

「ちょっ!(むっ!)」

「どうしてアルバイトさんにボクが怒られないと」

エルバイト

「いくら冒険者だからといって」

「子どもが一人で外界に出たら危ないだろ!(怒)」

ロードライト

「.....(怒)」「こ、子どもだって~!?!」

「.....あれ?(汗)」

「もしかしてアルバイトさん」

「ボクのことを心配して ついてきてくれたんですか?」

エルバイト

「ななっ!?(どびっくり)」「凶星

「そそそ、そんなわけ.....ないだろう(どきどきどき)」

照れて明後日の方向を見る

4コマ

ロードライト

「.....(じい~~~~)」「エルバイトの様子を窺う

「アルバイトさんって」

「意外にいい人なんですネ~~~~(にこ~~~~)」

エルバイト

「ちよっ!」

「なに勘違いしてやがる!!」

「オレはな、おまえん家の辺りで変質者と呼ばれているぐらいの悪人で」

ロードライト

「へ……、変質者!? (ひっ!)」 おびえています

笑)

「…… (かちやつ) シンセティック・カノンを

無言で構える

エルバイト

「ちよっ! (大汗)」

「そんな物騒なモノ、人に向けるんじゃねえええ!! (叫び)」

(殺す気が……!!)

ロードライト

「あははっ」

「心配しなくても大丈夫ですよ (にこっ)」

「だって、これ……」

「ただの麻酔弾なんですから…… (ぼそっ)」 目が据わっています (笑)

エルバイト

「お、落ち着け……! (汗)」

「それは間違いなく武器だ!!」

「しかも、もの凄え、強力な…… (大汗)」

ロードライト

「変質者は・・・世の中のためになりません（ふふふっ）」「何かあつてからじゃ遅いです・・・」

「だから、ここでボクが始末しないと」（ピピピピッ、ピピーーッ！）」「ロックオン（爆）」

エルバイト

「ご、ごめんなさい嘘です！」

「変質者じゃありません！！（涙）」

「ほ、本当は、一人で外に出ようとしているおまえを見かけて」

「危ないって思ったら、知らないうちに外界へ飛び出していてー
ー！ー！！（泣）」（撃たないでー！）

ロードライト

「・・・（じい〜っ）」 エルバイトを観察中〜

「な〜んだ、やっぱりそうだったんですね〜」

「まあ、アルバイトさんってば、無理に悪ぶっちゃったりして」

「悪人と勘違いされるから、そんなことやめたほうがいいですよ

（カチッ）」 何かのボタンを押し込む

「あ・・・（汗）」（しまった・・・）

効果音「ずごー！ーっ、どががー！ー！ーん！！」

ミサイル（？）がエルバイトに命中

エルバイト

「わぎゃー！ーあ、いやな感じ〜・・・（きらりん）」

ぶっ飛んで星になりました

ロードライト

「・・・（大汗）」（あ〜〜） 星になったエル

バイトを見つめる

「さて・・・と」

「気を取り直して、忘却の迷宮に向かおうっかな〜」 (苦笑)

エルバイト

「って、マジで殺す気が――！！！！ (うぎゃ――！！！！) !」 戻ってきました

ロードライト

「復活速っ！！ (どびっくり) (この人、何者!?)」

コメント

こうして、ロードライトとエルバイトの間に、斬っても切れない絆が・・・いや、深い溝ができました (爆)

第54話 なかなか追いつかないのは誰のせい？

4コマ劇場 アイオライト―414・・・2010/11/23
シリーズ3

タイトル「なかなか追いつかないのは誰のせい？」

1コマ

ルチルクオーツ、エリアAにて・・・

ポルーサイト

「ロードライトって、昨日王都に送り届けたあのちびっ子だよな？」

「なんでまた忘却の迷宮へ行くなんて、バカなことを考えたんだ？」
（汗）

「確実に死ぬぞ・・・（ぼそっ）」

パロットクリソベリル

「ダンジョン管理協同組合のルチルクオーツ東三番街支部に確認したが」

「DC ダンジョンクリエイターとしての仕事として忘却の迷宮へ向かったわけじゃないらしい・・・」

「なにか、理由があつて出向いた・・・とは思つんだが」（うん・・・）

ジエムシリカ

「・・・」

「はやり、納得するまでイカスミで誤魔化すべきだったかしら・・・（ぼそっ）」
聞こえないような小声で

シーライト

「……………(じいゝゝゝ)」

シリカを凝視している

シリカ

「あ、あははっ(大汗)」

笑って誤魔化す

パロツト

「ん……………」

「シリカさん、どうしました？」

シリカ

「ううん、なんでもないわよ(苦笑)」

2コマ

サイト

「しっかし…………(きよるきよる)」

辺りを見回す

「2、3時間前に出発したっていうロードライトには」

「ぜんぜん追いつかないよな(汗)」

シリカ

「彼女は優秀な冒険者…………しかもDCです」

「そう簡単には追いつけないでしょう」

サイト

「だがな(汗)」

「たかだか3時間程度先行されてるだけなんだぞ」

「相手がDCだとはいえ」

「もう追いついたっていい頃じゃないか？」

シリカ

「そ、それは　　そうなんですが……（ちらり）」　　後方
をチラ見

パロット

「まあ」

「原因は間違いなくこいつなんだけどな……（やれやれ）」
同じくチラ見

スファレライト

「ぜえぜえぜえ……（大汗）」　　地面にへたり込んで

パロット

「体力無いやつだな……（汗）」

「オレたちだけなら、とつくに追いついてるぞ」

「おまえ、もういいから帰れよ……（大汗）」（完全に足手まと
い）

スファレ

「つて、あんたらみたいに化け物じみた体力があるか……！
！（うにゃ……！！）」

効果音「ずがが……！！ん……！！」

3コマ

同時刻のロードライトたち……

ロードライト

「それで、アルバイトさん」

「ボクはこれから行くところがあるので」

「王都へ戻ることができないんですよ」（汗）」

「だから、王都にはお一人で帰っていただくしか……(大汗)」

エルバイト

「つて、ちよつと待て!(汗)」

「行くところがある……じゃないだろ!? (大汗)」

「さつきも言ったが、おまえのようなちびつ子が」

「一人で冒険するなんて危ないだろ!! (があああ!!)」

「どうしても行かなければならないというなら」

「一度、王都に戻って冒険者を雇って……」

ロードライト

「そんな、時間はないんです(ぼそっ)」

エルバイト

「なにか……、理由があるんだな……(じいっ)」

ロードライトを見つめる

ロードライト

「はい(じくじ)」

エルバイト

「……(うん)」

「わあ〜ったよ(はあ〜)」

「そこまでいうのなら、オレが手を貸してやる(よっしや〜)」

ロードライト

「えっ!?(どびっくら)」

4コマ

エルバイト

「なあ〜に、心配することはない」
「オレがおまえを護ってやるよ」

ロードライト

「いや・・・、なんていうか〜（汗）」
「アルバイトさんには申し訳ないんですが〜（大汗）」
「レベル4じゃ〜、危険・・・っていうか〜（苦笑）」（ボクも他人を護っている余裕なんて・・・）

エルバイト

「ななっ！（むかつ！）」
「た、確かに初めて外界に出る初心者同然の冒険者だがな〜（汗）」
「おまえだって、よく似たもんだろ〜が！！（怒）」

ロードライト

「え〜っと・・・（汗）」 冒険者カードを見せる
「一応、外界へ出た回数は50を超えていますけど・・・（ぼそっ）」

エルバイト

「れ、レベル・・・18!?!?（どびっくり）」（なにーーーーー！！）
「し、信じられねえ〜・・・（ずしーん）」 四つんばい
になって落ち込む

ロードライト

「あ〜・・・（汗）」（落ち込ませてしまった）
「で、でも、やっぱり一人で冒険するのは寂しいっていうか〜」
「アルバイトさんが一緒に来てくれたら心強い・・・かな〜（苦笑）」
「 気をつかっています（笑）」

エルバイト

「そうだろう、そうだろう」 立ち直った

「仕方ないから、仲間になってやる (えっへん!)」

ロードライト

「よ、よろしくお願いします」 (あははっ)「

」ところで、アルバイトさん?」

エルバイト

「んゝ、なんだ?」

ロードライト

「そんなに多くは出せませんが・・・」

「時給は どれぐらいを希望されていますか?」 (4~500
ぐらいならなんとか・・・) (

エルバイト

「って、だからオレはアルバイトじゃねええええー!!!」
うぎゃー!!!」 (

効果音「ずががーーーーーん!!!」

コメント

エルバイトは、今後もアルバイトって呼ばれ続けるんでしょうね
」 (苦笑)

ちなみにエルバイトとは宝石のトルマリンから取ったもので、ア
ルバイトから命名したわけではありません

第55話 漁夫の利

4コマ劇場 アイオライト | 4 1 5 2 0 1 0 / 1 1 / 2 4

シリーズ3

タイトル「漁夫の利」

1コマ

ルチルクオーツ、エリアAにて・・・

シーライト

「・・・・・・・・・・(とんとん)」 パロットの肩をつつく

パロットクリソベリル

「ん?」

「どうした、シーラ?」

シーラ

「・・・・・・・・・・(あっちあっち)」 どこかを指差す

パロット

「何か・・・見つけたのか? (汗)」 (ロードライトの顔は知らないはずだし・・・)

「・・・って、ええっ!! (どびっくり)」 その存在に気づく

ポルーサイト

「おい・・・(大汗)」

「あれって、まさか・・・(どきどきどき)」

ジェムシリカ

「佐藤さんですね〜」 この人、盲目です

「しかも、黄金色に輝いていますから」

「はぐれ佐藤さんです」 銀色じゃないのかよ!!(爆)

スファレライト

「は、はぐれ佐藤さん!?(どびっくり)」「なにそれ……!!(」

はぐれ佐藤さん どでかい鳩?(笑)

『うう〜うう〜うう〜、くるっぽ〜』

2コマ

パロット

「すげえ〜〜〜! (汗)」

「はぐれ佐藤さんなんて、初めてみた〜〜〜 (大汗)」

シリカ

「佐藤さんとは、鈴木さんと並んでこのルチルクォーツでもっとも多い魔物です」

「しかし、はぐれ佐藤さんとなるとその個体数は激減します……」

「そして、名前にはぐれがついている魔物は」

「ほとんど例外なく、倒せば大量の経験値を得られることができるのです」(通常の十倍以上?)

スファレ

「ほ、ほんですか〜」

「つまり、はぐれを倒せば大幅にレベルアップ」

サイト

「ふふ〜ん」

「はやくロードライトに追いつきたいところではあるが」
「はぐれを見かけたとあっちゃしくかたない・・・(にやり)」「
戦斧を構える

パロツト

「そう・・・だな」

「はぐれと名の付いた魔物は」

「防御力も高く、素早さもハンパ無い・・・」

「そいつを倒してこそ」

「一流のヒーラーになれるってもんだ!!(しゃきつ)」「
剣クリソベリルを抜刀する
聖

スファレ

「って、ヒーラーは関係ないよね~~~~!!(叫び)」「

効果音「ずがが—————ん!!」

3コマ

戦闘開始

パロツト

「うおおおおお—————!!」
はぐれ佐藤さんに突っ込む

サイト

「でりやでりやでりや~~~~!!」
戦斧を振り回しながら距離を詰める

はぐれ佐藤さん

『はははっ!!(びくっ)』
パロツトたちに気づく

『くるっぼ〜!!(怒)』
逃げずに迎え撃つようです

スファレ

「ちよっ!?!」

「二人とも~~~~!!」(大汗)

シリカ

「あゝ・・・(汗)」

「しょうがない子たちですね」(苦笑)「(やれやれ)」

スファレ

「あれ?」

「シリカさまやシーラは行かないんですか?」(汗)

「レアな魔物で経験値が大量に入るんですね?」(どきどきどき)

「

シリカ

「うん・・・」

「はぐれ系はまともに戦っても逃げられるだけだし」(汗)「(も
の凄く素早いのです)」

スファレ

「まともに・・・戦っても?」(汗)「(聖水とかをぶっかけるん
ですか?)」

4コマ

シリカ

「え〜と・・・」

「相手の隙を突く・・・っていうか」

「とにかく見てもらったほうが早いわね」

「シーラさん、お願いできるかしら?」

シィラ

「……………(じくり)」

10分後……

はぐれ佐藤さん

『ぐうぐうぐうぐう(怒)』

かなりボロボロ

サイト

「はあはあはあ(大汗)」

「よし、あと一撃が決まれば……」

「はぐれ佐藤さんを倒せそうだ！」

「パロット、しくじるなよ!!(叫び)」

パロット

「ふっ、おまえこそ……(にやっ)」

「うおおおおおー!!! (たっ たっ たっ)」

聖剣を振

り上げてはぐれ佐藤さんに突っ込む

「これでレベル1とはおさらば!!(叫び)」

「次回からこの小説(文字だけ4コマ)のタイトルは」

「『最強の勇者はヒーラーでレベル20』に変わります!!(どりやー!!!)」

はぐれ佐藤さん

『くるっぽー!!! (うけー!!!)』

くちば

し攻撃!!

効果音「かつ、かつかつ!!」
固いものに何か突き刺さるような音

パロット

「ちよっ!?! (大汗)」

サイト

「ななっ!?! (どびっくじ)」

はぐれ佐藤さん

『・・・・・・・・・・』 額に複数の手裏剣が刺さっている

『く、くるっぽ~~~~』 (ずしーーーーん) 『 地面に

倒れ込む

シーラ

「・・・・・・・・・・ (すたっ) 」 軽やかに地面に着地する

説明文「ちゃちゃちゃっちゃっちゃっちゃん」

「シーラはレベルが上がった。最大HPが13上がった。最大

MPが8上がった。力が・・・・ (笑)」

サイト

「な・・・・、なんてこったい・・・・ (ずしーーーーん)」
四つんばいになって落ち込む

パロット

「こ、ここまでの苦勞が・・・・一瞬で水の泡 (涙)」 倒して
ないので経験値は入りません

シリカ

「っと、あのようじ〜」

「はぐれが別のことに意識を向けている瞬間」

「急所へ一撃をたたき込むのが有効で」……

スファレ

「あゝ……（大汗）」

「パロットたち 悲惨だね（ぼそっ）」（あんなにがんばっていたのに……）

パロット&サイト

「ぬおおおー……！！」（大泣き）」

シーラ

「……（ほくほく）」 満足げな表情をしています

（笑）

コメント

仲間への分配は無いので、スファレにも経験値は入っていません
（いまだ0ポイントのまま）

第56話 なんの脈絡もなく どつきりイベント発生!?

4コマ劇場 アイオライト―416・・・2010/11/25
シリーズ3

タイトル「なんの脈絡もなく どつきりイベント発生!?!」

1コマ

ルルルクオーツ、エリアAにて・・・

パロットクリソベリル

「はあゝ・・・(汗)」

「はぐれ佐藤さんも倒したことだし」

「そろそろ出発しようかゝ・・・(涙)」 タダ働き？

ポルーサイト

「そう・・・だな(しくしくしく)」 同じく

スファレ

「つていうか!」

「早いとこロードライトに追いつかないといけないときに」

「二人ともなにやってるかなゝゝゝ!!!(もあゝ!)」

パロット

「あゝ、すまない・・・(ペこり)」(目先の経験値につられて・・・
ついで)

ジェムシリカ

「ほらほら」

「済んだこと言い合ってないで」

「さつさと歩く……（はいはい）」

効果音「わいわいがやがや」 パロットたち、立ち去っていく

???

「……………（じいじいっ）」 岩陰に隠れてパロット
たちを観察している

2コマ

はぐれ佐藤さん 黄金色の巨大鳩

『……………く……………ぐ（ひくひくひく）』 瀕死状態です

突然の登場

美咲 職業 退魔師（樹神流）、レベル498

「はあ……（やれやれ）」 岩陰から姿を現す

「経験値を稼ぐためだけに魔物を痛めつけるなんて」

「いったい何を考えているのかな？つと（ひよいつ）」 懐
から鈴の付いた小柄を五本取り出し、大きくジャンプする

効果音「チリン、チリン、しゅたたたっ！！」 はぐれ佐藤さ
んを囲むよう、地面に小柄を投げ刺す

美咲

「……………（ぶつぶつぶつ）」 退魔力（天空力）を高
めると、小柄で囲まれた内側が光り始める
「はあああっ！！（ぴかーっ！）」 天へ向けて光の柱
が発生し、はぐれ佐藤さんの身体を包み込む

はぐれ佐藤さん

『くる・・・？(きよるきよる)』 完全回復して意識を取り戻し、辺りを見回す

『くるっぽっぽ』 (ばさばさばさ) 翼を広げて飛び去って行く

美咲

「もう冒険者なんかに見つかったらだめだよっ(ばいばい)

」手を振っている

「・・・」

「さて・・・と」

「シトリンさんとは、さっきのパロットさんを護るって約束はしたけれど(うん・・・)」

「もう少し様子を見てみる必要があるしっかな・・・(汗)」

「護る価値があるのかどうか・・・(ぼそっ)」

「さっきの様子見た限りじゃ、かなり微妙なんだけど(苦笑)」
(あれが本当にアウインの勇者?)

3コマ

エリアAの火山地帯に湧いた温泉にて・・・

ロードライト

「うっっん、いい気持ち」 温泉に浸かって身体を伸ばす

「こんなところに温泉が湧いているなんて」 髪の毛もおろしてます

「ラッキーだったな」 (極楽、極楽) 見た目、完全に

女の子

効果音「かぽっっん」 桶も反響も無い天然温泉でこの効

果音はありえません!(爆)

ロードライト

「って、こんなところで温泉に浸かっている場合じゃないんだけどね」（苦笑）

「本当なら夜通し歩いて、明日の夜までに忘却の迷宮へ着きたいところだけど（汗）」

「アルバイトさんが一緒だから無理っばいし・・・（大汗）」

夜に出現する魔物は凶暴です

「夜が明けてすぐに出発したら、明後日ぐらいには到着するかな？」（もちろん急いで・・・）

「・・・さて」

「そろそろ上がって、見張りしてくれているアルバイトさんと交代し・・・（ざぼっ）」 立ち上がる

突然の登場

エルバイト

「おお、ロードライト」

「せっかくこない温泉があるんだ」

「一緒に浸かって、男同士の語らいをしようじゃないか」

ロードライト

「・・・」 啞然

「・・・」 呆然

「・・・」 愕然

「・・・え？（大汗）」 もちろん全裸です

4コマ

エルバイト

「・・・おや？（汗）」（湯気でよく見え・・・ない？）
こいつも素っ裸（笑）

ロードライト

「あ、あ……(汗)」
今の状況を理解する(しかも何かを
目撃!!)

「あわわわっ!!(涙)」
顔が真っ赤になる

エルバイト

「え〜つと……(汗)」
「おまえ……、男の娘?^{おとこ}(ぼそっ)」

ロードライト

「なっ!!!(ぴきっ!)」
額に怒りマークが浮かぶ
「……(たたっ)」
無言でエルバイトの横を走り
抜ける

エルバイト

「お、おい……?(大汗)」(ま、マジで……女の子なのかつ
!?)

ロードライト

「……(しゅっ)」
身体にバスタオル(?)を巻く
「……(かちゃかちゃ)」
急いで筒状のパンツを
組み立てる

エルバイト

「えっ、ちよっ!(汗)」
「ろ、ロードライト……さん?(大汗)」(な、なにを……し
ているのかな?)

ロードライト

「……………(かちゃっ!)」「……………」
二つのシンセティック・カノンを両肩に担ぐ

エルバイト

「ちょー……………!!!(どびっくら)」「それって例の麻酔弾!?!」

ロードライト

「……………アルバイトさん(にっっ)」「
「死んでください(ぴびぴびっ、ぴびーっ!)」「ダ
ブルロックオン

エルバイト

「なああああ……………!!!(大泣き)」「

ロードライト

「シンセティック・カノン(x2)……………」
「ファイア……………!!!(うが……………!!)」「(大
激怒……………!!)」

効果音「がががっ、どっごおおお……………ん!!」
至近距離で大爆発!!

エルバイト

「つて、ひでええええええ!!!(涙)」「(オレは悪くねええええええ!!)」

「わんぎ……………(きらりん)」「ぶっ飛んで
星になりました

ロードライト

「ぶんー!!」(ぶくっ)「
かわいく頬をふくらませています
(笑)

コメント

足りない絵の部分は・・・脳内補完してください (爆)

第57話 温泉場の変質者？

4コマ劇場 アイオライト― 417・・・2010/11/26
シリーズ3

タイトル「温泉場の変質者？」

1コマ

エリアA、火山地帯にて・・・

スファレライト

「んゝ・・・？」

「この辺り、なんだか変な臭いがするねゝ（汗）」（卵が腐ったよ
うな・・・）

ジエムシリカ

「これは、硫黄の臭いですね・・・」

「どこかに温泉でも湧いているのでしょうか？」

スファレ

「温泉！？（どびっくり）」

「それってアレですよね！」

「地面から湧き出てる天然のお風呂（おお）」

「パロット！！」

「温泉を探し出して、ついに入っているよ」

パロットクリソベリル

「あのなら・・・（汗）」

「まだロードライトに追いついていないっていつのこ」

「そんな暇ないだろ・・・」

スファレ

「ロードライトを捜しもせず」

「・・・はぐれ佐藤さんと遊んでたのは」

「いったい誰だったかな・・・？（じいじいっ）」

パロット

「うぐっ・・・（汗）」（それを言われると・・・）

2コマ

シリカ

「温泉に入るのは、かなり魅力的な提案ではありますが・・・」

「いまは、ロードライトさんに合流することを目指しましょう」

「温泉には、王都へ戻るときにでも入ることにしましょうね」

スファレ

「そう　ですね（うん）」

「少し残念ですが、ロードライトのことも心配だし・・・」

ポルーサイト

「てか・・・」

「温泉なんて、ただのでかい風呂じゃないか」

「それなら、王都で普通に風呂にでも入ってたほうが良くないか？」

スファレ

「でかい風呂・・・だなんて、わかってないわね～～～（やれやれ）」

：

「大自然の中で入る温泉・・・」

「その開放感がいいんじゃない」

サイト

「……露出狂？(ぼそっ)」

シーライト

「……………(こくこく)」

スファレ

「って、誰が露出狂か—————!!(うにゃ~~~~~!!)」

効果音「ずがが—————ん!!」

3コマ

一方、そのころ……

エルバイト

「は……、はつくしよん!!」

前回、シンセティック・カ

ノン(x2)で吹っ飛ばされました

「ちっ、あいつマジで殺す気か~~~~(怒)」

「まあ、あいつを男だと勘違いしていて」

「結果的に裸を見てしまったオレにも、非が無いわけでもないのだが(うん……)」

「っていうか、はやいとこ脱いだ服を何とかしないと」 全裸
です

「誰かに見られでもしたら、本当に変質者扱いされてし……なっ
!!(どびっくり)」

突然の登場

スファレ

「あ……(汗)」 目の前には全裸のエルバイトが……
「……………(す……っ)」 視線を下の方へ向ける
「お、おあ……(じい……)」 何かを目撃しました
(爆)

エルバイト

「ひゃっ、わきゃー……っ!! (大汗)」 慌てて隠す
何を!! (怒)

パロット

「スファレ、どうした!？」 悲鳴(?)を聞いて駆けつける
「って、おまえは変質者のアルバイト!!」

エルバイト

「変質者でもアルバイトでもねええええー!! (うぎゃー
ー……!!)」

パロット

「……………(汗)」
「その格好で否定されても説得力がないぞ……(ぼそっ)」

エルバイト

「なっ! (汗)」
「こ、これには深い訳があって……だな!! (大汗)」

4コマ

パロット

「まあ、そんなことはどうでもいい……(しゃきっ)」 聖
剣クリソベリルを抜刀する

「てめえ、ロードライトにいったい何をした(怒)」

エルバイト

「そ、それは！！」（大汗）

お風呂を覗きました（笑）

シリカ

「その反応・・・」

「どうやら本当に、ロードライトさんを」

「なにかよからぬことを したようですね（むっ）」

エルバイト

「ち、ちが・・・（大汗）」（誤解・・・）

パロット

「くつくつくつ（微笑）」

「問答無用・・・（きゅぴん）」 瞳が妖しげに光る

「うおおおおおー！！！！！！！！！！」 精霊力を高める

エルバイト

「ちよっ、なんだそのバカでかい精霊力は！！！！！！（叫び）」

「どう考えたって、レベル1の力じゃねえぞ！！（どびっくり）」

（シヤレになつてねええええ！！）

スファレ

「あゝ、昨日の夜も言ったと思うけど・・・」

「そいつ、元ユークナイトだよ」

シリカ

「元・・・というのは正しくありませんね」（情報古いです）

「パロットくんは、ユークレスのギルドマスターと再契約して」

「今日からナンバー13のユークナイトなんですよ」

エルバイト

「ゆ、ユークナイト・・・ナンバーズ!? (どびっくり)」

「じよ、冗談じゃねえ!!」

「そんなヤツに勝てるはずねえええー!!! (叫び)
身を翻して脱兎! (素っ裸です)」

パロット

「あつ、てめえ待ちやがれー!!! (どたどたたっ!)

「エルバイトを追いかける

サイト

「・・・・・・ (汗)」 追いかけてこしているパロットたち
ちを見ている

「で・・・・、あいつ誰? (大汗)」

シリカ

「ただの変態でしょ? (うん・・・)」 変質者から変態に
クラスアップ!? (爆)

効果音「ずががーーーーーん!!!」

コメント

このどたばたにより、パロットたちは温泉場にいるロードライト
を追い越しました (笑)

第58話 砂漠では暑さ対策が必要です

4コマ劇場 アイオライト―418・・・2010/11/28
シリーズ3

タイトル「砂漠では暑さ対策が必要です」

1コマ

早朝、エリアAの火山地帯にて・・・

ロードライト

「うーん」

「今日もいい天気になりそうですね、アルバイトさん (気持ちいい)」「 伸びています」

エルバイト

「……………(ずーーーん)」 なにやら疲れています

「なんども言うようだが……………」

「オレは、アルバイトじゃ ねえ……………(しくしく)」「

ロードライト

「なんだか疲れていますねアルバイトさん……………」 呼び方を
変えるつもりはありません

「一晩中、全裸で走り回っていたからですか?」(笑)「

エルバイト

「って、誰のせいだと思ったかと思ってるんだよ!!!(うがーー
!ー!)」

ロードライト

「ボクのお風呂覗いた……(ぼそっ)」

エルバイト

「うぐっ!?(大汗)」

「それは すまない(ぺこり)」

意外に素直です

「てつきり、男だ……と(ぼそっ)」

ロードライト

「……(かちゃっ)」 シンセティック・カノンを
構える

エルバイト

「だから、悪かったって!!(大汗)」(そんな物騒なモノを向けるな……!)

効果音「ずがが……ん!!」

2コマ

エリアD、砂漠地帯にて……(既にロードライトたちを追い抜いています)

スファレライト

「はあ、はあ、はあ……(大汗)」 太陽の光が燦々と降り

注いでいる

「あつい、暑い……、あつ……い……!(叫び)」(この暑さ、なんとかして……!)

パロットクリソベリル

「いや、まあ」

「砂漠だしな……」

「暑くて当然だろう(ぼそっ)」

ジエムシリカ

「これからまだまだ暑くなりますよ(こんなの序の口です)

「それに、さきほどまでは涼しかったじゃないですか」

スファレ

「いやいやいや!」(シリカさま!)

「あれは涼しいってレベルじゃなく」

「めっちゃめっちゃ寒かったですよ!」(凍えちゃうかと思いました
く!)

シリカ

「まあ、砂漠ですからね(苦笑)」

スファレ

「ひとことで終わりですか(泣)」(うにゃ(泣))
「!?!」

効果音「ずどどどどどっ!」 地面が震動している

シーライト

「……………(じい~~~~っ)」 辺りの気配を探っている

スファレ

「えっ?(汗)」

「な、なに!?(きよるきよる)」

3コマ

ポルーサイト

「けっ……（微笑）」

「そんなことやっているうちに」

「どうやらヤツが出てきたようだが……（にやり）」

スファレ

「……ヤツ？（大汗）」

パロット

「この砂漠地帯、エリアDで生態系の頂点に位置する魔物……」

「小池さんだ！！」

スファレ

「それってラーメンの！？（どびっくり）」 偏った知識

サイト

「って、何の話だ……！！（叫び）」

突然の登場

小池さん でっかい砂蟲サンドワーム

『ぐおおおおお……ん！！』

スファレ

「き、きしょっ！！（大汗）」 気色悪いと言いたいらしい

笑（

シリカ

「これはこれは……（汗）」

「いままでに見たことの無いような大きさの小池さんですね」（苦笑）

笑（ 「盲目です

サイト

「感心している場合か！（大汗）」

「来るぞー！！」 スファレを除いて散開

スファレ

「えっ、ええっっ！（大汗）」 取り残される

小池さん

『わぎゃー！！！！！』（叫び） 戦闘開始

4コマ

効果音「ずどおおおー！！ーん！！」 小池さんが頭から
地面に潜る

スファレ

「わっ、わわわっ！！」（大汗）」 足場が揺れて転けそうになる

サイト

「どこいきやがった！（きよろきよろ）」 戦斧を構えている

シリカ

「落ち着きなさい！」 武器はまだ構えていません

「地面を・・・砂の動きを見れば」

「小池さんの現れる場所がわかるはずですよ！！」

スファレ

「・・・小池さんなんだから」

「ラーメン用意しておびき寄せればいいんじゃないっ・・・」（ぼそっ）
「なんだそれ？（笑）」

パロット

「何わけのわかんないこと言ってるんだよ!!」

聖剣クリソベ

リルを構えている

「つて、スファアレ! (大汗)」

「後ろだ!! (叫び)」

スファアレ

「え・・・?」

再びの登場

小池さん

『ぐおおおおー!』

砂の中から身体を伸ば

しスファアレに襲いかかる

スファアレ

「きゃあああー!」

(悲鳴)

パロット

「ちっ! (舌打ち)」

「間に合わな・・・ (大汗)」

助けようど・・・

長い組み

効果音「びゅー!」

紐が伸びてきてスファアレに巻き付く

スファアレ

「へ・・・? (汗)」

(なにごと!?)

「ちよー!」

(涙)

上空へ

組み紐で引っ張られて

小池さん

『わぎゃーーーーーーーーーう!!!(ずしーーーーーーーーん!)』

ま

たまた砂に潜る

突然の登場

美咲

樹神の退魔師

「……………」

遠くから組み紐を操っている

パロット

「って、なんだ!?(大汗)」「おまえ誰だ!!!(

スファレ

「そ、そんなことより!」

「助けーーーーーーーーー!!!(うにゃ~~~~~!!!(

ぶっ

飛んでいます (爆)

コメント

だから、小池さんって誰?(笑)

第59話 強さのレベルが違います

4コマ劇場 アイオライト―419・・・2010/11/29
シリーズ3

タイトル「強さのレベルが違います」

1コマ

エリアD、砂漠地帯にて・・・

ポルーサイト

「な、何だーーーーー!!!(どびっくり)」「おもわず空を見上げる

スファレライト

「どっしえーーーーー!!!(ひゅ~~~~っ・・・)」「組み
紐で引っ張られて空を飛んでいる
「ぎゃふっ!!!(どすっ!)」「頭から砂山に突っ込む

小池さん でっかい砂蟲サンドワーム

『わぎゃーーーーー!!!(ずしーーーーん!)』先ほ
どまでスファレのいた場所に突っ込む

シーライト

「……………!?!?」

ジェムシリカ

「えっ、なにっ!?!(大汗)」

パロットクリソベリル

「そこかー！あー！！（叫び）」
スファレに巻かれている組
み紐の反対側を見る

美咲 樹神の退魔師

「……………（きりっ）」
凜とした雰囲気をもっている

2コマ

スファレ

「けふっ、ぺっぺっ……………（うう……………）」
埋もれていた上
半身を起こし、口に入った砂を吐き出す
「っていつか、なにごとよー！ー！！（涙）」

美咲

「冒険者のみなさん、すみませんが……………（しゅるしゅる！）」
組み紐を緩め、手元に巻き戻す

「少しだけ、動かないでいただけますか？（たたたっ！）」
小池さんに向けて走り出す

サイト

「な、なにいつてやが……………って、動き速っ！！（どびっくり）」
（一瞬で小池さんの目前かよ！）

シーラ

「……………（じい……………っ）」
美咲の動きを凝視

パロット

「おまえ、なに勝手なことを！（大汗）」
「小池さんを相手に、一人じゃ危険だろっ！！」
慌てて戦い
の場へ駆けつけようとする

シリカ

「パロットくん!! (叫び)」

パロット

「えっ!？」

シリカ

「……………」

「彼女の言うとおりにしなさい…… (大汗)」

パロット

「し、シリカさん……? (大汗)」

3コマ

小池さん

『がぎゃー……………あ!! (びしゅーっ!)』 大き
く開いた口から複数の触手が伸びる

美咲

「来てください…… (さっ)」 召喚の腕輪を構える

「四神刀 白虎の瑞雲さん!! (ぴかーっ!)」 魔方
陣から霧状の白虎が現れ、次の瞬間……白鞘の日本刀になる

「はあああっ! (さささっ、さくっ!)」 迫りくる触手を
次々に白虎の瑞雲で切断する

小池さん

『ぎゃー……………す!』 痛みにのたうつ

『わぎゃー……………!!』 身を翻して砂に潜ろうとする

美咲

「逃がしません！」 素早く組み紐を小池さんに巻き付ける
「うう……、はっ！」（えいやあああっ！） 小池さん
の一本釣り

小池さん

『ぐおおおおー！』（叫び） まるで重力を
無視するかのよう空へ浮かび上がる

美咲

「……（じいっ）」 小池さんを凝視する
「そこっ！」（リンリン） 鈴の付いた小柄を小池さんに向
けて投げ放つ

説明文「美咲の放った小柄は、小池さんの腹部に憑いていた漆黒の
魔石を粉々に砕く」

小池さん

『ぐげっ！？（びくびくっ！）』

効果音「ずしー！ー！ー！ー！ーん！！」 意識を失った小
池さんが砂山に落下する

美咲

「……」 様々な武器をしまつ
「ふう〜（やれやれ）」 額の汗を拭うような動作

シリカ

「……（大汗）」

4コマ

スファレ

「ちよー！ちよー！どびっくり」

「なによ、あのちびっ子は〜！！」(大汗)

「とんでもない強さじゃないのよー！ちよー！！」(うぎゃー！)

サイト

「ああ・・・(汗)」

「シヤレにならねえ〜強さだ・・・」(大汗)

「オレたちはもちろん、下手をすればギルドマスターのシトリンより強いんじゃないか〜？」(大汗)

シリカ

「そうですね・・・(ごくり)」

「間違いなく、シトリンさんより強いでしょう(汗)」

「しかも、その実力のほとんどを出してはいないようです(大汗)
(いったい何者・・・?)

シーラ

「・・・(じい〜っ)」

パロット

「つて、何落ち着いてやがる！(叫び)」 聖剣クリソベリル
を構える

「いまのうち、小池さんにとどめを！！(たっ たっ たっ！)」
弱点である尾の部分に狙いを定める

「・・・なっ!? (大汗)」 突然の殺気に気づく

美咲

「・・・(ふっ)」 一瞬でパロットの前に現れ、すつと

沈み込む

「いい加減にしなさいっ!! (どっっ!)」

パロットの腹部

に横蹴りを入れる

パロット

「がはっ!! (げふっ!)」

意識が飛ぶ

効果音「どしっ、がさっ、ずさっ……」

パロット、超速で

ぶっ飛ばされ砂山に埋まって痙攣する(笑)

スファレ

「ぱ、パロット……!! (涙)」(なあああ……!!)

サイト

「あ、あのパロットが瞬殺かよ……!! (どびっくり)」

美咲

「あ…… (大汗)」(少しやり過ぎたでしょうか……)

コメント

まあ、美咲に勝てるわけないよな…… (笑) 人間族最強?

第60話 聖剣の代わりに……この剣をどろぞ

4コマ劇場 アイオライト―420……2010/11/29
シリーズ3

タイトル「聖剣の代わりに……この剣をどろぞ」

1コマ

エリアD、砂漠地帯にて……

パロットクリソベルル

「おい、そのちびっ子……(怒)」 美咲のことです

「いきなり腹蹴りなんか喰らわせやがって」

「オレを殺す気が――――！！！！(うぎゃ――――！！！！)」

美咲

「あ……すみません(ペこり)」

「小池さんを護ろうと思ったら つい(あははっ)」

パロット

「小池さんを護ろうと……だと！(大汗)」

「襲いかかってきた魔物を護るために、オレは殺されそうになったのか！？(怒)」

「だいたい、小池さんを倒したのはおまえじゃないか！！(がああああ！！)」

美咲

「いいえ、別に倒したわけじゃありませんよ」

「……ほら」 小池さんに視線を向ける

パロット

「はっ！！（大汗）」

慌てて聖剣クリソベリルを構える

小池さん

でっかい砂蟲

サンドフォーム

『……ぎゃふ』（汗）』

意識を取り戻す

『……ぐ、ぐう』（もぞもぞ）』

ゆっくりと砂の中へ潜り

始める

パロット

「あ……れ？（汗）」

「襲ってこない……？（どきどきどき）」

2コマ

美咲

「元来、小池さんは大人しい生物です」

「こちらからちよっかいを出さなければ何もしてきませんし」

「冒険中に遭遇したとしても、むやみやたらと倒す必要はありませんよ……」

パロット

「つて、何をいつてやがる！」

「さつきもヤツの方から襲いかかってきたんだぞ！！（汗）」

美咲

「それは……ですね」

地面に落ちている石の欠片を拾う

「この魔石と呼ばれる石に憑かれたことで」

「大人しいはずの小池さんが凶暴化していたんですよ（これです）」

パロット

「ま、魔石・・・だと？（じくり）」

美咲

「あゝ、触らないください・・・」

「たとえこれぐらいの欠片でも、一般人が触って憑かれれば」

「意識や神経を乗っ取られ、異形の怪物　魔獣となってしまいます」

「あの小池さんは、魔石に憑かれたばかりのようで姿は変化していませんでしたが」

「もし魔獣となっていたら、あなた方ではどう足掻こうとも勝つことはできなかつたはずですよ」

パロット

「魔獣・・・（汗）」

「お師匠がバトルフォーム形態になったようなものか？（大汗）」
（アレには勝てない・・・）　魔獣リウム

美咲

「お師匠？」

「とにかく・・・（さっ）」　パロットから聖剣クリソベリルを奪い去る

パロット

「あつ、てめえく何しやがる!？」

美咲

「この聖剣クリソベリルは、わたしが預らせていただきます」

3コマ

パロット

「どうしておまえがクリソベルルの名を……(汗)」
「っていつより、預かるってなんだ……!!!(うが……
……!!)」

美咲

「いまのあなたでは、聖剣クリソベルルは宝の持ち腐れです(ぼそ
っ)」「(相応しくありません)

パロット

「なっ!!!(大汗)」

美咲

「いまのあなたの実力からいうと……(ごそごそ)」
「な
にやら巫女装束の中に手を入れています

「この……銅の剣ぐらいですね……(さあ、どうぞ)」

パロット

「って、スファレが使ってるのより貧弱な剣なのかよ!!!(怒)」

スファレライト

「あ、あははっ(苦笑)」
「一般的な鉄製の剣を使っています

美咲

「強くなれば、どんな剣を使っても同じですよ」
銅の剣を
振り

効果音「ずごごごお……!!」
剣先からすんごい
衝撃はが放たれる

パロット

「なああああーーーーー！！」（どびっくり）
「つか（笑）」
叫んでは

4コマ

ポルーサイト

「まあ、そうだな・・・」

「今のパロツトなら、その剣で充分かもな」（微笑）

パロツト

「ちよつ、サイト！？（大汗）」（なんてこと言って・・・）

サイト

「いや、だつておまえ・・・」

「ヒーラーだろ？（ぼそっ）」（しかもレベル1）

パロツト

「あ・・・が（大汗）」

美咲

「・・・ヒーラー？（大汗）」（ほ、本当・・・ですか？）

サイト

「勇者ならともかく、ヒーラーが聖剣を持っていても」

「その子が言ったように宝の持ち腐れじゃね？（苦笑）」

パロツト

「そ、それは・・・そうなんだが」（汗）」

「クリソベリルは、師匠から譲り受けた大切な聖剣であつて・・・

（大汗）」

スファレ

「いや、パロットがどんな剣を使うかなんてどうでもいいことなんだけどさ〜(ぼそっ)」

パロット

「おい!!(怒)」「どうでもいいって!?(」

スファレ

「なんていうかさ〜」

「さっきのどたばたで」 美咲の攻撃でパロットが死にかけた

「また時空族の遺産を使うことになるかと思っただよ〜〜(苦笑)

「 1日1回だけ時間を5分戻す

ポルーサイト

「あはははっ (爆笑)」「(確かに)

「三日連続で死んでたら、ちょっとした記録だったんじゃないか

?(笑)」

パロット

「ほっとけ—————!!(うにゃ—————!!)」

効果音「ずが—————ん!..!」

コメント

しばらくの間、パロットは銅の剣を使うことになりました (爆)

第61話 誰がなんと言おうと、かっぱです

4コマ劇場 アイオライト―421・・・2010/12/01
シリーズ3

タイトル「誰がなんと言おうと、かっぱです」

1コマ

エリアA、火山地帯にて・・・

ロードライト

「さてアルバイトさん」

「忘却の迷宮へ向けて出発しましょう」

エルバイト

「その忘却の迷宮ってエリアDにあるっていったたよな？」

「エリアDってあれだろ（汗）」

「延々と砂漠が広がっているってエリア・・・（大汗）」

ロードライト

「そうです」

「だから砂漠に入るため（ごそごそ）」
リュックから何か
を取り出す

「万全な装備が必要なんですよ（ささっ）」
砂漠仕様の防
具を装備

エルバイト

「って、ターバン風の帽子とマスク」

「それに厚めのマントか・・・（汗）」

「そんなの着込んで、暑くないか？（大汗）」

ロードライト

「いいえ、砂漠の日差しを侮ってはいけません」

「無意識に微弱な精霊力を纏っている高レベルの冒険者ならともかく」

「ボクやアルバイトさんでは」

「1時間も経たないうちに、身体中の水分が蒸発して干涸らびてしまいます」

エルバイト

「つて、マジか!?(どびっくり)」

「オレ、何も用意してねえぞ!」

ロードライト

「大丈夫です」

「砂漠用の防具なら在庫がありますから」

「お売りすることが出来ますよ」(仲間価格でお安くしておきます)

エルバイト

「・・・金、とるのか?(どきどきどき)」

ロードライト

「商人ですから (あははっ)」

エリアD、砂漠地帯にて・・・

パロットクリソベリル

「あゝ・・・(汗)」 激暑の日差しが燦々と降り注いでいる

「スファレ、大丈夫かゝゝゝ(大汗)」

スファレライト

「……………(じりじり)」 地面に倒れ込んで干涸らび
ている(爆)

効果音「ずがが—————ん!!」

2コマ

美咲

「え……………(うそうそ)」 懐からミネラルウォーターのペ
ットボトルを取り出す

「スファレさん、しっかりしてください……………(汗)」 抱き
起こしてミネラルウォーターを飲ませる

スファレ

「……………(からから)」 まるでミイラのようにしわ
しわです

「……………こくっ!？」 少量の水が喉を潤す

「うっうくっ!!!(こくこくこく)」 水をがぶ飲み

「ふはあく……………、生き返った」(つやつや) お風呂上
がりのような状態?(笑)

ポルーサイト

「って、おまえの身体はどんな構造してるんだ—————!!(大汗)」
(その変化にびっくりだよ!)

スファレ

「ど、どんなって……………(汗)」
「べつに普通だと思っただけど」(大汗)」

シーライト

「……………(じい〜っ)」 スファレを観察中〜

スファレ

「そんなに見つめられると照れるじゃない (ぽっ)」 意味不明

サイト

「って、何がだー！ー！！(叫び)」

効果音「わいわいがやがや」

ジエムシリカ

「……………(す〜っ)」 人知れずパロットたちから離れる

美咲

「……………ん〜？」 (シリカさん?) 一人だけシリカの動きに気づく

3コマ

シリカ

「んんっ、けほっ！(こんこん)」 気づかれないよう、静かに咳き込む

「……………はあはあ(汗)」 口を押さえていた手には血が付いている

「だんだんと発作の間隔が短くなってきている(ぼそっ)」

「このままじゃ、みんなに パロットくんに気づかれるのは時間のもんだ……………い?(あ……………)」

美咲

「・・・シリカさん」 既にお互いの自己紹介は終わっています
「どうされましたか？」（一人になると危ないですよ・・・）

シリカ

「み、美咲さん！？（汗）」
「な、何でもないのよ！」
「ちよつと、こちら側の砂漠の景色を見てみようと思っただけ！！
（大汗）」

美咲

「景色つて・・・（大汗）」
「砂漠なんですから、どこを見ても同じですよね？」（どきどきどき）
「

シリカ

「いや、ほら！」
「風が吹いて出来た砂の模様とか・・・」 苦しいです
「よおしく見ると、地上絵とかに見えな げふごほっ！！」
咳き込んで吐血
「あ・・・（だらだらだら）」 口から血が流れています（笑）

美咲

「・・・え〜つと（汗）」
「シリカさんの身体に渦巻いている毒素には気づいていましたが」
知っていたのかよ！

「かなり、深刻な状態のようですね〜（うん・・・）」

シリカ

「ち、違うのよ！（汗）」

「これは赤いけど、イカスミであって（おろおろ）」
ニツク
軽くパ

美咲
「シリカさん！」

シリカ
「はいつ!!」（涙）」

4コマ

美咲
「……（じいっ）」
「しばらくの間、シリカさんにこの子を預けていても構いませんか？」
緑色の何かを差し出す

シリカ
「この……子？（はてな?）」
素直に受け取る
「これって、ぬいぐるみ……（汗）」（心なしか、身体が軽くな
ったような……）

美咲
「かっぱのかくんです」

かくん
「かあ〜〜」

シリカ
「って、しゃべった……!」（どびっくら）（しかも、も
そもぞと動いてる!）」
「み、美咲さん!」（汗）」

「これって……このぬいぐるみって生きてるの！？（大汗）」

美咲

「ぬいぐるみじゃありません」

「かつぱのかくんです」

シリカ

「……かつぱ？（どきどきどき）」

美咲

「はい」

「かつぱです（にこっ）」

説明文「かつて、トラピツチェ・クリスタルが創造せし巨大ロボツ

ト 超獣神」 グランゾルたちのこと

「4体の超獣神の中で最強と謳われたのが超亀神カークン……ですが」

「かつぱのかくんとは、なんら関係がありません（爆）」

コメント

シリカには内緒ですが、かくんを抱っこすることで病状の進行が緩やかになります

第62話 ルチルクオーツに迫り来る不穏な影

4コマ劇場 アイオライト―422・・・2010/12/01
シリーズ3

タイトル「ルチルクオーツに迫り来る不穏な影」

1コマ

ルチルクオーツ王都、東街地区にて・・・

フローライト

「ふう〜・・・(汗)」

「やっとお仕事から解放された〜〜(やれやれ)」

「つていうか、よくよく考えてみれば」

「どうして戦争孤児であるわたしが王様なんてやらないといけないのよ〜(しくしくしく)」

「王政とかがだったら、アンデシンさんとかの方が上手くやってくれ

そつな気もするけど・・・(大汗)」

「あ〜あ・・・、わたしの代わりにアンデシンさんが王様やってくれないかな〜〜(はあ〜)」

効果音「ざわざわざわ・・・」

フローラ

「ん〜?」

「なんだか辺りが騒がしいけど・・・なにごと?(きよろきよろ)」

通行人1

「おい・・・」

「あれって、まさか(大汗)」

通行人2

「ああ、間違いない(ごくり)」

「あの凜とした姿に、背中から生えた純白の翼・・・」

「フローラ様のお母上にして、ルチルクオーツ国民みんなのアイドル・・・」

通行人1 & 通行人2

「「優子ちゃんだ〜」

(すげえ、本物だ〜) 「」

突然の登場

サファイア 背中に純白の翼があります

「あ、いたいた」

「お〜い、桜〜」

フローラ

「って、お母さん!?(どびっくり)」

2コマ

拠点の洋館前にある喫茶店にて・・・

サファイア 本名、如月優子

「それにしても・・・」

「この国は、数ヶ月前まで天空族と戦っていたというのに
ルチルクオーツが天空界へ戦争を仕掛けていた

「街の人たちは、相変わらずわたしの姿を見ても驚かないわね〜
(苦笑)」(むしろ好意的?)

「あ・・・、わたしは紅茶をお願いします (にこ〜っ) 「」
店員に注文

フローラ

「あははっ、それはやっぱり〜・・・(汗)」「アレのせいではないかと・・・」

「わたしは、オレンジジュースをお願いします〜(ペこり)」「

店員1

「かしこまりました〜 (にっこり)」「
「……………」 なぜか、その場を離れようとな

サファイア

「ん?」

フローラ

「え、え〜っと・・・(汗)」「(どうされましたか?)」

店員1

「あ、あの、優子ちゃん・・・さん!!」 緊張しているようです

「こ、これ サインをお願いできないでしょうか!?(あせあせ)

「 一冊の写真集を差し出す

写真集「優子ちゃんシリーズ 第745弾『天使の微笑み(ハート)』、ルシフ屋創本舗発行」

フローラ

「ルシフさんが売っている優子ちゃんシリーズは」 魔界のデ

マントイド王国の大魔王ルシフォンが発行しています

「この時代でも大人気です(苦笑)」「

サファイア

「あ、ああ〜・・・(大汗)」(そういえば、そうだったわね〜・・・)
・) 超有名人です

効果音「ずががー————ん」

3コマ

店員1

「ありがとうございます〜 (きゃっ) (るるるん気分で
カウンターに戻る

店員2

「いいな〜〜」

「わたしも、優子ちゃんのサイン欲しい〜」

フローラ

「……………(汗)」(オレンジジュースまだかな?)

「ところで、お母さん……………」

「今日は、どういったご用件でルチルクオーツに?」

サファイア

「いや〜」

「ここ最近、あなたはこの時代にいることが多いって風の噂を耳に
してね〜」

「久しぶりに会いたいな〜って思って来たのよ」

「迷惑だった?」

フローラ

「迷惑だなんて……………」

「わたしもお母さんに会えて、とっても嬉しいです (にこ〜っ
」

サファイア

「うん」 テーブル越しにフローラを抱き寄せる

「桜ちゃん、かわいい〜」 (三歳児バージヨンの桜ちゃんもかわいいけど)

フローラ

「お、お母さん!?(照れ)」

サファイア

「つと、桜ちゃんのかわいさを再認識したところで」 フロ
ーラを解放する

「一つだけ、話しておかなければならないことがあるの・・・」

真剣な表情

フローラ

「な・・・、なんででしょう?(汗)」

4コマ

サファイア

「ルチルクォーツに隣接しているラリマーって国は知っているよね?」 (あのちよっぴり危ない国ね)

「これは、うち(天空界コランダム王国)の調査団からの報告なんだけど」

「ラリマーではいま、急激に軍備の増強をしているってことらしいの・・・」

フローラ

「軍備の増強・・・(じくり)」

「どこかで戦争が始まるかもしれないってことですか?」

サファイア

「そうのこと」

「で、攻め込もうとしている国ってというのが」

「このルチルクオーツってなわけ」

フローラ

「そうですか・・・」

サファイア

「あら？」

「意外に冷静ね・・・」

フローラ

「以前のルチルクオーツは」 前国王ルチルクオーツ十二世の時代

「その軍事力をもって周辺諸国へ戦いを仕掛けていましたからね」
(ラリマーだけじゃなく)

「それに、ルチルクオーツとラリマーは長期にわたって戦争状態に
ありました」 その戦争でフローラの両親は死んだ

「国王が代わって軍事力が弱体化したと考えられているのではない
でしょうか？」

サファイア

「すぐに戦争になるってことじゃないと思うんだけど」

「とにかく、気をつけてね・・・」

「わたしたち天空界は、精霊界の戦いに助太刀するわけにはいかな
いから」(たとえ娘を助けるためでも)

フローラ

「わかりました」

「ラリマーとの国境付近の警戒を強めるよう、騎士団へ指示を出しておくことにします」

サファイア

「それを聞いて安心した」 (ほっ) 「

「……………」

「……………」

「注文した紅茶はまだなのかしら？」 (汗) 「

フローラ

「あ、あはははっ……………」 (苦笑) 「(本当に遅いですね) (

店員2

「そのサイン、わたしに頂戴」 「

店員1

「だめ……………」 (あははっ) 「

効果音「ずがが—————ん!!」

説明文「あ……………」 4コマなのにオチ……………っていつか笑いがない
!! (爆) 「ごめんなさい (ぺこり) (

コメント

バトルシーンや真面目な話を4コマで表現するのは難しいです
しかも笑いが入らない…………… (苦笑) (

第63話 招き猫の館の管理人

4コマ劇場 アイオライト―423・・・2010/12/02
シリーズ3

タイトル「招き猫の館の管理人」

1コマ

東街地区の湖畔に建つ、パロットたちが拠点にしている洋館にて・

ファリス なぜか洋館の中から出てきて、手には竹ぼうきを
持っている

「うん・・・」 身体を伸ばしている

「今日もいい天気ね〜」 (にこっ)

「さあ〜て、ちゃっちゃんと家の前の掃除を済ましちゃおうかな〜

・って、あれ?(汗)「

突然の登場

フローライト(桜)

「・・・・・・・・」

「ファリス・・・さん?(汗)「

「えっ、どうして!?(大汗)「 軽くパニック

サファイア(優子)

「ちよっ、ファリス先生!!(どびっくり)「

「こんな所で、いったい何をしているんですかーーーー!?」(叫
び)「

ファリス 『ラズベリル ショート劇場』の方では教師をやっています (勇者部顧問も)

「あら、桜ちゃんに優子さん・・・よね? (汗)」 (ほんと、ルウーと瓜二つ・・・)

「何って・・・、家の前を掃除しようとしてただけど・・・ (ほそっ)」

フローラ

「掃除・・・ (汗)」

「たしかここって、パロットさんたちが借りる事になった洋館ですよ?」 住所は聞いています

「どうしてファリスさんが掃除なんかを!!」

ファリス

「ああ」

「じつはわたし」

「この洋館の管理人としてシンセティック商会に雇われたのよ」

フローラ

「ええええええええええええ!! (どびっくり)」

効果音「ずががーーーーーん!」

2コマ

サファイア この人、天空界の神様です (天空神)

「五千年前は人間界で先生をやっていて」

「今度は洋館の管理人さん・・・ (うん)」

「ほんと・・・、精霊神なのに何をやってるんですか? (どきどきどき)」 精霊界で一番偉い人

ファリス

「いや、ほら〜（汗）」

「ここに住むことになったパロットくんって」

「精霊神ファリスを信仰しているのよ・・・（ぼそっ）」

「ラーの信仰対象

「この第四聖界では、わたしを信仰してくれる人はほとんどいないから」

「応援したくもなるじゃない（えへへっ）」

サファイア

「お、応援って・・・（大汗）」

フローラ

「じつは、ファリスさんってわたしより登場が早く」

「第3話から登場しているんですよ」（わたしは第5話が初登場です）

サファイア

「いまが第63話ってことを考えると」

「もの凄い早くに登場したのね〜」（笑汗）」

「えら何の話をしてるんだよ!!」（爆）」

フローラ

「はい（じくり）」

「でも、早くに登場したもんだから」

「いじられる（ネタにされる）回数も多くて〜（うそ！うそ）」

「懐から何かを取り出す

「いまでは、この招き猫の置物こそがファリスさんの女神像ってことになってるんですよ（ぱっ）」

サファイア

「おお〜（そうなの？）」

ファリス

「って、それはあなたの所為でしょうがー！ー！ー！（ぐりぐりぐり）」
うめぼしアターック

フローラ

「い、痛い痛い痛い！！（涙）」

効果音「ばきゅ〜〜〜ん」

3コマ

サファイア

「でも、良いんですか〜？（汗）」

「精霊神って、基本的には精霊界の聖域サンストーン（島）から

「出ちゃだめってことになってるんですよ？」

「まあ、五千年前には先生もやってましたから、いまさらって感じはしますけど・・・（大汗）」

ファリス

「ああ〜、それって原作の方の設定だから」

「4コマには適応されないのよ」
4コマって何だ！？（笑）

「まあ、それでも気になるっていうのなら〜（そうね〜・・・）」

「いまから、この洋館の名称を『サンストーン館』ってことにしましょう」
（決定）

サファイア

「それなら何も問題ないですね」
（こっっ）」

フローラ

「って、全然意味がわかんないですよ!!」(涙)「(どうしてそれで問題ないってことに!?)」

「それに、洋館の呼び方だってそうです・・・」

「ファリスさんが管理人をしていて、そのことに関連性を持たせるっていうのなら」

「サンストーンの館みたいな普通の名称ではなく」

「もっとこうファリスさんを象徴する言葉を使って」(うん)「

「『ファリスの館』・・・とか?(大汗)「そのままかよ!(笑)」

サファイア

「それじゃあ、ファリスさんの持ち家ってことにならない?(汗)「

フローラ

「じゃ・・・、はっ!!」(いいこと思いついた)

「『招き猫の館』ってのはどうでしょう」

サファイア

「おおっ、ナイスアイデア」

効果音「ずががががーーーーーーん!!」

4コマ

フローラ

「決まりですね (うんうん)「

サファイア

「でも、招き猫の館っていうぐらいなんだから」

「この洋館を招き猫で溢れ返さないといけないんじゃない?」(外

にも中にも)

フローラ

「そうですね……(うん)」

「じゃあ、ちよつと過去の時代に戻って」 5千年前の如月家へ

「貯まりに貯まっている『楽天市場』のポイントを使って」

「招き猫の置物を大量購入してこなくつちゃ (通販で)」

ファリス

「……おい(怒)」

フローラ

「え?」

「もしかして『Yahoo!ショッピング』の方が良かったですか?」

「あるいは、『Amazon』で買った方が早めに届くかな?」

(でも、別料金がかかりますよ?)

ファリス

「購入先の問題じゃなくって……!!(うが……
ーっ)」

サファイア

「これにより、パロットたちが拠点にしている洋館の名称は」

なぜかカメラ目線 (笑)

「精霊界の聖域とされる島の名前から『サンストーン館』となっ

た」 説明口調

「しかし、精霊神ファリスが管理人をしていることもあり」

「人々の記憶からは、正式名称であるサンストーンの館という単語
が消え去り」

「いつしか精霊神ファリスを称えるよう・・・」

「別名でもある『招き猫の館』 と呼ぶようになつた(ぼそっ)」

ファリス

「って、そこも読者に変な情報を与えない!!(びしっ)」

サファイアを指差す(爆)

効果音「どがー……………ん!!」

コメント

正式名称『サンストーンの館』、別名(愛称)『招き猫の館』

あるいはネコ屋敷(笑)

第64話 爆誕!? ラブリ〜シリカさん

4コマ劇場 アイオライト―424・・・2010/12/03
シリーズ3

タイトル「爆誕!? ラブリ〜シリカさん」

1コマ

エリアD、砂漠地帯にて・・・

ジェムシリカ

「ちよっ!?(大汗)」 か〜くんを抱っこしています

「このラブリーな物体が『ぬいぐるみ』なのか『かっぱ』なのかはどうでもいいことなんです」

「でも、これをわたしが抱えているっていうのは〜」

「いささか無理があるように思えて・・・(どきどきどき)」(恥
ずかしすぎます〜)

427

美咲

「シリカさん、かわいいですよ (にこ〜っ) (似合っています)

シリカ

「ななっ!!(照れ)」 一瞬で顔色が真っ赤になる

美咲

「ちなみに、か〜くんはぬいぐるみではなく」

「正真正銘のかっぱです (うん) (」

か〜くん

『かあ〜〜』 『べ〜見てもぬいぐるみです)笑(

シリカ

「うう・・・(涙)」

「これまで築き上げてきたわたしのイメージが・・・(しくしくしく)」「　　かっこいい女を目指しています

美咲

「とにかく、病状の進行を抑えるためにも」

「シリカさんには、かっくんを抱っこしておいてもらわないと・・・(ぼそっ)」「

シリカ

「・・・え？(汗)」(よく聞こえませんでしたか・・・?)

美咲

「いえいえ、なんでもありません」

「そんなことより」

「さあ、シリカさん・・・」

「みんなのところにいきましょう (にっ)」「(ラブリー)シリカさんのお披露目です (」

シリカ

「えっ、ちよっ!?(大汗)」

「まだ、心の準備が・・・!!(どきどきどき)」

効果音「ずががーーーーーん!!!」

2コマ

パロットたちと合流

美咲

「と、いうわけで」

「シリカさんと相談した結果・・・」

「しばらくの間、シリカさんはこのスタイル（かわいい系）で通すことになりました」
ぬいぐるみ標準装備

ポルーサイト

「・・・、ななっ!?(どびっくり)」
ありえないモノ
を見たような表情

シーライト

「・・・(じい~~~~っ)」
シリカを凝視

スファレライト

「し、シリカさま~~~~(うつとり)」(素敵です)
シリカだから何でもOK

シリカ

「あ・・・、あはははっ(どきどきどき)」
みんなの反応が
恐い(笑)

「・・・(ちらっ)」
横目でパロツトの様子を窺う

パロツトクリソベリル

「・・・」
啞然

「・・・」
呆然

「・・・」
愕然

「!!(くるっ)」
突然、シリカから視線を逸らすように・・・
身を翻す

シリカ

「なああああ——————！！（ガ————ン——！！）」
シヨックを受けました

3コマ

パロット

「………（ふるふるふる）」
口を押さえるようにして
身体を小刻みに震わせている

シリカ

「え……、えっ！（汗）」
「もしかして、パロットくんに笑われている！？（大汗）」（必死
に笑いをこらえるように……）
「ううううっ！！（涙）」
「だからわたしには、こんなかわいいアイテム似合わないっていつ
たのに……」（大泣き）」

か〜くん

『かあ〜〜』 『やっぱりぬいぐるみです（爆）』

美咲

「いいえ、シリカさん」
「よお〜くパロットさんを見てください……」
「こちら側から見えている耳から首筋にかけて」
「肌の色が真っ赤ですよ〜」

シリカ

「だから、笑いをこらえすぎて」
「耳まで真っ赤になっているんでしょ……？（しくしくしくしく）」

美咲

「あれは笑っているではありません」
「押さえきれない感情を出さないよう」
「必死に耐えているのです……」

シリカ

「押さえきれない……感情？（はてな？）」

美咲

「なら、確認してみることしましょう」
「シリカさん……」
「パロットくんに気づかれないうよう」
「そっと近づきますよ……（ひそひそ）」

シリカ

「は、はい？（汗）（近づくんですか？）」

4コマ

ゆっくりとパロットに近づく……

美咲

「さあシリカさん……」
「よおしく耳を澄ませてください」
「パロットさんの声が……聞こえませんか？」

シリカ

「え、ええ……と……（大汗）」

パロット　なにやら小声で呟いている

「ちよーっ、なんだあれ！？（ぼそぼそ）」
「めちやめちや可愛いじゃないかーっ……！（ぼそぼそ）」

「あの可愛さ反則だろっ!!」(ぼそぼそ)

「ああああ、もお我慢できねえ!!」(ぼそぼそ)

「今すぐ駆けつけて、抱きしめてええええ!!」(ぶるぶる)
「必死に耐えています」

シリカ

「ええええええ!!」(うそ!!)

こちらも小声で

美咲

「ねえ」(にこっ)

シリカ

「え?(汗)」

「もしかして、これって当たり!？」 何が?(笑)

「パロットくんのツボに入っちゃった」(こんな反応初めて!!)

美咲

「いつもはキリっとかつこいいシリカさんが」

「かわいいか〜くんを抱っこして、本人はそのことに照れている・

」

「普段は見ないような姿に、パロットさんはときめいたのではない
でしょうか?」(いわゆるギャップ萌え?)

シリカ

「えっ、ええ〜」

「このぬいぐるみに、そんな素敵な効果があったなんて〜」

美咲

「いやいや」(汗)

「だから、か〜くんはぬいぐるみじゃなくって〜」(大汗)

パロツト

「し、シリカさん!!」(叫び) 「もの凄く真剣な表情

シリカ

「は、はい!!」(びくっ!)

「.....」

「.....」

「.....」(ぱ)パロツト.....くん?」

5コマ

パロツト

「じ、じつはシリカさんにお願ひがあります(汗)」

「こんなことお願ひするのは、すっごく恥ずかしいんですが.....」(大汗)

「もう我慢できないんです!!」(叫び) 「必死に訴える

シリカ

「.....わかりました(ごくり)」 覚悟を決める

「さあ、パロツトくん.....」 片手を広げる

「かわいくなつたお姉ちゃんの胸に飛び込んでお.....」

パロツト

「そのぬいぐるみ!!」

「オレにも抱かせてもらえませんか!!」(叫び) 「うおおおー
————っ!!」

シリカ

「胸に.....飛び込んで.....おい(涙)」 あまりのことに

か〜くんを落つことす

か〜くん

『かあ〜〜〜(いじりいじりいじり)』

転がりながらパロットの足

元へ・・・

パロット

「うおおおお、めっちゃかわいいい〜」
か〜くんを拾い上げる

「なんだこれ、普通のぬいぐるみじゃねえよな〜〜?」

「うおっ、動いた! (どびっくり)」

「えっ、これって生きてるのか〜〜〜!!! (すげええええ
〜〜〜!!!)」
かわいいもの好き?

シリカ

「……………(汗)」
啞然

「……………(大汗)」
呆然

「……………(涙)」
愕然

「…………ぎゃ、ギャップ萌えは〜〜? (しくしくしく)
腕を広げたまま固まっている(爆)

美咲

「う、う〜ん……………(汗)」

「パロットくん攻略は、なかなか難しそうですね〜〜 (大汗)」

シリカ

「そ、そんな〜〜……………(大泣き)」

効果音「ずががが〜……………ん!!!」

コメント

5コマ目突入で、久しぶりにシリカさん大暴走~~~~

(爆)

第65話 忘却の迷宮に到着してみたら・・・

4コマ劇場 アイオライト― 425・・・2010/12/04
シリーズ3

タイトル「忘却の迷宮に到着してみたら・・・」

1コマ

エリアD、忘却の迷宮にて・・・

遺跡調査員 見張り？

「・・・・・・・・・・（大汗）」 心配そうに地下迷宮の入口を見ている

効果音「がさがさつ・・・」 草をかき分けるような音

スファレライト

「・・・・・・・・つと」

「ふう〜、やっと着いた〜〜」

「ねえ、ここでもいいんだよね〜？」 いま来た方向を振り返る

遺跡調査員

「なっ！！（びくっ！！）」

「誰だ！？（叫び）」 小剣を構える

スファレ

「え？（汗）」

「あれ、人がいた・・・（大汗）」（どうして〜？）

遺跡調査員

「ん、冒険者か・・・(ほっ)」 構えた小剣を下ろす

「あんた、まさかこの迷宮に入ろうとしているんじゃないだろうな
く？」

「なら、考え直すことだな」

「この忘却の迷宮はその辺のダンジョンと違ってだな」

スファレ

「てか、あんた誰？(汗)」

遺跡調査員

「こ、この〜〜〜！(怒)」(人がせつかく忠告して・・・)

突然の登場

???? スファレの背後から現れる

「そちらは、冒険者ギルド ユークレースの調査部に所属されて
いる方です」

遺跡調査員 一般メンバー

「あ、あなたは！？(大汗)」

「ジエムシリカさま！！(どびっくり)」

「な、ナンバースであるシリカさまが どうしてここに・・・っ
て(えっ?)」 何かに気づく

「・・・(じい〜〜〜っ)」 シリカの胸元、正確に
は抱えているか〜くんを見つめる

シリカ

「な・・・、なにか？(照れ)」 すっごく照れています

遺跡調査員

「い、いいえ！（大汗）」

「なんでもありません！！（叫び）」（ずかがー！）

見なかつたことにしたようです（爆）

2コマ

ポルーサイト

「で、なんでユークレースの調査部が来ていて」

「忘却の迷宮に潜っているんだ？（汗）」

「めっちゃめっちゃ危ないだろ・・・（大汗）」

シリカ

「あ、今期のナンバー決定戦を忘却の迷宮で行うらしいので」

「その事前調査ではないでしょうか」（汗）」 本当は毒

素の調査です

シーライト

「……………（ふん）」

遺跡調査員

「シリカさまにサイトさま・・・（汗）」

「最近ユークナイトになられたシーラさんに」

「ナンバーズの文様が刻まれた鎧を纏っている見慣れぬ冒険者・・・

」（だけど、武器は銅の剣？）

パロットクリソベリル

「オレはパロットクリソベリル・・・」

「訳あって、昨日からユークレーズに復帰したんだ」

「以後、よろしく頼む・・・」

遺跡調査員

「パロツト・・・クリソベリルって！（汗）」

「あの最年少でナンバーズ入りした天才勇者！？（どびっくり）」

スファレ

「ちなみに、パロツトの今の職業はヒーラーだから（笑）」（しかもレベル1）」

遺跡調査員

「ひ、ヒーラー・・・って？（どきどきどき）」

3コマ

数分後・・・

パロツト

「じゃあ、迷宮の中には調査部のメンバーしか入っていないってことか〜」

遺跡調査員

「はい」

「自分は2日前からここにいますが」

「その間、みなさん以外ここには誰も来ていません」

スファレ

「って、ロードライト来てないのー！ー！？（大汗）」

シリカ

「どっつやらそのようですね〜」（苦笑）「どこかで追い越したようですよ」（

スファレ

「そんな~~~~~! (涙)」

「せっかくここまで苦労して来たのに~~~~~!」

効果音「ずがが—————ん!!」

美咲

「で……」

「どうするんですか?」 (パロットさん?)

パロット

「ロードライトが潜っていないのなら」

「わざわざ危険を冒して迷宮の中へ入る必要なんてない……」

シリカ

「そうですね……」

「ロードライトさんがやって来るまで、ここで待っていたほうが賢明です」

スファレ

「で、でも! (汗)」

「ロードライトは変質者に狙われているんだから」

「急いで見つけてあげないと…… (大汗)」 (考えたくないけど、何をされちゃうか~~~~~)

パロット

「そう……だな (うーん)」

「それじゃあ、この場所にベースを構えることにして」

「オレとサイトがロードライトを捜しに戻ることにしよう……」

サイト

「って、オレたちだけなのかよ!?(叫び)」

パロット

「少数の方が動きやすいだろ?」

サイト

「まあ、確かにそうなんだが……(ちらつ) スファレ
をチラ見

スファレ

「そこでわたしを見るな……!!(うにゃ~~~~!!)」

4コマ

サイト

「ちっ……(汗)」

「また砂漠に逆戻りなのかよ……(ぶつぶつ)」

パロット

「そういうなって(苦笑)」

「さあ、出発……!?(はっ!) 何かを感じる

スファレ

「……?」

「パロット、どうしたの?」

シーラ

「……(じい~~~~) 迷宮の入口を凝視

シリカ

「なにか……来る!!(叫び)」

突然の登場！！

全身が血だらけの調査員

「あ……ああ（よろよろ）」

ふらつきながら出てくる

「……………（どしっ）」

パロットたちの前で倒れ込む

遺跡調査員

「お、おいつ！？（大汗）」

シリカ

「……………（そっ）」

しゃがみ込んで状態を確認する

「……………だめ（ふるふる）」

首を振る

「もう死んでいる……………（ぼそっ）」

スファレ

「……………はっ！（汗）」

「宝珠……………時空族の遺産を！！（ごそごそ）」

懐を探る

シリカ

「無駄です……………（ぼそっ）」

「致命傷を受けたのはかなり前のようです」（少なくとも1時間以上は前……………）」

「たとえ5分間、時を戻したとしても」

「死の瞬間や恐怖を、再びこの方に与えてしまうだけです」

「それに 例え助かったとしてもこの毒素では……………（ぼそっ）」
濃度が高すぎ

スファレ

「そ、そんな……………（涙）」

「いったい、どうしてこんなことに(汗)」
ふと迷宮の入口
に視線を向ける

「何があったっていう・・・ひっ!!(びくっ)」
何かに気
づく

パロット

「・・・(すーっ)」
スファレを庇うように立つ

説明文「迷宮の奥の闇に、赤くて不気味な発光体が二つ浮かんでい
る」

「発光体はパロットたちの視線に気づき、静かに闇の中へと消
えていった・・・」

スファレ

「・・・(汗)」
「な、なにあれ・・・?(どきどきどき)」

シリカ

「・・・(汗)」(やはり・・・)

サイト

「あの不気味な眼光・・・(じくり)」
「忘れもしねえ(汗)」
「5年前の・・・ヤツだ!!(叫び)」

パロット

「・・・古の巨大魔蟲(大汗)」
「・・・(うっん)」

「まだ調査員のメンバーが中に残っているんだっただよな」

「これは、覚悟を決めて迷宮に潜る必要があるそうだ・・・(じく

り」

効果音

「ずじーーーーーーーーん!!」

コメント

やっと本格的な冒険のはじまり・・・なのか？（大汗）

第66話 迷宮に取り残された8人の調査員

4コマ劇場 アイオライト―426・・・2010/12/05
シリーズ3

タイトル「迷宮に取り残された8人の調査員」

1コマ

エリアD、忘却の迷宮入口にて・・・

パロットクリソベリル

「で・・・」

「迷宮に潜っている調査員はあと何人いるんだ？」

遺跡調査員

「はい」

「調査部のトップでもあるユークナイト・・・」

「ナンバー5のペタライトさまを含めて8人です」

10人体

制で調査に来た（1人の死亡を確認）

パロット

「ペタライトって！？（汗）」

「あの爺いさん、まだ引退してなかったのかよ！！（大汗）」

ポルーサイト

「あははっ・・・」

「今でも、めっちゃめっちゃ元気だぞ（苦笑）」（元気すぎるぐらいだ）

パロット

「だが、あの爺いさんがいたとしても」

「相手があの巨大魔蟲だとしたらヤバイだろうな……（じくり）」

サイト

「ああ……」

「五年前は、ほぼ倍の規模で挑戦してオレたち三人しか生き残れなかったわけだしな（大汗）」

スファレライト

「ちよっ!？」

「ここって、そんなに危険なところなの!!」

パロット

「まあ、実際危険なのは」

「地下迷宮を進んだ奥にある」

「巨大神殿の最下層　のはずだったんだが……」（それ以外は難易度高めな普通のダンジョン）

「古の巨大魔蟲がここまで現れたことを考えると」

「五年前とは状況が変わってきているのかもしれない（うん）」

スファレ

「それって……大丈夫なの?（どきどきどき）」

パロット

「大丈夫　じゃないだろうな」

「と、いうわけで……」

「スファレはここに残っておいてくれ」

スファレ

「ええー！ー！ーっ!」

「わたしってば、お留守番なのー！ー！ー!!」（叫び）「（そんな

「……………!!」

2コマ

パロット

「この先、何が起こるか分からない」

「古の巨大魔蟲が襲ってきた場合」

「お前を護れそうにないんだ……」

サイト

「……っていうか(汗)」

「ぶっちゃけ、オレたち自身も危ないかな(苦笑)」

スファレ

「うぐっ……(大汗)」

「ユークナイトが4人も揃っているのに……? (どきどきどき)」

447

パロット

「いや……」

「忘却の迷宮には、オレとシーライトだけで潜ることにする」

「スファレはシリカさんと一緒にこの場所でロードライトが来るのを待っていてくれ」

「サイトは、当初の予定通りロードライトを捜しに砂漠地帯へ向かってくれないか?」

サイト

「あ、それは別に構わないんだが……(汗)」

シーライト

「……(うん)」(二人でか)

スファレ

「で・・・、でも！（汗）」

「この迷宮は相当にヤバイんでしょ？」

「だったら、先にロードライトを見つけて」

「全員で挑戦した方が・・・（大汗）」

パロット

「じゃあ、調査部のメンバーを見殺しにするのか？」

スファレ

「そ、それは・・・（汗）」

3コマ

ジェムシリカ かくくを抱っこしています

「パロットくん・・・」

「わたしは、スファレさんの意見に賛成です（ぼそっ）」

パロット

「し、シリカ・・・さん？（汗）」

スファレ

「シリカさま〜」 同意見でかなり嬉しい

シリカ

「時間がないのはわかります」

「ですが、少し落ち着くべきです・・・」

「あなたとシーラさん、二人で迷宮に潜るのは危険すぎます」

パロット

「でも、シリカさん！」

「こうしている間にも、ペタライトの爺いさんが!! (汗)」

美咲

「…… (はあ)」

「ずいぶんと無謀なアウインの勇者もいたものですね (やれやれ)」

「死にたいのならシーラさんを巻き込まず、自分一人で死んでください……」

パロット

「な、なんだとっっ!! (怒)」 (てめえ、しばらく大人しくしてると思ってたら!!)」

美咲

「え〜と、サイト……さん?」

「あなたは、パロットさんの言ったように」

「そのロードライトさんを捜しに砂漠地帯に向かってください」

「残ったわたしたち全員で、地下迷宮に潜ることにします」

サイト

「お、おあ…… (汗)」

4コマ

パロット

「ちよっ!! (汗)」

「なんでメンバーでもないお前が仕切ってるんだよ! (怒)」

「しかも、全員って言ったらスファレのことも入っているんだよな!!」

スファレ

「えっ、そうなの」「(やった)」

パロット

「それこそ無謀なことだろうが!!」「(激怒)」

スファレ

「ひどっ!!」「(泣)」

美咲

「・・・パロットさん(汗)」

「あなたはどうも、自分が絶対・・・他の人より自分を上位に見る傾向が強いようですね」

パロット

「は?(汗)」「(いったい何を言ってるんだ?)」

「事実、今期冒険者検定の合格者であるスファレと」

「ユークナイトであるオレとは経験が違うだろ!?!」「(大汗)」

美咲

「いいえ・・・(ぼそっ)」

「長年の経験から言わせていただく」と
見た目は13歳で
すが5千年は生きています

「迷宮攻略の鍵はパロットさんではなく スファレさんです」

スファレ

「・・・え?(大汗)」

パロット

「なっ!?(汗)」

「どこをどうしたらスファレが迷宮攻略の鍵ってことになるんだよ」

「!! (叫び)」

美咲

「それは、スファレさんが・・・へっぼだからです(ぼそっ)」

スファレ

「ちょーーーーーー!! (どびっくり)」

効果音「ずががーーーーーん!!」

パロット

「..... (汗)」 スファレをチラ見

「そ、そうか、へっぼか(大汗)」

「確かに、へっぼなら忘却の迷宮を攻略してしまうかも・・・(どきどきどき)」

スファレ

「え、えっ!?(汗)」

「そのへっぼこって設定、まだ有効だったの(汗)お!! (涙)」

美咲

「うんうん」

「へっぼ最強です」 へっぼこマスター青山七瀬には勝てません

スファレ

「だ、か、ら、(大泣き)」

サイト

「あゝ・・・(汗)」

「へっぽこのことはどうでもいいから」

「オレ、ロードライト捜してくるわゝゝゝ」(ぼりぼり)
をかきながら立ち去っていく

頭

スファレ

「へっぽこういうなーーーー！！！！(うにゃゝゝゝ)！！」

コメント

4コマですから笑いも入れないと (爆)

第67話 絶体絶命！最後の調査員

4コマ劇場 アイオライト― 427・・・2010/12/06
シリーズ3

タイトル「絶体絶命！最後の調査員」

1コマ

注意！・・・少しだけ残酷なシーン（？）が含まれています

忘却の迷宫、地下神殿手前の岩陰にて・・・

???? 18歳ぐらいの女性冒険者

「はあはあはあ・・・（大汗）」

「・・・（ちらり）」 岩陰から神殿前を覗く

古の巨大魔蟲×3体 巨大な百足？

『がぎゃー！！！！！』（叫び）』

『がふっごふっ！！』 重なり合いながら地面に落ちている肉

片（？）を喰らっている

????

「うえっ・・・（汗）」 おもわず噎せ返る

「くっ、みんな・・・（涙）」

老冒険者

「う・・・ぐっ（痛っ）」 全身血だらけで胸に致命傷を負っている

「??？」

「はっ、ペタライトさま！」

「気づかれましたか!!！」

ペタライト ユークナイトNo.5

「・・・うぬ?(うつつ)」

「チャロアイト・・・」

「無事であったか・・・」

チャロアイト

「ペタライトさまに助けていただき、わたしは無傷です(ぼそっ)」

「でも、わたしを庇ったために、ペタライトさまのお身体が・・・

(涙)」

ペタライト

「ぬっ・・・、うぐっ!!！」

身体を動かそうとすると全身に

激痛が走る

「はあはあはあ、どうやらワシもここままでのようだな・・・(うぐ

っ)」

チャロアイト

「そ、そんな・・・(涙)」(わたしの所為で・・・)

2コマ

ペタライト

「他のメンバーは・・・どうなった?(はあはあ)」

チャロアイト

「はい・・・(汗)」

「残っていたメンバーは、わたしとペタライトさまを除いて4名が

戦死・・・」 既に巨大魔蟲×3体の腹の中

「救援の要請に向った3名も 無事に外へ出られたかどうか・・・
(大汗)」

ペタライト

「・・・げほげふっ！」 咳き込んで吐血

「はああ、ヤツの・・・巨大魔蟲の足から逃げ延びれるとは考え
辛いな・・・(ぼそっ)」 全員死にました

「チャロアイトよ・・・(うつつ)」 身体を起こして、チャ
ロアイトに手を向ける

チャロアイト

「ペタライトさま！(ぎゅっ)」 ペタライトの手を握る
「無茶をしてはいけません！！(大汗)」(横になっってください！)

ペタライト

「よいかチャロアイト・・・(はああ)」

「迷宮の入口に残してきた1名には」

「3日が経過しても・・・ワシらが戻らないときは」

「王都に戻り、ギルドマスターへ報告せよと伝えてある・・・」

「もはやおまえ1人だけでは・・・迷宮の外へと出ることは叶わ
ないだろう(げふっ！)」

「ヤツらから身を隠し、救援が来るまで・・・逃げ・・・うぐっ！
！？(がくっ)」 絶命しました(南無)

チャロアイト

「ペタライトさまーーーー！！(大泣き)」(うわあああ
ーーーーん！)

ペタライトが絶命して4時間後・・・

チャロアイト 重なった岩陰に身を隠して震えている

「はぁ、はぁ、はぁ・・・（がたがたぶるぶる）」

「あれから何時間ぐらい経ったんだろう・・・（ぼそっ）」

「もう3日目 なわけないよね？（大汗）」

「・・・・・・・・（きよろきよろ）」 急に不安になる

「見張りの人が休憩せずギルドへ助けを求めに向ったとして 最短でも2日はかかる」

「そこから救援メンバーがこの迷宮に到着するのはさらに2日後・・・

」

「まだ、見張りが王都へ戻るまで1日はあるわけだし、実際には今から5日後・・・」

「救援が到着したとして、迷宮に入ってからここまで来るのにはさらに時間がかかる」 どんどん嫌な考えが浮かんでくる

「それまで、あの魔蟲から逃げないといけないだなんて・・・（ああああっ！！）」

効果音「がさがさ、がさがさ・・・」 不気味な音が近づいてくる

チャロアイト

「ひっ！！（びくっ！）」

「ま、まさか・・・（大汗）」

効果音「がさがさ、がさがさ、がさがさ・・・」 音がだんだんと大きくなる

チャロアイト

「は、早く・・・（涙）」

「早く逃げないと……(どきどきどき)」
「……ひゃっ!!(どびっくり)」

突然の登場

一回り大きな古の巨大魔蟲
『がふっ……(むしゃむしゃ)』 ペタライトの死体を啜えている

チャロアイト
「……(ぞくっ)」 一気に血の気が引く
「い、いやああああ……!!(泣き叫び)」
何も考えずに走り出す

一回り大きな古の巨大魔蟲
『がぎゃ……!!(叫び)』 ペタライトの死体を投げ捨てて、雄叫びを上げる

4コマ
効果音「がさがさがさ、がさがさがさ!!」 巨大魔蟲、身体をくねらせながら、チャロアイトを追いかける

チャロアイト
「はあはあはあ!!(大泣き)」 必死に逃げている
一回り大きな古の巨大魔蟲
『ががつ!!(しゃきんしゃきん)』 牙を何度も交差させる

チャロアイト
「いや、いやっ……!!(泣きじゃくる)」

「来ないで……、誰か助け……え？（愕然）」

古の巨大魔蟲×5体

『がぁあぁあ~~~~!!』

叫びながら身体を起こす

チャロアイト

「あ……、ああ（がたがたぶるぶる）」
恐怖で身動きがとれない

古の巨大魔蟲

『……ぐう〜（ギロリ）』

古の巨大魔獣の1体がチャロア

イトの目前に迫る

チャロアイト

「あ……」
思考が停止してしまっている

古の巨大魔蟲

『がぁあぁあぁあ!!（雄叫び）』

口を大きく開いてチャ

ロアイトに襲いかかる

チャロアイト

「あ……、あははっ……（微笑）」

もはや笑うしかない

突然の登場

???

「避ける……（ぼそっ）」

「ライトニング・バー……アスト!!（叫び）」

効果音「ずががっ、どっごおおお……ん!!」

突然、落雷が発生して古の巨大魔蟲が大爆発！

チャロアイト

「なああああああつ！！（大汗）」

爆音で耳がキンキンする

「つて、ええっ！？（どびっくり）」

声のあった方を振り向く

パロツトクリソベリル

「……………（大汗）」

同じく耳がキーンとしている

スファレライト

「つて、こんな洞窟の中で」

やっぱり耳がキーン中〜

「爆雷系なんか使うんじゃねええええええー！！！！（うにゃー

……………）」

パロツト

「あ……………（汗）」

「何かを叫んでいるのはわかるんだが〜」

「耳がキンキンして聞こえないや〜〜（苦笑）」

スファレ

「何言ってるか聞こえないけど」

「あんた全然反省してないでしょ……………！！（がああああー

……………）」

チャロアイト

「あ……………（汗）」

「なんだか場の雰囲気ガラツと変わった……………（大汗）」（しか

もギヤグ方向に……………）」

効果音「ずがが……………ん……………ん……………ん……………ん……………」

コメント

かっこいい登場シーンがスファレとのやりとりで台無し (笑)

第68話 シリカの身体に渦巻く毒素の根源

4コマ劇場 アイオライト― 428・・・2010/12/07
シリーズ3

タイトル「シリカの身体に渦巻く毒素の根源」

1コマ

忘却の迷宮、地下遺跡にて・・・

チャロアイト

「鎧に刻まれたその文様・・・(ごくり)」

「あなた、ユークレースのナンバーズ〜!? (どっくり)」

パロットクリソベリル

「ユークナイト、ナンバー13・・・パロットクリソベリル(ぼそっ)」「

「職業ヒーラーでレベルは1だ!! (えっへん)」

チャロアイト

「へ・・・、レベル1で・・・ヒーラー!? (大汗)」
理解
不能

スファレライト

「だ〜か〜ら〜!!」

「そこは自慢できるとこじゃないでしょー！！！！(うたやー
ー！！！！)」

「・・・って(汗)」 何かに気づく

「ちよつとちよつと〜(大汗)」

「さっき倒した大ムカデ うねうね動いてるんだけど・・・(キ

モッ！」

パロツト

「あゝ・・・(汗)」

「ライトニング・バーストで痺れさせて、動きを止めていただけだしなゝ(大汗)」

「そりゃゝ、時間が経てば復活してくるだろう(ぼそっ)」

スファレ

「って、なにさらつととんでもないことを言ってるのよゝゝ！(涙)」

パロツト

「言っておくが、ほとんどダメージは与えられていないぞ・・・」

「ヤツがあの程度で倒せたら、この迷宮の攻略も簡単だったろうなゝ(あははっ)」

スファレ

「ちよーーーーっ！(汗)」

「だったら、今の状況ってめっちゃめっちゃ危ないじゃない・・・(大汗)」

「しかも、さっきの爆音で大ムカデが大量に集まってきちちゃってるし！(どきどきどき)」

パロツト

「うむ、大ピンチだな・・・(どうしよう?)」「(5年前は1体しかいなかったのに・・・)」

スファレ

「だったら少しは焦りやがれーーーー！！(うにゃーーーー)」

「！！！」

パロット

「何を言う！」（失礼な！）

「これでも焦っているんだぞ……（ぼそっ）」

スファレ

「まったくそうは見えねえええー！！！！（叫び）」（ぜって〜嘘だろ！！）

チャロアイト

「ああ……（涙）」

「さっきまでの緊張感が、なんだかバカみたいに思える……（しくしくしく）」 危うく死ぬところでした

2コマ

パロット

「まあ、とりあえず……」

「さっさと逃げたほうがよくな？」（大量のムカデが襲ってくる前に……）

スファレ

「そ、そう……だね〜（大汗）」

チャロアイト

「で、でもどこに逃げるっていうんですか！？（大汗）」

「3人だけじゃ、突破口を開くのも難しいですよ！！（涙）」

既に囲まれて走り抜ける道もなし！

パロット

「3人・・・？」

「いや、4人だ（ほらこいつ・・・）」

シーライト

「・・・・・・・・（しゅたっ！）」

手をかざして挨拶をする

チャロアイト

「うわっ、なんかいたー！ー！（どびっくり）」

「って、ナンバーズのシーラさん！！（大汗）」

チャロアイ

トの方が古株

「あなたも、わたしたちを助けに！？」

パロット

「いや、オレたちは別の目的があつて忘却の迷宮に来たわけだが」

「ペタライトの爺いさんが危ないって聞いてな」

チャロアイト

「うっ・・・・・・・・（汗）」

「ペタライトさまは わたしを庇ってお亡くなり・・・・・・・・（涙）」

（他のメンバーも全員・・・）

パロット

「・・・・・・・・（遅かったか）」

「とにかく、あんなだけでも無事でよかった・・・」

「詳しい報告は後で聞くことにして」

「いまは、はぐれてしまったシリカさんに合流することが先決だな」

チャロアイト

「えっ！？（汗）」

「シリカさんって、あのジェムシリカさまのことですよね！！（大

汗）」

「どうしてこんなところに・・・」

「だってシリカさまは、急いで古の巨大魔蟲の毒素を中和させないと」

「あと数ヶ月の命だって・・・あっ！！（しまった！）」
調査部における極秘内容です

スファレ

「え・・・？（汗）」（あと・・・数ヶ月の命！？）

パロット

「ほお・・・」

「なかなか興味深い内容だな・・・（ギロリ）」（詳しく聞かせてもらおうか・・・）

チャロアイト

「いやっ、なんというか、その・・・（大汗）」

「いまは、迫り来る巨大魔蟲から逃げ延びることが先決なんですよね！（ねっ！）」

効果音「ずががーーーーーん！！」

3コマ

忘却の迷宮、巨大神殿へとつながる階段にて・・・

効果音「ちりん、ちりん・・・」
美咲の鳴らす鈴の音

美咲

「この鈴の音には、魔物の意識を阻害させる効果があります（ちりん）」
もちろん美咲が鳴らさないとダメ

「強力な魔物や自我を持った敵に効果は期待できませんが……（ちりん）」

「ここにいる大ムカデ程度になら、わたしたちの姿は認識できなくなるでしょう（ちりん、ちりん）」

ジエムシリカ　か〜くんを抱っこしている

「……美咲さん（汗）」

「いったいわたしをどこへ連れて行くつもりですか？」

「それに、美咲さんはことあるごとにパロットくんを試していたようでしたが……」　　気づいていました

「離れてしまっても大丈夫なのですか？（大汗）」

美咲

「そうですね〜……（う〜ん）」　　不意に瞳を瞑る

「たつたいま、調査員の生き残りらしき女性と合流して」

「十数匹の巨大魔蟲に囲まれてしまったようですが……」
瞳を開いてシリカを見つめる

「その程度の危機、アウインの勇者であれば何とかするでしょう」

一応、パロットの実力は認めています

「まあ、へっばこのスファレさんもいることだし……」

シリカ

「えっ！（大汗）」

「どうして、パロットくんたちの様子が!？（どびっくり）」

美咲

「それは……ですね〜」　　召喚の腕輪を見せる

「お仲間契約していただいているツチノコつつち〜に来ていただいで」　　何代目のつつち〜だろう？（笑）

「姿を消した状態で、パロットさんたちの様子を窺ってもらってい

るのですよ」

「そして、つつちの見た光景を　わたしも見ていると・・・」

シリカ

「そ、そんな不思議な法術、聞いたことがない・・・(汗)」
階段の頂上に到着

美咲

「簡単な樹神流退魔術の一つです(あははっ)」

「もちろん、契約したお仲間がいなくてできませんが・・・」

「シリカさん、その辺りで立ち止まってください(ごそごそ)」

懐から何かを取り出す

「そこがこの神殿における儀式の場　祭壇のようです」　憑

いた場所で祓うのが基本です

シリカ

「・・・え?(汗)」(祭壇?)

4コマ

美咲

「では、これよりシリカさんに取り憑いている怨霊を祓います(よ
と)」「　シリカの周りに五色の宝珠を設置する」

シリカ

「怨霊・・・?(なんですかそれ?)」

美咲

「わかるように言えば、その身体に蠢く毒素の根源(ばばばっ!)」
目にも留まらぬ速さで印を結ぶ

「あなたを苦しめているのは古の巨大魔蟲の毒ではなく・・・」

「この迷宮の主による呪いなのです！！（はあああつ！！）」
五色の宝珠が輝き、シリカの身体が光に包まれる

シリカ

「うぐっ……！（痛っ）」

「があああああ……！！（叫び）」 全身に

激痛が走る

美咲

「かなり怨霊との融合が進んでいますね」

「生身の身体から神経を剥ぎ取るような痛みでしょうが我慢してください」

「本当に神経を剥いでいるわけではありませんから」

シリカ

「つて、ちょーっ！（があああつ！！）」

「我慢……とか、そんなレベルの痛みじゃ……！」

「うぐっ！！（どくん！！）」 身体が大きく脈動する

「ぐわああああ……！！（悲鳴）」 突如、シ

リカの身体が黒霧に包まれる

突然の登場

「……？」 シリカの身体に重なるように現れた黒い人影

『が……（うぐっ）』

美咲

「シリカさん、気をしっかり持ってください！（しゃらん、しゃらん！）」 神楽鈴を鳴り響かせる

「強い心を持つことが 怨霊に勝つ唯一の……！？（ぎょっ！）」

「！」

怨霊？

『！！（ギロリ）』

真っ赤な瞳で美咲を睨みつける

美咲

「なっ！？」

効果音「ぴしっ！！」
力を包んでいた光が収まる

五色の宝珠すべてにヒビが入り、シリ

シリカ

「う・・・くっ（くらっ）」

黒い人影が身体に戻って意識を

失う

美咲

「・・・っ」と 倒れ込むシリカの身体を受け止める

「・・・（じいっ）」 気絶しているシリカを見つめる

「・・・（ちらっ）」 ヒビ割れた五色宝珠をチラ見

「もしかして・・・、怨霊じゃ・・・ない？（どきどきどき）」

わたしの勘違い？） っ、おいこら！！（怒）

コメント

爆）・・・なんだこの展開？（大汗） まったくの予想外です）

第69話 もう一騒動ありそうです

4コマ劇場 アイオライト― 429・・・2010/12/08
シリーズ3

タイトル「もう一騒動ありそうです」

1コマ

忘却の迷宮にて・・・

説明文「ぼやけてはつきりしない映像がどこかへ向けて流れていく・・・」

「数十もの巨大魔蟲が幾重にも重なりあい、人が通るような道は存在していない」

「その奥に謁見の間があり 扉を潜ると立派な王座があった」

「王座には黒い霧のような何かを纏っている女性が俯きながら座っている」

「映像が近づくと、女性はゆっくりと顔を上げた」

「女性は不気味な笑みを浮かべており、見開かれた瞳には赤く妖しげな光が宿っている・・・」

「その姿は、紛れも無く盲目の精霊騎士 ジェムシリカであった」

忘却の迷宮、巨大神殿前にて・・・

ジェムシリカ

「・・・う、ううう（ぼ～～～っ）」 意識が朦朧としている

「いまのは 夢・・・？（うん）」

?????

「……………」

「……リカさ……起き……」

「……って、いい加減に起きてください!! (ぼかっ!)」

シリカの頭を叩く

シリカ

「痛っ!! (がばっ)」 突然の痛みに身体を起こす

「って、美咲さん…… (涙)」 頭にはマンガみたいなコブ
ができている

「あれ、ここは……どこ? (大汗)」

美咲

「ここは忘却の迷宮ですよ (苦笑)」

「さあシリカさん……」

「動けるようでしたらパロットさんたちと合流して」

「この迷宮から出ることにしましょう」

シリカ

「え……」

「もう出してしまうのですか? (どびっくり)」

美咲

「さきほども言いましたが」

「この迷宮に入っていた調査部の生き残りはパロットさんたちが保
護しました」

「ロードライトさんも立ち入った様子はありませんし」

「わたしたちが忘却の迷宮にいる意味は何も無いですよ……」

シリカ

「あゝ、ええ〜と…… (汗)」

「ところで、わたしに取り憑いていたという怨霊　はどうなった
のでしょうか？（ぼそっ）」

美咲

「さあ、細かいことは気にしないで」

「パロットさんたちを捜しましょう」
病状についてはかゝ
くんを抱っこしていれば大丈夫

シリカ

「こ、細かいことって・・・えええ！！（どびっくり）」

効果音「ずががー！！！！！！！！ん！！！」

2コマ

一方その頃、忘却の迷宮入口では・・・

効果音「がさがさっ・・・」
草をかき分けるような音

遺跡調査員

「だ、誰だ！？（びくっ）」
小剣を構える

突然の登場

ロードライト

「ふう〜、やっと着いた〜・・・って（汗）」
「人がいる！？（大汗）」（どうして〜？）

遺跡調査員

「少年のような姿の女の・・・子？（汗）」（女の子だよな？）
「もしかして、おまえがロードライトか？（どきどきどき）」

ロードライト

「えっ、どうしてわたしの名前を!?!(どびっくり)」

遺跡調査員

「いや、4時間ほど前に迷宮へ入っていったパロットとかいうユークナイトに」

「おまえの話聞いていな」

「ここに来るかもしれないからよろしく頼むって……」

ロードライト

「なっ、パロットさんが……どうして忘却の迷宮に!!(大汗)」
(しかも、4時間も前に来てたんですか!?)

遺跡調査員

「パロットたちはおまえのことを心配していたぞ」

「なんでも、変質者に付きまとわれ狙われていると……」

ロードライト

「変質者に 狙われてる?(はてな?)」

「それってもしかして、アルバイトさんのことじゃ……(きよろ

っ)」「 振り返る

エルバイト

「はあ、はあ、はあ」 不気味な息遣いですが、単に疲れているだけです (笑)

「ロードライト」(おゝい)」

「その、忘却の迷宮って まだなのかよ……って、ぬ?」

遺跡調査員の存在に気づく

遺跡調査員

「……………（大汗）」（ま、まさか……………こいつが）」

3コマ

ロードライト

「え〜つと（汗）」

「彼はアルバイトさんっといつて〜」

遺跡調査員

「あ、アルバイトだと〜（汗）」

「本名を明かさないと妖しいヤツめ……………（大汗）」

ロードライト

「たった一人で王都を出たわたしを見かけて〜」

遺跡調査員

「いい獲物を発見したとでも思ったのだろうか（うんうん）」

ロードライト

「心配して追ってきてくれたんですよ（にこ〜っ）」

遺跡調査員

「いやいやいや」

「仲良くなるまで、本心を隠しているだけだ……………（間違いない）」

ロードライト

「まあ〜、確かに途中の温泉で裸を覗かれはしましたけど……………」

むっ（）」

「基本的にはいい人なんです」

遺跡研究員

「や、やはり……(大汗)」

「おまえを信頼させておいて、これから変態行動に移ろうとしているのだな!!(激怒)」

ロードライト

「……え〜っと(汗)」

「さっきから、いったい何を……?(大汗)」(ボクの話をやんと聞いてくれますか?)

遺跡調査員

「……(汗)」ロードライトを見つめる

「……(ちらつ)」エルバイトをチラ見

「……(じい〜っ)」エルバイトを凝

視する

「……変質者発見!!(叫び)」怒りに震えながら剣を構える(笑)

エルバイト

「つて、誰が変質者じゃ……!!(うが……!!)」

効果音「ずがが……!!」

4コマ

ロードライト

「ちょ……!!(どびっくら)」

「お、落ち着いてください!!(叫び)」

「アルバイトさんは……確かに変質者ですけど〜(ぼそっ)」
裸を見られたことを根に持っている??

エルバイト

「つて、おいーーーーーっ!!!(怒)」「てめえ、何言ってるやがる
!!(」)

遺跡調査員

「や、やはり変質者……(大汗)」

エルバイト

「だ、だからオレは変質者じゃ……」

遺跡調査員

「ふん……」

「変質者は、自分のことを変質者とはいわない(ぼそっ)」「

エルバイト

「なんだその屁理屈はーーーーー!!!(があああーーーーー!!)」

「(意味わかんねえよ!!)」

遺跡調査員

「これ以上、問答無用……(ギロリ)」「
エルバイトにジリ
ジリと近づく

エルバイト

「お、おい、冗談だろ……?(汗)」

遺跡調査員

「死にさらせ、変質者ーーーーー!!!(どりゃーーーーー!!)」「
剣を振り上げて飛びかかってくる

エルバイト

「うわっ、あぶねえーーーーー!! (ひよい) 紙一重でかわす」

「お、おいロードライト! (汗)」

「こいつには話がまったたく通じねえ」 (大汗)

「さっさと逃げるぞ! (どどどどどっ) ロードライトの手を掴んで走り出す」

ロードライト

「あわわわっ (汗)」

「え、アルバイトさん、落ち着いてーーーーー!! (涙) 身体が真横になってなびいている」

エルバイト

「やかましいーーーーー! (叫び)」

「はやく逃げないと、おまえも殺されるぞーーーーー!! (どたどたどた) 忘却の迷宮へ逃げ込む」

遺跡調査員

「おい、ちよつと待て! (汗)」

「その迷宮に入っちゃダメだ!」

「マジでヤバイんだってーーーーー!! (叫び)」

「・・・ああ~~~~ (大汗)」

「入っちゃった・・・ (どきどきどき) (オレ、し〜らないっとなんか)」

効果音「ばきゅ~~~~~ん」

コメント

ちなみにロードライトを捜しに戻ったポルーサイトは、砂漠で干涸らびています (爆)

第70話 古の巨大魔蟲って本当に倒せるの？

4コマ劇場 アイオライト―430・・・2010/12/09
シリーズ3

タイトル「古の巨大魔蟲って本当に倒せるの？」

1コマ

忘却の迷宮、地下遺跡にて・・・

古の巨大魔蟲

『がぎやー！ー！ー！っ！！（ぶう〜ん！）』 振り上げた頭で
パロットたちに襲いかかる

パロットクリソベリル

「うおおおー！ー！ー！っ！！（かきん、がががつ、ふにやつ）
鋭い牙を銅の剣で受け止める

「うげっ、銅の剣がひん曲がった！ー！ー！ーあ！！（大汗）」（こ
れ、不良品じゃねえ〜のか！ー！ー！！）

スファレライト

「パロット！ー！」
「わたしの剣を使って！ー！（ひょい）」 自分の剣をパロッ
トに投げ渡す

パロット

「スファレ、すまない！！（しゃきっ）」 受け取って抜刀する
「よし、ここからが第二回戦の始まりだ！ー！ー！ー！！（叫び）」

効果音「かきー！ー！ーん！」 小気味のいい金属音

古の巨大魔蟲

『………(しゃきゅん、しゃきゅん!)』 牙を
交差させる

パロット

「ぐ……がつ!? (大汗)」
「鉄の剣が真つ二つに……!! (どびっくり)」「(二回戦、
終了~!!)」

スファレ

「ああ…… (涙)」
「わたしの剣が……!! (大泣き)」(高かったのに—
——!!)」

2コマ

チャロアイト

「つて、剣が折れたとかそんな話をしている場合じゃないですよ
!?(涙)」
「このままじゃ、わたしたちも巨大魔蟲に食べられちゃうですよ
!(大泣き)」 仲間は食べられました

スファレ

「……え?(汗)」(食べられる?)
「全滅したら、お金を半分に減らされて」
「お城に戻されるだけじゃないの?(大汗)」
『おおスファレよ、死んでしまうとは情けない……』
「とか言われるだけで(ぼそっ)」(あるいはセーブポイントから
の再開)

チャロアイト

「なんですか、そのめちゃくちゃな設定は—————!!」(うにゃ
—————!!)」

「そんなご都合主義、あるわけないじゃないですか!!」(大泣き)
(死んだら魔物の腹の中ですよ!!)

スファレ

「でも、ドラクエじゃ〜・・・(汗)」

チャロアイト

「ドラクエって何ですか—————!!」(叫び)

古の巨大魔蟲たち

『が・・・ぎゃ〜〜〜(おろおろおろ)』

パロット

「はっ!」

「スファレたちの激しさに、ムカデが戸惑っている・・・(じくり)
」

「いまこそ絶好のチャンス!!」(ひよい) 両脇にスファ
レとチャロアイトを抱える

スファレ

「えっ?(汗)」

チャロアイト

「ひゃわあっ!!」(なにごと!?) 顔色が真っ赤

パロット

「……………(よし!)」 覚悟を決める

「逃げるぞー！ー！ー！ー！ー！！（すたたたっ！！）」
人とは思えないスピードで猛ダツシュ

チャロライト

「い、いやああああー！ー！ー！ー！ー！！（し、死んじやうよー！ー！ー！ー！！）」

スファレ

「ちょー！ー！ー！ー！ー！！（大泣き）」（け、景色が超速で流れていくー！ー！ー！ー！ー！！）」

効果音「ずががー！ー！ー！ー！ー！ー！！ん！！！」

3コマ

一方その頃、ロードライトたちは・・・

エルバイト

「なあ、ロードライト・・・（汗）」

「忘却の迷宮つて、攻略レベルも設定されていない」
いまま

で攻略した人がいない

「超難関のダンジョンなんだよな？（大汗）」

「オレたちみたいな低レベルの冒険者が入ったりして・・・」

「本当に大丈夫なのか？（ときどきどき）」（今更こんなことを言うのはアレだが～）

ロードライト

「そうですね～～～（ピッ、ピッ）」
冒険者カードを操作している

「冒険者管理組合提供の情報によりますと～」

「確かに最深部には古の巨大魔蟲と呼ばれる大百足が巣くっている

そうです」

「その強さは、ユークナイトが三人がかりでも倒せないとか・・・
(すごいですよね)」

エルバイト

「つて、それつてめっちゃめっちゃバイじゃないか！(どびっくり)」

「そんな魔物が現れたら、オレたちだけでどうしろっていうんだ
!?(大汗)」

ロードライト

「あははっ、大丈夫ですよ(につこり)」

「情報には、かなり奥の方まで潜らないと」

「巨大魔蟲は現れないそうですから」「(こんな入口付近には現れ
ませんよ)」

エルバイト

「そ、そうなの・・・か?(大汗)」

「・・・・・・・・・・(ちらっ)」 進行方向をチラ見

「じゃ、じゃあ・・・あれは?(どきどきどき)」 何かを指
差す

ロードライト

「え?」

突然の登場

パロット

「どっしえーーーーー!!!」(叫び)

スファレとチャロ

アイトを抱えて走ってくる

古の巨大魔蟲×18体

『わぎやがあああー！！（しゃかしゃか）』
で津波のように押し寄せてくる
まる

ロードライト

「なあああー！！（どびっくり）」「でっかいムカデー！！」

効果音「ずががー！！ー！！ー！！」

4コマ

エルバイト

「ちよっ・・・、どうするんだ！？（大汗）」

「やっぱり、逃げた方がいいよな！！（おろおろ）」

ロードライト

「あゝ、確かに外まで逃げた方がいいかもしれませんが（うん・・・）」

「アレが外に飛び出たら、何かと危ない気がします・・・」（好き勝手に動き回られたりして）

「それなら、集まっている今を狙って・・・足止めた方が良さそうですね（ぼそっ）」

エルバイト

「あ、足止め？（大汗）」

「おま 何いって・・・（どきどきどき）」

ロードライト

「じつは、こんなこともあるつかと（かちやかちや）」
筒
状の部品を組み立てている

「巨大魔蟲用の麻酔弾も用意してあるんですよ（かちゅっ）」
シンセティック・カノンを構える
「相手の強さにあわせて、麻酔効果は50倍です（にこっ）」
もちろんシンセティックが創った

エルバイト

「ちよつ、50倍!?（大汗）」

「その麻酔弾という名の破壊兵器の威力が50倍だって……
!」（どびっくり）」

ロードライト

「シンセティック・カノンは破壊兵器じゃありません!（むかつ）」
「いいでしょう、見ていてください（かちゅっ）」

「あの迫り来る巨大魔蟲×18体を全て眠らせて……」

「麻酔弾であることを証明してみせます!」（ピピピ、ピピピ……
ッ!）」 ロックオン

エルバイト

「つて、こんな閉鎖空間でそんなもんを使ったら、いったいどうなるか!！」

ロードライト

「シンセティック・カノンの巨大魔蟲バージョン……ファイア
—————!」（カチッ）」

効果音「ずごごごー—————!」 ミサイル(?)が巨
大魔蟲へ向かって放たれる

「ぴかっ! どつががあああああ~~~~~ん!」
パロットたちも含めて大爆発

エルバイト

「なああああーーーーー!! (大汗)」

「大ムカデがみんな木っ端微塵ーーーーーっ!! (どびっくり)

」

パロット&スファレ&チャロアイト

「「「わぎゃーーーーーあ・・・ (ひゅ~~~~)」「」

大爆風に吹っ飛ばされる

ロードライト

「・・・・ (汗)」 啞然

「・・・・ (大汗)」 呆然

「・・・・ (はてな?)」 愕然

「あ・・・、あれ~~~~? (どきどきどき)」「(これって麻醉弾・・・)

エルバイト

「おまえ、ちよつとは学習しろーーーーー!! (激怒)」「(うがーーーーーあ!!!)

説明文「ロードライトには助けなんて必要なかったかも (爆)」

コメント

ロードライトとエルバイト、パロットたちと合流

第71話 真実を隠すために、ちょっとした冗談を・・・

4コマ劇場 アイオライト | 431・・・2010/12/11
シリーズ3

タイトル「真実を隠すために、ちょっとした冗談を・・・」

1コマ

忘却の迷宮にて・・・

ロードライト

「え〜っと・・・(汗)」

「パロットさんにスファレさん・・・知らない人、大丈夫ですか
〜？(苦笑)」

パロットクリソベリル

「って、あんな物騒なモノぶっ放しやがって・・・」 シンセ

ティック・カノン

「殺す気かーーーーー！！！！(があああーーーーー！！！！)」

ロードライト

「じ、ごめんなさい！！(ひゃ〜〜！)」

エルバイト

「おいおい、そんな言い方はないんじゃないか？」

「ロードライトは、おまえたちを助けようとしたんだぞ・・・」

ロードライト

「いや、ボクはただ・・・(汗)」

「古の巨大魔蟲×18体を麻酔弾で眠らせようとしただけで・・・」

（大汗）」

エルバイト

「だ〜か〜ら〜」

「それは麻酔弾じゃなくって、ただの大量破壊兵器！！（何度も言わせるな！）」

ロードライト

「そ、そんなはずは・・・（大汗）」（お姉ちゃんは麻酔弾だつて・・・）」

エルバイト

「あの木っ端微塵に吹っ飛んだ古の巨大魔蟲×18体はどう説明するんだーーーー！！（叫び）」

パロット

「出たな変態・・・（ぼそっ）」

エルバイト

「誰が変態かーーーー！！！！（うぎゃーーーー！！！！）」

効果音「ずががーーーー！！！！ん！！！！」

2コマ

初見メンバーの紹介やリーダー問題の説明が終わりました

ロードライト

「ど、どうしてボクがパーティのリーダーに・・・（しくしくしく）」
責任重大

パロツト

「そんなことより……」

「話を聞かせてもらおうかロードライト」

「一人でこの忘却の迷宮へやって来て、何をしようとしていたのか……」

エルバイト

「一人じゃねえ、二人だ!! (オレも一緒だぞ!)」

パロツト

「あ…… (汗)」

「話が進まないからアルバイトは黙っていてくれ…… (ぼそっ)」

エルバイト

「アルバイトじゃねええええー……!! (うにゃー……!)」

「エルバイトです」

パロツト

「さあ、理由を聞かせてもらおうか…… (DCの仕事ってわけでもないんだろ?)」

エルバイト

「って、相変わらず無視するのかよ…… (涙)」

ロードライト

「…… (うん)」

「…… 答えたくありません (ごめんなさい)」

パロツト

「もしかして……」

「シリカさんのことが関係しているのか?」(じい~~~~っ)
ロードライトを凝視

ロードライト

「!!(びくっ!)」

パロツト

「やっぱりか~~~~(やれやれ)」

3コマ

ロードライト

「ば、パロツトさん」

「なぜそのことを~~~~?(大汗)」(シリカさんが打ち明けるとは思えないし~~~~)

パロツト

「こいつに聞いた(ぼそっ)」

チャロアイト

「口が滑っちゃいました~~~~ (あははっ)」
苦笑しながら
ら頭を掻く

ロードライト

「あ~~~~(汗)」

「そうなんですか~~~~(大汗)」

パロツト

「ロードライト、それにチャロアイト」

「~~~~」

「すまない!!! (大汗)」
頭を下げる

チャロアイト

「え……、パロットさん？（大汗）」

ロードライト

「ちよっ……（大汗）」

「パロットさん、いきなりどうしたんですか？（どきどきどき）」

パロット

「ロードライトが危険を冒して忘却の迷宮に来たのも」

「チャロアイトたちがこの迷宮の調査に来て全滅したのも」

「全てオレに責任がある……！」

チャロアイト

「な、何をいつてるんですかあゝ（汗）」

「わたしたちが迷宮に来たのはギルドマスターの命によるもので……」

・（大汗）」

パロット

「いいや！」

「シリカさんが今の状態になる原因をつくったオレにある！」

「ヒーラーを極めて、いつかシリカさんの目を治したい……」

「そんな悠長なことを考えている場合じゃ無かったんだ……！（くっ……）」

ロードライト

「あ……（汗）」

「パロットさんがもの凄く責任を感じている……」（大汗）」

「これがシリカさんの言っていた足かせ……（どきどきどき）」

突然の登場

ジエムシリカ

「ま、そういうこと……（苦笑）」

ロードライト

「って、シリカさん!?（どびっくり）」（いつのまに!）

4コマ

パロット

「し、シリカさん……（汗）」 なんだか気まずい

チャロアイト

「す、すみませんジエムシリカさま!」

「つい、口が滑ってしまい シリカさまのお身体のことを……」

シリカ か〜くんを抱っこしています

「あ〜、どうやら全部知られちゃったみたいね〜（苦笑）」

「でも大丈夫」

「ついさつき、身体に渦巻いていた毒素は〜」

「美咲さんの退魔術によって浄化してもらいましたから （にこ〜
っ）」

美咲

「……………」

パロット

「えっ!?（汗）」

「シリカさん、治ったんですか!!!（大汗）」

シリカ

「まあ、まだ視力は戻っていないので」

「そこは、パロットくんがヒーラーを極めてくれるまで待つことにして・・・」

「毒素によって死ぬことは無くなったわ（安心して）」

ロードライト

「よ、よかった〜（へなへなへな）」
気が抜けてその場
にへたり込む

スファレライト

「うん、さすがはシリカさまだね」

「なんだかんだいっただっても無敵なんだよ（あははっ）」

美咲

「シリカさん・・・（ぼそっ）」
シリカにしか聞こえない小
声でつぶやく

「どうしてそんな嘘を・・・（汗）」

「あなたの身体は、迷宮に入る前と何も変わっていませんよ（大汗）」

シリカ

「しゅっ・・・（汗）」
同じく小声で囁く

「話を合わせて・・・（お願い!）」

エルバイト

「よくわからないが・・・」

「万事解決したってことでいいんだよね？（汗）」

パロット

「いや、よくない！」

「シリカさんが苦しんでいた五年間」

「知らなかったとはいえ、オレは何もできなかった……(くっ)」

シリカ

「そんなこと……」

「治ったんだからもう良いのよパロットくん」
実際は治っ

ていません

パロット

「よくありません！（叫び）」

「そんなのオレの気が治まりませんよ！！」

「シリカさん……、何かオレに出来ることはありませんか？(汗)

「

「なんでも言うことを聞きます！！」
必死な表情でシリカを
見つめる

シリカ

「そ、そうね……(べつに気にしなくてもいいのに)」

「じゃあ、ここへ来る途中に天然温泉が湧いていたけど」

「パロットくんはわたしと一緒に温泉へ入る……ってなのはどう

(な～んてね)」

パロット

「う……ぐっ……(汗)」

「そ、それで……シリカさんの気持ち……」

「少しでも修まるのなら……(大汗)」

シリカ

「えっ、良いのー！」

「本当に!?(どびっくり)」

「一緒に……って混浴だよ!」

「お互い裸になるんだよ!?(どきどきどき)」

パロット

「ん?」

「そりゃ、温泉に入るんだから」

「裸にならないと……(汗)」(なに当たり前なことを……)

シリカ

「……………」

「今すぐ温泉に向かって出発します!(うお……………!)」

「みなさん、準備はいいですね!」

効果音「ずがー……………ん!」

スファレ

「はぁ、いい、シリカ先生」

「シーライトちゃんがいませ……ん」

シリカ 引率の先生?(笑)

「シーラ、どこに行きやがった……………!」(うが……………)

「!」

パロット

「し、シリカ……さん?(大汗)」

「たかが温泉に、なにもそこまで……(どきどきどき)」

「一緒に入るとは気にしていません」

美咲

「シリカさんって、意外に激しい方だったんですね・・・（大汗）」

シリカ

「パロットさんと温泉ーーーーー！！（よっしゃーーーーー！！）」

コメント

2コマ目からを全ボツにして書き直しました

書き直す前は、自己紹介で1話分を使ってしまいそうだったから

（苦笑）

第72話 温泉の前にやっておくことがあります

4コマ劇場 アイオライト―432・・・2010/12/12
シリーズ3

タイトル「温泉の前にやっておくことがあります」

1コマ

忘却の迷宮にて・・・

ジエムシリカ か〜くんを抱っこしています

「もあ〜、シーラさんってどこへ行ったのよ〜・・・（きよるきよる）」

パロットクリソベリル

「チャロアイトを助けるまで一緒にいたんだ」

「古の巨大魔蟲×18体から逃げるときにはぐれたとは思えない・・・」

「もう一度、来た道を引き返すしかないだろうな（大汗）」

シリカ

「ええ〜・・・（涙）」

「一緒に温泉は〜〜（うるうる）」

パロット

「温泉なんかより、シーラの方が心配でしょ！（大汗）」

シリカ

「そんなー！（大汗）」

「パロットくんは、わたしのことなんてどうでもいいってことなの

!?(泣)

パロツト

「だから、どうしてそんな話になるんですかー！ー！ー！(叫び)

」

スファレライト

「まあまあ、二人とも落ち着いて・・・(苦笑)

「ちゃっちゃとシーラを見つけて

「それから温泉に向かいますよ (わたしも温泉楽しみ)

シーライト

「……………(うんうん)

スファレ

「って、シーラ!?)(どびっくり)(いつからそこに!)

シーライト

「……………(しゅたっ!)(存在感皆無

シリカ

「よっし、温泉 (みんな揃ったわね)

パロツト

「あ……………(汗)

「それじゃあ、温泉・・・もとい(大汗)

「王都へ向かって出発しますか)(やれやれ)

シリカ&スファレ

「おお……………(レッツゴー)

2コマ

忘却の迷宮、入口にて・・・

パロット

「・・・・・・・・・・（じい〜〜〜っ）」
地面にある何かを見て
いる

エルバイト

「おいおい・・・・（汗）」
「いったい、どうなっているっていうんだ〜〜〜（大汗）」

説明文「迷宮の入口では、見張りをしていた遺跡調査員が血だらけになって倒れている」

美咲

「ダメですね・・・・（ふるふる）」
「すでに冷たくなっています（ぼそっ）」

チャロアイト

「そ、そんな・・・・（泣）」

スファレ

「えっ、なに？（汗）」
「まさか、あの大ムカデがここにやって来て」
「この人を殺しちゃったっていうの・・・・（大汗）」

美咲

「いいえ・・・・」
「これは刃物傷のようですね」

「しかも、相当鋭い 剣とかではなく刀のような・・・(ちらっ)
」

シーラ

「……………(じいゝゝゝっ)」 調査員の死体を凝視し
ている

3コマ

パロット

「とにかく、急いで王都へ戻るぞ・・・」

「こんなことがあったんだ、温泉なんか入っている場合じゃねえ(汗)」

スファレ

「ええー！ー！っ!? (汗)」

「温泉無しのー！ー！ー！ー！！ (大泣き)」 (入るのは帰りだ
っていったのに〜!)

パロット

「よくよく考えてみたら」

「ペタライトの爺いさんを含めて9人のメンバーが死んでるんだ」
「先にユークレースへ報告を入れておかないと・・・」

シリカ

「そう・・・ね (涙)」

「お、温泉に入るのはあきらめて (泣)」

「早く王都へ戻らなくちゃ・・・ (しくしくしく)」 血の涙
? (笑)

パロット

「あゝ、シリカさん？（汗）」（なにも、そんなに泣かなくても・・・）

二十分後・・・

美咲

「・・・」 遺跡調査員の墓標に祈りを捧げている

「さて、出発しましょうか・・・」 立ち上がって号令をかける

ロードライト

「あ、まっってください！（「こそこそ」） リュックの中に手を入れる

「こんなモノしかありませんがお花の代わりに（そっ）」
お墓にいくつかのアクセサリをかける

「どうか、安らかに眠ってください・・・（祈り）」

チャロアイト

「ロードライトさん・・・（うるっ）」 迷宮にきた調査部、

唯一の生き残り

シリカ

「さあ、みなさん」

「行きましょう・・・（ぼそっ）」 立ち去っていく

4コマ

効果音「シューーン、すっ・・・」 木々の陰から何者がかが現れる

突然の登場

巨躯な男

「けっ……」

「冒険者に死はつきものだ」

「いちいち墓なんてつくっていたらきりがない……（がっしっ！）」

墓標を蹴り飛ばす

「ルチルクオーツの冒険者っていうのは、甘ちゃんばかりだぜ（あははっ！）」

シーライトに瓜二つな少女

「やめる……（ギロリ）」

「ヤツらが戻ってきたらどうする（ぼそっ）」

巨躯な男

「す、すまねえ……（大汗）」 慌てて墓標を元に戻す

「……で、おまえの人形が持ってきた情報はどうなんだ？」

シーライトに瓜二つな少女

「噂通り……のようだな（ピッ、ピッ）」 カード端末で情報
報をチエックしている

「軍事大国であったルチルクオーツ王国が」

「数ヶ月前に起こった国王交代劇で変わってしまった……」

『桜のひみつ』参照

「新国王の方針により軍備は急速に縮小しているらしい」

巨躯な男

「攻めるなら今が好機ってか？（にやっ）」

シーライトに瓜二つな少女

「焦るな……」

「軍備は縮小したとはいえ」

「ルチルクオーツには、かの有名な冒険者ギルド・・・ユークレー
スがある」(下手な軍隊より驚異的だ)

「ユークレースは、王室との繋がりも深いと聞く」

巨躯な男

「まずは、その繋がりを断ち切るってことか？」

「それには、おまえの人形にも活躍してもらわないとな」(くっく
っくっ)

シーライトに瓜二つな少女

「しかも、今回の冒険には参加していなかったようだが」

「どうやらヤツらのパーティには、ルチルクオーツ国王が加わって
いるらしい・・・」

巨躯な男

「はあ〜？(汗)」

「国王自らが冒険者になっているのか〜？(大汗)」

「それなら、護衛も無しで冒険に出たところを暗殺すれば・・・」

シーライトに瓜二つな少女

「そういうことだ・・・(ふふっ)」

「既にシーライトには指示を出してある(ぼそっ)」

「ラリマー軍へ進軍のタイミングを知らせるのは、ルチルクオーツ
王を殺害してからだ・・・(にやり)」

説明文「なんだか、フローラが狙われることになったみたいですね

」 無駄だとは思いますが(苦笑)

コメント

で・・・、オチは？（爆）

第73話 待っていてくれる人がいることは良いことです

4コマ劇場 アイオライト | 433・・・2010/12/13
シリーズ3

タイトル「待っていてくれる人がいることは良いことです」

1コマ

三日後、冒険者ギルド『ユークレース』のアジトにて・・・

シトリン

「そう・・・ですか・・・」

「ペタライトさん他8名がお亡くなり・・・」

「ご報告ありがとうございます」

「あとのことは、ボクたちに任せて」

「あなた方は、ゆっくりと休んでください」

ジエムシリカ か〜くんを抱っこしている

「って、シトリンさん!」

「今回のことでわかったと思いますが」

「あの迷宮は危険すぎます!」

「今期のナンバー決定戦を忘却の迷宮で行うのはやめてください!」

「!」

シトリン

「それは了承できません・・・」

シリカ

「なぜですか!?!」

「わたしの身体のことなら」

「美咲さんに治していただいたので心配は・・・」
「本当は治
っていますせん」

シトリン

「なんと言われようとも」
「ナンバー決定戦は予定通り忘却の迷宮で行います・・・」(ギロリ)
「(いいですね)」

シリカ

「うっ・・・(汗)」

ポルーサイト

「シトリンのヤツがああ言ったら」
「もう何を言っても無駄だ・・・」(あきらめる)

シリカ

「・・・(うっ~~~~っ)」
「ところで、サイト(汗)」
「あなた、しわしわのお爺さんみたいよ・・・」(大汗)

しわしわサイト

「ほっとけー！ー！！」(叫び)
「砂漠で水分を根こそぎ
持っていけました」

シトリン

「そういえば・・・」
「旅の最中、シーラさんに何か変わったことはありませんでしたか
?」

シリカ

「え、シーラさん　　ですか？」
「特に何も・・・」

シトリン

「なら結構です（にこっ）」

シリカ

「????（汗）」

2コマ

サンストーンの館にて・・・

美咲

「あ・・・、ああ・・・（汗）」

サファイア（優子）

背中に翼があります

「やほ～、美咲ちゃん」

「久しぶりだね～～」

美咲

「優子さん!!!（どびっくり）」

「ど、どうしてこんなところに!?!?（大汗）」

パロットクリソベリル

「と、鳥人間発見!（大汗）」

スファレライト

「ば、バカ!」

「鳥人間じゃなくて天空族!!!（汗）」

「しかも、あのお方は天空神サファイアさま・・・」

「つまり、フローラのお母さんのの!」

パロット

「って、なんでお前がそんなことを知ってるんだ・・・? (大汗)」

スファレ

「だってわたし・・・ (ごそごそ)」 懐から何かを取り出す

「優子ちゃんファンクラブの会員ですから (これ会員証です)

」

効果音「ずががーーーーーん!」

サファイア

「あははっ (苦笑)」

「スファレさんだったわね?」

「後でファンクラブ事務所の連絡先・・・教えてもらえるかしら

(にごごっ)」

スファレ

「喜んで」

説明文「その後、優子ちゃんファンクラブの会員募集が一時的に中断してしまっただった(爆)」

3コマ

パロット

「ところで、優子・・・さん? (汗)」

「オレたちのことは、フローラから聞いたんですか? (名前も知ったようですが・・・)」

サファイア

「それもあるけど」

「主にあなたたちが冒険してた映像でね……(ぴっ)」「
モコンで巨大モニターの電源を入れる

説明文「巨大モニターに映し出されたのは、パロットが古の巨大魔
蟲と戦っているシーンだった」

ロードライト

「ちよっ!(汗)」

「先ほどから気になっていたんですが……やっぱりそれって遠見
の鏡!？」

「その場にながら様々な景色を見ることが出来る超レアアイテム
!!!」

サファイア

「いや、ただの自作スーパーハイビジョンテレビなんだけど……
(大汗)」(映像は記憶石の電波を受信)

ロードライト

「じ、自作……って?(大汗)」

サファイア

「もちろん、裸眼で3D映像もばっちりよ」
ク以上のクリエイト能力を持っています

パロット

「な、なんなんだ、この人……(ときどきどき)」(今の映像の
説明は無しなのか?)

突然の登場

ファリス

「はいはい」

「優子ちゃんもこの時代では理解出来ないネタを披露しないの」

パロット

「って、あなたは、ちよくちよく現れるお姉さん!! (大汗)」

4コマ

ファリス

「あらためまして」

「この『サンストーン館』の管理人となりました」

「ファリスと申します (にこっ)」

サファイア

「通称『招き猫の館』の管理人ね・・・ (ぼそっ)」

ファリス

「ちよつと、優子ちゃん!! (もお〜!)」

パロット

「え・・・ (聞き間違いか?)」

「ファリス・・・さん? (どきどきどき)」

スファレ

「珍しい〜」

「あなたが信仰している精霊神と同じ名前だね〜」

ファリス

「ほんと、珍しいよね〜〜（あははっ）」

パロット

「……………（大汗）」（本当に偶然か？）

美咲

「あゝ、信じられないかもしれませんが〜」

「その人、真正正銘の精霊神ファリスさまですよ〜（苦笑）」

スファレ

「え……………？（大汗）」

ファリス

「まあ、わたしが誰であろうと」

「この招き猫……………もとい、サンストーンの館の管理人ってことになりませう」

「あなたたちの健康管理も含めて見させてもらおうことになるから」

「これからもよろしくね〜〜」

パロット

「あ、はあ……………（汗）」

「よろしくお願ひします（大汗）」

宵の口、そんな楽しげなサンストーンの館の玄関前にて……………

エルバイト

「つて、一緒に冒険したオレは」

「屋敷にも入れてもらえないのかよ……………（しくしくしく）」

突然の登場

喫茶店の店員A

「きゃあーーーーっ!! (悲鳴)」 閉店準備中

「またあの変質者ーーーー!! (涙)」

店員B

「は、はやく警備団に通報しなくっちゃ!! (大汗)」

エルバイト

「つて、ふざけるなーーーー!! (涙)」 (オレは変質者じゃね

ええええーーーー!!) 脱兎

効果音「ばきゅ~~~~~ん」

コメント

今後、しばらくは1話完結の話が多くなる・・・はずです (汗)

どたばた系? (笑)

第74話 知らないうちにレベルアップ

4コマ劇場 アイオライト―434・・・2010/12/13
シリーズ3

タイトル「知らないうちにレベルアップ」

1コマ

パロットたちの拠点、サンストーンの館にて・・・

スファレライト

「う、うう・・・(ふるふるふる)」 テーブルに着いて自分の冒険者カードを見つめている

パロットクリソベル

「ん～？」 早朝鍛錬から戻ってきた

「スファレ、どうしたんだそんな難しい顔をして・・・」

「また冒険者カードが更新要求でもしているのか？」

スファレ

「納得いかない・・・(ぼそっ)」

パロット

「はい？(汗)」

スファレ

「連続してあんな死ぬような思いをしたのに(涙)」

「どーしてレベルどころか」

「経験値の1ポイントも上がっていないのよーーーーー！……！」
「うがーーーーー！……！」

効果音「ずががーーーーーん!!」

パロツト

「あゝ、そういうことか・・・(大汗)」

2コマ

スファレ

「エリアGの探索に、忘却の迷宮・・・」

「どちらも難易度Sランクのクエストでしょ!？」 当たって

いますがスファレは適当に言っています

「そんなクエストをこなしたっていうのに」

「レベルアップしないなんて、ありえないでしょうが!!」(怒)」

パロツト

「・・・・・・・・(汗)」

「てか、どちらもクエストの達成できてないだろ(大汗)」

スファレ

「ま、まあ、そうなんだけど・・・(うつゝ)」

「で、パロツトの方はどうなの?」

「砂漠では小池さん(砂蟲)と、忘却の迷宮では大ムカデと戦ったから」

「一気にレベル上がったんじゃない?」(結局、どっちも倒せなかったけど・・・)

パロツト

「んゝ、ああ・・・」

「こっちも、レベルどこるか経験値が1ポイントも上がってないぞ」

スファレ

「え、そうなの!?(どびっくり)」

パロット

「ヒーラーとしてはまったく活躍できなかったからな」

「レベルが上がらないのは当然だろう・・・」

スファレ

「そ、それでも勇者としては活躍できていたと思うんだけど・・・
(どきどきどき)」

3コマ

パロット

「なんにしても、そんなに気にする必要はないんじゃないか?」

「レベルなんて上がるときは、黙っていても上がるわけだし・・・」

スファレ

「この前、あのアルバイトに」 エルバイトのことです

「レベルが上がらないのは、冒険者の才能が無いからだって言うて
たよね(じい~~~~っ)」

「わたしもアルバイトさんみたいに、才能無いのかな~~~~(しく
しくしく)」

パロット

「確かに普通の冒険者には当てはまるかもしれないが」

「おまえって正確にはへっぽこ戦士だろ?」

「ほら、へっぽこ数値はかなり上がっているみたいだぞ(ぼそっ)」

冒険者カードを指差す

スファレ

「ななっ!? (大汗)」 (ほ、ほんとだ!!) 言われるまで
気づきませんでした (笑)

パロット

「つまり、おまえの場合・・・」
「普通の冒険者としては才能が無かったとしても」
「へっぽことしては、もの凄い才能があるってことだ!」 断
言

スファレ

「へっぽこ嫌あああー!」 (大泣き)

効果音「ばきゅ~~~~ん」

4コマ

ロードライト (女の子バージョン)

「って、お二人とも」

「朝から何を騒いでいるんですか・・・ (汗)」

「ご近所迷惑になりますよ」 (大汗) 朝食の準備をします

パロット

「あ、ロードライト、おはよ」

スファレ

「ねえ、ロードライトは」
「今回の冒険で経験値に少しでも変動があった?」
「わたしたち、レベルどころか経験値すら上がってなくてさ」
(苦笑)

ロードライト

「・・・え？(汗)」

「経験値　ですか？」

「え〜つと・・・(こそこそ)」　　冒険者カードを取り出す

「あ、いつの間にかレベルが上がっていたみたいですね〜　(にこ〜っ)」

スファレ

「レベルが・・・上がってる？(大汗)」

ロードライト

「はい」

「レベル19になっちゃいました〜　(ちゃちゃちゃちゃんちゃんちゃん)」

「この前レベル18になったばかりだというのに凄いですよね〜」
　(あははっ)」

スファレ

「・・・(きよろっ)」　　パロットに視線を向けて、

意見を求める

パロット

「あ〜・・・(汗)」

「考えてみれば、ロードライトは古の巨大魔蟲を18体も倒しているからな〜(大汗)」

「例の麻酔弾という名の大量破壊兵器を使って・・・(ぼそっ)」

ロードライト

「シンセティック・カノンは大量破壊兵器じゃありません！！(涙)」

「

スファレ

「レベル18から19に・・・(じくじく)」

「じゃあ、レベル1からならレベル10前後に・・・なるんじゃ？

(どきどきどき)」 適当

「ロオードライト！...! (叫び)」

ロードライト

「はいっ!?! (どびっくじり)」

スファレ

「そのシンセティック・カノンっていう麻醉弾・・・」

「お姉ちゃんにも貸してもらえないかな〜」 (にた〜っ) 「

「わたし、いまから忘却の迷宮に行くから」 (ふふふっ) 「

ロードライト

「え・・・? (汗)」

「でも、このシンセティック・カノンは」

「組み立て方法が複雑で、素人の方には扱いきれないっていうか〜

(大汗)」

スファレ

「じゃあ、ロードライトも一緒に来て・・・(ぼそっ) 「

ロードライト

「ええー! (大汗)」

「昨日戻ってきたばかりなんですよー! (涙)」

パロット

「スファレ、ちょっと落ち着けて!! (大汗)」

スファレ

「わたしのレベル……!! (うにゃ……!!)」

効果音「ずがが……ん!!」

コメント

経験値0は、もはや才能です

もちろん、へっぽこの才能

ね(笑)

第75話 ルシフ屋創本舗の新企画？

4コマ劇場 アイオライト―435・・・2010/12/14
シリーズ3

タイトル「ルシフ屋創本舗の新企画？」

1コマ

サンストーンの館裏の湖畔にて・・・

説明文「地面に板状の何かが立てられている」

パロット

「・・・（ふう〜）」 銅の剣を構えて精神集中

「せいやぁー！ーっ！！（ふん！）」 銅の剣で一刀する

効果音「カキーーーーーン！」

パロット

「う、うう〜ん（汗）」

「はやり、傷一つ付かないか〜（大汗）」（むしろ、刃の方が削れているよ・・・）

「こんな硬い殻を持つ古の巨大魔蟲相手にして」

「オレたち、よくもまあ〜無事だったものだ・・・（いまさらながら）」

美咲

「それは、ロードライトさんが倒した古の巨大魔蟲の殻ですか？（じい〜っ）」 パロットの様子を見ている

パロツト

「わ、わあああつ!? (どびっくり)」

「・・・って、美咲(大汗)」

「いつからそこに・・・(どきどきどき)」

美咲

「さきほどからいましたよ・・・っと」 勢いよく立ち上がる

「さて、パロツトさん」

「忘却の迷宮での戦いにおいて、あなたは古の巨大魔蟲に全く対抗できませんでした」

「いえ、あなたより実力が上のはずのユークナイトの方も敵わなかった・・・」

「それは、どうしてだと思われませんか？」

パロツト

「どうしてもなにも・・・(汗)」

「巨大魔蟲はこんなに硬い鎧を纏っているんだ」

「誰が相手をして、結果は変らなかつただろ？」

美咲

「硬い鎧・・・ねえ(はっ!)」 突然、懐から取り出した

小柄を投げ放つ!

効果音「リリリン、かかつ!」 鈴の付いた小柄が巨大魔蟲の

殻に突き刺さる

パロツト

「なああああーーーーー!!! (どびっくり) (刺さった!)

美咲

「先に言っておきますが」 地面に立てられている殻に近づくと

「この小柄は儀式用に使われるものであって」

「攻撃力が高いわけではありません・・・」 そっと小柄を握る

「ですが・・・使いようによっては」 不意に小柄を動かす始
める

「このように硬い鎧であっても斬れなくはないです（さくっ）」

豆腐を箸で割くような感じ？

パロット

「・・・（「くり）」（マジかよ）」

「あんた、本当に何者なんだ？（大汗）」

美咲

「いまのパロットさんは、アウインの勇者を名乗っていてもただの
一般人に過ぎません」

「それでは、魔界に巣食う魔物や魔族が現われても対抗できません
よ」

パロット

「魔界に・・・魔族って（汗）」

「そんなおとぎ話的な存在を例えに出されても（苦笑）」

美咲

「決しておとぎ話ではありません」

「だって、『優子ちゃんシリーズ』を発行しているルシフ屋創本舗
（ルシフ屋工房）って」

「魔界のデマントイド王国にあるんですから」

パロット

「はあ？（大汗）」

美咲

「しかも、発行主はデマントイド王国の大魔王ルシフォンさん」

「ルシフさんは、サンストーン館の管理人となったファリスさんの旦那さんでもあるんですよ」

パロット

「って、そんなびつくり情報はおいといて」（大汗）「あの人、大魔王の嫁さんかよ!？」

「美咲……」

「オレに、古の巨大魔蟲に対抗できる術を教えてもらえないか？（ぺこり）」

美咲

「……（じいじっ）」

「ヒーラーがそんな術を知らなくても、特に問題はないと思うんですが……（ぼそっ）」

パロット

「いや、まあ（汗）」

「それはそうなんだが……（どきどきどき）」

3コマ

中央広場にて……

通行人1

「おい、あれって……（ひそひそ）」

通行人2

「ああ、間違いない（ひそひそ）」

「ユークレースのナンバーズ、ユークナイト・ナンバー3（ひそひそ）」

「盲目の精霊騎士・・・ジエムシリカさまだ（ひそひそ）」

通行人1

「で、でも・・・（ひそひそ）」

「あの抱えている緑の物体は・・・（ひそひそ）」

通行人2

「ペンギン・・・？（ひそひそ）」

「でも、頭に皿が乗っけているし（ひそひそ）」

「なんにしても、あれってぬいぐるみだよな？（ひそひそ）」

通行人1

「どうしてジエムシリカさまがぬいぐるみなんかを！？（ひそひそ）」

「

通行人2

「いつもは凜としていたジエムシリカさまが（ひそひそ）」

「あんな可愛いぬいぐるみを抱っこしている・・・（ひそひそ）」

ジエムシリカ　かゝくんを抱っこしています

「・・・（大汗）」　　しっかりと聞こえています

「うう・・・（涙）」

「かゝくんのおかげで体調は回復しましたが」

「こんなの恥ずかしくすぎます～～～（照れ）」　　顔色が真っ赤

通行人1

「ななっ!?!?（どびっくら）」

「ジエムシリカさまが、この上なく照れてらっしゃるー!」(おおー)
「」

通行人2

「照れているジエムシリカさま・・・可愛い〜」

シリカ

「ああ〜〜っ(涙)」

「わたしのイメージが・・・(しくしくしく)」

突然の登場

???

「いや、悲しむことはない」

「彼らは、むしろキミの魅力にまいつているだけだ!」

シリカ

「えっ!?(びっくり)」「誰ですか?」

4コマ

ルシフォン 魔界にあるデマントイド王国の大魔王

「はじめまして、ジエムシリカさん」

「わたくし、こういうものでして・・・(すーっ)」「名刺を
差し出す

シリカ

「え〜つと、ルシフ屋創本舗・・・代表のルシフォンさん?(どい)
かで聞いたような)」

「そんなルシフォンさんが、いったいどんなご用件で・・・(汗)」

シリカ

「なんですってー！ー！ー！ー！ー！！（初耳ですよー！ー！ー！ー！）」

ルシフ

「いや〜」

「前々からシリカさまシリーズの企画は進んでいたのですが」

「ぬいぐるみを抱っこしたシリカさんを見かけた瞬間、ピピーーンときましてね〜」

「今では、当初の予定だったかっこいい系から、かわいい系に路線変更を検討しております〜」

「そのため、シリーズタイトルも『シリカちゃん』に変更となります」

シリカ

「か、かわいい系は・・・やめ（涙）」

指しています（笑）

ルシフ

「シリカちゃんシリーズが軌道に乗れば」

「既に存在しているシリカさまファンクラブを吸収して再活動の予定です」

シリカ

「ふあ、ファンクラブ！？（汗）」

「そんなのあるはずな・・・（大汗）」

通行人1

「もちろん、オレたちはシリカさまファンクラブの会員です（ぱつ！）」

会員証を出す

通行人2

「最近、優子ちゃんファンクラブに押され気味だったけど・・・」
「ここから巻き返しの始まりだーーーー！！」（おおーーーーっ
！！）」

ルシフ

「ふふふっ（にやり）」
「やはり、シリカさんに注目したオレの目は間違いなかったようだ
な・・・（微笑）」

シリカ

「ちよっ！」
「だから、いったい何なんですかーーーー！！」（涙）」

効果音「ずがーーーーーん！！！」

コメント

この後、ルシフは優子に見つかって、追っかけられることになり
ます（笑）

第76話 凄いのか凄くないのか・・・よくわかりません

4コマ劇場 アイオライト― 4 3 6・・・2010/12/15
シリーズ3

タイトル「凄いのか凄くないのか・・・よくわかりません」

1コマ

サンストーンの館裏の湖畔にて・・・

美咲

「たとえば、パロットさんから預かったこの聖剣クリソベリル・・・
(ぱっ)」「 虚空より聖剣を取り出す

パロット

「預かった って、取り上げたの間違いじゃ・・・(大汗)」

美咲

「えゝ、こほん・・・(汗)」「
「預かった聖剣クリソベリル」 仕切りなおし?(笑)
「わたしが使うと、こんな感じになります・・・(ぼそっ)」

説明文「美咲が退魔の力(天空力)を高めると、半透明だった刀身
が宝石のように輝きはじめた」

パロット

「な、なああああーーーーー!!! (どびっくり)」「(なんだそ
の変化ーーーー!?)」

美咲

「わたしはアウインの勇者じゃありませんからこの程度ですが・・・」
「シヨウさんやアリスさんが使っていたときなんか、これの比ではありませんでしたよ」
5千年前
「さあ、パロットさん・・・（くるっ）」
聖剣の柄を差し出す
「まずは、聖剣クリソベリルに精霊力を通わせる練習からはじめてください」
「聖剣クリソベリルは、力によって反応が現われやすいので」
「こついつた修行にはもってこいなんです」

パロット

「・・・って、あれ？（汗）」
聖剣を受け取る
「オレが持った瞬間、光が消えちまったぞ？（大汗）」（いつものクリソベリルだ・・・）

美咲

「ただ握るだけではダメです」
「意識してください・・・」
「聖剣クリソベリルに、あなたの精霊力を通わすイメージを・・・」
「刀身が輝くようになれば、第一段階はクリアです」

2コマ

パロット

「よし・・・（汗）」（やってみる）
「うおおおー！！！！！！！！（叫び）」
精霊力を高める
「だ、ダメだ・・・全然光らねえー！！！！（うおおおー！！）」

美咲

「あゝ、そんな意味も無く精霊力を高めても無駄ですよ」
「精霊力で、武器を　　聖剣クリソベリルを包み込むようなイメージ」

ジです……」

パロット

「む、難しいな……（じくり）」

美咲

「コツを掴み、慣れてしまえば意識しなくても力を通わせることができるようになります」

「この方法であれば、たとえこんな木の枝であっても……（ひよいつ）」
落ちていた枝を拾う

「これぐらいのことは可能になります（びゅーん！）」
枝を一振り

効果音「びゅっ、ずじゅじゅっ、ざっばーん……」
放たれた衝撃波が湖面を斬り裂く

パロット

「なああああ……！！（叫び）」

「湖が……割れた……！！（どびっくっ）」

美咲

「まあ、このような一発芸……」

「忘年会の出し物ぐらいにしか使えませんがね……（苦笑）」

パロット

「いやいやいや（大汗）」

「下手すりゃ、神の奇跡って言っても通用するだろう……（どきどきどきどき）」
（忘年会ってなんだよ？）

美咲

「とにかく、修行するといふのであれば」

「さきほどのように無意味なことをしてもしかたありません」
「まずは、聖剣クリソベルルの刀身を光らせることですね」

パロット

「よっしゃー！ー！（叫び）」 気合を入れる

「この程度の修行・・・、一気に終らせてやるぜー！ー！ー！ー！
うおおおー！！（）」 精霊力を高める

美咲

「だ〜か〜ら〜（汗）」

「無意味に精霊力を高めるんじゃなく〜（あははっ）」（わたしの話を聞いていましたか〜？）

効果音「がさっ」

美咲

「ん？」（この気配・・・）

3コマ

突然の登場

スファレライト

「・・・（じい〜っ）」 悪戦苦闘しているパロ

ットを見つめる

美咲

「スファレさん・・・」

「どうしましたか？」（そんな真剣にパロットさんを見つめて・・・）

スファレ

「・・・美咲ちゃん!! (叫び)」

美咲

「は、はい!?(びっくり)」

「・・・(どきどきどき)」

スファレ

「わたしにも 修行してください! (ペーリ)」 必死です

美咲

「え・・・(汗)」

「修行・・・ですか? (大汗)」

スファレ

「はい!」

「わたし、強くなりたいんです!!」 ユークナイトを目指しています

美咲

「強く・・・(汗)」

「そ、それなら冒険者管理組合が提供している王都内でのクエストをこなして」

「レベルを上げるのが一番の近道かと・・・(苦笑)」

スファレ

「そんな地道なヤツじゃなく」

「もっところ手っ取り早く強くなるような・・・」

「いまパロットがやってるような特別な修行です!! (びっ)」

パロットを指差す

美咲

「あゝ、あれ・・・ですね（あははっ）」
「あの修行は、精霊力をコントロールできる人じゃないと難しいって
いうか」（苦笑）」

スファレ

「お願いします！！」（叫び）」

4コマ

美咲

「……………（じい〜〜〜っ）」 スファレを見つめる
「では、はつきりと言わせていただきます・・・」
「パロットさんの行っている鍛錬ですが」
「スファレさんがやっても時間の無駄になるだけです（きっぱり）」

スファレ

「そ、そんなーーーーっ！（涙）」
「やっぱり、レベル1の戦士じゃ」
「何をやっても無駄だったことーーーー！！（しくしくしく）」

美咲

「いや、だってスファレさんはへっばこでしょ？（大汗）」

スファレ

「つて！（大汗）」
「断る理由、へっばこーーーー！！（涙）」（うにゃーーーー
！！）」

効果音「ずががーーーーーん!」

美咲

「申し訳ありません・・・(ペこり)」

「へっぽこの修行方法　わたしには荷が重すぎます(大汗)」「
ごめんなさい)」

スファレ

「いや・・・(汗)」

「べつにへっぽこの修行がしたいってわけじゃなく(大汗)」

「普通に強くなる修行でいいっていつか～～(どきどきどき)」

美咲

「あゝ・・・、そういうことがいいたいのではなく(汗)」

「へっぽって、もはや普通じゃないんですよ・・・(苦笑)」

スファレ

「普通じゃ・・・ない?(どづいうこと?)」

美咲

「話を聞くより、実際に見てもらったほうがいいようです・・・

(うん)」

「パロツトさん(おゝい)」

「ちょっとこちらに来てもらえますか?」

パロツト

「はあはあはあ・・・(汗)」「くそっ、ちっとも光らねえ!」

「って、スファレ来てたのか・・・」

「いまは忙しいんだ、邪魔しないでくれないか?(ぼそっ)」「

スファレ

「じゃまーーーーー!? (涙)」

美咲

「えーっと、パロットさん? (汗)」

「少しだけ、その聖剣クリソベリルをスファレさんに持たせてあげてください」

パロット

「え・・・? (汗)」

「この剣、めっちゃめっちゃ重いんだぞ!? (大汗)」 (美咲もわかっていいるとは思うが・・・)

美咲

「いいから、いいから (苦笑)」

5コマ

パロット

「???? (汗)」

「じゃあ・・・、ほらよ (ひょい)」

柄を差し出す

スファレ

「こ、これが聖剣クリソベリル・・・ (きれい)」 両手でギ

ユツと柄を握る

「でも、そんなに重いんじゃない、わたしには持てない・・・って、あれ? (汗)」

「なにこれ、全然重くないっていうか (大汗)」

「まるで鳥の羽みたいに軽いよ!? (どびっくり)」 聖剣を
ぶんぶん振り回す

パロット

「なにーーーーー!!!(叫び)」

美咲

「やはり……(ぼそっ)」

「パロットさんよりは、聖剣クリソベリルを扱っ資質があるようですね。(苦笑)」

パロット

「うそーーーーー!!!(涙)」

美咲

「スファレさん……」

「聖剣を握ったまま、精霊力を高めてみてください」

スファレ

「あ……(汗)」

「その精霊力を高めるって感覚」

「じつは、よくわかんなくて……(てへっ)」

効果音「ぴかーーーーっ、ぴかぴか」

パロット

「ちょーーーーー!? (大汗)」

「聖剣クリソベリルが……これまでで一番輝いてるーーーーー!!!(どびっくり)」

美咲

「あははっ……(苦笑)」

「わたしなんかの比にならないほど光っていますね。(汗)」

「しかも、意味不明に点滅しています・・・（大汗）」（予期せぬ反応）

スファレ

「えっ、なに！？（ぴかぴか）」

「もしかして、わたしってば凄い才能の持ち主？（ぴかぴか）」

「何の修行もしないで、聖剣クリソベリルの力を最大限まで引き出せるってこと」（ぴかぴか）」

パロット

「そ、そんな・・・（ずしーん）」

四つんばいになって

落ち込む

美咲

「いいえ・・・」

「スファレさんのそれは、ただ単に刀身が光っているだけです」（攻撃力は0ですね・・・）

スファレ

「・・・（ぴかぴか）」

啞然

「・・・（ぴかぴか）」

呆然

「・・・（ぴかぴか）」

愕然

「・・・はあ？（大汗）」（ひ、光っている・・・だけ？）

美咲

「ダンジョンに潜るときには照明いらすー！（叫び）」

スファレ

「って、意味ねえええー！！！！（ぴかぴか）」（うが
ー！！！！）

効果音「ばきゅ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ん」

コメント

4コマでは収まりませんでした (爆)

第77話 新しい剣を求めて・・・

4コマ劇場 アイオライト― 437・・・2010/12/16
シリーズ3

タイトル「新しい剣を求めて・・・」

1コマ

サンストーン館にて・・・

スファレライト

「てなわけ〜」

「いまから武具屋に行きましょう」

パロットクリソベリル

「・・・は？(汗)」

「突然、何だっというんだ？(大汗)」

スファレ

「突然っというか〜」

「さっきの修行で思い出したのよ」 聖剣クリソベリルを光らせる修行

「この前の戦いで、パロットに貸したわたしの剣・・・」

「大ムカデの所為で真っ二つになったでしょ〜」

パロット

「そういえば、そうだったな〜(汗)」(あの時はすまなかった)

「う〜ん、たしかにへっぽこ戦士だとはいえ・・・」

「剣を持っていないと何かと様にならないからな〜〜(苦笑)」

スファレ

「……………(うっ)」

「へっばこ、関係ないよね……………(しくしくしく)」

パロツト

「あははっ(悪い悪い)」

「でも、わざわざ武具屋に行かなくても」

「オレたちのリーダーは、武器や防具なんかも取り揃えている商人
さまだぞ」

「お仲間価格で、良さ気な剣を売ってもらったらどうだ？」

スファレ

「おお、なるほど」

「そういうことなら……………」

「おい、リーダー……………」

2コマ

ロードライト パロツトたちのリーダー

「あ、あの〜(汗)」 呼ばれてやってきた

「やはりリーダーのような責任ある役職には」

「ユークナイトでアウインの勇者でもあるパロツトさんが就くべき
では……………(大汗)」

パロツト

「諦めろ、ロードライト……………」

「黙って忘却の迷宮へ出かけたお前が悪い(うんうん)」 □
ロードライトがない間にリーダーを決めました

ロードライト

「あう~~~~(しくしくしく)(そんな……………)」

スファレ

「ところでロードライト」

「じつは、わたしが使っていた剣なんだけど」

「忘却の迷宮にいた大ムカデに真つ二つにされちゃってね」

「新しい剣を探しているんだ」

「だから、良さそうな剣を激安のお仲間価格で売ってくれないかな」

ロードライト

「え、剣ですか？」

「そうですね（うん）」

「すみません、いまは手持ちがなくなって」

「お取り寄せになっちゃうんですよ（苦笑）」

「一応、カタログを見ますか？（どうぞ）」

スファレ

「うぐっ・・・（汗）」 カタログをペラペラめくる

「なに、このバカ高い剣の数々は？（大汗）」（ブランド物？）

「割り引いてもらったとしても、とても買えそうにない・・・（どきどきどき）」

3コマ

パロット

「どれどれ？」 横からカタログを覗き込む

「なるほど、こいつらは実戦向けの剣じゃなく装飾系だな・・・」

「つまり、攻撃力は二の次にしてでも美しさや綺麗さ、かつこよさなんかを追求した剣だ」

「こんなの使っていたら、人々の注目は浴びるが 剣は刃こぼれしまくりだぞ」

スファレ

「あゝ、わたしが欲しいのは普通の剣なんだよね……（あははっ）」
「なんていうか、武器屋で売っているような鉄製の剣とか？」

ロードライト

「あゝ、そういった剣は扱っていませんね」（苦笑）

スファレ

「えゝっ、そうなの……？（汗）」

ロードライト

「はい」

「行商中や冒険途中に見つけた武器は別にして」

「基本的に冒険者用の装備は店を構えた……いわゆる武器屋でしか取り扱われていません」

「まあ、DC ダンジョンクリエイターの仕事に使う武器はありますが」 空の宝箱へ入れる用

「これを買ってしまうと、わたしが業務規定違反で罰せられちゃいますから（苦笑）」

スファレ

「そっかゝ（残念……）」

「じゃあ、やっぱり武器屋へ行った方がいい……」

ロードライト

「あ、そういえば……」 何かを思い出した

スファレ

「ん？」

「ロードライト、どうしたの？」

4コマ

ロードライト

「ちょうどいい剣があったのを忘れていました」

「あの剣なら、スファレさんにピッタリかもしれません」

スファレ

「そんな剣があるの？」

ロードライト

「ええ（ごそごそ）」 近くのリュックに手を突っ込んでいる

「つい最近、預かった剣なんですけど」

「商品ってわけじゃないので、これなら無料でお譲りできます」

スファレ

「えっ、タダ!?（やた）」

パロット

「って・・・（汗）」

「ロードライトには悪いが」

「この世の中、タダより怖いものは・・・（ぼそっ）」

ロードライト

「あった、これです（ぱぱっ）」 一振りの剣を取り出す

「シンセティック・ソ〜〜ド（ちゃららちゃっちゃっちゃっ）」

「秘密道具?（笑）」

「その名の通り、お姉ちゃんが開発した剣で〜」

「お姉ちゃんがいうには、鉄の剣ぐらいの攻撃力は期待できるって

「ことですから」

「スファレさんが使うには、ちょうどいいんじゃないかなって
(えへへっ)」

スファレ

「お、おお〜〜(キラキラ)」 瞳が輝いている

「シンセティック・ソード)か、かっこいい〜)」 そ〜っ
と手を伸ばす

効果音「ぎゅっ・・・」 伸ばされたスファレの腕をパロツト
が掴む

パロツト

「・・・」

スファレ

「ほへ?(なに?)」

パロツト

「死にたくなければ、やめておけ・・・(大汗)」(それを手にす
るんじゃないえ〜)

スファレ

「・・・死!?(どびっくり)」

ロードライト

「あっ、このシンセティック・ソードは
「お姉ちゃんからパロツトさんにとって渡された剣だった〜(そっ
えば〜)」

パロツト

「って、誰が使うか—————!! (がぎゃ—————!!)」

効果音「ずががが—————ん!!」

説明文「シンセティックの発明品(?)は、例外無く危険な超兵器です(爆)」

コメント

シンセティック・ソードとは、刃を小刻みに振動させることで使用者もろとも全てを斬り刻む・・・(大汗)

第78話 微妙な立場のアルバイト

4コマ劇場 アイオライト―438・・・2010/12/17
シリーズ3

タイトル「微妙な立場のアルバイト」

1コマ

中央広場にて・・・

エルバイト

「・・・・・・・・、はあ・・・・・・・・（やれやれ）」 ベンチで頂垂れ
ている

「あの喫茶店の店員、オレのことを変質者呼ばわりしやがって〜）
くそ〜！」

「警備兵が巡回してるから東街地区には近寄れねえ〜し」

「あ〜〜・・・・・・・・」

「シンセティックさんに会いたいぜ〜〜」 憧れの人

突然の登場

シンセティック

「（にこにこ）」 微笑みながらエルバイトを見つめて
いる

エルバイト

「・・・・・・・・？（きよろっ）」 人の気配に気づいて顔を上げる
「って、ええっーーーーー!?（どびっくり）」（ま、まさか!）

シンセティック

「やっと見つけた」

「あなたがアルバイトさんね (にこっ)」

エルバイト

「い、いや・・・あの〜 (大汗)」

「アルバイトじゃなく、エルバイト・・・ (ぼそっ)」

シンセティック

「え? (汗)」

「ごめんなさい、人違いだったかしら? (おろおろ)」

エルバイト

「いいえ、人違いじゃありません! (汗)」 必死です

「オレがアルバイトです!! (叫び)」 改名するのか? (笑)

効果音「ずがが—————ん!」

2コマ

東街地区、エルバイト行き付けの喫茶店にて・・・

店員 A

「またきたよ、あの変質者・・・ (ひそひそ)」

店員 B

「きも〜い・・・ (涙)」

「でも、一緒にいるのってシンセティックさんだよね? (ひそひ

そ)「 顔見知り

「いったいどうい関係なのかな? (うん)」

店員 A

「まさか、シンセティックさんの恋人！？（どびつくり）」

店員B

「そ、そんな（ひそひそ）」

「シンセティックさんが、あんな変質者と・・・（大汗）」

エルバイト

「うう・・・（汗）」 はっきりと聞こえています（笑）

シンセティック

「わざわざこんなところまで来ていただいて」

「ごめんなさいね、アルバイトさん（にこっ）」

エルバイト

「いえ、そんな！？（大汗）」

店員A

「ああ（なるほど）」

「シンセティック商会に新しく雇われたアルバイト」（やつぱ

り恋人じゃなかった）

店員B

「でも、あんな変質者をアルバイトとして雇うなんて・・・（汗）」

「シンセティック商会、大丈夫なのかな（大汗）」

店員A

「ううん・・・（汗）」

「最初は真面目な素振りをしていて」

「そのうち、変態行動に移る気なんじゃ・・・（どきどきどき）」

エルバイト

「だ〜か〜ら〜〜！(怒)」

「聞こえてるんだよ！！(うがーーーー！！)」

店員A & 店員B

「きゃーっ、襲われるーーーー！！(涙)」

3コマ

シンセティック

「ふふふっ(微笑)」

「アルバイトさんって、面白い方なんですネ (にっこり)」

エルバイト

「はひっ！(びしっ)」 姿勢を直す

「1日1笑いは欠かせません！！(叫び)」 意味不明

シンセティック

「そうなんですか (あゝ、可笑的)」

エルバイト

「・・・で？(汗)」

「シンセティックさんは、どうしてオレなんかに声をかけてくれたんです・・・か？(大汗)」

シンセティック

「はい」

「本日は、アルバイトさんにお礼をいわせていただきこうと参ったんです」

エルバイト

「お礼？（はて？）」「（初対面・・・ですよね？）」

シンセティック

「先日は妹を・・・ロードライトを助けていただき、本当にありがとうございました（ぺこり）」

「本当に、何とお礼を言っつて良いものやら・・・」

エルバイト

「ああ、ロードライトのことですか」（なぐんだ）」

「いや、人として当然のことをしたままでですよ」（笑）」

シンセティック

「いいえ、自らの危険を省みず」

「一人で旅へ出たロードライトを追いかけていただいて」

「本当に感謝しております」

エルバイト

「あ、あははっ（苦笑）」

「いやいや・・・感謝だなんてそんな〜（照れ）」
褒められ慣れていません

4コマ

シンセティック

「こんなアルバイトさんが、ロードライトの『仲間』になってくれるなんて」

「本当に心強く思っているんですよ」

「ほら・・・」

「同じメンバーにパロットくんがいますよね？」

「あの子もしっかりはしているんですが」

「ときどき間の抜けているところがありますから」

「アルバイトさんのようなしつかりした方が『仲間』にいてくれたら」

「わたしも安心っていうか〜」

エルバイト

「あはっ、あはははっ・・・(大汗)」「な、仲間・・・?」

数分後、サンストーン館にて・・・

突然の登場

エルバイト

「と、いうわけで〜」

「お前たちの『仲間』になったエルバイトだ!!」(叫び)「

スファレライト

「・・・ぬ?(汗)」「(仲間・・・?)」

ロードライト

「あ、アルバイトさん?(ときどきどき)」「(突然、どうしたんですか?)」

エルバイト

「ロードライト!」

「これからもオレが護ってやるから安心してくれっ!」

パロットクリソベリル

「・・・(はあ〜)」「(やれやれ)」

「何度もいうようだがアルバイトは間に合っている(ぼそっ)」「

「さっさと帰れ・・・(ギロリ)」「

エルバイト

「こんちきしょ〜〜（涙）」

「毎回毎回、アルバイトだなんだって・・・（大汗）」

「オレにはエルバイトっていうちゃんとした名前が！！（怒）」

パロット

「いいから、おまえ帰れよ（大汗）」

エルバイト

「うぐっ・・・（汗）」

「うぉおおおー！！！！（叫び）」（こうなったら〜！）

「！！！！（しゅたっ！）」 見事な土下座

「お願いします『仲間』に入れてください！！（涙）」

「そうしないと、シンセティックさんに顔向けできません！！（大泣き）」

ロードライト

「え、お姉ちゃんに顔向け？（何のことですか？）」

スファレ

「え、ええ〜・・・（汗）」

「パロット、どうする〜？（大汗）」

パロット

「いや、だから・・・」

「アルバイトは間に合ってるって（苦笑）」

エルバイト

「そこをなんとか！！（ぐりぐり）」

額を床に擦り付けてい

ます（爆）

効果音「ばきゅ〜〜〜〜〜〜〜〜ん!!!」

コメント

こうしてアルバイトは、仮メンバーとして招き猫の館で暮すことになりました

第79話 姿を消したシーライト

4コマ劇場 アイオライト―439・・・2010/12/19
シリーズ3

タイトル「姿を消したシーライト」

1コマ

深夜、ルチルクォーツ城フローラの寝室にて・・・

フローライト

「すう・・・すう・・・(眠)」「ベッドで眠っている

突然の登場

???

「・・・(そっ)」「床面まである大窓から何者か

が入ってくる

フローラ

「・・・ん？(ねむねむ) なにやら気配に気づく

「うん・・・(きよろっ)」「

???

「・・・(じっ)」「フローラを凝視

フローラ

「あゝ、どちらさま でしようか・・・(ねむねむ)」「
「うて・・・(あれ？)ほお・・・(夢?)」

「???」

「……………(すーっ)」 陽炎のように姿を消す

フローラ

「あ……………消えた……………?(ふあ……………ふ……………)」 可愛い
あくび

「まあ……………いいか……………(おやすみなさい)」

つつこみ「って、それでいいのか!!」(笑)」

2コマ

翌日、サンストーン(招き猫)の館にて……………

フローラ

「ってなことがあったんですよ (昨日の夜……………)」
「あれって夢だったのかな……………?(う……………ん)」

パロットクリソベリル

「ちよっ……………(汗)」

「それって暗殺者ってやつじゃないのか?(大汗)」
「っていうか、そんなことがあったのに」

「どうして護衛も付けずに歩き回ってるんだ!!」
「おまえ、一応この国の王様なんだろ!?(叫び)」

フローラ

「あ……………(汗)」

「そんなに心配していただかなくても大丈夫ですよ」

「この王都は治安も良い方ですし……………(苦笑)」

「それに、騎士団の皆さんには ちよっとした用があったって」

「国境付近へ行ってもらっていますから、護衛はちよっと……………(……………)」

ぼそっ）」

パロツト

「いや、治安がどうかそんなこと言ってるんじゃない！（汗）」
「つて、アンデシンのやつじゃないのかよ！」

「とにかく、ちゃんとした護衛を付けた方がいい・・・」

「この後、シトリンさんの呼び出しでユークレースに行くことにな
ってるから」

「そのとき、ユークレースから護衛を出せるかどうか頼んでみるこ
とにするな」

「やはり護衛ってことなら同性の方が良いだろうし・・・」

「ユークナイト・ナンバー１１のシーライトなら適任だろうな」

フローラ

「そ、それだったら」

「気心の知れたパロツトさんの方が・・・（汗）」
初めて会
う人より

「わたしとしては、嬉しいかも～～」（苦笑）」

パロツト

「うぐっ・・・（照れ）」

「とにかく、シーラを護衛に付けてもらおうよう頼んでみる！！（大
汗）」

フローラ

「よ、よろしくお願いしま〜す（ぽっ）」
パロツトの反応を
見て顔が真っ赤になりました（笑）」

3コマ

冒険者ギルド『ユークレース』の事務所にて・・・

シトリン

「なるほど……」

「フローライトさまの身にそんなことが……」

「それは、由々しき事態ですね」（うん）

パロット

「だから、フローラの護衛をするため」

「同性のナンバーズを派遣すべきかと思うんだけど……」

シトリン

「そうですね」

「国王がフローライトさまに代わってから」

「ボクたちユークレースは、なにかと優遇されていますし……」

「わかりました」

「ナンバー3、ジェムシリカさんを行かせましょう」

「彼女なら適任でしょうから」

パロット

「え？」

「暗殺阻止ってことなら、シーラの方が良いんじゃないですか？」

「ほら、あいつ忍者だし……」（汗）

シトリン

「……」

「シーラさんは、忘却の迷宮から戻ってすぐ」

「連絡も無く、姿を隠してしまわれました……」（ぼそっ）

パロット

「……え？（汗）」

シトリン

「彼女が何をしていようと、干渉するつもりはありませんが」

「このまま連絡も無いようでしたら・・・」

「ユークナイトのナンバー剥奪も考えないといけません」

パロツト

「あゝ、シトリンさん・・・」

「オレはこの前の一件で、初めてシーラに会ったんですが」

「あいつって、いったい何者なんですか？（汗）」

「っていうか、いつからユークレースのメンバーに入っているんですか？」

シトリン

「シーラさんについてわかっていることといえば」

「出身がラリマーだということだけ・・・」

「いまから6ヶ月ほど前にユークレースのメンバーとなりました」

「しかもパロツトさんと同じく、加入当初からナンバーズ入りを果たした強者です」

「経験の差とかを抜きにすれば、ナンバー8ぐらいの実力はあると」

「ボクは考えています・・・」

パロツト

「へえ・・・（汗）」

「そんなに強いんですか・・・（大汗）」
戦っているところ
をほとんど見たことがない

シトリン

「とにかく、いない方にフローライトさまを頼めるはずもありません」

「護衛はシリカさんをお願いすることにしてしまおう」

パロット

「はい、お願いします（ペこり）」

「オレたちも、なるべくフロアと行動を共にすることになりますね・

・・・（汗）」

「・・・」

「と、ところでシトリンさん（大汗）」

「今日、オレを呼び出したのは？」

「いったいどんな用件で？（ときどきどき）」

4コマ

シトリン

「ああ、そつでした」

「パロットさんに、用があったんでした（思い出しました）」

パロット

「・・・（汗）」

「相変わらずシトリンさんって、どこか抜けていますよね（

ぼそっ）」

シトリン

「ほつといてください！（うにゃーーーーっ）」

パロット

「で？（冗談はおいといて・・・）」

「オレに用事ってのは？（大汗）」

シトリン

「はい」

「パロットさんをお願いしたいことがあります」

パロット

「お、お願い……？（汗）」

シトリン

「忘却の迷宮で戦死されたナンバー5のペタライトさんの代わりに
「本日からユークレース調査部のトップをあなたが務めてください」

パロット

「……は？（汗）」

「つて、無理無理無理！（大汗）」

「調査部のトップなんて……、それこそ忍者であるシーラが適任
なんじゃ……！」

シトリン

「ですから、そのシーラさんが行方不明なんですって……！（汗）」

パロット

「あ……（そうだった）」

シトリン

「これ以上、トップ不在で調査部の活動を停滞させるわけにもいき
ません」

「新しいトップを決めるまでの……繋ぎで申し訳ないんですが
「それまでの間、パロットさんが代行を務めてください」

パロット

「いや、しかし……（汗）」

「オレに、そんな責任のある役職が務まるかどうか……（大汗）」

シトリン

「これは命令です(きっぱい)」

パロット

「……………(汗)」

「さっき、お願いがどうか言っていましたよね(どきどきどき)」

シトリン

「うぐっ……………(大汗)」

効果音「ずがが—————ん!!」

コメント

調査部なんて、パロットに務まるのだろうか?(笑)

第80話 いまさらながらパーティ名は・・・？

4コマ劇場 アイオライト―440・・・2010/12/20
シリーズ3

タイトル「いまさらながらパーティ名は・・・？」

1コマ

サンストーン（招き猫）の館にて・・・

ロードライト

「え〜っと・・・（きよるきよる）」

「パロットさんは、もう出かけられましたか？」

フローライト

「うん」

「ちょっと前にユークレースの事務所へいつちやったよ」

スファレライト

「なに、パロットに用事があったの？」

ロードライト

「用事っていうか・・・（汗）」

「さきほどこの三人で決めたパーティ名を伝えておこうかな〜って

（あははっ）」

「え〜っと、最終確認しておきますが・・・」

「ボクたちのパーティ名は『サンストーン勇者隊』ってことで良い
ですよね？」

スファレ

「パーティ名なんて、なんでもいいじゃない？」 興味なし

フローラ

「パロットさんがメンバーにいるので」

「勇者隊つてのも間違いがありませんし」

「なんだか、勇者隊つて響きがいいじゃないですか」

「パロットさんに伝えると、自分はヒーラーだって反対されそうですし」

「このまま黙って冒険者管理組合に登録しちゃいましょう」
「ひどっ！（笑）」

スファレ

「そうそう」

「パロットには事後報告で大丈夫だって」（あははっ）」

ロードライト

「えっと、えっとと……（汗）」

「いいのかな……（どきどきどき）」

2コマ

ルチルクォーツ城、冒険者管理組合にて……

スファレ

「てなわけで」

「パーティ名の登録に来ました……」

リユークォガネット

「……………（汗）」

スファレ

「ん？」

「リユーク……さん？（どうしましたか？）」

リユーク

「いや……（汗）」

「いまだパーティ名を登録していなかったその事実」

「ちよつとびつくりしちゃって……（大汗）」

「もうこの4コマ、80話目だよ？」

フローラ

「よ、4コマって……（苦笑）」

スファレ

「あははっ（汗）」

「いろいろありすぎちゃって」

「考えている余裕がなかったんですよ（苦笑）」

リユーク

「はいはい……（やれやれ）」

「それじゃあ、この書類にパーティ名を……（すーっ）」

手続き書類を差し出す

「あと、拠点にしている洋館の住所と正式名称も書いてちょうだい」

スファレ

「了解」

「ってなわけで」

「リーダー、あとはよろしく（ニコッ）」

ロードライト

「え……（汗）」

「ボクが書くんですか〜」（大汗）
リーダーというだけで、いいように使われていますね（苦笑）

3コマ

リユーク

「え〜と？（どれどれ？）」
書類をチェックしている

「なるほど、サンストーン勇者隊か〜」

「パロットくんっていう勇者もいることだし」

「なかなかいいパーティ名を考えたわね〜」

スファレ

「でしょ〜（にこにこ）」

リユーク

「サンストーンっていうのもいいよね〜」

「あれでしょ？」

「精霊界のどこかに存在しているという精霊族の聖域の名前・・・」

サンストーン島

「精霊神さまが住んでらっしゃるといふ伝説の島から取ったんでしょ〜」

スファレ

「あ〜・・・（汗）」

「サンストーンっていうのは、管理人さんが付けた洋館の名前から付けたりして・・・（苦笑）」

リユーク

「・・・洋館の名前？（汗）」
書類を確認

「あ〜、サンストーンの館・・・ね（大汗）」（なるほど〜）

「それじゃあ、名称の重複確認と冒険者カードの書き換えをするか

「ら

「冒険者カードを出してちょうだい」

スファレ

「はい、よろしく願いします」

4コマ

十数分後・・・

リユウコ

「え〜っと・・・ね（汗）」

「サンストーンって言葉をパーティ名に入れるのはマズイだろ・・・
って」

「上の判断で不許可になっちゃって〜（大汗）」

スファレ

「・・・・・・・・（ぶるぶる）」 冒険者カードを見て震えている

リユウコ

「ほら、さっき洋館の名前からパーティ名を付けたっていったじやない」

「だったらこれでもいいかな〜って・・・（汗）」

ロードライト

「・・・・・・・・（大汗）」 冒険者カードを見て愕然としている

リユウコ

「た、たしかに確認をしないで決めちゃったのは申し訳なかったけ

ど」

「でも、なんていうか、その……（どきどきどき）」

フローラ

「……（じいっ）」 冒険者カードを見ている

「これって、なかなかいいパーティ名じゃないですか」

リユウコ

「でしょ（さすがは桜さま）」

「あの洋館って、正式名称はサンストーンの館らしいけど」

「サンストーンの館っていつても誰にもわからないじゃない？」
（わたしも知らなかった）」

「それなら、聞いたら誰でもわかる洋館の通称をパーティ名に入れ
とした方が」

「今後、依頼人が訪れる場合でも便利なんじゃないかなって（あ
せあせ）」 必死です

スファレ

「そ、それで……（涙）」

「パーティ名が 『招き猫勇者隊』 に……？（しくしくしく）」

リユウコ

「ほんと、ごめんなさい！！（ぺっり）」

「一度登録しちゃったから、もう訂正はできません！！（ごめんな
さい！）」 えっ！？（笑）」

フローラ

「いや、わたしは『サンストーン勇者隊』よりいいと思いますよ」

「なんていうか、インパクトがあって」

「こっちの方が覚えやすいんじゃないでしょうか？（笑）」

リユーコ

「で、ですよーん……………!!!(大汗)」

ロードライト

「招き猫勇者隊、招き猫勇者隊・・・(汗)」

「ボクは招き猫勇者隊のリーダー……………!? (うにゃ……………!!!)」

効果音「ずがが……………!!..ん!!..」

説明文「パロットのいないうちに、パーティ名が『招き猫勇者隊』に決定しちゃいました」 (爆)」

コメント

サンストーンの館は、ファリスが管理人をしていることもあって『招き猫の館』と呼ばれています(笑)

第81話 ある意味、パーティの存続を賭けた勝負かも？

4コマ劇場 アイオライト | 441・・・2010/12/21
シリーズ3

タイトル「ある意味、パーティの存続を賭けた勝負かも？」

1コマ

中央広場、冒険者管理組合提供の大掲示板前にて・・・

スファレライト

「うん・・・(汗)」 ルチルクォーツ城から帰る途中

「冒険者管理組合 仕事早いね」

「もうわたしたちのチラシが貼ってあるよ・・・(大汗)」

チラシ「クエストの依頼お待ちしております 招き猫勇者隊」

招き猫のイラストが描かれている

ロードライト

「ま、招き猫・・・(しくしくしく)」

フロアライト

「でも、ロードライトさん・・・」

「注目度はバッチリですよ」

通行人1

「おい・・・あれが招き・・・(ひそひそ)」

「・・・ローライ・・・(ちらちら)」

通行人2

「アウイ・・・レベル1・・・(ひそひそ)」
「・・・ふざけ・・・だけじゃ・・・?(ちらちら)」

ロードライト

「いやあああー！ー！(涙)」
「注目しないで～～～!!(うにゃ～～～!!)」

スファレ

「一躍、時の人だね・・・(あははっ)」

突然の登場

???

スファレと同年ぐらいの女の子

「時の人ですって、なに言ってるんだか(ふん)」
「みんな、冒険者に有るまじき愉快なパーティー名を笑っているだけでしょ」

スファレ

「って、どちらさま!?(どびっくり)」

2コマ

ロードライト

「あ、彼女はお姉ちゃんが専属契約している新鋭冒険者パーティー、ドラゴンファングのメンバーで」
「えっと、バケラッタ・・・さん?(汗)」

バケラッタ?

「って、それじゃあオバQでしょー！ー！(涙)」 なぜ
知っている!?(爆)

「あたしは、あなた スファレライトと同じ今期の検定で合格し

「た冒険者！」 スファレを指差す

「レベル6の戦士・・・フォスフォファイライト！」

スファレ

「え？（汗）」

「フォスフォスフォファイ・・・ライトさん？（大汗）」

フォスフォファイライト

「フォス一つ多たってーーーーー！！（涙）」

ロードライト

「まあまあ、フォスファイさん（汗）」

「少し落ち着いて~~~~（苦笑）」

フォスファイ

「今度は端折りすぎーーーーー！！（うにゃーーーーー！！）」

「・・・でも、確かに名前が長すぎるから」

「フォスファイでいいか・・・（しくしくしく）」（あだし、なんでこんな名前なんだろ・・・）

スファレ

「それで、そのフォスフォスさんが」

「いったい何の用なの？」

フォスファイ

「あなた、人の話聞く気ないでしょーーーーー！！（がああああー
ーーーーー！！）」

スファレ

「あははっ・・・（苦笑）」

3コマ

フォスファイ

「つて、そんなことより！（叫び）」（あたしの名前なんてどうでもいいの！）」

「・・・スファレライト（びしっ）」 スファレを指差す

「あたしのドラゴンファングと、あなたの招き猫勇者隊・・・」

「新生された冒険者パーティ同士」

「どちらが有名になるか 勝負よ」

スファレ

「・・・勝負？（大汗）」（なしてそんなことに・・・？）

ロードライト

「ちよっ、フォスファイさん（汗）」

「いったいどうしたっていうのですか〜！（大汗）」

フォスファイ

「ロードライトちゃんには関係ありません・・・」

「これは、あたしとスファレライトとの勝負ですから（ぼそっ）」

ロードライト

「パーティ同士っていつてるのに」

「二人だけの勝負じゃないよね！！（大汗）」

スファレ

「いや・・・、べつにわたしは勝負するつもりなんて・・・（汗）」

突然の登場

シンセティック

「いいでしょう」

「この勝負、わたしが仕切らせていただきます！」

スファレ

「えええええーーーーー！！」(どびっくり)「勝負すること決定なのーーーーー！！」

フォスファイ

「つて、シンセティックさん！？(どびっくり)」「どじごじに！！！」

4コマ

ロードライト

「お、お姉ちゃん・・・」(汗)「

あまり話をややこしくしないで・・・」(大汗)「

シンセティック

「そうなると・・・」聞いていません

「勝者には何か特典を付けないといけませんね」(うん)「(何がいいかな?)」

フォスファイ

「それなら！」(ぎゅっ)「拳を握り締める

「ユークナイトでアウインの勇者・・・パロットクリソベルル！」

「あたしが勝つたら、彼をドラゴンファングにいたたくわ」

スファレ

「・・・・・・・・(汗)」

「あいつ、いまはヒーラーだよ？(しかもレベル1)」

フォスファイ

「それでもいいの！（がああああ！）」

なぜか顔が真っ赤

「とにかく、スファレライト！（びっしょ）」

スファレを指差す

「期間は1ヶ月・・・」

「その間、お互いのパーティがどれだけ有名になるかで競いましてよ

う！」

スファレ

「あゝ・・・（汗）」

「別に勝負なんてどうでもいいやゝ（わたしの負けでもいいよゝ）
やる気なし

フォスファイ

「真面目にやれー！ー！ー！ー！ー！（うがー！ー！ー！ー！）」

575

シンセティック

「あ、敗者へはペナルティーが必要ねゝ」

「負けた方のパーティとは・・・」

「専属契約を切っちゃうことにしましょう（うん、決定ゝ）」

スファレ

「え・・・？（汗）」

「それって、つまり・・・（どきどきどきどき）」

シンセティック

「いま住んでいる家から」

「さっさと出ていけゝゝゝ（ゴッゴッ）」

スファレ

「ちょーーーーーっ！！（大汗）」

ロードライト

「お、お姉ちゃん（大汗）」（なにもそこまでしなくても・・・）

フォスファイ

「お、おぉ・・・（汗）」　なにやら葛藤中

「この勝負、絶対に負けられない！！（うぉーーーーー！！）」
仲間に内緒で勝負することを決めた

スファレ

「って、勝負自体なかったことにならないのーーーーー！！（うに
や~~~~~っ！）」

効果音「ずがーーーーーん！！」

コメント

ちなみに、現時点ではスファレの方が有名です　へっぽこ
として・・・（笑）

第82話 調査部の新リーダー

4コマ劇場 アイオライト― 442・・・2010/12/22
シリーズ3

タイトル「調査部の新リーダー」

1コマ

冒険者ギルド『ユークレース』の事務所にて・・・

チャロアイト

「はあ〜・・・」 机に俯せになっている

「わたしたち、これからどうなっちゃうのかな〜」（う〜ん）

アンバー 19歳ぐらいの男

「どうなるって・・・、なるようにしかならないだろう」（汗）

「それに、今日から新しいチームリーダーさまがいらっしやるらしい・・・（ふっ）」

「いったい、どんなヤツがオレたちのリーダーになることやら」

チャロアイト

「ペタライトさまの代わりになれる人なんて・・・」

「いるはずないよ」（涙）」（ペタライトさま〜・・・）

アンバー

「まあ、そうなんだろうが・・・」

「一応、チームリーダーはナンバーズから選ばれることになっているから」

「せめて、取っつきやすいユークナイトが」

「リーダーになってくれることを祈るだけだぜ」（あのシーライト

ってヤツは勘弁してほしい……)

チャロアイト

「それじゃあ、わたしは〜(え〜っと……)」

「ナンバー3のジエムシリカさまが良いかな〜」

突然の登場

パロットクリソベルル

「シリカさんじゃなくなってるかな……(ぼそっ)」

チャロアイト

「つて、えええええー……!!!(叫び)」

「パロットさん!?(どびっくら)」

2コマ

パロット

「え〜……」

「なんだかわからないうちに、調査部のトップ代行を務めることになった」

「今期の冒険者検定に合格したヒーラーでレベル1のパロットクリソベルルだ」

「これからよろしく頼む……」

アンバー

「ヒーラーでレベル1って……(大汗)」(本当に、チームリーダー?)

チャロアイト

「あ〜、パロットさんは」

「ナンバー13のユークナイト……のはずですよ（あははっ）」

アンバー

「マジで!？（大汗）」（こいつがナンバーズ!？）

他のメンバーたち

「ざわざわざわ……（汗）」

パロット

「え〜っと、調査部のメンバーは……（ひい、ふう、みい）」

「ざっと見て、20人程度か……（う〜ん）」

「この中で、一番昔からいる人は誰になる?」

古株の調査員

「あ、自分はギルド創設当初からの調査員です……（汗）」

パロット

「じゃあ、あなたには調査部の全権限を与えておきます」

「他のみんなは、何かあれば彼に相談するってことで……（ぼそ

っ）

アンバー

「って、ちょっと待てえええい！（叫び）」

パロット

「ぬ?（誰だおまえ……）」

3コマ

チャロアイト

「ちょっと、アンバー！（汗）」

アンバー

「てめえがナンバーズかどうなのかは知らねえ」

「が・・・、ちよつと勝手すぎるんじゃないか!？」

「いまのを聞いていたら、全てオレたち任せで・・・」

「自分は何もしないから、好きにやってくれって感じだったよな」

? (怒)

パロット

「もちろん、最終責任はオレにある・・・」

「彼には、調査部の仕事について、仕切ってもらっただけだ」

アンバー

「だ、だが・・・ (汗)」

「調査部の仕事についても、てめえが指示を出せば済むこと・・・」

(大汗)

パロット

「調査部の仕事ってのは」

「ナンバーズというだけでトップになった」

「何も知らないヒーラーでもできるような内容なのか? (ぼそっ)」

アンバー

「う、ぐっ・・・ (大汗)」

パロット

「もちろん調査部の仕事は、これから覚えていくつもりだ」

「こんな感じで頼りないリーダーと思われるかもしれないが・・・」

「少しでもペタライトの爺いさんの代わりができるよう、がんばっていきたい」

「みんなも、オレに協力してくれ……（ペこり）」
頭を下げる

効果音「うおおおー……ぱちぱちぱち」
拍手 歓声と

4コマ

アンバー

「ちっ……（汗）」

「意外にまともなヤツじゃないか……（むかつ）」
ちよつとだけ悔しい

チャロアイト

「でしょ」

「パロットさんって、めっちゃめっちゃかっこいいのよ」
命の恩人です

アンバー

「って、かっこいいは関係ないだろ……（大汗）」

パロット

「あ、チャロアイト？（照れ）」
聞こえてた

チャロアイト

「は、はひっ!?!?（大汗）」

パロット

「悪いが……しばらくの間オレのサポートをしてくれないか？」
「調査部なんて、いったい何をすればいいのかさっぱりで……（大汗）」

チャロアイト

「はい、喜んで (こにゅっ) 」

アンバー

「…………… (いらっ) 」 面白くない

「おい、パロツト…………… (ぼそっ) 」

「しょうがないから、オレもおまえのサポートをしてやるよ」

パロツト

「いや、メンバー少ないんだから……………」

「そんなにサポートをつけるわけにはいかないだろ？」

「チャロアイト一人で充分だ……………な？」

チャロアイト

「もちろんです」

アンバー

「おまつ、まさか二人つきりになりたいからって」

「チャロアイトをサポートにつけたんじゃないだろ？な！！ (怒) 」

チャロアイト

「きゃ……………」

「パロツトさんと二人つきり……………」

アンバー

「って、おまえも喜ぶな……………！！ (うが……………！！) 」

パロツト

「…………… (汗) 」

「おまえら何言ってるんだ？（ぼそっ）」
「これ、仕事だぞ？（大汗）」

アンバー

「あゝ……（汗）」
「すげえまともな反応だな……（大汗）」（面白くもなんともねえ〜）

チャロアイト

「うう……（涙）」
「ちよつとぐらい、どきどき〜っ」
「みたいな反応してくれてもいいじゃないですか……（しくしくしく）」

パロツト

「え〜つと……（きよろっ）」 チャロアイトを指差し、アンバーに視線を向ける

アンバー

「ああ……」
「おまえが悪い……（ぼそっ）」

効果音「ずがー—————ん!」

コメント

チャロアイトはパロツトに憧れているようですな

第83話 フォスファイが突っかかってくる原因は・・・パロットです

4コマ劇場 アイオライト | 4 4 3 2 0 1 0 / 1 2 / 2 3
シリーズ3

タイトル「フォスファイが突っかかってくる原因は・・・パロットです」

1コマ

いまから二週間ほど前・・・

パロットクリソベリル

「・・・・・・・・・・」 腕を組んで壁に寄りかかっている

フォスファイライト

「ねえ、あなた・・・」

「たしか、今期検定に合格した冒険者・・・だよね？」

「見たところ、一人のようだけど」

「良かったら、あたしとパーティを組まない？」

「ちようど、一緒に冒険してくれる仲間を捜してたん・・・」

パロット

「すまない・・・(ぼそつ)」

「いまは誰とも組む気はない」

フォスファイ

「え・・・？(そう・・・なの?)」

「でも、初級冒険者が誰とも組まないのは無理があるんじゃない(汗)」

「ソロで活動するにしても、ある程度レベルを上げてからでも遅く

は……」

パロット

「……悪いな(苦笑)」

フォスファイ

「うっ……」
そんな顔をされると何も言えなくなる

2コマ

数日後……

パロット

「……」
数日前と同じ体勢で壁に寄りかかっている

フォスファイ

「あ……れ?(あの人は……)」
通りかかった

「(とととつ)」
パロットに駆け寄る

パロット

「……」
ファスファイに気づく

フォスファイ

「また会いましたね」

パロット

「あなたか……(はあ)」

フォスファイ

「うっわっ!(汗)」

「そんな迷惑そうな顔……傷ついちゃうな」(しくしくしく)」

嘘泣き

パロット

「で？（やれやれ）」

「今日は何の用だ？」

フォスファイ

「え〜っとね」

「知ってるかな？」

「ドラゴンファンゲっていう新鋭の冒険者パーティ」

パロット

「あ〜」

「名前だけなら ちよくちよく聞いたことがあるかな・・・（うん）」

3コマ

フォスファイ

「あれからあだし、そのドラゴンファンゲのメンバーになったんだ」

パロット

「へえ〜、そうなのか〜」

「うん、良い判断だ・・・」

「レベルを上げるなら、有名なパーティのメンバーにならないとダメだからな」

「直接依頼されるクエストなんかは」

「ある意味、冒険者パーティの名前で依頼先を決められることがあるわけだし」

フォスファイ

「えへへっ」

「あたしもまさか、あのドラゴンファングのメンバーになれるなんて思ってたよ」

「それでね、みんなにはあたしから話してみるから……」

「あなたもドラゴンファングに入ってみる気はないかな」

パロット

「………（汗）」

「何度も誘ってもらって申し訳ないが……」

「やはり、オレは誰とも組む気はないんだ（ごめんな……）」

フォスファイ

「そっ……か（うん）」

「これだけ誘ってもダメなんだから」

「よっぽどの理由があるんだよね……？」

「わかった、もう無理に誘わない！」

「でも……、パーティに入りたくなったら遠慮無く声をかけてね」

「なんていうか」

「べつに深い意味はないんだけど、あなたのことほおっとしておけないっていうか（あははっ）」

パロット

「そう……だな」

「この先、もし誰かと組むことがあったりしたら」

「そのときは、おまえのパーティへ入れてもらうことにするかな……」

・（微笑）」

フォスファイ

「うん」

「楽しみに待ってるから」

パロット

「あゝ・・・(汗)」

「先に断っておくが、ほとんどそんな可能性はないんだぞ(大汗)」

「何があるうとも、オレは誰とも組む気はないんだから(どきどきどき)」

フォスファイ

「えゝゝゝっ (あははっ) (そんなこといわないでさゝゝゝ)

4コマ

さらに数日後・・・

フォスファイ

「おや、あの人は・・・?」 パロットの存在に気づく

「しかも一緒にいるのは・・・はっ!(汗)」

「で、伝説の冒険者ギルド、ユークレースのユークナイト」

「盲目の精霊騎士、ジェムシリカさま!!(どびっくり)」
有名です

「な、なぜあの人とジェムシリカさまが(大汗)」

「それに、もう一人・・・」

「あの子って、あたしと同じときに戦士検定を受けて冒険者になっ
た」

「たしかスファレ・・・ライトさん?(どきどきどき)」

「いったい、どうしてあの人と・・・」

パロット

『シリカさん、じつはオレ』

『こいつとパーティを組むことにしたんだ』

第4話のシーン

スファレ

『つて、えええええー！！』（どびっくり）』

『なに勝手に決めて！？（大汗）』

フォスファイ

「……………」 啞然

「……………」 呆然

「……………」 愕然

「…………（くるっ）」 身を翻してその場から立ち去る

シリカ 遠くの方から声だけ聞こえてくる

『今からあなたは』

『わたしの敵に認定されました！！（叫び）』 宣言！

スファレ 同じく

『えええええー！！！！（涙）』（どうしてー！！）

路地裏にて……

フォスファイ

「……………（すーっ）」 目尻から涙がこぼれる

『あははっ……………』

『あたし、なんでこんなにショックなのかな』（うっっっ）

『自分でも、びっくりだよ〜』（涙）

「……………（くるっ）」 後ろを振り返る

『スファレライト…………（ギロリ）』

『あたしは、あなたを…………許さない（ぼそっ）』

説明文「これはぐ、どう考えてもパロットが悪い・・・(苦笑)」

コメント

フォスファイはパロットに恋愛感情を持っているわけではなく・・・
単に悔しいだけです (爆)

第84話 どちらのパーティも相手を警戒しています

4コマ劇場 アイオライト―444・・・2010/12/24
シリーズ3

タイトル「どちらのパーティも相手を警戒しています」

1コマ

サNSTOON（招き猫）の館にて・・・

エルバイト

「ドラゴンファング？（汗）」

「それってオレと同期の冒険者が立ち上げたパーティだな・・・」

「かなりの数のクエストをこなしているらしく」

「ギルドを持たない冒険者パーティとしては」

「結構有名だったはずだぞ」

スファレライト

「片や有名なパーティを立ち上げた冒険者・・・」

「片やレベルが低くて定職も持たないへたれなアルバイト・・・（

ぼそっ）」

「たった1年しか経っていないのに、もの凄く差がでるんだね」

（あははっ）」

エルバイト

「ほっとけーーーーー！！（涙）」（それに、オレはアルバイトじゃねえーーーーー！！）」

「って、そんなことより・・・」

「その勝負つてのに負けると、この屋敷から出ていけなくっちゃならないんだよね？」（汗）」

「オレ、昨日まで借りてた部屋、もう契約破棄しちゃったぞ〜」
（大汗）」（どうしてくれるんだ〜）

スファレ

「え〜っと、ロードライトはシンセティックさんの妹なんだから」

「勝負に負けても、オマケして住まわせてくれる・・・とか？（汗）」

ロードライト

「うづん・・・（ふるふる）」

「お姉ちゃんって、そういう約束ごとには厳しい人だから」

「負けちゃうと、本当に出て行かなくっちゃならないとおもいます・・・（ぼそっ）」

エルバイト

「つまり・・・」

「この屋敷にいられるのは、あと1ヶ月・・・（ぼそっ）」

スファレ

「負けること決定なのーーーーー！！（涙）」

エルバイト

「当たり前だろー！」

「ある程度有名で数多くのクエストをこなしているドラゴンファン
グと」

「出来たてはやはやで、平均レベル5・2の招き猫勇者隊とじゃあ
「比べるまでもないだろ〜！」

スファレ

「うぐっ・・・（汗）」

「そんなの、やってみなくちゃわからないでしょー！ー！ー！！（うにゃー！ー！ー！！）」

効果音「ずががー！ー！ー！ー！ー！ーん！！！」

2コマ

ドラゴンファングの拠点、龍の巢にて・・・

ハックマナイト 性別 男 / 年齢 23歳 / 職業 猫戦士 / レベル 28

「それで、そのパロットクリソベルルってヤツをドラゴンファングへ引き抜くため」

「結成されたばかりの冒険者パーティ、招き猫勇者隊に勝負を挑んだってわけか？（汗）」

「そして、勝負に負けたパーティがシンセティックとの専属契約を打ち切られて」

「屋敷から出て行かなくては・・・ならないと？（大汗）」

フォスフォファイライト 性別 女 / 年齢 15歳 / 職業 戦士 / レベル 6

「え〜と・・・（汗）」

「まさにその通り」（あははっ）」

アメトリン 性別 女 / 年齢 14歳 / 職業 ヒーラー / レベル 4

「でも、その招き猫って・・・」

「大家の妹が最高レベルでリーダーをしてるんでしょ？」（たしか、レベル18〜19?）」

「あとはレベル1がほとんどらしいから」

「楽勝なんじゃないの〜?」

アクロアイト（ドラゴンファングのリーダー）

性別 男／

年齢 17歳／職業 魔法戦士／レベル32

「それが、そう簡単な話ではなさそうなんだ・・・」

「最近メンバーに入ったレベル4のアルバイトって人は大したことないらしいけど」

「残りのメンバーは、一筋縄にはいかないようだ」

ハツク

「・・・というと？」

3コマ

アクロ

「うん・・・」

「まずは、メンバーの中にフローラさまがいる（汗）」 メン
バー内では最強です

アメトリン

「ちよっ、それってこの国の女王さま！？（どびっくり）」

フォスファイ

「・・・え？（大汗）」 初耳です

アクロ

「あと、フォスファイやアメトリンの同期 スファレライトさんは

「いまは、へっぽこ戦士になっているらしい・・・（大汗）」

アメトリン

「へ、へっぽこーーーーー！！！」

「それって、おとぎ話の中だけの存在なんじゃ・・・？」 『

へっばこマスター青山七瀬物語』(爆)

アクロ

「いや・・・」

「冒険者管理組合提供の資料をしてみると」

「間違いなくへっばこみたいなんだ・・・(どきどきどき)」

ハツク

「ま、マジかよ・・・(大汗)」(シャレになってねえぞ)

アクロ

「それに、ユークレースの協力があったとはいえ」

「招き猫勇者隊は、この十日ほどで」

「難易度Sランクのクエストを二つも挑戦して」 エリアGと

忘却の迷宮

「一人もメンバーを欠くことなく生還している・・・(信じられな

いけど・・・)」

「いまのまま勝負したら、ボクたちドラゴンファンクは負けてしま

うかもしれない(ぼそっ)」

フォスファイ

「そ、そんな・・・(サアッ)」 一気に血の気が引く

4コマ

ハツク

「って、おりゃー！！(ずげしっ！)」 ハリセンで

フォスファイの頭を叩く

フォスファイ

「わにやっ!?(痛っ)」

「って、ハツクさん何するのよーーーーー!!!(涙)」

ハツク

「なにする・・・じゃねえ!!!(怒)」

「てめえ、こんなややこしい状況にしゃがって」

「いったい、どう責任を取るつもりだーーーーー!!!(うが
ーーーー!)」

フォスファイ

「ひゃっ!(びくっ!)」

「う、ごめんなさ~~~~い!!!(涙)」

アメトリン

「せめて、勝負することを決める前に相談してほしかったな~~~~
い~~~~)」

フォスファイ

「うぐ~~~~(しくしくしく)」

アクロ

「まあ、済んでしまったことは仕方ない・・・」

「ようはその勝負に勝てばいいわけだ」

ハツク

「だが、勝つって言うてもな~~~~(どうするんだ?)」

アクロ

「う~~~~ん・・・」

「ボクたちは、これまで通りにクエストをこなしていればいい」

「と、いいたいところだけど・・・(汗)」

アメトリン

「それじゃあ、期間が終わるまで勝ったかどうか分からないじゃないのよ」

アクロ

「だからこそ、作戦がある……(ぼそっ)」

ハツク

「作戦……だと?(汗)」

アクロ

「そう……」

「これからは、招き猫勇者隊と同じクエストを受けることにして
彼女らより先にそのクエストを達成する……って作戦」

ハツク

「なるほど……」

「それなら、オレたちの方が間違いなく有名になりそうだな」
招き猫は失敗ばかりで

アクロ

「だろ」

フォスファイ

「ああ……(涙)」

「話がどんどん変な方向にいつてしまっ……(しくしくしく)」

効果音「ばきゅ……」

コメント

ハックマナイトの職業・・・猫戦士って（大汗）
ヤゝをつけるべきだろうか？（笑）

語尾に二

第85話 入居者大募集

4コマ劇場 アイオライト― 445・・・2010/12/25

シリーズ3

タイトル「入居者大募集」

1コマ

サンストーン（招き猫）の館にて・・・

ジエムシリカ

「こんにちは」

「こちらに、フローラちゃんはいますか？」

スファレライト

「ジエムシリカさま」

「いらっしやいませ」

フローライト

「あ、シリカさん・・・」

「今日は、いったいどうされたんですか？」

シリカ

「どうされたんですか・・・じゃありません！」

「シトリンさん経由でパロットくんの話を知りました」

「昨晚、寝室に不審者が現れた・・・そうですね？」

スファレ

「・・・不審者？（きよろっ）」

不意に振り返る

エルバイト

「なぜそこでオレを見る！！（うがーーーー！！）」

スファレ

「あゝ（苦笑）」

「ごめんごめん（あははっ……）」

シリカ

「えっつと……（汗）」

「いちおう一大事なんですからみなさんも真面目に……（どきどきどき）」

効果音「ずががーーーー！！！！！！！！ん！！」

2コマ

フローラ

「もしかしてパロットさんがいった護衛の件ですか？」

「ギルドマスターに掛け合ってみるとかいう……」

シリカ

「はい……」

「ユークレースのナンバーズ……ジエムシリカ」 片膝付い

て頭を下げる

「フローライトさまを、全身全霊をもって護らせていただきます」

フローラ

「あゝ……」

「シリカさん、基本かつこいんですが」

「かゝくん抱っこしているから、いまいち決まっていますよ（ぼそっ）」

シリカ

「うっ……(照れ)」 顔が真っ赤になる

「そ、そんな場合ではありません!(大汗)」

「さあフローラちゃん……」

「ルチルクオーツ城へ戻りますよ!」 フローラの腕を掴んで引っ張る

フローラ

「ちよちよっ!(汗)」

ロードライト

「あっ、シリカさん!(汗)」

「じつは、招き猫勇者隊が大変なことになっていて」(大汗)」

シリカ

「……招き猫?(汗)」

「なんですかそれ……(どきどきどき)」

ロードライト

「え?」

「わたしたちのパーティ名ですけど……(ぼそっ)」

シリカ

「……(大汗)」(どうしてそんな愉快な名前に……)

フローラ

「あ、あははっ(苦笑)」

シリカ

「とにかく、フローラちゃんにはお城へ戻ってもらいます」

フローラ

「だ、だから、そんなこといつてる場合じゃ！」

シリカ

「拠点の問題なんかより、命の方が大切です!!」

フローラ

「ああ！（涙）」

「なんだか、シリカさんがアンデシンさん化してる……!!」
（泣）」

美咲

「え〜っと……」

「シリカさん、ちょっといいですか？」

シリカ

「はい？（汗）」（美咲さん……いたんですか？）

美咲

「逆に桜ちゃんは」

「このサンストーン（招き猫）の館に留まってもらおうほうが安全だと思われます」

シリカ

「た、たしかに」

「わたしより、美咲さんに護っていた方がいいが」

「安全なのかもしれませんね……（汗）」（伝説の退魔師ですし

〜

美咲

「いいえ、そういうこと言っているのではなく〜（苦笑）」

「この館の名前が、サンストーンだというのが大切なんです」

シリカ

「館の名前……ですか？（汗）」

4コマ

美咲

「あ〜、館の名前だけではありませんね」

「ファリスさんがいるからこそ、重要な意味を持つのかもしれません」

スファレ

「え？」

「管理人さんが……なにか関係あるの？（汗）」

美咲

「はい」

「サンストーンという名の館に、精霊神であるファリスさんが存在していることで」

「この場所は精霊界の聖域と化しています」

エルバイト

「……精霊神？（大汗）」

美咲

「聖域には、悪意を持つ者が入ることはできません」

「だから、桜ちゃんはこの館にいる限り安全だといえるのです」

スファレ

「いや、そんなことどうでもいいんだけど……(汗)」
「いのかよ!(笑)」

「精霊神!? (大汗)」

ロードライト

「か、管理人さんって……(汗)」
「精霊神さま……なんですか?!? (どきどきどき)」

突然の登場

ファリス

「ちょーーーっ!(汗)」
「美咲ちゃん、なにバラしちゃってるのよ!! (大汗)」

美咲

「あれっ?(汗)」
「内緒だったんです……か?(大汗)」

ファリス

「だから、しいーっ!! (黙って!!)」
人差し指
を口元に当てる

シリカ

「わかりました(うん)」
「そういうことなら、フローラちゃんと一緒に……」
「わたしもここで暮らすことにしましょっ!……!」

フローラ

「おお〜（いいんですか〜）」

エルバイト

「つて、そんなことより!」

「ファリスさんが精霊神って話は!?（もうその話題、終わりなのかよ!!）」
はい、終わりです

効果音「ずががー………ん!」

コメント

サNSTOIN（招き猫）の館では、新規入居者を大募集しています
（爆） 現在8人?

第86話 ドラゴンファングの前に現れたシーライト

4コマ劇場 アイオライト | 446・・・2010/12/26
シリーズ3

タイトル「ドラゴンファングの前に現れたシーライト」

1コマ

ドラゴンファングの拠点、龍の巣にて・・・

効果音「こん、こん・・・」 ドアをノックする音

フォスファイライト

「はいはい」

「どちらさまですか〜〜」(かちやつ) 「扉を開ける

「・・・あれ?(きよるきよる)」

「誰も いない(汗)」

「う〜ん、こどもの悪戯だったのかな〜・・・(くるっ)」
扉を閉めて振り返る

突然の登場

シーライト

「・・・・・・・・(しゅたっ!)」 手をかざして挨拶をする

フォスファイ

「つて、わにゃー~~~~!!!(どびっくり)」

ハックマナイト

「な、なんだ!?(大汗)」 フォスファイの悲鳴を聞いて奥か

ら飛び出してくる

アメトリン

「……あ」 同じく

「そいつ見たことあるかも……」(ぼそっ)

アクロアイト

「ヨークレースのナンバーズ(汗)」 やっぱり出てきた

「たしか、シーライト……さん？」

シーラ

「……」(じくじく)

2コマ

応接室にて……

アクロ

「それで……」

「ヨークナイトであるシーラさんが」

「ボクたちドラゴンファンクにどういった用得……？(汗)」

シーラ

「……」(ずずずずずず) 「出されたお茶を飲んでいる

ハック

「おいおい(むかつ)」

「ヨークナイトだからって、すかしてるんじゃないぞ……(ギョリ)」

アクロ

「ちよつ、ハック！（汗）」

「おまえこそ、失礼なこというなって！！（大汗）」

ハック

「だがよ……（汗）」

共同スペースにて……

アメトリン

「うっん」

「何の話をしているのか気になる……」

聞き耳を立てている

フォスファイ

「やめなさい、アメトリン！（汗）」

アメトリン

「えっつ（汗）」

「でも、フォスファイも気になるでしょう？」

「あのシーラって子……」

「ちゃんと喋るのかどうか？（ぼそっ）」

フォスファイ

「うっ……（汗）」

「否定できない（どきどきどき）」

アクロ（声だけ）

『な、なんだって……！！（叫び）』

フォスファイ

「ひゃっ!?!（びくっ!?!）」

数分後・・・

アクロ

「と、いうことで」

「シーラさんの持ってきた情報からとんでもない事実がわかった」

アメトリン

「なになに？」

「とんでもない事実って」

ハツク

「アメトリン、落ち着け・・・(汗)」

「本当にシャレにならないことなんだから(大汗)」

アメトリン

「だ〜か〜ら〜」

「そのシャレにならないことって〜？(ゴロゴロ)」

シーラ

「……………(じい〜っ)」

アクロ

「……………(汗)」

「このルチルクオーツの国王・・・フローラさまの命が」

「何者かに狙われているらしい(ぐへっ)」

フォスファイ

「…………え？(大汗)」

「それって、ホントなの!? (どびっくり)」

アメトリン

「あゝ・・・(汗)」 テンションがた下がり (笑)

ハツク

「わかりやすいやつめ・・・(大汗)」

フォスファイ

「って、それどころじゃないよね!? (あせあせ)」

4コマ

アクロ

「こほん・・・(汗)」

「なんにしても、こんなことを知ってしまったら」

「黙って見過ごすわけにはいかない・・・」

「なんとかして、フローラさま暗殺を阻止しなくてはならない!」

うん!」

アメトリン

「え〜〜〜っ!」

「そんなの王室がやるべき仕事でしょ」

「一介の冒険者じゃなく、騎士団にでも任せておけばいいんじゃないの?」

アクロ

「たしかに、そうなんだけど・・・(大汗)」

アメトリン

「それに、フローラさまって」

「いま争っている招き猫勇者隊のメンバーなんだよね」
「わざわざライバルのパーティを助けるだなんて」
「バカみたいじゃないのよ」(むすっ)

ハツク

「そんなことにこだわっている場合じゃねえだろ！」
「こいつは国家の一大事なんだぞ!!」

アメトリン

「だつてさ」(汗)

フォスファイ

「でも、考えてみればチャンスかも」(ぼそっ)

アメトリン

「え、なにが？」

フォスファイ

「ほら、招き猫勇者隊との勝負！」
「あたしたちが暗殺者を先に捕まえたら」
「フローラさまの命を護った冒険者パーティってことで」
「ドラゴンファングの知名度も一気に上がるんじゃない？」

アメトリン

「あゝ、なるほど」

アクロ

「そういうことだ」
「幸運なことに、こちらにいらっしやるユークナイトのシーラさん
も」

「ボクたちに全面協力してくださるそうだ・・・」
「いいかみんな！」

「フローラさまを護るといふこのクエストに成功すれば」

「ドラゴンファンクも、ユークレースと同じように」

「王室からのサポートを受けることができるかもしれない」

「フォスファイがいったように」

「これは、ボクたちドラゴンファンクにとってのチャンスだ！」

「絶対に成功させよう！！」

ハック

「よっしゃー！！！」

「ドラゴンファンクの名を上げて」

「かつてオレを取らなかつたユークレースに後悔させてやる！！！」

昔、入ろうとした？

アメトリン

「まあ、ちよつとは面白そうになってきたけど・・・(汗)」

フォスファイ

「が、がんばりましょう・・・(あははっ)」

シーラ

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・(ふっ)にやり」

効果音「ずががーーーーーん！！！」

コメント

で、どうやってシーラとコミュニケーションを取ったんですか？

(笑) 喋ってないはず

第87話 物語には関係ないフォスフィの裏設定を・・・

4コマ劇場 アイオライト―447・・・2010/12/27
シリーズ3

タイトル「物語には関係ないフォスフィの裏設定を・・・」

1コマ

夕方、サンストーン（招き猫）の館が遠目で見える場所にて・・・

パロットクリソベリル

「ふう・・・（やれやれ）」 仕事帰り？

「調査部の仕事って、現場に出向いてするものばかりだと思っただけ」

「意外と事務系の仕事が多いんだな〜」（汗）」

「オレ・・・、本当にやっていけるのか？（どきどきどき）」

自信が無くなってきた

「って、あれは」 何かに気づく

フォスフォファイライト

「う〜ん・・・（汗）」

「フローラさまの暗殺を阻止するっていうのは理解できるんだけど」

「実際にどうすればいいんだろう？（大汗）」

「このまま、フローラさまが出てくるのを見張っていればいいのかな〜〜」

パロット

「やっぱり」

「あんだ、ドラゴンファングの（久しぶりだな〜）」

フォスファイ

「え？（きよろっ）」 振り返る

「ちよっ、なあああー！ー！ー！（叫び）」

「ぱ、パロットクリソベリル・・・さん！！（どびっくり）」

パロット

「あ・・・れ？（汗）」

「オレの名前、知ってくれていたんだ（大汗）」（呼び捨てでいいぞ・・・）

「ちなみに、オレはあんたの名前を知らないんだけど・・・（苦笑）」

フォスファイ

「あっ、フォスファイライト・・・（汗）」

「フォスファイでいいです！（どきどきどき）」

パロット

「フォスファイね・・・（うん）」

「ちよっど良かった」

「フォスファイに話しておきたいことがあったんだ」

「今からオレが拠点にしている屋敷まで一緒に来てくれ（ぎゅっ）」
手を握って引く張る

フォスファイ

「えっ！？（汗）」 引きずられる

「ちよ、ちよっど〜〜（大汗）」 顔が真っ赤

2コマ

サンストーン（招き猫）の館にて・・・

ロードライト

「……………」 啞然

「……………」 呆然

「……………」 愕然

フォスファイ

「……………(どきどきどき)」

スファレ

「え〜っと(汗)」

「フォスフォスさん、何時間ぶり……だっけ?(大汗)」

フォスファイ

「フォスフォスじゃないって!!(うにゃー……っ!)」

パロット

「なんだ?」

「おまえら知り合いだったのか?(汗)」

スファレ

「あゝ、パーティ名を申請しに行った帰りにちょっとね〜〜(あははっ)」

パロット

「ぬ、パーティ名?(汗)」

「聞いてないぞ……(大汗)」

スファレ

「言っていないもん(笑)」

パロツト

「……………(はあ〜)」

「まあいい(やれやれ)」

「それで、オレたちのパーティ名は何になったんだ？」

ロードライト

「そ、それが……………ですね(汗)」

「申請にちょっとした手違いがありました〜(苦笑)」

フローライト

「その名も、招き猫勇者隊」
「フローラだけ気に入っています」

パロツト

「招き！？(どびっくり)」

ロードライト

「え〜つとですね(汗)」

「パーティ名の変更は、最低3年間は受け付けてくれないらしくつて〜(大汗)」

パロツト

「オレ……………いまはヒーラーなんだけど〜(汗)」

「勇者隊はマズくないか？」(大汗)」

スファレ

「そっちかい！(わぎゃ—————！)」(招き猫はいいの
かよー！)」

効果音「ずがが—————ん!!」

3コマ

美咲

「あなたが・・・ドラゴンファングのフォスファイさん」

「え〜つと、どこかでお会いしませんでしたか・・・？(汗)」

フォスファイ

「え〜つと・・・(巫女さん?)」

「はじめまして　だと思っんですが〜(苦笑)」

美咲

「あ、ごめんなさい！(あせあせ)」

「わたしは、樹神美咲っていいです(ぺこり)」(よろしくお願
い
し
ま
す
)

「・・・(じい〜〜〜)」

「それにしても、誰かに似ている気がするんですが〜(うん)

「(誰だったかな〜)」

フローラ

「美咲さんもそう思いますか?(汗)」

「わたしも、初めてお会いしたときそんな気がして・・・(じい〜
〜〜)」

フォスファイ

「うう・・・(涙)」

「なにやらお二人の視線が痛い(しくしくしく)」

パロット

「つて、おまえら〜」

「あんまりフォスファイを困らせるな・・・」

突然の登場

ファリス

「はい、フォスファイちゃん」

「お茶をどうぞ (にこっ)」

テーブルにお茶を置く

フォスファイ

「あ、すみません (ぺこり)」

ファリス

「・・・え? (大汗)」

フォスファイの顔を凝視

フォスファイ

「・・・? (はい?)」

4コマ

ファリス

「つて、アリスちゃん!! (どびっくり)」

アリスの育ての

親

「容姿や生体波長とかは違っちゃってるけど・・・」

「あなた、アリスちゃんよね!? (大汗)」

フォスファイの両

肩を掴んで前後に揺する

フォスファイ

「ちよっ、あたしの名前はフォスフォファイライトでー!! (ぐらぐらぐら)」

フローラ

「なるほど」

「アリスさんに似てるのか〜」（汗）」

美咲

「ほんと、見た目は全然違ってるけどアリスさんだ〜（あははっ）」

「まさか、フォスファイさんってアリスさんの生まれ変わり？（汗）」

アリスは5千年前に死んでいます

フォスファイ

「だから、アリスって誰ですかー！ー！！（涙）」

フローラ

「あ、よく見るとフォスファイさんって左手だけにグローブしてる！

（アリスさんと同じ！）」

「その手の甲に『アウインの紋章』とかが付いていたら」 生

まれつきに・・・

「まんま、アリスさんなのにね〜」（あははっ）」

フォスファイ

「！！！！（びくっ！）」 慌てて左手を抱え込む

フローラ

「え・・・（大汗）」（マジであるんですか？）

フォスファイ

「・・・（涙）」（うう〜・・・） 左手のアザ（？）

の所為で、小さい頃は色々と言われた

エルバイト

「てか、オレたちにわかる話をしろよな〜」（大汗）」（アリス
って誰だよ・・・？）

パロット

「なんだ、まだこの家にいたのかアルバイト……（ぼそっ）」

エルバイト

「いちゃ悪いのか……！！（涙）」（うぎゃ……！！）

効果音「ずが……！！ん！！」

説明文「3コマ目からは、無視していただいてもかまいません
爆）」

コメント

パロットと違い、アリスは真のアウインの勇者です

第88話 深読みのしすぎ？

4コマ劇場 アイオライト―448・・・2010/12/28
シリーズ3

タイトル「深読みのしすぎ？」

1コマ

サンストーン（招き猫）の館にて・・・

フォスフォファイライト

「それで・・・（汗）」

「パロットはどうしてあたしをここに連れてきたの？（大汗）」

パロットクリソベリル

「ああ、そうだったな」

スファレライト

「えっと（汗）」

「込み入った話ならわたしたちは席を外すけど・・・（ぼそっ）」

パロット

「いや、おまえたちにも関係あることだから」

「できればいてほしい・・・」

フォスファイ

「・・・？（汗）」

パロット

「フォスファイ・・・」

「さつき(前回の2コマ目まで)の話で気づいているとは思って」
「いまオレ・・・、こいつらとパーティを組んでいるんだ」

フォスファイ

「そんなこと、知ってるよ」(はあ)

「新しく結成されたパーティの中に」

「ナンバーズの紋様が入った鎧を纏っているヒーラーがいるって」

「ちょっととした話題になってたから・・・」

パロット

「そ、そうなのか・・・?(大汗)」

スファレ

「ああ」

「それって、わたしたちが忘却の迷宮へ出発するときのことだよ
ね?」

フォスファイ

「・・・(じくり)」

2コマ

パロット

「とにかく・・・」

「フォスファイ、すまない」(ペこり) 頭を下げる

フォスファイ

「えっ、ちよっ(汗)」

「パロット!?(どびくり)」(いったい何をやって・・・)

スファレ

「なに〜？（にやにや）」

「パロツト、フォスフォスさんに謝らないといけないことでもしたの〜？（笑）」

パロツト

「いや・・・（汗）」

「成り行きでおまえとパーティを組むことになったわけだが」

「じつは、それ以前から」

「フォスフィに『一緒にパーティ組まないか？』と誘われていたんだ（大汗）」

スファレ

「ええー！（大汗）」

「そうなのー！（どびっくり）」

パロツト

「しかも、ユークレースに戻るのが嫌でスファレと組んだというのに」

「なんだかんだで、いまはユークレースに戻ってしまったし・・・」

（涙）「ロードライトを助けるため？」

フローラ

「まさに、踏んだり蹴ったりですね〜（苦笑）」

3コマ

パロツト

「フォスフィには何度も誘ってもらったというのに」

「ほんと悪かった・・・（ぺこり）」
もう一度、深々と頭を下げる

フォスファイ

「ちよつ、そんな！（汗）」

「あたしも軽い気持ちで誘ったわけなんだし（大汗）」

「べつに謝ってもらうことでも・・・（気にしないでー!）」

「それに、約束を覚えていてくれただけで」

「あたし・・・（うるっ）」 おもわず涙ぐむ

ロードライト

「なるほど」

「大好きなパロットさんが自分の誘ったドラゴンファングではなく」

「別の冒険者パーティに入ってしまったので」

「その原因を作ったと思われるスファレさんを敵視していたわけですね」

フォスファイ

「なああああーーーーー！！！！！！（どびっくり）」（大好き
つて!?!）

パロット

「あゝ・・・（汗）」

「ほんと、すまない（大汗）」（そんなにオレを想ってくれていた
とは・・・）

フォスファイ

「って、パロットも本気にして謝らないでーーーーー！！！！（うにゃ
ーーーーー!）」

突然の登場

????

「……………(とん)」 後ろからフォスファイの肩に手を
おく

フォスファイ

「ほへっ？(きよろっ)」 慌てて振り返る

4コマ

ジエムシリカ

「ふふふっ……………(ずいっくっ……………)」 背後に怒りの炎が
立ち昇っている

「ドラゴンファングの フォスファイライトさん……………でした
ね？(怒)」

「少し、パロットくんのことについて……………」

「お話があります (にこり)」 笑顔なのに笑っていない
爆)

フォスファイ

「あがつ……………(大汗)」

「ジエムシリカ さま？(がたがたぶるぶる)」

スファレ

「……………(どきどきどき)」

「ブラックシリカさま 降臨……………(ぼそっ)」

フォスファイ

「ブラックク……………!?(どびっく……………)」

フローラ

「シリカさんは、パロットくんのことになると」

「ちょっと変になるっていうか……………(あははっ)」

スファレ

「うんうん（大汗）」

「わたしもパロットとパーティを組んでからしばらく」

「シリカさまに目を付けられていたからな〜」

「ロードライトも、くれぐれも気をつけてね・・・（ひそひそ）」

ロードライト

「は、はあ〜い・・・（大汗）」（シリカさんの前ではあまりベタベタしないようにしよう〜と）

シリカ

「さあフォスファイさん」

「わたしの部屋で、心置きなく語り合いましょう・・・（ずるずるずる）」　　フォスファイを引きずる

フォスファイ

「えっ、えええええー！！！！（涙）」（た、助け！！）

パロット

「ちよっ、シリカさん！（汗）」

「フォスファイに何をするつもりなんですかー！！！！（大汗）」

シリカ

「うふふふっ（キュピーン）」　　目が妖しげに光る（盲目です）

フォスファイ

「いやあああー！！！！！！（大泣き）」

説明文「その後、フォスフィの姿を見た者は誰もいなかった……げほげほっ！」 「冗談です」

コメント

- ・ パロットが謝ったことでフォスフィの気はかなり晴れましたが……勝負は続きます

第89話 ドラゴンファングの異変

4コマ劇場 アイオライト―449・・・2010/12/29
シリーズ3

タイトル「ドラゴンファングの異変」

1コマ

ドラゴンファングの拠点、龍の巣にて・・・

フォスフォファイライト

「・・・と、いうわけで〜(しくしくしく)」「 やっとシリカから解放された?(笑)

「どうやらフローラさまは」

「しばらくの間、招き猫勇者隊の拠点 招き猫の館に住むことになったみたい(汗)」

アクロアイト ドラゴンファングのリーダー

「えっ(汗)」

「そ、そうなのか!?(大汗)」

アメトリン

「っていうかさ〜(汗)」

「その招き猫の館って、お城より安全だっていうの? (大汗)」

「信じられない・・・(どきどきどき)」

フォスファイ

「あ〜・・・(汗)」

「その辺りは、パーティだけの秘密があるみたいで〜(あははっ)」「
誤魔化しています

「……………(大汗)」

「精霊神さまが管理人してるから屋敷全体が聖域になっているなんて」

「絶対に信じてもらえないだろうし……(ぼそっ)」 いち
おう話は聞いている

アメトリン

「え……なんか言った？」

フォスファイ

「う、うん(汗)」

「なんでもないよ……(苦笑)」(黙っておくことにしよう……
うん)

効果音「ずがが—————ん！」

2コマ

アクロ

「なるほどな〜」

「ということは……だ」

「フローラさまを狙う暗殺者が現れるとしたら」

「招き猫の館の周辺……もしくは、フローラさまが外出されたときというわけか」

ハックマナイト

「女王が狙われているってのは」

「招き猫のヤツらもわかっているんだよな〜？」

「だったらフローラ……、館にこもって出てこないんじゃないかねえか？」

アクロ

「つて、ハック！」

「呼び方・・・フローラさまだろ!! (汗)」

ハック

「別にいいんじゃないか？」

「あいつも女王である前に一冒険者なんだろ？」

「しかもレベル1だし・・・ (職業が姫なんて、ふざけてるんじゃないか?)」

「あいつがオレのレベルを超えたら、様付けで呼んでやらんでもない (うんうん)」

アメトリン

「すぐに追い越されると思う・・・ (ぼそっ)」

ハック

「なっ!! (汗)」

「てめえアメトリン！」

「ふざけたこと言ってるんじゃないぞ!! (うがーーーー!!)」

アメトリン

「きゃーーーーっ (笑)」

フォスファイ

「そ、そんなことより! (汗)」

「これからどうするか考えないと!! (大汗)」

ハック

「まあ・・・そうだな (汗)」 (話を脱線しすぎたな・・・)

アクロ

「……………(うん)」

「シーラさんは、どう思いますか？」

シーライト

「……………(じい〜〜っ)」

アクロを見つめる

アクロ

「そう……………ですね(うん)」

「まずは、相手がどんなヤツなのかを知らないことには話にもならない……………」

フォスファイ

「……………ん？(あれ？)」(なにやら違和感が……………)

ハック

「でもよ〜」

「暗殺者って本当にいるのか〜？」

「本当に女王が狙われているのなら、もっと国中大騒ぎなんじゃないか〜？」

シーラ

「……………(ぶんぶん)」

頭を左右に振る

ハック

「そうか〜〜？(汗)」

「まあ、シーラがそこまで言うのなら……………そうなんだろっけど(大汗)」

フォスファイ

「……………(汗)」(なんだ!?)

「ねえ、アメトリン……………(ひそひそ)」

「アクロとハツクさん……………変じゃない?(大汗)」

「なんか、一人で喋って、一人で納得してるよ(ひそひそ)」

アメトリン

「はあ〜?(一人って……………)」

「フォスファイこそ、何言ってるんだよ?(汗)」

「シーラの話……………ちゃんと聞いてる〜?(しっかりしろよ)」

フォスファイ

「……………え?(大汗)」

4コマ

シーラ

「……………(きよろっ)」

突然、フォスファイに視線を

向ける

フォスファイ

「ひゃっ!?(びくっ!?)」

シーラ

「……………(じい〜っ)」

無言でフォスファイを見

つめる

アクロ

「なるほど……………確かに(うんうん)」

「ってことだ、フォスファイはその方向で動いてほしい」

フォスファイ

「ちよつ、その方向って・・・何!? (大汗)」

「さつきから、みんな 変だよ!!! (どきどきどき)」

ハツク

「おいおい、もうおねむなのか〜 (苦笑)」

「シーラの言ったように」

「招き猫と仲良くなったお前がフローラに近づき」

「館の中での様子を探ってくるんだぞ (いいか?)」

フォスファイ

「いやいやいや (汗)」

「さつきの間で、そんな内容が語られていたとは驚きだけど」

「問題はそんなところじゃなく!!! (大汗)」

「・・・ (じくり)」

「シーラさん、一言も喋ってないよね・・・ (どきどきどき)」

ハツク

「・・・は? (大汗)」「マジで寝ぼけているのか?」

アメトリン

「あはははっ (笑)」

「フォスファイ、マジで変」 (爆笑)」

アクロ

「二人とも・・・ (やれやれ)」

「フォスファイは、招き猫の館の潜入調査で疲れているんだ」

「失礼なことをいわない! (汗)」

「・・・フォスファイ」

フォスファイ

「はい！（汗）」

アクロ

「今晚のフローラさまの警護はオレたちでやるから」

「お前は、もう休め・・・」

フォスファイ

「そ、そんな・・・（汗）」

アクロ

「その代わりに・・・」

「明日からはいろいろがんばってもらおうからな（にこっ）」

フォスファイ

「えっ、あゝ・・・はい（にこり）」 しぶしぶ

シーラ

「・・・（じいゝゝっ）」 フォスファイを睨みつけ

ている

コメント

フォスファイが留守の間に何かあったのか！？（大汗）

第90話 真夜中の侵入者

4コマ劇場 アイオライト―450・・・2010/12/30
シリーズ3

タイトル「真夜中の侵入者」

1コマ

龍の巢、フォスファイの部屋にて・・・

フォスフォファイライト

「う〜ん・・・（かちゃっ、するする）」
装着や服を脱いで
下着姿になる

「みんなが動いているときに、あたしだけ寝るなんて」

「なんだか気が引けるな〜」（大汗）

「でもまあ、寝ちゃうんだけどね〜」（苦笑）

説明文「フツ・・・、ギシッ」
照明を消してベッドに入る

数十分後・・・

フォスファイ

「・・・（ぐるっ）」
眠れないのか、何度も寝返り
をうつ

「・・・それにしても（ぼそっ）」

「さっきのアクロたち、変だったな〜」（汗）

「・・・」
シーラとのやりとりを思い出している

「あのおとき、シーラさんは一言も喋っていなかった（間違いない）」

「なのに、アクロたちはシーラさんが喋っているかのように振る舞
っていた・・・（大汗）」

「・・・あたしが招き猫の館にいるとき」

「事前打ち合わせでもしておいて、びっくりさせようって魂胆だったのかな」(うーん)」

「・・・」

「・・・ふあーっ(ねむねむ)」可愛いあくび

「いま考えても・・・仕方ない ことだよね・・・」(ぼおっ)」

「明日、アクロに確認して・・・みて・・・」

「それでも・・・ダメなら・・・」

「・・・、パロットに・・・」

「・・・すうっ、すうっ・・・」 眠りに落ちました

2コマ

さらに数十分後・・・

効果音「ぎしっ、ぎしっ・・・」 ベッドが軋む音

フォスファイ

「・・・(ぼおーっ)」

「・・・ん？(・・・あれ?)」

「なんか・・・、人の・・・気配が・・・(すうっ)」 ゆっ
くり瞳を開ける

突然の登場

???

「・・・」

説明文「謎の人影が被さるように馬乗りとなり、フォスファイの寝顔を見下ろしている」

フォスファイ

「!!!!(びくっ!)」

「きゃ!!!(がばっ)」 悲鳴を上げようとした瞬間、もの凄
い力で口を押さえつけられる

「んんんー!ー!ー!ー! (涙)」 (じたばたじたばた)

「ひっ! (ひたっ)」 首筋に冷たい刃物が当てられる

???

「大人しく・・・して(ぼそっ)」

フォスファイ

「この・・・声!(汗)」

「・・・女の子!?(どびっくり)」

「・・・(じい~~~~っ)」 だんだん暗闇に目が慣
れてくる

「あはわっ!!! (大汗)」 あなたはと言いたいらしい

シーライト?

「・・・ふっ(ギロリ)」 フォスファイを睨みつける

3コマ

フォスファイ

「んんん、んー!ー!ー!ー! (じたばたじたばた)」

シーラ?

「・・・(ちゃきっ)」 刃物を首筋に押しつける

「騒いだら・・・殺すから・・・(そっ)」 ゆっくり口か
ら手を退かせる

フォスファイ

「ぷはっ！(ぜえぜえ)」 大きく息を吐く

「あ、あなた・・・シーライト さん!?(汗)」

「どうして・・・、いったい何を・・・うっ!(痛っ)」

首

筋に一筋の血が流れる

シーラ?

「だから・・・(ぼそっ)」

「静かに・・・して(ギロリ)」

フォスファイ

「・・・(大汗)」

「・・・わかった(こくり)」 ゆっくり頷く

「それで・・・」

「こんな夜更けに、何の用かしら?(汗)」

「まさか、夜這い ってわけでもないんでしょ?(じいっ)」

シーラ?の様子を窺う

シーラ?

「あなたには、わたしの術が効かないようだから・・・」

「これは、警告です・・・(ぼそっ)」

フォスファイ

「け、警告・・・?(どきどきどき)」

シーラ?

「冒険者パーティ、ドラゴンファンゲ・・・」

「あなたたちは、わたしの命令に従っていればいい・・・(ギロリ)」

「余計な詮索は不要・・・」

「さもなくば 死が待っていると思え・・・(ぼそっ)」

フォスファイ

「なっ!?(どびっくり)」

「それって、どういう意味……うっ!(痛っ)」
再び首筋に痛みが走る

シーラ?

「詮索は不要と言ったはずだ……(ギロリ)」
刃物をフォスファイに押しつける

フォスファイ

「わ、わかった……(がたがたぶるぶる)」(この子 本気!?)

4コマ

シーラ?

「これは警告……(すーっ)」
そっとフォスファイから距離を取る

「そして、あなたのためでもある(ぼそっ)」

フォスファイ

「ちよっ!(がばっ!)」
半身を起こす
「そんなんじゃない!?」

シーラ?

「いい?」

「これは警告……(ぼそっ)」
「次は無いと思いなさい……(ふっ)」
陽炎のように暗闇に姿が溶け込む

効果音「がばっ!」

フォスファイ

「ま、まって!」(叫び) 「勢いよく半身を起す

「……………」(ぼお〜) 「寝起きで頭が回らない

「……………」(きよろきよろ) 「辺りを見回す

「……………」(さすりさすり) 「首筋を確認するが傷跡

はない

「…………あれ?」(汗) 「いつの間にか窓の外は明るくなっ

ている

龍の巣、1階の共同スペースにて……

シーラ

「……………」(ずずず) 「テーブルに着いてお茶を飲

んでいる

フォスファイ

「……………」(じい〜) 「階段を降りる途中で、

シーラを発見

シーラ

「……………」(?) 「フォスファイの気配に気づく

「……………」(しゅたっ!) 「手をかざして挨拶する

フォスファイ

「あ、おはようございます……………」(ぺろろ) 「(どきどきおど)

シーラ

「……………」(ずずず) 「再びお茶を飲む

フォスファイ

「……………(大汗)」(べつに変わった様子はない…………)

「……あれ?(えっ?)」

「もしかして 夢オチ!? (どきどきどき)」

効果音「ずがが—————ん!!」

コメント

シラって、ほんと何者なんでしょうね? (苦笑) よく
わかっていません

第91話 基本、いい人です

4コマ劇場 アイオライト | 451.....2010/12/31
シリーズ3

タイトル「基本、いい人です」

1コマ

早朝、サンストーン（招き猫）の館にて・・・

エルバイト 二階から降りてきた

「ふあああ~~~~（ねむねむ）」 大あくび

「あゝ、眠っ・・・（ぼ~~~~っ）」

「・・・・・・（う~~~~ん）」 なにやら考えている

「成り行きとはいえ、オレがこんな冒険者パーティに入ることになるとはな〜（苦笑）」

「元々はシンセティックさんにお近づきになるため・・・」

「そして、隙を窺って 例のアイテムを手に入れるために・・・

（にやり）」

「・・・・って（なんだ!?!）」 一階へ下りた瞬間、足裏に違和感を感じる

効果音「ずりっ・・・、すて~~~~ん!!!」 何かを踏みつけて、豪快にすっ転ぶ

エルバイト

「わぎゃ~~~~!!!（大泣き）」 後頭部を階段の角

で強打する

「うおおお~~~~!!!（涙）」 七転八倒（笑）

「って、この微妙な時期にこんなネタ使ってるんじゃないやねええええー

「……………! (叫び)」

天の声「受験生のみなさん……ごめんなさい(ぺこり)」
気にしないでください(爆)

エルバイト

「ちきしょーっ(さすりさすり)」 後頭部をさすりながら立ち上がる

「いったいなんだっていうんだ……(涙)」
「ん……? (汗)」 何かに気づく

説明文「エルバイトの足下には、小さなビー玉が転がっていた」

2コマ

エルバイト

「ちっ……(怒)」 ビー玉を拾い上げる

「誰だよ、こんなところにビー玉転がしてるヤツは……(むかむか)」

「打ち所が悪かったら、あの世行きだぞっ!! (激怒)」

「……………(じい……っ)」 ビー玉を睨みつける

「この〜ビー玉め……っ!(イライラ)」 だんだん腹が立つてきた

「てめえ〜なんか、どっかに飛んでいきやがれ……!! (ぶうん!)」 ビー玉をおもいつきり投げる

効果音「びゅー……ん、かこーん!」 壁にぶつかって跳ね返る

「ぶうっっっー……ん、ずげっ!」 超加速

しながら柱に当たって弾かれる

「ぶうっっっっっ、ずががががっ!」 凄まじい勢い

で、エルバイトの額にぶち当たる！

エルバイト

「ぎゃふっ、げふっ、うぐっ！？（ごろごろごろ）」 後ろに
倒れ込んで、力無き人形のように床を転がる

「……………（ひくひくひく）」 死にかけのカエルのように、身体を痙攣させている

数分後……………

エルバイト

「……………うぐっ（痛っ）」 なんとか身体を起こす

「こ、このビー玉めえ……………（怒）」

「どうやら、このオレさまを」

「本気で怒らせたようだなああああ！！（うが……………！！）」

無機物相手に本気で怒っています

「よし、わかった……………（ぼそっ）」

「てめえ…なんか、岩と岩の間に挟み込み」

「その上から巨大ハンマーを叩きつけて」

「粉々に砕いてやらあああ……………！！（大激怒！！）」

スファレライト（声だけ）

『ねえパロツッ』

『時の宝珠……………見なかった？』

エルバイト

「……………」

「……………ぬ？（なんだ？）」

パロットクリソベルル（声だけ）

『時の宝珠〜？』

『それって、お前が不思議のダンジョンで手に入れた時空族の遺産だよな！？（汗）』

『あの、見た目ビー玉っぽいヤツ！！（大汗）』

『まさかおまえ・・・無くしたのか？（どきどきどき）』

スファレ（声だけ）

『う〜ん・・・（汗）』

『昨日〜寝るときまでは持ってたと思うんだけど〜』

『その辺に転がっていないかな〜？』

パロット（声だけ）

『つて、なんでそんなに落ち着いてるんだよ！』

『一大事じゃねえ〜か〜！〜！〜！』

スファレ（声だけ）

『まさか、わたしが寝ている間に』

『泥棒に入られた・・・とか？（汗）』

パロット（声だけ）

『いや』

『この館には、悪意を持った者は入ってこれないらしいから』

『おまえが無くしたと考えるべきだろう・・・』

スファレ（声だけ）

『ええ〜〜』

『無くしたって、ど〜にさ〜』

パロット（声だけ）

『いいから探せー！ー！ー！！（叫び）』（一大事だぞ！！）

エルバイト

「……………（汗）」

「こ、これが……時空族の遺産（どきどきどき）」 時の宝珠を見つめる

「売れば一生贅沢して暮らせるという超レアアイテム……」

エルバイトが狙っていたアイテム

「くくくつ（にた〜つ）」

「まさか、こんな簡単に手に入るとは……（にやり）」

「やっと、オレにも運が回ってきたようだな〜」（あははっ）」

4コマ

スファレ（声だけ）

『ど、どうしよう……』

『本気で見あたらない〜』（涙）』

パロット（声だけ）

『つて、絶対に探せ！（がさがざ〜ぞ〜ぞ）』 どのやら探しているらしい

『信用されて、王室から管理を任されているんだぞ！！』（汗）』

『無くしたってことになったら、どんなことになるか……（大汗）』

スファレ（声だけ）

『そ、そんな〜』（涙）』

エルバイト

「売れば、一生贅沢して……（じくり）」 時の宝珠を見つめる

共同スペースにて・・・

スファレ

「無いよ〜（がさがさごそごそ）」 一生懸命探している
「どこにも無いよ〜〜（涙）」

パロット

「館の中を隅々まで探せー！ー！ー！」
「絶対にあるはずだ！ー（がさがさごそごそ）」 同じく探している

エルバイト

「あ〜・・・、スファレ？」

スファレ

「アルバイトさん、おはよ〜（がさがさごそごそ）」 探し続けながら挨拶

パロット

「おい、アルバイト！」
「おまえ、この辺りでビー玉みたいなヤツ見かけなかったか？」
「オレたちいま、そいつを探していて・・・」

エルバイト

「・・・・・・・・・・（どうするよ、オレ！ー！）」 心の中で葛藤
中

「あ〜・・・（汗）」
「もしかして、これじゃね？（ぼそっ）」 時の宝珠を差し出す
「階段下で 拾ったんだけど（しくしくしく）」

スファレ

「えっ？（きよろっ）」 エルバイトの持つ時の宝珠を見る

「それー！ー！ー！ー！ー！ー！（あつたー！ー！ー！ー！ー！）」

「見つけてくれたんだ」（涙）

「アルバイトさん、ありがと〜」（ぎゅ〜っ）

エルバイトに抱きつく

エルバイト

「いや・・・なに（涙）」

「もう、無くすなよ〜」（しくしくしく）

パロット

「じつは、おまえがスファレから盗んだんだったりして・・・（ぼそっ）」

エルバイト

「誰が盗むかー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！（うがー！ー！ー！ー！ー！ー！）（拾っただけだー！ー！ー！ー！ー！ー！）

スファレ

「ちよっ、パロット！（むかつ）」

「アルバイトさんに、変なこと言わないでよねー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！（ぶんぶん！）」

効果音「ずががー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ん！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

コメント

アルバイトさん、時の宝珠を手に入れる・・・最大のチャンス

逃しましたね（苦笑）

第92話 フローラ暗殺計画・・・進行中？

4コマ劇場 アイオライト―452・・・2011/01/01
シリーズ3

タイトル「フローラ暗殺計画・・・進行中？」

1コマ

早朝、サンストーン（招き猫）の館にて・・・

フォスフォファイライト

「え〜っと・・・（汗）」 玄関から入ってくる

「おはようございま〜す・・・（ぼそっ）」

パロットクリソベリル

「ん、フォスファイ」

「おはよ〜」

スファレライト

「・・・って（汗）」

「なに平然と入ってきてるかな〜（大汗）」

「わたしたち招き猫勇者隊とあなたのドラゴンファングは」

「いまも勝負の真っ最中だよね〜？（どきどきどき）」

フォスファイ

「いや・・・、それはそうなんだけど〜（苦笑）」 気まずい

「あたしにも都合つてもものが・・・（大汗）」

パロット

「勝負・・・、都合？（なんだ？）」 勝負のことは聞いてい

ません

「まあ、せつかく知り合いになったんだ・・・」

「二人とも、仲良くしてくれよな」（あははっ）

スファレ

「うう・・・（汗）」

「パロットがそういうなら～～（仕方ないな）」

フォスファイ

「ところで・・・（きよろきよろ）」

「フローライトさまは？」（いま、どちらに？）

パロット

「なんだ？」

「フローラに用があるのか？」

フォスファイ

「あゝ、そういうわけじゃないんだけど」（苦笑）

スファレ

「・・・・・・・・・・・・？（汗）」（もう、いったいなんだっていうのよ）

2コマ

パロット

「フローラなら、まだ自分の部屋で寝てると思うぞ」

「明け方近くまで、シリカさんと護衛のことを話していたみたいだからな」

「一方のシリカさんは、ついさっきユークレースへ報告に行ったけど（汗）」（あの人、寝ないのか？）

スファレ

「さすがはジエムシリカさま」

「それに比べて」

「フローラはお子ちゃまだよね〜」（あははっ）

パロット

「おいおい（苦笑）」

突然の登場

フローラ

「だれがお子ちゃまですか・・・」（ふぁ〜〜っ）「可愛く
あくびをする」

スファレ

「あ、フローラ（おはよ〜）」

「ごめんね〜、騒がしかった〜〜?」

フローラ

「いいえ、それはいいんですが・・・」（おはようございます）
「（・・・）」

「無理矢理に起こされたっていうか〜〜）ねむねむ」

パロット

「ん・・・?」

「無理矢理・・・起こされた?（誰にだ?）」

フローラ

「例のお城に現れた この暗殺者さんに・・・）よっ」と

何かをテーブルの上に乗せる

パロット

「つて、何だーーーーー!? (どびっくり)」

3コマ

説明文「テーブルの上に乗せられたのは、木製で1メートルぐらいの人型を模した人形であった」

スファレ

「うええ、なにそれ・・・(きもっ)」

「妙にリアルな人形だよね〜(大汗)」(一応、女の子の人形・・・?)

「それに・・・、誰かに似ている気が・・・(誰だったかな?)」

フローラ

「あははっ・・・(汗)」

「何者かが人形を遠隔操作していたようですけど」

「寝ているときにいきなり襲ってきてびっくりしたので・・・」

「おもわず壊しちゃいました〜(苦笑)」(どうしましょう)

スファレ

「別にいいんじゃない?」

「乙女の寝室に無断で入ってきたんだもん」

「殺されたって文句は言えないでしょ〜(あははっ)」

フローラ

「そうですよね〜(笑)」

パロット

「つて、そんな話じゃないだろ！（汗）」

「こんなのが現れたんだ・・・」

「確実にフローラの命が狙われているってことだよな！！（大汗）」

「それに・・・」

「このサンストーンの館には、悪意を持つ者は入ってこられないはずじゃなかったのか!？」

フォスファイ

「・・・?」

「・・・えつ、サンストーンの館!?（大汗）」

「招き猫の館・・・じゃなかったの!!!（どびっくり）」

フローラ

「通称は招き猫ですけど」

「本当はサンストーンの館なんですよ」

フォスファイ

「えつ、じゃあ〜（汗）」

「パーティ名もサンストーン勇者隊?（どきどきどき）」

スファレ

「そっちは、いろいろあって招き猫勇者隊・・・（しくしくしく）」

パロット

「だ〜か〜ら〜!!（汗）」

「そんな場合じゃなくなってーーーー!!（うがーーーー!!）」

4コマ

数分後・・・

美咲

「なるほど・・・(汗)」

「そういう方法できましたか(汗)」

パロット

「つて、今やこの館は聖域化していて」

「悪意を持つ者は入ってこれないはずだよな！」

美咲

「いや・・・(汗)」

「だって、これ・・・人じゃないですし(大汗)」

「人形自体に悪意があるわけじゃないですから(ぼそっ)」

フローラ

「あ・・・(汗)」

「そういえば、そうか(苦笑)」

スファレ

「・・・(うん)」 何かを考えている

「あ、わかった」

「この人形、シーラさんに似てるんだ」

パロット

「えっ、シーライトにか?(汗)」

「・・・(じいっ)」 人形を凝視する

「確かに、言われてみれば・・・シーラに似ているな(大汗)」

「特に、何考えているのか さっぱりわからないところなんかが・

・・・(ぼそっ)」

フローラ

「ひどっ！！（大汗）」

効果音「ずががーーーーーん！！」

フォスファイ

「・・・シーラさん？（ときどきどき）」 みんなに聞こえないような小声でつぶやく

パロツト

「この人形が襲ってきたのと、シーラが姿を消したこと・・・」
「なにか関係があるのか？？」

フォスファイ

「えっ・・・（大汗）」（姿を・・・消した！？）

美咲

「何にしても、この招き・・・サンストーンの館の中でも」
「安全だとは言えなくなったようですな」（うん）」
「何か、対策を考えないと・・・（大汗）」

パロツト

「そう・・・だな」（うん）」
「フローラは、これから一人きりにならないほうがいいな・・・」
「常に誰かと一緒にいるようにしてくれ」

フローラ

「じゃあ、シリカさんが戻ってくるまで」
「パロツトさんのお側にいますね」（にっこり）」

パロツト

「あゝ、美咲さん……(汗)」
「フローラのこと、よろしく願います(ペーリ)」
部の仕事がある
調査

美咲

「りょくかい (あははっ)」

フォスファイ

「……(汗)」(し、シーラさん……)

「まさか……、今朝の夢も……現実？」(ぼそっ)」(どきどき
どき) それは夢です (笑)

コメント

新年一発目、今年もよろしく願います (ペーリ)

第93話 シーライト

4コマ劇場 アイオライト―453・・・2011/01/02
シリーズ3

タイトル「シーライト」

1コマ

サンストーン（招き猫）の館にて・・・

フォスフォファイライト

「ねえ、パロット・・・」

「その人形に似ているシーラ・・・シーライトさんって

「たしか、あなたと同じユークナイトなんだよね？」

パロットクリソベリル

「えっ？（大汗）」

「シーラのことを知っているのか！？（どびっくり）」

スファレライト

「おお〜」

「シーラって、意外に有名だったんだね〜」

「存在感 皆無なのに・・・（あははっ）」

フォスファイ

「あ〜、そういうわけじゃないんだけど〜」（苦笑）」

パロット

「シーラとは、オレらも忘却の迷宮へ出発するとき初めて会ったんだ」

「まあ、いまは姿を眩ませていて 行方知れずなわけだが・・・」
「つと、こいつは言うべきではなかったな（失言失言・・・）」

フォスファイ

「行方・・・知れず（大汗）」

「じゃあ、どうしてシローさんはドラゴンファングに・・・（ぼそつ）」（なんのため？）

スファレ

「ん？」

「フォスファイさん、何か言った？」

フォスファイ

「ううん、なんでもないよ〜」（苦笑）」

2コマ

パロット

「とにかく、オレはユークレースに行かないといけないから」

「フローラは、シリカさんが帰ってくるまで美咲さんと一緒にいてくれ・・・」

「美咲さん・・・、フローラをよろしくお願いします（ぺこり）」

フローラ

「それほど心配していただくこともないんですけどね」（苦笑）」

この人強いです（笑）」

美咲

「あははっ、桜ちゃんもそう言わないで」（笑）」（パロットさんも心配しているんですから）」

「え〜つと、パロットさん？」

「ユークレーヌのお仕事も大切なのはわかるんですが」

「仕事中も精霊力のコントロールを意識しておいてくださいね」
（精霊力で身体を包み込むような感じですよ）

「修行なんて、その気になればどこでも出来るんですから・・・」

パロット

「わ、わかりました・・・（汗）」

美咲

「それと・・・」

「パロットさん、精霊力のコントロールと同時に周囲の気配を感じるように心がけてください」

「視力を失っているシリカさんが行っていることと同じような感じですよ」

「でないと・・・」

「今回のような『人ではない』存在に、反応することはできませんよ（すーっ）」
不意に窓の外を指差す

パロット

「え？（きよろっ）」
美咲が指差す方向を見る

シーラ似の人形1
外から館の中を観察している

『・・・・・・・・』

『ケタケタケタ・・・』
口のパーツが上下する

パロット

「なっ！？（大汗）」

「同じ人形！！（どびっくり）」

美咲

「ちなみに・・・」

「前話の4コマ目からずっと観察されていましたよ」

「こちらの作戦、人形を操っている相手に筒抜けですね」

パロット

「って・・・気づいてたのなら先に言えっ！（大汗）」

身を

翻す

「ちっ、人が覗いてたのなら絶対に気づくのに！！（くそっ！！）」

館を飛び出す

スファレ

「あっ、パロット！！（叫び）」「（待って、わたしも！！）」

美咲

「スファレさんは行っちゃダメです！」

スファレ

「うっ・・・（汗）」

「確かに、わたしが行っても役に立たないと思うけど」（大汗）」

（むしろ足手まとい？）

美咲

「いや、そうではなく」（なんていうか）

「スファレさんが行くと、ラスボス戦でも勝っちゃいそうですから」

「今のパロットさんの為になりません・・・（大汗）」

スファレ

「・・・（汗）」

「それは、わたしがへっぽ・・・だってこと？（どきどきどき）」

美咲

「……………(じくじく)」

スファレ

「へっぽこバンザイ—————!! (涙)」「うにゃ—————
———) もうやけくそ

効果音「ずがが—————ん!!」

4コマ

湖畔の林にて……

パロット

「はあ、はあ、はあ……(汗)」

「あの人形、どこへ行きやがった~~~~ (大汗)」

「すばしっこい上に気配も無いんじゃない」

「一度見失ったら手出しもできやしない……はっ!？」 何
かに気づく

効果音「がさがさつ……」

シーラ似の人形5

『……ケタケタケタ』

シーラ似の人形2

『……(しゃきーん)』

刃物を取り出す

シーラ似の人形3

『ウケケケツ……』

パロツト

「ちっ……(汗)」 銅の剣を抜刀して身構える

「ぞろぞろと現れやがって……(大汗)」

「いったい何だっというんだ!!(叫び)」

突然の登場

???? 木の陰から姿を見せる

「キサマがユークレースのナンバーズ……パロツトクリソベリル
だな(にやり)」

シーラ似の人形1

『カタカタカタ……』 現れた何者かの肩に乗って耳打ちし
ている

パロツト

「なっ!?(汗)」

「シーライト……なのか?(大汗)」

シーライトに瓜二つな少女

「ほお、既に我が人形の名を知られているとは……(微笑)」

「ユークレースの情報網も侮れないようだな(にやり)」

パロツト

「シーラが喋ってる……!!(どびつき)」 愕然

シーライトに瓜二つな少女

「……人形が喋るわけないだろ(汗)」

「って、おい聞いているか……? (大汗)」

シーラ似の人形1
『ケタケタケタ・・・』

コメント

次回、シーライトの正体が明らかに・・・なるのか！？（大汗）
適当です（笑）

第94話 どうやら『桜のひみつ』ルートに入ったようです

4コマ劇場 アイオライト―454・・・2011/01/03
シリーズ3

タイトル「どうやら『桜のひみつ』ルートに入ったようです」

1コマ

ルルルクオーツ北街地区にある大きな屋敷にて・・・

巨躯な男

「まさか、あんなのようなお偉いさんの方から」

「オレたちに協力の申し出があるとはな〜〜」(にやり)

???

「・・・」 豪華な椅子に座ってふんぞり返っている

巨躯な男

「だが本当に良いのか？」

「オレたち いや、ラリマーに協力するということとは」

「あんたの娘を殺すってことになるんだぞ・・・」(ギロリ)

???

「・・・娘？(ぼそっ)」

「ふん、アヤツの持っている能力を利用するために引き取ったまで」

「娘だと思ったことなど微塵も無いわ・・・」

巨躯な男

「くっくっく・・・」(笑)

「それで王座を奪われていたら世話無いよな」(あははっ)

側近

「き、キサマ!! (激怒)」

剣の柄に手をかける

???

「…………… (すーっ)」

手を伸ばして側近を制する

巨躯な男

「いいだろう (にやり)」

「現国王、フローライト・S・ルチルクオーツ十三世は」

「オレたちが始末してやる……………」

「その後、またあんたがこの国を治めればいい」

「なあ、前国王……………ルチルクオーツ十二世さんよ (にやり)」

ルチルクオーツ十二世

「…………… (ふっ)」

説明文「ルチルクオーツ十二世。戦争孤児だったフローラを引き取り奴隷のように扱っていた前国王」

「フローラの時空力を利用して、天空神サファイアの暗殺を企てた超極悪人」

「過去の時代からフローラ (桜) を追ってきたシヨウウにボコられて国王の座から退いた (笑)」

2コマ

湖畔の林にて…………

シーラ似の人形 1

『ケタケタケタ…………』

パロツト

「人形の・・・名前？（大汗）」（何言ってるんだ？）
「お前がシーライトではないんだな・・・（ギロリ）」

シーライトに瓜二つな少女

「わたしの名前はスペクトロライト・・・」

「ラリマーからやって来た冒険者　人形使い（ふっ）」

パロツト

「そうか、シーラではないんだな・・・」（まあ、普通に喋ってるし・・・）

「では、どうしてフローラを襲った？」

スペクトロ

「答える必要があるのか？（にやり）」

パロツト

「・・・」

「一昨晚、城内へ進入したのも・・・その人形か？」

スペクトロ

「・・・城内？（なんのことだ？）」

「まあいい（すっ）」　両手を前に突き出す

「シーラの存在を知られてしまったては、今後の仕事にも支障が出てくる・・・」

パロツト

「・・・くるか！！（叫び）」　銅の剣を構える

シーラ似の人形1

『ウケケケツ……』

『……（がくっ）』

力無く地面へ崩れ落ちる

パロット

「なっ！！（びっくり）」

3コマ

スペクトロ

「……」

両手を突き出したまま微動だにしない

残りのシーラ似の人形

『……（がくっ）』

同じく地面へ崩れ落ちる

パロット

「ふっ、人形使い……（微笑）」

「てつきり、その人形で戦うんだと思っていたんだがな（ギロリ）」

スペクトロ

「あら？」

「わたしの戦い方は、あなたが想像した通り……（ふふっ）」

「でも……、操ることができるのは……」

「人形だけとは限らない！（はっ！）」
両手を一気に広げる

効果音「シュルシュルッ！」

パロット

「なっ！！（大汗）」
見えない何かが全身に絡みつく

「う、動けない……（くそっ！）」
必死にもがく

「なんだこれは……！？（いったい何が……）」

スペクトロ

「あらあら」

「精霊力の操り糸も視認できないだなんて」

「ルチルクオーツの冒険者も、たかが知れているみたいね・・・
ふっ」

「こんなヤツがナンバーズだっていうのだから」

「ユークレースなんて、それほど警戒する必要も無かったかしら
あはははっ」

パロット

「せ、精霊力の・・・操り糸!? (きよろきよろ)」「まったく見えねえ・・・」

「ちっ! (汗)」

「てめえ卑怯だぞ、放しやがれー! (うおおおお!!)」
力を込めて振り払おうとする

4コマ

スペクトロ

「何が卑怯なものか・・・(にやり)」

「ラリマーは、このルチルクオーツのように一都市集中型の国ではない」

「数多くの地方都市が存在し、それらは常に魔物の驚異に曝されている」

「そのため、冒険者の質もこの国のソレとは比べものにならないが
な・・・(微笑)」

「くくく・・・、少し話が脱線してしまったみたいだが」

「これもまた、立派な戦術の一つ・・・」

「あなたのように、卑怯だなんだとほざくだけの冒険者は」

「ラリマーでは、生き残ることすら難しいでしょうね! (あっはっはっ)」

パロツト

「うっ……(汗)」

「正論過ぎて、言い返すことができねえ……(大汗)」(ちきしょ〜！)

スペクトロ

「さてと……」

「名残惜しいけど、そろそろお別れの時間ね……(ふっ)」

パロツト

「……殺す気か？」

スペクトロ

「いいえ……」

「あなたには、わたしの人形になってもらおうかしら……(にやり)」

パロツト

「に、人形だと〜〜(汗)」(なに言ってるやが……)

「うぐっ!?(大汗)」

「うわあああああー！ー！ー！(大激痛)」
後頭部に激痛が走る

効果音「ずる、ずるずるっ！」
パロツトの首筋から、見えな

い精霊力の管が皮膚の下へと潜り込む

スペクトロ

「大丈夫……」

「あなたの身体は、わたしが上手に操ってあげる」

「そして、あなたの手で あなたの仲間を・・・」
「フローライトを殺してあげるわ(ふふふっ)」

パロツト

「ちよっ、冗談!? (汗)」(痛っ————!)

「おまえ、なにマジになってるんだよ!! (大汗)」

「これ、4コマ・・・ジャンルはコメディー!!」 一応、ジ
ヤンルはファンタジーです(爆)

スペクトロ

「なに言ってるのかわからないけど・・・(汗)」

「神経と操り糸が繋がれば、そんなどうでもいいことを考える必要もなくなるわ」

「そう・・・、何もね・・・(にやり)」

パロツト

「うおおお————!! (叫び)」

「やめる————!! (うが————!!)」

突然の登場

???

「はあ————!! (斬!)」 見えないはずの操り糸を
一刀両断!

スペクトロ

「なっ!?(どびっくり)」

パロツト

「うはっ・・・(がくっ)」

操り糸から解放されて、地面に

へたり込む

「はあ、はあ、はあ……（きよろ）」 力なく見上げる

「……し、シリカ……さん？（ぼそっ）」

ジエムシリカ

「……（ギロリ）」（ずじじじーっ！） 強

大な精霊力が全身を包み込んでいる

コメント

シリカさん、もちろんかっくんを抱っこしています

第95話 元気そうに見えても

4コマ劇場 アイオライト―455・・・2011/01/04
シリーズ3

タイトル「元気そうに見えても」

1コマ

湖畔の林にて・・・

ジェムシリカ

「……………（ずいずい……っ!!）」 強大な精

霊力が全身を包み込んでいる

スペクトロライト

「くっ、ユークレースのナンバーズ第3位・・・ジェムシリカ！（
大汗）」

パロットクリソベリル

「し、シリカ・・・さん（汗）」

「どうしてここに・・・？（大汗）」

シリカ

「招き猫の館へ戻る途中・・・」

「パロットくんの匂いを感じて追ってきました！」 最初から
覗いていた

パロット

「に、匂い・・・ですか!？（どびっくり）」

シリカ

「しかも、知らない女性の匂いも一緒に……（うるるっ）
「パロットくん、わたしというものがありながら……」（涙）

パロット

「って、前々から聞こうと思ってたんですが」

「シリカさんは、オレをどうしたいんですか……!?」（叫び）

シリカ

「いや、べつに　どうしたいって……（汗）　構ってほ
しいだけ

「と、とにかく!」（大汗）

「さきほどのお話を纏めると」

「あなたはわたしたちの敵……ということでもありますね？」

（びしっ!）「　スペクトロを指差す

スペクトロ

「うっ……（汗）」

「凄まじいプレッシャー（大汗）」

「これが　真のユークナイト……（どきどきどき）」

パロット

「って、オレは偽なのかよ……!（うが……!）」

効果音「ずが……!……!……!……!……!……!……!」

2コマ

スペクトロ

「だが、たとえユークナイトとはいえ……」

「わたしの見えない糸にかかれば……!（とりゃ……!……!）」

両手を複雑に動かす

シリカ

「……………(ひょい、ひょい)」

身体を素早く動かす

スペクトロ

「なっ!?(どびっくり)」

「ちっ、これなら!!(どうだ!)」

手を一気に振り上げる

シリカ

「…………ふん!(ふう〜ん!)」

剣を真横に一振りして、迫

り来る精霊力の操り糸を切断する

スペクトロ

「くっ…………(大汗)」「(こいつ…………、盲目のはずなんじゃ…………)

シリカ

「……………(ぐっ、びゅーっ!)」

身体が沈み込

み、一瞬でスペクトロとの距離を詰める

「はあああ————っ!(ずげっ)」「

スペクトロ

に横蹴りを喰らわす

スペクトロ

「げはっ!?(ぞっぞっぞっ————)」

両腕で辛うじて防御

するが、その衝撃で吹き飛ばされる

「……………(じ〜〜ん)」「

腕が痺れる

シリカ

「あなた…………」

「もしかして、わたしを試しているのかしら？（ぼそっ）」

スペクトロ

「……………（ばぼっ!）」
両手を無理矢理に動かす

シーラ似の人形たち

『…………カタカタカタッ』
まるで生き返ったかのように動き出す

3コマ

パロット

「くっ！（ちゃきっ）」
銅の剣を構える

シリカ

「……………（ずいっ!）」
精霊力が高まる

スペクトロ

「ふっ……………（微笑）」
「ここは、引いた方が良さそうね……………（ぼそっ）」
シーラ
似の人形×4がスペクトロの前に立つ

パロット

「逃げる気か!」（叫び）」

スペクトロ

「ふふふっ、命拾いしたようだなパロットクリソベルル……………（にやり）」
「次に会うときは、必ずわたしの人形にしてあげる（とん!）」
後方へ一飛びして姿を隠す

パロツト

「ま、待てっ！！（叫び）」

慌てて追いかけてよとす

シリカ

「うっっ！！？（汗）」 その場に崩れ落ちる

「げほごほっ、がはっ！！（ぺちやっ！）」 大量の血を吐き出す

パロツト

「なっ！！（どびっくり）」

「シリカさん！！（大汗）」

倒れそうになるシリカを支える

4コマ

シリカ

「あゝ、少しばかり・・・無理をしすぎたようですね（あははっ）」

パロツト

「無理って・・・（汗）」

「忘却の迷宮で、美咲さんに治してもらったんじゃないんですか！？（大汗）」

シリカ

「うん・・・」

「それは秘密です（えへっ）」（だらだらだら） 口元から血が流れている（笑）

パロツト

「シリカさん！！（誤魔化さないてください！）」

シリカ

「はあ、はあ、はあ……（冷や汗）」

「パロツトくん……」

「いまのあなたでは、あの人形使いには勝てない（ぼそっ）」

パロツト

「うぐっ……（汗）」

「って、そんなことより！」

「シリカさんの身体のこと……（大汗）」

シリカ

「パロツトくん!!（叫び）」

「……（はあ、はあ、はあ）」

「わたしが言えることは一つだけ……（じい〜っ）」
パロツトを見つめる

パロツト

「……（じくり）」
真剣な雰囲気を感じ取る

シリカ

「調査部のお仕事……」

「完全に遅刻ですよ（ぼそっ）」

パロツト

「しまったーーーーー！（大汗）」

「無遅刻無欠勤で通そうとおもってたのにーーーーー！！（叫び）」

シリカ

「ふう〜……（汗）」

「なんとか誤魔化せた〜〜 (やれやれ)」

パロット

「って、そんなわけないでしょ!!!(うがーーーーっ!!)」

シリカ

「ひゃっ!!!(え〜〜ん!)」

効果音「ずががーーーーーん!」

コメント

スペクトロの名前を考えるためいつもの宝石リストを眺めていた
ら『アルバイト』って鉱物を見つけた(大汗)

じゃあ、いまから『エルバイト』の名前を『アルバイト』にして
もOKか?(笑)

第96話 意味もなく・・・どつきりイベントその2

4コマ劇場 アイオライト―456・・・2011/01/05
シリーズ3

タイトル「意味もなく・・・どつきりイベントその2」

1コマ

ユークレース、調査部の事務室にて・・・

パロットクリソベルル

「……………(うーん)」 前回の4コマで、シリカから
全てを聞き出した

チャロアイト パロットを補佐している女性調査員

「ん……………」

「パロットさん、どうされましたか？」

パロット

「なあ、チャロアイト」

「忘却の迷宮の調査」

「あれ、どうなった？」

チャロアイト

「あ、はい……………」

「昨日のお昼過ぎ、アンバーを含めた調査員5名が」

「忘却の迷宮へ向けて出立しました」

パロット

「っつて、おいおい…!(汗)」

「あんなことがあったばかりだつていうのに」
「また調査に行ったのか！？（大汗）」

チャロアイト

「はい」

「目的の一つだった、シリカさんの毒素は前の調査で何とかかなりま
したが」 本当は解決していない

「今年のナンバーズ決定戦は、あの迷宮で行われることになってい
ます」

「迷宮の事前調査は、調査部でも最優先になっているんですよ」

パロット

「最優先つて言つたつて・・・（汗）」

「唯一の生き残りであるチャロアイトが一番よくわかっていると思
うが」

「あの迷宮は危険過ぎる」

「ナンバー5の実力者でもあるペタライトのじいさんでもやられて
しまったんだぞ！（大汗）」

チャロアイト

「ああ、その点については心配いりません」

パロット

「ぬ？（汗）」

2コマ

チャロアイト

「今回は、あの古の巨大魔蟲に対抗すべく」

「スペシャルなアイテムを持っていったようですから」

パロツト

「うっ……(大汗)」

「まさか、それって シンセティック・カノン……か？」

チャロアイト

「い、いいえ(汗)」 前回吹っ飛ばされたのを思い出した

「シンセティック・カノンではありませんよ(苦笑)」

「まあ、ある意味惜しいですけどね(あははっ)」

パロツト

「……惜しい?(汗)」

チャロアイト

「え〜つと(ごそごそ)」 箱の中を探している

「たしか、一つ残っていたと……」

「ああ、ありました(ぱっ)」 何かを取り出す

パロツト

「そ、それは!?(大汗)」

チャロアイト

「石ころ帽……げふげふっ!(じゃなかった!)」

「シンセティック・キャップ……(チャララチャツチャチャー)」

「石ころみみたいな帽子

「このシンセティック・キャップは、名前の通りシンセティックさんが創った発明品で」

「かぶることで、道ばたの石ころみたいに誰も気にしてくれなくなるんですよ」

パロツト

「いやいやいや！（汗）」

「それって、間違いなく未来からやって来たネコ型ロボットの秘密道具……（大汗）」

チャロアイト

「試しにかぶってみますね〜（かぼっ）」 帽子をかぶる

パロット

「うおっ！？（大汗）」

「チャロアイトが消えた！！（どびっくり）」

3コマ

チャロアイト（声だけ）

『えへへ〜っ』

『凄いでしょ〜〜』

『これ以外にも、纏うことで身体が透明になるシンセティック・マントや』 透明マント？

『その他にも、シンセティックさんが創ってくれた』

『色んなスペシャルアイテムを持って行ったみたいですから』

『なにも心配はいらないと思いますよ〜』

パロット

「うむ〜（汗）」

「確かに、もの凄い発明品だとは思って……（大汗）」

「全てシンセティック印^{しんせ}つてのがすげえ気になる（ときどきどき）（爆発とかしないか？）

「それに……」

「姿が認識されなくなるだけで、気配までは消せるわけじゃないだろっ。」

チャロアイト（声だけ）

『むっ！』

『そこまで言うのなら~~~~（たっ たっ たっ）』

事務所の中

を走り回って隠れる

『パロツトさん・・・』

『わたしがどこにいるか、わかりますか』

パロツト

「・・・はあ〜（やれやれ）」

「一体何をやらせるんだか・・・（汗）」 ゆっくりと立ち上がる

「え〜っと（きよるきよる）」

「だから、姿は見えなくても」

「気配でどこにいるのかは〜」

「・・・」

「そこだ！！（がばっ）」 突然、振り返って手を伸ばす

効果音「ふにやっ」

チャロアイト（声だけ）

『きゃっ!?!?（どびっくり!）』

4コマ

パロツト

「・・・?（ふにやっ）」 手を動かす

「な、なんだこの柔らかな・・・物体は!?!?（ふにやっ）」

チャロアイト（声だけ）

『ひゃひっ!?!?（大汗）』

『ちよちよっ!?!?（ぱぱっ!）』 後方へと飛び退く

「……………(うんうん)」 帽子を取って姿を現す

「え、え〜っと……………(ぽっ)」 なぜか顔が真っ赤

「さすがは〜パロツトさん(えへへっ)」

「簡単に見つかっちゃった〜(あははっ)」

パロツト

「……………(わきわき)」 自分の手をじーっと見つめる

「なあ、チャロアイト〜(ぼそっ)」

チャロアイト

「あわわっ!(あせあせ)」 顔が真っ赤

「っと、こんな感じでシンセティックさんの創ったスペシャルアイテムがありますから」

「調査に行つたみんなも安心なんですよ〜(うんうん)」(値段は高かったですけど)

パロツト

「いや、だから気配でどこにいるかだいたいわかる……………っていうか〜(汗)」

「さっき触ってしまったのって……………(大汗)」

チャロアイト

「いやっ、あの……………(どきどきどき)」 顔が真っ赤

パロツト

「あ……………(汗)」

「もしかして、謝っておいた方が……………良いのかな?(うん……………)」

チャロアイト

「なななっ、なんのことですかーーーー！！（あははっ！！）」
もう自棄になっている

「パロツトさんから謝ってもらうことなんて」

「何にもありませんよ~~~~！！」
でも、やっぱり顔が真っ赤（笑）

パロツト

「だ、だが・・・（大汗）」

チャロアイト

「あああっ！（涙）」

「もうその話題にはふれないでーーーー！！（うにゃーーーー
ーーーー！！）」

効果音「ずがーーーー！！ん！！」

コメント

いったい何があったのかは・・・ご想像にお任せします（爆）

第97話 ラリマーの一件も大切だが・・・

4コマ劇場 アイオライト―457・・・2011/01/06
シリーズ3

タイトル「ラリマーの一件も大切だが・・・」

1コマ

ユークレース、調査部の事務室にて・・・

パロットクリソベルル

「なあ、チャロアイト」

チャロアイト

「はひっ!?(びくっ) な・・・、なんででしょう?(どきどきどき) 前回のイベントを引きずっている?(笑)

パロット

「・・・・・・(うう) あゝ、ちょっと聞きたいんだが(汗)

この調査部に、隣国のラリマーについての資料ってあるのか?(大

汗) 若干、気まずい

チャロアイト

「え・・・、ラリマーの資料ですか? そうですね(資料棚をチェック中) 本格的に調査をしたわけではないので、ごく一般的な情報しかありませんが、それでもいいですか?(ペラペラ) 取り出したファイルをめくっている

パロット

「ああ、よろしく頼む……」

ニコマ

チャロアイト

「え〜っと、ラリマーとはルチルクオーツから見て西側に隣接する国で、ちょうど砂漠地帯のエリアD……その先にある山岳地帯エリアFを越えたところにあります」

パロット

「ハーキマー山脈の向こう側か……」

チャロアイト

「このルチルクオーツのような一都市集中型の国ではなく、幾つもの小さな国が集まって一つのラリマーという大国を構成しているようです。政治なんかも、各小国にいる代表によって行われているみたいですね〜」

パロット

「……らしいな（ぼそっ）」 スペクトロライトに聞いた

チャロアイト

「……？ そのため、騎士団のような存在は珍しく、魔物などを排除しているのは各小国に所属する冒険者のようですね〜」

パロット

「……」

チャロアイト

「また、各小国同士での小競合いが絶えないため、冒険者のレベルも高いと言われています。と……、ラリマーについてわかってい

るのは、こんなところですよ」

パロツト

「うーん……。目新しい情報は、無さそうだな〜」（汗）」

チャロアイト

「すみません……。しゅん」
がっかりされて哀しい

パロツト

「いや、チャロアイトが謝ることなんてないだろ？（大汗）」

チャロアイト

「それは……。そうなんです〜（うーん、どうしようかな〜）」

パロツト

「ん？ それ以外に何かあるのか？」

3コマ

チャロアイト

「えっと〜……。これは調査員が確認したわけじゃなく、噂の域を出していないことなんですけど……。汗）」

パロツト

「なんだ？」

チャロアイト

「じつは、一つの小国が他を支配下において……。ラリマーが統一されたという噂があるんですよ〜（汗）そして、その圧倒的な軍力をもって、周辺諸国へ戦争をしかけようとしているとか・・・（大汗）まあ、そんな噂があるってだけなんですけどね〜（苦笑）」

笑)「(恐いですよね)」

パロット

「……(汗) 本当に、噂だけならいいんだがな……(ぼそっ)」

チャロアイト

「え？ パロットさん、どうかしましたか？」

パロット

「いや、なにも……。ただ、事が事だけに無視できるような内容でもない。王都内だけの調査でいいから、できるだけ情報を収集しておいてくれ」

チャロアイト

「わ、わかりました(大汗)」

4コマ

ユークレース、サポート部の事務所前にて……

パロット

「うん……(汗) ラリマーの人形遣い、スペクトロライトの動向も気になるところだが……まずはこつちを何とかしないとけないよな……(大汗) ……(ぼそっ) (どきどきどき) えーっと、失礼します……(ぼそっ)」 扉を開けて事務所に入る

効果音「ざわざわざわ」 パロットを見てサポート員たちがざわめく

突然の登場

?????

「静まりなさい！（ぴしっ）……………（無言で事務所内を見回す）……………さて（パロツトと向かい合う） 調査部のトップ代行がこのサポート部にいったい何の用かしら？ パロツトクリンベリル……………（ギロリ）」

パロツト

「うぐっ……………（汗） ターフェ……………アイトさん（この人苦手だ……！） え、え……とですね（ときどきどき） シリカさんのことで ターフェさんに少し相談が……………（あははっ）」

ターフェアイト ユークナイト・ナンバー12でサポート部のトップ

「シリカの……………ことで？……………（じい……っ）」

パロツトを凝視する

パロツト

「あ……………（大汗） やっぱり、出直してきます！！（涙）
嫌われているのを理解しています

ターフェ

「わかりました……………（ぼそっ） では、こちらの会議室で……………話を聞かせていただきましょうか？（ギロリ）」

サポート員A

「ちよっ……………（汗） あんなに機嫌の悪いターフェさん、はじめて見たよ……（ぼそっ）」

サポート員B

「いつもは、笑顔を絶やさない優しい人なのに・・・(汗) あの
パロットって人・・・どうなっちゃうんだろ？(ぼそっ)」

サポート員A

「うん・・・(大汗) 間違いなく、五体満足ではられないだ
ろうな～～(ぼそっ)」

パロット

「あつっあわわっ！(がたがたぶるぶる)」

ターフェ

「早く来なさい！！(激怒)」

パロット

「はひっ！！(びくっ！！)」

説明文「ターフェは、シリカが大変なことになっているのも係わら
ず、ギルドを離脱したパロットを憎んでいます」

コメント

ターフェさん、お久しぶりです (笑) 前回登場は第37

話？

第98話 ターフェアイト

4コマ劇場 アイオライト―458・・・2011/01/07
シリーズ3

タイトル「ターフェアイト」

1コマ

ユークレース、会議室にて・・・

パロットクリソベリル

「え、え〜っと・・・(汗)」「きよるきよる(

「やけに、シンとしてますね・・・(どきどきどき)」「

ターフェアイト

「そうね〜」

「この会議室は、完全防音になっているから・・・」

効果音「かちやつ!」

パロット

「ど、どうして扉に鍵をかけるんですかー!?!?(大汗)「

ターフェ

「この会議室へ誰も入って来れないようにするために決まっている
じゃない(ふふふつ)「

「もちろん、中で何があっても・・・」

「音が漏れないようにするためでもあるんだけど・・・(にやり)「

パロット

「ちょーーーーーっ！！（大汗）」

「まさか、本気でオレを殺そうと!?（涙）」

ターフェ

「さあ〜て・・・（微笑）」

「もしかして、良い事があるかもしれないわよ〜」（にやり）」

（ドキドキ〜な展開）

パロット

「ぜってーーーーー嘘だ!!（うにゃーーーーー!!）」（殺されるーーーーー!!）」

ターフェ

「って、あなたはわたしを何だと思ってるのよーーーーー!!」（怒）」

「ちょっぴり傷つきました」

効果音「ずがーーーーーん!!」

2コマ

数分後・・・

パロット

「と、いうわけで・・・」

「いまだ五年前に受けた古の巨大魔蟲の毒素がシリカさんの身体に渦巻いています」

「それをなんとかしないと、シリカさんの命に関わってくる可能性も！（大汗）」

ターフェ

「なるほどね〜（汗）」

「シリカの発作を目の当たりにして」

「事実を問いただしたわけか〜〜（う〜ん）」

パロット

「あ・・・れ？（汗）」

「既に　御存知で・・・？（大汗）」

ターフェ

「当たり前です（ギロリ）」

「メンバーの健康管理はサポート部の仕事ですから」

「シリカの身体のごことは五年前から把握済みです！（怒）」

パロット

「そ、そうですね〜！（涙）」（びくっ！）

ターフェ

「それで・・・、あなたはどうしたいのかしらパロットクリソベリル？（じい〜っ）」

パロット

「はい・・・」

「オレは、シリカさん視力を治したいと考え」

「ユークレーヌを出て、今期の検定でヒーラーになりました」

ターフェ

「あなたがヒーラーになった程度で視力を回復できるのなら」

「とつくにわたしが治しています（ぼそっ）」

パロット

「うぐっ・・・（大汗）」

3コマ

ターフェ

「あなたは、シリカが失明したことを利用して」
「その責任の重圧から逃れるため、ユークレースを離脱したに過ぎません」

「当のシリカは、巨大魔蟲の毒素に身体を蝕まれていて」
「苦しんでいたというのに（ぼそっ）」

パロット

「逃れるためだなんてそんな！」

「・・・いや（汗）」

「確かに、逃げたことに なるのか・・・（うっん）」

ターフェ

「・・・（へえ）」 素直に認めるとは思わなかつた

パロット

「と、とにかく！」

「シリカさんは、こうしている今でも毒素によって苦しんでいる！」

「だから、それを何とかしたいんだ！」

「もちろん、オレに出来ることならなんだつてする」

「ターフェさん！」

「何か・・・シリカさんを助ける方法はありませんか！？（叫び）」

ターフェ

「・・・（じいっ）」 パロットを凝視する

「はあ・・・（やれやれ）」

「いま分かっていることといえば」

「忘却の迷宮に、毒素を中和させる何かがある……かもしれないという可能性だけ（汗）」

「それ以外では……」

「最近シリカが抱っこしているラブリーアイテムが」

「どういう原理かは知らないけど」

「病状の進行を抑えている……ってことぐらいかな？」

パロット

「忘却の迷宮に……あのぬいぐるみか！！（大汗）」 か
くんのことです

4コマ

ターフェ

「パロットクリソベリル……」

「シリカを助きたい……というのであれば急ぎなさい（ぼそっ）」

「ここ半年で、毒素の影響が急激に進んでいます」

「このまま病状が進めば、シリカの命はあと数カ月ほどしかありません」

パロット

「……って（汗）」

「そんなに深刻な状態なんですか？（大汗）」

「発作以外は、あんな元気な様子なのに……（どきどきどき）」

ターフェ

「普通であれば、身動きも取れない状態でしょうね……」

「でも、表情には出していませんだけ」

「今でも全身には、常人には耐えられないような激痛が走っているはずですよ」

パロット

「し、シリカさん……(うつ)」

ターフェ

「いいですか、パロットクリソベルル……」

「シリカを助けたいというあなたの気持ちはよくわかりました」

「わたしたちサポート部も、出来る限りの協力はいたします」

パロット

「あ、ありがとうございます……(ペリリ)」

ターフェ

「ただし！」

「解決策を何も見つけれられずに時間だけが経過して」

「シリカにもしものことがあれば……」

「そのときは、パロットクリソベルル(ぼそっ)」

「わたしが あなたを殺します(ギロリ)」

パロット

「うつ……(大汗)」(この人のことだから本気だろうな……)

「だ、大丈夫です！」

「どんなことをしてでも、シリカさんを死なせませんから!!」

ターフェ

「ふっ……(にこっ)」

「では、この誓約書にサインを……(ぼそっ)」
一枚の書類を差し出す

パロット

「え〜つと、なにになに? (汗)」 内容を確認中〜

『わたしことパロットクリソベルは、ターフェアイトに何をされても絶対に逆らいません。』

「つて、なんでこんな誓約書が用意されているんですか〜! (大汗)」

「しかも、『何をされても絶対に逆らいません』とあるだけで」

「どこにも、『シリカさんにもしものがあれば』なんて内容が書かれていない!」

「これつて、サインしたら最後・・・」

「ターフェさんの所有物おもちゃになるつてことじゃないですか〜!?! (叫び)」

ターフェ

「・・・・・・」

「・・・ちつ!」 舌打ち

「気づかれたか・・・ (ぼそつ)」 (まさか、サインする前に内容を確認するとは・・・)

パロット

「こ、恐え〜!」

「やっぱりこの人、いろんな意味で恐えええ〜!! (うにゃ
〜!!)」

効果音「ずが〜!」

コメント

こんな計画、いつから準備してたんだろう (笑)

第99話 巷で噂の狩祭り！

4コマ劇場 アイオライト―459・・・2011/01/08

シリーズ3

タイトル「巷で噂の狩祭り！」

1コマ

ユークレースの事務所に・・・

シトリン ユークレースのギルドマスター

「・・・え〜っと（汗）」

「なんですって？（大汗）」

ポルーサイト

「狩りに行くこうぜ（きらりん）」 なぜか歯が光っている

シトリン

「意味がわかりません・・・（汗）」

「狩りってなんですか〜？（大汗）」

サイト

「何を言ってるやがる〜！」

「巷で噂のあのシリーズの最新作〜！」

「国内累計出荷本数が発売から約1ヶ月で400万本を突破したアレだよ」 MHP 3rd?

「400万本って数は、前作では2年もかかったらしいから」

「1ヶ月って、もの凄えよな〜」（あははっ）」

シトリン

「だから、何の話を……（どきどきどき）」

2コマ

サイト

「ふっ……（微笑）」

「冒険者たるもの巨大なモンスターを倒してナンボだろ？（しゃきーん！）」
戦斧を構える

シトリン

「あ……（汗）」

「サイトさん、部屋の中で斧を振り回さないでください」

サイト

「うおー……（ぶんぶんぶん）」
戦斧を振り回している

「巨大モンスターがオレを呼んでいるぜ……」

効果音「ずがが……」

シトリン

「はあ……（汗）」（やれやれ）

「では、このクエストをお願いします……（大汗）」
一枚のリストを差し出す

サイト

「よっしゃ、任せろ……！！（うお……！！）」
リストを引いたくって外へ飛び出す

シトリン

「ふう……（大汗）」

「やっと静かになった(ぼそっ)」 ひどっ!!(笑)

3コマ

溪流にて『ある日、森の昼下がり』・・・

サイト

「き、キノコ発見・・・(ぜえぜえぜえ)」 フィールドを走り回っている

「って、また特産キノコかよーーーー!!(うがーーーー!!)」

「かれこれ40分は走り回っているっていうのに」

「クエスト達成に必要な熟成キノコが1本も見つからねええええーーーー!!!(涙)」

「いや 少し落ち着いて考えてみよう(うぐん)」

「全てのフィールドを回ったというのに熟成キノコが1本も見つからないなんてありえねえ」

「おそらくこの特産キノコを何とかすれば熟成キノコになるはずだ・・・」

「・・・調合か?(ぼそっ)」 ひらめいた

「そ、そうに違いねえ!」

「よし、特産キノコとこれまで手に入れたアイテムを片っ端から調合してやるーーーー!!」

5分後・・・

サイト

「あ、あははっ(苦笑)」

「やべえ・・・(汗)」

「あと5分でクエストが失敗してしまう・・・(大汗)」

「それなのに、調合の組み合わせは全てダメ!!!(涙)」(いった

いどつしるっていうんだ!!」

「どつする・・・、どつするよオレ(ぼそっ)」

「このままじゃ、はじめてのクエストが失敗し・・・って、あれ?
(どきどきどき)」

4コマ

ユークレースの事務所に・・・

サイト

「巨大モンスター狩りだつて言ってるのに」

「オレは、どうしてキノコなんかを探してるんだよーーーー!!
(激怒)」「(うがーーーー!!)」

シトリン

「はい」

「熟成キノコ、確かに5本の納品を確認しました」
「しっか
りと納品」

「サイトさん、おつかれさまです」

「クエストクリアですね」(にっこり)」

サイト

「お、おお・・・(汗)」「(どうもな・・・)」

「つて、そうじゃねえだろ~~~~!!!(だあああ!!)」

「オレがやりたいのは、見上げるほど大きなモンスターを狩ること
なんだよ!!」

シトリン

「それって、いつもやってることじゃないですか?」

「この世界の魔物って、基本は巨大生物です・・・(大汗)」

サイト

「あ……(大汗)」「(そういえば……)」

シトリン

「それにサイトさん……(汗)」

「ここ最近、ストーリー本編に関わっていないからって」

「ヤケになったらいけませんよ……(ぼそっ)」

サイト

「ほ、ほっとけ……!!」「(泣)」「(うにゃ……!!)」

最近、出番無し (爆)

効果音「ずがが……!!」

コメント

また、わかる人にしかわからないネタを使って (苦笑)

400万本も出てるから大丈夫?

第100話 もう一つの聖剣とフェルドスパー

4コマ劇場 アイオライト―460・・・2011/01/09
シリーズ3

タイトル「もう一つの聖剣とフェルドスパー」

1コマ

ルルルクオーツ北街地区にあるルルルクオーツ十二世の屋敷にて・

巨躯な男

「くくくつ、あっはっはっ (笑)」

「それで、スペクトロ」

「死にかけのユークナイトのプレッシャーに負けて」

「おめおめと退散してきたわけか」

「くくつ、ご自慢のお人形も・・・大したことないようだな」

(爆笑)

スペクトロライト

「うるさい黙れ・・・(怒)」

「リプラ・・・」

「お前から殺すぞ(ぼそつ)」

トリプライト

「ぶっ、いいぜ」 (にやり)

「お互いの地区同士・・・協力体制にはあるが」

「この際、どちらが強いかはつきりさせとくのもアリじゃないか

? (さっ) 「大剣に手をかける

スペクトロ

「ほお〜・・・(ギロリ)」

「体力しか脳のない旧世代の冒険者がわたしに勝てるとても思っているのか？」

「それこそお笑いぐさだな・・・(微笑)」

リプラ

「ふん、ぬかせ・・・(ジリジリ)」 ゆっくりとスペクトロとの間を詰める

ルチルクオーツ十二世

「やめんか!!(怒)」

「・・・(ギロリ)」 睨みをきかす

「・・・こんなヤツらをあてにして」

「本当に大丈夫なのか？(ぼそっ)」 小声でつぶやく

スペクトロ

「・・・(じい〜っ)」 ルチルクオーツ十二世を観

察する

2コマ

リプラ

「それで・・・」

「フローライトはどうだ？」

「・・・殺れそうか」

スペクトロ

「・・・(汗)」

「予想以上に手強そうね(ぼそっ)」

「完全に寝ているのを確認して仕掛けたけど」

「殺れると思った次の瞬間・・・」

「逆にシーライトがやられていた（大汗）」

リブラ

「ん・・・？」

「どういうことだ？」

ルチルクオーツ十二世

「フローラには時空能力がある・・・」

「数秒程度なら 時間を止めることが可能だ」

その能力を

利用するためフローラを引き取った

リブラ

「なっ、なんだと・・・！？（大汗）」

スペクトロ

「時空族か・・・（ぼそっ）」 時空能力を持つ者の総称

「ちっ、厄介だな（大汗）」

リブラ

「身動きを取れなくしてから、殺るしかないようだな（うーん）」

「で、それ以外には・・・何か無かったか？」

スペクトロ

「・・・・・・」

リブラ

「ほお、その顔は何かあったようだな（にやり）」

スペクトロ

「・・・ヤツら」

「わたしを見て、シーライトと呼んだ・・・」

リブラ

「シーライトって、その人形のことだろ？（汗）」

「なぜあいつらがお前の人形の名前を知ってるんだ？（大汗）」

スペクトロ

「人形のことではなく・・・」

「わたし自身のことをシーライト・・・シーラと呼んだんだ（汗）」

リブラ

「はあ〜？」

「ますますわけわかんねえ〜な（汗）」

「たしかに、その人形とスペクトロの雰囲気は似ているが・・・（大汗）」

「あいつらの身近に、お前に似たヤツがいるんじゃないか〜？」

スペクトロ

「わたしに似た・・・」

「・・・」

「まさか、あの子がこの国にいるのか？（ぼそっ）」

リブラ

「ん〜？」

「どうした、スペクトロ・・・」

スペクトロ

「いいや、何でもない（微笑）」

「……………(ふっ)」

「もし、あの子がこの国にいたとするのなら」

「いずれ会うこともあるでしょう…」

「我が愛しの妹　フェルドスパーよ　(にやり)」

4コマ

ダンジョン管理協同組合、ルチルクオーツ東三番街支部にて…

シーライト

「……………くちゅん！」

「……………(きよるきよる)」

シンセティック

「あらあら、可愛いくしゃみ　(微笑)」

「誰かがあなたの噂をしているのかもしれないわね」

「フェルドスパー」

シーラ(フェルドスパー)

「…!!(ぶんぶんぶん!)」

シンセティック

「あゝ、この国ではシーライトだったわね(苦笑)」「ごめん、ごめん」

「それで……………」

「あなたから預かっていたこれを受け取りにきたということでは」

― 振りの剣を机に置く

「ラリマーに何か動きがあったってことね？」

シーラ

「……………(くり)」「

シンセティック

「にしても……」

「今更ながら、これってどういうことなのかしら？」

「この剣ってどう見ても……」(汗)

「シーラ、あなたこれをどこで手に入れたの？」(大汗)

シーラ

「……」 無言

シンセティック

「とにかく、これを扱える者は極端に限定されます」(あなたには使えないでしょ?)

「そして、選ばれた者に大いなる力を与えてくれる……」

「預ける人を、ちゃんと選んでくださいね」(にこっ)

シーラ

「……」(こくり) 大事そうに剣を抱える

シンセティック

「聖剣クリソベリル……」(ぼそっ)

「おそらくその剣は、パロットくんが持つクリソベリルの対となる存在でしょう」

説明文「シーラが受け取ったのは、紛れもなく聖剣クリソベリルであった」

コメント

シーライトことフェルドスパーをこの国に連れてきたのはシンセ

チケットです

第101話 暗殺者の行方・・・

4コマ劇場 アイオライト― 461・・・2011/01/10

シリーズ3

タイトル「暗殺者の行方・・・」

1コマ

サンストーン（招き猫）の館にて・・・

シーラ似の暗殺人形

「・・・・・・・・」 無言

スファレライト

「で・・・・・・・・」

「この人形 どうするの？（汗）」

「妙にリアルだから、手足の関節外れると気持ち悪いんだけど・・・

・（大汗）」

フローライト

「う〜ん・・・・・・・・」

「捨てるにしても、不燃物でいいのかな？」

エルバイト

「素材は木なんだから可燃でいいんじゃないか？」

フォスフォファイライト

「えっ、捨てちゃうの！？（汗）」

「これ、かなり出来のいいパペットだよ〜！（大汗）」

スファレ

「出来がよくったって」

「こんなのあっても気持ち悪いだけじゃない・・・(汗)」「(いまにも動き出しそうぞ)」

フォスフォファイライト

「でも～～～(うん)」

美咲

「・・・(汗)」

「フォスファイさんが平然と会話に参加していることを」「もはや、誰もつつこまない・・・(どきどきどき)」

効果音「ずががーーーーーん!!」

2コマ

シーラ似の暗殺人形

「・・・・・・・・」 ピクリとも動かない

フローラ

「うん(汗)」

「やっぱり、人形寺みたいなところに持って行って」「ちゃんと供養してもらった方がいいかも・・・」

エルバイト

「人形寺・・・」

「なんだそれ?(汗)」

フローラ

「あゝ、古くなった人形を集めて供養している・・・って(汗)」

「この聖界に寺なんて無いか」（あははっ）
「たぶんありますよ（笑）」

美咲

「あゝ、桜ちゃん」

「その人形・・・わたしに任せてもらえないかな？」

フローラ

「ああ〜そうか」

「美咲お姉ちゃんの実家って神社だったよね〜」
五千年前の

人間界にあつた樹神社

「人形寺なんか持って行かなくても」

「お姉ちゃんに供養してもらえば」

美咲

「いや、供養とかではないんですが・・・（汗）」

「少し試してみたいことがあつて〜」（苦笑）」

「旨くいけば・・・その人形を操っていた相手の居場所も」

「わかるかもしれませんが・・・（ぼそっ）」

フォスファイ

「えっ!？（大汗）」
ドラゴンファングの目的は暗殺者を捕

まえること

フローラ

「それじゃ〜」

「その人形は、美咲お姉ちゃんにおまかせします」

美咲

「うん」

「悪いようにはしないから・・・」

フォスファイ

「・・・（ちらつ）」 美咲の表情をチラ見

「・・・あつ、わたし用事を思い出しちゃったから」

「ちよつと出てくるね！（あせあせ）」

美咲

「ああ」

「今すぐ見つかるってわけではありませんから」

「そんなに急がなくてもいいですよ（ぼそっ）」 美咲はどち

らの味方でもありません

フォスファイ

「ひゃっ!？（大汗）」

「は、はい!!（ときどきどき）」（もしかして、美咲さんには行動バレバレ?）

スファレ

「んゝ・・・?（なんだ?）」 勝負のことなんか、とつく

に忘れていきます（爆）

3コマ

サンストーン（招き猫）の館が見える屋外にて・・・

アメトリン

「って、どうしてフローラさまの傍から離れて戻ってきちゃうのよ!（もおゝ!）」

フォスファイ

「それどころじゃないって！（汗）」

アクロアイト

「フォスファイ・・・」

「何か情報を掴んだのか？」

フォスファイ

「うん、それがね・・・（汗）」

「って、あれ？」

「ハツクさんは・・・別行動なの？（大汗）」

アメトリン

「あゝ・・・」

「ハツクは1時間ぐらい前」

「館を覗いていた小さな動物・・・みたいなのと」

「フォスファイお気に入りユークナイトを追って、湖の向こう側へ行ったよ」

フォスファイ

「それって、例のパペット！？（大汗）」

アクロ

「パペット・・・？」

フォスファイ

「暗殺者はパペット　操り人形を使ってフローラさまを殺そうと
してみたなの！」

アメトリン

「えっ、あれって小動物じゃなかったの！？（どびっくじり）」（て

つきりネコだと・・・)

アクロ

「ということとは？」

「戻ってこないハックは、暗殺者に捕らわれてしまった可能性が・・・
・ (汗) 」

アメトリン

「ハックマナイト・・・」

「惜しい人を亡くしたね～～～ (あははっ) 」

フォスファイ

「ちよつとー！ー！ー！ー！！ (涙) 」 (冗談でもそんなこと言わない
で～～～！！) 」

4コマ

ルチルクオーツ北街地区にあるルチルクオーツ十二世の屋敷にて・

トリプライト

「で～～～～」

「次はどう動くつもりだ？」

「その招き猫とかいう館へ、一気に攻め込むか？ (にやり) 」

スペクトロライト

「ふっ・・・ (微笑) 」

「それも、面白そうね・・・ (ぼそっ) 」

ルチルクオーツ十二世

「うおほん！ (汗) 」

「あまり表立った行動は控えていただくか……(ギロリ)」

リブラ

「あっはっはっ」

「冗談……冗談だって……」

スペクトロ

「ふふっ(笑)」

「下手に動いたら今後の活動がしづらくなる」

「あくまでも、フロアライトは暗殺の方向……ってね(笑)」

ルチルクオーツ十二世

「くっ、こいつら……(むかつ!)」「(からかいやがって!)」

スペクトロ

「……(すーっ)」 そっと窓際に近づく

「あの館には、まだシーライトが1体残っている(ぼそっ)」

「精霊力の操り糸を通わせれば……再びシーライトを動かすことができる」

「でも、それだけではフロアライトを殺すことはできない……」

リブラ

「ならどうする!」

「ヤツらがクエストに出るまで、気長に待ってっていうのか?」

スペクトロ

「いや……」

「別の方向からアプローチすれば」

「案外、簡単に事が運ぶかもしれない……(ぼそっ)」

「テンの隙間から外を窺う」

力

リブラ

「どれどれ・・・？」 そつとスペクトロの視線を追う

「ほお、それはなかなか楽しそうな提案だな・・・（にやり）」

説明文「屋敷の外には、スペクトロの後を追ってきたハックマナイ
トの姿があった・・・」

コメント

ちなみにスペクトロは、ハックが付けてきたことを最初から気づ
いていました

第102話 上手いこと言い包められて・・・死亡フラグ？

4コマ劇場 アイオライト― 462・・・2011/01/11
シリーズ3

タイトル「上手いこと言い包められて・・・死亡フラグ？」

1コマ

北街地区にあるルチルクオーツ十二世の屋敷前にて・・・

ハックマナイト

「い、いったいどういうことだ・・・？」

「あの不気味な人形を操っていたのは？」

「どう見たって、シーライトだった（汗）」 遠くから見ていたので会話までは聞こえなかった

「しかも、シーラが入っていったこの屋敷って」

「たしか前国王の持ち家の一つだったような・・・」

「ま、まさか フローライトを殺そうとしているのは！？（大汗）」

突然の登場

???

「勘違いしないでください・・・」

「わたくしは、ルチルクオーツ十二世様の命により」

「愛娘であらせられるフローライト様をお護りしようとしていただけですよ（にこっ）」

ハック

「うおあっ！！（どびっくり）（いつの間にか？）」

スペクトロライト

「そんなに驚かなくても(うふふっ)」

「申し遅れました」

「わたくし、ルチルクォーツ十二世様にお仕えしております」

「スペクトロライトと申します・・・(ぺこり)」

ハック

「うおっ!(汗)」

「あゝ、これは御丁寧に・・・(苦笑)」

「つて、スペクトロライト?(大汗)」

「やっぱり・・・シーライトじゃないのか?(どきどきどき)」
「そっくりだぞ」

スペクトロ

「・・・・・・・・(汗)」(またシーライト)

「あなたの知っているシーライトとは」

「おそらく、わたくしの双子の妹・・・フェルドスパーのことでしょ」

ハック

「なるほど、シーラの姉妹か(どつりで・・・)」

スペクトロ

「・・・・・・・・(じいっ)」

「えっつと、冒険者さま?」

ハック

「あゝ、ドラゴンファングの猫戦士・・・ハックマナイトだ!」

スペクトロ

「猫・・・!?（どびっくり）」「この国には、おかしな職業があるんですね・・・」

「で、ではハックマナイトさま・・・（大汗）」

「我が主、ルチルクォーツ十二世様がお待ちです」

「お屋敷の中へ・・・どうぞ（ぼそっ）」「さあっ、こちらです」

ハック

「お、おお（汗）」

「まあ、アクロたちへの報告は後でいいか」

スペクトロ

「・・・」

「・・・ふっ（にやり）」

2コマ

東街地区にて・・・

アクロアイト

「よし、フォスフィはもう一度招き猫の館に戻って」

「フローラさまを護ってくれ」

「ボクたちは、戻ってこないハックを捜してみる」

フォスフォファイライト

「わかったわ・・・（こくり）」

アメトリン

「ええ〜っ!」

「べつに捜しに行かなくても、そのうち戻ってくるでしょ〜?（汗）」

「面倒くさい」

アクロ

「何を言ってる……」

「もし、ハックの追っていったパペットが暗殺者と繋がっているとすれば」

「ハック自身にも危険が及ぶ可能性もあるんだぞ！」

アメトリン

「うーん……」

「だったら、今から追っかけても無駄じゃない？」

アクロ

「む、無駄って……（大汗）」

アメトリン

「だって、たった一人で暗殺者の後を追うなんて……」

「完全に死亡フラグじゃない（ぼそっ）」

フォスファイ

「死亡フラグ……！！！」

効果音「ずがが……！！！！！！ん……！！！」

3コマ

アクロ

「あ……（汗）」

「『オレ、この戦いが終わったら……』っていうアレだな（どきどきどき）」

アメトリン

「あるいは」

「ホラー映画なんかでは『一人になった者から順番に……』って感じかな」
「楽しんでいます」

フォスファイ

「ちよっ！（汗）」

「そんな本当になりそうな冗談は言わないの！！（大汗）」

アメトリン

「でも、わかんないわよ」

「ハックのことだから、なんだかんだと言い包められて」

「今頃は、暗殺者のアジトに連れ込まれているかもしれない……
（苦笑）」

アクロ

「あ……、ありそうだな（ときどきどき）」

アメトリン

「で、この後ハックの行方がわからなくなり」

「数日後、その湖で水死体として発見されて……（うけけけっ）」

フォスファイ

「だっかっらっ！（本気で怒るよ！）」

アクロ

「そうならないために」

「ボクたちはハックを捜しに行く」

「フォスファイ……、フローラさまのこと頼んだぞ」

フォスファイ

「わかってるって……(汗)」(何度も念押ししなくても)

アメトリン

「ええ……(汗)」

「やっぱり捜しに行くの……? (大汗)」

フォスファイ

「って、おい!! (汗)」(いい加減にしろ……!!)

効果音「ずがが………ん!!」

4コマ

サンストーン(招き猫)の館にて……

フォスファイ

「つたく、アメトリンの我がままにも困ったものね……(やれやれ)」

「まあ、たしかに」

「レベル4のヒーラーであるアメトリンが行っても」

「何かあったときに役立つかどうかは微妙なんだけど……(汗)」

????

「あら?」

「あなたはドラゴンファングの……フォスフォスファイライトさん」

フォスファイ

「だから、フォスが一つ多たって!(涙)」

「つと、えっ!?(大汗)」

「し、シンセティックさん!! (どびつくくら)」

シンセティック

「えっ、なに? (汗)」

「もしかしてあなた・・・」

「招き猫勇者隊に鞍替えしちゃったの? (大汗)」 (勝負している
最中に・・・)

フォスファイ

「違います!」

「あたしはただ、フローラさまの・・・うぐっ! (げほげほ)」

フローライト

「え・・・、わたし? (汗)」

フォスファイ

「いいえ!」

「な、なんでもありませんよ (げふんげふん)」

「で、シンセティックさんが・・・どうしてここに? (汗)」

シンセティック

「あ・・・ (汗)」 (まあいいか)

「ちょっとロードライトに、DC・・・ダンジョンクリエイターの
仕事を依頼にね (苦笑)」

フォスファイ

「ダンジョン・・・クリエイター? (汗)」

初耳です

「なんですかそれ? (大汗)」

シンセティック

「うん……(汗)」

「じゃあ、次の4コマが始まるまでの間に説明してあげる(大汗)」
「面倒だけど……(ぼそっ)」

フォスファイ

「ああ……(汗)」

「この適当なところ、ちょっとアメトリンに似てるかも(大汗)」

効果音「ばきゅ~~~~~~~~~~~~ん!~!~!」

コメント

DC・DMの説明は、『第28話 ダンジョンクリエイター』を
ご覧ください (爆)

第103話 DCのお仕事

4コマ劇場 アイオライト― 463・・・2011/01/12
シリーズ3

タイトル「DCのお仕事」

1コマ

サンストーン（招き猫）の館にて・・・

フォスフォファイライト

「ダンジョンクリエイター（DC）にダンジョンマスター（DM）
・・・」

「あたしたちの知らないところで」

「そんなやり取りがあっただなんて」（大汗） 「空の宝箱に
アイテムを入れて回る」

シンセティック

「あゝ・・・」

「自分で説明していてなんだけど」

「このことは、誰にも言わないでちょうだいね（汗）」

「DCやDMの存在って、一応は冒険者に秘密ってことになってい
るから（苦笑）」

スファレライト

「秘密ってわりに・・・（汗）」

「事務所に大きく『ダンジョン管理協同組合 ルチルクォーツ東三
番街支部』って看板があるよね」

「わたしも、この前はじめて気づいたんだけど（大汗）」

シンセティック

「あら、団体名なんて自分に関係なければ誰も気にしないでしょ？」
「現に、スファレちゃんだってわたしやロードライトに出会わなければ」

「全然気づかなかったわけだし・・・」(あの事務所、何十年もある場所にあるのよ)

スファレ

「うん・・・(汗)」

「確かにそうか・・・」(大汗)
「団体名だけでは仕事の内容までわかりません」

2コマ

シンセティック

「それで、DCの仕事の話なんだけど」

ロードライト

「あつ、お姉ちゃん！(汗)」

「そのDCのお仕事なんだけど・・・」

「今回は、他のメンバーに代わってもらうこと できないかな？」

シンセティック

「・・・え？」

スファレ

「えっと、じつは・・・(汗)」

「フローラが命を狙われているらしくって」(苦笑)

「冒険に出ている余裕が無いっていうか・・・」(大汗)

シンセティック

「命を・・・狙われているんですか？」

フローライト

「あゝ、どうやらそうらしいです・・・（あははっ）」

フォスファイ

「フローラさま・・・（汗）」

「全然緊張感が無い・・・（どきどきどき）」

3コマ

シンセティック

「うゝん、それは困ったわね・・・（どうしよう?）」

「東街三番街支部のメンバーは、みんな出払っているのよ（汗）」

「しかも、冒険者管理組合の不幸で」

「既にクリア済みのダンジョンを使ったクエストが発行されちゃったみたいなの」

「だから、クエストを受注した冒険者がダンジョンへ潜る前に」

「イベントやアイテムの再設置を行わないと・・・（大汗）」

ロードライト

「イベントどころかアイテムが一つもない」

「^{から}空ダンジョンになってしまっわけね（汗）」（それはマズイかも・・・）

スファレ

「・・・ってどうか！」

「また冒険者管理組合の不幸なの〜!？」

「この前も、依頼者とかも判明しないエラークエストを」

は

じめての冒険

「わたしたちに押し付けたくせに――！！（むき）――
っ！！）」

シンセティック

「まあ、そういわないの……（汗）」

「冒険者管理組合も大変なんだから……」（苦笑）
組織の規模が大きくなりすぎた？

スファレ

「そんなこと言ったって……」（うん）
なかなか納得でき
ない？（笑）

4コマ

シンセティック

「とにかく、イベントの再設置にはロードライトに行ってもらいま
す」

ロードライト

「お、お姉ちゃん！？（汗）」

シンセティック

「もちろん、スファレちゃんたちもロードライトと一緒に出てもら
います」

「この館を貸すとき結んだ専属契約の条件……覚えているよね？」

スファレ

「うぐっ……（汗）」（そういえば……）

シンセティック

「今すぐ出発して　　と言いたいところだけど」

「色々準備が必要でしょうから・・・(うん)」

「そうね、遅くても3時間後には出発してちょうだい！」

「それ以上長引くと、既に出発している冒険者パーティに追いつけなくなる(汗)」

「はい、これが目的のダンジョン内の地図と冒険者パーティの資料ね・・・」

「あと、ロードライトは宝箱に入れるアイテムを支部まで取りに行くこと(わかった?)」

ロードライト

「は、はい!(汗)」

スファレ

「あ・・・(汗)」

「どうやら断れそうにないね～～(苦笑)」(仕方ないか)

「えっと(大汗)」

「で、フローラはどうする?(どきどきどき)」(残った方が安全だとは・・・)

フローラ

「もちろん、一緒に行きます」

フォスファイ

「えっ!?(どびっくり)」

スファレ

「まあ、遠くで心配するより」

「近くにいて目の前で命を狙われる方が」

「わたしたちも安心だしね～～(苦笑)」

ロードライト

「あははっ（苦笑）」

「どちらにしても、命は狙われるわけなんです……（大汗）」

フローラ

「それじゃあ〜」

「ユークレースにいるパロットさんに連絡を取って」

「準備が整い次第、出発しましょう（お〜っ）」

フォスファイ

「あ……、あのっ！（叫び）」

スファレ

「えっ！？（どびっくり）」

フォスファイ

「そのイベント再設置の旅に……（汗）」

「……（大汗）」

「あたしも連れて行ってくださいー！（叫び）」

効果音「ずががー……………ん!!」

コメント

フォスファイたちドラゴンファングの目的は、暗殺者を捕まえること
とです

第104話 あくまでもドラゴンファングのメンバーです

4コマ劇場 アイオライト―464・・・2011/01/13
シリーズ3

タイトル「あくまでもドラゴンファングのメンバーです」

1コマ

サNSTOON（招き猫）の館にて・・・

フォスフォファイライト

「あたしも連れて行ってください!!」（叫び）

スファレライト

「……………」（じい〜〜〜っ） 「フォスファイを凝視

「じゃ、まあ〜フォスフォスさんも参加っていうことで・・・」

フォスファイ

「って、あつさりOK!?!?」（どびっくら）

スファレ

「え?」

「一緒に行きたいんですよ?」（汗） 「（フォスフォスさんから言い出したわけだし・・・）」

フォスファイ

「あ……………（汗）」

「それは、そうなんですけど〜（大汗）」 「あと、フォスフォスじゃありません（）」

ロードライト

「あははっ……(汗)」

「フォスファイさん、気にしたら負けですよ」(苦笑)

フォスファイ

「そ、そう……みたいですね(あははっ)」

2コマ

スファレ

「ところで……」

「旅に出るとして、パロットのことはどうする?」

「あいつ、今はユークレースなんちゃら部のリーダーやってるんでしょ」

「これまでと違って、そう簡単に事務所を空けるわけにはいかないんじゃないかな?」

フローライト

「なんちゃら部ではなく調査部ですね……(大汗)」

「なんちゃら部ですと、なんちゃらプラネットみたいですよ(苦笑)」

「惑星を創造する学生の物語」

美咲

「では、パロットさんへはわたしが連絡しておくことにしますね」

「シトリンさんに、忘却の迷宮での報告もしないといけませんし……」

ロードライト

「お願いします(ペーッ)」

フォスファイ

「あつ、あたしも！」
「みなさんと一緒に旅へ出る事になったことを」
「ドラゴンファングの仲間に伝えてきます!!」（たっ!）
慌てて館を飛び出そうとする

ロードライト

「あ、フォスファイさん！」

「用事が済みましたら南街門まで来てください」

フォスファイ

「え？」

ロードライト

「お姉ちゃんは、遅くても3時間後・・・と言っていましたか」

「できるだけ早く出発したいと考えています」

「だから、1時間経ってもフォスファイさんが南街門に現れない場合」

「申し訳ありませんが、先に出発させていただきますので・・・」

フォスファイ

「りよ、了解です・・・（大汗）」

3コマ

湖畔の林にて・・・

フォスファイ

「とは言うものの・・・（きよろきよろ）」

「例の人形をの後ろを追っていったというハックさんの姿は見あたり
ず」

「ハックさんを捜しにいったアクロとアメトリンも」

「どこへ向かったのかさっぱり・・・（苦笑）」

「うん……(汗)」

「こんなことになるんだったら、緊急の連絡方法を決めておくべきだったな」(大汗)

効果音「がさがさ」

草むらが揺れる音

フォスファイ

「えっ……」

「ハック　さん？(汗)」(あるいはアクロたち?)

突然の登場

シーライト

「……(しゅたっ!)」

手を翳して挨拶をする

フォスファイ

「わぁー……って!」(汗)

「シーラさん!?(どびっくり)」

「ど、どうしてここに!」(大汗)

シーラ

「……(ぬぼーっ)」

何をするわけでもなく

無言

フォスファイ

「えっつと……(苦笑)」

なんだか気まずい(爆)

「はっ!!」(汗)

「そ、そういえば　例の人形はシーラさんとそっくりな姿をしていた(ぼそぼそ)」
小声で

シーラ

「……………(じい〜っ)」

フォスフィを凝視

フォスフィ

「それってつまり……………(ぼそぼそ)」

「シーラさんが暗殺者と繋がっている可能性もあるってこと〜!?

(どきどきどき)「 小声です

シーラ

「……………(ゆらり)」 ゆらゆらとフォスフィに近づく

フォスフィ

「ま、まさか……………(汗)」

「真相に近づきすぎて邪魔になったあたしを始末しよう?!?」(大汗)

シーラ

「……………(ちゃきっ)」 背負っている剣の柄を握る

フォスフィ

「ひゃひっ!!!(びくっ!)」

「こ、殺され……………(涙)」

4コマ

シーラ

「……………(そ〜っ)」 剣をゆっくりとフォスフ

イに向けて……………

フォスフィ

「いやああああ〜!」(泣)「(ユークナイトに勝て

るはず……)

「……って、あれ？(汗)」

「全然攻撃してこない……なんで!? (大汗)」

シーラ

「……(じいじい) 両手で支えた剣をフオ

スフィに差し出している(鞘に収まったまま)

フオスフィ

「え、え〜つと……(汗)」 いまいち状況を把握できてい

ません

「その剣を あたしに？(どきどきどき)」

シーラ

「……(ふるふる) 顔を左右に振る

フオスフィ

「じ、じゃあいつたい……(大汗)」

「あ……、それつてもしかして聖剣クリソベルル!? (びっくり)

「 見覚えがある

「 あっ、わかった! 」

「その聖剣を、アウインの勇者であるパロットに渡せばいんだね」

シーラ

「……(にに) 」

フオスフィ

「 な〜んだ 」

「 そうならそうと、早く言ってくれれば……(苦笑) 」

「 シーラさんは、てっきりあたしを殺そうとしてるのかと〜(ひよ

「いっ」 聖剣を軽々と受け取る

シーラ

「!?!?! (どびっくり)」

フォスファイ

「うわあゝ・・・ (汗)」

「聖剣なんて始めて持ったけど、意外に軽いんだねゝゝ (大汗)」

「これって、あたしが使っている鉄の剣より軽いかも・・・ (ぶんぶん)」 聖剣を振り回している

シーラ

「!?!? (汗)」 シーラが持っていたときはもの凄く重かった

「!?!?!?! (大汗)」 軽くパニック

説明文「聖剣クリソベリルの刀身は、光竜アレキサンドライトの精霊力を」

「数千年単位で圧縮した結晶から創られています」

コメント

聖剣クリソベリルは二振りあり、五千年前はアウインの勇者であるシヨウとアリスが使っていました

第105話 人事異動がありました

4コマ劇場 アイオライト― 465・・・2011/01/15
シリーズ3

タイトル「人事異動がありました」

1コマ

冒険者ギルド、ユークレースの事務所にて・・・

美咲

「・・・というわけで」

「ロードライトさんをリーダーとした招き猫勇者隊のみなさんは」

「大至急、とあるダンジョンのイベント再設置に出発しなければならなくなつたわけなんです」

シトリン ユークレースのギルドマスター

「そうですね、状況はだいたい把握できました」

「で・・・」

「パロットさんは、どうしたいというのですか？」

パロット

「どうしたいって（汗）」

「あいつらだけで外界に出るのは危険すぎる」

「それに、フローラが命を狙われているのは間違いないんだ」（シ
ーラ似のスペクトロライトに？）

「オレが傍にいてやらないと・・・（大汗）」

シトリン

「フローラさまの護衛には、シリカさんをつけていることですし」

「パロツトさんが行かなくても問題はありませんよ」

パロツト

「うぐっ……(汗)」「それはそうなんだが」

シトリン

「それに、美咲さんも一緒……」

美咲

「あ……」

「わたしは、今回の冒険に同行できませんので(ぼそっ)」

パロツト

「えっ!?(びっくり)」「

2コマ

美咲

「わたしは、もう一度……忘却の迷宮へ向います」

「今度は最深部まで行って」

「シリカさんの身体を蝕む 怨霊の正体を突き止めようと考えて
おります」

パロツト

「え……怨霊?(汗)」「

美咲

「あ……(汗)」「 説明が面倒

「シリカさんの身体を治すための調査といったところでしょうか
?」

「とにかく、シリカさんのことは任せてください……」

パロツト

「美咲……さん（ぼそっ）」

「オレ、はじめてあんたのことを心の底から尊敬した」

美咲

「つまり……」

「見た目はこんなものだから 13歳の女の子姿（実年齢5千15歳）」

「普段はバカにしているわけですね……（じいっ）」

パロツト

「そ、そんなこと!!（汗）」

「……（大汗）」

「まあ、少しは……（ぼそっ）」

美咲

「……（むっ）」

3コマ

シトリン

「そう……ですね（うん）」

「シリカさんの身体のこととも何とかしないとイケませんし……」

「美咲さん、引き続き忘却の迷宮の調査をお願いしますか?」

美咲

「任せてください（にっ）」

パロツト

「よしっ、これで全ての問題は解決したな」

「早速オレも旅の準備を……(そっつ)」「静かに事務所を出ようとする」

シトリン

「パロツトさん、お待ちなさい……(ぼそっ)」「

「なにを平然と職場放棄しようとしているんですか? (大汗)」「

パロツト

「いや……(汗)」「

「オレは調査部において正式なトップが決まるまでの代行なんだよな?」

「この2日間、調査部の仕事を見させてもらったんだが」

「別にオレがいなくても回っていく……っっていうか」

「むしろ素人のオレなんか、いない方がスムーズに事が運ぶだろう? (大汗)」「

シトリン

「そんなこと言い始めたらきりがありませんよ……(はあく)」「

「パロツトさん、あなたにはこのユークレースの未来のため」

「これまで以上に成長していただかなくてはなりません」

「そのためには様々な役職を経験してもらおう必要があるんです」

パロツト

「シトリンさん……(汗)」「

「あんたはオレに何を期待してるんだ? (ときどきどき)」「

シトリン

「そ、それは……(大汗)」「

パロット

「まあ、何にしても……」

「オレは招き猫勇者隊　とやらのメンバーだ（汗）」

「みんなが冒険に出るといっているのであれば」

「オレも一緒に行くのが当然だろう！」

美咲

「うーん……（汗）」

「お二人の言い分はそれぞれ理解できるので」

「どちらが正しいとも言い切れませんね（苦笑）」

シトリン

「あ……、わかりました！（もぉ～！）」

「それではこうしましょう……（ぼそっ）」

パロット

「ぬ？」

シトリン

「代行とはいえ、調査部のトップが他のメンバーを放っておいて」

「この事務所を空けるわけにはいきません……」

「そこで、パロットさんには正規の調査部トップとなってもらい」

「新たに代行を選んでもらって、その方にパロットさん不在の間……」

「調査部を仕切ってもらうことにしましょう」

パロット

「ちよっ!?!?」

「なんですか、その提案は……!?!（叫び）」

シトリン

「嫌なら、パロットさんに残ってもらっただけです……(ぼそっ)」

パロット

「うぐっ……(汗)」

「なんだか、シトリンさんの思惑通りに事が進んでいる気がします
が」

「それしかないようですね……(大汗)」

シトリン

「それでは、調査部のトップはパロットさんに決定ということだ

(よしっ)」

「残る問題は……誰を代行にするのかですが……(うん)」

突然の登場

チャロアイト

「失礼します……(かちやつ)」 扉を開いて入ってくる

「シトリンさん、依頼にあった調査報告ですが」

「資料が完成したのでお持ちしました」

シトリン

「……(じいっ)」 チャロアイトを凝視する

パロット

「……(じいっ)」 同じく

美咲

「……(あゝあ)」 同情の眼差しをチャロアイト
に向ける

チャロアイト

「え、え〜っと……（大汗）」

「みなさん……どうされましたか？（どきどきどき）」

シトリン

「では……」

「新しい調査部のトップ代行はチャロアイトさんにお任せするって
ことだ〜」

チャロアイト

「……はあ！？（どびっくら）」 寝耳に水

パロツト

「うんうん」

「チャロアイトなら適任だ！」

チャロアイト

「ちよー……っ……（どびっくら）」

美咲

「チャロアイトさん、大出世ですね〜」（苦笑）」

チャロアイト

「って、いったい何の話ですか……！！」（涙）（うに
や……！！）」

効果音「ずがが……ん……ん……！！」

コメント

調査部のトップがパロットに、トップ代行はチャロアイトになりました（爆）

第106話 聖剣クリソベリルの使い手

4コマ劇場 アイオライト―466・・・2011/01/15
シリーズ3

タイトル「聖剣クリソベリルの使い手」

1コマ

サンストーン（招き猫）の館へ戻る途中、中央広場にて・・・

美咲

「さてと・・・（うん）」 身体を伸ばしている

「わたしはこれから忘却の迷宮に行ってきますね」

パロットクリソベリル

「美咲さん」

「本来なら、忘却の迷宮へはオレが行くべきなんでしょうが・・・

（大汗）」

美咲

「精霊力のコントロールができていない」

「今のパロットさんが向かったところで」

「古の巨大魔蟲にやられてしまっただけです・・・」

「前は、ぺっぽこであるスファレさんがいたからこそ

「ギャグっぽく済みましたが・・・」

「パロットさん一人で忘却の迷宮へ行ったら」

「間違いなく命を落とすことでしょう（ぼそっ）」

パロット

「うん・・・（汗）」

「そう考えると、スファレの」
「へっばこの特殊能力ってのは、もの凄いものなんだな〜」(大汗)

美咲

「パロットさん」
「冒険の間も、精霊力のコントロールを意識しておいてくださいね」
「そのことは、今後の戦いにおいても決して無駄にはならないはず
です・・・」

パロット

「言われなくてもわかっている・・・」(汗)
「なんとかモノにしないと、あのラリマーの暗殺者」
「スペクトロライトから、フローラを護ることができないからな〜
(大汗)」

2コマ

美咲

「・・・」
「では、聖剣クリソベリルをパロットさんにお返ししておきます(ちやきつ)」 剣を差し出す
「ですが、精霊力のコントロールを練習するときのみ使用してください」
「今の使い方をしていれば」
「たとえ聖剣クリソベリルとはいえ・・・」(ぼそっ)

パロット

「わかっていきますよ」(苦笑) 剣を受け取る
「それに、こいつを使うようなことは〜」
「そうそう無いでしょうから」(あははっ)

美咲

「いえ……(汗)」

「そういうことを言っているのではなく(苦笑)」

突然の登場

フォスフォファイライト

「あつ、パロット……と、美咲ちゃん」

美咲のことを年

下だと思っています(笑)

「ちようど良かった」

パロット

「ん、フォスファイか？」

「ちようど良かったって、いったい何だ……って、ええ!!(大汗)」

「おまつ、その剣!?(どびっくり)」

フォスファイ

「……?」

パロットとは別の聖剣クリソベリルを

持っている

美咲

「フォスファイさん……(でしたよね?)」

「その聖剣クリソベリル どうされたのですか?(じいっ)」

フォスファイ

「あゝ、これは……(汗)」

「ある人から預かったっていうか……(苦笑)」

3コマ

パロット

「って、どうして聖剣クリソベリルがもう一本あるんだ！（大汗）」
「これって、何本もあるものなのか！？（どびっくり）」

美咲

「いいえ」

「この形状のクリソベリルは、全聖界で・・・」

「かつて、アウインの勇者であったシヨウさんとアリスさんが使っていたその二振りだけ」

「フォスファイさんが持っているクリソベリルは」

「おそらく、アリスさんが使っていた聖剣でしょう」

フォスファイ

「アウインの 勇者・・・（ちらり）」 左手の甲を見る

「まあ、なんでもいいか〜（ぼそっ）」 自分には関係ないと考えている

「え〜っと、パロット〜」

「じつは、ついさっき」

「シーラさんから、この聖剣をあなたに渡すように預かって・・・」

パロット

「なにっ、シーラ！？（がばっ）」 フォスファイの両肩を掴む

「どういうことだ！（大汗）」

「おまえ・・・、シーラと会っていたのか！！（どびっくり）」

フォスファイ

「ひゃっ、あっあっあっ（汗）」 前後に揺すられて目が回っている

「シーラさんは・・・この前ドラゴンファングにやってきて（大汗）」

「フローラさまが暗殺者に狙われているって情報を持ってきてくれて〜〜〜（あうあうあう）」

パロット

「・・・どういことだ（うん）」 フォスファイを解放する

「シーラはあの暗殺者と繋がっているわけではなかったのか？（汗）」

美咲

「どうぞやら、そのようですね」

「全く関係がないとは・・・言い切れませんが（ぼそっ）」

4コマ

フォスファイ

「あ〜〜〜（汗）」

「とにかく、あたしはこの剣をパロットに渡すように言われて（大

汗）」 剣を差し出す

パロット

「うん・・・（汗）」

「クリソベリルが二本あっても、仕方ないと思うんだけど・・・（

そっ）」 ゆっくりと手を伸ばす

美咲

「……………（じい〜〜〜っ）」 二人の様子を凝視する

効果音「がががっ、バシッ!」 凄まじい衝撃が起こり、パロットの手を弾く

フォスファイ

「えっ！？(大汗)」

パロット

「ななっ！？(どびっくら)」

美咲

「やっぱり〜〜(はあ〜〜)」

パロット

「って、どどういうことだ？(汗)」

「ある程度の重さは覚悟していたが」

「触れることもできないだなんて・・・(大汗)」

フォスファイ

「・・・重さ？(汗)」(すっごく軽いですよ?)

美咲

「おそらく・・・というか、間違いなく」

「聖剣クリソベリルが使用者としてフォスファイさんを選んだのでし
よう」

「さすがはアリスさんの生まれ変わり・・・(ぼそっ)」

「もはやそちらの聖剣クリソベリルは」

「フォスファイさんにしか使えないでしょうね(苦笑)」

フォスファイ

「・・・(汗)」

「・・・はあ〜！？(どびっくら)」

「ちよっ、あたしはこれを預かっただけで・・・(大汗)」

美咲

「でも、もうその剣はフォスファイさんにしか使えませんよ」

フォスファイ

「そ、そんな~~~~」（大汗）

パロット

「あ~~~~」（汗）

「まあ、誰が持っててもいいんじゃない？（大汗）」（オレにはこいつがあるし~~~~）

フォスファイ

「パロットまでそんな勝手なこと言わないでよ~~~~！！」（うにゃ~~~~！！）」

効果音「ずがが~~~~~~~~ん！！！！」

コメント

ちなみに、シヨウの生まれ変わりはパロット……ではありませんせん

第107話 目指すはオーピメント洞窟・・・いや天然温泉か？

4コマ劇場 アイオライト―467・・・2011/01/17
シリーズ3

タイトル「目指すはオーピメント洞窟・・・いや天然温泉か？」

1コマ

ルルルクオーツ王都、南街門にて・・・

パロットクリソベリル ヒーラーでレベル1

「で、ロードライト・・・」

「今回の目的地はどこなんだ？」

ロードライト 商人でレベル19

「え〜とですね〜」

「忘却の迷宮がある砂漠地帯手前に温泉がありましたよね〜」

「あそこから西南方面へ向かって火山地帯に入って」

「オーピメントという活火山の麓にあるC27というダンジョンで
す」

パロット

「火山地帯っていうことは・・・エリアCか」

「それなら、美咲さんと別々に出ることもなかったな〜」

美

咲はもう忘却の迷宮へ向けて出発した

スファレライト へっばこ戦士でレベル1

「エリアCにあるダンジョンでC27って・・・」

「何か意味があるの？」

ロードライト

「あゝ、C27というのはダンジョン管理協同組合で付けている簡易名で」

「最初のアルファベットはエリア名・・・」

「数字は管理組合が27番目に管理を始めたダンジョンという意味です」

「冒険者の立場で言うと、ダンジョン名はオービメント洞窟ですね」

ジェムシリカ 精霊騎士でレベル128

「オービメント洞窟といえば、目標レベル23の比較的難易度の低いダンジョンですね」

エルバイト レンジャーでレベル4

「つて、目標レベル23!? (どびつくり)」

「それで難易度低めなのかよ!! (大汗)」

シリカ

「・・・・・・・・・・ (じいっ) 盲目です」

「えっつと、どちらさまでしたか? (どきどきどき)」

エルバイト

「お〜〜い・・・・・・・・ (しくしくしく) 唯一の一般人? (笑)

2コマ

フローライト 姫でレベル1

「で・・・・・・・・」

「一緒に冒険するフォスフォスさんは、まだ来ないのかな? (きよるきよる)」

パロツト

「30分ぐらい前に中央広場で会ったけど・・・」

「また直ぐにドラゴンファングのメンバーを捜しに行ったぞ」

「オレたちの冒険について来るってことを伝えにな」

ロードライト

「うん・・・(汗)」 時計塔で時間を確認する

「なるべく早く出発したいんだけどな」(大汗)

スファレ

「約束の時間まで、あと5分はあるんだから」

「気長に待ちましょって」(苦笑)

ロードライト

「それは・・・そうなんですけど・・・(汗)」

スファレ

「そんなことより!!(叫び)」

「・・・パロツト(ぼそっ)」

「今回こそ、温泉だからね」(びっし) パロツトを指差す

シリカ

「!!!(びくっ!!)」

「お、温泉・・・(ぼそっ)」

3コマ

パロツト

「って、お前なあ~~~~(はあ~)」

「フローラの命が狙われているっていうのに」

「温泉どころじゃないだろ・・・(やれやれ)」(シリカさんのこ

ともあるわけだし)

スファレ

「ええ〜〜〜っ!」

「この前も報告が先って温泉をスルーしたじゃない!」
「せっかく温泉地に行くんだから入ろうよ〜〜〜」

パロツト

「だ〜か〜ら〜〜〜」(汗)

「それどころじゃ・・・」(大汗)

シリカ

「良いじゃないですか 温泉 (ぼそっ)」

「普段の疲れを癒やすため・・・」

「命の洗濯というのは必要です」

パロツト

「ちよっ、シリカさん!!」(大汗)

スファレ

「さすがはシリカさま」

「やはり、旅の醍醐味って言ったら温泉ですよね」

パロツト

「って、何しに行く気だ〜〜〜〜〜!!」(うが〜〜〜〜〜!!)

効果音「ずがが〜〜〜〜〜〜〜〜ん!」

ロードライト

「あ、あははっ（苦笑）」

「まあ、イベントの再設置が終われば時間はありますから」

「その後に温泉へ入るってことで……（大汗）」

パロツト

「うゝん……（汗）」

「そんな場合じゃないと思うんだけどなゝゝゝ（大汗）」

エルバイト

「うむゝ……」

「温泉といえば やはりどっきりイベント……（ぼそっ）」

「だよなあゝ、ロードライト（にやり）」

ロードライト

「……（かちゃっ）」 無言でシンセティック・カ

ノンを構える（爆）

エルバイト

「なああああ、ちよっ……待て！（汗）」

「じよ、冗談だつて……！！（わぎゃ……！！）」（撃
つな……！！）

パロツト

「はあゝ……（大汗）」（何やってるんだか）

フローラ

「ああゝ」

「わたしも温泉入りたいかも（ぼそっ）」

パロット

「フローラもー！ー！(どびっくり)」

「お前の命が狙われているんだぞ！(大汗)」

フローラ

「でも、パロットさんが・・・護ってくれるんですね (にっこり)」

パロット

「うぐっ・・・(大汗)」(それは・・・)

突然の登場

フォスフォファイライト 戦士でレベル6

「お、お待たせしました！(汗)」

「え〜っと、結局誰も見つからなくて」

「拠点としている屋敷に手紙だけ置いてきました〜！！(大汗)」

ロードライト

「あ、フォスフォスさん」

「時間通りですね (にっこり)」

フォスファイ

「フォスフォスって誰ですかー！ー！！(涙)」

シリカ

「では、早速出発しましょうか・・・温泉に(ぼそっ)」

フォスファイ

「え・・・(汗)」

「・・・温泉？（どきどきどき）」

スファレ

「招き猫勇者隊慰安旅行～in天然温泉」

「しゅっぱ～～～～っ」

フォスファイ

「ちょーーーーっ！（汗）」

「い、慰安旅行～！（大汗）」

「イベントの再設置に行くんですよね～～～！？」（どっぴなってるの
ーーーー！！）」

効果音「ずががーーーーーん！！！」

コメント

女性陣最大の目的は・・・温泉です（爆）

第108話 道中は・・・相変わらずドタバタです

4コマ劇場 アイオライト― 468・・・2011/01/18

シリーズ3

タイトル「道中は・・・相変わらずドタバタです」

1コマ

ルルルクオーツ、エリアAにて・・・

パロットクリソベリル

「それにしても、いまさらなんだが」

「フォスファイ・・・」

「おまえ、なんでオレらの旅について来ているんだ？」

「DCの・・・あゝ、特殊な仕事なんだから」

「普通のクエストってわけじゃないんだぞ（汗）」

フォスフォファイライト

「ちよつと前にDCの存在を教えてもらったから隠さなくても大丈夫だよ」

「え〜っと、簡単に言うと DCの仕事に興味があったってことかな（あははっ）」

パロット

「で、本音は？」

フォスファイ

「フローラさまを狙う暗殺者を捕まえるため・・・って!?!（大汗）」

「なに言わせるのよー！！！！！！！！（うにゃー！！！！！！！！）」

パロツト

「あゝ……(汗)」

「フローラのことなら心配はいらないぞ(大汗)」

「はつきり言って、フローラはこのメンバーの中で一番強い(どきどきどき)」

フォスファイ

「……え?(大汗)」

エルバイト

「なっ、それってマジなのか!?(どびっくり)」

パロツト

「………?(む?)」

「誰だおまえ……?(ぼそっ)」

エルバイト

「アルバイトじゃねえ」

「エルバイトじゃ……!」

アルバイト、言ってみせ

ん(爆)

効果音「ずがが……!」

2コマ

パロツト

「あゝ、アルバイトアルバイト(思い出したよ)」

フォスファイ

「え〜と……(大汗)」

「冒険者のアルバイトって」
「時給どれくらい貰えるの？（どきどきどき）」

エルバイト

「それが、こいつらにバイト代という概念は無いらしく・・・（しくしくしく）」

「って、そんな話じゃなく！（叫び）」

「このメンバーの中で、姫さんが一番強いってのは本当なのか？（汗）」

「一番ってことは、ユークナイトのお前やシリカさんより強いってことだよな！？（大汗）」

パロット

「そういうことだ・・・」

「だから、本来なら護衛なんてまるで必要としないらしい（ぼそっ）」

フォスファイ

「へ、へえ～～～（大汗）」

エルバイト

「ま、マジかよ（どきどきどき）」
後ろを振り返り、フローラを凝視する

フローライト

「えっつと（汗）」

「アルバイトさん、どうしましたか？（苦笑）」
会話を気にしていませんでした

エルバイト

「いや・・・なにも（大汗）」

3コマ

スファレライト

「うん・・・（じいじっ）」 パロットとフォスフィを
交互に見る

「さっきから気になっていただけだよ」

「どうしてフォスフィが」 ちゃんと呼ぶようにした

「パロットと同じ聖剣を持っているわけ？（汗）」

ジエムシリカ（か〜くん付き）

「ああ、それはわたしも気になっていました（ぼそっ）」 こ
の人盲目です

フローラ

「前々回の話と重複するので、詳しい説明は割愛しますが」

「かつてアリスさんが使っていた方の聖剣クリソベルルのようです

ね

「まさか、五千年ぶりに二振りの聖剣が揃うことになるとは・・・

（大汗）」（びっくりです）

スファレ

「へえ〜・・・」

「じゃあ、あっちの聖剣も」

「わたしが持ったら光るのかな？（ぼそっ）」

フローラ

「・・・光る？（大汗）」（なんですかそれは？）

スファレ

「いや、この前パロットの聖剣を持たせてもらったんだけど」
「そのとき光って点滅したのよ」
「ぴか〜っぴか〜っって」

フローラ

「た、確かにお父さんやアリスさんが聖剣クリソベルルを構えたとき」

「光るっていうより輝いていましたが・・・(汗)」

「点滅はしていなかったと思いますよ」(苦笑)

スファレ

「でも、確かに点滅して・・・(汗)」

ロードライト

「やっぱりそれは」

「スファレさんがへっぽこってことじゃないですか？」(にこっ)

「ほめ言葉です」

スファレ

「へっぽこいうなーーーーー!!!(涙)」「うにゃ〜っ!」

効果音「ずががーーーーーん!」

4コマ

パロット

「ああ、剣で思い出した(そうだ!)」

「どたばたして有耶無耶になっていたが」

「スファレ、おまえの新しい剣はどうなったんだ」

宮で剣を失った

忘却の迷

「結局、武具屋へは買いに行かなかったのか?」

「見たところ手ぶらのようだけど・・・(大汗)」

スファレ

「え？」

「剣ならちゃんと持っているよ」

パロツト

「・・・どこに？(汗)」

スファレ

「え〜っと・・・(「うそ」)

「じゃじゃ〜ん(ぱっ!)」

懐から何かを取り出す

「シンセティック・ソ〜〜ド改 (チャララチャツチャチャー)」

刃の無い柄だけの剣

「なんと、このシンセティック・ソード改は〜」

「使用時のみ刀身が現れる携帯性に優れた剣で〜〜」

パロツト

「し、シンセティック・・・改!?(どびっくり)」

シリカ

「!!(大汗)」「びくびくっ!!(」

フォスファイ

「え・・・?(なにこの空気?)」

パロツト

「ちよっ!(汗)」

「ロードライト!!(叫び)」

「おまえ、素人になんて物騒なモノを渡してるんだ!?(怒)」

ロードライト

「えっ、でもスファレさんが良い剣が無いつて困っていましたし」
（汗）」

「それに、シンセティック・ソードを改造することで」

「その攻撃力を極端に抑え、より使いやすくなったって」

「お姉ちゃんが言ってましたから・・・」（大汗）」

パロット

「そのお姉ちゃんが信用ならねえ〜んだよ!!」（うがーーーーー
っ!!）」

シリカ

「す、スファレさん!?」（汗）」

「ゆっくり その剣を地面に置いて・・・」（おろおろ）」（落ち
着いて!）」

スファレ

「え〜っ、どうしてですか?」

「せっかく取り出したんですから試し斬りを〜〜」（ちゃきっ）」
柄を構える

シリカ

「だ、だめーーーーっ!!」（涙）」

スファレ

「うおおおおおーーーー!!」（ぶおおお〜ん!）」
瞬にして光の刀身が現れる

「全てを斬り刻め・・・」（ぼそっ）」

「シンセティック・ソーーーーーード!」（叫び）」

「うりゃー……っ……!」(ぶうっうん!) 「シンセティック・ソード改を一振り

パロット

「やめ!!(あっ……)」

効果音「どがっ、ぐわしゃっ、さくっ、ずどっ……!」 読
者様のご想像にお任せします (爆)

フォスファイ

「なああああ……!!(どびっくり)」

スファレ

「お……、おお……う? (どきどきどき)」(す、漣え……)

ロードライト

「……」

「……あれ? (汗)」

「シンセティック・ソード改って……」

「ヒノキの棒ぐらいの攻撃力しかないはずなのに」(大汗)」

パロット

「どこがヒノキの棒じゃ……!!(怒)」

ロードライト

「え……っ (汗)」

「でも、お姉ちゃんが……」(大汗)」

パロット

「もうシンセティック系のアイテム使うの禁止……!!(わ

「キヤーーーーー……！」

コメント

例のごとく、大量破壊系の武器です (爆)

第109話 デマントイドの大魔王

4コマ劇場 アイオライト―469・・・2011/01/19
シリーズ3

タイトル「デマントイドの大魔王」

1コマ

夜、エリアAの野営地にて・・・

ジェムシリカ（か〜くん付き）

「え〜っと（汗）」

「たしか、ルシフォンさん でしたよね？（大汗）」

「どうしてあなたが・・・さも当然のような顔をして」

「わたしたちと同じ焚き火を囲んでいるのでしょうか？（どきどきどき）」

ルシフォン

「気にするな・・・（はぐはぐ）」 骨付き肉にかぶりついて
いる

「これも仕事だ（ふっ）」

シリカ

「し、仕事・・・？（大汗）」

ルシフ

「もちろん、『シリカちゃんシリーズ』の撮影さ」

第75

話を参照（爆）

シリカ

「ああ〜（大汗）」

「やっぱり……（涙）」（しくしくしく）

フローライト

「あ〜っと、ルシフさん（汗）」（こっちの時代では初めてお会いしますね……）

「もうお母さんを撮影（隠し撮り）するのは止めたんですか？（大汗）」

ルシフ

「いや、引き続き『優子ちゃんシリーズ』の企画も進行中だ」

フローラ

「そ、そうですねか……（苦笑）」（お母さんに知られたら、殺されるんじゃないかな〜）

パロットクリソベリル

「ん〜っと……」

「フローラもこの人のこと知っているのか？」

フローラ

「そう、ですね……（汗）」

「最近はあまり表に出ることはありませんが〜」

「こちらは魔族のルシフォンさん……（大汗）」

「サンストーン（招き猫）の館の管理人をしていただいているファリスさんの旦那様です」

パロット

「ちよっ!?!?（汗）」

「それって、魔界のデマントイドとかいう国の大魔王……!?!?!（どびっ

くり)」

「おいおい、マジかよ……(ぼそっ)」

「まさか、大魔王なんて存在をこの目で拝むことになるうとは(どきどきどき)」

スファレライト

「え、えっ」

「おじさま、大魔王なんですか」

ルシフ

「お、おじ……(汗)」 魔族としては若い方です

「いやまあ、魔界のデマントイド王国で大魔王をやっているのは本当だがな？(あははっ)」

2コマ

パロット

「ということはつまり……」

「オレたち冒険者の最終目標は」

「大魔王であるあんたを 倒すことに……あると？(大汗)」

ルシフ

「おいおい(汗)」

「大魔王っただけで、なんで倒されなくっちゃならんのだ？」
大汗)」

パロット

「え……(汗)」

「だって、大魔王なんだろ？(どきどきどき)」

フローラ

「え〜っと、パロツトさん」

「どうやら前提から勘違いされているようなんですが〜」

「大魔王といっても、物語にあるような諸悪の根源やラスボス的な存在ではありませんよ」

「ルシフさんにしたって、魔界にある国の一つ・・・デマントイド王国の代表に過ぎません」

シリカ

「つまり、この世界に置き換えて考えれば・・・」

「ルチルクオーツ王国の代表であるフローラちゃんと同じってこと？」

フローラ

「そういうことです」（それにルシフさんは精霊神でもあるわけですし〜）

「・・・ラスボスってことなら」

「スファレさんの師匠になったラルドさまの方が」

「よっぽどラスボスです・・・（ぼそっ）」

ルシフ

「おまえ・・・（汗）」

「ラルドさまの弟子になったのか？（大汗）」
ルシフは兄弟子？

「見かけによらず、苦労しているんだな〜」（よしよし）」
スファレの頭を撫でる

スファレ

「ううっ（涙）」

「わかってくれますか〜」（しくしくしく）」
何があった

「……………!!」（笑）」

効果音「ずががーーーーーん!!!」

3コマ

ルシフ

「てなわけで」

「しばらくおまえたちの旅に同行させてもらおう・・・」

「まあ、シリカの撮影（隠し撮り）が主な内容だから、今後の物語に係わることも一切ない」

「だから、いないように扱ってくればOKだ！」（基本、無視してくれ）

シリカ

「はあ〜（汗）」

「それなら、別に構いませんが・・・（大汗）」（なにかが引っかかるな〜）

フローラ

「でも、ルシフさん・・・」

「いつもは、本人に気づかれないように撮影（隠し撮り）してストーリーカーです」

「いつの間にか関連アイテムなんかを売り出したりしていましたが」

「今回は、どうしてこんな顔見せのような打ち合わせ（？）をしたんですか〜？」

ルシフ

「おお、そうだ」

「じつは、お前たちにもこの同意書に署名してもらいたくてな（すうーっ）」一枚の同意書を差し出す

フローラ

「・・・同意書？（はてな？）」

同意書を受け取る

ルシフ

「ルシフ屋創本舗のシリーズは」

「その者の自然な様子を撮影して 掲載することを重視している」

（ヤラセは一切無しだ！）

「今回のシリーズは、シリカをメインにしているもの」

「シリカだけを撮影して編集となると、やはり構図にも無理が生じ

てしまう・・・」

「だから、一緒に冒険しているおまえたちが同意してくれることで」

「シリカちゃんシリーズ第1弾におまえたちが載る（映る）ことを

許可してほしいんだ」

スファレ

「え〜〜〜っ」

「それって、シリカさまの写真集とかに」

「わたしも載っちゃうかもしれないってことですよね〜」

この人シリカの大ファンです

「OKです・・・全然OKです（かきかき）」 同意書に署名中〜

名中〜

フローラ

「あっ、スファレさん！」

「もう少し詳しい内容を聞いてからのほうが！！（あせあせ）」

「・・・でもまあ〜（汗）」

「メインはシリカさんなんだし」

「ちよっとぐらい自分の姿が載っちゃっても問題ないか〜・・・）

かきかき（「 同意書に署名

4コマ

エルバイト

「つて、こんな同意書にサインなんかしなくてもいいんじゃない？（苦笑）」

「なにか、不都合があるわけでもないんだろ？」 同意書を受け取る

ルシフ

「あ・・・、おまえとパロットは署名しないでいいぞ（ぼそっ）」

パロット

「ぬ？」

「どづいうことだ？」

ルシフ

「だって、おまえらの入浴シーンなんか載せても」

「誰も喜ばねえ〜だろ〜」（あっはっはっ）」

スファレ

「なああああーーーーー！！？（どびっくり）」（入浴シーンがメインですかーーーー！！）」

ルシフ

「いや・・・、まてよ？（ぼそっ）」

「別に購入者は男性だけとは限らないから」 シリカファンは女性も多いです

「男湯（？）の様子を載せても問題ないのか？（うん・・・）」

「まあ、一応おまえらも署名しといてくれ」（にこっ）」

パロツト

「……………(ぽっ)」「エルバイトから同意書を奪い取る
「ふざけるな(怒)」「(びりびりびり) 同意書を細かく破る

ルシフ

「あああああ—————! (叫び)」「
「てめえ、なにしががる—————! (怒)」「

パロツト

「こんなふざけた同意書、渡せるか—————! (だあああ—
—————)」「

ルシフ

「ふっ、そんなに心配することはない(にやじ)」「
「あぶないところは、光線やモヤで隠れるように編集するから…
(ふふふっ)」「

スファレ

「なら安心だね」「

パロツト

「って、それでいいのかよ!—!!) (うにゃ—————!—!!) (

効果音「ばきゅ~~~~~ん
「

数分後…

シリカ

「え〜っと、『シリカちゃんシリーズ』の発行を了承しますので
汗)」「

「入浴シーンを含めたパロットくんと冒険の記録・・・」
「わたしに譲ってください!!! (うがー!!!)」 顔が真
っ赤

ルシフ

「りょくかい (にやり)」
「編集前の撮影素材をお渡ししますよ・・・ (ふふふ)」

コメント

結果、発行された『シリカちゃんシリーズ』は大ヒットします
(爆)

第110話 おそらくは無駄な努力かも？

4コマ劇場 アイオライト―470・・・2011/01/20
シリーズ3

タイトル「おそらくは無駄な努力かも？」

1コマ

夜、エリアAの野営地にて・・・

パロットクリソベリル

「……………(じいっ)」 フォスフィをじっと見つめる

フォスフォファイライト

「……………(びくっ)」 見つめられて緊張しています

「え、えっつと(汗)」

「パロット、何かな？(どきどきどき)」

パロット

「フォスフィって、オレやスファレと同じで」

「今期検定で冒険者になっただんだよな？」

フォスフィ

「え……………(汗)」

「そ、そうだけどっど(大汗)」

「それが……………(なにか?)」

パロット

「いや、お前……………いまレベル6だったよな？」

「じつはオレ、いまだレベル1で経験値が1ポイントも上がってい

ないんだ」

「ふと思っただが さすがにこれではマズイのではないかと・
・(大汗)」

突然の登場

スファレライト

「って、いまさらなのかよ!(叫び) (もう110話目だよ!)
「気にするの遅すぎ!」 (うが!」

効果音「ずがが—————ん!」

2コマ

パロット

「スファレ……いきなり会話に参加してくるなよな(苦笑)」「
「っていうより、経験値が1ポイントも上がっていないのはお前も
同じだろ?」 (汗)」

スファレ

「わたしは、ちゃんとレベルを上げようと努力しているもん!」
「……へっばこ度が上がるばかりで経験値はまったく変動してい
ないけど(ぼそっ)」

パロット

「意味ねえ」

スファレ

「うおいつ!!(怒)」

パロット

「あははっ（苦笑）」

「とまあ、うちのパーティには」

「フローラを含めてレベル1が3人もいるわけだが・・・」

「できればレベルを上げるコツを教えてくださいかないかなって（汗）」

スファレ

「あっ！」

「それはわたしも聞きたいかも」

フォスファイ

「あゝ・・・（汗）」

「コツって言われても~~~~（苦笑）」

「でも、どうして突然そんなことを気にしはじめたの？（大汗）」

パロット

「冒険者になって1年も経つというのに」

「レベルが4しか上がっていない誰かさんと同じにはなりたくない

（ぼそっ）」

スファレ

「ああ、それは言ってるね・・・（うんうん）」

エルバイト

「聞こえてるんだよ！！（があああー！！！！）」
レ
ベル4のレンジャーです

効果音「ばきゅ~~~~~ん」

3コマ

フォスファイ

「レベルを上げるコツって・・・(うん)」
「あたしの場合、ドラゴンファンクへ入る前に」
「冒険者管理組合発行の簡単な王都内依頼をこなしてレベル4まで上げて」
「パーティに参加してからは、アクロたちと一緒に何度か外界へ出て」
「気がつけばレベルも6に上がっていたって感じかな」

パロット

「うむ・・・(汗)」
「やはり、王都内でのクエストを受けないと」
「レベルは上がらないか」(大汗)「(基本は大事だな・・・うん!)」

スファレ

「ええ~~~~っ!」
「それってかなり面倒だよ」(汗)「(できればやりたくないな)」

フォスファイ

「面倒って・・・(苦笑)」
「あたしに言わせれば、レベル1の状態でも度々外界へ出るなんて信じられない!」(汗)「
「たとえ、元がユークナイトだったとしても・・・あれ?」(大汗)「
「パロットって、今期の検定でヒーラーになる前は」
「ユークナイトでアウインの勇者だったんだよね?」
「それなら、経験値とかもたくさん稼いでたはずでしょ?」(レベル1だったわけないだろうし)」

パロット

「あゝ、あの頃は・・・」

「経験値を稼ぐなんて気にしたことがなかったからな」（ぽりぽり）

「頭を掻く」

「レベルも、それこそ気づけば3桁いってたし（ぼそっ）」

スファレ

「3ケタって、レベル100!?（どびっくり）」

「凄っ!!!（大汗）」

フォスファイ

「え〜つと・・・（汗）」

「それなら、レベルを上げるコツなんて」

「初心者あたしに聞く必要なんて無いんじゃないや〜（苦笑）」

パロツト

「だ〜か〜ら〜（汗）」

「レベルを上げることなんて考えたことが無いんだって〜（大汗）」

4コマ

フォスファイ

「とにかく、レベルの上がない原因があるとするなら」

「それは、いまのパロツトがヒーラーであるってこと・・・かな〜

?（汗）」

パロツト

「ん?」

「どづいづいとだ?」

フォスファイ

「ヒーラーのレベルを上げるんだから」

「やっぱり、ヒーラー能力を使わないといけないんじゃない？」

パロット

「ヒーラー能力というと・・・回復法術とかだよな」（汗）

「だったら、経験を積むのは難しそうかな」（大汗）」

フォスファイ

「え、どうして？」

パロット

「だって、オレたちのパーティ」

「怪我して回復を必要とするようなメンバーいないし・・・」（ぼそ

っ）

フォスファイ

「ああ・・・（どきどきどき）」

スファレ

「でも、アルバイトさんは限りなく一般人だよ」（メンバーの中

で唯一・・・）」

パロット

「なら、アルバイトを瀕死の状態に追い込んで」

「オレが回復させることで経験値を稼ぐようにすれば・・・」（ぼそ

っ）

エルバイト

「って、ふざけるなーーーーー！！」（があああー！）」

ちゃんと聞こえています（笑）

スファレ

「それじゃあ、わたしは？」

「わたしは戦士なんだから、戦っていれば経験値も入るはずだよね
」？」

フォスファイ

「あゝ、スファレのレベルが上がらない理由は……」(汗)

「……」(大汗)

「……へっぽこだから？」(ぼそっ)「(おそろく……)」

スファレ

「やっぱり、そんな理由か……!!」(大泣き)「(うにゃゝ」

ゝゝ!!!) 予想通り？」(笑)

効果音「ずがががあ—————ん!!」

コメント

レベル、上がらないだろうなゝゝ (苦笑)

第111話 眠っていてもへっばこ能力発動!!

4コマ劇場 アイオライト―471・・・2011/01/21
シリーズ3

タイトル「眠っていてもへっばこ能力発動!!」

1コマ

深夜、エリアAの野営地にて・・・

フローライト

「すう〜、すう〜・・・(眠)」
ぐっすり眠っている

音も無く登場

謎の人影

「・・・・・・・・(チャキッ)」
短刀を逆手に構える

「・・・・・・・・!!(ぶうっうん!!)」
フローラへ向けて
短刀を一気に振り下ろす

スファレライト
フローラの隣りで寝ています

「にゃむ〜〜(にこっ)」
寝言?

「もう食べられないよ〜〜(むにゃむにゃ)」
幸せな夢を
見ているようです

「うにゃ〜〜っ・・・・・・・・(じろり)」
へっばこ能力発動!!

(寝返りをうつ)

効果音「ずげしっ!!」
スファレの足が謎の人影の腹部にヒ

ットー!

謎の人影

「げふっ!? (からん!)」

おもわず短刀を落す

フォスファイライト

「はふ・・・? (ぼおっ)」

なにやら気配を感じて目覚め

る(まだ寝起き)

「・・・って、誰!? (がばっ)」

異変に気づき慌てて身体

を起こす

謎の人影

「・・・(じいっ)」

無言でフォスファイを見つめる

2コマ

フォスファイ

「も、もしかして・・・(汗)」

「フローラさまを狙っている 暗殺者!? (ごくり)」

「って、見張りをしているパロットたちは」

「いったい何をやっているのよ～～(ちゃきっ)」

鉄の剣

に手をかける

謎の人影

「・・・(ゆらり)」

ゆっくりとフォスファイに近づく

フォスファイ

「ひっ!(びくっ!)」

「そ、それ以上近づくなら・・・」

抜刀した剣先を相手に向

ける

「斬るからね!! (がたがたぶるぶる)」

実力差で勝てない

と感じている

謎の人影

「・・・・・・・・・・(ゆらり)」

さらにフォスファイに近づく

フォスファイ

「く、来るな――！！(ぶんぶん)」

剣を振り回す

謎の人影

「・・・・・・・・・・(ゆらり)」

説明文「月明りで謎の人影の姿が照らされる・・・」

フォスファイ

「・・・・・・・・・・え？」

「うそ・・・でしょ(汗)」

「アクロ アイト(大汗)」

アクロアイト ドラゴンファングのリーダー

「・・・・・・・・・・(じいっ)」

恐ろしく冷たい視線をフォ

スファイに向ける

3コマ

フォスファイ

「ちよっ！(汗)」

「どうしてアクロが・・・フローラさまを！？(どびっくり)」

アクロ

「・・・・・・・・・・(ちやきっ)」

鋼の剣を抜刀する

フォスファイ

「ねえ、アクロ・・・(涙)」

アクロ
「……………（そぉ〜っ）」
手にした剣を大きく振り上げる

フォスファイ

「何か言つてよ、アクロー……！！（叫び）」

アクロ

「……！！（ぐわっ！）」
フォスファイ目掛けて鋼の剣を振り下ろす！

突然の登場

パロットクリソベリル

「避けるフォスファイ！（叫び）」

「ライトニング・バー……アスト……！！（がががっ！）」

アクロ

「……！！」
真横に身体を投げ出して、雷光の直撃を避ける

効果音「どつぐわああああ……ん……！！」
雷光が地面に接触した瞬間、大爆発！

フォスファイ

「うおっ！（汗）」

「目が……耳が……！！（ちかちか、じい〜ん）」

4コマ

アクロ

「……………」(ゆらり)「 ゆっくりと立ち上がる
「……………!(たっ!)」 凄まじいスピードで逃げ出す

パロット

「ちっ……………(汗)」

「待ちやがれ!!(たたっ!)」 慌ててアクロを追いかける

フォスファイ

「ぱ、パロット待って!」

「その人は アクロは暗殺者じゃ……………(がっ)」 なに
やら違和感を覚える

「……………ぬ?(大汗)」 ゆっくりと自分の腰を見る

スファレ

「いやぁ〜ん(にごっ)」 フォスファイの腰にしがみついて
いる

「そんなにお願いされたら〜断われないでしょ〜(ねむねむ)」
もちろん寝ぼけています

フォスファイ

「えええええ……………!!(どびっくり)」

「さっきの爆発で、まだ起きてないの……………!!(うそ……………
……………!!)」

効果音「ずが……………ん……………!!」

フローラ

「すう〜、すう……………(眠)」

ロードライト

「うにゅ〜〜（すやすや）」

フォスファイ

「つて、スファレだけじゃなく!」

「暗殺されそうになったフローラさままで夢の中!?(大汗)」「
なんだこいつら!!(」

スファレ

「それじゃあ、遠慮なく・・・」

「いただきま〜〜す（あ〜ん、ぱくっ）」

フォスファイ

「ちよ〜〜〜っ!（涙）」

「スファレ、やめ・・・っ!!(ひゃひっ!!)」 顔が真っ

赤

「あなた、どこにかぶりついてるのよ〜〜〜!!(きゅ〜〜
〜っ!~!!)」

スファレ

「はむはむ、うまうま（眠）」

フォスファイ

「い、いやあああ〜〜〜!!(泣)」

コメント

作者的には、アリスの生まれ変わりはフォスファイじゃなくスファ
レの気がします(爆)

第112話 夜が明けて・・・

4コマ劇場 アイオライト | 472・・・2011/01/22
シリーズ3

タイトル「夜が明けて・・・」

1コマ

早朝、エリアAの野営地にて・・・

パロットクリソベリル

「ふう・・・（やれやれ）」

野営地に戻ってきた

フォスファイライト

「あ、パロット・・・（大汗）」

「アク・・・いえ、暗殺者は どうだった？（どきどきどき）」

パロット

「うん・・・（大汗）」

「逃げられた（くそっ）」 かなり悔しい

「フォスファイ」

「オレがいなかった間、何もなかったか？」

フォスファイ

「うう・・・（涙）」

「寝ぼけたスファレさんに」

「色んなところを はむはむされました（しくしくしく）」
もうお嫁に行けないよ・・・（）

パロット

「いや、そういうことじゃなく……（大汗）」

ジエムシリカ

「護衛を遠ざけて」

「別の暗殺者が対象を殺害する……」

「わたしが護衛につくのわかっていたとはいえ」

「パロットくん、考えなしに暗殺者を追いかけたのは」

「少し軽率な行動でしたよ」

パロット

「うぐっ……（汗）」

「す、すみません（大汗）」

スファレライト

「しかも、追いかけたのに逃げられたんじゃ」

「ほんと、意味無いよね……（ぶつぶつ）」

パロット

「やかまし……い！（涙）」（うるさい、黙れ！！）

2コマ

エルバイト

「それにしても（うぐん）」

「まさか、オレが寝ている間にそんなことがあったとは……（大

汗）」

ロードライト

「あ……れ？（汗）」（寝てたの？）

「確かアルバイトさんも、パロットさんやシリカさんと一緒に」

「見張りをしていたはずなんじゃ」（大汗）」

エルバイト

「あゝ・・・(ぼりぼり)」 頭を掻く

「つい、うとうと〜っとな(あははっ)」「(徹夜は無理!)

ロードライト

「うとうと〜って・・・(大汗)」

パロット

「ロードライト」

「そんなヤツに期待するな・・・」

「頼りにしたオレもバカだった(はあゝ)」

エルバイト

「つて、そこまでいうか〜(大汗)」

パロット

「暗殺者はお前が見張りをしていた位置から進入してきたんだよ!」

「オレたちが異変に気づかなかつたら」

「フローラたちが危なかつたんだぞ!!」

エルバイト

「それは・・・そうなんだが〜(どきどきどき)」

フローライト

「でも、あのときパロットさんが駆けつけなくても」

「なんとかなつたのかもしれないよ(ぼそっ)」「

映像をチエック中〜

記憶石の

パロット

「え、どういうことだ？（汗）」

3コマ

フローラ

「え〜っとですね〜（少し映像を巻き戻して・・・）」
「ここです」

パロット

「ん〜、どれどれ？」

記憶石の映像を再生中〜

謎の人影

『……………（チャキッ）』 短刀を逆手に構える

『……………！（ぶうううんん！）』 フローラへ向けて
短刀を一気に振り下ろす

スファレライト フローラの隣りで寝ています

『にゃむ〜〜（にこ〜っ）』 寝言？

『もつ食べられないよ〜〜（むにゃむにゃ）』 幸せな夢を
見ているようです

『うにゃ〜〜っ…（じろり）』 へっぽこ能力発動！！
（寝返りをうつ）

効果音『ずげしっ！！』 スファレの足が謎の人影の腹部にヒ

ットー！

謎の人影

『げふっ！？（からん！）』 おもわず短刀を落す

少しだけ早送り・・・

謎の人影

『・・・・・・・・・・（ちゃきっ）』

鋼の剣を抜刀する

フォスファイ

『ねえ、アクロ・・・（涙）』

謎の人影

『・・・・・・・・・・（そおっっ）』

手にした剣を大きく振り上げる

フォスファイ

『何か言つてよ、アクローーーーー！！（叫び）』

謎の人影

『！！！！（ぐわっ！）』 フォスファイ目掛けて鋼の剣を振り下ろす！

画面の一部を拡大して注目！！

スファレ

『あ~~~~ん（おいしそう）』 大口を開いて暗殺者の太ももに噛みつきつこうとしている

パロット

（お、おおぅ・・・（大汗））（こんな遣り取りがあつたなんて・・・）

4コマ

フォスファイ

「す、スファレ……（じいじいっ）」

スファレ

「ほへっ!?（大汗）」

「わたし、寝てたからなんにも覚えてないよ！（あせあせ）」

パロット

「うむ……（汗）」

「さすがは、へっぼ……（どきどきどき）」

スファレ

「ちよ……っ!!（大汗）」

シリカ

「これは、パロットくんが邪魔をしなければ」

「暗殺者を捕まえられていたかもしれないね……（うん）」

パロット

「スファレ、すまない（がっ）」 スファレの肩に手を置く

「おまえのへっぼこ、邪魔をして……（うるうる）」

スファレ

「だ……から……!」

「へっぼこ言うな……!!（うにゃ……!!）」

エルバイト

「つて、そうじゃねえさだろ！（大汗）」

「顔、暗殺者の顔……映ってるから……（これこれ……）」

映像を指差す

「しかも、こいつはオレと同期でドラゴンファングの!？」

フローラ

「あゝ、アルバイトさん・・・(汗)」

「この三人がポケ出したら、しばらくは収まりませんので」

「気づいた事実は、もうしばらく落ち着いてから・・・(大汗)」

エルバイト

「そ、そうだな・・・(汗)」

「この話は、また次回にでも・・・(どきどきどき)」

効果音「ずががーーーーーん!!」

コメント

へっぽこバンザ〜〜イ!!

最強です (笑)

第113話 アクロアイト

4コマ劇場 アイオライト | 473 2011/01/23

シリーズ3

タイトル「アクロアイト」

1コマ

早朝、エリアAの野営地にて . . .

パロットクリソベリル

「で . . .」

「いったい何の用だアル . . . フォーニ?」

エルバイト

「誰がアルフォーニじゃー! (叫び)」

「オレは、超麟神じゃねえええ! ! !」

フローライト

「ちよっ! (汗)」

「どうしてあなたが超獣神の一体 . . .」

「超麟神アルフォーニの名前を知っているのよ! ! ! (ど

びっくり)」

「まさか、ダイさんやレイチエルさんたち」 『超獣神グラン

ゾル』のメンバー

「時空族の遺産回収のため、この時代に来てるの! ? (大汗)」

パロット

「超獣神 . . . 、レイチエル?」

「なんだそれ? (ぼそっ)」

フローラ

「あゝ、知らなければそれで良いの……うん（どきどきどき）」
（物語に関係ないから……）

説明文「超獣神とは、四聖界を守護する神のこと……」

「超鳳神グランゾル、超麟神アルフォーニ、超龍神リーンウイ
ツク、超亀神カークンの4体」

「まあ、スファレが時空族の遺産『時の宝珠』を持っている
ので」

「いずれは、彼らも登場することでしょう（爆）」（すでに、
かくくんもいるし……）

2コマ

エルバイト

「そんなことより！」

「映像に映っていたコイツ!!」

前回の続き

「オレと同期で冒険者になったヤツ」

「名前はアクロアイト（汗）」

「たしか、冒険者パーティ……」

「ドラゴンファングのリーダーだったよな!?!?（ギロリ）」
フォスファイを睨みつける

フォスファイライト

「そ、それは……（大汗）」（え〜っつと）

ロードライト

「あゝ、たしかにアクロさんだ〜」

スファレライト

「え？」

「ロードライト、こいつのこと知っているの？」

ロードライト

「はい」

「フォスファイさんたちドラゴンファングも、お姉ちゃんと専属契約を結んでいますから」

「メンバーの皆さんのことは前々から知っています」

パロツト

「で、そのドラゴンファングのリーダーが」

「どうしてフローラを暗殺しようとしたんだ？」

「もしかして、あのシーラ似の暗殺者……」

「スペクトロライトの仲間なのか？」

フォスファイ

「ううん……(汗)」

「ドラゴンファングの名誉のために言わせていただきますが」

「アクロは暗殺とか、そんなことをする人じゃありません！」

「まあ、出会ってまだ1ヶ月ぐらいしか経ってないんだけど……

(ぼそっ)「

3コマ

ロードライト

「そうですね」

「アクロさんは、正義感が鎧を着ているような方ですから」

「暗殺だなんて、なにかよほどの理由があるのでしょうか……」

パロツト

「うん……(汗)」

「なんにしても、実際に暗殺しようとしていたわけだしな〜（大汗）」

スファレ

「どんな理由があつたとしても」

「女王を暗殺しようとしたんだから」

「やっぱり重罪なんじゃない？」

フォスファイ

「そ、そんな〜（大汗）」

シリカ

「……………（じい〜っ）」 盲目ですが映像を見えています

「フローラちゃん」

「さすがに映像ですから、いまいち状況を把握できないのですが〜」

「映っているアクロさん……様子がおかしくありませんか？」

「なにか、自分の意志ではなく 誰かに操られているような……」

フローラ

「さすがはシリカさん」

「アクロさんの身体から何本も出ていますよ」

「髪の毛よりも細い、精霊力の糸が（にこっ）」（みなさん見えませんか？）

パロット

「えっ！？（汗）」（全然見えない！）

「ってことは、つまり……」

「このアクロアイトってヤツは」

「ラリマーの人形使い、スペクトロライトに操られているってこと

なのか！！（どびつくり）」

シリカ

「ええ（こくり）」

「まず、間違いないでしょう・・・」

効果音「ずががーーーーーん！！」

4コマ

エリアA、パロットたちの野営地から少し離れた場所にて・・・

アメトリン

「・・・ん？」

「あつ、アクロ！（戻ってきた）」

「お姫様の様子・・・どうだった？」

アクロアイト

「とんでもないことがあった・・・（ぼそっ）」

ハックマナイト

「んゝ、とんでもないこと？」

「いったい、何がわかったんだ？」

アクロ

「招き猫勇者隊のメンバーでアウインの勇者パロットクリソベルル・

・・・（汗）」

「ヤツがフローラさまを狙う暗殺者の正体だったんだ（大汗）」

ハック

「ちょーーーーっ！？（なんだそれ！）」

「同じパーティー内に命を狙う暗殺者がいたってことか!!(どびびっくり)」

アクロ

「ああ……(汗)」

「暗殺しようとしている現場をこの目で見たんだ……間違いない(どきどきどき)」

アメトリン

「って、招き猫にはフォスファイが同行しているんだよね?」

「そんな危ないヤツのそばにいて、大丈夫なの!?(大汗)」

アクロ

「今は暗殺者の正体に気づいていないから平気だとは思っけど……(大汗)」

ハツク

「もし、気づいてしまったら?」

「フォスファイの命も危ないか……(汗)」

「なんとかして、フォスファイと連絡を取る必要があるそうだな(うっん)」

アクロ

「しかし、あまり表立った行動はできない……」

「現状は、フォスファイを人質に取られているようなものだからな(汗)」

ハツク

「おい、そのパロットクリソベリルってヤツの他は問題ないのか?」

「ロードライトの嬢ちゃんや、レベル1のへっぽこは無関係だと思
うが……」(大汗)

アメトリン

「あやしいのは、最近パーティに入ったアルバイトってヤツかな？
」(うん)

アクロ

「いや……、ボクはユークナイト第3位　ジエムシリカさまが
あやしいと考えている」

ハツク

「つまり、フローラ暗殺には冒険者ギルドのユークレースが関係し
ていると？」

アクロ

「そういうこと……」(うん)

アメトリン

「マジ？(大汗)」

アクロ

「とにかく、フローラさまとフォスフィをヤツらから助け出さなけ
ればならない」

「かなり大変な作戦になると思うけど……みんな頑張ろう！」(ぎ
ゅっ)　「拳を握りしめる」

ハツク

「おう(任せる!)」

アクロ

「……………(ふっ)」

アメトリン

「……………ん？(アクロ?)」

説明文「アクロの身体には、常人には見えない精霊力の糸が何本も繋がっていた」

コメント

意識まで操られているのか、記憶を操作されているのか……どっちだろう？(うーん)

第114話 砂漠の王者、砂つち

4コマ劇場 アイオライト―474・・・2011/01/24
シリーズ3

タイトル「砂漠の王者、砂つち」

1コマ

エリアD、砂漠地帯にて・・・

アンバー ユークレース調査部の一般メンバー

「はあ、はあ、はあ〜(汗)」

「お、おかしい・・・(ごくり)」

「石ころ帽・・・げふげふ(大汗)」

「シンセティック・キャップを被っているのに」

「どうしてヤツらにオレたちの居場所がわかるんだ!!(なんで
ー!!!)」

小池さん(巨大砂蟲) ヤツら

『ぎゃーーーす!!!(叫び)』

アンバー

「ちっ・・・」

「他のメンバーともはぐれちまったし(汗)」

「何かあったら探索を中断してでも王都へ・・・って、最初の打ち
合わせ通り」

「一度、戻ったほうが良さそうだな〜(大汗)」

「とはいうものの・・・(う〜ん)」

「ヤツらに見つかからないよう砂漠を出るのは」

「そうとう苦勞しそうだな・・・(どきどきどき)」

小池さん

『あんぎゃーーーーー!!』

効果音「さぁーっ、さっ」

砂が流れる音

アンバー

「ななっ！（びくっ）」 慌てて振り返る

「み、見つかつ・・・た？（あれ？）」

突然の登場

美咲

「・・・・・・・・（じいっ）」 アンバーを凝視している

「えっつと（汗）」

「こんなところで、何をされているんですか？（苦笑）」

アンバー

「って、ちびっ子女子さん登場ーーーー!!（どびっくり）」

効果音「ずががーーーーーん!!」

2コマ

数分後・・・

美咲

「シンセティック・キャップ ですか？」

「なんだか、未来からやって来たネコ型ロボットの秘密道具みたいですね」

アンバー

「なんだよ、その設定・・・(汗)」

「っていうより、いまならながら・・・どうしてオレの姿が見えてるんだよ!!! (大汗)」

美咲

「その秘密道具を被っても、気配が消せるっていうだけで」

「実際にアンバーさんが消えるわけではありません」

「ですので、見つけ出すのはそれほど難しくありませんよ」

「一般人には無理です」

アンバー

「な、なるほど・・・(汗)」

「だからシンセティック・キャップを被っているというのに」

「小池さんに見つかったわけか(大汗)」

美咲

「いいえ、小池さん・・・でしたっけ？」

「あの砂蟲さんは、基本 砂の中で生活していますから視力は退化しており」

「獲物の臭いや動くときに発生する音・・・」

「生体から出ている微弱な電波とかを頼りに狩りをしています」

「なので、このように喋っているだけでも」

「お腹を空かせた砂蟲さんが集まってくる可能性が・・・あ(汗)」

何かに気づく

アンバー

「え?(ひょいっ)」

ふと見上げる

小池さん

『………』
『あんぎゃ—————!!』

アンバー

「ぎゃぎゃ—————っ!! (大泣き)」

3コマ

小池さん

『がぎゃ—————っ!!』 吼えています

美咲

「うーん…… (汗)」

「やっぱり見つかったちゃいましたね (苦笑)」

アンバー

「って、なに呑気なことを!! (汗)」

「や、やべえ (大汗)」

「どうする…… (どきどきどき)」

「小池さんに見つかったら最後、戦うしかない……が」

「オレだけであの小池さんに適うわけがない (うーん)」

「だったら、せめてこのちびっ子巫女さんだけでも逃がさないと……」

美咲

「あ……、この砂蟲さんって」

「この前、襲ってきた個体と同じのようですね」

「あのときは、魔石に憑かれて凶暴化していました」

「今回は、純粹に獲物を捕食するために現れたようです」

「だから 喰うか喰われるかの関係に……遠慮は要りませんよ

ね (ぼそっ) 「

アンバー

「へ？(汗)」

「おまえ、何を言ってる……(大汗)」

美咲

「はあああー！ーっ！(たっ)」
　　一步踏み出したと思
った瞬間、砂蟲の懐に潜り込んでいる

アンバー

「えええええー！ー！(どびっくり)」(速っ!?)

効果音「ずがががががっ!!」
　　砂蟲の腹を連続で蹴り上げる!

小池さん

『げふっ、ごほっ、ぎゃふっ!?(大汗)』
　　みるみる上空へ

浮かびあがる (笑)

アンバー

「えええええー！ー！? (うそー！ー！!?)」

4コマ

小池さん

『わきやー！ー！ー！(しゅるしゅる)』
　　複数の触手を美

咲に向けて伸ばす

美咲

「来てください……白虎の瑞雲さん……(叫び)」(瑞雲さんし
よーかん!ー!)

瑞雲 霧状の白虎

『があああああーーーー！！（咆える）』 次の瞬間、白
鞘の日本刀になる

美咲

「えいやああああ！！（しゃきしゃきん！！）」 迫り来る
触手を斬り刻む！

小池さん

『わぎやぎやーーーー！！（涙）』

美咲

「とう！！」 空を駆けながら砂蟲へ近づき、頭上に着地する
「……………（ちゃきつ）」 四神刀白虎の瑞雲の切っ先
を砂蟲の頭に向ける

小池さん

『……………（わぎや）』 急に大人しくなった

効果音「ずしーーーーーん！！」 砂蟲の巨体が砂地に着
地する

アンバー

「す、すげえ……………（大汗）」
「一瞬で勝負がついた（どきどきどき）」

美咲

「……………（じいっ）」
「ふう〜（やれやれ）」 構えを解いて、砂蟲の身体から飛び
下りる

アンバー

「っつて、おい！」

「どうして止めを刺さないんだよ!? (叫び)」

「自由になつたら、また襲ってくるぞ!! (大汗)」

美咲

「いいえ、この砂蟲さんは既に戦意を失っています」

「もう戦いになることはありませんよ (ぴこ〜ん、ぴこ〜ん)」

「っつて……、え? (きよろっ)」 左腕につけている召喚の

腕輪を見る

「空の契約石が光ってる……」

「これっつて (汗)」 不意に砂蟲を見る

小池さん

『…… (じい〜っ)』 仲間になりたそうな表

情で美咲を見つめている (笑)

美咲

「え…… (汗)」

「砂蟲さん、仲間になってくれるんですか!?! (びっくり)」

小池さん

『…… (じくり)』 頷いているように見える?

美咲

「ありがとうございます〜 (ぴかーっ!)」 空の契約

石が輝きだす

「え〜っつと、砂漠の王者……砂っち〜」 小池さんのお仲

間名? (笑)

「お仲間、新規契約完了〜〜〜」 (きらりん) 「契約石に砂つちの印が浮かび上がる

小池さん改め、砂つち
『ぎゃお〜〜〜〜ん』

ラリマー

「……………(大汗)」
「な、なんだこの展開……………(どきどきどき)」 (わけわかんねえ〜〜〜!)

説明文「美咲はたくさんの異形とお仲間契約を結んでいて、召喚の腕輪と契約石を使うことで」

「様々な場所・時空・時代から、契約を結んだお仲間を召喚することができます」 銀星さんとか

コメント

砂つち、ゲットだぜ (爆)

第115話 美咲側のメンバーも決定？

4コマ劇場 アイオライト | 475・・・2011/01/25
シリーズ3

タイトル「美咲側のメンバーも決定？」

1コマ

エリアD、砂漠地帯にて・・・

アンデシン ルチルクォーツ王国騎士団長

「うう・・・（汗）」 王都へ戻る途中？

「砂漠を歩くのに騎士鎧は合わないな（苦笑）」

「暑いし、重いし、足が砂に埋まるし（うぐん）」

「次からは、乗り物 砂漠のラクダ的移動手段を用意するように・・・ん？」

効果音「ずずずっ、ずずずっ！」

アンデシン

「な、なんだこの凄まじい地響きは!？（きよろきよろ）」

「まるで、巨大な物体を引きずっているような・・・（汗）」

「とにかく、ただ事ではない!!（大汗）」

効果音「ずずずっ、ずずずっ！」

アンデシン

「・・・こっちか!」 地面に手を当てて、振動を感じ取っている

「・・・こっちか!（たたっ）」 振動に向かって駆け出す

辺りを見回せる砂丘に辿り着く・・・

アンデシン

「あれは、砂漠に生息する魔物　小池さん(汗)」

「砂の中を潜らずに移動するところなど、初めて見たな(大汗)」

「しかも、あの小池さんの大きさ・・・」

「通常の小池さんよりふた回りはデカイぞ(ときどきどき)」

「小池さんの大移動・・・いったい何が起きているんだ?(うん)」

「小池さんが目指している方向」

「あの先には、確か忘却の迷宮のある森林が・・・ええっ!?(どびっくり)」　　何かに気づく

どこかの高い場所・・・

アンバー

「・・・・・・・・(汗)」

「調査に出て、まさかこんな奇妙な体験をすることになるとは思わなかった(ときどきどき)」

「っていうか、これ・・・遅くねえか?(大汗)」

「歩いた方が早いような・・・(ときどきどき)」

美咲

「そつですか?」

「目線が高いから遅く感じるだけで」

「結構なスピードは出てますよ」

「それに、せっかくのご好意なんですからお受けしないと」

「ねえ、砂っち」(にこっ)」

砂つち〜（巨大砂蟲）

『ぎゃおお〜〜〜〜』

美咲とアンバーを頭上に乗せ

ている（爆）

アンバー

「ちよつ、咆えるな—————！！（涙）」
必死に身体を支えている

アンデシン

「……………（大汗）」

「って、小池さんに人が乗ってるのか—————！！（どびっくり）
」（信じられない！！）」

効果音「ずがが—————ん！！！！！！」

3コマ

美咲

「あ、アンバーさん」

「気をつけないと危ないですよ」

アンバー

「わかっている！（汗）」

「さすがにこの高さなんだから、怪我だけじゃすまねえ……………」

美咲

「それもあるんですが」

「今は砂つち〜と一緒ですから安全ですが」

「はぐれると、間違いなく他の砂蟲さんに襲われますから（あははっ）」

アンバー

「さらっと恐ろしいこと言ってるんじゃないやねええええ!! (涙)」

砂っち

『ぎゃふ~~~~』

楽しそうです

アンデシン

「もしかして・・・」

「ラリマーの斥候か？」

「そして、ヤツらは魔物使い!! (汗)」

「そんな魔物使いが忘却の迷宮を目指しているというとは・・・」

「ヤツらの目的は、迷宮に巣食う古の巨大魔蟲を操ること!?! (大

汗)

つつこみ「全然違います (爆)」

4コマ

美咲

「ではでは、砂っち」

「忘却の迷宮に向けて、レッツゴ〜です (お〜) (」

砂っち

『ぎゃお~~~~ん』

効果音「ずずずっ、ずずずっ...」

アンデシン

「ま、まずい・・・ (汗)」

「王都で小池さんや古の巨大魔蟲が暴れたら」

「被害も甚大だ・・・ (どきどきどき)」

「……………」何かを考えている

「王都への報告も急ぎだが」

「こちらも何とかしなければならぬ……」(大汗)

アンバー

「って、あまり揺らすんじゃないやねええええ!!」(叫び)

アンデシン

「よし……」(くぐり)

「まずは、あのラリマーの斥候を捕まえることにしよう」(ぼそっ)

美咲

「……………」(うん)

「で、さっきから見当違いなことばかり言っている」

「あの騎士は……誰?」(大汗)「もちろんアンデシンの存在に気づいています」

アンバー

「ん?」

「美咲、どうした?」

美咲

「うん(汗)」

「なんでもないですよ……」(苦笑)

効果音「ばきゅ……………」

コメント

アンデシンさん、おひさ……(笑)

第116話 ちよっぴりフライング？

4コマ劇場 アイオライト―476・・・2011/01/25

シリーズ3

タイトル「ちよっぴりフライング？」

1コマ

エリアA、温泉地にて・・・

フォスフォファイライト

「・・・・・・・・・・（う〜ん）」 何かを思い出している

回想中・・・・・・・・

パロットクリソベリル

『フォスファイ・・・』

『ドラゴンファングのリーダーであるアクロアイトが』

『ラリマーの人形使いスペクトロライトに操られているのは間違い

ない』 説明口調（笑）

『アクロアイトが・・・いや、他のドラゴンファングのメンバーが
接触してきても』

『簡単に言うことを聞かないよう 話に乗らないことにしてくれ』

『操られているのがアクロアイトだけとは限らないからな（ぼそっ

』

フォスファイ

『えっ！？（汗）』

フローラ

『そうですね……』

『パロットさんの言うように』

『他の皆さんも、ラリマーの暗殺者に操られていると考えるべきなのかもしれません』

フォスファイ

『そ、そんな……！』(涙)

パロット

『とにかく、目の前の脅威は排除しなければならない』

『次にドラゴンファングのメンバーが敵として現われたときは』

『フォスファイも覚悟をしておいてくれ』(ぼそっ)

フォスファイ

『うぐっ……』(大汗)

回想終了……

フォスファイ

『……』(うつつ)

『いったい、どうすればいいんだろう？』(涙)『どうしてこんなことに……』

スファレライト

『温泉発見……！』(叫び)

フォスファイ

『ひっ……！』(びくっ)

突然、現実に引き戻される

『……』(ぎぎぎぎぎ)『す、スファレ……？』

2コマ

スファレ

「ねえパロット〜」

「やっぱり温泉に入っていこうよ〜」

甘えたような声

パロット

「だ〜か〜ら〜」

「その話はもう終わったはずだろ〜（汗）」

「温泉に入るとしたら、DCの仕事を終えてからだ」

スファレ

「そんなに急がなくても大丈夫だっ〜」

「それにほら〜」

「もしかすると、オーピメント洞窟へ向った冒険者パーティも」

「どこかの温泉に浸かっているかもしれないよ〜」

パロット

「って、そんなわけ・・・（苦笑）」

エルバイト

「いや・・・」

「どうやらスファレの予想は当たってたみたいだぜ（ほらあそこ・・・）」

（ ）

スファレ

「え？」

説明文「少し離れた温泉に浸かっているのは先に出発していたはずの冒険者連中だった」

3コマ

パロット

「ふむ、男三人組・・・」

「どうやらオービメント洞窟へ向った冒険者パーティに間違いなさそうだな」

エルバイト

「ちっ・・・」

「女冒険者の入浴シーンとかなら盛り上がるっていうのに・・・）
ぶつぶつ）」

ジエムシリカ

「・・・・・・・・・・・」

スファレ

「アルバイト、さいって~~~~（むかつ）」

エルバイト

「いや、オレは一般的な意見を・・・言っただな」

「パロット、おまえもそう思うだろ」（汗）」

パロット

「・・・・・・・・・・・（汗）」

「オレに振るな・・・（ぼそっ）」

シリカ

「え、え〜つと・・・（汗）」

「もし、パロットくんが・・・どうしても言っただけでしたら」

「お姉ちゃんが温泉に入ってあげても~~~~（ぼっ）」
自分
分
で
言
っ
て
て
顔
が
真
っ
赤
に
な
る

エルバイト

「ほお〜(にやり)」

「さすがはユークナイト第三位(ナンバー3)、ジエムシリカさま・
・(ふふふっ)」

「番組の盛り上げ所をわかってらっしゃる(にた〜っ)」

パロツト

「番組って何だよ・・・(やれやれ)」

4コマ

エルバイト

「さあ、シリカさん」

「さっそく温泉に入っていただけませんか？」

「いかにも興味の無さそうな顔をしていますわ〜」

「パロツトも・・・本心では期待しているんですよ(にやり)」

パロツト

「おい!?(なに言って・・・)」

シリカ

「う〜ん、しょうがないな〜」

「パロツトくんにそんな期待されたら・・・」

「お姉ちゃん、がんばっちゃうんだから〜〜(するする)」

衣服を脱ごうとする

パロツト

「ちょーーーーー!?!?(どびっくり)」

「し、シリカさん!(大汗)」

「何脱ごうとしてるんですかーーーー!!!(やめーーーーっ!!--!!--!!--)」

エルバイト

「おお〜（にた〜っ）」

「おおおお〜〜（にやにや〜〜）」
脱衣シリカ
をガン見

スファレ

「ふんっ！！（ずぼっ！）」
突然、指でエルバイトの両眼を
突く！

エルバイト

「ぬが〜〜〜！！（じたばたじたばた）」
地面に転
がり七転八倒

スファレ

「キサマにシリカさまの素肌を見る資格無し！！（うが〜〜〜
！！）」
シリカのファン

フローラ

「あ〜・・・（汗）」（す、スファレさん・・・？）
「よ、よい子のみんなは危険だから絶対にマネしないでね（てへ
っ）」

エルバイト

「って、ふざけるな〜！！（激怒）」
「失明したらどうする！！（があああ〜！！）」

シリカ

「・・・（汗）」
「慣れればそれほど不自由はありませんよ・・・（ぼそっ）」

この人盲目です

パロット

「あゝ、シリカさん・・・」

「それは、シリカさんだけだと思いますよ（大汗）」

シリカ

「え・・・（汗）」

「そうなのかな〜」（どきどきどき）「で、まだ脱いだ方がいいのかな〜？」

効果音「ずががーーーーーん!!!」

コメント

エルバイトとシリカが勝手に暴走して、予定していたネタまで進みませんでした〜（爆）

第117話 温泉では何が起こるかわかりませんか？

4コマ劇場 アイオライト―477・・・2011/01/26
シリーズ3

タイトル「温泉では何が起こるかわかりませんか?」

1コマ

エリアA、温泉地にて・・・

ロードライト

「……………(じい~~~~っ)」 遠目で温泉に入っている冒険者を眺めている

スファレライト

「ふふふっ(微笑)」

「なに、ロードライト?」

「男の人の裸に興味あるの~~~~」

「いや〜、お年頃だね~~~~ (にやにや)」

「ねえ、パロット?」

「ここは一つ、ロードライトの後学のために一肌脱いで・・・」

「色々と観察させてあげたら どう?(ぼそっ)」

ジエムシリカ

「はい、はあ〜い!」 手を挙げる

「その勉強会・・・わたしも参加させてください」 相変わらずパロットのことになると崩れます(爆)

パロットクリソベリル

「って、誰が脱ぐか!!! (うが~~~~!!)」

ロードライト

「あゝ、いえ……」

「あの冒険者なんですが」

「どこかで見えたような気がして……」(汗)

「うん、遠すぎてよく見えない……」
背伸びしてよく見
ようとする

スファレ

「……(汗)」

「期待していた反応ではなく、真面目な答えが返ってきました」
恥ずかしがると思っていたのに……)

「いったいわたしたちは、どうすればいいのしょうっ……(どきどき
どき)」
パロットに意見を求める(笑)

パロット

「だから、オレに聞くな……!!」(大汗)

効果音「ずがが……」

2コマ

ロードライト

「えっつと……?」(じいっつ)

「あっ、あの人たちって!」(思い出した!)

スファレ

「え?」

「やっぱり知り合いだったの?」

ロードライト

「知り合いつていうか〜(うん)」

「パロットさんは、わたしと初めて会ったときのこと・・・覚えて
いますよね？」(汗)「

パロット

「ん〜？」

「ロードライトがエリアGで」

「坂本さん(巨大テイラノ)に追いかけていたときのことだろ
〜？」

「もちろん覚えているさ〜」

「つていうか、衝撃過ぎて忘れようがない・・・(ぼそっ)」「(あ
れにはびっくりした)

ロードライト

「あは、あはははっ・・・(苦笑)「

スファレ

「えっ、なに！(汗)「

「あんたたちの出会いって」

「そんな面白状況だったの!?(どきどきどき)「
スファレはラスボスに捕まっていました
その頃、

エルバイト

「・・・(じくり)「

「話を聞いているだけでも、すげえ〜な・・・(大汗)「(坂本さ
んって、かなり凶暴なはず・・・)

3コマ

ロードライト

「それで・・・(汗)「

「そのときの冒険で、護衛契約を結んでいたのが」

「あの三人なんですよ」（苦笑）「（途中ではぐれましたけど・・・）」

パロット

「ほお・・・（ギロリ）」 冒険者三人を睨む

「あいつらがロードライトを罠にして、自分たちだけで逃げ出した冒険者パーティ・・・」

スファレ

「え、そうなの・・・？（じいっ）」 冒険者三人を見つめる

「それは ちよっと許せないねっ」（むっ）」

ロードライト

「いやっ、罠とかじゃなく・・・（汗）」

「単にはぐれてしまったただけで！！（大汗）」 明らかに三人組を庇っています

パロット

「その後、シンセティックさんにお仕置きされたって聞いてたけど・・・」

「意外に元気そうじゃないか」（ふふっ）」

スファレ

「そうだね・・・」

「こんなところで、のんびりと温泉に浸かっているってところが許せない（ぼそっ）」

ロードライト

「あ、あのっ（汗）」

「わたしの話、聞いてくれてありがとうございますか〜」（大汗）

エルバイト

「おいおい（汗）」

「自分が温泉に入れないからって」 温泉は仕事が終わってから

「微妙に八つ当たり入ってねえ〜か？（あはははっ）」

スファレ

「！！！（ギロリ）」 エルバイトを睨みつける

エルバイト

「ひっ！！（涙）」（「）、恐え〜〜）」

4コマ

シリカ

「とにかく、これはチャンスと考えるべきでしょう・・・」

「あの三人が温泉に入ってるのんびりしているうちに」

「エリアCの火山地帯にあるオービメント洞窟を目指すことにしましょっ」

パロット

「そう・・・だな」

「納得はいかないが 奴らより先にオービメント洞窟へ着かない

と」

スファレ

「ええ〜〜」

「せっかくだから懲らしめてお〜っしょ〜〜」

ロードライト

「ちよつ、懲らしめるって!! (大汗)」

パロット

「スファレ・・・(汗)」

「気持ちわかるが、オレたちはDCの仕事で極秘裏にオービメント洞窟を目指しているんだ」

「奴らに見つかるわけにはいかない(ぼそっ)」

「だから・・・(ひょいっ)」 一つの小石を拾い上げる

「今は、この小石を温泉に投げ込んで(ぎゅっ)」 なにやら小石に力を込める

「少し驚かす程度にしておこう・・・(うん)」

ロードライト

「ま、まあ(汗)」

「その程度なら・・・(驚かすだけですよ)」

スファレ

「ん、しょうがないな(はあ)」 小石を受け取る

「それじゃあ、できるだけ三人の真ん中を狙って(ぎゅっ)」

パロット

「くれぐれも人に当てるなよ」

「マジで危ないから・・・(ぼそっ)」

スファレ

「わかってるって(ぎゅっ)」

「ピッチャー、スファレちゃん」

「第一球を・・・投げた(びゅーん!!)」

大遠投

効果音「ひゅー……う……ぼちゃん」
温泉に着水
小石が

冒険者たち
「ぬ？（何だ？）」

効果音「どががががががっ！！」
突然、温泉に電撃が走る
！！

冒険者たち
「がががっ、がぎゃー……あ！！（びりびりびり！）」
電撃を喰らってガイコツが見える（爆）

ロードライト
「なあああー……！！（どびっくり）」

パロット
「よっしゃー……！！」
「雷力付加石……投げ込み作戦」
雷を込めた石？
「成功……」

スファレ
「パロット、ナイス（ぱちっ）」
パロットとハイタツ
チ

シリカ
「……って（汗）」
「成功でもナイスでもないでしょ！（ゴン、ゴン！）」
パロ
ットとスファレに拳骨を喰らわす

パロット

「ぎゃふっ!! (涙)」

スファレ

「いったー!ー!ー!ー!ー!ー! (泣)」

パロット

「ちよっ、シリカさん (涙)」

「何するんですか〜 (いたたっ)」

スファレ

「そうそう (しくしくしく)」

「ちよっと、温泉を電気風呂にしてあげただけなのに〜 (さすりさすり) (後頭部をさすっている)」

シリカ

「あれの、どこが電気風呂ですかー!ー!ー!ー! (怒)」

冒険者たちを指差す

冒険者たち

『…… (ぶすぶすぶす) 』 黒焦げになって水面から半ケツだけ出して浮かんでいる (笑)

ロードライト

「あ、ああ〜 (どきどきどき) (この二人って……)」

エルバイト

「おまえら、ほんと息ぴったりだな〜 (苦笑)」

コメント

結果的に、お仕置き大成功！

(笑)

第118話 ドラゴンファングも温泉に興味がありそうです

4コマ劇場 アイオライト―478・・・2011/01/28
シリーズ3

タイトル「ドラゴンファングも温泉に興味がありそうです」

1コマ

エリアA、温泉地にて・・・

アクロアイト ドラゴンファングのリーダー

「うん・・・」

「どうやら招き猫勇者隊は」

「この温泉地の先にあるエリアC・・・火山地帯に向ったようだな」

ハックマナイト

「火山地帯か〜（汗）」

「暑いのが苦手なただけだ〜（大汗）」

アクロ

「暑いとか言っている場合じゃない・・・」

「フローラさまやフォスフィの命が危ないんだぞ！」

アメトリン

「・・・温泉（ぼそっ）」

アクロ

「そう、温泉・・・」

「・・・」

「・・・はい〜？（大汗）」

アメトリン

「ねえアクロ〜」

「せっかくだから、温泉入っていきよ〜」

アクロ

「って、アメトリン〜・・・(涙)」

効果音「ずががーーーーーん!」

2コマ

ハック

「温泉か〜〜」

「なんだ、アメトリン・・・(にやり)」

「オレたちと混浴したいってことか?」(にやにや)」

アメトリン

「・・・・・・(じい〜〜〜っ)」(ジト目でハックを見つ

める

「はあ〜〜(やれやれ)」

ハック

「って、ちょっとは反応してくれよーーーー!」(うたやーーー

ーーーー!)」

アクロ

「お、おまえら・・・(しくしくしく)」

「・・・・ん?」(何かの気配に気づく)

効果音「ちゃぷん・・・かぽーーーーん」

露天湯ではあ

りえない効果音（笑）

アメトリン

「先客・・・かな？」

「あつちで誰かが温泉に入ってるみたい・・・（ぼそっ）」

ハツク

「ほお・・・（にやり）」

「オレの第六感で」

「入浴中なのは、若い女性でお一人さまとみた！」

「こいつは、是非とも拜んでおかないと（ふふふっ）」

アメトリン

「うわあ・・・（汗）」

「こんなところに変質者がいるよ～～～（きしょっ!）」

ハツク

「誰が変質者かーーーーー!!（うがーーーーー!!）」

3コマ

アクロ

「まあ、誰が入っていようと関係ないとは思うけど・・・」

「現実的に考えてみて、こんな危険な場所にある温泉なんだから」

「若い女性が一人で入っているわけないだろ?（汗）」

「招き猫勇者隊は、先に行ったわけだし・・・（大汗）」

「もしかすると、温泉に入っているのは魔物かもしれない」

ハツク

「けっ、あまいぜアクロ!」

「この気配は、100%女・・・」

「しかも、この感じからすると相当の美人!!」
断言して
います(笑)

「そんな美人が温泉に入っているんだ」
「覗かないと相手に失礼だろ?」

アメトリン

「あゝ、ハツクの言っている意味が理解できない・・・(大汗)」

ハツク

「だったら、オレの言っていることが真実だと証明するためにも」
なぜそんな話に?(爆)

「どんなヤツが温泉に入っているか確認する必要があるよな~~~~」
(うひひっ)「

アクロ

「おいハツク・・・(いい加減に)」

ハツク

「うはははっ!」

「おまえらが何と言おうとも・・・(キュピーン)」
瞳が妖
しく光る

「もはやオレを止めることはできねえ」(たたっ)「
突然、
気配に向けて走り出す

アメトリン

「あーっ、この変質者!!」(叫び)「

アクロ

「って、冗談じゃない!」

「これで入浴している人に見つかって通報されたりしたら・・・」

「警備団にハックが捕まって」

「ドラゴンファングの知名度を上げるところの話じゃなくなる！」

「アメトリン、手遅れになる前にハックを捕まえるぞ！！（たたっ）」

「ハックの後を追う」

アメトリン

「言われなくても！！（たたっ）」 同じく

4コマ

ハック

「おお〜・・・」

「おおお〜〜（じい〜〜っ）」 岩陰から温泉を覗いて
いる

アメトリン

「あっ、いた！」

「マジで覗いてるーーーーー！！！」

アクロ

「ちよっ、ハック！」

「おまえ、いい加減に・・・（ひそひそ）」

ハック

「アクロ・・・あれを見る（ぼそっ）」

アクロ

「ん？（何をだ？）」

「・・・って、ええっ！？（大汗）」

????

18歳ぐらいの美人な女性

「あう、あゝわわゝゝ」 鼻歌？

アクロ

「おおおっ！？（ぶるぶる）」 顔を真っ赤にしてパニック
ている

ハツク

「なあゝ」

「オレの言ったとおり、美人だったろゝゝ」 （にやり）

アメトリン

「って、二人とも」

「見ちゃダメー！ー！ー！！（だあああ！！）」 身体を使
った体当たり

ハツク

「ちよちよっ、押すな！ー！ー！ー！！（叫び）」（見つかった
まうだろ！）

????

「あうっ！？（びくっ）」 突然現われたハツクに驚く
「……………あう？（大汗）」 胸元を隠す

ハツク

「あゝ……………（汗）」

「や、やあお嬢ちゃん（大汗）」

「湯加減は……………どうかなゝゝ」（あははっ）」

????

「あう……………あわわっ！？（涙）」 ペンダントをギュッと握

り締める

「アルフォーーーーーニ！！（泣き叫び）」（やっちゃえーーーー
ー！！）

突然の登場

麒麟を模したぬいぐるみ？

『このっ、不埒者！！（ずじじっ！）』 怒りの炎を纏って体
当たり〜

ハック

「げふっ！？」 腹部にももの凄い衝撃を受ける

「って、ぬいぐるみが・・・喋ったーーーー！！（うにゃー
ーっ！！）」 吹っ飛ばされる

効果音「びゅーーーーっ、きらりん」 星になりました

アメトリン

「おおぅ・・・（汗）」

「見事にぶっ飛んだ〜」（どきどきどき）」

アクロ

「って、そんなことより！（汗）」

「女の子同士、その子にちゃんと説明してくれーーーー！！
（うにゃーーーーっ！！）」

コメント

次回、彼女の正体が明らかに！？ バレバレです（笑）

第119話 四聖界からの来訪者

4コマ劇場 アイオライト― 479・・・2011/01/29

シリーズ3

タイトル「四聖界からの来訪者」

1コマ

エリアA、温泉地にて・・・

アメトリン

「てなわけで・・・」

「ほんとーにごめんなさい！！」(ペロロ)

アクロアイト

「すまない！！」(ペロロ)

????? ぬいぐるみを抱っこしている

「……………」(ぶく〜っ) 「可愛く頬を膨らませる

麒麟を模したぬいぐるみ?

『この二人は悪気も無かったようですし』

『もう許してあげればどうですか?』

『レイチエル…………』

レイチエル

「あう……………」(汗) 「恥ずかしかったのに〜

「アルフォーニがそういうのなら……………」(っひっひっ)

アルフォーニ(ぬいぐるみ型)

『と、いうわけです・・・』

『吹っ飛んでいった不埒者については別ですが』

『お二人は、もう気にする必要はありませんよ』

『・・・って(汗)』

アクロ

「・・・(大汗)」

アメトリン

「喋る・・・ぬいぐるみ?(どきどきどき)」

アルフォーニ(ぬいぐるみ型)

『あゝ・・・(汗)』

『初見の方には毎回同じことを言いますが』

『わたしはぬいぐるみではなく・・・超獣神という四聖界の神で』

(苦笑)』

説明文「超獣神や四聖界とか、あまり関係ありませんので気にしないでください (爆)」

2コマ

アクロ

「ところで、レイチエル・・・さんは(汗)」

「どうして温泉なんかに入っていたんですか?」

レイチエル

「あうゝ、どうしてって・・・(汗)」

「普通に良さそうな温泉があったから入っていただけで(大汗)」

「あと、呼び捨てでいいですよ(にこゝっ)」

アクロ

「そ、そうですか・・・(ぽっ)」 レイチエルの笑顔に照れている

「ですが、この辺りはエリアAの中でもかなり危険な地区です」

「どんな魔物が出てくるかわかったものじゃない・・・(汗)」

レイチエル

「あう・・・」

「危険なんですか・・・」

「そんな危険な場所で、みなさんは何をされていたんですか？」

アメトリン

「あゝ、この国の女王さまと仲間の命が狙われて・・・」

アクロ

「アメトリン!!!(しいーっ!!)」

アメトリン

「うぐっ・・・(汗)」(つい口が滑って・・・)

レイチエル

「・・・(あう)」(聞かない方が良さそう?)

「なんにしても、わたしには関係なさそうなお話ですね」

「それでは、わたしはこれで失礼します(ぺこり)」

「あう、はやくダイたちと合流しないと・・・(ぼそっ)」

3コマ

アクロ

「ちよっ!!」

「待ってくださいレイチエルさん!!!(汗)」

レイチエル

「あう？」

アクロ

「あなたにも何か目的が・・・あるようですが」

「こんな危険な場所であなただけを行かせるわけにはいきませ
ん」

アメトリン

「出たよ、アクロの勇者気質！？（大汗）」

レイチエル

「・・・・・・・・」

アクロ

「だから、安全な場所までボクたちと一緒に！」

レイチエル

「あう・・・・・・・・」

「これからの目的のため、一足先にこの聖界の人と」

「仲良くなっていることもアリかな・・・（ぼそっ）」

アクロ

「・・・え？（なにか言いましたか？）」

レイチエル

「いいえ、なんでもありません」

「それではお言葉に甘えて」

「しばらくお供させていただきますね（にっこり）」

アクロ

「……………(ぼっ)」

顔が真っ赤になる

4コマ

アメトリン

「って、アクロ！（ちょっと！）」

アクロを引っ張って内緒

話

「あんた、何考えてるのよ！？（ひそひそ）」

「わたしたち、これから招き猫勇者隊を追いかけないといけないのよ！！（ひそひそ）」

アクロ

「だが……………(汗)」

「彼女をこのまま放っておくわけにはいかないだろう……………(ぼそっ)」

アメトリン

「それは……………そうなんだけど〜(うゝん)」

効果音「ずしーん、ずしーん！！」

凄まじい地響き

レイチエル

「……………あう？（何かが来る？）」

突然の登場

坂本さん（巨大ティラノ）

『あんぎゃ—————！！！！（叫び）』

エリアA最強クラ

ス

アメトリン

「でも、もしかすると関係のない一般人を巻き込むことになるかもしれないんだよ！」

「レイチエルまで暗殺者に狙われたりしたら！！（ひそひそ）」

坂本さんに気づいていません

アクロ

「大丈夫！」

「レイチエルさんは、ボクが護る！！」 やっぱり気づいてい

ません

アメトリン

「そんなこと言ってるんじゃないでしょ！！（ひそひそ）」（もお
ーーーーっ！）

レイチエル

「あゝ、アクロ？（汗）」

「なんだか、お腹を空かせたでつかいのが」

「わたしたちを狙っているんだけど……って、聞いてない（大汗）」

「あう……（やれやれ）」

「アルフォーニ……、適当に相手してあげて（ぼそっ）」

アルフォーニ（ぬいぐるみ型）

『了解……（ぴかっ）』 瞳が赤く輝き、念動力発動！

坂本さん

『あ……ぎゃ？（ぴきっ！）』 なぜか身体が硬直する

アルフォーニ（ぬいぐるみ型）

『……………（じい〜〜〜っ）』

坂本さんを睨みつける

坂本さん

『あぎゃ、ぎゃ……ふ!?（大汗）』

ゆっくりと身体が浮

かび上がる

アルフォーニ（ぬいぐるみ型）

『え〜っど、えい……（きよろっ）』

顔を振って、明後日

の方向へ視線を向ける

坂本さん

『わぎゃー……（きらりん）』 明後日の方向へ
吹っ飛ばされ星になる

アメトリン

「だから、暗殺者だけじゃなく巨大魔物とかが出てきたらどうする
のよ!」

アクロ

「それでも、ボクが護る!」

レイチエル

「……あう（やれやれ）」

説明文「レイチエルが参加したことで、ドラゴンファンク側の大
幅な戦力強化ができました」

コメント

ちなみにレイチエルは、ペンダントかアルフォーニに触っていないと喋れません

第120話 新たな暑さ対策

4コマ劇場 アイオライト―480・・・2011/01/30
シリーズ3

タイトル「新たな暑さ対策」

1コマ

エリアC、オービメント洞窟入口にて・・・

パロットクリソベリル

「ふう〜・・・(汗)」

「やっと到着したな(やれやれ)」

ロードライト

「はい・・・(ピッ、ピッ)」 冒険者カードを操作して、

ダンジョン内の様子をチェック中

「予想以上に時間はかかってしまいましたか」

「あの三人よりは先に到着できたようです (現在、ダンジョン内には誰もいません)」

パロット

「そうか、そいつはよかった(温泉を電気風呂にした甲斐があったな)」

「それじゃあ、ヤツらがやって来る前に」

「早速、オービメント洞窟へ潜って」

「ダンジョンの再生を始めるか〜」

ロードライト

「お〜」 これまでこなしてきたDCの仕事に比べてめ

「つちや楽しい」

フローライト

「お、おお〜……(汗)」

「……(じぎじぎじぎ)」

「あの〜、パロット……さん？(大汗)」

パロット

「ぬ？(どうした、フローラ?)」

フローラ

「え〜っと(汗)」

「若干二名ほど……」

「大変なことになっていっているようですが〜(大汗)」
振り返って何かを指差す

パロット

「え？(きよろっ)」 フローラの指差した方向を見る

スファレライト

「あ、暑い……(う、うう〜)」 あまりの暑さに頂垂れ
ている

エルバイト

「……(ぶるぶる)」 地面にひれ伏せている

「地熱が……、地面が焼けるように熱い!!(じゅっ〜)」
焦っています

効果音「ずがが〜……ん!!」

2コマ

パロット

「・・・って(汗)」

「おまえら元気無いよな〜〜(ぼそっ)」

スファレ

「逆に、ど〜してあんたらはこの暑さで平然としてられるのよー
ー!!! (叫び)」

パロット

「・・・そんないうほどのことでもないだろ?(ぼそっ)」「(たし
かに暑いけど・・・)」

スファレ

「どこがじゃーーー!!! (うにゃーーー!!!)」

「それに百歩譲ってユークナイトのパロットや」

「精霊神と天空神を親に持つフローラが平気なのはわかる!」

義理の親ですけど

「でも、今期検定で冒険者になったばかりのフォスファイが平然とし
ているのが納得できない!!!」

フォスフォファイライト

「えっ、あたし!?(びくっ)」 突然話を振られてびっくり

スファレ

「レベル6のくせして」

「いったいどんなトリックを使ってるのよーーー!!! (涙)」

フォスファイ

「そ、そんなこといわれても〜〜(苦笑)」

フローラ

「えっつと……(汗)」

「早くオービメント洞窟に潜らないといけないところですが」

「シリカさん……解説をお願いします(大汗)」

ジェムシリカ

「……はあ(やれやれ)」

「パロットくんは、無意識のうちに精霊力で身体を防御しています
が」

「フォスフィさんの場合は」

「その聖剣クリソベリルが 持ち主であるフォスフィさんを」

「色々な要素から護っているみたいですね……」

フォスフィ

「そ、そうなんですか?(ちゃきっ)」 聖剣クリソベリルに
軽く触れてみる

3コマ

フローラ

「さすがはアリスさんの生まれ変わり……」

「聖剣クリソベリルも、フォスフィさんを真の持ち主と認めている
ようです」

シリカ

「ちなみに」

「パロットくんの方の聖剣クリソベリルは……」

「持ち主を一切護ろうとしていないようですね……(汗)」

パロット

「ええー！ー！つ！？（涙）」（そんなー！ー！ー！）

「こいつとは、結構長い付き合いなのに……（しくしくしく）」

フローラ

「まだ、パロットさんは」

「その聖剣クリソベルルに、使い手として認められていませんから（苦笑）」

「それが証拠に、パロットさん……」

「聖剣クリソベルルを持っていると、ずっしり重みを感じますよね？」

パロット

「た、確かに……（汗）」

「こいつはその重さによって、意外に使い所が難しいんだ（大汗）」

フォスファイ

「……（どきどきどき）」（あたしのは、すっごく軽いんだけど……）

スファレ

「ふん……」

「つまり、その聖剣クリソベルルを持っていれば」

「この嫌がらせのような暑さが無くなるわけだね（ぼそ）」

「ねえ、パロット」

「その聖剣、わたしに貸して（こいつ）」

パロット

「誰が貸すか……！！」（叫び）」

効果音「わにゃー！ー！ー！ー！ー！！！」

4コマ

スファレ

「むっっ！」 可愛く頬を脹らます

「ちょっとぐらい貸してくれたっていいじゃないのよ」ぶっぶっ

「

パロット

「渡したら最後……」

「おまえの方が聖剣クリソベリルに選ばれそうで

「なんか嫌だ……(ぼそっ)」

フローラ

「あ……(汗)」

「スファレさんはへっぽこの中のへっぽごですから

「その可能性は充分ありますね……(苦笑)」

スファレ

「へっぽご関係ないよね……(しくしくしく)」

「でも、じゃあこれで我慢するか……(ひょいっ)」

パロット

「ちよっ、てめえっ！(怒)」

「いきなり抱きついてくるんじゃないやねええええー！！！！(大汗)

「

「って、クリソベリルも点滅しはじめてるし！！(涙)」 刀

身がピカピカ光り出す

スファレ

「お、おおおおお」

「なんか、マジで涼しくなった (ぎゅ〜〜っ)」「パロ
ットを抱きしめる

パロット

「だ〜か〜ら〜〜!! (大汗)」

「くっつくな〜〜〜!! (暑いんだよ!!)」

シリカ

「…… (じい〜っ)」「パロットたちを見つめる

「ああ、めまいが…… (ふらふら)」

「どつやらわたしも 暑さにやられたようです (ひとつ)」「
パロットにしがみつく (笑)

パロット

「って、シリカさんは絶対に大丈夫でしょ〜!! (二人と
もひつつくな〜!!)」

エルバイト

「…… (じい〜っ)」「パロットたちを見つめる

「じゃ、じゃあ オレも (ちらり)」もう一本の聖剣の持
ち主、フォスフィをチラ見

フォスフィ

「ひっ!! (びくっ!)」「(っ、こないで変質者!!)」

効果音「ずがが〜〜〜ん!!」

コメント

この場にはいませんが……アクアに抱きついていると冷暖房完

備状態になります
(爆)

第121話 仲間なんだから全員で行動

4コマ劇場 アイオライト―481・・・2011/01/31
シリーズ3

タイトル「仲間なんだから全員で行動」

1コマ

エリアC、オービメント洞窟にて・・・

スファレライト

「うわぁ〜！（汗）」

「洞窟の中はさらに暑いね〜」（熱気むんむんだ〜）
山の地熱で全体が暑い
火

パロットクリソベリル

「って、いつまでくっついてるつもりだよ！」
前回からス

ファレにしがみ付かれています

スファレ

「え〜、そんなこと言ったって〜（む〜）」

「わたしは精霊力のコントロールが出来ないから」

「パロットにくっついていないと死んじゃうでしょ〜」（大汗）

ジエムシリカ

「そうですよ〜」

「パロットくんにくっついてることが重要なんです（ひとつ）」

同じくパロットに腕を絡めている（笑）

パロット

「だ〜か〜ら〜」

「シリカさんは精霊力のコントロール完璧でしょ!」

「あっ、そうだ」 何かを思いつく

「スファレ、おまえシリカさんにしがみ付いたらどうだ?」

「オレなんかより、よっぽど涼しいと思うぞ」

スファレ

「そ、そんな!」

「シリカさまに抱きつくなんて恐れ多い!! (あせあせ)」

シリカに憧れています

「それに・・・」

「そんなことしたら、シリカさまに迷惑がかかるじゃない (ぼそっ

」

パロツト

「オレにしがみ付くのは迷惑じゃないのか――――!! (わざわざ

――――!!)」

フローライト

「あははっ」

「パロツトさん、両手に花ですね」

ロードライト

「・・・」 (じい〜っ) 3人のドタバタを見ている

「いいな〜」 (ぼそっ) パロツトに憧れています

フローラ

「えっ!?! (どびっくり) (ロードライトさんも!?)」

ロードライト

「え〜っと、それでは今回のDCの仕事について説明しますね」

「基本的に、この洞窟での大きなイベントはありません」

「宝箱は全体で12個」

「その中の一つに、この市場では流通していないレアアイテム・・・」

「

「『祝福の短剣』を入れることになります」(このダンジョンの目玉アイテムですね)

スファレ

「12個の宝箱か・・・」

「で、みんなで手分けしてアイテムを設置するの?」

ロードライト

「いいえ、手分けできれば良いんですが」

「これはDCの仕事になりますので」

「みなさんが単独でアイテムの再設置をすることはできないんです

よ(苦笑)

「ダンジョンの再設定には、DCの資格が必要なんです・・・(すみません)」

パロット

「うん」

「やっぱり資格や特殊技能は重要だよな (あははっ)」

第2話参照

スファレ

「うぐっ・・・」

今では特殊能力へっぽこを持っています

ロードライト

「だから、全ての宝箱はわたしが再設置しないとイケません」
「全員で行く必要はありませんが・・・」
「もしここに残るのなら、後から来る冒険者3人組みに見つからないようにしてください」
「また、魔物と遭遇しても決して倒さないでください」
「以上が今回の仕事での注意点です」
「それで・・・みなさんどうされますか？」

パロット

「当然、ついていく」

スファレ

「あたしも」

「DCの仕事って興味あるし」

ロードライト

「え〜っと、そんなに期待されるほどの内容では無いんですが〜」
苦笑） アイテム設置するだけ

3コマ

エルバイト

「ちよっ！」

「オレはぜってー残るからなー！」

「こんな暑い洞窟なんて潜ってられ・・・」

フローラ

「それじゃ〜、残るのはアルバイトさんだけってことで・・・」
「早速、出発しましょう（お〜）（お〜）」

エルバイト

「え？（汗）」

「フローラも・・・行くのか？」

フローラ

「もちろんです」

「アルバイトさんは、お一人だけで残るなんて寂しくないんですか？」

エルバイト

「ひ、一人・・・だけ？（きよろっ）」 シリカとフォスフイを見る

シリカ

「わたしはフローラちゃんの護衛に来ているわけですから」

「フローラちゃんが行くのであれば、わたしもついて行きます」

フォスフオファイライト

「あゝ、あたしも同じ理由・・・げふげふ（汗）」 暗殺者からフローラを護ることが目的

「DCのお仕事に興味あるからついて行きますね（あははっ）」

エルバイト

「お、おおう・・・（どきどきどき）」

ロードライト

「では、出発しましょう」

「あっ、アルバイトさん」

「もしわたしたちに何かがあつて、24時間経っても合流できない場合は」

「一人で招き猫の館へ戻ってくださいね」

エルバイト

「え〜っと・・・（大汗）」

「本気でオレだけ残して行っっちゃうの・・・か？（どきどきどき）」

4コマ

パロット

「しかし、普通はこんな大人数で」

「アイテムの再設置をするわけじゃないんだろ〜？」

ロードライト

「そうですね〜」

「DCの活動は、他の冒険者に気づかれないように行つのが基本ですから」

「ほとんど単独でダンジョンに潜るか・・・」

「数人のDCが協力して、それぞれ別行動でアイテムの再設置に向かったりします」

「もちろん、難易度の高いダンジョンとかですと」

「護衛の冒険者と一緒に・・・ってこともありますが〜」

パロット

「う〜ん・・・」

「今後、オレたちのパーティがDCの仕事を手伝うとして」

「資格を持っているのがロードライトだけってのは効率悪そうだな〜」

「なあロードライト」

「DCの資格ってオレたちでも取れるものなのか？」

ロードライト

「はい、大丈夫です」

「パロツトさんがDCの仲間になってくれたらわたしも嬉しいです
(にこ〜っ)」

効果音「わいわいがやがや」
談笑しながら洞窟の奥へと入
つていく

エルバイト

「お、おい……(大汗)」
一人だけ取り残されている

遠くから聞こえる謎の声

『あんぎゃ—————!!!(雄叫び)』

エルバイト

「!?!?(びく—————!)」

「……(どきどきどき)」

「し、しょうがないから……」

「オレも一緒に行つて……」

突然の登場

シーライト

「……(とんとん)」
エルバイトの肩に触れる

エルバイト

「がぎゃ—————あ!!!(大泣き)」

「で、出た—————!!!(どたどたどた!)」
慌てて
パロツトたちを追いかける

シーラ

「……(大汗)」
現状を確認しようとしただけ

笑)

コメント

シーラも来ていたとは・・・びっくりです！(爆)

第122話 DCの仕事はホントに地味です

4コマ劇場 アイオライト―482・・・2011/02/01
シリーズ3

タイトル「DCの仕事はホントに地味です」

1コマ

エリアC、オービメント洞窟にて・・・

ロードライト

「・・・よつと（かちゃっ）」 宝箱の蓋を閉める

「これで9個目っつと」

パロットクリソベリル

「・・・」

「意外に地味な作業なんだな DCの仕事って（ぼそっ）」

ロードライト

「だから期待しないでくださいって言ったのに〜〜（涙）」（うにゃ〜〜〜!）」

スファレライト

「でもさ〜、その宝箱に入れたのって薬草3個でしょ〜」

「宝箱に入っているお宝ってわりにはシヨボくない?」

ロードライト

「いや、ダンジョンにある宝箱って」

「中身はだいたいこんな感じですよ〜」

「もちろん、ダンジョンに設定されたクリアレベルに応じて」

「ある程度は中身も変動しますけど・・・」

「あっ、ちなみにこのダンジョンのように」

「クリアレベルが低くてレアアイテムが手に入るのは珍しいんです

よ」

スファレ

「えっ、そうなの？」

「えーっと、オービメント洞窟の目標クリアレベルって・・・」

ジェムシリカ

「たしか、レベル37ぐらいだったと思いましたが・・・」

スファレ

「うう・・・(汗)」

「レベル1のわたしには夢のまた夢・・・(しくしくしく)」

2コマ

パロット

「それにしても・・・(きよるきよる)」 辺りを見回す

「まさか、ダンジョンの中にこんな隠し通路があったなんて(大汗)

」

ロードライト

「イベント設置用の通路ですから」

「その存在はDCにしか知られていません」

「過去にダンジョン管理協同組合が開通した通路のようですね・・・

(苦笑)」

フローライト

「なるほど・・・」

「こついつた秘密があるから、イベント設置には資格がいるわけですね」

「こんな通路があるなんて冒険者に知れ渡ったら」

「通路を使つて宝物だけを回収……って輩が出てきそうですし」

エルバイト

「えっ、それつてダメなのか！？（汗）」

「この通路を通ればオレにもクリアできそうだから」

「後から挑戦しようと思つてたのに……」（大汗）

スファレ

「だ、ダメに決まつてるでしょ！（大汗）」

「ね……、ねえ？（どきどきどき）」 自分もちよつと考えた

ロードライト

「はい……（汗）」

「止めていただかないと、情報を漏らしたということだ」

「わたしが罰せられます……（ぼそっ）」

エルバイト

「そ、それは……（大汗）」（マズイな……）

3コマ

ロードライト

「さて、残り3個の宝箱の再設置を早く済ませてしましましょう」

「その後、冒険者パーティが回収した宝箱の再々設置を行えば」

「今回のお仕事は完了です」

スファレ

「・・・再々設置？（汗）」

「また、アイテムを入れて回るの？（大汗）」

パロット

「ふむ・・・」

「あの3人組が宝箱を回収してしまえば」

「もう一度、アイテム設置をしなければならぬってことか？（ややこしいな）」

エルバイト

「つてことは」

「この洞窟にある12個の宝箱を回収してから外に出て」

「もう一回挑戦すれば、再びレアアイテムが手に入るってことか？（どびつくり）」

「そのシステムを知っていれば、まさにウハウハだな〜」

ロードライト

「いいえ・・・」

「アイテムを回収した宝箱には冒険者の個別ナンバーが記録され」

パーティ単位で記録

「中身の入った状態でもう一度開けたとしても」

「アイテムは手に入りません」

フォスフォファイライト

「え？（汗）」

「中身が入ってるのに手に入らないって」

「どういうこと？（大汗）」

ロードライト

「いや・・・」

「DCの管理している宝箱って」

「じつは二重底になっているんですよ(ぼそっ)」

「ほら・・・(かぱっ)」 目の前の宝箱を再び開けてみる

スファレ

「あっ、さっき入れた薬草3個が入ってない!? (どびっくり)」

効果音「ずがーーーーーん!!!」

4コマ

パロット

「うーん・・・(汗)」

「こんなシステムだと知ってしまえば」 DCがアイテムを入れること

「今まで宝箱を開けるのが楽しみだったのもバカらしくなってしまうよな〜(苦笑)」

ロードライト

「そうなんですよ〜(あははっ)」

「だからこそ、DCやDMの存在は」

「決して冒険者に知られてはならないんです(大汗)」

フォスファイ

「な、なるほど・・・(どきどきどき)」

シリカ

「え〜っつと」

「冷静にならなくても 不思議だとは思いませんでしたか？」

「洞窟にアイテムの入っている宝箱が散らばっているなんて」

「誰かが置かない限り、普通なら有り得ないことです」

「財宝を隠す……というのであれば」
「もつとわかりづらい場所に置いて、纏めて管理するのが合理的で
しょうし……」

エルバイト

「あつはつはつ」

「確かにゲームとかじゃないんだから」

「宝箱とか有り得ないよな〜」

フローラ

「それがこれまでの普通でしたから」

「誰も変だとは思わないのでしょうか」 (にこっ) 「

ロードライト

「つと、お話はこれくらいにしておいて」

「次の宝箱がある場所まで向かいますよ」

「普通に向かえば、あっちに行ったりこっちに来たりで時間も掛か
りますが」

「この管理用の通路を通れば2〜3分で到着します」

スファレ

「無駄な戦闘も無さそうだしね」

ロードライト

「そういうことです」

「さあ皆さん……」

「次の宝箱目指して出発しましょう」 (お〜) 「

パロット

「……(う〜ん) 「何かを考えている」

「なあ、ロードライト?」

ロードライト

「……はい? (きよろっ) 」 振り返ってパロットを見る

パロット

「宝箱の再設置だけじゃ面白くないから……」

「オレたちで何か冒険者を驚かすような イベントを考えてみな
いか?」

ロードライト

「……はああああ!?? (どびっくじ) 」

効果音「ばきゅ~~~~~~~~ん!~!」

コメント

うっん、設定の解説は長くなる上に動きも無いから……笑いが
入れられない!! (爆)

第123話 オービメント洞窟の新アトラクション？

4コマ劇場 アイオライト―483・・・2011/02/03
シリーズ3

タイトル「オービメント洞窟の新アトラクション？」

1コマ

エリアC、オービメント洞窟にて・・・

冒険者B

「宝箱発見！」

冒険者C

「よっしゃー！ー！ー！」

「これで7個目！ー！」

「さあ〜て・・・」

「何が入っているのかな？（かぱっ）」

宝箱を開ける

冒険者B

「・・・薬草が3つ（大汗）」

「って、またこんなどうでもいいようなアイテム！」

「いったいどうなってるっていうんだ！ー！（うがー！ー！ー！）」

冒険者C

「落ち着けて・・・」

「この洞窟にレアアイテムがあるって情報は確かなんだ・・・」

「隅々まで探せば 眠っているレアアイテムはオレたちのものだ
ぜ」

冒険者B

「そう・・・だな（ふっ）」

「幸いこの洞窟は、火山の地熱が気になるだけで」

「魔物の気配は一切ないからな（どういうわけだか・・・）」

「時間はかかるが必ず見つけられるはず・・・（にやり）」

冒険者A

「・・・（うん）」

「・・・おかしい（ぼそっ）」

冒険者C

「ん〜？」

「おかしいって・・・何がだ？」

2コマ

冒険者A

「このオービメント洞窟のクリア目標レベルは37のはず・・・」

「それなのに、洞窟に入ってから一度も魔物に遭遇していない（汗）」

「これならレベルが37無くてもクリアできるだろ？（うん）」

冒険者B

「確かに・・・そうだが（汗）」

「この洞窟に到達するのに、レベルがそれだけ必要ってことじゃないのか？」

冒険者C

「なんにしても、楽できるんだから良いんじゃないか」

「それに、もし魔物が現れたとしても」

「オレたちの場合・・・逃げるだけだろうし（ぼそっ）」

冒険者B

「ふっ・・・、華麗に逃げ切ってみせる（微笑）」
「なにせオレたち、逃げ専門の冒険者だからな〜」
「（あははっ）」

冒険者C

「ゼロ敵なんかと戦っても無駄無駄・・・」
「いかに経験値を少なく　なおかつダンジョンを完璧にクリアする」
「それがオレたちの美学だぜ!!」

効果音「ずががーーーーーん!!」

スファレライト（声だけ）　　微かに聞こえる

『変！（ぼそぼそ）』

『あいつら絶対に変!!』（ひそひそ）　　DC用通路に隠れて
様子を

パロットクリソベルル（声だけ）

『しいーーーーっ!!』（大汗）『（見つかるだろ!!）』

冒険者A

「・・・ん？（汗）」（気のせいかな）

3コマ

数時間後・・・

冒険者B

「はあ、はあ、はあ・・・（汗）」

「や、やっと全ての空間をチェックできたな……(大汗)」

冒険者C

「ってことは……」

「あそこにあるのが最後の宝箱！」

「つまり、あの中にレアアイテムが入ってるってことだな (よっしゃー！)」

冒険者B

「今までの11個は、全て外れだったんだ 　　どうでもいいよ
うなアイテムばかり

「まず間違いないだろう(ふふっ)」

冒険者A

「しっかし、ここまで本当に魔物に遭遇しなかったな」

「洞窟全体に、魔物除けの結界でも張ってあるみたい……(汗)」

冒険者B

「ここまで来たんだ」

「そんな些細なことはどうでもいい……(にやり)」 　　宝箱
にそつと触れる

「よし……(じゅっ)」

「開けるぞ(きい〜〜っ)」 　　ゆっくりと蓋を開く

冒険者C

「何が入っているかな」

「どんなレアアイテムがあるかな」

冒険者A

「お、おおー！ー！ー！ー！(一)これは!？」

効果音「かぱっ」 突然、床が抜ける(笑)

冒険者B

「……………へ？(大汗)」

冒険者C

「なあ、なあ、なあああ!!(ひゅ~~~~っ)」 自由落下

冒険者A

「どっしえー！ー！ー!?(ひゅ~~~~っ)」 同じく

冒険者B

「ちよっ、ちよっとー！ー！ー!!(涙)」 上から声が聞こえる

効果音「ひゅ~~~~っ、ずびっ!」 奈落の底へ到達

!!(爆)

4コマ

冒険者A

「痛っ…………(大汗)」

冒険者C

「いっつつつ…………(涙)」

「ちよっ、何が起こった!」

「いったい、ここはどこなんだ!!(真っ暗で辺りが見えねえ!!)」

「????」

『ぐるぐるっ……』

冒険者B

「な、なんだ？(汗)」

「何か……いるのか!? (どきどきどき)」

冒険者A

「え〜っど……(じい〜っつ) だんだん暗闇に慣れてくる

「……って(汗)」

「ええ!!!(どびっくり) 何かに気づく

効果音「かちゃっ、ぱっ」 突然、明かりがつく

魔物A

『がががつ!?!』

魔物S

『わぎゃ————!?!』

魔物AJ

『ぐわあわあああ!?!(怒)』

冒険者A・B・C

「……」 数十匹の魔物に囲まれている

「……あんぎゃ————!?!(大泣き)」「(ずが

が————ん!?!)」

DC用管理通路にて……

パロツト

「よっし、イベント成功（ぐっ！）」 拳を握り締める

「一つの空間に魔物を集めて、その中へ冒険者を投げ込む・・・」

「名づけて、『モンスターハウス』」

「どうだロードライト」

「オレ、オリジナルのイベントは」（いや）、魔物集めるの苦労した〜（）

ロードライト

「え〜っと・・・（汗）」

「オリジナル・・・ですか？（大汗）」（これってチュンソフトの・・・）

パロツト

「この世界ではじめてやったんだから」

「オリジナルなんだよ！！（大汗）」

スファレ

「あれ・・・？」

「でも、シンセティックさんが創った不思議のダンジョンにも」

「これと同じのがあったよ・・・モンスターハウス（ぼそっ）」

パロツト

「な、なんだってーーーー！！！！（えええええー）

ーーーー！！！！」

冒険者A・B・C

「た、助けーーーー！！！！（大泣き）」

効果音「ずががー……………ん!!」

コメント

モンスターハウスって、恐いですよね (爆) 不思議の

ダンジョンシリーズ

第124話 美咲とアンデシン

4コマ劇場 アイオライト―484・・・2011/02/04

シリーズ3

タイトル「美咲とアンデシン」

1コマ

エリアD、砂漠地帯の中央にある森林にて・・・

美咲

「砂つち、送っていただいてありがとうございます」

砂つち（巨大砂蟲）

『わぎや〜』

美咲

「砂つちのお力が必要になったときには」

「この召喚の腕輪でお呼びしますので」

「そのときは、どうぞよろしくお願いします（ペーり）」

砂つち

『ぎゃふ〜〜』

『 ゆっくりと方向転換

効果音「ずずずっ、ずずずっ・・・」 砂つち、地響きを立てながら砂漠に潜っていく

アンバー ユークレース調査部の一般メンバー

「って、ここまで来るのもの凄く時間がかかってしまったな（汗）」

「

「やっぱり、自分たちで歩いた方が早かったんじゃないか……」
苦笑」

美咲

「うん……」

「そうかもしれませんが……」

「砂っちくに送ってもらわず、砂漠を歩いていたらとすると……」

「わたしたちも、あんな風になっていたかもしれないよ（ぼそっ

」
砂漠に転がる何かを指差す

アンバー

「え？（きよろっ）」
美咲の指差す方向を確認

「……って、誰か倒れてる……！！」（どびっくり）

アンデシン
ルチルクオーツ王国騎士団長

「……（ぷすぷすぷす）」
直射日光を浴びすぎて

焦げている（笑）

効果音「ずがが……！！」

2コマ

数十分後、森林奥にある泉の畔にて……

アンバー

「こ、この鎧に刻まれているのって……（汗）」
寝かせる

ために脱がしたアンデシンの鎧を見ている

「ルチルクオーツ騎士団の紋様！（大汗）」

「こいつ、騎士団の騎士なのか！？（どびっくり）」

美咲

「そのようですね」

「・・・っと、どうやら目覚めたみたいですが」

「えっと、もし・・・大丈夫ですか？」

アンデシン

「う、ううん(ぼおっ)」

「お、わたしはいいたい・・・どうなって？」(汗)

美咲

「あなたは砂漠の日差しにやられて倒れていたのですよ(にっ)」

アンデシン

「き、キミが助けてくれたのか・・・(汗)」
当然、年下だ
と思っている

「・・・ありがとう(ペこり)」
素直にお礼

美咲

「いえいえそんな」

「それで・・・」

「どうしてわたしたちの後をつけていたのですか？」(にっ)」

アンバー

「えっ!?(汗)」

「こいつ、オレたちの後を・・・!(大汗)」

アンデシン

「うぐっ・・・(どきどきどき)」(ばねてる)

3コマ

アンバー

「えっ？（汗）」
「アンデシンって……ルチルクォーツ王室の騎士団長……（どび
つくり）」

アンデシン

「ああ……（大汗）」

「みっともないところを見せてしまったな（ぼそっ）」

美咲

「そうですね」

「あなたがアンデシンさん……（なるほど）」

「お噂はかねがね桜さんから聞いておりますよ」

アンバー

「……桜？（誰のことだ？）」

アンデシン

「アイツを桜と呼ぶということは、フローラのことを妹の
ように思っている」

「キミは、五千年前の時代……如月家の関係者か？（くり）」

美咲

「関係者……といえばそうなのですが（苦笑）」

「申し送れました（すうっ）」 姿勢を正してアンデシンと
向かい合う

「わたし、樹神の退魔師……樹神美咲と申します（ぺこり）」

アンバー

「樹神……？」

「なんだか魔物みたいな名前だな（笑）」

説明文「ルチルクオーツの魔物は、五千年前のとある国で使われていた名字が名前として付けられています」

「魔物の数としては、佐藤さんが一番多く・・・鈴木さんが二番目に多いみたいな感じです」

4コマ

アンデシン

「樹神美咲・・・(汗)」

「この世界が誕生した頃から存在している伝説の退魔師(ぼそっ

」

「全世界の中でも五本の指に入る強さだと聞く・・・(大汗)」

アンバー

「えっ、マジか!?(大汗)」

アンデシン

「こんな可愛い姿をしているが・・・」

「王室騎士団とヨークレーズのメンバーが全員でかかって」

「彼女には傷一つ付けられないだろう(ごくり)」

美咲

「え、えっつと・・・(汗)」(困ったな)

「確かにその程度であれば、そんなに難しいわけじゃありませんけ

ど(苦笑)」

アンバー

「う、嘘・・・だろ(どきどきどき)」

アンデシン

「あんな魔物を従えているなど、てっきりラリマーの間者かと思いましたが・・・」

「どうやら、わたしの勘違いだったようですね（汗）」

美咲

「そういえば、王室騎士団はラリマーとの国境付近へ調査に向かっていたのでしたね」

「ちなみに、ラリマーの間者は既に王都へと進入しており」

「かれこれ2回ほど、桜さんの命が狙われております（ぼそっ）」

「まあ、ただの暗殺者に　桜さんがやられるわけありませんが・・・」

アンデシン

「ちよっ！」

「フローラが・・・暗殺者に!?!」

「大変だ、急いで戻らないと!?!（汗）」

アンバー

「フローラって・・・フローライトさま!?!（どびっくり）」

「命が狙われているって、めっちゃめっちゃ大事じゃないか!?!（大汗）」

アンデシン

「だから焦っている!?!（怒）」

美咲

「お急ぎのようでしたら足を用意しましょうか?」

アンデシン

「足っていうと・・・ラクダみたいな乗り物か?」

「そいつはありがたい」

美咲

「ラクダではなく」

「少し前にお仲間契約をした砂っち〜という小池さんです」

「ただし、相手は野生の魔物ですから」

「油断しているとパク〜と食べられちゃうかもしれないが・・・
(ぼそっ)」

アンデシン

「・・・(大汗)」(食べられ・・・)

「せっかくのご厚意ですが 遠慮させていただきます)(ときどき
どき)」

効果音「ずがが——————ん!!」

コメント

美咲は、進んで戦わないのでレベル498しかありませんが、強さは神様クラスです

第125話 なんとなく世紀の大発見

4コマ劇場 アイオライト―485・・・2011/02/05
シリーズ3

タイトル「なんとなく世紀の大発見」

1コマ

エリアC、オービメント洞窟にて・・・

ロードライト

「最後の宝箱に新しい『祝福の短剣』を入れてっ」と

「全ての宝箱にアイテムの再々設置が終わり・・・」

「今回のDCのお仕事はこれで終了となります（お疲れさまでした〜）」

スファレライト

「う〜ん・・・（汗）」

「内容が地味なわりに、やたら時間がかかる仕事なんだね〜（苦笑）」

パロットクリソベリル

「冒険者がダンジョンクリアするまで待たないといけないからな・・・

・（汗）「アイテムの再々設置のため

「っていうか、どうせならジュースの自動販売機みたいに」

あるのか自販機！（大汗）

「大量のアイテムを入れておいて、無くなったら自動的に補充できるよっ」

「宝箱を改造すればどうなんだ〜？」

「クリエイト能力を持つシンセティックさんに頼めば」

「簡単に改造してくれるだろ？」

ロードライト

「おお、それは ナイスアイディア (素晴らしい)」

スファレ

「でも、日持ちするアイテムとかじゃないと」

「腐っちゃいそうだけどね」 (ほら、消費期限とか・・・)」

パロット

「うぐっ・・・ (大汗)」

ロードライト

「あゝ・・・ (汗)」 (言われてみれば・・・)

エルバイト

「と、とにかく仕事は終わったんだよね (せえせえせえ)」

一人だけ汗だく

「さっさとこの洞窟から出ようぜ!! (死ぬほど暑いんだよ!)」

ロードライト

「ちょ、ちょっと待ってください!」

エルバイト

「って、まだ何かあるのか!」 (もう例の3人組は帰っただろ!!)

2コマ

ロードライト

「確かに、DCのアイテム再設置という仕事は終わりました・・・」

「でも、パロットさんが企画した新アトラクション」

パロット

「オリジナルの『モンスターハウス』な〜」 チュンソフト
? (笑)

ロードライト

「新アトラクションで使ったモンスターハウスは」

「ちょうどこの下にありますよね?」

「宝箱を開いたら床が抜けるようになって・・・ (汗)」

パロット

「ああ・・・」

「スファレの見つけた床抜け機能を利用したんだが」

「思いのほか上手くいったな〜」 (あははっ)

ロードライト

「え〜っと・・・ですね〜 (汗)」

「そのモンスターハウスで使った空間なんですが・・・」

「ダンジョン管理協同組合提供のマップには、情報が無いんですよ
(ぼそっ)」

パロット

「・・・え? (汗)」

ロードライト

「オービメント洞窟をダンジョン管理協同組合が管理し始めたのは
100年ほど前・・・」

「それから今までの間、ここから下の階層は見つかっていません」

エルバイト

「ん？（なんだ？）」

スファレ

「オービメント洞窟エルバイト階層のエルバイトって・・・何？（ときどきとき）」

「アルバイト階層ってのなら、わかるんだけど（大汗）」

エルバイト

「オレの名前じゃーーーーー！！（怒）」

「いい加減、覚えやがれーーーーー！！（うがーーーーー！！）」

ジエムシリカ

「あ・・・、階層に名前が付くとしても」

「アルバイトさん一人で見つけたわけじゃありませんから」

「個人名というよりあなたたちのパーティ名・・・」

「勇者隊が付くのは変ですから」

「オービメント洞窟サンストーン階層といったところでしょうか？」

スファレ

「おっ、なかなか良いんじゃない」

フォスフォイライト

「あるいは、招き猫階層・・・（ぼそっ）」

スファレ

「招き猫はイヤーーーーー！！（大泣き）」

効果音「ずがーーーーーん！！」

4コマ

パロット

「それにしても……（うーん）」

「スファレが適当に見つけたのが新階層だったなんて（大汗）」

「さすがはへっぽ……（ぼそっ）」

スファレ

「へっぽこ言っなー……！！（うにゃ……！！）」

パロット

「なんだよ（汗）」

「せっかく褒めてやってるのに……（む……）」

シリカ

「ふう……（やれやれ）」

「パロットくんは女心がわかっていませんね」

「そんなことでは、女の子にモテませんよ……」

スファレ

「シリカさま」

パロット

「モテないって……（大汗）」

シリカ

「いいですかパロットくん（ぴしっ）」

「スファレさんは、へっぽこと呼ばれて」

「ずばり照れているだけです（ぼそっ）」

人差し指を立てる

スファレ

「シリカさまもわかってねえええー！！（照れてないですよー！！）」

効果音「ばきゅ～～～～ん！！」

ロードライト

「とにかく、ボクはこの先へ・・・」

「新階層に潜ってみようかと思えます（ぼそっ）」

「かなり危険な行為になりますが」

「みなさんは どうしますか？（汗）」

パロット

「もちろん一緒に行く」

スファレ

「あつたりまえでしょ」

シリカ

「このまま王都へ戻って報告だけでも」

「発見の当事者として、もう一度ここへ来ることになると思います」

「様子だけでも見ておいた方がいいでしょうね」

「探索するまでもなく、一つの空間があるだけかもしれないし・・・」

ロードライト

「では、みんな探索することでもいいですね？」

エルバイト

「もちろんだぜ」

「よっしゃー！ー！ー！」

「さらに新発見をして、一気に有名になるぜー！ー！ー！」

フォスファイ

「・・・えーっと（汗）」

「その後、新階層に足を踏み入れた招き猫勇者隊の姿を見る者は
「誰もいなくなった・・・（ぼそっ）」 真顔で呟く

エルバイト

「って、さーっと思ろしいー！と言っなー！ー！ー！ー！（叫び）」

フォスファイ

「わにやっ！ー！（びくーっ！）」

コメント

オービメント洞窟編・・・続きます

第126話 心に余裕が無くなると言い争いが始まります

4コマ劇場 アイオライト―486・・・2011/02/06
シリーズ3

タイトル「心に余裕が無くなると言い争いが始まります」

1コマ

エリアC、オービメント洞窟にて・・・

ロードライト

「では、出発しましょう」

「みなさん、新階層では何が起こるかわかりませんから」

「充分注意してくださいね」

パロットクリソベリル

「わかってるよ・・・」

スファレライト

「それじゃ〜」

「出発〜〜（お〜）」

効果音「わいわいがやがや」

アクロライト

「……………（じい〜っ）」 岩陰から様子を窺っている

「どつやら、新発見した階層へ潜ってみるようだな・・・（ぼそっ）」

アメトリン

「ねえ、アクロ？」

「せっかく追いついたのに、どうしてフォスフィたちを助けないの？」

「あのパロットってヤツが」

「お姫様を狙っている暗殺者なんでしょ？」

アクロ

「ちよつ、しいいいいっ！（汗）」
口元に人差し指をあてる

アメトリン

「あ……（ちらり）（しまった）
ゆっくりと振り返る

レイチエル

「……あう？」
「あ、わたしのことは気にしないでください（ゴゴッ）」

アクロ

「う……（大汗）」（そう言われても……な）」

2コマ

レイチエル

「あう（汗）」

「アルフォーニ……」

「あのお姉さんが抱えてる黄緑色の物体って（大汗）」

アルフォーニ（ぬいぐるみ型）
レイチエルに抱っこされて
いる

『ええ、間違いありません（ゴくり）』

『超獣神が1体……超亀神カークンです』

レイチエル

「あう、超亀神カークンといえば」

「4体の超獣神の中で最強の存在・・・」

「数値的にいうと、超鳳神グランゾルが1」

「超麟神アルフォーニが3」

「超龍神リーンウィックが5」

「超亀神カークンが10」

「上位の超獣神には、他の超獣神が協力し合っても勝てないんだよね？（汗）」

「そして、カークンのマスターは美咲ちゃん・・・」

「もしかして、あのお姉さんが美咲ちゃんの成長した姿？（大汗）」

「あるいは美咲ちゃんの生まれ変わり！？（あう！）」

アルフォーニ（ぬいぐるみ型）

『生態波長からすると、そのどちらでもなさそうです』

『あの女性と、新たにマスター契約を交わしたのでしょうか？（汗）』

レイチエル

「うーん・・・」

「ここって、わたしたちの時代から5千年後の世界でしょ？」

「元の時代の知り合いが生きているはずないから」

「アルフォーニの言ったように」

「あのお姉さんが・・・かぐくんの新しいマスターなのかな？」

説明文「5千年前の知り合い、たくさんいますよ（ずががー！）
ーん！」

3コマ

アクロ

「それにしても、マズイことになったな・・・（大汗）」

アメトリン

「まずいこと？（なにが〜？）」

アクロ

「ダンジョンで新しい階層を発見したんだ・・・」

「王都に戻って冒険者管理組合へ報告したら」

「招き猫勇者隊の知名度は一気に上がってしまう」

ハックマナイト

「まあ、そうだろうな〜」

「それが・・・どうしたんだ？」

アクロ

「どうしたって・・・（汗）」

「フォスファイが招き猫勇者隊と交わしてきた約束のことを忘れたのか〜？」

アメトリン

「あっ！（そういえば！）」

「1ヶ月間でどちらのパーティが有名になるかを競って」

「負けた方はシンセティックさんとの専属契約を打ち切られ・・・」

「いまの屋敷から出て行かないといけないってヤツ！？（大汗）」

ハック

「ああ〜、そんな約束あつたな〜・・・（どきどきどき）」

アクロ

「そういうことだ」

「そして、このままでは間違いなく招き猫勇者隊の方が有名になる」

アメトリン

「そ、そんな~~~~（涙）」

効果音「ずがが—————ん!!」

4コマ

ハック

「な、ならこういうのはどうだ!?(汗)」

「招き猫のヤツらが新階層へ潜っている間に王都まで戻って」

「オレたちドラゴンファンクが新階層を発見したことにして報告すれば……」

アクロ

「そんな真似できるものか(汗)」

「それに、ボクたちが王都へ戻ったら」

「命を狙われているフロアライトさまや」

「人質になっているフォスファイはどうなる(大汗)」

ハック

「そう……だったな(汗)」

「ヤツら、意外に和気藹々としているから」

「姫さんが狙われていることを、すっかり忘れていたぜ(大汗)」

アクロ

「おまえな~~~~（大汗）」

アメトリン

「って、この鳥頭!!」

「最大の目的、忘れてるんじゃないわよ!!!(怒)」

ハツク

「つてめえ、アメトリン!(むかつ)」

「相変わらず、目上の者に対して態度がなってないな――!!(がああああ!)(」

アメトリン

「ふん!」

「だったら、もっと尊敬されるようにしろつてのよ!」

「目上つて言つたつて、たった十数年ほど先に生まれただけじゃない!」

「レベルだつて、年下のアクロの方が上なんだしさ――(苦笑)」

ハツク

「ななつ!?(汗)」

「レベル4のお前だけには言われたくねえ――よ!!!(激怒)」

アメトリン

「なんですつて――!!!(うにゃ――!!)」

アクロ

「あ――、もお――!!!(汗)」

「ボクたちが仲間内でケンカしてどうするんだ!!!(涙)」

効果音「ばきゅ――ん!!」

コメント

アクロは魔法戦士でレベル32、ハックは猫戦士でレベル28、
アメトリンはヒーラーでレベル4です

第127話 オービメント洞窟の謎

4コマ劇場 アイオライト―487・・・2011/02/07
シリーズ3

タイトル「オービメント洞窟の謎」

1コマ

エリアC、オービメント洞窟にて・・・

スファレライト

「・・・・・・・・・・（大汗）」

「これって、シャレになってないんじゃない？（どきどきどき）」

説明文「崖の底に真っ赤に熱せられたマグマが流れている」

ジエムシリカ

「どうやら、新階層からマグマ溜まりまで繋がっていたようですね・

・・・

「しかも、この状態から考えると」

「オービメント山はいつ噴火してもおかしくありません」こ

の人、盲目で死にかけています（爆）

パロットクリソベリル

「あまり長居はできそうにないな（汗）」

「それより、かなり熱気が伝わってきているようだが・・・」

「みんな 大丈夫か？（大汗）」

フローライト

「全然大丈夫ですよ」

ロードライト

「うう……(汗)」

「な、なんとか……(ふらふら)」あ、熱い……(

フォスフォファイライト

「あゝ、ロードライトちゃん

「ちょっとごめんね〜」(ぎゅっ) ロードライトの後ろから抱きつく

ロードライト

「ふお、フォスフィさん……(すみません)」

「ううん、涼しいです〜」 聖剣クリソベルルの加護により涼しい

スファレ

「っていうか……(ひとつ)」 パロットの腕にしがみついている

「パロットの冷房能力は落ちてきてるよ」(汗)「(ちょっと生暖かい……)」

パロット

「オレは、クーラー代わりじゃねえええええ！(わぎゃー……！)」

シリカ

「あははっ……(苦笑)」

「で〜、アルバイトさん(汗)」

「生きていますか？(どきどきどき)」

エルバイト

「……………(ひくひく)」 地面に倒れ込んでいる
「びびびびびびよ…(大汗)」 生きてはいるが死に
かけています

効果音「ずがが————ん!!」

2コマ

いくつもの空間を経由して最深部に到達…

パロット

「ん…?」

「ここは、これまでと違って人の手が入っているみたいだな」

「地面が石畳状になっている…(きよろきよろ)」 辺り
を見回す

エルバイト

「おお、涼しい!」

「冷静になって考えれば暑いはずなのに」 気温40度オーバ

「?

「さっきまでの激暑と比べれば天国みたいだ」 汗だ
く

スファレ

「あ…」

「アルバイト、あんた1人だけ汗臭いよ(ぼそっ)」

エルバイト

「ほっとけ————!!(うぎゃ————!!)」

フォスファイ

「あ、あははっ（苦笑）」

「……って、え？（汗）」 何かに気づく

「パロツト、あれ……何だろ？」 空間の中央を指差す

パロツト

「ぬ？（きよろっ）」

「なんだ、石組みされた祭壇みたいのがあって」

「そこから光……っていうより火柱が立ち昇っている!?!?（どび
つくり）」

スファレ

「うわぁ……（汗）」

「おもいつきり説明口調……（苦笑）」

パロツト

「ほっとけ……!!（怒）」（仕方ないだろ!!）

3コマ

ロードライト

「うーん、ここからじゃよくわかりませんね」（え〜っ）
遠くから火柱を眺めている

スファレ

「そんなの、近づいてみたらわかるじゃない（たっ）」 祭
壇へ向けて、軽やかに一步を踏み出す

パロツト

「あっバカ!!（叫び）」

「無闇に近づいたら何が起こるか……」

効果音「ビシッ、パリーーーーン！」
粉々に砕けるような音

ガラスがひび割れて

スファレ

「え・・・？（なに「と」？）」

パロット

「スファレ！」

「避けるー！」 スファレの腰にタツクルをかます

スファレ

「わにゃーっ！？（びっくり）」 地面へと倒れ込む

「って、パロット何するのよー！ー！ー！ー！ー！」

効果音「びゅーーーーん！！」 先程までスファレの頭部が
あつた場所を、謎の物体が超速で通過！

スファレ

「・・・え！？（どびっくり）」（なに今の？）

パロット

「ちっ！（汗）」

「ここにきて・・・敵襲か！？（しゃきっ）」 飛び起きて聖

剣クリソベリルを構える

「シリカさん、みんなをお願いしますー！！（叫び）」

シリカ

「パロットくん、気をつけてー！！（ちゃきっ）」 自らも長剣
を構える

4コマ

フローライト

「どうやら、侵入者避けの仕掛けか何かを起動させてしまったようですね・・・(汗)」

スファレ

「え〜っと(汗)」

「もしかして、それってわたしの所為？(どきどきどき)」

エルバイト

「おお〜っ、そんな仕掛けがあるってことは」

「護るべき何かがある・・・ってことだよな」

「つまり、お宝の予感!!! (叫び)」

「おいロードライト!」

「DCの仕事は終って、未発見のお宝なんだから」

「オレたちが貰っても問題ないよな」

ロードライト

「は、はい!(汗)」

「そのことについては問題ありません・・・が(大汗)」

「このような仕掛けで侵入者避けまでしている場合」

「そこにあるのは、ほぼ例外なく古より伝わるSA級のスペシャルアイテムです!」

「何の用意もしてこなかったボクたちに」

「回収できるとは・・・とても」

エルバイト

「SA級のスペシャルアイテム!」

「すげええええ!!!」

「絶対手に入れ・・・」

効果音「ヒューーーーーー、ズゴッ！」
謎の物体が超速で飛んできて壁にめり込む

ロードライト

「あ……(汗)」

エルバイト

「ひ、ひいいい！(大泣き)」
もう少しで顔面に直撃

フォスファイ

「て、鉄球？(大汗)」
大きさはこぶし大

謎の鉄球1

「……(パラパラ)」
岩片を落としながら空中に浮かぶ

「!(びゅーーーーっ!)」
パロットめがけて突っ込んでいく

鉄球2

「!!(びゅーーーーん!)」
パロットの周囲を飛び回っている

鉄球3

「!!(がががっ!!)」
パロットの後方から突っ込む

パロット

「ちゅーーーーっ!(涙)」
「どうでもいいけど、複数個での同時攻撃はやめてくれーーーー!!」
「うにゃーーーー!:(泣)」

コメント

イメージ的には鉄で出来たテニスボールが飛び回っている感じで
す

第128話 砕けた聖剣・・・

4コマ劇場 アイオライト―488・・・2011/02/08

シリーズ3

タイトル「砕けた聖剣・・・」

1コマ

エリアC、オービメント洞窟最下層にて・・・

鉄球1

『・・・(びゅーっ)』 パロットの周りを超速で浮遊している

鉄球2

『・・・(びゅーんびゅーん!)』 同じく

パロットクリソベルル

「はあああっ!(ぶうーん!)」 聖剣クリソベルルを一振り!

「ちっ・・・(汗)」

「この鉄球×3、いったい何だっというんだー!!!」(叫び)

鉄球3

『!!! (カコーン、ガガガッ!)』 パロットに突っ込む

パロット

「うおおお!!! (カッカッカッ!)」 聖剣で突っ込んできた鉄球を受け止める

スファレライト

「ば、パロット！（叫び）」

「って、みんな何を落ち着いているのよ！？（汗）」

「早くパロットを助けないと！！（たっ）」
パロットに駆け
寄ろうとする

ロードライト

「スファレさん、待ってください！」

「祭壇に・・・その石畳に入ったらダメです！！」

スファレ

「・・・えっ？（汗）」
思わず立ち止まる

2コマ

ロードライト

「対人避けの侵入者防止トラップ・・・」

「おそらくあの鉄球は、祭壇に近づいた者を無差別に襲うように創
られているでしょう」

スファレ

「だったら、パロットが祭壇から出たら！」

「鉄球の攻撃は止むんじや・・・」

ジエムシリカ

「いいえ・・・」

「三つの鉄球から、パロットくんに向けて見えない光のようなもの
が放たれています」

「シンセティック・カノン風に言えば、ロックオン状態ですね」

「つまり、破壊しない限り逃げられません！」
言ってること

適当

スファレ

「つて、意味わかんないですよ！（涙）」（ロックオンって何ですか！）

「パロット！！（叫び）」

パロット

「はあっ！（がががっ！）」

飛んできた鉄球2を真つ二つに

両断

「ふん！！（さくっ！）」

返す刃で鉄球3を切断！

効果音「カラン、カラン……。どつがあーーーーん！！」

地面に転がった欠片が大爆発！

スファレ

「なあああーーーー！！！！（どびっくり）」

シリカ

「と、このように」

「今のパロットくんなら、この程度のトラップを回避することは楽勝です」

スファレ

「それを先に言ってくださいよー！！！！（涙）」（心配したじゃないですかー！！！！）

3コマ

鉄球1

『……………（うおん、うおん）』

パロットの様子を窺うよ

宇宙に浮いて静止している

パロット

「さてと、こいつでラス1みたいだな」（ふっ）

「別にSA級のスペシャルアイテムなんかには興味無いが・・・」
「問答無用に攻撃されるのは気に入くないんでね」（ちゃきっ）

聖剣クリソベリルをかつこよく構える

鉄球1

『・・・（すーっ）』 横一線に切れ目が入る

『！！（ぐおおおっ！）』 上半分が右回転、下半分が左回転を始める！

パロット

「ほお・・・（ごくり）」 何かを感じ取る

「これは、気合いを入れ直さないといけないようだな」（ギロリ）

スファレ

「じゃあ、侵入者避けのトラップはパロットに任せて」

「わたしたちは、SA級のお宝を拜ませてもらいましょうか（ひよいつ）」 祭壇の縁に足を踏み入れる

鉄球1

『・・・！！（ずがががっ！）』 祭壇に入ってきたスフ

アレに反応する

パロット

「あつ、バカ！！（叫び）」

スファレ

「へ？（きよろっ）」 声のした方に視線を向ける

説明文「超速回転している鉄球がスファレの目前まで迫っていた」

4コマ

パロット

「スファレーーーーー！！（ぴかああああ！！）」 声に反応して聖剣クリソベルルが凄まじい輝きを放つ！

フローライト

「なっ！（大汗）」

「聖剣クリソベルルがパロットさんを使い手と・・・」

「真の勇者と認めた！！（どびっくり）」

パロット

「うおおおお！！（たたっ！）」 地面を蹴り、一気に鉄球1との距離を詰める

「オレの仲間に手を出すんじゃねええええ！！（ぐおっ！）」 聖剣を振り上げる

鉄球1

『・・・・（びゅっ！）』 突然、真横へ進行方向を変える

パロット

「なにっ!?!」

鉄球1

『!!!（ぐおおおお！！）』 超速回転しながらパロットに突っ込む

パロット

「なめるなーーーーー！！（ぶうぶうんん！！）」
勢いで聖剣を振り下ろす！
一刀両断の

鉄球 1

『！！（ぎゅーーーーーんん！！）』
聖剣の刀身に当たった瞬間、上下共に半回転を始める

効果音「ががつ、ががつ・・・びしっ、ぱりーーーーん！！」

パロット

「・・・・・・・・、・・・・な」
愕然

鉄球 1

『・・・・・・・・（ゴトッ、カッン）』
動きを止めて地面に落下する

シリカ

「う・・・・・・・・そ（汗）」

フローラ

「せ、聖剣クリソベルルが・・・砕けた（大汗）」

コメント

少し新しいことを始めたので、今後の更新ペースはゆっくりとなります（予定）

第129話 聖剣クリソベルルの秘密

4コマ劇場 アイオライト―489・・・2011/02/10
シリーズ3

タイトル「聖剣クリソベルルの秘密」

1コマ

エリアC、オービメント洞窟最下層にて・・・

パロットクリソベルル

「……………(ちゃきっ)」 刀身の碎けた聖剣クリソベルルを見つめる

スファレライト

「ご、ごめんなさ……………(涙)」 さすがに責任を感じています

パロット

「ん？」

「あゝ、気にするな(ぼそっ)」

「そんなことより、スファレが無事で本当に良かった……………(にこっ)」

スファレ

「……………(うるうる)」 責められた方がまだまし？(笑)

フローライト

「……………(すーっ)」 しゃがみ込む

「まさか、聖剣クリソベルルが碎けるなんて……………(汗)」

砕けた刀身の欠片に触れる

「せっかく、パロツトさんの仲間を思う気持ちが」

「聖剣に認められたというのに……(大汗)」

パロツト

「まあ、形あるものはいずれ壊れる　と言いたところだが」

汗)

「どっしり……」

「このままじゃ、お師匠に殺される……！！(がたがたぶるぶる)」

2コマ

フローラ

「パロツトさんのお師匠というと……」

「この時代のリウムちゃんでしたよね……(汗)」

「殺されるって……」

「少しオーバーなんじゃないですか？(リウムちゃん、優しいですよ)」

パロツト

「いいや……(汗)」

「フローラはお師匠のことを何も分かつちやいない(大汗)」

「この聖剣は、お師匠にとって一番大切な人の形見みたいなんだ」

「やっとの思いで譲り受けたっていうのに」

「聖剣クリソベルルが砕けたって知られたら……」

「いったいどんな拷問が待っているか！？(どきどき)」

「まずは、24時間のはむはむ地獄は確定だ……！！(大泣き)」

フローラ

「あゝ、確かに……」

「はむはむは避けられないでしょうね」(苦笑)「

スファレ

「だから、ゴメンって!!!(うにゃ……!!!)」

効果音「ずがが……」

3コマ

ジェムシリカ

「何にしても……」

「刀身の欠片は拾い集めておいたほうがよろしいのではないですか?」

「素材さえあれば、鍛冶屋にお願いして新たに鍛え直してもらってもできるのでは?」

フローラ

「それは……」

「難しいでしょうね」(汗)「

ロードライト

「やっぱり」

「聖剣だから簡単じゃないの?」

フローラ

「いいえ……」

「聖剣クリソベリルは少し特別なんですよ」

「え〜っと、このクリソベリルの欠片を見てください」(ひょいっ)「

欠片を拾い上げる

「素材は……何かわかりますか?」

ロードライトに渡す

ロードライト

「あれ……、これって色が変わっちゃいました？」
受け取る

欠片を

「碎ける前はまるで宝石のようだったのに」

「いまでは、なんだか磨りガラスのような感じですね……（汗）」
「素材は、やっぱり宝石か何か……ですか？」

シリカ

「うん……（宝石？）」

「わたしも、見たことがない素材ですね」

この人盲目です

（笑）

フローラ

「クリソベリルの刀身は」

「精霊界の聖獣とされる光竜の精霊力が」

「数万年をかけて結晶化したもの……」

「しかも、パロットさんとフォスフィさんが持つ聖剣は」

「十四創神が一人、幻獣神アレキサンドライトの精霊力で創られているのです」

「人の手で修復・再現することは、絶対に不可能なんですよ（大汗）」

パロット

「これって……（汗）」

「そんなに凄い剣だったのか？（ときどきどき）」

4コマ

フローラ

「元々、光竜アレキサンドライトの創造した聖剣は一振りだけだっ

たのですが」

「その威力があまりにも強すぎたため、二振りに分けたそうです」

「その二振りというのが」

「パロットさんとフォスファイさんの受け継いだ聖剣……って、あつ！（そうだ！）」

「ふお、フォスファイさん！！（汗）」

フォスフォファイライト

「は、はい！（びくっ）」

突然声をかけられて、びっくりする

フローラ

「フォスファイさんの聖剣を……」

「この欠片の上にかざしてみてください！」

フォスファイ

「え？」

フローラ

「もしかして……なんですが」

「上手くいけば」

フォスファイ

「な、なんだかわかりませんが（ちゃきっ）」

聖剣を抜刀

して欠片の上に翳す

「これで、良いのですか？（汗）」

「って、ええっ！？（ぴかーーーーっ！）」

聖剣の刀身が

ら、まばゆい光があふれ出す

ロードライト

「なっ！？（汗）」

「欠片が・・・フォスファイさんの聖剣の刀身に吸収された!!(どびっくり)」

フォスファイ

「こ、これって・・・聖剣の形が変わった!?(大汗)」(刀身が一回り大きくなった)

フローラ

「その形こそ、聖剣クリソベリルの真の形・・・」

「精霊神クリスタルの使っていた本当の聖剣なんです」

フォスファイ

「お、おお～～～」

パロツト

「って、欠片がフォスファイのに吸収されちゃったら」

「オレの聖剣クリソベリルはどうなっちまうんだ!(汗)」

「もしかして、吸収されたことで聖剣が修復できる・・・とか? (どきどきどき)」

フローラ

「あ、いや～～～～(汗)」

「パロツトさんの聖剣は、もう元には戻りませんから」

「その欠片をフォスファイさんの聖剣の攻撃力アップに使っちゃおうかなって・・・(苦笑)」

パロツト

「って、やっぱりお師匠のはむはむ決定――!!(うにゃ――
――!!)」

効果音「ずががーーーーーん!!!」

コメント

と、いうわけで、「最強の勇者はヒーラーでレベル1」の記念すべき第1話を

小説風書き直してみました(目次の最初の方にあります)

今後、小説版と文字だけ4コマ版が並行して更新されるといっや
やこしい状態になります

何卒、ご了承ください・・・(爆)

第130話 SA級のスペシャルアイテ・・・ム？

4コマ劇場 アイオライト―490・・・2011/02/14
シリーズ3

タイトル「SA級のスペシャルアイテ・・・ム？」

1コマ

エリアC、オービメント洞窟最下層にて・・・

パロットクリソベリル

「……………(じい~~~~っ)」 柄だけになった聖剣クリソベリルを見ている

エルバイト

「…………パロット(ぼむっ)」 パロットの肩に手を置く

パロット

「ぬ？(どうしたアルバイト?)」

エルバイト

「お前の相棒とも言える聖剣が砕けたのがショックなのは理解できる」

「だが、それを悔やんだとしても聖剣は元には戻らない」

「悔やむより先に・・・お前にはやるべきことがあるんじゃないのか？」

パロット

「ふっ…………(苦笑)」

「まさか、アルバイトに諭されるとは…………」

「そうだな、まずはこの階層の調査を始めないと」

エルバイト

「そういうことだ(うんうん)」

「碎けて戻らない聖剣のことを考えているより・・・」

「まずは、さっきの鉄球に護られていた」

「SA級のスペシャルアイテムを手に入れないと(うひひひっ
(どんなアイテムかな)

パロット

「・・・(むかつ)」

「なあ、コイツ殺っちゃっていいか?(怒)」

ロードライト

「あ、死なない程度にお願いします・・・(ぼそっ)」

効果音「ずががーーーーーん!!」

2コマ

中央にある祭壇からは、天井に向けて火柱が立っている・・・

ジエムシリカ

「・・・これは(汗)」

スファレライト

「えっ、シリカさま」

「この現象に見覚えがあるんですか!?(びっくり)」

シリカ

「いいえ・・・」

「不思議な現象だな」と思いまして（すみません）」

スファレ

「ああ、そうですか……（どきどきどき）」

ロードライト

「溶岩から発せられた炎……というわけでは無さそうですね」

「熱さがまったく感じられません」
短刀の先を炎の中へ入れて、伝わってくる熱を感じている

パロット

「って、これが何なのかもわからないのに」

「そんなことして大丈夫なのか？（大汗）」

ロードライト

「え〜っと……」

「眺めているだけじゃ〜、何もわからないと思って〜（苦笑）」

3コマ

シリカ

「う〜ん……」

「やはり、パロットさんの言うように」

「わからないまま手を出すべきではありません」

「ここは、冒険者管理組合へ報告だけしておいて」

「専門の調査団と共に、再び訪れた方が良いのではないのでしょうか？」

エルバイト

「って、ちょっと待て〜！〜！〜！」

「そしたら、この祭壇に隠されているかもしれない」

「SA級のお宝はどうなるんだ!!」

「報告したら、オレたちの手に入らないんじゃないかねえのか!？」

スファレ

「なっ!(汗)」

「アルバイト、あんたシリカさまになんて口の聞き方を!!(怒)」

エルバイト

「うっせえー!!(があああ!)」

「ユークナイトがどうかいうより、お宝のことが大事なんだよ!

!(叫び)」

フローライト

「おお、欲望に素直な方ですね」

「でも・・・たとえスペシャルアイテムを手に入れたとしても」

「それがSA級であれば、王室で一時預かりという可能性もありますよ」

エルバイト

「……………(汗)」(こいつがいるから隠してもすぐバレる?)

「なんとかならねえのか?(大汗)」

フローラ

「なりませんね〜(あははっ)」(危険物なら特に・・・)

4コマ

パロット

「じゃあ、そういうことで・・・」

「祭壇の調査はこれぐらいにしておいて」

「王都に戻るか？」

ロードライト

「そう・・・ですね（汗）」

「それしかなさそうですね〜」（苦笑）」

エルバイト

「って、おいおい考え直せよ〜」（汗）」

「このままじゃ、2連続・・・いや」

「オレが仲間になる前のエリアG探索を含めると」

「3連続も謎が残ったまま冒険が終了しているんだよね？（大汗）」

「

「さすがにマズインじゃないか・・・いろんな意味で！！（どきどきどき）」

スファレ

「エリアG、忘却の迷宮、オービメント洞窟・・・」

「確かにマズイかもね〜・・・いろんな意味で（苦笑）」

エルバイト

「だろ〜？（汗）」

「だから、もう少しがんばろうぜ！！（大汗）」

です

なぜか必死

効果音「わいわいがやがや！」

フォスフォファイライト

「・・・・（じいっ）」

火柱の一点を見つめている

「え〜っと、ひょっとして・・・これがSA級のアイテムじゃ〜（

大汗）」

エルバイト

「なにっ！（がばっ）」 祭壇に駆け寄る

「どこ……どれ！？（ぎよろぎよろ）」

フォスファイ

「いや、この炎の中に浮かんでいる……玉？（汗）」

エルバイト

「……玉だと？（じいゝゝゝっ）」 火柱を凝視する

説明文「透明で小さな球体（ビー玉サイズ）が火柱の中に浮かんでいた」

コメント

小説版の第2話もほとんど出来ているんですが

セリフばかりで小説っぽくないので見直し中です（4コマ版の第2〜3話の書き直し）

第131話 アイテムでもビー玉でもありません

4コマ劇場 アイオライト―491・・・2011/02/17
シリーズ3

タイトル「アイテムでもビー玉でもありません」

1コマ

エリアC、オービメント洞窟最下層にて・・・

説明文「祭壇から立ち昇る火柱の中に小さな玉が浮かんでいる」

エルバイト

「これが SA級のスペシャルアイテム？（汗）」

「スファレの持っている時空族の遺産もそうだが・・・」

「SA級のアイテムって、全部こんなビー玉みたいな形をしているのか？（大汗）」

ロードライト

「え〜っと・・・（汗）」

「そうだったことは、無いと思うんですが〜（どきどきどき）」

エルバイト

「なんにしても・・・」

「オレたちが見つけたんだから、戦利品としてもらってもいいんだよな」

「では、みんなを代表してオレが・・・（そ〜っ）」 玉に手を伸ばす

ロードライト

「ちよつ、待つてください!」

「罾とかが仕掛けられている可能性もあるんですから」

「むやみに触らないでー!ー!ー!ー!ー!ー!ー! (大汗)」 伸ばされた

エルバイトの腕にしがみ付く

エルバイト

「止めるなロードライト!」

「オレは、どうしてもスペシャルアイテムを手に入れるんだー!ー!ー!ー! (叫び)」

ロードライト

「わあ、わあああっ~~~~!! (ダメー!ー!ー!ー!)」

フォスフォファイライト

「え〜つと、お取り込みのところすみません・・・ (ちよつといいですか?)」

エルバイト

「ぬ? (汗)」

ロードライト

「え? (汗)」

2コマ

フォスファイ

「これって、なんとな〜く」

「アイテムじゃないような気がするんですけど・・・ (汗)」

エルバイト

「アイテムじゃない〜?」

「じゃあ、何だっけ言うんだよ!?!」

フォスファイ

「いや……」

「そこまではわからないんだけど……」(大汗)

ジエムシリカ

「ああ」

「確かにこれは、アイテムではないようですね」
この人盲目
ですけど……それが何か?(笑)

エルバイト

「マジか……!?!?(どびっくり)」

スフレライト

「ちよっ、マジかって……」(怒)

「あんた、シリカさまが嘘をつくとも思ってるの!?!(がああ
ああ!?!)」

エルバイト

「って、そういう意味じゃねええええ!!!(大汗)」

シリカ

「あゝ、あははっ(苦笑)」(二人とも、ケンカしない)

効果音「ずがが……!?!」

3コマ

パロットクリソベリル

「えっと、シリカさん……」

「これが何であるのか 知っているんですか? (汗)」

シリカ

「はい」

「これは、卵です」

パロット

「……………」

「卵……ですか? (汗)」

エルバイト

「な……んだと(汗)」

「SA級のスペシャルアイテムじゃなくて……卵!? (涙)」

「うわあ、意味ねえ……(がっかり)」

フローライト

「卵……? (うん)」

「あつ、そっか」

「これって、ドラゴンの卵!?!」

シリカ

「そういうことです……と、いうか(汗)」

「フローラちゃん、良く知っていますね」

「ドラゴンの卵なんて、ほとんど表世界には出てこないというのに

(びっくり)」

フローラ

「あ、はい」

「お父さんに聞いたことがあるんです」

「お父さんが小さいころ、冒険の途中でドラゴンの卵を手に入れて」

「親ドラゴンに届けたことがあるって・・・」

「その卵がまるでビー玉みたいだって言っていました」

「ちなみに、その卵から生まれたのが」

「現在、王室で政治を取り仕切っているアクアちゃんです」

スファレ

「えっ、なに？(汗)」

「アクア・・・マリンさま!?(どびっくり)」
アクアに惚
れています

シリカ

「へえ、そうなんですな (それはびっくりです)」

効果音「わいわいがやがや」

4コマ

エルバイト

「・・・(汗)」

「ちょ、ちょっと待て」

「これって、これがドラゴンの卵?(どきどきどき)」

シリカ

「何ドラゴンなのは、聞いてみないと分かりませんが」

「間違いなくドラゴンの卵です・・・」

エルバイト

「って、てめえら何落ち着いてるんだよ!」

「ドラゴンの卵っていったら、すげえお宝じゃねえか!!(どびっくり)」

ロードライト

「おおお、お宝とかそんなレベルじゃありません!! (大汗)」
びっくりして固まっていた

「市場に出たら言い値で・・・」

「少なくとも国家予算の数年分で取り引きされるってあの!?(パニックっています)」

パロット

「所持しているのを知られると・・・」

「奪おうと襲ってくる強盗には、ことかけないんじゃないか」

「まあ、強盗だけじゃなく」

「国家間で戦争の火種になるかもな、真剣な話・・・ (大汗)」

スファレ

「えっ、そ、そうなのー！ー！ー!! (大汗)」

「じゃあ、ドラゴンの卵なんて持ってたら」

「年から年中、命を狙われるってことー！ー!?! (叫び)」

エルバイト

「そ、そんなの気にしてたら!」

「誰かに横取りされるだろうがあああ、ドラゴンの卵お!! (がああああ!!)」

?????

『ああ、まあ、うるさいな~~~~ (やれやれ)』

エルバイト

「・・・・ぬ?(なんだ?)」 声のした方・・・祭壇を見る

ドラゴンの卵?

第132話 ドラゴンの卵を護るモノ

4コマ劇場 アイオライト―492・・・2011/02/21
シリーズ3

タイトル「ドラゴンの卵を護るモノ」

1コマ

エリアC、オービメント洞窟最深部に・・・

ジェムシリカ

「高位のドラゴンは、二千年に一度卵を産み 七百年かけて孵る」

「そして、七百年の間も卵の状態で成長を続け・・・」

「孵った瞬間から、高い知能と戦闘力を有しているといわれています」

パロットクリソベリル

「そういうわけで」

「卵の状態で意思疎通できても、別に不思議ではない・・・」

スファレライト

「へ、へえ・・・(汗)」

「ドラゴンって、凄いだね～～～(じいっ) 祭壇に浮

かぶ卵を見つめる

ドラゴンの卵

『・・・・・・・・・・』

パロット

「でも、何でまたこんな地下深くにいるんだ？」

「卵の七百年間は、人の手を転々としながら」
「見聞を広める大切な時期じゃないのか？」

ドラゴンの卵

『・・・・・・・・・・』

エルバイト

「あゝ、急に無口になったな・・・（汗）」
「オレたち、警戒されてるのか？」（大汗）」

フローライト

「それは、仕方のないことだと思いますよ」
「ドラゴンとはいえ、卵の状態では動くことができません」
「つまり、この祭壇に置かれていたということは」

「何者かにオービメント洞窟に押し込まれたということですから・
・・・・・・・・」

ドラゴンの卵

『あんたたち、何者・・・？（ぼそつ）』
『何人からか、竜族の気配を感じるけど（じいゝゝゝっ）』

エルバイト

「り、竜族の・・・気配？（大汗）」

2コマ

フローラ

「えっと、わたしのお目付役に光竜族のアクアちゃんがいて」
「パロットさんとフォスフィさんは」

「十四創神の一人、幻獣神・・・光竜アレキサンドライトの創造せ
し」

「聖剣クリソベリルの使い手です」

ドラゴンの卵

『・・・マジ？（大汗）』

フローラ

「わたしのお父さん精霊神クリスタル（シヨウ）で、お母さんは天
空神サファイア（優子）」

「で、わたしたちのパーティの拠点にしている屋敷の管理人が」
「精霊神ファリスさま」

ドラゴンの卵

『あゝ、もうわかったって！』

『信じられないくらい、とんでもないメンバーだけど』

『悪い人じゃなさそうなのはわかったから・・・（やれやれ）』

エルバイト

「ふふふん」

「まあ、そういうことだ」

ドラゴンの卵

『って、あんたが一番悪そうなんだけど・・・（ぼそっ）』

エルバイト

「なんだとーーーーー！！（うがーーーーー！！）」

ドラゴンの卵

『なんでもいいから、早く帰ってよ・・・』

『わたしは、静かに眠りたいんだから。。。』

エルバイト

「つて、引きこもり系のドラゴンだな」（大汗）」

ドラゴンの卵

『なんですってー！ー！ー！（むきー！）』

3コマ

フローラ

「残念ですが・・・」

「あなたをこのままにしておくわけにはいきません」

「これから一緒に、ルチルクォーツ王都へ来てもらいます」

ドラゴンの卵

『はあ？』

『なんでわたしが！？（どびっくり）』

フローラ

「あなたの扱いは、同じ竜族のアクアちゃんにお願いしようと考えています」

「だから、あなたは何も心配しないで・・・（そっ）」
ド
ラゴンの卵に手を伸ばす

ドラゴンの卵

『ちよっ、ダメっ！』

『わたしを持ちだそうとすると、セキュリティが起動して！』

フローラ

「え？」

パロット

「ちっ、フローラ！（がばっ！）」 慌ててフローラに飛びつく

フローラ

「わにやっ！！」

効果音「がががっ、ばしばしっ！」 突然、祭壇の周囲に稲妻が降り注ぐ

シリカ

「みんな、祭壇から離れなさい！！」（叫び）

スファレ

「し、シリカさま！？（大汗）」

4コマ

効果音「ずごごごごごっ！」 石畳の三ヶ所がせり上がり、中から鎧騎士が現れる

エルバイト

「うわあっ、なんか出てきた！！（どびっくり）」

ロードライト

「が、ガーディアン！」

「鎧に魂を宿した宝物の守護者・・・（じくり）」

「討伐レベル・・・70以上！！（大汗）」

エルバイト

「マジかーーーー！！（ええーーーー！！）」

ガーディアンA

『!!(ぶうぶうぶん!)』

巨大剣を振り下ろす

フォスファイライト

「ひゃっ!!(びくっ)」「(死!!)」

目の前に巨大剣が迫る

「・・・って、あれ?(大汗)」

次の瞬間、何故か祭壇から

離れた場所にいる

フローラ

「フォスファイさんは、危ないですからここにいてください!(ぶうぶん!)」

時を止める

フォスファイ

「えっ、フローラさま 消えた!(大汗)」

「って、もうあそこに・・・瞬間移動!? (どびっくり)」「

パロット

「フローラ!」

「一体、やれるか!?!」

フローラ

「うっん、何とか(大汗)」

パロット

「シリカさんは・・・もう一体をお願いします!」

シリカ

「・・・はいはい(ちゃきっ)」「(言われなくとも) 長剣を
抜刀する

パロット

「よしっ……」

「それじゃあ、さっさと片付けますか……（かぼっ）」

聖剣クリソベリルを抜刀……

「って、そういえばクリソベリル砕けたままだった……！！」

（大汗）」

ドラゴンの卵

『ああ、一人頼りない人がいる……！！（涙）』

効果音「ずがが……！！！！！！！！！！ん！！」

コメント

最近、一話完結にならないな……（大汗）

第133話 光竜剣スフェーンファイア

4コマ劇場 アイオライト―493・・・2011/02/22
シリーズ3

タイトル「光竜剣スフェーンファイア」

1コマ

オービメント洞窟の最下層・・・祭壇に置かれたドラゴンの卵を護るように現われた三体のガーディアン。その討伐レベルは70を超えるという。すなわち、最下層まで到達したメンバーでガーディアンに対抗できるのは、ユークレースのユークナイトNo.3のジエムシリカ、ヒーラーでレベル1だがアウインの勇者であるパロットクリソベリル、そして、ルチルクォーツ王国の現国王でもあり時空能力を有するフローライトの三人だけであった。

時空能力により時間停止させたフローラが他のメンバーたちを祭壇から安全な場所まで遠ざける。その素早い判断により、他のメンバーが戦いに巻き込まれるのは回避されたようだ。

これで心置きなく戦える・・・。パロットは、三体のうち二体をシリカとフローラに任せて、自らは目の前に立ち尽くすガーディアンAと向かい合った。

「よしっ・・・。それじゃあ、さっさと片付けますか・・・」

仮にもドラゴンの卵を護っているガーディアンである。何者が設置したかは分からないものの、間違いなく一筋縄ではいかないだろう。パロットは自身に気合を込めながら 聖剣クリソベリルを抜刀した。

カポッ!

なにやら、予想していなかった音にパロットは啞然としてしまう。

しかも、抜刀した手応え・・・というより、聖剣の重さがまるで感じられない。いったい何事だろうか・・・。手元を確認したパロットは、聖剣クリソベルルの状態を確認して、数分前に何があったのかを思い出した。

「つて、そういえばクリソベルル砕けたままだったー！ー！」
「ああ、一人頼りない人がいるー！ー！ー！」

間髪を容れずにドラゴンの卵からつつこみが入る。パロットの戦いを見てもいなくせに、なんとも失礼な卵である。・・・が、剣を失って戦闘力が半減している現状では反論することも出来ない。まずは、聖剣クリソベルルの代わりとなる剣を何とかしなければならぬ。クリソベルルが砕けるとは思ってもいなかったパロットは、美咲から修行用に渡されていた銅の剣を王都へ置いてきてしまったことに後悔した。

そんなパロットの戸惑いにいち早く気づいたのはスファレライトであった。スファレは、自らの剣を取り出し、ガーディアンAの繰り出す巨大剣の一撃を辛うじてかわすパロットに向けて投げつけた。

「パロット、これを使って！」

「スファレ、濟まない・・・つて、こいつはシンセティック・ソード改じゃねえかあああー！ー！」

「で、でも　今はこれしか持っていないし・・・」

そう、柄だけの形状を置いて戦闘となれば刃が出現する携帯に便利な大剣。クリエイト能力を持つある意味マッドサイエンティスト・・・シンセティックの創造せし恐怖の魔剣　それがシンセティック・ソード改である。

その攻撃力は凄まじく、一振りすれば前方百メートルほどを地面ごと消し飛ばせるほどの威力があった。つまり剣とは名ばかりの広

範囲の大量破壊兵器……。この様な閉鎖された空間では全く役に立たない強力武器であるのだ。

ちなみに創造主であるシンセティック的には、シンセティック・ソード改の攻撃力はヒノキの棒ほどしか無いらしい……。

「パロットさん、下がってください！ シンセティック・カノン・ロツクオン！」

「ちよつ、ロードライトも何やってるんだー！ー！」

後方で同じく大量破壊兵器シンセティック・カノンを構えるロードライトにパロットは悲鳴を上げる。シンセティックの名の付く武器は、ほぼ例外無く超危険な代物……。しかも、シンセティック・カノンは、あの忘却の迷宮に巣くう古の巨大魔蟲をも粉々に吹き飛ばす威力がある。こちらの方も、シンセティック的にはただの麻酔弾らしいのだが……。

わかつてはいたことだが、パロットは改めて他のメンバーがこの戦闘に役立たないことを痛感する。パロットを含めて三人だけで、三体のガーディアンを何とかしなければならぬようだ。

2コマ

襲い来るガーディアンAは、身の丈が人の数倍はあろうかというほどの巨大さで、まるで伝承にある魔族が纏っているような不気味な形状の騎士鎧であった。だが、何者かが纏っているわけではなく、騎士鎧の関節部分からは炎のような光が漏れている。おそらく三体のガーディアンは、何らかの法術によって動いているのだろう。

そのことは、パロットにとっても有り難いことであった。人が纏っていないのであれば全力を出せる。戦闘能力が未知数なフローラは別にして、パロットとシリカ……。二人のユークナイトにしてみれば、討伐レベル70程度の相手など楽勝であった。まともな武器さえ手にしていれば……。

『ぐおおおおお！』

「ちっ、武器・・・何か武器は無いか！」

ガーディアンAの凄まじい攻撃を軽やかに交わしながら、パロットは武器になりそうなものを探す。この程度の攻撃をかわすのは何でもないが・・・このままではガーディアンAを倒すことなど永遠に適わないだろう。法術で動いているため耐性があるのか、パロットの光属性の精霊術は全く効かなかったからだ。

それは、武器での・・・打撃による攻撃が必要となることを意味している。やはり、武器となる何かが必要なのだ。

「シリカさん！ 何か予備の武器があつたら貸して・・・えっ！」

『うごおおおお！』

「うごっ！」

その光景にパロットは己の目を疑った。純粹な強さからすればパロットの数倍はあろうかというシリカがガーディアンBの攻撃をまともに喰らい弾き飛ばされていたからだ。

「し、シリカさん！」

パロットは、ガーディアンAの攻撃を素早く交わしてシリカの元へ駆け寄る。そして、シリカの様子に気づき全てを理解した。

「げほっ、ごほっ・・・」

大量の血を吐き出すシリカ・・・。決してガーディアンBの攻撃を受けて傷ついたわけではない。五年前に受けた古の巨大魔蟲の毒素がシリカの身体を蝕んでいるのだ。

先程まで平然としていたというのに、どうして急に病状が悪化してしまったのだろうか。美咲から預けられたぬいぐるみもどき……かっぱのかくくんをちゃんと抱えながら戦っていたというのに

「もしかして……。シリカさん、戦闘をすれば病状が進行する……とか？」

「さあ、なんのことかしら……」

誤魔化すよう視線を逸らすシリカに、パロツトは自分の予想が正しかったことを悟った。よくよく考えてみれば、その予兆は以前からあったかもしれない。再会してから今まで、シリカは一度も自らが戦おうとしなかったからだ。

五年前のシリカは、どちらかといえば前線に立って仲間を引っ張るような戦闘スタイルであった。他の者に戦いを任せて自らは傍観している今とは正反対なのである。それは、頼りない自分たちを成長させるため……。パロツトはそう考えていたのだが、どうやらそうではなかったようであった。

「ちっ、こんな状態のシリカさんをフローラの護衛に付けるなんて……、シトリンさんは何を考えているんだ！」

ユークレースのギルドマスターに悪態を吐きながら、パロツトは俯くシリカの背中を支えるように抱きしめる。なぜか、シリカの顔色は真っ赤に染まっていた。

3コマ

パロツトとシリカが戦場から一時離脱したことで、三体のガードイアンの目標はフローラへと集中していた。

時空能力を有するフローラの戦い方は、数秒間時間を停止させて安全圏へと避難……。そこから攻撃を仕掛けるといったものである。

傍目から見ていると、フローラが瞬間移動を駆使しながら、ガーディアンを翻弄しているようであった。

しかし、フローラの力でガーディアンの鎧を砕くことは適わないようで、結局はただ逃げ回っているだけ……。時空力が尽きれば捉えられてしまうのは目に見えて明らかであろう。

さすがに、戦闘することで病状の悪化するシリカをこれ以上戦わせるわけにはいかない。つまりは、三体のガーディアンをパロット一人で倒さなければならぬというわけだ。

やはり聖剣クリソベリルに代わる武器が必要である。戦闘不能となったシリカの長剣を借りることも考えられた。だが、低レベル者の武器ならともかく、彼女の長剣はシリカ専用にかスタマイズされたものであり、他者が扱うとバランス自体が崩れてしまう恐れもある。自らの剣を失った上、シリカの武器をもおかしくする訳にはいかないだろう。

こうなれば、一か八かシンセティック・ソード改を使ってみようか……。パロットがそう決めかねていると、不甲斐無い戦いに痺れを切らしたドラゴンの卵が突然叫んだ。

『いったい何をやってるのよ！ その鎧に勝てないんだったら、さっさとこの場から離れなさいって！』

ドラゴンの卵が言うように、パロットたちがこの場から去れば、ガーディアンが追いかけてくることはないかもしれない。ガーディアンの活動目的は、ほぼ間違いなく冒険者からドラゴンの卵を護ることであると考えられたからだ。

現に三体のガーディアンは、祭壇から一定距離を開けたパロットたちには攻撃してこない。祭壇から一番近いフローラへ向けて集中的に攻撃を仕掛けていた。

時空能力の多用からか、フローラの表情には疲れの様子が浮かんでいる。無理もない……。討伐レベル70のガーディアンを三体

も同時に相手しているのだから。

様々な状況を考慮した上で、パロットは一つの判断を下した。

「フローラ・・・下げれ！」

それを聞いたフローラは、反論することもなくパロットたちの下へと引き下がる。フローラも今の状況を打破する方法が思い浮かばなかったのだろう。

想像通り、三体のガーディアンは祭壇を護るように立ち尽くしている。祭壇　ドラゴンの卵に近づかない限り、襲い掛かってくることはなさそうだ。

『そう、それで良いの・・・。わたしのことなんて忘れて、あなたたちは帰りなさい・・・』

寂しそうに呟かれた口調をパロットは聞き逃さなかった。

「嫌だね・・・。おまえはオレたちが持ち帰る」

『はあく？　あんだ、何言ってるのよ！　そんなこと、出来るわけ・・・』

「卵は卵らしく、少し黙ってる！」

『ななっ！』

先程まで、現われたガーディアンとバカ正直に戦っていたがドラゴンの卵から離れることで相手は動かなくなることが判明した。そのことで、パロットの心に幾分かの余裕が生まれる。三体のガーディアンをじっくり観察し、冷静になつて考えを纏め・・・通路に避難している他のメンバーに視線を向けた。

「え〜っと・・・、借りる武器・・・無い？」

その瞬間、避難していたメンバー全員が見事にずっこけた。

「て、てめえ、まだそんなこと言ってるのかー！ー！ー！」

無駄に大声で叫ぶエルバイト。こいつは全く役に立たない。

「わたしのシンセティック・ソード改を貸してあげたでしょ！」

涙目で叫ぶスファレライト。確かに最後の手段としては有効かも知れないが、自らの命も危険に晒されそうなのでシンセティック・ソード改は使いたくない。

「じゃ、じゃあ、もう一度・・・聖剣クリソベリルを試してみる？」

聖剣クリソベリルの主となったフォスフォファイライト。欠片を吸収して真のクリソベリルとなった聖剣はフォスファイ以外を主として認めていないらしく、こともあるうに触れようとしたらパロットに電撃を喰らわせた。もう一度試すのはさすがに遠慮したい。

「うーん、シンセティック・カノンなら・・・」

「却下！」

間髪入れずに拒否するパロットに、ロードライトは気落ちして項垂れた。

目論見は見事に全滅・・・これからは予備の武器も携帯しておくことにしようと、パロットは今更ながら心に誓うのだった。

微妙に口の悪いドラゴンの卵を回収するのはもちろん、三体のガーディアンをこのままにしておくわけにはいかない。目標レベル23のオービメント洞窟に討伐レベル70の敵が存在しては、レベルの低い冒険者が訪れでもしたら太刀打ちできないからだ。

三体のガーディアンは、なんとしても倒さなければならぬ。改めて覚悟を決めたパロットは刀身が砕けて柄だけになった聖剣クリソベリルを握りしめる。すると、パロットの気質を感じ取ったかのように・・・聖剣の鏢に光が宿る。それは、虹色に輝く煌めきで、まるで炎が灯ったようであった。

「な、なんだ・・・これ！ クリソベリルの形が変わった？」

『えっ、ちよっ、何よその棒。わたしの力が 吸い取られてる！』

その言葉を証明するかのように、変形したクリソベリルの柄とドラゴンの卵の間には何らかの繋がりが感じられた。

直感とでもいうのだろうか・・・パロットは砕けた聖剣とドラゴンたちの間を縫うように駆け、ドラゴンの卵が浮かぶ祭壇まで辿り着く。そして、聖剣クリソベリルの柄を祭壇にかざした瞬間、その変化は始まった。

ドクッ！

聖剣クリソベリルの柄が生体の心臓のように脈動する。それと連動するかのようにドラゴンの卵が大きく振動し始めた。

その威力は凄まじく、空気を伝わる衝撃波によって三体のガーディアンが祭壇の近くから弾き飛ばされる。それとは真逆に、パロットは祭壇へと引き寄せられた。

無意識のうちに、パロットは聖剣クリソベリルの柄を祭壇から立ち昇る火柱へと近づける。その途端、火柱に浮かんでいたドラゴンの卵が消えてしまった。いや、ドラゴンの卵は消えてしまったわけではない。聖剣クリソベリルの鏢に吸収されてしまったようだ。パ

ロツトは、そのことを本能的に理解していた。

「うーん、なんでこうなったのか分からないが・・・とにかくお前の力を貸してくれないか？」

ガーディアンが迫ってくるのを横目で見ながら、パロツトは手に構える柄へ語りかける。普通に考えれば剣が喋るわけないのだがドラゴンの卵を吸収したことによって、その一般的な常識は通用しなくなっていた。

『これって、竜族の力を具現化する道具　のようね。なんとなく理解できる・・・』

迫り来る巨大剣の斬激を交わし続けながらパロツトは静かな口調で問いかける。

「詳しい話は後にして、まずはこいつらを倒さないと・・・。それで、あなたの名前は何ていうんだ？　まさか、名無しってわけじゃないんだろ？」

『・・・』

「あゝ、答える気は無さそうだな。じゃあ、お前のことはこれから卵竜へっぽこ太郎と・・・」

『誰がへっぽこかー！ー！　ああもおゝしょうがない。その騎士鎧を倒すことに強力してあげる』

「そうか、よろしくな、へっぽこ太郎」

『だゝかゝらゝ、わたしはスフェーン・・・光竜スフェーンっていうの！』

「スフェーンか・・・、良い名だ」

それを聞いたスフェーンは、急に黙り込んでしまう。剣の鏢に取

り込まれ表情までは分からないが　おそらく照れていることだろう。そんな様子にパロットは微笑みを浮かべる……。そして、聖剣の柄を斜め上に掲げ、ビュツと一気に振り下ろした。

閃光が走り　場に光が溢れ出した。

パロットの手には、聖剣クリソベルとは別の……。燃えさかる炎のように煌めきを放つ刀身の大剣が握られていた。

「光竜スフェーンの精霊力を具現化して誕生した剣……。まるで炎が宿っているかのような輝き　名付けて光竜剣スフェーンファイア！」

『なあくに、かつこつけてるんだか……。』

光竜剣からスフェーンの呆れた声が聞こえてくる。

後に、パロットクリソベルの代名詞とされる光竜剣スフェーンファイアが誕生した瞬間であった。

コメント

セリフだけで表現するのは無理だったのでこんな感じになりました。(笑)

でも、次回からは文字だけ4コマに戻ります (爆)

第134話 フォスフィの危機！

4コマ劇場 アイオライト―494・・・2011/02/28
シリーズ3

タイトル「フォスフィの危機！」

1コマ

エリアC、オービメント洞窟最深部にて・・・

スファレライト 通路から戦いを覗いている

「光竜剣・・・スフェーンファイア！」

「かつこいいい〜」（おお〜）

ロードライト

「し、信じられません・・・（大汗）」

「たとえ竜族の協力があつたとはいえ」

「この土壇場で専用武器を創造してしまうだなんて（どきどきどき）」

「しかも、これまでの聖剣クリソベリルより似合ってる！！（どきどきどき）」

エルバイト

「名前にクリソベリルって付いているわりに・・・」

「聖剣クリソベリルには、とことん嫌われていたな〜」（笑）

ロードライト

「でも、聖剣クリソベリルが砕けてしまう直前」

「主だと認められていたようですよ・・・（フローラさんの話では）」

エルバイト

「認められたにしても・・・」

「砕けちまったら意味ないけどな〜」 (あははっ)

ロードライト

「それは〜、そうなんですけど〜・・・」 (大汗)

フォスフォファイライト

「・・・(じいっ)」

「・・・ん？」 何かの気配を感じる

2コマ

アメトリン 通路の奥から声をかけている

「おい、フォスファイ・・・」 (ひそひそ) 小声でフォス

ファイを呼んでいる

「こっちこっち！(ひそひそ)」

フォスファイ

「・・・アメトリン(汗)」

「ええ〜っとな・・・(きよろっ)」 祭壇のパロットに視線を

向ける

回想中・・・

パロットクリソベリル

『フォスファイ・・・』

『ドラゴンファングのリーダーであるアクロアイトが』

『ラリマーの人形使いスペクトロライトに操られているのは間違いない』 説明口調(笑)

『アクロアイトが・・・いや、他のドラゴンファングのメンバーが接触してきても』

『簡単に言うことを聞かないよう 話に乗らないことにしてくれ』
『操られているのがアクロアイトだけとは限らないからな(ぼそっ)』

フォスファイ

『えっ!?(汗)』

パロット

『とにかく、目の前の脅威は排除しなければならない』

『次にドラゴンファングのメンバーが敵として現われたときは』

『フォスファイも覚悟をしておいてくれ(ぼそっ)』

回想終了・・・

アメトリン

「フォスファイってば〜〜(ひそひそ)」「き・こ・え・て・る(〜?)」

フォスファイ

「・・・(うう)・・・()」 考え中〜

「パロット・・・(ちらっ)」「

「約束破って ぐめん!(そっ)」「 スファレたちから離れる

3コマ

最下層手前の空間にて・・・

ハックマナイト

「あち～～っ (大汗)」

「招き猫の連中・・・こんなところまで来やがって～ (だらだらだら)」「汗だく

アメトリン

「お待た～～」

「フォスファイ、連れてきたよ～～」

アクロアイト

「フォスファイ・・・無事だったか (にっこり)」

フォスファイ

「うっ・・・ (びくっ)」

「アクロ・・・ (どきどきどき)」アクロに殺されかけた

アクロ

「フォスファイ・・・、どうしたんだ？」

フォスファイ

「・・・ (じいっ)」「やっぱり覚えてないの・・・かな？」

「う、ううん・・・何でもない (大汗)」

アクロ

「?????」

アメトリン

「つて、そんなことより!」

「鈍感なフォスファイは気づいてなかったかもしれないけど」

「招き猫勇者隊のパロットクリソベルル・・・」

「あいつがお姫さまの命を狙う暗殺者なんだって!!」

フォスファイ

「・・・え？（汗）」

アクロ

「ああ、ボクは見たんだ・・・（汗）」

「あいつが睡眠中のフローラさまを」

「暗殺しようとしていたところを・・・（じくり）」

4コマ

フォスファイ

「な、何言って・・・（汗）」

「フローラさまを殺そうとしたのは・・・アクロ（ぼそっ）」

アクロ

「・・・・・・・・・・」
虚ろな瞳

効果音「ぶう〜ん、ざくっ！」

フォスファイ

「うぐっ!？（痛っ!）」
突然、背中を斬られる

ハック

「この、暗殺者め〜・・・（ちゃきっ）」
血の付いた短剣を
持っている

「姫さんを狙うなんて、ふざけたヤツだ・・・」
虚ろな瞳

フォスファイ

「は、ハック・・・さん!？（大汗）」（どうして・・・）

「あたしのこと、分からないんですか!？（涙）」

アクロ

「……………(しゃきっ)」

長剣を抜刀する

フォスファイ

「あ、アクロ(ぞおっ)」

「…………アメトリン！」

「一緒に逃げ…………って、ええっ!?(どびっくり)」

アメトリン

「!!(がしっ)」 フォスファイの腰にしがみつく

「逃がさないわよ、この暗殺者…………!」(叫び)「…………(叫び)「やり目は虚ろ

アクロ

「……………(そっ)」

長剣をゆっくり振り上げる

フォスファイ

「ちよっ、放しなさいアメトリン!(汗)」

「このままじゃ、あなたも斬られて…………」

「やめてアクロ!…»

「アメトリンまで、殺す気なの!?(叫び)」

アクロ

「……………(ぼおっ)」

虚ろな瞳

フォスファイ

「あ、アクロ……………!」(叫び)「目を覚まして……………!」

レイチエル

「あ、あう〜・・・(汗)」 一人だけ蚊帳の外
「ええ〜っと(どきどきどき)」(いったい何事?)

アルフォーニ(ぬいぐるみ型) レイチエルに抱っこされて
いる

「なんにしても、助けた方がよろしいのでは?(大汗)」

フォスファイ

「つて、誰だか知らないけど・・・」

「早く助けれ—————!!!(叫び)」(うにゃ—————
—————!!!)

効果音「ずがが—————ん!!!」

コメント

お忘れかも知れませんが、ドラゴンファングにはレイチエルが同行しています

第135話 突然の乱入者に勇者隊は混乱しました

4コマ劇場 アイオライト― 495・・・2011/03/03
シリーズ3

タイトル「突然の乱入者に勇者隊は混乱しました」

1コマ

エリアC、オービメント洞窟最深部にて・・・

ガーディアンA

『うごおおおお!!!(がしゃんがしゃん!)』 巨大剣を振り
上げてパロットに向かってくる

フローライト

「パロットさん、気をつけてください!(叫び)」

「その剣・・・光竜剣スフェーンファイアの刀身は」

「光竜の精霊力が結晶化して作られた聖剣クリソベリルとは違いま
す!」

「光竜剣スフェーンファイアの刀身は」

「柄に取り込まれた光竜スフェーンちゃん生命力によって具現化
されています」

「つまり、万が一、刀身が碎けるようなことがあれば・・・」

パロットクリソベリル

「わかっている!」

「せっかくスフェーンが力を貸してくれているんだ・・・」

「絶対大切にする!!(ぶうーん!)」 光竜剣を一振りする

スフェーン(光竜剣形態)

『……………(ぽっ)』 照れています

ジエムシリカ

「きゃー！ー！ー！ー」

「パロツトくん、かつこいい〜…げふげほっ！」 吐血

(笑)

フローラ

「って、シリカさん…興奮しすぎ！ー！ー！ー！！(涙)」

効果音「ずががー！ー！ー！ーん！」

2コマ

ガーディアンA

『がぎやー！ー！ー！！(がががっ！)』 痛恨の一撃？

パロツト

「ふん…。(さっ)」 軽やかにかわす

「そんな大振り…。」 光竜剣を構える

「喰らうものかー！ー！ー！！(うおおお！！)」 会心の

一撃!?

効果音「ずずずっ、どがががっ！！」 突然、壁が崩れて何か
が飛び込んでくる

エルバイト

「って、なんだ!?(どびっくら)」

スファレライト

「わにゃー！ー！ー！(汗)」 頭を抱えてしゃがみ込む

「なになに、何が起こったのーーーーー!! (涙)」

フローラ

「・・・え? (汗)」

「あれって・・・まさか!? (大汗)」

説明文「最下層に飛び込んできたのは、限りなく生態に近い機械で出来た伝説上の聖獣麒麟だった」

レイチエル

麒麟の上に乗っている

「あーーーーー!!」

「アルフォーニ、あの人たちなんだか操られているみたいだから
「傷つけちゃダメだからね!!」

アルフォーニ (中型形態)

馬ほどの大きさ?

『判っています・・・』

『そんなことより、斬られたその人を何とかしないと! (汗)』

フォスフォファイライト

同じくアルフォーニに乗っている

「う、ううつ・・・」

前回、ハックマナイトに背中を斬られた

3コマ

フローラ

「れ、レイチエルさん! (叫び)」

「どうしてここに!?! (大汗)」

レイチエル

「あう? (誰?)」

フローラ

「え〜っと、わたしです！」

「如月さん家でお世話になっている桜です！（こんな姿をしています！）」

レイチエル

「桜・・・ちゃん？（汗）」 あつちの世界では三歳児姿

「あれ、ここって五千年後の世界だよな（どきどきどき）」

ガーディアンB

『うごおおおおー！』 レイチエルたちに襲いかかる

アルフォーニ（中型形態）

『生体反応無し（ぼそっ）』

『レイチエル・・・どうしますか？』

ガーディアンC

『がががっ！！』 巨大剣をレイチエルたちに振り下ろす

レイチエル

「あうっ！」

「アルフォーニ・・・やっちやえ〜〜」

アルフォーニ（中型形態）

『了解！！（キラッ）』 瞳が赤く光る（念動力発動）

ガーディアンB

『うごごっ・・・（みしみっ）』 動きが固まる

ガーディアンC

『・・・ががっ（ぐわしゃっー！）』 鎧がベこベこに凹み出す

効果音「どつがあああ〜ん!!」
爆発!
ガードイアンB・Cが大

スファレ

「なああああーーーーー!!」(どびっくり)「何が起こったのーーーー!」

4コマ

パロット

「・・・な!? (大汗)」

「二体のガードイアンを・・・一瞬で!!」(どびっくり)「

スフェーン(光竜剣形態)

『ちよつ、なに余所見して・・・あつ』

ガードイアンA

『が、がああああつ!!』(ぶう〜ん!)
再び巨大剣を振り下ろす

パロット

「や、やばっ!? (大汗)」

レイチエル

「あうつ、アルフォーニ!(きよろつ)」
後方の気配に気づいて振り返る!

「もう一体、鎧が・・・って、やっぱりダメーっ!!」

アルフォーニ(中型形態)

『とりゃーーーーー!!』(ぐおおおっ!!) 後ろ足で思いつ

きり蹴り付ける

『って、ダメ!? (何が?)』

効果音「ずげしっ、どががっ!」

パロット

「げふっ!」 背中にアルフォーニの蹄が直撃!

ガーディアンA

『うごっ!? (ぐわしゃっ)』 パロットごと蹄がぶつかり吹き飛ばされる

『…………… (どつがあああ〜ん!)』 遠くで大爆発!

アルフォーニ (中型形態)

『あ…………… (大汗)』 (しまった)

パロット

「……………うぐっ (ごぼっ)」 大量の血を吐き出し、地面に倒れ込む

「……………」 ピクリとも動かなくなりました

スフエーン (光竜剣形態)

『ちよっ、あなた……………大丈夫なのって (大汗)』

『この人息してない!! (どびっくり)』

『っていうか、心臓も止まってる……………!? (わにゃ……………!!!)』

パロット

「…………… (ちーん)」 絶命しました (爆)

レイチエル

「きゃーーーーー! (大汗)」

「どっしょよう……どっしょよう! (おるおるおる)」

スファレ

「あ…… (汗)」

「パロツって、平均して三日に一度は死んでない? (どきどきどき)」

スフェーン (光竜剣形態)

『そうなのーーーーー!?! (わにゃーーーーー!?!)』

効果音「ずがががーーーーーん!?!」

コメント

時の宝珠で時間を五分間だけ戻して、パロツトの絶命は無かったことになりました (笑)

第136話 時空族の遺産を求める者たち

4コマ劇場 アイオライト―496・・・2011/03/06
シリーズ3

タイトル「時空族の遺産を求める者たち」

1コマ

エリアC、オービメント洞窟最深部にて・・・

スファレライト

「てなわけで〜(ぱっ!)」 時の宝珠を掲げる

「死の世界から蘇れ、パロットクリソベリルーーーー!!!(ぴか
ーーーー!)」

パロットクリソベリル

「……………どくっ、どくっ」 心音が戻る

「う、うう〜(むくり)」 身体を起こす

「いったい、何が起こったんだ(きよるきよる)」 何もなか
ったかのように平然としている

スフェーン(光竜剣形態)

『すごっ!!(どびっくり)』(本当に生き返った!)

スファレ

「え〜っと、これは時の宝珠っていつて」

「特定のモノや空間の時間を、約5分だけ戻せるってアイテムなん
だよ〜」

「まあ、1日1回しか使えないんだけど〜(苦笑)」

スフエーン（光竜剣形態）

『たとえ1日1回でも凄いつて！！（大汗）』

アルフォーニ（中型形態）

麒麟の形をした乗り物？

『・・・レイチエル（ぼそっ）』

レイチエル　アルフォーニの上に乗っている

『あう・・・（うん）』

『もう見つかつちゃった（ぼそっ）』

『この聖界にある　時空族の遺産・・・（大汗）』

フォスフォファイライト

『う、うう〜ん・・・（痛っ）』　　前々回、ハックマナイトに

背中を斬られた

レイチエル

『あうっ！！』

『早くこの人の治療をしないと！！（大汗）』

アルフォーニ（中型形態）

『・・・』　　何かの気配に気づく

『どうやら、そう簡単にはいきそつにありませんよ（ちらり）』

自分が開けた壁の穴をチラ見

レイチエル

『あう？（きよろっ）』　　アルフォーニの視線を追う

2コマ

突然の登場

アクロアイト 虚ろな瞳

「……………(ぼお〜)」 手には長剣を持っている

ハックマナイト

「殺す、殺す、殺す(うけけけつ)」 明らかに普通じゃない

猫戦士 (笑)

ロードライト

「えっ!(汗)」

「ドラゴンファングの……みんな!?(どびっくり)」

アメトリン

「こいつらが……フォスフィの仇 (ぼそっ)」

フォスフィ

「って、まだ死んでないわぁー……!!!(うにゃー……!!)

!」 意外に元気です(爆)

パロット

「ちっ!」

「ヤツら、またフローラを狙って!!!」

スフェーン(光竜剣形態)

「えっ、何なに?」

「別の敵なの!?(大汗)」

ジェムシリカ

「フローラちゃん、気をつけ……げぼげぼっ!」 吐血

フローライト

「あゝ、シリカさん（大汗）」

「あまり興奮しないで！！（涙）」

レイチエル

「あうゝ・・・（汗）」

「なんだかドタバタしてるねゝゝゝ（苦笑）」

アルフォーニ（中型形態）

『この方たちにも、何かとあるのでしょうか』

『わたしたちと同じように・・・色々と（ぼそっ）』

レイチエル

「あうゝ・・・（汗）」

「せっかく時空族の遺産を見つけたっていつのに」

「いったいだいたちは、今どこで何をやってるのかなゝゝゝ（しくしくしく）」

3コマ

エリアD、砂漠地帯の中央にある森林にて・・・

美咲

「・・・ん？（なに？）」 上空を見上げる

アンバー

「美咲・・・どうした？」

アンデシン

「な、なんだ！？（大汗）」

効果音「ごおおおお、ひゅゝゝゝゝゝゝっ・・・どががあああああ

ん！」

アンバー

「何かが砂漠に落ちたーーーーー!!!(どびっくり)」「(地面がすげえ揺れてるーーーー!)」

美咲

「!!!!(たたっ!)」

落下した何かに向かって走り出す

アンデシン

「なっ、美咲……さん!? (汗)」

アンバー

「ちよっ、美咲!」

「おまえ、何処に行くつもりだーーーーー!!!(叫び)」

「って……、めっちゃめっちゃ早え~~~~(大汗)」(もう見えねえ~~~~)

美咲、砂漠へ向けて超速で走っている……

美咲

「あの巨大な鳥のような空飛ぶ物体」

「間違いない、超獣神の聖獣機!」

「そして鳳凰の形を模した聖獣機ということとはつまり……(たたっ!)」

砂漠に到着

「超鳳神グランゾル……っ、あれ?(どきどきどき)」

突然の登場

???

砂漠に出来た巨大クレーターの縁に立つ女性

「あゝ・・・(汗)」

「はぐれたレイチエル捜すゆうてはりきとったわりに」

「墜落するとは、情けないやつちゃなゝゝゝ(やれやれ)」

白虎っぽいぬいぐるみ 女性に抱っこされている

『ダイのやつ、この聖界に到達するまで『腹減った』を連呼していたからな・・・』

『超獣神は、我ら機獣神とは違って・・・マスターの精神に同調することがある』

『軽いエネルギー不足にでもなったんじゃないか？(やれやれ)』

???

「あつはつはつ」

「相変わらずへつぽこなヤツらやなゝゝゝ (泣けてくるわゝゝゝ)

」

「・・・って、なんや？(誰か来たで・・・)」

4コマ

美咲

「あ・・・あゝ・・・!? (大汗)」

「カナリーさんに、白虎の機獣神コーネルピン!!! (どびっくり)」

カナリー 本名スペサルティン・ガーネット / 大魔王ル

シフォンの実妹

「んゝ・・・」

「誰やおもたら、超亀神カークンのマスターやないか (久しぶ

りやなゝゝ)」

美咲

「って、かゝくんは超獣神じゃありません!!! (わにゃーーーー)

っ！！）」

カナリー

「ああ、そやったそやった（汗）」

「あれは、かつぱ・・・ってことやったな～～（苦笑）」（相変わらず頑固なやつちゃやで～）

コーネルピン（ぬいぐるみ型）

『・・・・・・・・（じいっ）』

『時空間転移の反応が感じられないことから考えると・・・』
『信じられないことに、この時代の樹神美咲のようだな』

カナリー

「人間族の寿命が80年前後やって考えると」

「あんだ、とんでもなく長生きなんやな～（大汗）」

美咲

「あ、この時代では」

「人間族の寿命も300年ほどに延びていますよ～」

「わたしは、ラルドさまに弟子入りしてから」

「かれこれ五千年は生きていますけど・・・（苦笑）」

カナリー

「あんな非常識なヤツに弟子入りするからやで～（大汗）」（悲惨なやつちゃな～）

美咲

「ほっといってください・・・（しくしく）」

「ところで・・・、カナリーさんはどうしてこの時代に？」

「それに、さきほど聖獣モードのグランゾルを見かけたんですが～」

(きよろきよろ)「

カナリー

「ああ、グランゾル〜?」

「ダイたちなら・・・(す〜っ)」

クレーターの底を指差す

「墜落の衝撃で木っ端微塵になって、今はえっらい勢いで燃えてるで〜〜」(ほら、あそこ)「

グランゾル(聖獣モード)

『・・・(ぐおおお!!)』

真っ赤な炎を上げて

燃えている(爆)

美咲

「きゃーーーーっ! (どびっくり)」

「ダイさーーーーん!! (涙)」

効果音「ずがーーーーーん!!」

カナリー

「あんな状態なんや〜」

「搭乗者も間違はなく死んだるやろうけど・・・」

「相手はダイなんやから、次回には復活しとるんちゃうか〜〜」

(あははっ)「

美咲

「ああ、そうですね・・・(大汗)」(た、確かに・・・)

「ダイさんのことですから」

「次の4コマでは、何事も無かったかのように」

「1コマ目から登場しているでしょうね・・・(うんうん)」

突然の登場

ダイ 火だるま状態

「って、ちょっとは心配しやがれーーーー！！（わぎゃーーーー
ー！！）」

美咲

「あ……（汗）」

「もう復活してきた……（どきどきどき）」

カナリー

「あははっ」

「相変わらずの不死身っぷり……」

「さすがは破壊と再生を司るへっぽこ勇者やで〜〜」

ダイ

「へっぽこじゃねええええーーーー！！（がぎゃーーーー
ー！！）」

コメント

ダイは、パロットと違いちょっとやさっとでは死にません（死
んでも復活します）

第137話 さすがにアレは食べられないでしょう

4コマ劇場 アイオライト―497・・・2011/03/09
シリーズ3

タイトル「さすがにアレは食べられないでしょう」

1コマ

エリアD、砂漠地帯にて・・・

ダイ 18歳 / 『超獣神グランゾル』の主人公

「ふう〜・・・（だくだく、ぷすぷす）」 全身血だらけで所々焦っています

「死ぬかと思っただ〜（やれやれ）」 額の汗を拭うような動作

美咲

「・・・いや（汗）」

「その出血、普通なら死んでますよね（どきどきどき）」

カナリー

「あははっ」

「ダイはどっちかってゆ〜とギャグ要員やから 主人公のく

せに（笑）

「簡単には死ななくて〜」

美咲

「あ〜・・・（大汗）」

「死にまくっているパロットさんとはえらい違いです〜（苦笑）」

（かれこれ3〜4回？）

ダイ

「ん、パロット？（きよろっ）」

美咲に視線を向ける

「って・・・おまつ！？（汗）」

「シヨウン家にしょっちゅう遊びに来ていたヤツだよな！（大汗）」

「

「確か、樹神飛鳥の従妹！！」

飛鳥は人間神の一人です

美咲

「は、はい・・・（汗）」

「樹神美咲と申します（ぺこり）」

ダイ

「で、なんでまたこの時代にいるんだ？」

「おまえも、オレたちみたいに時空間移動しているのか？（汗）」

美咲

「え、つと、それは・・・ですね（大汗）」

ダイ

「まあ、何でもいいか（オレには関係ないことだし・・・）」

美咲

「うっ（がくっ！）」

「相変わらずの適当さですね（苦笑）」

カナリ

「そこがへっぽこ勇者のいいところや（笑）」

ダイ

「そんなことより」

「美咲、近くに水場とかないか？」

「できれば、湧き水のような綺麗な水が良いんだけど・・・」

美咲

「ああ、それならこの森の奥に泉がありますよ」

ダイ

「そいつはラッキーだ（ひょいっ）」　ぬいぐるみ型となっ

たグランゾルを抱き上げる

「レイチエルを見つげるためにも（こそこそ）」　懐から何か

を取り出す

「早いとこグランゾルを修理しないといけないからな」（にこっ）」

美咲

「・・・修理？（汗）」

「えっつと、超獣神の修理に」

「食器洗い用の中性洗剤・・・ですか？（どきどきどき）」

ダイ

「ん？」

「何か・・・変か？」

美咲

「いや・・・あの～～～（大汗）」　理解不能！！（爆）

泉の畔にて・・・

ダイ

「ふんふん (「じじ」)」 中性洗剤でぬいぐるみを洗っている

グランゾル (ぬいぐるみ型) 超獣神のメインコア (鳳凰型)
『うおっ、ぐふっ、あはっ!』 悶えています (笑)

ダイ

「うくん、こんなものか〜」
「じゃあ、水気を飛ばして! (ぶんぶんぶん)」 グランゾルを振り回す

グランゾル (ぬいぐるみ型)
『はうあわわっ!?!』 目が回る

ダイ

「よし、きれいになった」
「グランゾル・・・調子はどうだ?」

グランゾル (ぬいぐるみ型)
『うむ、超鳳神グランゾル・・・完全復活だ!! (叫び)』

アンバー

「うおっ! (大汗)」
「ぬいぐるみが喋った!! (どびっくり)」 (しかも、宙に浮いているし!?)

アンデシン

「妖怪の類が・・・ (ぼそっ)」

美咲

「か、完全……復活？（大汗）」（食器洗い洗剤で……）
「……」（きよろっ）」 隣のカナリーに意見を求める

カナリー

「あ……（汗）」

「深く考えないのが正解やで……」（苦笑）」

「ちなみに、洗って故障が直るんは」

「超獣神の中でもグランゾルだけやけどな……」（あははっ）」

美咲

「あ、そうですか……」（ときどきどき）」

効果音「ずがが……！！ん！！」

3コマ

カナリー

「で、美咲はこんなところで何しとるんや？」

「衛星地図によると、人の住んどるところはかなり先みたいやけど」

美咲

「え……とですね……」

「この先に忘却の迷宮と呼ばれる難易度高めの古代遺跡がありました
て」

カナリー

「ほお、古代遺跡……ねえ（にやり）」

美咲

「忘却の迷宮には古の巨大魔蟲という大ムカデが大量発生していて」
「かなり危険なんです……」

「迷宮の奥に巢食う怨霊を何とかしないと」
「命が危ない人がいます〜」（苦笑）
を濁している
なんとなく言葉

カナリー

「古代遺跡つつ〜ことは・・・」
「昔の財宝が隠されとる可能性が大つきいよな〜」（ふふっ）
元時空盗賊です
「つまりは〜、そいつを見つけたもん勝ちってことやな（にやり）」

美咲

「ちよっ!？（大汗）」（何を言って!）

カナリー

「おいダイ!」
「うちらもその忘却の迷宮つてのに潜るで〜〜」

ダイ

「腹も減ったし、めんどいからヤダ・・・（ぼそっ）」
「それに、オレははぐれたレイチェルを捜さないと」

カナリー

「・・・（大汗）」（こ、こいつ〜）
「はっ〜」
何かを思いつく
「そういえば・・・美咲〜」
「古の巨大魔蟲つて・・・すげえ有名なんやよな〜」

美咲

「え?（汗）」

「はい、有名といえば　有名ですね」
凶悪すぎて
「それが・・・なにか？（大汗）」

4コマ

カナリー

「ってことや〜」

「ダイ・・・」

「どうやら古の巨大魔蟲ってヤツは」

「この国の名物料理の高級素材みたいやで〜〜」

ダイ

「名物・・・高級!!（びくっ）」

美咲

「りよ、料理!？（どびっくり）」

カナリー

「たしかに、レイチエルのことも心配や〜」

「が・・・、レイチエルはあんたよりも強いわけやし」

「そんな心配する必要もないんちゃうか〜?」

「それよりや〜」

「高級素材を集めといて、合流したとき名物料理と一緒に食べよや
ないか〜」

美咲

「いやいやいや（汗）」

「高級素材なのは確かなんですが」

「食用ではなく、外殻とかが武具用に使われるだけで・・・（大汗）」

「

ダイ

「よっしゃーーーーー!! (叫び)」

「待ってるよ古の巨大魔蟲!!!(ぐう~~~~) (お腹が鳴る)」

「一匹残らずこのオレが食ってやる (じゅるり) (よだれが流れる)」

美咲

「ええーーーーー!!!(どびっくら)」

カナリー

「あっはっはっ (高笑い)」

「さすがはへっほご勇者」

「扱いやすいで~~~~ (爆笑)」

美咲

「ちよっ、カナリーさん!」

「本音が駄々漏れになっていますよーーーーー!?!」

「っていつか、あんなの食べたら確実に死んじゃいますって!!!(わにゃーーーーー!!)」

効果音「ずがーーーーーん!!!(」

コメント

お腹が減っていれば何でもおいしい?(笑)

第138話 超獣神、第三の戦闘形態

4コマ劇場 アイオライト―498・・・2011/03/10
シリーズ3

タイトル「超獣神、第三の戦闘形態」

1コマ

忘却の迷宮にて・・・

美咲

「あゝ、あはははっ（苦笑）」 困ったように見上げる

古の巨大魔蟲 一回り大きなサイズ

『あんぎゃー！ー！ー！ー！ー！（叫び）』

アンデシン

「なっ！？（大汗）」

「こんな大きさの巨大魔蟲・・・報告に無いぞ！！（大汗）」

アンバー

「あががっ・・・（がたがたぶるぶる）」

「は、早くシンセティック・キャップを被らないと・・・（涙）」

気にされなくなる

美咲

「臭いを覚えられたようですから」

「いまさら石ころ帽子を被っても無駄ですよ」

古の巨大魔蟲

『……………(にやり)』 アンバーに視線を向ける

アンバー

「えええええー！！！！！！(泣)」

効果音「ずががー！！！！！！ん！！！」

2コマ

ダイ

「お、おおおお…。(汗)」

「これが 古の巨大魔蟲 (どきどきどき)」

カナリ

「うゝん…。(大汗)」

「うちから振ったネタやけど」

「こいつは食べられそうにないな〜(きしょっ!)」

ダイ

「何を言う!」

「オレの住んでたお隣の国では 人間界の話

「ムカデの姿焼きが露店で売られているんだぞ(テレビで見たことがある)」

「つまり!!」

「巨大な個体で大味になるかも知れないが」

「喰えないことはない!!! (ぐう〜) お腹が鳴る

カナリ

「って、マジで喰う気かああああ!! (わぎやー！！！！!!)」

古の巨大魔蟲

『!!(びくっ!)』

基本、捕食側

ダイ

「うけけっ・・・(キュピーン)」

瞳が妖しく光る

「さあそのムカデ」(ちやきっ)」

牙龍鳳翼剣を抜刀する

「大人しく、オレの胃袋に収まりやがれーーーー!!(どりゃー
ーっ!!)」

美咲

「ちよっ、ダイさん!!(どびくっり)」

古の巨大魔蟲

『がぎゃっ・・・(ぺちっ)』

前足の1本でダイを弾く

ダイ

「ぬおーーーー!!(びゅーーーーっ!)」

超速で弾き飛

ばされる

「げふっ!? (どががっ、ぐしゃっ!)」

岩壁にぶち当たっ

て潰れる(血だらけ)

アンバー

「えええええ!!?(どびくっり)」(弱っ!!)

3コマ

アンデシン

「ちっ・・・(きよろっ)」

絶命したダイをチラ見

「やはり一筋縄ではいかないようだな(くそっ!)」
長剣を
構える

カナリー

「あっはっはっ (大爆笑)」

「ダイ、相変わらず見事なやられっぷりやな〜」 (にやにや)

アンデシン

「おいお前・・・(ギロリ)」

「いくら知り合いだからとはいっても」

「死者を冒瀆するような物言いは・・・」

ダイ

「さすが・・・美味そうなだけあって強いな〜(だくだくだく)」

血だらけで平然としている

カナリー

「いや・・・(汗)」

「どう考えても、美味そうには見えんけど(どきどきどき)」

アンデシン

「死ーーーーー!?(びくーーーーっ!)」

美咲

「さすがはダイさん(ぼそっ)」

「わずか1コマで復活するとは・・・(大汗)」

アンデシン

「それって、どついう理屈だよ!!! (復活って何だーーーー!?)」

4コマ

カナリー

「で、どないするんや」ダイ・・・」

「敵さん、かなり強そうやで」(にやにや)」

ダイ

「ふっ・・・(微笑)」

「それならこちらも本気を出すまで！」(ちゃきっ)」
両手で
牙龍鳳翼剣をしっかりと握る

美咲

「って、まさか！？(大汗)」

ダイ

「来い・・・」

「グランゾォー！ー！ー！ー！(ずぎゃー！ー！ー！)」

牙龍鳳翼剣を天に向けて突き上げる

説明文「ダイの全身から稲妻が発生し、牙龍鳳翼剣を伝って天井へ向って伸びる」

「天井近くに魔方陣のような紋様が浮かび上がり、中から巨大な鳳凰の形をした聖獣機が出現した」

グランゾル(聖獣モード)

『おおおっ！！』

アンバー

「なああああああ！？(どびっくり)」

アンデシン

「ま、魔物か！？(大汗)」

美咲

「ちよー！ーっ！（汗）」

「ダイさん、まさかこんな洞窟内で」

「グランゾルをバトルモード（巨大ロボット）にして戦うつもりな
んですか！？（大汗）」

ダイ

「ふふ〜ん」

「美咲〜、オレを見くびるなよ〜」

「確かに、超獣神は巨大な敵と戦うためのものであり」

「人や、目の前の微妙な大きさの魔物と戦うのには向いていない・

・

「しかー！ーし！」

「オレが強くなるのと同じように 超獣神も進化する！！」

美咲

「し、進化！ー！ー！？（大汗）」

ダイ

「行くぞ・・・（ぼそっ）」

「グランゾル、アーマーモード・チェー！ーンジ！！（叫び）」

グランゾル（聖獣モード） 中型モードに縮小？

『おおー！ー！ーう！（しゃかー！ーん！）』

美咲

「ええー！ーっ！！」

「グランゾルが縮んで・・・バラバラになった！？」

効果音「がしゃっ、ちゃきっ、ぴかーん！」

バラバラになっ

たパーツがダイの身体に装着される

ダイ グランゾルの鎧を装備したへっぴょこ勇者

『燃えるオレの小宇宙^{コスモ}！』 萌える・・・か？（笑）

『これぞ、対人に特化したグランゾル・アーマーモード[！]！』

『これなら、シヨウとも互角に戦えるぜ』 無理です（爆）

美咲

「パクリだ・・・」

「聖闘士 星矢のパクリだーーーー！！（わにゃーーーー！！）」

ダイ

『誰がパクリかーーーー！！（うがーーーー！！）』（あくまでも進化だ！！）

つつこみ「いやいや、本当に聖衣^{クロス}っばいですよ（笑）」

コメント

たぶんトラピッチェ・クリスタルに改造されて、アーマーモードが追加されたんでしょうね（苦笑）

第139話 オービメント洞窟でのイベントは終了しました

4コマ劇場 アイオライト | 499・・・2011/03/11
シリーズ3

タイトル「オービメント洞窟でのイベントは終了しました」

1コマ

エリアC、オービメント洞窟最深部にて・・・

アクロアイト

「・・・・・・・・・・（ぼおっ）」 虚ろな瞳で剣を構える

ハックマナイト

「殺ーーーーーやー！」 異様な雰囲気で威嚇中

アメトリン

「うつつ、フォスファイ・・・（涙）」

「片思いの人に殺されるだなんて」 パロツトのこと？

「なんて男運の無いヤツ（ぼそっ）」

フォスフォファイライト レイチエルと一緒に、アルフォーニ

の背に乗っている

「まだ死んでないし、片思いの人ってなんだー！（わにゃっ！）」

顔を真っ赤にしてパロツトをチラ見

「っていうか、あなた一人だけ正気なんですよ！！（怒）」（あ
しをからかってーーーーー！）」

アメトリン

「・・・・・・・・・・（じいっ）」

「フォスファイ……（ううっ）」

「ちゃんと仇は　とってあげるからね（しくしくしく）」

フォスファイ

「だから、死んでないって！！（痛っ！）」　　少し前、ハック
に背中を斬られました

効果音「ずががーーーーーん！！」

2コマ

パロットクリソベリル

「あの麒麟のような機械に乗った女の子……」

「フォスファイを護ってくれているように見えるが」

「味方なのか……？」

フローライト

「パロットさん」

「彼女のことは心配いりません！」

「レイチエルさんは、こことは別の聖界……四聖界を守護する勇者の一人です！」

スフェーン（光竜剣形態）

『と、いうことは』

『あのドラゴンファングとかいう連中を片付ければ』

『わたしも静かに眠れるってわけね』

『さあ、パロット』

『わたしのためにちゃっちやと働きなさい！！』

パロット

「って、ふざけたこと言うなーーーーー！！（怒）」

「それに、相手はラリマーの人形使いに操られているだけなんだぞ」
「そう簡単にいくものか!!」(叫び)

スフエーン(光竜剣形態)

『じゃあ、どうするのよ!』

パロット

「そんなこと知るかー! (わにゃー!)」

「・・・いや(まてよ)」

「ドラゴンファングの連中には、人形使いスペクトロライトから放たれた」

「精霊力の見えない糸が繋がっているはず・・・」

「そいつを切断することができれば!!」(よしっ!)

ジエムシリカ

「パロットくん、それはダメっ!」(げほげふっ)

パロット

「し、シリカさん?(どうして)」

3コマ

シリカ

「湖畔であなたが支配されそうになったときは」

「完全に精霊力の糸が繋がっていなかったから切断できましたが・・・」

「その時とは状況が違います!」

「おそらく、精霊力の糸は彼らの神経と融合しているはずですよ」

「それらを切断するということは身体中の神経を断絶するのと同じ・・・」

「下手をするとドラゴンファングの皆さんが昏睡状態になってしま

いますよ!!!」

パロット

「うぐっ……(汗)」

「そいつはマズイな」(大汗)」

フォスファイ

「パロットお願い!(痛っ!)」

「みんなを……あたしの仲間を殺さないで!!」(涙)」

パロット

「くっ……(汗)」(そう言われても……)

「いったい、どうすれば!」(大汗)」

レイチエル

「あう……(うん)」

「これまでの状況を纏めると」

「今のアクロさんたちは普通の状態じゃない……」

「そして、アクロさんたちの身体から何本も伸びている精霊力の糸によって」

「何者かに操られているってことですね」(なるほど)」
見
えています

フォスファイ

「れ、レイチエル?(汗)」

レイチエル

「あうっ!(よしっ!)」

「アルフォーニ……」

「糸 辿れる!?!」

アルフォーニ（中型形態）

『そう・・・ですね（うーん）』

『何とかやってみます（ぐわっ！！）』

瞳を見開く

4コマ

説明文「アルフォーニの視界が糸を辿るようにオービメント洞窟の中を進んで行く」

「視界はオービメント洞窟から出て、岩場を抜けるように超速で流れ・・・」

「一人の少女の意識とぶつかった」

オービメント山の麓にて・・・

スペクトロライト

「なっ！？（大汗）」

「ぐはっ！！（痛っ！）」
視線がぶつかって、後方へ吹っ飛ばされる

トリプライト

「ちよっ！？（どびっくじり）」

「す、スペクトロ！！（どきどきどき）」

スペクトロ

「・・・ちい（だくだく）」

額から血が流れている

「あの奇妙キテレッツ馬め」

「精霊力を逆流させて、直接攻撃してきやがった（怒）」

トリプライト

「なっ、そんなことが・・・できるのか！？（どびっくじり）」

スペクトロ

「そんなこと知るかーーーーー!! (激怒)」

「くそっ!!」

「攻撃を受けた瞬間、ヤツらとのリンクも切れやがった」

「本当になんだったっていうんだあの馬は!! (うがーーーーー!!)」

オービメント洞窟最深部にて・・・

アクロアイトたち

『・・・・・・・・(ばたり)』 地面に倒れ込む

アルフォーニ(中型形態)

『・・・・・・・・ふう〜(汗)』

『なんとかなつたようですな〜(やれやれ)』

レイチエル

「あうっ」

「アルフォーニ、やったね (にこ〜っ)」

フォスファイ

「えっ、えっ?(汗)」

「アクロたち・・・助かったの?(どきどきどき)」

パロット

「・・・・・・・・(汗)」

スフェーン(光竜剣形態)

『・・・・・・・・(どきどきどき)』

スファレライト

「なんか、良い感じで光竜剣スフェーンファイアを誕生させたけど・
」

「全然活躍しなかったね〜」（ぼそっ）」

スフェーン（光竜剣形態）

『うつつ・・・（しくしくしく）』

パロット

「ほっとけ—————！！（わぎゃ—————！！）」

効果音「ずがが—————ん！！」

コメント

これにてオービメント洞窟編・・・クリア〜（笑）

第140話 破壊と再生を司るへっぽこ勇者

4コマ劇場 アイオライト―500・・・2011/03/14
シリーズ3

タイトル「破壊と再生を司るへっぽこ勇者」

1コマ

忘却の迷宮にて・・・

バックミュージック「戦え！超鳳神グランゾル 2011」

古の巨大魔蟲

『がぎゃー！ー！ー！ー！(ぐおおおお！)』 もの凄い勢いで
ダイに襲いかかる

ダイ(グランゾル・アーマーモード) グランゾルの鎧を纏
っている

『うおおおお！』
『ふん！！(どががっ、ががしっ！)』 牙竜鳳翼剣で古の巨
大魔蟲の体当たりを受け止める

古の巨大魔蟲

『がががっ！(激怒)』 ダイを押しつぶそうとする

ダイ(アーマーモード)

『ふふっ(にやり)』
『ただの鎧だと思っているかもしれないが』

『この姿はあくまでもグランゾルのアーマーモード』
『つまり、その力は超獣神そのもの・・・ってねえ！ー！(どりゃー！)』

『 古の巨大魔蟲を吹っ飛ばす

古の巨大魔蟲

『うごごっ！（げぶっ！）』 大きく弾き飛ばされて地面に激突する

アンバー

「おおおおお！」

「かつけえ〜」

美咲

「え、ええ〜つと・・・（汗）」

「大ムカデの体当たりを」

「まともに受け止める必要なんて無かつたんじゃ〜（大汗）」

アンデシン

「た、確かに・・・（汗）」

「攻撃を交わして、体勢の崩れたところを狙った方が効果的だろう（どきどきどき）」

アンバー

「何を言うっ！」

「圧倒的な力を持って、敵をやっつけるのが」

「かつこいいんじゃないか〜〜」

美咲

「あ〜・・・（汗）」

「そ、そうなんですか？」

アンバー

「ヒーローとは、そんなもんだぜ!!」(叫び)

2コマ

美咲

「まあ、スパロボ風に言えば」

「超獣神はスーパーロボット系ですから・・・」(大汗)「リアル系ではなく・・・」

「って、・・・何!?(びくっ!)」 異変に気づく

アンデシン

「い、古の巨大魔蟲の身体から・・・」(汗)

アンバー

「な、何だアレ!?(大汗)」

「大ムカデの身体に黒いモヤみたいなのが!!」(どびっくり)

古の巨大魔蟲

『ご、ごおおおお・・・』 霧状の黒い粒子が大ムカデの身体を包んでいる

『わぎゃー！ー！ー！っ!!』(叫び) 目が妖しく輝き、身体も一回り大きくなる

アンバー

「で・・・でかい」(大汗)

美咲

「大きさだけではありません・・・」(ごくり)

「強さの気配が圧倒的にアップしました!」(どきどきどきどき)

アンデシン

「いわゆる、第二形態ってやつだな・・・(大汗)」

美咲

「ダイさん!!(ちゃきっ)」 四神刀白虎の瑞雲を構える

ダイ(アーマーモード)

『おっとお嬢さん 手出し無用に願いましょうか(にやり)』

あんた誰?(笑)

『こいつは、この大ムカデはオレが倒す!』

『だけど安心しな(ぼそっ)』

『倒した後、姿焼きにして・・・ちゃんと分けてあげるから(ぐうっ)』 お腹が鳴る

美咲

「そ、それは・・・(大汗)」

ダイ(アーマーモード)

『あははっ』

『そんなに遠慮するな~~~~』 (喰えるときに喰っておかないと)

美咲

「全力で遠慮させてください!!(涙)」

効果音「ずががーーーーーん!!」

3コマ

古の巨大魔蟲(第二形態) ジリジリとダイに近づく

『ギャワアアア!!(しゃきんしゃきん)』 二本の牙を交差させて威嚇する

ダイ(アーマーモード)

『さてと・・・』

『グランゾル、準備はいい?』

グランゾル 兜の一部が点滅

『問題ない・・・と言いたいところだが』(汗)』

『空腹でエネルギーも尽きかけている』

『手っ取り早く倒さないと、こちらの身動きが取れなくなるぞ!』

ダイ(アーマーモード)

『わかっている・・・(ふっ)』

『一撃で決めてやるぜえーーーー!!!(叫び)』

バックミュージック「必殺!牙龍鳳翼剣!」

古の巨大魔蟲(第二形態)

『ガガガッ、ガアアア!!!(しゃかしゃか!)』

身体をく

ねらせながら突っ込んでくる

ダイ(アーマーモード)

『・・・(すっ)』 大きく息を吸い込む

『がりゅーーほうよくけーーん!!!(うおおおっ!!!)』

牙龍鳳翼剣を天高く突き上げる

『ひっさっつ・・・(とおっ!)』 突っ込んでくる大ムカ

デに向かってジャンプする(全身が黄金色になる)

古の巨大魔蟲(第二形態)

『ウゴッ、グワッ!? (しゃきん)』

ダイを迎え撃つ

ダイ(アーマーモード)

『クラッシュ・アーリーンド！（ぐさっ！）』 大ムカデ
の頭部に牙龍鳳翼剣を深々と突き刺す

古の巨大魔蟲（第二形態）

『ガガガッ！？（グガアアア！）』

ダイ（アーマーモード）

『リバー……ス！！（ぶうううん！）』 突き刺した牙龍鳳翼剣をおもいつき引き抜く！

古の巨大魔蟲（第二形態）

『……グガッ（ぴかあああ！）』 黒い粒子が四散して、
光の渦に包まれる

4コマ

アンバー

「って、なんだそれ……！（魔法……なのか！？）」

美咲

「出た、グランゾルのクラッシュ・アンド・リバーズ！（叫び）」

「相手の肉体を粒子レベルまで崩壊」

「外部要素のみ消滅させて 残った身体を再構成させる必殺技！

！」

「元々、竜化して巨大となった野生生物を助けるための技だけど」

「普通の魔物にも効果的……って、ええっ！？（どびっくり）」

古の巨大魔蟲？

『……（しゅるしゅる）』 一気に縮小する

「キキ……？」 普通サイズのムカデになる（15cmほど？）

ダイ(アーマーモード)

『・・・あれ？(どきどきどき)』

ムカデ

「！！(しゃかしゃかしゃか)」 身体をくねらせながら岩陰へと隠れる

ダイ(アーマーモード)

『お、オレのご馳走がー！！(うにゃー！！)』

グランゾルと分離する

「・・・がくっ(ぎゅううう)」 あまりの空腹に目を回してうつ伏せる

グランゾル(ぬいぐるみ型)

『わ、わたしも燃料切れ・・・だ(ぱたり)』 地面に落下する

アンデシン

「古の巨大魔蟲が・・・ただのムカデに？(いったいどういうことだ・・・)」

美咲

「・・・(うん)」

「ダイさんのクラッシュ・アンド・リバーズで変化した以上・・・」

「あの小さなムカデが本来の姿で」

「何らかの要因を受けて 古の巨大魔蟲になっていたとしか(大汗)」

「と、とにかく！！(叫び)」

「まずは、死にかけているダイさんに食料を分けてあげましょう(どきどきどき)」

アンデシン

「そ、そうだな・・・（大汗）」

ダイ

「う、うにゆ～～～～～～！！（ぎゅるぎゅ、ぐう～～～～）」

車のクラクションのようにお腹が鳴っている

効果音「ばきゅ～～～～～～～～～～ん！！！」

説明文「被害が少なかったため、今回の幸運は砂漠の森林が少しだけ広がった程度でした」

コメント

・・・あれ、カナリーとコーネルピンはどこへ行ったんだ？

次回へ続く？（汗）

第141話 謎多き忘却の迷宮・・・

4コマ劇場 アイオライト―501・・・2011/03/15
シリーズ3

タイトル「謎多き忘却の迷宮・・・」

1コマ

忘却の迷宮にて・・・

ダイ

「ぶぐっ、はぐっ、もぐもぐっ！」 口に食料を押し込んでいる
「うぐっ・・・!」 喉に詰まらせた?

アンバー

「って、そんなに慌てなくても・・・(大汗)」 ダイに水を
渡す

ダイ

「うつつ!?(がぼっ!)」 水筒を引つたくる
「うぐっ、ごくっ・・・ぷは〜(汗)」
「し、死ぬかと思った〜(どきどきどき)」

アンデシン

「って、いったいどれだけ喰うつもりなんだ?(汗)」
「3日分の食料が一瞬で消えてしまったぞ・・・(大汗)」

美咲

「ダイさん、相変わらずよく食べますね〜(苦笑)」
「あ、そうだ」

「わたしの非常食もどうですか？」 真つ黒な粒（忍者食？）
「これなら、一粒で数日間は満腹状態が続きますよ。」

ダイ

「うん……（じいっ）」

「なんだか美味しく無さそうだからいらねえよ（ぼそっ）」

美咲

「はうあっ！！（どびっくり）」

「た、確かに味は微妙ですけど……（大汗）」

グランゾル（ぬいぐるみ型）

『ちよっ、ダイ！』

『断るにしても、もう少しオブラートに包むようにして……だな』
（汗）』

ダイ

「だって、薬っぽいじゃん（ぼそっ）」

「味も重要だけど見た目がな……（食欲わかねえ）」

美咲

「そ、そんな（しくしくしく）」 かなりショック

効果音「ずがが………ん！！！」

2コマ

ダイ

「ふう、満腹満腹」

「さてと（よっ）」 立ち上がる

「腹も膨れたことだし……（きよろきよろ）」 美咲たちを

見回す

美咲

「……………(じくじく)」

ダイ

「さっさと帰るか〜 (にこ〜っ)」

美咲

「えええええー！(叫び)」

「これから迷宮の奥に行くんじゃないんですかー！ー！ー！ー！！
(どびつくり)」

ダイ

「いや……………」

「ムカデを食べなかったのは残念だけど 残念なのか？(大
汗)

「迷宮潜っても意味無いしな〜〜(う〜ん)」

アンバー

「だ、だけどこの忘却の迷宮は」

「いまだ完全攻略されていない未知なるダンジョン……………(汗)」

「上手くすればもの凄い量のお宝を手に入れることが〜(大汗)」

ダイ

「お宝とか興味無いし〜」

「まあ、時空族の遺産が隠されている……………とかなら話は別だけど
な〜」

アンデシン

「時空族の遺産・・・(汗)」

「その名を知っているとは」

「おまえ、ただの冒険者じゃないな(ギロリ)」

ダイ

「たしかに、オレは冒険者じゃないな(汗)」

美咲

「あははっ(汗)」

「ダイさんは冒険者じゃなくて、四聖界を守護する勇者ですから」

「そんなことより・・・」

「ダイさんは、時空族の遺産を探しているんですか？(どうして?)」

「

グランゾル(ぬいぐるみ型)

『・・・ダイよ(ぼそっ)』

『美咲は、超獣神が一体・・・超亀神カークンのマスターだ』

『話しておいても問題無いのではないか？』(彼女にも関係ある話だ！)

ダイ

「うーん、そうだな(大汗)」

美咲

「って！(汗)」

「かくくんは超獣神じゃありません！(うにゃーっ！)(何
度も言うようですがっばです！)

ダイ

「か、かっばって・・・(汗)」

「え、こほん(大汗)」「(気を取り直して・・・)」「じつは今現在、超獣神の守護する四聖界が崩壊の危機に瀕している(苦笑)」

美咲

「……………(汗)」

「ええっ—————!? (どびっくり)」「(なんですって—————!)

3コマ

忘却の迷宮、地下神殿下層空間にて・・・

カナリー コーネルピンを抱っこしている

「……………(こっこっこ)」「奥へと歩いている

『コーネルピン(ぬいぐるみ型)

『…………カナリー(ぼそ)』

カナリー

「わくってるって(苦笑)」

巨大な黒い影 第二形態の大ムカデより数倍は巨大

『ガギャアア…………(怒)』 カナリーに向けて凄まじい殺気を放つ

カナリー

「ふっ…………(微笑)」

「死ぬ気があるなら、かかってきい〜や〜 (ずごごごっ!)」

凄まじい魔力がカナリーの身体から立ち昇る

「一瞬で殺したるわ〜(ギロリ)」

巨大な黒い影

『・・・・・・・・・・(すうーっ)』

音もなく姿を消す

コーネルピン(ぬいぐるみ型)

『あははっ・・・・・・・・容赦ないな』(汗)』

『カナリーは、ボクたち機獣神に乗らないで』

『生身で戦って方が強いからね』(笑)』
大魔王クラスの強さです

カナリー

『こほん・・・・・・・・』

『コーネルピン、子どもっぽい喋り方禁止・・・・・・・・(むっ)』

コーネルピン(ぬいぐるみ型)

『おっと、いけないいけない・・・・・・・・(大汗)』

説明文「機獣神は超獣神と違って会話する能力は後付なため喋り方が若い」

「でも、カナリーは何故かコーネルピンにおじさんっぽい喋り方を強要している(笑)」

4コマ

カナリー

「にしてもや・・・・・・・・(きよるきよる)」

「この迷宮、かなり違和感があるでっ(汗)」

コーネルピン(ぬいぐるみ型)

『ん・・・・・・・・』

『違和感 とは?(?)どういう意味だ()』

カナリー

「いやな〜」

「この聖界、精霊界第四聖界クリスタルって」

「精霊神クリスタル・・・つまりシヨウによって創造されて」

「まだ五千年しか経つとらへんやろ？」

前に情報を調べていた

時空間転移してくる

コーネルピン（ぬいぐるみ型）

『それが・・・何か？』

カナリー

「ちよつと考えてみ〜な・・・」

「寿命が80年ほどの あ〜、この時代では300年ほどに延びとつたな〜（そついえば）」

「そんな人間族が人間界でこの迷宮を創ったつてゆ〜なら分かるが〜」

「ここは精霊界や〜」

「しかも、精霊族の寿命は・・・うちの時代と変わつとらんなら三千年ほど」

「第四聖界が創造された時点でこの迷宮を創ったゆ〜なら」

「出来上がつてからまだ五千年しか経つとらんことになる」

「つまりや、精霊族で考えるならたつた2回分の寿命しかないことになる」

「そんな短い期間で、こないな時代錯誤な建造物が創られたとは思えへんのや〜」

コーネルピン（ぬいぐるみ型）

『確かに・・・』

『見たところ、古代文明級の歴史建造物だからな』

『たかだか寿命二回分の昔に創られたとは思えない ということ』

か
』

カナリー

「そういうこと」

「わざと古代文明風に創ったか、あるいは（ぼそっ）
「・・・っと、どうやらビンゴみたいやったで」
に辿り着く

最下層

コーネルピン（ぬいぐるみ型）

『石柱がサークル状に並べられて・・・』

『し、しかも・・・この力の波動は！（大汗）』

カナリー

「そう、この力は時空力！」

「どうやら、この遺跡は」

「うちらと同じように、時空間転移によって・・・」

「違う時空から遺跡ごと移動してきたみたいやで〜〜」

コーネルピン（ぬいぐるみ型）

『あるいは、時空間転移者によって創られた遺跡なのか・・・』

カナリー

「どっちにしても〜」

「忘却の迷宮には、時空族が関わっとるのは確かみたいやな〜（にやり）」

コメント

ああ〜、オチがない！（爆）

第142話 温泉までの道程は険しい？

4コマ劇場 アイオライト―502・・・2011/03/18
シリーズ3

タイトル「温泉までの道程は険しい？」

1コマ

エリアC、オービメント洞窟最深部に・・・

パロットクリソベリル

「え〜っと・・・(汗)」

「スフェーン？」

「もう一度、言ってくれないか(どきどきどき)」

スフェーン(卵形態)

パロットの手の上に乗っかっている

『だ〜か〜ら〜』

『わたしはここから出ないって、最初っから言ってるでしょー！』

フローライト

「う〜ん、困りましたね〜(汗)」

「ドラゴンの卵をそのままにしておくわけにはいかないんですが〜

(大汗)」

エルバイト

「うひひひっ (こやこや)」

「ドラゴンの卵・・・ドラゴンの卵がもうすぐオレの手に・・・(う
おー！)」

フローラ

「……………(汗)」 エルバイトをチラ見
「っと、このよう輩が世の中にはたくさんいます(苦笑)」
「ガーディアンがいなくなった以上、あなたがどれだけ拒否しよう
と」

「いずれは外へ連れ出されると思うんですよ(大汗)」

スフェーン

『うぐっ……………(確かに)』

フローラ

「わたしたちが一番心配していることは」

「連れ出されたあなたの所在がわからなくなること……………」

ジエムシリカ

「そして……………(げほげほ)」 まだ辛そうです

「それが原因となって、余計な争い……………国家間での戦争が起こら
ないとも限らない」

スフェーン

『……………(それは)』

フローラ

「スフェーンさん」

「わたしたちは、何もあなたのことをどうこうするつもりはありません
せん」

「せめて、目の届く場所に居ていただければ良いだけなんです」

スフェーン

『……………でも……………(ここを離れるわけには……………()』

少し離れた場所にて・・・

スファレライト

「あっ、お〜いパロット〜」

「ドラゴンファングの人たち」

「目を覚ましたみたいだよ〜」

パロット

「ん・・・」

「そうか、いまそっちに行く〜」

スフェーン

『・・・（う〜ん）』 色々と悩んでいる

2コマ

アクロアイト

「う、うっ・・・（痛っ）」（頭が・・・）

「ここは・・・、ボクは一体・・・（今まで何を・・・）」

フォスフォファイライト

「アクロ・・・（涙）」

「良かった〜、いつものアクロだ・・・（うるうる）」

アクロ

「フォスファイ・・・、ああっ！！（ばばばっ！）」 操られて

いた時の記憶がフラッシュバック

「・・・フォスファイを 殺そうと！？（大汗）」

「ぼ、ボクはなんてことを・・・（うっっ）」 頭を抱える

フォスファイ

「アクロの所為じゃない！」

「あれは、暗殺者の人形使いに操られていたから……」

アクロ

「それでも!! (叫び)」

「フォスファイを殺そうとしたことには変わらな……」

スファレ

「てか、結局は誰も死んでないんだから」

「そんなことどうでもいいでしょ〜?」

アクロ

「ど、どうでも……? (どきどきどき)」

スファレ

「誰に責任があるとか、ごちゃごちゃ言っている前に」

「わたしたちには、やらなければならないことがあるんじゃない?」

フォスファイ

「や、やらなければ……いけないこと? (ちらり)」 パロ

ツトの持つドラゴンの卵をチラ見

スファレ

「そう…… (うん)」

「DCの仕事が終わって、やっとオービメント洞窟新階層の調査も終わったんだから」

「やっぱり温泉でしょ……!! (叫び)」

フォスファイ

「お、温泉……!!? (どびっくら)」

スフェーン

『!!!(ぴくっ!!!)』

温泉という単語に激しく反応

パロット

「・・・ぬ?(汗)」(えらい動いたぞ)

手に乗せた卵が・

3コマ

フォスファイ

「え、ええ〜つと・・・(汗)」

「確かにこの冒険が終わったら温泉に入ろうと言っていましたけど
)(大汗)」

スファレ

「こっちは散々待たされてるんだよ!(前の冒険からず〜つと!)」
「温泉入ること以上に、何か大切なことがあるっていうの!?(ねえ!)」

アクロ

「あ、あぁ〜(汗)」(なんだこの子・・・?)

スファレ

「つまらないことでよくよしてないで」
「みんなであ〜つと温泉に入ろうってことよ (に〜っ)(〜っ) (汗も流したいし〜)」

ロードライト

「おお〜、さすがはスファレさん・・・」
「見事なへっぽごぶりです (大岡裁き〜?)」
褒めています

スファレ

「へっぽこ言うな〜〜（うにゃー！〜！）」

レイチエル

「あう〜（じい〜）」 スファレを凝視

「彼女もダイと同じ〜へっぽこ（ごくり）」

スフェーン

『〜（うう〜ん）』

『しょ、しょうがないわね〜（汗）』

『あなたたちがどうしても〜っていうのなら〜』

『一緒に温泉 じゃなく！（大汗）』

『ついて行ってあげてもいいわよ〜（どきどきどき）』

フローラ

「ほ、本当ですか」

パロット

「……！」 何かに気づく

「みんな、気をつけろ！！（叫び）」

レイチエル

「あう？（どびっくり）」

効果音「ず〜ず〜ず〜！！」 地面が大きく揺れる

スファレ

「ちよー！〜！〜！」

「なに、なに！？（大汗）」

フローラ

「ま、まさか・・・(大汗)」

「火山が オービメント山が噴火しようとしているのでは・・・
(ぼそっ)」

エルバイト

「じよ、冗談だろ!!!(どびっくり)」

シリカ

「なんにしても・・・(ごくり)」

「急いで外へ出た方が良さそうですね」

パロット

「そういうこと・・・」

「みんな、行くぞ!!!(たたっ)」 駆け出す

スファレ

「ぱ、パロット!(大汗)」(待ってよー！ー！っ！)

4コマ

オービメント山の麓にて・・・

スペクトロライト ラリマーの人形使い

「うおおおおお!!」 精霊力を高める

トリプライト ラリマーの冒険者(巨躯な男)

「お、おいスペクトロ!!!(叫び)」

「何をするつもりだ!?(大汗)」

スペクトロ

「ふふっ・・・（微笑）」

「あそこまでコケにされたんだ」

「ヤツらはここで皆殺しにする！！（激怒）」

トリプライト

「ちよっ、落ち着け！（汗）」

「まさか、それだけのことで」

「国から預かった巨大像を動かすつもりか！？」

「そいつは、ラリマーがルチルクオーツを攻めるときに」

「切り札的な！！（大汗）」

スペクトロ

「やかましい！（黙れ！）」

「ここでフローライトを殺し、その足でルチルクオーツ王都を攻め落としてやる・・・」

「それで文句は無いだろう！！」

トリプライト

「って、前国王との取り引きを忘れたか！？（大汗）」

スペクトロ

「あのような小者との約束・・・」

「最初から守るつもりなど無いわーーーー！！（うがーーーー！！）」

トリプライト

「そ、それはそうだが！！（大汗）」

スペクトロ

「邪魔をするならおまえも殺す」ギロリ」

トリプライト

「うぐっ……（こいつならやりかねない）」

スペクトロ

「……くくっ（微笑）」

「出でよ巨大神ペクトライト（ぼそっ）」 縄のように太い精

霊力の糸が地面へ伸びている

「その圧倒的な力をもって」

「ヤツらを皆殺しにするのだ————！！」（うおおおおお
！！）」

効果音「ずごごごごっ！！」 地中から巨大な何かが起き上
がる

巨大神ペクトライト 全長が30mほどの巨大な鎧（操り人

形？）

『ウウウ……、ウオガアアアアア！！（叫び）』

コメント

人形使いスペクトロライトの奥の手が巨大神ペクトライトです

第143話 なんだかんだで次回へつづく・・・

4コマ劇場 アイオライト―503・・・2011/03/19
シリーズ3

タイトル「なんだかんだで次回へつづく・・・」

1コマ

オービメント洞窟の入口にて・・・

エルバイト

「ちよっ・・・、なんだコイツはーーーー!? (大汗)」
真上を見上げる

巨大神ペクトライト 全長が30mほどの巨大な鎧(操り人形?)

『ゴオオオオオ!! (ブウオオオン!)』 トゲ付きの巨大棍棒を叩きつける

パロットクリソベリル

「ちいっ!(汗)」

「みんな、避けるーーーー!! (だだっ!)」 身体を投げ出して避ける

効果音「ずどがあああーーーーん!!」 巨大棍棒の一撃が地面の形状を変える

スファレライト

「うにゃーーーー!!! (涙)」 衝撃風によって吹き飛ばされる

ロードライト

「きよ、巨大な・・・鎧！（大汗）」
体勢を低くして、衝撃
風を避けている

「っていうより、もしかして これも例の殺人パペット！？（大
汗）」

ジエムシリカ

「げふごほっ・・・（汗）」

「巨大鎧に繋がった精霊力の縄がいくつも見えます」

「おそらく、ロードライトちゃんの予想は正しいでしょう・・・（
こほこほ）」

パロット

「つまりは、さっきのアクロアイトたちと同じように」

「ラリマーの暗殺者がどこかに隠れて鎧を操っているってことだな
・・・（なるほど）」

「・・・スフェーン（ぼそっ）」
手にしたドラゴンの卵を見
つめる

「悪いがもう一度、オレに力を貸してくれないか？（じいっ）」

聖剣クリソベルルの柄を握りしめる

スファレ

「光竜剣・・・スフェーンファイア！（汗）」

「確かにあのかつこいい剣なら巨大鎧も倒せるよね」（攻撃力つ
てかつこよさに比例するし）」

スフェーン（卵形態）

『あゝ・・・無理（ぼそっ）』

パロツト

「・・・え？（大汗）」

スフエーン

『あの状態を保つにはもの凄く体力がいるのよ』（汗）』

『一晩寝ないと・・・さすがに無理！！（大汗）』（あるいは温泉に浸かって体力回復させるか・・・）

パロツト

「・・・・・・・・（どきどきどき）」

スフアレ

「そ、そんなーーーーー！！（涙）」

2コマ

パロツト

「武器なし（パロツト）、持病もち（シリカ）、決め技なし（フロ

ーラ）・・・」

「ま、マズイな・・・（汗）」

「このままじゃ、殺されるのを待つだけだ！！（ひょいつ）」

あぶねえ！（ 攻撃をかわす

スフアレ

「ちよっ、ドラゴンファングのメンバーも本調子じゃないっていうの・・・」

「いったいどうするのよーーーーー！！（涙）」

パロツト

「そんなのオレに聞くなーーーーー！！！！（わにゃーーーーー！！！！）」

レイチエル

「あうっ……(汗)」

「あのスファレ……さん？(ですよね?)」

「こんなときに、こんな条件を付けるのは心苦しいのですが」(大汗)
「」

スファレ

「……え？(汗)」

レイチエル

「あの巨大ロボット(？)はわたしが何とかします……」

「だから、あなたの持つ時空族の遺産 時の宝珠を」

「わたしに譲ってくれるよう考えていただけなんでしょうか!?!」
「お願いします!」 必死です!

スファレ

「そ、それは……(汗)」

「わたしの一存で決められることじゃないし」(大汗) 「(師匠や
フローラに確認しないと……)」

レイチエル

「まずは考えていただくだけで良いんです!!」

スファレ

「うぐっ……(大汗)」

巨大神ペクトライト

『ゴオオオオオオ!! (ずしんずしん!)』 だんだんと近づいてくる

スファレ

「ああ、わかった！」

「考えるから……ちゃんと考えるから何とかして……!!
(泣き叫び)」

レイチエル

「わかりました!(ぱっ!)」 一瞬にして抱えていたはずの
ぬいぐるみが消える

「……………(すうっ)」 ペンダントをギュッと握り締める

「アル・フォー……!!(叫び)」

効果音「ずどおおお……!!」 雷鳴が
鳴り響く

3コマ

説明文「上空に魔方陣が現れ、中から限りなく生体に近い麒麟の形
をした聖獣機が現われる」

アルフォーニ(聖獣機)

『くうおおおお……!!』 上空に浮いて決めポ
ーズ

パロット

「って、えええ……!!?(どびっくり)」 パニッ
ク

巨大神ペクトライト

『……………』 想像を絶する出来事に、スペクトロが固
まって動きを止める

レイチエル

「……………(ふわり)」
突然宙に浮いて、アルフォー
ニの額にある宝石の中へ吸い込まれる

スファレ

「えっ、ちよっ…。(汗)」
「いったい、何が始まるの!!(大汗)」
理解不能!

聖獣機の中、操縦空間にて…

レイチエル

「…あう(よっ)と」
暗闇の中、唯一光っている
丸いプレートに降り立つ

突然の登場

アルフォーニ(ぬいぐるみ型) メインコア

『レイチエル…。(ぼそっ)』
『相手はこれまで戦ってきた巨大竜とは違います』
『どんな攻撃を仕掛けてくるか…充分に気をつけてください』

レイチエル

「わかつているって」(あう)「
「それじゃあ、アルフォーニ…。」
「久しぶりの戦いだけど、一緒にがんばってね」

アルフォーニ(ぬいぐるみ型)
『もちろんです』

レイチエル

「・・・っというより」（汗）

「超獣神を起動するための光の球体が」
「二つの球体にそれぞれ手を置いて動かす」

「どこにも見当たらないんだけど」（きよるきよる）

アルフォーニ（ぬいぐるみ型）

『あゝ・・・（汗）』

『それなんですが』（大汗）』

レイチエル

「あう？」

4コマ

アルフォーニ（ぬいぐるみ型）

『確かに原作小説では、光の球体を使って超獣神を動かしていましたが・・・』

『この「最強の勇者はヒーラーでレベル1」は小説系ではなく文字だけ4コマ系です』

『そして、4コマ系での超獣神の操作装置といえば』（汗）』

『ほぼ間違いなく・・・これでしょう』（ぼむっ）』
小さな四角い箱が出現する

レイチエル

「っつて、やっぱりDSなのーーーーー!?」（叫び）

「しかも、この前発売されたばかりのニンテンドー3DS!」（どしえーーーーっ!）

アルフォーニ（ぬいぐるみ型）

『はい、裸眼で3D対応です!』（操作装置がバージョンアップしました）

効果音「ずががーーーーーん!!!」

レイチエル

「え〜つと、え〜つと・・・(汗)」

「と、とにかくあの巨大ロボットを倒さないといけないわけだから」

「早速使ってみるね・・・(ぱっ、ぴろりん)」

開いて

電源を入れる

アルフォーニ(ぬいぐるみ型)

『・・・』

『どうですかレイチエル・・・(汗)』

『新しい操作装置ですが 何とかなりそうですか?(大汗)』

レイチエル

「え〜つと・・・(汗)」

「ここがこうなっているわけだから〜(かしゅっ!)」

アルフォーニを写真撮影

「あつっ!(どびっくり)」

「凄い・・・アルフォーニが立体的に見える (3Dだ!)」

アルフォーニ(ぬいぐるみ型)

『ほ、本当ですか!?(どれどれ・・・)』

『なるほど〜、確かに3Dに見えますね〜(これはなかなか・・・)』

・()

レイチエル

「あつっ」

「それじゃあ今度は、アルフォーニがわたしを撮ってみて〜()に

こ〜っ)」「

アルフォーニ（ぬいぐるみ型）

『それでは・・・（いいですか？）』

3DSを受け取る

『はい、チ～～ズ（かしゃっ）』

レイチエル

「アルフォーニ、どんな感じに撮れた？（にこにこ）」

アルフォーニ（ぬいぐるみ型）

『レイチエル、可愛く写っていますよ（うふふっ）』

レイチエル

「やた～～（にっこり）」

オービメント山の麓にて・・・

巨大神ペクトライト

『ゴオオオオオオ！！（ずげしっ！）』

痛恨の一撃？

効果音「ずごごっ、どがががっ！」

巨大神による激しい攻撃！

エルバイト

「つて、どうなってやがるんだ！！（汗）」

「あの麒麟にレイチエルってヤツが吸い込まれたから」

「何かが起こるんじゃないのか～～～～？（大汗）」

必

死に逃げています

パロット

「お、落ち着け～～～～！！（叫び）」

「彼女を・・・レイチエルを信じるんだ～～～～！！（大汗）」

同じく逃げています

アルフォーニの操縦空間にて・・・

レイチエル

「あうっ」

「凄いねっ、本当に3Dに見えるんだねっ」 (感動)

アルフォーニ(ぬいぐるみ型)

『レイチエル・・・(ぼそっ)』

『じつは、こんなのもあるんですが・・・(にやり)』

レイチエル

『あうっ、3DS専用ソフト!? (大汗)』

『よし、さっそく遊んじゃおうっ』 もはや目的を忘れて

ています(笑)

アルフォーニ(ぬいぐるみ型)

『うふふっ』

『レイチエル、ノリノリですねっ』 同じく

説明文「その後、招き猫勇者隊の姿を見たものは誰も・・・(爆)」

「ちなみに、グランゾルを動かすときはWiリモコンとヌンチャクを使います」

コメント

専用ソフトが微妙なので、まだ3DSは買っていません (NG)
Pはソフトが無くても即買いするけど・・・)

第144話 長くなりそうなので強制終了？

4コマ劇場 アイオライト―504・・・2011/03/22
シリーズ3

タイトル「長くなりそうなので強制終了？」

1コマ

アルフォーニの操縦空間にて・・・

レイチエル

「あうう・・・(ううん)」

「3Dって楽しいけど、目が疲れるね〜」(しばしば)
3DSをプレイ中〜

アルフォーニ(ぬいぐるみ型) メインコア

『れ・・・レイチエル？(ぼそっ)』

レイチエル

「あう？」

「どうしたの、アルフォー・・・にい〜っ!? (どびっく)」「
何かに気づく

前方の空間に外の様子が映し出されている

巨大神ペクトライト

『ゴオオオオオオー！ー！(ずげしっ！)』 痛恨の
一撃？

パロットクリソベリル

『わにゃー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！』
ぶっ飛ばされて映像から外
れていく(笑)

スファレライト
『ぱ、パロットー！ー！ー！ー！ー！ー！』(涙)

アルフォーニ(ぬいぐるみ型)
『……………(ぐきぐきぐき)』

レイチエル

「あうー！ー！ー！ー！(大汗)」
「忘れてたー！ー！ー！ー！ー！(叫び)」(遊んでる場合じゃなかつたんだー！ー！)」

効果音「ずががー！ー！ー！ー！ー！ん！ー！」

2コマ

パロットたちから少し離れた場所にて・・・

スペクトロライト ラリマーの人形使い

「あははっ……………(汗)」
「上空に奇妙な巨大馬が現れたときは驚いたけど……………」
「動かないんじゃない？意味がない(くっくっくっ)」
「今のうちにヤツらを皆殺しだー！ー！ー！ー！(叫び)」
見えない精霊力の縄を操っている

巨大神ペクトライト

『グオオオオオオ！ー！(叫び)』
スペクトロの意志に連動して叫ぶ

スペクトロ

「はあ、はあ、はあ……（ぜえぜえぜえ）」

顔色が真っ青

トリプライト ラリマーの冒険者（巨躯な男）

「おい、スペクトロ……（汗）」

「だ、大丈夫なのか？（ときどきどき）」

スペクトロ

「や、やかましい！！（があああー！！）」

「ヤツらはこの手で殺……なっ！（どびっり）」 何かに気づく

トリプライト

「おいおいおい！（汗）」

「あのデカイ馬……動き出したぞ！！（大汗）」

アルフォーニ（聖獣機） 上空に浮かんでいる

『くうおおおおおー……ん！（ぴかーん！）」 命が宿

つたかのように瞳が赤く輝き出す

『あうっ、アルフォーニ……行くよ！！（叫び）」

『了解です！！（ぱかっぱかっ！）」 空を駆けながら巨大神へ向けて突っ込む！

巨大神ペクトライト

『ウグゴッ！？（どががっ！）」 後方へ吹っ飛ぶ

3コマ

ロードライト

「え〜っつと、え〜っつと……（汗）」

「ボクたちは、ただダンジョンの再設置をするために」

「このオービメント洞窟にやって来て~~~~(うたや~~~~)」
パニックつています

パロット

「ちよっ……(汗)」

「だから、一体何なんだよアレは……!? (叫び)」

フローライト

「パロットさん……(ぼそっ)」

「これからの戦いを よく見ておいてください」

パロット

「……え?(汗)」

フローラ

「これは、今のパロットさんでは絶対に到達することのできないレベル……」

「神の称号を持つ者の戦いなのですから(ぼそっ)」

パロット

「神の称号を 持つ者……(じくり)」

フローラ

「まあ(汗)」

「あの巨大鎧が相手なら」

「それほど参考にはならないかもしれませんが……(大汗)」

巨大神ペクトライト

『グオオオオ……!! (どたどたどた)』 麒麟の聖獣
機に向って突っ込む

「アルフォーニ（聖獣機）」

『あつっ！』

『アルフォーニ、バトルモード・チェーーーーンジー！』（叫び）』
3DSのタッチパネルを操作

説明文「麒麟の聖獣機が変形を始め、まるで騎士鎧を纏ったような巨大ロボットとなった」

4コマ

スペクトロ

「って、なんだあれーーーー！？（どびっくり）」

トリプライト

「ま、まさか巨大神！」

「この国にも、巨大神があったのかーーーー！！！」

スペクトロ

「いや……（汗）」

「巨大神とは 何かが違う！（大汗）」

アルフォーニ（バトルモード）

『超麟神アルフォーニ……』

『ここに見参！！（しゃきーーーーん！）』 大地に下りて
決めポーズ！！

エルバイト

「超麟神……アルフォーニ（びっくり）」

「か……かっけーーーーー」

スファレ

「かつこいいとか言ってる場合じゃないでしょー！ー！ー！(うにやー！ー！ー！)」

巨大神ペクトライト

『ガアアアア！！(ドガガッ！)』 巨大棍棒を叩きつける

アルフォーニ(バトルモード)

『あうっ！(汗)』(危なっ！) 慌ててかわす

『つと、このまま相手の調子に合わせて戦っていたら』

『また「次回へ続く」・・・になっちゃいそうだから(大汗)』(もう4コマ目だし！)

『一気にいくよ！！(ぶううん！)』 突然出現した炎の弓を構える

『第三の矢刃・・・(きりきりきり)』 巨大神に向けて炎の矢を番える

『紅蓮爆砕波ー！ー！ー！(ぐおおおっ、ずがあああー！ー！)』

説明文「矢の先に真っ赤な球体が現れ、それを纏った矢刃が一気に放たれた」

巨大神ペクトライト

『ガア・・・(ぴしっ)』 炎の矢が鎧に吸い込まれる

効果音「ずごおおおー！ー！ー！ん！ー！」 巨大神を中心

に大爆発が起こり、キノコ雲が立ち昇る

スファレ

「えええええー！ー！ー！？(大汗)」 もはや理解不能

パロット

「……………」 何とか爆風に耐えている

「っていうか（汗）」

「一瞬すぎて、なんの参考にもならなかったんだけど……（どきどきどき）」

フローラ

「あゝ、あはははっ（苦笑）」

「と、とにかく、それだけ凄いつてことですよ……（大汗）」

誤魔化しています

アルフォーニ（バトルモード）

『あうゝ（ぴしっ）』 決めポーズ

『大勝利ゝゝゝ（にこゝゝゝっ）』 ダイの真似？（笑）

コメント

ちなみに、美咲なら超獣神にも生身で勝てます（楽勝です）

第145話 招き猫勇者隊の仲間たち

4コマ劇場 アイオライト―505・・・2011/03/24
シリーズ3

タイトル「招き猫勇者隊の仲間たち」

1コマ

オービメント山の麓にて・・・

レイチエル 光に包まれて地上へと降りてくる

「あ〜う〜」 ぬいぐるみ型のアルフォーニを抱っこしている

「よつと（たっ）」 軽やかに着地する

「ふう〜〜」（やれやれ）」

「3DS・・・面白かった〜」（に〜〜っ）」

フローライト

「つて、レイチエルさん！」

「わたしたちが殺されそうになっていたのに」

「超獣神の中でいったい何をやっていましたのですか〜！〜！〜！」
涙（）」

レイチエル

「あ、あう〜・・・（大汗）」（それは〜・・・）

アルフォーニ（ぬいぐるみ型）

『・・・（どきどきどき）』

ジエムシリカ か〜くんを抱っこしている

「まあまあ・・・（しほしほっ）」

「みんな無事だったわけですし、いいじゃないですか」（にこ〜
っ）」

「・・・ところでパロツトくん（ぼそっ）」

「さきほどの戦い、パロツトくんがやる気満々だったので口出しは
しませんでしたけど」

「もう少し状況判断能力を鍛えなければいけませんよ・・・」

パロツトクリソベリル

「・・・え？（汗）」（状況判断？）

シリカ

「レイチエルさんのように圧倒的な力を持っているならともかく」

「武器を持たず・・・勝算も無しにあのような巨大な相手に立ち向
かうのは感心できません」

パロツト

「あ〜・・・（汗）」

「それなら、どうすれば・・・良かったと？（大汗）」

シリカ

「そうですね〜（う〜ん）」

「わたしならまず・・・ロードライトちゃんにお願いして」

「シンセティック・カノンで長距離から攻撃してもらいます」

パロツト

「・・・（ぬ？）」

「ああああー！！！！！！！！（そっいえばー！！！！！！）」

説明文「シンセティック・カノンなら巨大神ペクトライトにも対抗
できたはずです」

2コマ

スファレライト

「なるほど」

「洞窟の外に出たんだから、シンセティック・カノンをぶっ放しても」

「周りへの被害は少なくて済んだもんね」 (うんうん) 「

シリカ

「そして、スファレさん・・・」

スファレ

「はひっ!?!? (どびっくり) 「

「・・・し、シリカさま? (どきどきどき) 「 シリカに憧れています

シリカ

「スファレさんの持つシンセティック・ソードの威力は」

「パロットくんも目の当たりにしたはずですよ・・・」

パロット

「うぐっ・・・ (汗) 「 (た、確かに・・・) 「

「あれなら、一撃で細切れにできたな」 (大汗) 「

シリカ

「五年前もそうでしたが・・・」

「パロットくんは全てを自分一人で抱え込む傾向があります」

「ソロ冒険者ならそれでも良かったかもしれませんが」

「今のあなたはパーティを組んでいるんですよ? 「

パロット

「・・・パーティ(汗)」

シリカ

「もう少し仲間を頼りなさい・・・」

「パロットくん、スファレさん、フローラちゃん、ロードライトちゃん」

「あなたたちは4人で招き猫勇者隊なのですから (にっこり)」

パロット

「4人で招き猫勇者隊!! (ずがーーーーん!!)」

エルバイト

「・・・」

「う、うう・・・ (しくしく)」 一応、招き猫勇者隊の
仮メンバー(笑)

ロードライト

「あゝ・・・(汗)」

「アルバイトさん」

「シリカさんも、悪気はないと思うので・・・ (大汗)」 (気にしないで)

エルバイト

「しくしく (涙)」 (オレはアルバイトじゃないやい!)

効果音「ずがーーーーん!!」

3コマ

フォスフォファイライト

「……………(じい〜〜〜つ)」
見ている

パロットたちの様子を

アクロアイト

「……なんていうか」

「良いパーティーじゃないか(ふふっ)」

フォスファイ

「うん……」

アメトリン

「これは、あのパロットってヤツを」

「ドラゴンフアングに引き抜くことなんて無理じゃない？」

フォスファイ

「そう……だね」

元々そんなつもりはない(スファレへの

対抗心)

ハックマナイト

「う〜ん……」

「ついに、振られちゃったか……ニヤ〜(にやり)」

猫戦

士

フォスファイ

「って、何がだー！ー！(わにゃー！ー！)」

顔が

真っ赤

効果音「どががー！ー！ー！ん！ー！」

スファレ

「それじゃ、全て解決したことだし」
「みんな、お待ちかねの温泉だーーーー」

レイチエル

「あつ」

「温泉」 「なぜか一番ノリノリ？（笑）」

スフエーン（卵形態）

「……………」

「つていうかさ」 （汗）」

「さっきの巨大鎧、操っていたヤツ」

「捜さなくても良かったの？（大汗）」

全員

「……………」 （汗）」

「あああああーーーーー！！」（叫び）」 巨大神を倒

したことで満足していた？

4コマ

エリアCとエリアAの境目にて……

トリプライト

「ぜえぜえぜえっ！（たったった）」 スペクトロを背負っ

て全力で走っている

スペクトロライト

「……………」 （痛）」 全身血だらけで危険な状態？

「と、トリプライト……………」 （はあはあ）」

「もついい……………」 （汗）」

「わたしを 捨てていけ（うっ）」 巨大神ペクトライト

のダメージが逆流した

トリプライト

「うるせえ！（叫び）」

「少しは黙ってる！！（がああああ！！）」

スペクトロ

「預かっていた切り札　ペクトライトを失った以上・・・」

「ラリマーには戻れない（うぐっ）」

「戻れば・・・極刑は免れない」

「おまえだけでも・・・（はあはあ）」

トリプライト

「ちっ・・・（怒）」

「オレはお前と組んでることになってるんだ！」

「戻れないのは同じなんだよ！！（激怒）」

「くそっ、なんでこんなことに・・・はっ！？（ぴたっ！）」

何かに気づき立ち止まる

スペクトロ

「・・・・・・・・？（うっ）」

トリプライトの背中越しに前方を
見る

突然の登場

謎の人影

「・・・・・・・・」

トリプライト

「ちよっ・・・（汗）」

「おいおい、どうなってるんだ？（大汗）」

「なんで、目の前にスペクトロがいるんだ！？（どびっくり）
パニック！」

スペクトロ

「ふっ……（痛っ）」

「まさか、あなたの方から姿を現すとは……」

「うっ……、思ってもいなかったな……（苦笑）」

トリプライト

「おい、スペクトロ……（汗）」

「お前、何を言ってる（大汗）」

スペクトロ

「ふえ、フェルドスパー（ぼそっ）」

「いや……（うぐっ）」

「この国では……わたしの人形の名前を名乗っているみたいだな
」（ふっ）」

「ええ、シーライト！！（ギロリ）」

シーライト

「……（ギロリ）」 剣を構えて既に臨戦態勢

効果音「ずがー……」

コメント

パロットたちの遣り取りは↑コマ目で終わらせる予定だったのに……（大汗）」

第146話 新たなナンバーズ

4コマ劇場 アイオライト―506・・・2011/03/27

シリーズ3

タイトル「新たなナンバーズ」

1コマ

エリアCとエリアAの境目にて・・・

シーライト

「・・・・・・・・（ギロリ）」 臨戦態勢

トリプライト 巨躯な男

「フェルドスパ―って・・・」 動けないスペクトロを背負っている

「スペクトロの・・・妹!?（汗）」 この前聞いた

「容姿が瓜二つじゃねえか（どきどきどき）」

「もしかして、双子か!!（大汗）」

スペクトロライト

「ふふっ・・・（微笑）」

「幼い頃に生き別れた 我が半身・・・（うっ）」 全身血だらけです

「その様子からすると・・・わたしたちを始末しに来たのか?」

「フェルドスパ―・・・いや、シーライトよ（痛っ）」

シーラ

「・・・・・・・・（じい~~~~っ）」

トリプライト

「始末しに来た・・・って!?(大汗)」

「お前ら姉妹なんだろ!!! (しかも双子の!)」

スペクトロ

「くっ・・・(汗)」

「お互い・・・立場も違うだろうからな・・・(うぐっ)」

「シーライト・・・シーラも」

「今ではルチルクォーツ側に与しているわけだし・・・(ズキズキ)」

「

シーラ

「・・・・・・・・(じい~~~~っ)」

スペクトロ

「どうせ・・・、ラリマーにも狙われることになるんだ・・・(は

あはあ)

「さっさと殺せば良からう! (叫び)」

シーラ

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・(しゅたっ!)」 手を翳して挨拶する

スペクトロ

「ああああ、もあ!!!(怒)」

「相変わらず無口なヤツねえええ~~~~!!!(うが~~~~

~~~~!!)」

効果音「ずがが~~~~~ん!!)」

2コマ

シーラ

「……………(じりじり)」  
剣を構えてスペクトロたちに近づく

トリプライト

「どうでもいいから……逃げるぞ!(たたっ)」  
逆方向へ走り出す

スペクトロ

「ちよっ!(汗)」

「トリプライト!? (痛っ!)(揺らすなバカ!)

トリプライト

「今はこの場をなんとかしても乗り切る!(たたっ)」  
「そして、まずはお前の傷が癒えるのを待ち……」  
「先のこととは、それから考えれば……ちよっ(くっ!)(何かに気づく)

突然の登場

ポルーサイト

「ラリマーの間者つてのは、お前らか……(ふふっ)」  
「なるほど、見れば見るほどシーラにそっくりだな……(にやり)」  
「(血だらけだけど)

トリプライト

「何者だ……!?(ギロリ)」

サイト

「ポルーサイト……（ぼそっ）」

「冒険者ギルド、ユークレースのナンバー8だ（微笑）」

戦

スペクトロ

「ユークレースの……ユークナイト!?（どびっくり）」

サイト

「あゝ、知らないかも知れないがゝ」

「あんたの妹……シーライトもナンバーズだぜ（にやり）」

スペクトロ

「なっ!?（大汗）」（フェルドスパーもユークナイト!!）

シーラ

「……………（こくこく）」 ナンバー11

3コマ

トリプライト

「ちっ……（汗）」

「ユークナイト二人を相手にするには、さすがに分が悪いな（大汗）」

「

サイト

「二人？」

「いや……三人だ」

トリプライト

「なにっ!?（大汗）」

もう一つの気配に気づく

突然の登場

長髪の青年

「……………」

スペクトロ

「こ、こいつ……」（汗）

「他のヤツらとは　ケタが違う！！」（大汗）

サイト

「そりゃそうだ（微笑）」

「ほとんど表に出てこないギルドマスターのシトリンを除けば」

「実質、コイツがオレたちギルドの中で一番」（気にくわねえが……）

「ユークレースのナンバー2……」

「エレメーエファイトだ！」

スペクトロ

「ユークナイト……ナンバー2！？（どびっくり）」

エレメーエファイト

「……………」（じいっ）　　スペクトロたちを凝視

「はあ……」（やれやれ）

スペクトロ

「ああ……！！（怒）」

「こいつ、わたしたちを見てため息吐いた……（むかつ）」

「明らかにがっかりした！！（むき……っ！）」　　意外  
に元気ですね（笑）

効果音「ずががーーーーーん!!!」

#### 4コマ

エフアイト

「なぜわたしが」

「ヤツの・・・パロットの逃がしたコイツらを捕まえなくてはなら  
んだ・・・(怒)」

サイト

「まあ、そういうなって(苦笑)」「(パロットを嫌いなのはわかる  
が・・・)」

「これも、シトリンから言い渡された任務だ・・・」

エフアイト

「ならば・・・(ちやきつ)」「大剣を抜刀する

「このようならまらない任務・・・(ギロリ)」

「さっさと終わらせようか・・・(ぼそっ)」「

スペクトロ

「くっ・・・(痛っ)」「(どうすれば!)

「・・・えっ?(汗)」

「トリプライト!?!(どびっくら)」「

トリプライト

「・・・(すう)」「(スペクトロを地面に寝かせる

「どつやらここまでのようだ(ずしっ)」「(巨大な剣を構える

「だが!(うおおお!)」「(エフアイトに突っ込む

「黙って殺されたとあっちゃ」

「ラリマーの名に傷が付くんぞなあ!!!(どりゃーーーーー!!!)」「

巨大剣をエファイトに叩きつける

シーラ

「・・・・・・・・・・・・・・・・（じいっ）」

サイト

「あ・・・・・・・・（汗）」（無駄なことを・・・）

効果音「ぶうおおおん、どががっ、ざくっ！！」

トリプライト

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

エファイト

「・・・・・・・・（ちゃきっ）」 大剣を鞘に収める

トリプライト

「・・・・・・・・げぶっ（ざざー）」 身体から鮮血が吹き

出し、地面に崩れ落ちる

スペクトロ

「・・・・・・・・なっ（大汗）」

「トリプライトー！ー！ー！（叫び）」

シーラ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」 表情からは何を考えているのかわかりません

説明文「ルチルクォーツ王国に潜入したラリマーの冒険者、スペクトロライトとトリプライトは」

「エレメーエファイトの手によって捕らえられました」

コメント

かなりの重傷ですが、トリプライトもまだ死んでいませんよ（汗）

第147話 時空族の神・・・

4コマ劇場 アイオライト―507・・・2011/04/01

シリーズ3

タイトル「時空族の神・・・」

1コマ

忘却の迷宮にて・・・

美咲

「え・・・？(汗)」

「四霊の化身 超獣神たちの守護する四聖界が」

「崩壊の危機に・・・瀕している〜！(どびっくり)」

「それって、どういう!?(大汗)」

ダイ

「詳しくは6つ前の文字だけ4コマ・・・」

「『謎多き忘却の迷宮・・・』をご覧ください(ぼそっ)」

美咲

「ちよっ、ダイさん！(むっ！)」「(端折るなーーーー！)」

「しかも『謎多き忘却の迷宮・・・』を見ても、何も解決しないし

！！(わにゃーーーーっ！)」

ダイ

「あゝ、説明するの面倒なんだけどな(汗)」

美咲

「うおおい！！(怒)」 珍しく怒っています(笑)

ダイ

「え、え〜っと・・・(大汗)」(そんなに怒るなよ・・・)

「超鳳神グランゾルの守護する鳳凰界」

「超麟神アルフォル二の守護する麒麟界」

「超龍神リーンウィックの守護する応龍界」

「超亀神カークンの守護する霊亀界・・・」

「この四界が纏まった状態で四聖界とされているわけだけど〜」

「どっというわけだが、それぞれの聖界が徐々に離れようとしているんだ・・・」

美咲

「・・・なるほど(う〜ん)」

「それぞれ別々の次元にあるとはいえ同じ聖界ですから・・・(汗)」

「離れ離れとなれば、お互いに存在することができなくなるかもしれませんね(大汗)」

グランゾル(ぬいぐるみ型)      ふわふわと浮いている

『そっということだ・・・』

『そこで、我ら超獣神チームは      別名、へっぽこ勇者隊

『聖界の崩壊を防ぐために必要とされる』

『時空族の残した遺産を見つけ出すため』

『様々な聖界・・・時代を旅しているわけだ』

美咲

「超獣神チーム・・・ってことは！」

「シヨウさんもこの時代に来てるってことですか!?(どびっくり)」

ダイ

「・・・ぬ?」

「どうしてシヨウウが来ているって話になるんだ?」

「シヨウウは関係ないだろう・・・」  
シヨウとダイは幼馴染み  
でお隣さん

美咲

「あゝ、違った! (大汗)」 (シヨウさんじゃない!)

「リンウィックのマスター・・・そう、ブルースピネルさん!!  
(どきどきどき)」

突然の登場

カナリー

「ああゝ、ブルースのヤツは・・・」

「うちらとは別行動やで〜〜」

ダイ

「あ、カナリーさん」

2コマ

美咲

「えゝつと・・・ (汗)」

「カナリーさん、今までいっただいどちらに・・・ (大汗)」

コーネルピン (ぬいぐるみ型)

『我らは、この迷宮の奥へと向って・・・ (ぼそつ)』

カナリー

「いらんこと喋るなや〜〜〜! (がああああ!〜!)」

コーネルピンを地面に叩きつける

コーネルピン（ぬいぐるみ型）

『ぎゃふっ！？（涙）』

美咲

「か・・・、カナリーさん？（どきどきどき）」

カナリー

「あゝ、気にせんといてゝ（あははっ）」

「そんなことより・・・」

「美咲ゝ、あんたに頼みたいことがあるんやけどゝ」

美咲

「頼みたい・・・こと？（大汗）」

カナリー

「そや」

「この聖界における時空族のとこへ」

「うちらを案内して欲しいんやゝ」

美咲

「時空族・・・というとゝ」

「桜ちゃんですか？（汗）」 フローラのひとです

カナリー

「ちゃうちゃう！（ぶんぶん）」（って、あのちびっ子もこの時代  
におるんかゝ！？）

「なんらかの理由で時空力を持った精霊族やゝなく・・・」

「うちが会いたいのは、本物の時空ゝ族」

美咲

「え〜っと(汗)」

「カナリーさんもご存知かとおもわれますが」

「時空族とは、古の時代に滅んだ種族で・・・(大汗)」

カナリー

「いいや、この時代にもおるはずやで〜(にやり)」

「全ての聖界、全ての時代に同一人物として存在しとる時空族・・・」

「聖界の全てを創造せし神・・・十四創神の一人」

「奇数月五月の宝石騎士エメラルド」

「まあ〜、うちの的にいわせれば」

「コーネルピンら機獣神を創造した存在      トラピッチェ・エメラルドのことやけどな〜」

美咲

「・・・え?(汗)」

「ら、ラルドさま・・・ですか!?(どびっくり)」

3コマ

エリアCの火山地帯、温泉へ向けて歩いている・・・

パロットクリソベリル      シリカとか〜くんを背負っている

「・・・え」

「なんだって?(汗)」

スフェーン(卵形態)      パロットの提げているペンダントト

ップの中に収まっている

『だ〜か〜ら〜!』

『ガーディアンを倒すために、仕方なく協力しちゃったけど』

『わたしはあなたの剣になった覚えは無いんだからね!!』(むっ)

パロット

「えっ、だけど・・・(大汗)」

スファレライト

「あははっ」

「な〜に、パロット〜」

「スフェーンに振られたの〜〜(にやにや)」

パロット

「うぐっ(汗)」

「どうやら、そうみたいだな〜(大汗)」

「せっかく最高の出会いだと思っていたのに・・・残念だ(ぼそっ)

「 剣として

スフェーン(ペンダント)

『うっ・・・(ぼっ)』 照れ?

パロット

「まあ、竜族であるスフェーンを剣扱いするのは」

「なんか違う気がするからな〜・・・」

「スフェーンも気にしないでくれ」

スフェーン(ペンダント)

『あ・・・』

『ぱ、パロットがどうしても〜ってお願いするなら〜』

『ときどき協力してあげないこともない・・・かも(ぼそっ)』

パロット

「ん？」

「ああ、そのときは・・・頼むな」

スフエーン（ペンダント）

『き・・・、気が向いたらね！！』（あせあせ）』

ジエムシリカ　パロットの背中越しに声をかける

「う〜ん・・・」

「パロットくん、なかなかやりますね〜（ぼそっ）」

「お姉ちゃんは、パロットくんの将来が心配です（汗）」

パロット

「つて、シリカさん！？（大汗）」（誰がお姉ちゃんですか！！）

4コマ

スフアレ

「し、シリカさま！」

「もう大丈夫なんですか！？（汗）」

シリカ

「はい・・・（ありがとうございます）」

「か〜くんのおかげでかなり楽になりました（こほこほ）」

か〜くん　かっぱです

『かあ〜』

シリカ

「ですが・・・」

「もう少しこっつていないとダメかも（ぎゅ〜っ）」　パロット

トの首筋にしがみつく

か〜くん

『か、かあ・・・(ぎゃふっ)』 パロットとシリカの間にしゃんこに潰れる

パロット

「って、お〜い(大汗)」

シリカ

「そして・・・」

「パロットくんが、これから一緒にお姉ちゃんと温泉へ入ってくれれば〜」

「もつと、もつと」

「体調が回復するかと・・・」

パロット

「・・・はあ〜(汗)」

「わかりました(ぼそっ)」

シリカ

「・・・え？(大汗)」(わ、わかりました?)

パロット

「そんなことでシリカさんの体調が少しでも回復するなら・・・」

「考える必要なんて何もない(ぼそっ)」

「一緒に入りますよ 温泉」

シリカ

「あ、えっ?(汗)」 予想外の返答にびっくり

「いやっ、その〜、え〜つと・・・(大汗)」

「・・・(どきどきどき)」

「か、考えさせて ください(ぽっ)」 顔色が真っ赤になる

パロット

「・・・ぬ?(汗)」

ロードライト

「シリカさん・・・」

「パロットさんには大胆な発言をすることが多いのに」 パロ  
ットをからかっている?

「直球な返答へのきりかえしは苦手なようですね〜(苦笑)」

シリカ

「うぐっ・・・(大汗)」

「そ、そんなこと げほっ、げふっ!!」 焦って咳き込む

パロット

「ちよっ、シリカさん!(汗)」

「だ、大丈夫なんですか?!?(大汗)」

シリカ

「あ・・・(けふっ)」

「だ、大丈夫だから(たらし)」 口元から血が・・・

スファレ

「うっっ・・・(汗)」

「とても大丈夫そうには見えない・・・(どきどきどき)」

フローライト

「……………(うん)」 何かを考えている

「え〜っと、みなさん……………」

「シリカさんの身体のことです〜一つ提案があるんですが〜(よろしいですか?)」

パロツト

「ん……………提案?(なんだ?)」

フローラ

「この聖界でいうところのラスボス……………」

「スファレさんの師匠でもあるラルドさまに」

「一度、会ってみるといのはどうでしょう?」

「ラルドさまなら」

「もしかすると、シリカさんの治療法を知っているかもしれません(汗)」

パロツト

「って、本当か!?(どびっくら)」

シリカ

「……………というか(汗)」

「ラルドさま……………って誰!?(大汗)」(ラスボスって!!)」

効果音「ずが—————ん!!」

コメント

忙しい時期なので、なかなか更新することができません……………)  
しくしくしく)

## 第148話 命の洗濯は刺激がいっぱい

4コマ劇場 アイオライト―508・・・2011/04/05

シリーズ3

タイトル「命の洗濯は刺激がいっぱい」

1コマ

エリアA、天然温泉にて・・・

スファレライト

「と、いうわけで〜。みなさん、おまちかねの・・・温泉だー  
ー。〜。〜。〜。〜。〜。〜。〜。〜。〜。〜。〜。〜。〜。〜。素っ裸で温泉に飛び込む

レイチェル

「あつ〜 温泉〜〜〜。〜。〜。〜。〜。〜。〜。〜。〜。〜。〜。〜。〜。〜。〜。同じく飛び込む

フローライト

「って・・・（脱ぐの早っ！） お二人とも、お湯に飛び込むのはマナー違反ですよ。（ぬぎぬぎ）」 衣服を脱いでいる

ロードライト

「うう・・・（汗） それにしても、相変わらずの湯気だね。（大

汗） この距離でも、お互いの姿が見えないよ〜。〜。（苦笑）」

入るの二回目

フローラ

「それは・・・あれでしょ？ 湯気や光線を使って、放送では大切なところを見えなくしておいて、DVDやブルーレイではそれらを薄くすることにより売り上げを伸ばすという演出上の効果で・・・

って!?(何かを思いつく) ルシフさん!(叫び) まさか、撮影とかしてないでしょうね!!(シリカちゃんシリーズとか言っ  
て!)」

ロードライト

「さ、撮影!? (びくっ!)」 身体を隠す

ルシフ(声だけ)

『……………(し〜〜ん)』

フローラ

「……………(汗) ……考えすぎか〜〜(大汗)  
気配を探っている」

ルシフ(声だけ)

『ちっ…、勘の鋭いやつめ(ぼそっ)』 もちろん撮影中  
く?

フローラ

「って、やっぱりいた……………!(怒)」「わにや……………  
!!(」

突然の登場

ルシフ

「うおっ!(汗) 見つかった!!(大汗)」 脱兎

ロードライト

「きや……………あ!(涙)」 しゃがみ込む

効果音「ずががーーーーーん！！！」

2コマ

ジエムシリカ

「ふう〜・・・。いいお湯ですね〜」（うん）

フォスフォファイライト

「ほんとに〜〜」（うっとり）

レイチエル

「あうあう」（極楽極楽）

スフェーン（ペンダント）

なぜかフォスファイが提げている

『・・・はっ！（しまった！）今のまま（卵形態）じゃ〜温泉、  
楽しくない！（涙）』（ずががーーーーん！）

フローラ ルシフには逃げられた（笑）

「え〜っと、スフェーンちゃんはまだ卵から孵らないの〜？ 高度  
な意思疎通ができたり、生体エネルギーを具現化させて自ら光竜剣  
スフェーンファイアになったりするんだから、産まれてから七百年  
は経っていてもおかしくないと思うんだけど〜」

スフェーン（ペンダント）

『卵から孵ることって・・・幼体になることって、そんなに意味が  
あることなの（ぼそっ）』

フローラ

「え？（汗）」（いったい何を・・・）

スフェーン（ペンダント）

『わたしは今のままでいい……。温泉のことがなかったら  
のまま祭壇を出る気もなかったし(ぼそっ)』

フローラ

「スフェーンちゃん……」

突然の登場

アメトリン

湯の中から現れる(笑)

「ぶはーっ！(ぎゅーっ) そんなことより」

スフェーン(ペンダント)

『そんな……こと(ぼそっ)』 寂しそうに呟く

フローラ

「……(じゅっ) スフェーンの様子を窺う(ペンダントですけど……)」

3コマ

アメトリン

「ジエムシリカさまは、フォスフィの元彼……パロットクリソベルと温泉に入るんじゃないんですか？(にやり)」

シリカ

「元カレ!? (キュピーン)」 不気味な瞳をフォスフィに向けて

フォスフィ

「ちよっ！(大汗) 違いますってーっ!!!(涙)」(適当なこ  
というなーっ!!!(泣))

アメトリン

「で、シリカさま……。実際のところ、どうなんですか」（にやにや）」  
興味津々

シリカ

「えっ、その〜（大汗） や、やはりパロットくん他にも男性の方がいるわけですし〜（え〜っと） 一緒に入るのは……。良くないことかと（どきどきどき）」

アメトリン

「え〜〜〜っ。この辺り、二人つきりになれる温泉たくさんありますよ〜〜（るん）」  
楽しい

シリカ

「いやっ！（汗） この辺りは強い魔物の出現ポイントなわけですし……。（あせあせ） 無防備状態で二人つきりになるのは〜〜色々ズインじゃないかと（大汗）」

スファレ

「……。〜（う〜ん） それじゃあ、パロットを女湯こちに呼びますか（ぼそっ）」

シリカ

「は……。い!?!?（どびっくり）」（スファレ……。さん?）」

4コマ

スファレ

「よっど……。〜（ざぶん） とっ……。とっ （たっ たっ たっ）」

少し離れた男湯へと駆け出す

説明文「湯から出た瞬間、考えられない量の湯気が発生してスファレの素肌を隠す」

ロードライト

「この湯気、何者かの意図を感じますね〜・・・って、いうか！(汗) スファレさん、いったい何をしよう?!」(大汗)

スファレ

「お〜い、パロット〜(聞こえる?)」

パロットクリソベリル(声だけ)

『ん〜(なんだ〜)』

スファレ

「温泉に入っていたシリカさま〜、気分が悪くなっちゃって、倒れちゃった〜」(笑) 嘘です

パロット(声だけ)

『……………。なにーーーーー!!」(大汗)』(どびっくり)

シリカ

「えええええー!!!」(スファレさん、何を言って!)」

スファレ

「苦しそうにうわごとでパロットの名を呼んでるの・・・)しくしく) だから、悪いけどパロットだけでこっちに来てくれない?」  
嘘泣きです

パロット(声だけ)

『わ、わかった！(大汗) 今すぐ行く！！(叫び)』

アメトリン

「なああああーーーーー!?!?(どびっくり) なに口走っているのよあのへっぽーーーーー!?!?(大汗)」 顔が真っ赤になる

ロードライト

「あゝ・・・(汗) スファレさん、パロットさんの前でも平気で下着姿でいるからなゝゝゝ(あははっ)」 招き猫の館にて

フォスファイ

「って、落ち着いてる場合じゃないでしょ!?!(涙)」

突然の登場

パロット

「し、シリカさーーーーーん!?!(ちびちびちび)」 全裸で湯の中を歩いてくる

女性陣

「きゃーーーーー!?!(悲鳴)」 色んな意味で(笑)

レイチエル

「あ、あうゝ(大汗) スファレさんって・・・ノリがアリスみたい(どきどきどき)」

効果音「ずががーーーーーん!?!」

コメント

パロットと混浴でも平気な人・・・スファレ、フローラ、スフェ  
ーン？

## 第149話 竜族の所属するパーティ？

4コマ劇場 アイオライト―509・・・2011/04/11  
シリーズ3

タイトル「竜族の所属するパーティ？」

1コマ

エリアA、平原地帯にて・・・

佐藤さんの群れ（巨大な鳩）

『くるくる、くるっぽ〜（ばさばさ）』

鈴木さんの大群（巨大な水牛）

『ズモオオオオオオ！！（雄叫び）』

エルバイト

「納得いかねええええー！！！！（叫び）」

ロードライト

「ちょーっ！ アルバイトさん、静かにしてください！！（し  
い〜っ！） 佐藤さんと鈴木さんに気づかれちゃうじゃないで  
すか〜・・・（大汗）」

エルバイト

「やかましい！ これが叫ばずにいられるかー！！！！（うぎ  
やー！！！！）」（オレはアルバイトじゃねえ！）

ロードライト

「え〜っと・・・（汗） それで〜、なにがそんなに納得いかない

のですか〜？（どきどきどき）」

エルバイト

「温泉……、昨日の温泉のことだよ！」

フローライト

「あれ？ アルバイトさんは、温泉……楽しめなかったんですか〜？」

エルバイト

「いや、温泉自体は満喫した……。だが！ せっかくの温泉だったんだ……。もう少し、どきどき〜なイベントがあってもよかったですじゃないか？ 良い思いをしたのって、女湯に突入したパロットだけだろ〜が！（むかつ）」

フローラ

「い、良い思い……ですか？（きよろっ）」 そつと振り返る

パロットクリソベリル

「……………（しくしくしく）」 顔が風船のように膨れ上がり、全身に包帯が巻かれてミイラ男状態（笑）

説明文「パロットが女湯に突入した後、女性陣……特にフォスフイとアメトリンによってボコられました（爆）」

2コマ

エルバイト

「ああ〜、あのおときオレも女湯に突入すべきだったぜ〜〜（くそ〜っ!）」

ロードライト

「へえ〜・・・。アルバイトさんって、そういう人だったんだ〜  
〜(じと〜っ) そういえば、この前の温泉のときも 平然と乱  
入してきたし・・・(ぼそっ)」

エルバイト

「いや、あれは・・・だな(大汗)」      ロードライトのことを  
男の子だと思っていた

ロードライト

「これはもう、アルバイトさんの人となりをお姉ちゃんに報告する  
しか・・・(ぼそっ)」

エルバイト

「それは勘弁してください!!(しゅたっ!)」      慌てて土下  
座

効果音「ずががーーーーーん!!!」

フォスフォファイライト

「と、ところでパロット。温泉入る前、なぜかあたしが預かること  
になったスフェーンちゃん・・・どうするの?(汗)」      卵の  
入ったペンダント

パロット

「あ〜、そうだったな・・・。それじゃあ、一応返してもら・・・」

スフェーン(ペンダント)

『わたし・・・、これからはフォスフィと一緒にいることにするね  
(ぼそっ)』

パロット

「……………(汗)」

フォスファイ

「……ええっ!? (どびっくり)」「(いったい何を!)

スフェーン(ペンダント)

『なんていうか、わたしも同性の方が気が楽だし……。どちらかのパーティに所有されるっていうのなら、やっぱり招き猫勇者隊よりドラゴンファンングの方がかっこ良いし』』

パロット

「……ということだ。スフェーンのことをしっかりと頼むぞ(ぼむっ)」  
フォスファイの肩に手を置く

フォスファイ

「ちよっ! なに勝手なことを決め!?(大汗)」

3コマ

アクロアイト

「す、凄い……(汗) ドラゴン……いや、人以上の知識や攻撃力を誇る竜族がパーティにいるなんて、他には聞いたことがない  
(大汗)」

フォスファイ

「ちよっ、アクロ! スフェーンちゃん預かるのって……もう決定なの!?(大汗)」

アクロ

「スフェーン・・・、本当にボクたちの仲間になってくれるのか？  
(じくり)」

フォスファイ

「預かるの決定なの！！(うにゃー！)」「(反対するわけ  
じゃないけど！)」

スフェーン(ペンダント)

『・・・フォスファイと一緒にいることにしただけで、別にあんた  
ちの仲間になるつもりはまったくくない(ぼそっ)』

アクロ

「あゝ、そうですか・・・(どきどきどき)」

フローラ

「では、スフェーンちゃんのことを尊重して・・・フォスファイさん  
に預かってもらうことにしますね。ですが、ドラゴンファングの皆  
さんは、スフェーンちゃん ドラゴンの卵を保護していることは  
他人に知られないようにしてください。知れ渡れば、暗殺者や盗賊  
連中が押し寄せることも覚悟してくださいね(にこっ)」

アクロ

「うぐっ・・・。そういえば、そうだった・・・(どきどきどき)」  
(その危険性を忘れていた・・・)

フォスファイ

「だゝかゝらゝ、預かるのにはそれなりの覚悟が必要だって言っ  
て！！(大汗)」

スフェーン(ペンダント)

『・・・フォスファイは、わたしと一緒にいるのが嫌なの？（しゅん）  
』 寂しそうな声で呟く

フォスファイ

「うぐっ・・・（汗） べ、別に嫌だと言っているわけじゃなく〜  
〜（大汗）」

スフェーン（ペンダント）

『じゃあ、わたしはフォスファイと一緒にいる〜〜』

フォスファイ

「え、ええ〜つと、フォスファイちゃん これからもよろしくね・・・  
（しくしくしく）」

スフェーン（ペンダント）

「うん、よろしく〜（にこ〜っ）」 計画通り？（笑）

4コマ

フローラ

「つとまあ〜、スフェーンちゃんの保護者も無事に決まったことで・・・  
これから向う先ですが〜」

エルバイト

「ん？ このまま王都に戻るんじゃないのか？」

フローラ

「王都へ向うのも一つの手ですが・・・シリカさんの体調のことを  
考えると一刻も早くラルドさまにお会いすべきですかね〜」

パロット

「確かに・・・その方が良さそうだな（ちらり）」 シリカの様子をチラ見

ジエムシリカ か〜くんを抱っこしている

「げほっ、けほけほっ・・・（大汗）」 顔色が真っ青でかなり苦しそう

スファレライト

「うっっ・・・お師匠には会いたくないけど シリカさまのこととは何とかしなきゃだし〜。・・・それじゃあ、このままエリアGへ向うことにしましょうか〜」（よっし）」

エルバイト

「・・・。。。。。。え、エリア・・・G？（どきどきどき）」

スファレ

「そっ、エリアG」

エルバイト

「・・・。。。。（汗） って、えええええー！ー！？（どびっくり） エリアGって言ったら、冒険者管理組合でも状況を確認できてない未開の地なわけで！！（大汗）」

スファレ

「そういえば、初めての冒険ってエリアGの探索だったよな〜（しみじみ） そんなに昔のことじゃないけど・・・（ぼそっ）」

エルバイト

「お前ら・・・、本当にレベル1なのか？（どきどきどき）」

説明文「 パロット、スファレ、フローラはレベル1です 」

#### コメント

冒険の舞台は再びエリアGに!?(未定)

## 第150話 エリアGのラスボス

4コマ劇場 アイオライト―510・・・2011/04/19  
シリーズ3

タイトル「エリアGのラスボス」

1コマ

エリアG、密林地帯にて・・・

エルバイト

「こ、ここがエリアG・・・（汗）　　なんだか、空気が濃く感じる  
ぜ」（大汗）」

ジェムシリカ　　か〜くんを抱っこしている

「空気・・・というより、これは精霊力の密度が高いのでしょうか。  
辺りに浮遊するいくつもの発光体は、オーブと呼ばれる精霊力の塊  
りです」　　この人、盲目のはずなのですが・・・（汗）

フローライト

「このエリアGには、ルチルクオーツ城の庭園に植えられている神  
聖樹クリソプレーズの親木があるとされています。神聖樹クリソプ  
レーズは、精霊力を多量に放出するだけではなく、その力を使って  
時空間転移をすることも可能ですから・・・このエリアにラルドさ  
まが拠点を構えられているのは、ある意味当然なことかもしれませ  
んね」（基本は聖界に1本のみ）　　ちなみに、わたしはルチルクオ  
ーツ城にある神聖樹クリソプレーズと、五千年前の人間界・・・光  
風町にあるこだまの樹を通じて過去の時代へ行ったり来たりをして  
います」

アクロアイト

「か、過去の時代って・・・？（理解不能） それにしても、こんな危険地帯に拠点を構えるなんて、さすがはラスボスってところか・・・（ごくり）」

ハックマナイト

「なあ、ラスボスっていうぐらいなんだから、今からそいつを倒してしまえば・・・この『最強の勇者はヒーラーでレベル1』も最終回じゃね？（ぼそっ） 次回からは『ハックマナイトと愉快な仲間たち』が始まります・・・ってな感じで」

アメトリン

「ラスボス倒しても、さらに強い隠れボスが控えていたりして・・・（ぼそっ）」（ドラクエみたいに）

フローラ

「ラルドさまより強いのは、聖界広しといえど リアンさんぐらい・・・って！（汗） どーしてドラゴンファングの皆さんがここにいるんですかー！ー！？」（どびっくり）（アリスさんの生まれ変わりであるフォスフィさんはともかく！）

アクロ

「・・・なぜって（汗）」

アメトリン

「え〜っと、なんとなくく？（大汗） 別れるタイミングが無かったというか・・・（どきどきどき）」

フローラ

「なんとなくて、ラスボスのテリトリーに近づくなー！ー！ー！！」

(うにゃー……っ！)「

## 2コマ

### 突然の登場

ラルド 見た目、25〜30歳ぐらい？

「ラスボス、ラスボスと……連呼するんじゃない。このバカモノめ〜！(むかつ)」「(誰がラスボスだ!!)」

### フローラ

「ひっ、ラルド……さま!?(涙)」「(っ、ごめんなさ……)」

### スファレライト

「あ、お師匠〜 どうしてここに……。もしかして迎えにきてくれたんですか〜?」

### ラルド

「まあ、そういうことだ……。お前たちが来るのを待っていたら、軽く数日は待たされそうだしな〜(汗) ほら、腹を空かせた魔物たちがお前たちのことを狙っているぞ……。にやり)」  
パロットたちが来るのを分かっていたようです

### 巨大な魔物たちの影

『がるるう……。ぐうっ』 ラルドの気配に押されて近づけない

### パロットクリソベリル

「って、そんなことよりっ! あなたが……。ラルドさまか。シリカさんのことについて、あなたに聞きたいことがある……。ギロリ)」  
ラルドを睨みつける

ラルド

「そう急くな……。屋敷に着いてからでも遅くはあるまい……」

パロツト

「なっ！ オレたちは急いでい……。んんんっ！？」（どびっくり）

何者かが背中から抱きつき、パロツトの鼻と口を両手で塞ぐ

フローラ      パロツトに抱き付いている

「はいはい、パロツトさん……。少し黙りましょうね……」（苦笑）

笑）ではラルドさま……。お屋敷までの先導      よろしくお願

いします〜（あははっ）「      ラルドの逆鱗に触れればパロツ

トの命運は尽きます

ラルド

「ん……。では、ついてい……。にやり」

パロツト

「んんん、んんん！……！！（じたばたじたばた）      酸欠

状態？

フローラ

「……。ふう〜（大汗）「（やれやれ）

パロツト

「んんんん！……！！（死ぬ！……！！）」

意外にフローラの力は強く、振りほどけない

スファレ

「おっと、さっそく本日の『時の宝珠』の出番か〜？（笑）」

1日1回、五分だけ時間を戻せる時空族の遺産

シリカ

「そんなこと言ってないで・・・早く助けてあげなさい（けほけほつ）」

効果音「ずががーーーーーん!!!」

3コマ

数十分後・・・

ラルド

「ほら、屋敷が見えてきたぞ・・・つと。ほお・・・今日は千客万来のようだな（ふふつ）」

レイチエル

「あうっ、あれって・・・」 屋敷前に立つ人影に気づく

アルフォーニ（ぬいぐるみ型）      レイチエルに抱っこされている

『やれやれ・・・。いまままで何処に行っていたかと思えば』（はあ）』

カナリー      屋敷前に立っている

「なんや、せつかく出向いてやったってゆゝのに、トラピッチェのヤツ留守なんか〜」（やれやれ）」

コーネルピン（ぬいぐるみ型）      カナリーに抱っこされている

『あ、あはははっ（苦笑）      ぎ、残念だな〜（大汗）      久しぶりにボクたちの創造主・・・トラピッチェ・エメラルドさまに再会でき

ると思つていたのに……。さあ、もう諦めて帰りましょう  
！！（涙）』（早くしないと帰って来ちゃう！！）

ラルド

「ほお、コーネルピンよ……。そんなにオレと会いたかった  
のか……」

コーネルピン（ぬいぐるみ型）

『ぎゃー……！……？』（泣き叫び）』      なぜか表情  
が劇画タッチになる      （笑）

レイチエル

「あうっ、ダイ……」（たたっ、がばっ）「      駆け出してダ  
イに抱きつく

ダイ

「っと、レイチエル！ おまえ、ここにいたのか……」（苦笑）「  
（っっていうか、いちいち抱きつくな）」

パロット

「で、なんでレイチエルの知り合いと、忘却の迷宮へ向かったは  
ずの美咲さんやアンバー……。それに騎士団長さんが一緒なんだ  
？（大汗）」

アンデシン

「あ……。色々とあって……。だな。それより、フローラ・  
・無事だったのか（ほっ）」「      昔からフローラのことを妹のよ  
うに可愛がっている

フローラ

「はい。皆さんの……とくにレイチェルさんの活躍により、マリマーの暗殺者を退けることができました」

アンデシン

「ダイに抱き付いている……彼女だな（チラリ）」

レイチェル

「あう~~~~」

ダイ

「だ~~~~ら~~~~、く~~~~つ~~~~く~~~~な~~~~ー~~~~！~~~~！~~~~！~~~~（う~~~~に~~~~や~~~~ー~~~~！~~~~！~~~~）」

4コマ

ラルドの屋敷、応接室にて……

ラルド

「で……？ おまえら、このオレにいったい何の用だ？」

パロット

「え~~~~っと……（チラッ）」 カナリーをチラ見

カナリー

「あ~~~~~~~~、ウチの方は後でもかまわへんから、お先にどうぞに~~~~~~~~」

パロット

「では、遠慮なく……。え~~~~、ラルドさま　だ。オレは招き猫勇者隊の……」

ラルド

「パロットクリソベリル・・・だな。自己紹介はいいから、用件だけを話せ(ぼそっ)」「(話が進まんだろ!)

パロット

「あ、ああ・・・(な、なぜ名前を知っている!? ) じつは、彼女・・・ジエムシリカさんの病状について、聞きたいことがある・・・(汗)」「

シリカ

「・・・・・・・・(けほけほ)」「 顔色が悪い

ラルド

「ふむ・・・(じいゝゝ) さきほどから気になっではいたが よくそんな状態で動いているな(汗) 魔石に憑かれて、強力な呪いが発動している・・・。しかも、身体に渦巻く毒素の影響で・・・長くてあと1〜2ヶ月の命というところか(ぼそっ)」「

パロット

「うぐっ・・・(大汗)」「 改めて現実を突きつけられた

シリカ

「・・・・・・・・」 冷静です

美咲

「ちよっ、シリカさん! 魔石にも憑かれていたんですか!?(どびっくり)」「

シリカ

「さ〜て、何のことでしょう・・・(どきどきどき)」「 明後

日の方向をむく

フローラ

「とういわけなのですが……（汗）ラルドさま、シリカさんの身体を治す方法……何かありませんか？（大汗）」

ラルド

「魔石だけなら、リウムに任せれば問題は無いが　そこに呪いの要素が絡まっているようだからな……。かけられている呪いの種類がわからない状態で、魔石だけを除去するのは止した方がいいだろうな……」

フローラ

「そ、そんな……。（がつくり）その呪いを解かない限り、シリカさんの命は……。（涙）」

ラルド

「まあ、確かに呪いを調べる必要はあるが……。今の状態で病状の進行を停止させることはできる（ぼそっ）」

フローラ

「えっ！？（汗）」

パロット

「ほ、本当か！！（どびっくり）」

ラルド

「ふっ……。（微笑）それには、おまえの協力が不可欠だが……。・（にやり）」　　懐から二つの指輪を取り出す

フローラ

「えっ……、その指輪って……（大汗）」（どきどきどき）

コメント

時空族の取り出した指輪といえば……例のアレです（爆）  
意味不明！！

第151話 フローラ改め如月桜

4コマ劇場 アイオライト―511・・・2011/04/25

シリーズ3

タイトル「フローラ改め如月桜」

1コマ

ラルドの屋敷、中庭にて・・・

ジェムシリカ

「はっ！！（ぶん、ぶう〜ん！）」  
軽やかに剣を振り回して  
いる

謎の少女（三歳児）

「・・・（ずーん！）」  
地面に両手をついて落ち込  
んでいる

シリカ

「ふんっ！！（ずじじじっ！）」  
精霊力を高める

謎の少女

「・・・（しくしく）」  
滝のような涙を流して  
いる

シリカ

「す、すごい・・・（大汗） 視力は戻っていないし身体に違和感  
は残っているけど・・・無理なく動ける！！（どびっくり）」

ラルド

「その指輪は、フローラに渡した時の指輪から発せられる時空力を受け取るためのものだ。時の指輪からは強大な時空力が発せられるわけだが・・・資質の無い者がそのような強大な時空力を受けることはできない。そこで、資質のあるフローラが時の指輪の時空力を受け、病状の進行を停止させるためだけの僅かな時空力をおまえさんの指輪へと伝えている・・・というわけだ」

### 謎の少女

「・・・・・・・・・・・・・・・・（ぶるぶるぶる）」  
身体を小刻みに震わせて、何かに耐えている

### ラルド

「まあその結果、フローラの身体がちびっ子化するわけだがな」  
（あゝっはっは）

### フローラ（三歳児バージョン）

「笑って誤魔化すなーーーーー！！」（大泣き）  
（わにゃーーーーー！！！！）

### ラルド

「あははははっ！！」（涙）  
大爆笑

### 2コマ

### シリカ

「フローラちゃん・・・、わたしのためにそんな身体（三歳児姿）になってしまって、本当にごめんなさい・・・（ぼそっ）」

### フローラ（三歳児バージョン）

「あゝ、平気です・・・（むくりと立ち上がる）  
変な話・・・五千年前の世界ではこの姿がデフォルトですから（にっこり）」

気にしないでください)

シリカ

「……………(うずうず)」

フローラ(三歳児バージョン)

「??? シリカさん、どうしましたか? (汗)」

シリカ

「フローラちゃん(が)ばっ( かわいい~~~~ (ぎゅ~~~~)」

フローラを抱きしめる

フローラ(三歳児バージョン)

「わにゃー~~~~っ、どうして抱きつくんですか~~~~!? (大

汗)」

シリカ

「もちろん、フローラちゃんが可愛いからです (ぎゅ~~~~)」

「

フローラ(三歳児バージョン)

「って、最初からこの姿で出会ってたなら三歳児になりきれるけど、いまさら小さい子になりきるのは無理ですって~~~~!! (うじや~~~~!!)」

シリカ

「はいはい、フローラちゃん、良い子でちゅね~~~~ (にこっ)

「

フローラ(三歳児バージョン)

「赤ちゃん言葉、やめれーーーー！！（涙）」

効果音「ずががーーーーーん！！」

ダイ

「……………（汗）で……………、どうしてシヨウの家で預かっているちびっ子がこの時代にいるんだ？（大汗）」

レイチエル

「あう〜（汗） さ、さあ〜〜（あははっ）」

3コマ

パロットクリソベリル

「う〜ん……………（なでなで） 考えてみれば、フローラの姿が変わったのは好都合かもしれないな〜（なでりなでり）」

スファレライト

「ん……………、どっぴうこと〜？」

パロット

「フローラがこんな姿になったのは、ここにいるオレたちしか知らない（なでなで） ラリマーのヤツらも……………暗殺の対象がこんなちびっ子になったとは夢にも思わないだろう（なでりなでり） つまりは、これでフローラが狙われる心配は無くなったわけだ（なでなでなで）」 フローラの頭を撫でまくっている（笑）

フローラ（三歳児バージョン）

「う……………（汗） なんていうか〜、すっごくバカにされている気がする〜……………（しくしくしく）」

スファレ

「あははっ、ちびっ子フローラ可愛いからね」 あのパロットが  
保護者の顔になってるよ〜〜（笑）「（だらしなないぞ〜〜）」

フローラ（三歳児バージョン）

「うう〜・・・（汗） ただ撫でられるだけじゃなく、反撃をしない  
と負けになってしまっ（ぼそっ） よ〜し、この技はあまり使い  
たくなかったけど仕方ない・・・。調子に乗っているパロットさん  
を、精神的に追い詰めてやりましょう（たたっ、ぎゅっ）  
（シリカから逃れて、パロットの腰に飛びつく）

パロット

「・・・ぬ？（びっくり）」

フローラ（三歳児バージョン）

「お・・・お父さん（にっこり）」 上目遣いの笑顔

効果音「どがぁー————ん！！」 パロットの  
背後に稲妻が走る！

パロット

「……………（じい〜）」

「っ」 抱きついているフローラを見つめる

4コマ

フローラ（三歳児バージョン）

『へへ〜ん、どうだこの攻撃・・・。パロットさんぐらいの年で、  
突然、見知らぬ子からお父さん呼ばわりされたら、それは焦るでし  
ょう（にやり）』

パロツト

「・・・・・・・・・・・・・・・・（う~~~~ん）」

フローラ（三歳児バージョン）

『さあ、パロツトさん・・・、わたしの必殺技　どう切り返しま  
すか~~~~？（ふふふっ）』（勝った）

パロツト

「あゝ、オレ、この子引き取るわ~~~~（ぼそっ）」

フローラ（三歳児バージョン）

「えええええー！！！！！！！！！！（どびっくり）」（なにー！！！！！！！！！！）

効果音「ずがががあー！！！！！！！！！！ん！！！」

シリカ

「そう・・・ですね（うん）　こんな小さな子どもを、一人になん  
てさせていただけません。パロツトくん、この子はわたしたちで責任  
を持って育てましょう（に~~~~っ）」（だから、わたしのことは  
お母さんと・・・）

フローラ（三歳児バージョン）

「な、なんですかその反応！？（大汗）」

スファレ

「え~~~~と・・・（汗）　二人とも（パロツトとシリカ）、さつき  
から意味不明なことを口走っているけど・・・、そのちびっ子  
フローラだよ（どきどきどき）」

パロツト

「誰だろつと関係ない……。この子は、オレの娘として育てる！  
！（叫び）」 固い決意！

フローラ（三歳児バージョン）

「え〜っ、ちよつとー！ー！ー！ー！（大汗）」（これ以上、お父さんが増えるのは勘弁・・・）

ラルド

「フローラ・・・いや、その姿の時は桜だったな（ぼそっ） おまえ、今のような遣り取りで、五千年前の如月家に潜り込んだのを忘れたのか？（大汗）」

フローラ改め如月桜

「そ、そうだったー！ー！ー！ー！（叫び）」（そういえば！）

パロツト

「さあ、お父さんだよ！！（ぎゅ〜っ）」 桜を抱きしめる

桜（三歳児姿のフローラ）

「って、この人誰ですかー！ー！ー！ー！？（涙）」（こんなのパロツトさんじゃありません！！）

説明文「フローラは五千年前の人間界で、シヨウをお父さん、優子をお母さんと言って如月家へ入り込みました」

コメント

なかなか話が進みませんね〜（笑）

第152話 時空の狭間でのやりとり・・・

4コマ劇場 アイオライト―512・・・2011/05/03  
シリーズ3

タイトル「時空の狭間でのやりとり・・・」

1コマ

パロットたちの様子が巨大モニターに映っている・・・

フロアライト(三歳児バージョン)

』とにかく、この姿のときはフロアではなく、桜・・・と呼ぶようにしてください。そして、暗殺者の目から注意を逸らすというのであれば、普段からわたしのことを見た目通り三歳児として扱ってくださいね』

ジエムシリカ

』はいはい、桜ちゃんは可愛いでちゅね～～～ ( ) なでなで』

レイチエル

』あう～ 桜ちゃん、可愛い～～～ (ぎゅ～～～っ)』  
桜を抱きしめる

桜

』ああ～～～っ、こども扱いするのは王都へ戻ってからでいいですよ～～～ (涙)』 (うにゃ～～～!)

時空の狭間に漂う時空戦艦アレックス改のブリッジにて・・・

長身で美しいプロポーションの女性

「……………(大汗)」

針金のようにとんがった髭を生やしている痩せ男

「え〜っと……………(あははっ)」

ゴリラのように強靱な筋肉に覆われた威つい男

「ふ、ふが〜……………(ときどきどき)」

長身で美しいプロポーションの女性

「艦長……………いや、レイチエルにも困ったもんだね〜(はあ〜)

一刻も早く時空族の遺産を見つけ出さないと、四聖界が崩壊しちまうっていうのに……………。なにをのんきに遊んでいるんだか……………やれやれ)」

針金のようにとんがった髭を生やしている痩せ男

「まあまあ、ドロンジヨさま〜。四聖界の崩壊を阻止するほど強力な時空族の遺産がこの聖界にあるかどうかは、そう簡単には判明しません。これまでと同じように現地人の信頼を勝ち取り……………時空族の遺産について情報を収集するしかありませんよ〜)」

ドロンジヨ?

「まあ〜、それはそうなんだけどね〜……………で、グロツシユラー(ぼそっ)」

グロツシユラー

「はい?」

2コマ

ドロンジヨ?

「誰がドロンジヨなんだい、いつたい誰が!!! (ぎゅ〜〜〜っ)」

グロツシュラーの髭を引つ張る

グロツシュラー

「いたたたたたっ！（涙） す、すみませんパイロップさま……  
！！（痛っ）」（引つ張らないでください……！）

ゴリラのように強靱な筋肉に覆われた威つい男

「ドロ……パイロップさま、落ち着いて……！（大汗）」

パイロップ

「ツアボライト、あんたもか……！！（激怒）」

ツアボライト

「う、うが……っ！（びくっ）」（しまった……！）

突然の登場

顔の半分を覆う仮面を付けた少年     ブリッジに入ってくる

「はあ……。また、観客のいない漫才を繰り広げているのか……。  
。この三バカ……（ぼそっ）」

パイロップ

「ちっ、ブルースピネル……。相変わらず失礼なヤツだね（む  
かつ） レイチェルのお願いじゃなければ、このアレックス改から  
叩き出しているところだよ（怒） しかも、せっかく乗せてやって  
るといふのに、時空族の遺産の探索任務を拒否しやがって……。あん  
たは、いったい何のために時空を巡っているっていうんだい。ええ  
っ！？（ギロリ）」

ブルースピネル

「……………キサマには関係ない(ぼそっ)」

パイロープ

「ああああ〜っ！むかつくやつだね—————！！(むき  
—————)」

グロツシユラー

「ドロンジョさま、落ち着いて！！(大汗)」

パイロープ

「だから、ドロンジョいうな—————！！(激怒)」

ブルース

「やれやれ……騒がしいヤツらだ……(はあ)(  
「

パイロープ

「お前がそうさせているんだろ—————が！！(がぎや—————  
—————)」

効果音「ずが—————ん！！」

3コマ

ブルース

「だいたい、強力な時空族の遺産がこの聖界に存在するかどうかも  
分からないというのに、わざわざオレが出向く必要はないだろう……  
。探索任務など、あのへっぽこに任せておけばいいんだよ……」  
へっぽこ=ダイ

パイロープ

「ブルース！あんたってヤツは！！(怒)」「(自分勝手だな、お

い！！)

ブルース

「……ん？」 モニターに映る何かに気づく

フォスファイライト(映像)

『うう……、あのラルドって人……あたし、なんか苦手だな』  
『(大汗)』

ブルース

「……………。アリ……ス(ぼそっ)」

パイロープ

「ん、アリス？ アリスって……確か」

グロツシュラー

パネルを操作して、モニターにアリスの情報を映し出す

「はい(ぴっぴっぴっ) ブルースさんが仰っているのは、朱雀の機獣神レッドベリルのマスターにして精霊神ファリスの五精霊の一人……風のアリスさんのことだとおもわれます。しかし、アリスさんは、この時代より五千年ほど前に起こった十四創神同士の戦い ジュエルウォーズにおいて既に死亡されており……」

パイロープ

「しかも、容姿どころか生体波長も全然違う……。こいつのどこがアリス……って、ブルース、どこへ行くんだい！？(大汗)」

ブルース

「この聖界に降りる……(ぼそっ)」

パイロープ

「って、いったいどういう風の吹き回しだい!? ついさっきまで降りる気なんて微塵もなかったくせに!!」(どびっくり)「

ブルース

「・・・説明するだけ無駄だ(ぼそっ)」

パイロープ

「ななな、なんだってーーーーー!!」(激怒)「(むきーーーーー!!!)」

4コマ

時空戦艦アレックス改の甲板にて・・・

ブルース

「そう・・・、説明しても無駄なこと・・・(ぼそっ) なにしろ、オレ自身・・・なぜあの子に会わなければならぬと感じたのか、わからないのだからな(ふふっ)」

突然の登場

龍を模したぬいぐるみ?

宙にふわふわ浮いている

『ブルースよ・・・。ドロンジョさまも言っていたが、あの娘はかつて四聖界に現れた朱雀の機獣神レッドベリルのマスター・・・アリスではない。なにせ、生体波長が違っているのだから・・・』

ブルース

「わかっている。生体波長とは、その魂固有のエネルギー波だ。たとえ、死して生まれ変わったとしても、その生体波長は同一のものとなる。そのことを考えると、あの子はアリスではない・・・」

龍を模したぬいぐるみ？

『なら、どうしてあの娘に会おうとする……』

ブルース

「それはわからない。だが、彼女に会うことで、失われた過去の記憶が戻るかもしれない。そんな気がするのだ(ぼそっ)」

龍を模したぬいぐるみ？

『ブルースの記憶か……(汗) 出会った当時(ブルースが5歳のとき)から探し求めてはいるが……未だ(現在18歳)その手がかりすら見つかっていない(大汗) 落胆させるつもりではないが……今回も空振りに終わるのではないか……(どきどきどき)』

ブルース

「うぐっ……(汗) こ、今度こそ……大丈夫だ(大汗)」

龍を模したぬいぐるみ？

『まあ、何にしてもブルースはわたしのマスターだ……。わたしは、マスターの命に従うのみ……(にやり)』

ブルース

「すまないな、リーンウィック……(ふふっ) では、行くぞ……(ぱぱっ)」 虚空より青色の槍を取り出す

リーンウィック(ぬいぐるみ型)

『……』 陽炎のように姿を消す

ブルース

「すうーーーーーっ（大きく息を吸い込む） 来い・・・リーー  
ンウィック！！（叫び）」 槍を上空へ向けて突き上げる

効果音「ずぎゃーーーーーん！！」 時空の狭間に  
稲妻が走る！

説明文「上空に魔方陣のような紋様が浮かび上がり、中から限りな  
く生体に近い・・・巨大な龍の形をした機械 超龍神リーンウイ  
ックが現れる。リーンウィック（聖獣機モード）が身体をくねらし  
ながらアレックス改に近づくと、ブルースがその頭上に飛び乗る。  
その瞬間、時空の狭間の一部に光が溢れ出し、パロットたちが存在  
する聖界への扉が開かれる。そして、ブルースを乗せたリーンウイ  
ックは、光の扉に突入して時空の狭間から姿を消してしまった」

#### コメント

パイロープのことをドロンジヨさまと言い出したのは、当時小学  
1年生だったダイです

第153話 経験値は上がらなかったけど

4コマ劇場 アイオライト―513・・・2011/05/06  
シリーズ3

タイトル「経験値は上がらなかったけど」

1コマ

ラルドの屋敷、中庭にて・・・

ラルド

「・・・（うむ） またしても、何者かがこの時間軸へ侵入して来たようだな」（ぼそっ）（オレに断りも無く）

スファレライト

「・・・お師匠？（汗）」（どうしましたか？）

ラルド

「いいや、なんでもない（ぼそっ） そんなことより。スファレよ・・・お前の冒険者カードを見せてみる」

スファレ

「・・・え？（大汗） 冒険者カード・・・ですか！？（いったい何故！！）」

ラルド

「いいから早く出せ！！（激怒）」

スファレ

「は、はいっ！！（泣）」（ぱっ）

冒険者カードを差し出す

ラルド

「どれどれ〜（冒険者カードをチェック中） ふむ〜、命令どおり経験値ゼロを守っているようだな〜」

スファレ

「ええ〜っと・・・（苦笑） 命令を守っているつもりはないんだけど、なぜか経験値が上がらなくて〜〜（あははっ）」

ジェムシリカ

「えっ！？（大汗） スファレさん、今回の冒険でも経験値上がらなかったの！！（どびっくり）」

2コマ

ロードライト

「う〜ん、やっぱりスファレさんの冒険者カード、バグっているんじゃないでしょうか？（汗） 今回の冒険ではボクも戦闘に参加しませんでしたけど、出発前と比べて経験値は300ほど上がっていますよ〜」

スファレ

「えっ、ロードライトの経験値・・・上がってるの！？（大汗）じゃ、じゃあ〜、パロットたちも・・・（チラリ）」

パロットクリソベリル      ヒーラーでレベル1

「ふっ・・・（微笑） もちろん まったく上がっていない・・・（しくしくしく）」（鉄球と戦ったのに）

桜      姫でレベル1

「さくらも〜〜（にごごっ）」（けいけんち〜って、なに〜？）

三歳児になりきっています

エルバイト レンジャーでレベル4

「おっ、3ポイントだけだけど経験値上がってるぜ (おっしゃ！  
！)」

スファレ

「ほら！ ロードライトだけ300も上がっているなんて・・・ず  
るい！！ (一緒に冒険してたのに！！)」

ロードライト

「逆に、どうして皆さんは上がってないんですかー！ー！！)  
うにゃー！ー！ー！！) (アルバイトさん3ポイントって低すぎ  
でしょ！？)」

アンデシン ルチルクォーツ王国騎士団長

「こんなので大丈夫なのか、フローラ(桜)のパーティは・・・  
どきどきどき)」

3コマ

パロット

「まあ、ロードライトだけ経験値が上がったのは理解できる・・・」

スファレ

「えへ、どうしてよへ？」

パロット

「今回、オービメント洞窟へ何しに行ったかを考えてみる・・・。  
ダンジョンのイベント再生に行ったんだ。DC ダンジョンクリ  
エイターであるロードライトの経験値上がるのは当然だろう」

スファレ

「そういえば・・・、DCの仕事でオービメント洞窟へ行っただったね。わたし的には、温泉入るのがメインだったけど・・・」  
「ぼそっ」(目的達成したんだから、経験値上がらないのかな?)

ロードライト

「ちよっ、スファレさん!!」(涙) まあ・・・、新階層の発見や巨大ロボット(超麟神アルフォーニ)の登場で、ボクもいまいち何しに行っただのかあやふやですけど・・・(どきどきどき)」

ダイ

「・・・レイチエル、アルフォーニで戦ったのか?(汗)」

レイチエル

「あうう・・・(苦笑) スファレさんの持っている時空族の遺産・・・譲ってもらったことを条件に」

ダイ

「ううん、その程度のことです超獣神を出したらダメだって(汗) やっぱり、他のメンバーをどうにもならない状況まで追いやってもうダメ! っとききにさっそうと超獣神を登場させて、圧倒的な力で敵を倒さないとかっこよくないって!!」  
なぜか必死

レイチエル

「あうう、かっこいいとかの問題じゃ・・・(大汗)」

ラルド

「うむ・・・。オレもダイの意見に賛成だ!!(えっへん!)」

レイチエル

「あううううー……………!! (どびっくり)」「(なんで  
すってー……………!!)」

効果音「ばきゅー……………ん!!」

4コマ

ラルド

「なんにしても……。スファレはこれからも経験値ゼロを目指す  
ように(これは師匠命令だ!)」

スファレ

「っていわれても(大汗)」

ラルド

「そして、これまで以上に『へっぽこ度』の獲得を目指すように！  
「！」

スファレ

「……………。。……………。。……………。。……………  
へっぽこ度?(どきどきどき)」

ラルド

「スファレが冒険者になってから稼いだへっぽこ度は約2万3千ほ  
ど……………」

スファレ

「に、2万!?)(どびっくり)」

ラルド

「しかし、この程度のへっぽこ度・・・へっぽこマスター青山七瀬なら、わずか数時間ほどで稼いでいた数値でしかない。ちなみに、そこにいる破壊と再生を司るへっぽこ勇者ダイなら、3日程度で稼いでいることになる!」

ダイ

「・・・へっぽこ度ってなんだ? (大汗)」  
「気にしたことがない」

レイチエル

「あう・・・(さあ?)」

ラルド

「スファレも必死になってがんばらないと、いつまで経ってもへっぽこを極めることが出来んぞ!! (叫び)」

スファレ

「そんなの極めたくないわーーーー!! (怒) しかも、2万つて数値、高いのか低いのか・・・わけわかんねえええーーーー!! (うぎゃーーーー!!)」

効果音「ずがーーーーーん!」

コメント

何もしていないのに数値だけ上がっていたら・・・あなたもへっぽこです!! (爆) 褒め言葉 (笑)

## 第154話 運命の出会い・・・なのかもしれない

4コマ劇場 アイオライト―514・・・2011/05/11  
シリーズ3

タイトル「運命の出会い・・・なのかもしれない」

### 1コマ

エリアG、ラルドの屋敷から少し離れた場所にて・・・

フォスフォファイライト

「うーん、平和だね。ここが噂に聞く超危険地帯、エリアGだなんて信じられないよ〜」

スフェーン（ペンダント）

「ここへ来るまでに感じた魔物たちの気配を考えると、このエリアGが危険地帯だということに間違いはない。でも、この辺りにはあのラルドっていうラスボスがいるから、魔物たちも恐れて近づいてこないんじゃないかな」（汗）」

フォスファイ

「ラスボスっていうぐらいなんだから、強力な魔物たちを手下にして 居城を守らせていても不思議はないんだけど・・・。なんだかイメージしていたラスボスと違うな〜」（汗）」

スフェーン（ペンダント）

「たぶん・・・だけど、魔物に守らせる必要が無いんじゃないかな。桜つて子の話によると、あのラスボスの強さ・・・桁外れみたいだから・・・（大汗）」

フォスファイ

「なんにしても、あたし・・・あのラルドって人苦手だよ〜〜（汗）なるべく、近づかないようにしよう〜と（大汗）」

スフェーン（ペンダント）

『・・・・・・・・・・。・・・・ところでフォスファイ』

フォスファイ

「ん〜？（なあに〜？）」

スフェーン（ペンダント）

『フォスファイって・・・パロットのこと好きなの？（ぼそっ）』

フォスファイ

「なああああああ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜！！（どびっくり）」

効果音「ずがが〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ん！！！」

## 2コマ

スフェーン（ペンダント）

『・・・・・・・・・・（し〜ん）』      フォスファイの反応待ち

フォスファイ

「って、いきなり何を言い出すのかな〜スフェーンちゃんは〜（大汗）あ、あたしがパロットのことをどう思っているよ〜と    今の状況にはまったく関係ない・・・じゃないの？（どきどきどき）」  
（ど〜してそんなことを聞くのよ〜？）

スフェーン（ペンダント）

『確かに関係はないんだけど〜、ほんのちょっぴり・・・気になる

っっていうか~~~~(大汗)』

フォスファイ

「うう・・・、これまでこんな展開が無かったから油断してたな  
~~~~(大汗) え〜っと、嫌いじゃ・・・ないよ(えへへっ)」

スフェーン(ペンダント)

『やっぱり・・・好きなの?(うう〜)』

フォスファイ

「どちらかといえば好き・・・なんだとは思っけど(自分の気
持ちにあやふや?) それが恋愛感情かどうか聞かれれば、違うと
しかいいようがないかな~~~~。どう・・・安心した〜?(笑)」

スフェーン(ペンダント)

『ななっ!?(大汗) 別にそういうつもりで聞いたわけじゃ!!』

(あせあせ)』

フォスファイ

「あははっ、ごめんごめん(苦笑) え〜っとね、なんていうか・
・あたし恋愛に関しては、ちょこ〜っと普通じゃないのよ(ぼそ
っ)」

スフェーン(ペンダント)

『と・・・いうと?』(精霊界なんだから同性スキ〜もアリだよね
?)

フォスファイ

「あ〜・・・(同性とかじゃないんだけど) あたしの理想の相
手は・・・あたしの想像の中にしか存在しないんだ〜」

スフェーン（ペンダント）
『・・・・・・・・・・。・・・・はい？（どきどきどき）』

3コマ

フォスファイ

「長身長髪・・・一見美少女にしか見えない男の子で、髪の色は黒ときどき金」

スフェーン（ペンダント）

『ときどきって・・・、天気予報？（大汗）』

フォスファイ

「責任感が強くて優しいんだけど、それを表に見せないから勘違いされやすく。極端なめんどくさがりやで、あたしのこととはことん邪険にするような感じで〜」

スフェーン（ペンダント）

『そこまで妄想しているんだ・・・ある意味凄いな（どきどきどき）
』（誰かモデルにした人でもいるの？）

フォスファイ

「そんな想像と同じような人が現われない限り・・・あたしが誰かを好きになることはないと思うの（あははっ） 我ながら、変なヤツだな〜って思うんだけどね（苦笑）」

スフェーン（ペンダント）

『ふ〜ん、そうなんだ〜（う〜ん） つまり、フォスファイの理想を纏めると・・・ちょうどあの人みたいな感じ？』

フォスファイ

「そうそう、奇妙な仮面をつけているけど　まさにあんな感じ・・・
って、えええええっ!?!? (どきっ!!)」

突然の登場

ブルースピネル

「・・・・・・・・・・」　　ゆっくりと近づいてくる

フォスファイ

「う・・・そ、どういう・・・こと? うっっ!?!? (ずきっ!!)」

突然、左手の甲に激痛が走り、右手で押さえる

スフェーン(ペンダント)

「ちよっ、フォスファイ!? (大汗)」　(いったい、どうしたのよ!)

ブルース

「・・・・・・・・・・(じい~~~~っ)」　　少し離れた場所に立ち

止まってフォスファイを見つめる

4コマ

フォスファイ

「ま、まさか　　シヨ・・・(大汗)」

ブルース

「やはり・・・アリス(ぼそっ)」

フォスファイ

「・・・・・・・・・・(むかつ)」　　頭に怒りマークが浮かぶ(笑)

スフェーン（ペンダント）

『へ……、アリス？（大汗）』

フォスファイ

「また……アリス（むっ）　ここ最近、人のことをアリス、アリスって（いらいら）　あたしは、フォスファイライトであってアリスって名前じゃないの！（怒）　だいたい、アリスっていったい誰なのさー！ー！！（がああああ！！）」

スフェーン（ペンダント）

『アリス……。精霊神クリスタル　アウインの勇者シヨウのパートナーにしてその半身……。十四創神　天空神アメシストの力を受け継ぐ者にして、五千年前に存在していた人間界崩壊の原因をつくった裏切りの勇者……。ぼそっ（』

フォスファイ

「え〜っと、意味わかんない……。汗）　っていうか、スフェーンちゃん意外に物知りだね〜（びっくり）」

スフェーン（ペンダント）

『ふふっ、伊達に七百年も引きこもって情報を集めていたわけじゃない（ふふ〜ん）』

フォスファイ

「それって、威張れるようなことではない気が……。汗）　と、とにかく、あたしがその裏切りの勇者アリスっていいのなら人違い！　あたしはフォスファイライ……。へっ？（大汗）」
何かに気づく

ブルース

「氷槍・・・八寒地獄(ぶうゝん!)」
虚空より槍を取り出し、一振りして構える

フォスファイ

「ななっ、ちよちよちよー！ー！? (ひいひいっ!)」

ブルース

「・・・ふん!」
超速で氷槍を突き出す

効果音「びゅっ、ずががががっ・・・どっがががああああゝん!!」
凄まじい衝撃波がフォスファイの頬を掠め、後方で大爆発が起こる

フォスファイ

「・・・。。。。。。え?(大汗)」(きよろっ)
振り返ると数秒前と地形が変わっていた

スフェーン(ペンダント)

『や、やばい・・・(汗) あいつの強さ・・・五精霊クラスだ!(どびっくり)』

フォスファイ

「えっ!? (大汗) それって、つまり・・・(どきどきどき)」

スフェーン(ペンダント)

『人の強さを遙かに凌駕した 神の力を持つ存在・・・(ごくり)』

フォスファイ

「・・・神の(じいゝっ)」
ブルースを見つめる

ブルース

「さあ、おまえの力・・・試させてもらおうか（ギロリ）」
氷槍を構えて、フォスフィを睨みつける

フォスフィ

「う、うそー！ー！ー！？（涙）」（なんでそんな話にー！ー！）

効果音「どががー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

コメント

神様クラスの怪物とレベル6の戦士・・・マジバトルの開始です

第155話 フォスファイ絶体絶命!?

4コマ劇場 アイオライト―515・・・2011/05/15
シリーズ3

タイトル「フォスファイ絶体絶命!？」

1コマ

エリアG、ラルドの屋敷にて・・・

効果音「どがががっ！ どっごお〜ん！ ずぞ〜ん！」

スファレライト

「って(びくっ！) な、なにと〜ん！？(どびくっ)」

「

ラルド

「あのバカ・・・(怒) どうやらおっぱじめやがったようだな(舌打ち) おい、へっばこ勇者・・・。これはお前たち四聖界側の問題だ・・・。責任を持って止めて来い(ギロリ)」

ダイ

「ぬ？ 止めるって・・・何をだ？(汗)」「それと、へっばこい
うな！」

ラルド

「いま暴れているのはおまえたちの仲間・・・。超龍神リンウイ
ツクのマスター・・・ブルースピネルだ(ぼそっ)」

レイチエル

「あうっ！ た、大変！！（大汗）」

ダイ

「あんなヤツ、仲間じゃないね！（ふん！）」
一方向的にライバル視しています

レイチエル

「ちよっ・・・ダイ」（苦笑）「（まあ、そんなこと言わないで・・・）」

ダイ

「なんでオレがあんなヤツの行動に振り回されなくっちゃいけないんだよ！ いったい何をしているかは知らないが・・・オレには関係ないね！！（うがーーーーー！！）」

ラルド

「・・・おいグランゾル（ぼそっ）」

グランゾル（ぬいぐるみ型）

『は、はひっ！？（びくっ！）』

ラルド

「マスターの教育・・・なってないようだな」（じいっ）
どうなっているんだ、ええ~~~~！！（怒）」

グランゾル（中型形態）

ぬいぐるみ型から中型形態（鳳凰

型）に変化（ぼむっ）

『い、今すぐ連れて行って、止めさせます！！（がしっ）』
鉤爪でダイの肩を掴み、王空へと舞い上がる

ダイ

「って、グラン！ 何しやがる！！（大汗）」

グランゾル（中型形態）

『黙れ！（がああああ！） ブルースのヤツを止めないと・・・我々が殺されるぞー！！（がたがたふるふる）』

ダイ

「いつている意味がわかんねえぞ！！（こらーーーーー！）」

密林の中へと消えていく

レイチエル

「あうう・・・（汗） ダイだけじゃ心配だから、わたしたちも行くのか・・・アルフォーニ（ぼそっ）」

アルフォーニ（中型形態）

ぬいぐるみ型から中型形態（麒麟型）に変化（ぼむっ）

『そうですね（苦笑） あの二人に任せておくと、止めるどころか・・・いつの間にかブルースたちと戦っているかもしれません・・・（大汗）』

スファレ

「信用ないんだね。あんたんとこの主人公・・・（大汗）」

ダイは『超獣神グランゾル』の主人公です（笑）

効果音「ずががーーーーーん！！！！」

2コマ

エリアG、密林にて・・・

ブルースピネル 氷槍八寒地獄による怒涛の攻撃！

「ふん！（びしっ！）」 大地が裂ける

フォスファイライト

「ひゃっ！（ひよい）」 辛うじてかわす

ブルース

「せいやっ！！（ぶうううんん！）」 巨樹の幹が根元から両断される

フォスファイ

「あわわっ、どっしえー！ーっ！（大汗）」 倒れてくる
巨樹を横っ飛びして避ける

ブルース

「はあああああつ！ 八寒地獄・・・尼刺部陀！！」 鋭い
氷刃が無数に現われ、フォスファイめがけて放たれる

フォスファイ

「尼刺部陀・・・、ニラブタって何！？（うにゃー！ーっ！）」
倒れたままパニック状態

スフェーン（ペンダント）

「わわっ、わあああー！ー！ー！！（大汗）」（危なっ！）

効果音「ぶおおおん！ かつかつ！！」 フォスファイの目

の前に光の壁が出現して、迫ってきていた氷刃を遮断する

ブルース

「ほお、竜族・・・（ふふっ）」（まだ卵のようだが・・・）

フォスファイ

「す、スフェーンちゃん!? (どびっくり)」「(こねって、精霊力のシールド?)」

スフェーン(ペンダント)

『フォスファイ・・・逃げるよ!!! (叫び)』

フォスファイ

「えっ、逃げるの?(大汗)」

スフェーン(ペンダント)

『こんな非常識な強さのヤツに勝てるはずがない・・・。このままじゃ、間違いなく殺される! でも、なんとかラスボスの屋敷まで戻れば・・・助かるかもしれない!! (大汗)』

フォスファイ

「え〜っと、スフェーンちゃんが協力してくれて、聖剣クリソベリルを光竜剣スフェーンファイアにしてくれたらなんとかなるんじゃない?(あの剣、威力凄かったし) 温泉に入ったんだから、もう体力回復しているんでしょ!?(あせあせ)」

スフェーン(ペンダント)

『むり、ムリ、無理!!!!!! (涙) 聖剣クリソベリルは光竜の中のベリル一族の精霊力を結晶したものだから、刀身がある状態でわたしの力は通用しないの!!!!!! (叫び)』(力がかき消されちゃう!)

フォスファイ

「そ、そんな〜!!! (涙)」

スフェーン(ペンダント)

『それに、わたしが力を貸したところでコイツには・・・あっ、フォスファイー!!(どびっくり)』 何かに気づく

フォスファイ

「え・・・(どすっ) うぐっあああああー！っ!? (ずぎー！っ！)」 突然、左肩に激痛が走る

ブルース

いつの間にかフォスファイの目の前にいる

「・・・」 氷槍の切っ先をフォスファイの左肩に突き刺している

3コマ

フォスファイ

「ううっ!(痛っ!) こ、こいつ・・・もしかして冒険者殺し!? (ひい!)」

ブルース

「ふっ(にやり) ……(ずん、ひよいつ)」 氷槍を深く突き刺し、力を込めてフォスファイごと真上に持ち上げる

フォスファイ

「あああああ!! (大激痛)」

ブルース

「・・・ (フォスファイから流れ出た血が顔に降り注ぐ) はあああっ!! (ぶううううん!)」 氷槍を地面へと振り下ろす

効果音「ぐわつどがああああああー！ー！ーん！ー！」
凄まじい勢いでフォスフィの身体を地面に叩きつける

フォスフィ

「か・・・は・・・（げほっ）」 全身から血が噴き出し、その激痛から意識を失う

スフェーン（ペンダント）

『フォスフィー！ー！ー！！（叫び） フォスフィ、しっかり！（フォスフィの状態を確認中〜） う、嘘でしょ・・・（ごくり） パツと見ただけでも手足が うっん、全身の骨が砕け、出血の状態や身体機能の低下から間違はなく内臓も傷ついている。でも回復が追いついてない・・・。フォスフィの自己治癒能力だけじゃ、この怪我を治しきれない！！（大汗）』

ブルース

「あゝっはっはあゝ（声にしかただけで笑ってはいません） いわゆる、瀕死状態ってやつだな・・・（ぼそっ）」 すごく冷静

スフェーン（ペンダント）

『なっ！？（怒） フォスフィ・・・しっかり！ フォスフィー！ー！ー！！（叫び）』

フォスフィ

「・・・」 ピクリとも動きません

スフェーン（ペンダント）

『フォスフィー！ー！ー！！（叫び）』

ブルース

「……………ん？（ひょい）」 不意に見上げる

突然の登場

ダイ グランゾル（中型形態）から飛び降りる

「ブルーーーーーッス！！（ひゅ~~~~~ッ） うごっ！？（ぐしゅっ）」
地面に叩きつけられて瀕死状態？

ブルース

「……………（じいっ）」 瀕死で血だらけのダイを見つめる

ダイ 全身血だらけだけど完全復活

「てめえ、現地の人を攻撃するなんて、いったい何を考えてるんだーーーーー！！（激怒）」 牙龍鳳翼剣を抜刀する

ブルース

「……………このように、瀕死状態になっても一瞬で回復しないのか……………その娘は（ぼそっ）」

スフェーン（ペンダント）

『当たり前じゃーーーーー！！（激怒） そんな非常識なヤツ（ダイ）と一緒にするなーーーーー！！（うぎゃーーーーー！！）』

4コマ

暗闇の中にて…………

?????

『フォス…………、しっかり！…………スフィー！！（叫び）』

フォスファイ? なぜか素っ裸で寝ています (睡眠中のイメ
ージです)

『うう〜ん、なんだ〜? (うとつと) うるさいな〜 (ふ
あ〜〜つ)』

???

『フォスファイ、死んじゃダメ! (汗) お願い・・・死なないでー
ー! (涙)』

フォスファイ?

『うう・・・、もう少し寝かせてよ〜 (ねむねむ) できれば
あと1時間ほど・・・ (ぼそっ)』

???

『フォスファイさん! あう、どうしよう・・・ (汗) ダイがこ
んな大怪我することなんて無いから、蘇生系のアイテム持ってない
! (大汗) フォスファイさん、気を確かに!! (ゆさゆさ)』

フォスファイ?

『ちよつ、こんどは別の人がやって来て身体を揺すりはじめた・・・
。 いつたい、なんだっていうの〜もあ〜 (ねむねむ)』

???

『フォスファイ・・・お願い、目を覚まして・・・。こんなところで
死んじゃダメだからね!! (うわあああ〜ん)』

フォスファイ?

『・・・ (いらいら)』

???

『フォスファイさん、フォスファイさん!! (しっかり!)』

エリアG、密林にて・・・

効果音「がばっ!!」
突然、血だらけのフォスファイが上半身を起こす! (もちろん裸ではありません)

フォスファイ?

『だああああ、もおうるさい! フォスファイって人・・・、さつきから呼んでますよ!! (怒)』

スフェーン(ペンダント)

『え・・・(どびっくり)』

啞然

レイチエル

「あ、あうっ・・・気がついた(大汗)」(しかも、意外と元気)

フォスファイ?

「ん~~~~(ぼお) なんだレイチエルか、久しぶりだね~~~~。と・・・いうことで、あと3時間は・・・おやすみなさい(ばたり)」

スフェーン(ペンダント)

『ちよっ、フォスファイ!? (なにがどうなって!) しかも、凄まじい自己治癒で、フォスファイの怪我がみるみるうちに治っていく! (うそそそ~~~~!!)』

フォスファイ?

「って、なんだこのペンダント・・・? っていうか、竜族の卵が・・・入ってる?(なんで?) ... (ぼお~~~~っ) うっ

ん……、まあ起きてから考えればいいか……（ふああああ）
……というわけで、あと5時間……（すやすや）「

レイチエル

「あはは、時間が増えてますよ……」（苦笑）
「というより、この口調って……」（もしかして？）「

スフェーン（ペンダント）

『うわあああくん！ フォスファイ……、良かったよ……！！
（大泣き）』（そのまま死んじゃうかと……）

フォスファイ？

「……（いらいら） ああああ、もぉ！（がばっ） なん
だか知らないけど、そのフォスファイって人……どこにいるのさ！
！（があああー！ー！！）」

スフェーン（ペンダント）

『フォス……ちよっ、どうしたのよフォスファイ！（大汗）』（頭
でも打った！？）

フォスファイ？

「ふわあああ（ねむねむ） はいはい起きれば良いんでしょ）
ゆっくりと立ち上がる）……ったく、人がせつかく気持ちよく
眠っていたっていうのに……（すうー、ふうふうくん！）」

瞬時に聖剣クリソベリルを抜刀してかまえる

効果音「かきー……ん、ががががっ！！」 氷槍の強烈

な一撃を、聖剣クリソベリルが軽やかに受け止める

ブルース

「！！！！（びっくり）」 まさか受け止められるとは思って
なかった

フォスファイ?

「……………（じい〜っ） う〜ん……………シヨウ?（はてな?）
いや、その仮面……………たしかブルースだったっけ?（う〜ん）」

ブルース

「……………（さつと距離を取る） ふっ、やっと目を覚ましたよ
うだな……………（にやり）」

フォスファイ?

「って、目覚めにいきなり襲われるなんて、あんたにそんな恨まれ
ることした覚えは……………いや、あるか〜?（う〜ん）」

スフェーン（ペンダント）

『……………あ〜、フォスファイ?（ときどきどき）』（いったい何がど
うなってる?）

フォスファイ?

「あ〜、フォスファイってあたしのことを言ってたのか〜（なるほ
ど〜） だったら……………完全に人違いだね（ふふ〜ん）」

スフェーン（ペンダント）

『……………（大汗）』（人違い?）

フォスファイ?

「あたしの名前はアリス……………（ぼそっ）」

スフェーン（ペンダント）

第156話 目覚めた伝説の勇者・・・

4コマ劇場 アイオライト―516・・・2011/05/22
シリーズ3

タイトル「目覚めた伝説の勇者・・・」

1コマ

エリアG、密林にて・・・

スフェーン（ペンダント）

『アリスって・・・あのアリス!?（どびっくり）』

アリス 見た目はフォスフィ

「どのアリスかは知らないけど、おそらくそのアリス（あははっ）」

┌

スフェーン（ペンダント）

『そ、そんな・・・（大汗） フォスフィがあのアリスで・・・それに、生体波長も全然変っちゃってるし!!（ありえないって!）』

アリス（フォスフィ）

「あゝ、いまいち状況が掴みきれていないんだけど（苦笑） レイチェルたちがいるってことは・・・ここつてもしかして四聖界?（大汗）」（いつの間に来たんだろ?）

スフェーン（ペンダント）

『いやいやいや、ここは精霊界第四聖界クリスタル・・・って、フォス!?（大汗）』 危機に気づく

ブルースピネル

「はあああー！ー！ー！！（しゅしゅっ！！）」
氷槍

八寒地獄をアリス（フォスフィ）めがけて突き立てる

効果音「かん！ ががががががががが！！」
氷槍の刃先はアリスを覆う半球状の精霊力の壁に弾かれる

アリス（フォスフィ）
「……………」

ブルース

「ちい！（たたっ！）」
後方へ飛び退いて距離を取る

スフェーン（ペンダント）
『えっ？ これって無意識のうちに物理攻撃のダメージを軽減させる……精霊力シールド！？ す、凄いや！ こんなに完璧なシールドを展開できるなんて……（どびっくり）』
説明口調

アリス（フォスフィ）
「ふっふっん、この防御壁の名前はA・T・フィールド……（ぼそっ） 精霊力シールドなんて単純な名前で片付けてほしくないわね」

スフェーン（ペンダント）
『え、エ〜ティ〜フィ〜ルド！！ か、かつこいい〜』
（すっつ）

アリス（フォスフィ）
「あ……（汗）そこは笑うところ……なんだけど（大汗）
もしくは、つつこみを入れてくれる……とか？（どきどきどき）」

「

スフェーン（ペンダント）

『はい？（なにが？）』

2コマ

アリス（フォスフィ）

「ところで……、いったいどういつもりなのかな？……ブルース？（ふふん）」

レイチエル

「あう、そうだよブルース……。どうしてフォスフィさんに攻撃するの……？」

ブルース

「……（じいっっ）」
無言でアリスを睨みつけている

ダイ

「おいこらブルース！ 黙っていないで、なんとか言ったらどうだ！！（がああああ！！）」

ブルース

「答える必要など……ない（ぼそっ）」

ダイ

「て、てめえええええ！！（激怒）」

アリス（フォスフィ）

「うん……、どうしようか……（苦笑）」

ダイ

「あゝ、オレに聞くな・・・（大汗）」

アルフォーニ（ぬいぐるみ型）

『グラン・・・、彼女の変化って・・・（ぼそっ）』

グランゾル（ぬいぐるみ型）

『ああ・・・。あの生体波長・・・、間違いなくアウインの勇者アリスだな・・・（大汗）』（いったいどういうことだ？）

ブルース

「ふふっ・・・（微笑） 行くぞ、リーン（ぼそっ）」

リーンウィック（ぬいぐるみ型）

『・・・（ううん）』 陽炎のように姿を消す

ブルース

「はあゝゝっ！（ぶんぶんぶん） 来い・・・リーーンウィック！（叫び）」 氷槍八寒地獄を振り回し、切っ先を天に向けて突き上げる

説明文「ブルースの身体から稲妻が発生し、氷槍八寒地獄を伝って上空へと放たれる。空には雷雲が広がり、巨大な魔方陣のような紋様が浮かび上がり、限りなく生体に近い巨大な機械（聖獣機）の龍が現れた」

リーンウィック（聖獣機）

『があぎゃあああああ！！（雄叫び）』

地上へ向けて急降下

ブルース

「とう!!」
光に包まれてリンウィックの額にある宝石に
身体が吸い込まれる

ダイ

「つて、ブルース、てめえ!! (怒)」

レイチエル

「あうっ、ダイ・・・ブルースを追いかけましょ! (汗) 彼、フ
オスフィさんへの攻撃、まだ諦めていないみたい!! (大汗)」

ダイ

「そ、そうだな・・・ (汗) ブルースのアホがフオスフィ・・・
とやらを傷つけでもしたら、今後、この時代で時空族の遺産を探し
づらくなる (大汗) 不本意ではあるが・・・ブルースも四聖界勇
者隊 (オレたちの仲間) だからな・・・ (ぼそっ)」

レイチエル

「あうっ (こくり) 急ぎましょ!! (たたっ)」

4コマ

ラルドの屋敷にて・・・

スファレライト 外で空を見上げている

「えっ・・・、ちよっ、なにあれー! (どびっくり)」

美咲

「こことは違う時空・・・。四聖界の一つ応龍界を守護する神
超龍神リンウィック (ぼそっ)」

スファレ

「そ、それって・・・レイチェルの乗っていたヤツと同じ 超獣
神とかいうやつ!?」(大汗)「(異世界の神様だよね!?)」

美咲

「はい・・・。ですが今はそんなことを驚いている場合ではありません
せん(どきどきどき)」

スファレ

「・・・はい?(なにが?)」

アメトリン

「ね、ねえ・・・アクロ(汗) あそこに浮かんでるのって・・・
(大汗)」 リーンウィックの近くの空を指差す

アクロアイト

「な、なあああああ!?(大汗)」 軽くパニック

桜 (フローライト) 三歳児姿

「ああ、フォスフィお姉ちゃんだ〜〜 (やほ〜〜)」

リーンウィック

『殺す・・・(ぼそっ)』

アリス(フォスフィ)

「・・・ちっ(汗)」(追って来ちゃったよ・・・)

アメトリン

「ちよっ! なんでフォスフィ・・・飛んでるのよ!!」(汗) 人
が飛ぶなんて・・・ありえないでしょーーーーが!?(涙)」

アクロアイト

「いや……(汗) 他の精霊界に住む精霊族の中には飛ぶことのできる者もいると聞くが……(大汗)」

アメトリン

「それにしたって、レベル6のフォスフィが飛べるはずないでしょ
!!!(泣)」「(うにゃーーーー!!)」

美咲

「あ……(汗) これって『最強の勇者はヒーラーでレベル1
じゃなく……完全に『Crystal Legend』か『超獣
神グランゾル』の展開ですよね……(苦笑)」

桜 (フローラ)

「あはははっ (苦笑) この先……、どうなるのかな……
どきどきどき)」

効果音「ずががーーーーーん!!」

コメント

あゝ、早く王都へ戻らないと、次の話に進まないんだけどな……
(苦笑)

第157話 非常識な戦いは置いといて

4コマ劇場 アイオライト―517・・・2011/05/26
シリーズ3

タイトル「非常識な戦いは置いといて」

1コマ

エリアGの上空にて・・・

ブルースピネル（声だけ） アリスを追ってきた

『リンウィック・・・バトルモード・チェンジ!!』 聖
獣機のリンウィックに乗っている

リンウィック

『オオオオーーーーッ!!（ガシャン、ガシャン!!）』

ありえない変形をして、騎士型の巨大ロボット・・・超獣神となる!

ブルース（声だけ）

『超龍神リンウィック・・・ここに見参!!（びっし!）』
リンウィックがかっこよくポーズを決めている

スフェーン（ペンダント）

『また出た・・・巨大ロボット!?（どびっくり）』

アリス（フォスフォライト）

「うん、しっこいな〜」（苦笑） ところで、ブルース?（ぼそっ）」

ブルース（声だけ）

『命乞いなら聞く耳持たない・・・』

氷槍八寒地獄をかまえる

アリス（フォスフィ）

「いや・・・（汗） 確か超獣神って、バトルモードになったら飛べなかったんじゃない？・・・なかったっけ？（大汗）」
うる覚え？

ブルース（声だけ）

『・・・ぬ？（ふわっ）』（そういえば・・・）

リンウィック

『ぬおわああああー！』（涙） ぶ、ブルース、なんとかしろー！？（ひゅ~~~~っ・・・）』
自由落下開始

ブルース（声だけ）

『うむ、そんなこといわれても~~~~（大汗）』

リンウィック

『ちょー！？（ひゅー！）』
徐々に落下スピードが上がる（笑）

2コマ

ラルドの屋敷前にて・・・

美咲 上空の様子を見ている

「あ、ブルースさん・・・よっぽど慌ててるんでしょうか」（汗）
聖獣モードにチェンジしなせば、戦闘力は落ちても普通に飛べるのに・・・（大汗） あ、追いついてきたグランゾルさん（聖獣機）の背に飛び乗った」（苦笑）」

スファレライト

「おお〜〜、三体目の巨大機械の登場 今度のは怪鳥か〜〜

」
グランゾルは鳳凰です

パロットクリソベリル

「って、いったい何が起こっているのか・・・誰かオレに説明してくれー！ー！ー！！（うにゃー！ー！ー！）」

ラルド

「ふっ・・・、親切丁寧に説明されても お前たちの頭（常識）では理解できんぞ（異次元でもトップクラスの戦いだ） まあ〜、あいつらのことは放っておけ。この物語『最強の勇者はヒーラーでレベル1』には関係ない出来事だ・・・。そんなことより、パロットクリソベリル・・・だったな？ 桜からの報告によると・・・竜族の卵を手に入れる際、全聖界に二振りしかない聖剣クリソベリルを砕いたそうだな（ギロリ）」

桜（フローライト） 三歳児姿

「くだいた〜〜（にこ〜っ）」

パロット

「うぐっ・・・（汗）」 鉄球に押し負けた

ラルド

「聖剣クリソベリルに認められていない・・・アウインの勇者でもないヤツが使うから、そういうことになるのだ（はあ〜）」（やれやれ）

ジェムシリカ いまだ、かくんを抱っこしている

「いいえ、フローラ 桜ちゃんの話によりますと、砕けてしまう

直前、パロットくんは聖剣に認められた・・・そうです」

ラルド

「砕けてしまっただけは意味がないだろう・・・(ぼそっ)」

シリカ

「それは・・・そうなんですが(どきどきどき)」

3コマ

ラルド

「とにかく・・・だ。まずは、聖剣クリソベリルの復元をすることが必要な(ふむ)」

パロット

「復元・・・できるのか!(どびっくり) クリソベリルは普通の剣じゃ無いんだろ!？」

ラルド

「ああ(にやり) 聖剣クリソベリルの刀身は、光竜の精霊力を数千数万単位で結晶化させたものだ。通常の方法では創り出すことなどできない・・・。だが、聖剣クリソベリルがこの世に存在している以上、その復元もまた可能なはず・・・。まあ、そう簡単ではないがな(ぼそっ)」

パロット

「聖剣クリソベリルの復元・・・。それが上手くいけば、リウムさんに殺されずにすむ(おお)」

スファレ

「でもさ、パロット。あんた、スフェーンちゃんの力を借りて、光

竜剣スフェーンファイアを手に入れたんじゃないっけ？」

ラルド

「・・・ほお〜」（面白そうな話だな・・・）

パロット

「あゝ、あれはダメだな・・・（汗） クリソベリルにも劣らない強力な剣ではあるが、使うにはスフェーンの協力が必要になってくる。ある意味、協力者の気分次第で使えたり使えなかったりするよ。うなモノを武器とは呼べない。それにスフェーンファイアの刀身は、いくなればスフェーンの生命力を具現化したもの・・・。万一、武器破壊なんて事態にでもなれば、スフェーンの命が危なくなってしまう」

スファレ

「パロットはよく武器を壊すからね〜〜」

パロット

「うお〜い！（怒）」（いったい誰の所為だ！！）

4コマ

スファレ

「で〜、お師匠？ その聖剣クリソベリルを復元する方法って〜」

パロット

「ちょっと待ってくれ・・・。確かにクリソベリルの復元も大切だが、オレには何を置いてでもやるべきことがある」

スファレ

「それって・・・」

パロット

「もちろん、シリカさんの身体を治すことだ」

シリカ

「パロットくん……（じいじいん）」

パロット

「フローラのおかげ（三歳児化）でシリカさんの体調は回復したように見えているが、完全に治ったわけではない。というより、時空力とやらの力で病状の進行を遅らせているだけで、命の危機が回避されたわけではない。なにより、視力もまだ戻ってはいない……。まずは、シリカさんの身体を治す方法を見つけることが先決だ」

ラルド

「それについては問題ない……。極端に桜と離れない限り病状が悪化する心配はない。体細胞ごと時間停止しているわけだからな」と、いうわけで、まずは聖剣クリソベリルの復元を優先させる……。ぼそつ）これ以上はネタバレになりそうだから詳しくは言えないが……。その娘の身体を治すには、聖剣クリソベリルが必要だ（ぼそつ）」 たぶん言っていることは適当です（笑）

パロット

「ななっ！ それってどういう意味（大汗）」（治す方法を知っているのか!?!）

ラルド

「なんにしても……。だ。クリソベリルを復元するためには、光竜の中でも最強の力を持つベリル族の協力が必要となる」

パロット

「ベリル・・・族？（汗）」（そういえば、スフェーンが何か言っ
てたな・・・）

ラルド

「四聖界にいるミントベリルでも問題はないが・・・ここは聖剣ク
リソベリルを生み出した光竜に会うべきだろうな・・・（ぼそっ）」

スファレ

「聖剣を生み出した・・・光竜！？（どびっくり）」（凄っ！！）

ラルド

「そう・・・（ふふっ） 幻獣たちの長にして、元・十四創神の幻
獣神でもある竜族・・・。聖剣クリソベリルを復元させるためには、
光竜アレキサンドライトを捜し出すことが必要だ！！（叫び）」

効果音「ずががーーーーーん！！！」

コメント

上空での激しい戦いは、アリス（フォスフィ）が押しています

第158話 光竜アレキサンドライトの行方

4コマ劇場 アイオライト―518 2011/05/
28

シリーズ3

タイトル「光竜アレキサンドライトの行方」

1コマ

エリアG、ラルドの屋敷前にて . . .

パロットクリソベリル

「聖剣クリソベリルを生み出した . . . 光竜アレキサンドライト（
ごくり） そいつに会えば、刀身が砕けた聖剣クリソベリルが復元
できるってことだな」 説明口調

ラルド

「その可能性がある というまでだ。確実に復元できるかどうか
は . . . ヤツに頼んでみないとわからん（ぼそっ）」（偏屈なヤツ
だからな、素直に頼みを聞いてくれるかどうか . . .）

パロット

「シリカさんの身体を治すためにクリソベリルが必要だというのな
ら、なんとしてでも復元してもらうまで . . .（うん） それで、
その光竜アレキサンドライトは どこにいるんだ？」

ラルド

「知らん」

パロット

「……………あ？（大汗）」（し、知らん……………は

ラルド

「シヨウとアリスが聖剣を手にしたときは、精霊界第一聖界スフェーンにいたらしいが 五千年が経つたいまとなつてはどこにいることやら……………（うゝん）」 こちらのスフェーンは聖界名

パロット

「ちよつ、アレキサンドライトの居場所がわからないなんて…………… いったいどうするんだ！（汗） ラスボス権限で、なんとか居場所がわからないものなのか！？（大汗） あんた、ラスボスなんだろ！！（どきどきどき）」

ラルド

「ラスボスラスボスと連呼するな、このバカモノめが……………！（怒） この聖界……………本気で滅ぼしてやろうか！！（があああ！！）」

パロット

「ひっ！（びくっ！）「……………ごめんなさい！！（涙）」（この人、リウムさんよりおっかねえ）」

ラルド

「お前らも、いつまでじゃれ合っているか……………！！（だだっ！）」 左腕を上空に向けたとたん、手から凄まじいエネルギーが放たれる

効果音「しゅ……………っ……………ぴかっ！ どつどつどつおおおおおー……………ん……………！！」 上空で大爆発が起こる

アリス(フォスフォファイライト)

「あんぎゃー……(ひゅ……)」
黒焦げになって落
下中

リンウィック(ブルース)

「……げふっ(ひゅ……)」
同じく黒煙を吐きながら降
下(笑)

グランゾル(ダイ)

「どっしえー……(ひゅ……)」
錐揉み状態で操作
不能(爆)

アルフォーニ(レイチエル)

「あ、あう……(大汗)」(あ、あぶな……)
一人だ
け難を逃れた

パロット

「ええー……っ!(どびっくら)」「っ、瞬殺かよ!?

2コマ

数分後……

アリス(フォスフィ) 黒焦げですが平然としています

「っ、おじい……ちゃん!いきなり何するのよ!!(涙)
下手すりゃ死んじゃうでしょー……!!(があああ!!)」「

ラルド

「やかましい!(怒)それに、おじいちゃんじゃない……お兄
ちゃんと呼べ!!(ずがが……ん!!)」「
久しぶりの
やり取りなので、少し嬉しい

アリス（フォスファイ）

「2年以上も生きてるくせに、何がお兄ちゃんかーーーーー!?
（わぎゃーーーーー!）」
実際は2万年どころの話はありません

アクロアイト

「……………（大汗）」

ハックマナイト

「い、いったい何がどうなって（おろおろおろ）」

アメトリン

「え〜つと、フォス・・・ファイ?（どきどきどき）」

アリス（フォスファイ）

「……………（じい〜〜〜つ）・・・誰?（はてな?）」

アメトリン

「ちよーーーーー!? どうしたのよフォスファイ! なんだか、霧
団気が全然違うよーーーーー!!!（汗）」

スフェーン（ペンダント）

『あゝ……。どうやら重傷を負って死にかけてことが原因で、前
世での人格が表に出てきちゃってるみたい……。』（大汗）』

アクロ

「なっ!?!（どびっくり）」

アリス（フォスファイ）

「は？ 前世での・・・人格？（なんだそれ？）」

ラルド

「アリスよ・・・。鏡で自分の姿を確認してみる（ぽいつ）」
手鏡を投げ渡す

アリス（フォスファイ）

「ぬ？（ひょいつ）・・・って、なんじゃこりゃー！ー！ー！
！？（誰だよこいつ！！）」

鏡に映ったのは当然フォスファイ

効果音「ずががー！ー！ー！ー！ー！ー！ん！！！」

3コマ

美咲

「と、いうわけで・・・。アリスさんがショウウさんと消滅して人間界が滅亡してから、約五千年も経過しているんですよ（苦笑）」

アリス（フォスファイ）

「なるほど。ここは桜が元いた時間帯だと・・・（ちらり）」
1度だけ来たことがある

桜（フロアライト）

「アリスお姉ちゃん、こんにちは〜」（ぎゅ〜っ）「ア
リスの足にしがみつく

アリス（フォスファイ）

「それで、元人格であるフォスファイライト・・・てか、言い
難い名前ね（苦笑） そのフォスファイってのは、あんたらとドラ
ゴンファンゲってパーティを組んでいると・・・」

アクロ

「そ、そういうことだ・・・（大汗）」（ほ、本当にフォスファイじやないのか？）

ハツケ

「おいおい、アリスってアレだろ？ この聖界の創造神でもある精霊神クリスタルのパートナーにして最強と謳われた伝説の勇者！？（大汗）」

アメトリン

「うん（じくり） 通称・・・裏切りの勇者（ぼそっ）」

アリス（フォスファイ）

「裏切りって・・・（苦笑） えらい言われ様だね～～（まあいいけど） そんなことより、あなた・・・パロットとかいったわね」

パロット

「あ、ああ・・・（びっくり）」

アリス（フォスファイ）

「聖剣クリソベルルを壊して、それを復元させるために光竜アレキサンドライトを捜しているって聞いたけど」

パロット

「なっ、アレキサンドライトの居場所を知っているのか！？（叫び）」

アリス（フォスファイ）

「ここが五千年後の世界だっていうのなら、あたしが知っているわ

け無いじゃない (あははっ) 「

パロット

「だったら聞くなーーーーー！！！！(しびやーーーーー！！！！)」
期待させるなーーーーー！！！！)」

4コマ

アリス(フォスフィ)

「まあまあ、落ち着け少年……(ぼそっ) 「

パロット

「しょ、少年って……(大汗) 「

アリス(フォスフィ)

「確かに、この時代のアレクがどこにいるかあたしは知らないけど、居場所を知っていきそうなヤツは知ってるよ」 「

パロット

「ほ、本当か！？(汗) 「

アリス(フォスフィ)

「ねえ、ちびっ子桜)。確かこの時代には、大人バージョンのアクアちゃんがいたはずだよね？」 「

桜 (フローラ)

「お城にいるよ……(こじこじ) 「

スファレライト

「アクアちゃん……って、マリンスマのこと (るん) 「
アクアに惚れています

アリス（フォスファイ）

「アクアはアレキサンドライトの息子だから、居場所ぐらい知ってるんじゃないかな？ たぶんだけど……（汗）」

パロット

「おお〜〜〜っ」

ラルド

「ふむ……、確かにその可能性はあるな。よし、パロットよ。まずはアレクの息子……光竜アクアマリンに会いに向え！！」

パロット

「はい！！（ぴしっ）」 おもわず姿勢を直す

ラルド

「そして、スファレは経験値を上げないよう努力するしろ（ギロリ）」

スファレ

「ええー……っ！ まだその縛り……有効なの……
ー！？（うにゃー……！！）」

効果音「ばきゅー……ん……！！」

コメント

ちなみに、ミントベルルはアクアの母親です（アレクとは別居中）

第159話 特に大きなイベントはありません

4コマ劇場 アイオライト―519・・・2011/05/31
シリーズ3

タイトル「特に大きなイベントはありません」

1コマ

ルチルクオーツ王都、南街地区にて・・・

スファレライト

「ふう〜・・・（やれやれ） やっと戻ってこれたね〜（苦笑）」
（疲れた〜）

パロットクリソベリル

「では、さっそくルチルクオーツ城へ出向き、アクアマリンに光竜アレキサンドライトの居場所を聞いて〜」

ジェムシリカ

「ちよつと待ちなさい。まずは、ユークレースの事務所へ行ってシトリンさんに報告でしょ？」

パロット

「ふっ、そんなの（報告は）、調査部のアンバーに任せておけばいい・・・。なあ〜アンバー」

アンバー

「って、トップ代行のお前に報告しないで、いったい誰に報告しろっていうんだよ！（汗） お前はもう少し調査部のトップ代行としての自覚を・・・（大汗）」

パロット

「あゝ、じつは今回の冒険へ出る前に人事異動があつてだなゝ（汗）
オレは調査部の正式なトップとなつて・・・その代行をチャロア
イトに任せることになつたんだ（苦笑）」

アンバー

「・・・はあ？（汗）」（なんだそれ・・・）

パロット

「つまり、お前の直接的な上司はチャロアイトということになる・・・
（ぼそっ）」（お前は一般メンバーな）」

アンバー

「つていうか！ お前が調査部のトップであることには変わらないだ
ろー！ー！ー！が！ー！ー！ー！うがー！ー！ー！ー！ー！」

パロット

「まあゝ、そつじつとに・・・なるのか？（どきどきどきどき）」

シリカ

「当然です・・・（怒）」（ちゃんとギルドマスターへ報告しにい
きなさい！）

2コマ

スフェーン（ペンダント）

『へえゝ、ここがルチルクォーツ王都かゝ』

アリス（フォスフィ）

「ふゝん・・・（きよろきよろ）」『桜のひみつ』で来たときはお

城しか見なかったけど・・・なかなか活気のある良い都じゃないの

「アメトリン

「あゝい（汗）　ここって、あなたの生まれ育った都だよ～～～）
大汗）」

アリス（フォスファイ）

「うゝん、そういわれても・・・なゝ）どきどきどき）　ところで、
あなたたちはドラゴンファングの拠点を探り出すってことでよか
つたんだっただけ？」

レイチエル

「あうゝ　お泊り～～～）　（にこゝつ）　」

ダイ

「結局、スファレが持ってた時の宝珠は、オレたちの探していた時
空族の遺産じゃなかったんだ。つまり、まだこの聖界で時空族の遺
産を探さないといけないわけだ。それまでの間、オレとレイチエル
はドラゴンファングに面倒かけることとなる（ぼそっ）　」

アリス（フォスファイ）

「カナリーとブルースは、おじいちゃんのとこへ残ることにしたら
しいからなゝ。ねえアクロゝ・・・（だったよね？）　二人ぐらい
ならドラゴンファングの拠点に泊める余裕・・・ある？」

アクロアイト

「ギルドに泊めることは問題はないがゝ・・・。一応、ドラゴンフ
ァングの仮メンバーになってくれるということでもいいのか？（大汗）」

ダイ

「時空族の遺産が見つければ、即行で別の聖界へ向うつもりだが・
それまでの間なら仮メンバーにしてもらってもかまわないぜ」

レイチエル

「あう、ギルドの仮メンバー（にこっ）」

アクロ

「じゃあ、決まりだな　ダイ、レイチエル・・・、これからよろ
しく頼む（すう）」　手を差し出す

ダイ

「ああ、いつまで仮メンバーにいられるかわからないけどな（ぎ
ゅっ）」　握手をする

レイチエル

「あう、みんなよろしくね（にこっ）」

3コマ

美咲

「アリスさん、ダイさん、レイチエルさん（ごくり）　ドラゴンフ
ァング側の総合力がかなり上がってきましたね・・・非常識なレ
ベルで（大汗）」

桜（フローライト）

「その辺の魔王程度なら楽勝だお（）」　「（アリスお姉ちゃん
人で）」

スファレ

「まゝ、異次元からやって来た二人は、仮メンバーらしいけどね」（苦笑）　ところで、ウチの仮メンバーの扱いは・・・今後どうするのよ？（汗）」

パロット

「・・・仮メンバー？（そんなのいたっけ？）」（美咲・・・さんとか？）

ロードライト

「え〜っと、ウチの仮メンバーは、アルバイトさんのことだと思っ
んですが〜（苦笑）」

パロット

「アル・・・バイト？（誰だそれ？）」

エルバイト

「つて、ほとんど出番が無かったからっていつて忘れてるんじゃない
ええええー！！！！（うがー！！！！）」（一緒に冒険し
てただろー！！！！）

パロット

「ああ〜、お前か〜（汗）　そういえば、アルバイトって名前だっ
たな〜（大汗）」

エルバイト

「忘れるなー！！！！（怒）」

シリカ

「もうアルバイトで良いんですかエルバイトさん？（苦笑）」

エルバイト

「はっ！！（そつえば）」

本名はエルバイトです

効果音「ずががーーーーーん！！」

4コマ

突然の登場

チャロアイト

「おい、パロットさん！」

遠くから走ってくる

パロット

「ん・・・、チャロアイト？」

エルバイト

「てか、なんでオレより出番が少ないヤツの名前を覚えてるんだよ！！（怒）」（納得いかねええええ！！）

パロット

「う、うるさい・・・（大汗）」

チャロアイト

「はあはあはあ・・・（息を整えている）よ、良かった！行き違
いにならなくて・・・（はあはあ）」
パロットたちが戻って
きたと報告を受けた

パロット

「チャロアイト・・・どうしたんだ？（そんなに慌てて）」

チャロアイト

「はあはあ、シトリンさん……ギルドマスターからの伝言です。戻り次第、登城せよ……とのことです！」（はあはあ）」

パロット

「オレにしてみれば、願っても無いことではあるが……何でもまた？」

チャロアイト

「あゝ、大きな声ではいえませんが……（ひそひそ） エファイトさんが捕まえたラリマーの暗殺者のこと……（ひそひそ）」

パロット

「つて、エレメーエファイト……。ヤツがラリマーの暗殺者を捕まえたっていうのか！？（どびっくり）」

チャロアイト

「パロットさん、しいーっ！（汗） えっつと、正確には、エファイトさん、サイトさん、シーライトさんが捕まえたらしいのですが……（ひそひそ）」

桜（フローラ）

「じゃあゝ、わたしがこの姿でいることに……。あまり意味はない？（どきどきどき）」 思わず素が出てしまっ

シリカ

「桜ちゃんは、可愛いから今のままが正義です（にこっ）」
意味不明！

桜（フローラ）

「あゝ、あははっ（苦笑）」（まあ、シリカさんへ時空力を送るた

めには、この姿でないといけないわけですが・・・)

パロット

「なんにしても、城へ行くしかないだろうな。それじゃあ、スフアレたちは招き猫の館へ戻っていてくれ」

スフアレ

「え、なんで。わたしも行きたい！」

パロット

「ダメだ……。シトリンさんが呼んでいるわけだから、これはユークレースの問題だろうからな。城へ行くのは、オレとシリカさん、桜の三人だけ……」

アリス(フォスファイ)

「あたしも行くーーーーー (お) (」

スフエーン(ペンダント)

『ちよっ、アリス~~~~!?(どびっくり)』

パロット

「って、おまえ話聞いてたのかーーーー!?(叫び) (」

効果音「ずがーーーーーん!!!

コメント

スフエーンのペンダントをしているわけだから、アリス(フォスファイ)もお城へ行くことになりそうです

第160話 パロットの天敵？

4コマ劇場 アイオライト―520・・・2011/06/04
シリーズ3

タイトル「パロットの天敵？」

1コマ

ルチルクオーツ城にて・・・

パロットクリソベリル

「・・・・・・・・・・（こつこつこつ）」
若干緊張しながら廊下
を歩いている

桜（フロアライト）

「こつちだよ～～～（にこっ）」
防音措置された会議所
へと案内している

ジェムシリカ か～くんを抱っこしている

「ほらほら桜ちゃん、そんなに急がないの（にこにこ）」

桜（フローラ）

「はあ～～～い」

スフェーン（ペンダント）

『・・・・・・・・・・（じいっ）』

アリス（フォスフォライト）

「ん～、スフェーン・・・どうかした？」

スフェーン（ペンダント）

『いや・・・、お姫さま　本当にこども（三歳児）みたいだな
って思ってた（汗）』

アリス（フォスファイ）

「そりゃ～年季が違うからね～。あっちの時代（五千年前の人
間界）では、いまの姿の方がデフォルトなわけだし・・・」

スフェーン（ペンダント）

『うう～・・・、どうしてわざわざあんな姿になっているのか
意味不明～（大汗）』

アリス（フォスファイ）

「もちろん、可愛いからでしょ。桜は、あれでシヨウの家に潜り込
んだんだから　スフェーンも、卵から孵ったら仔犬（竜）形態が
デフォルト・・・人型形態では犬耳・尻尾付きだからね」（アク
アからの伝統）

スフェーン（ペンダント）

「ええ～・・・、マ～ジ～で～（大汗）」

効果音「ずががーーーーーん！！！」

2コマ

会議所にて・・・

パロット

「失礼・・・（かちやつ）　ぬ？」　扉を開き、中にいる人に
気づく

シトリン 少年だが、冒険者ギルド・ユークレースのトップ
「あ、パロットさん……。お待ちしていましたよ（にっこり）」

エレメーエフアイト ユークナイトのナンバー2

「……………（ギロリ）」 パロットに向けて凄まじい殺気を
放つ

パロット

「うぐっ……………（汗） あゝ、シトリンさん……………（ヤツは無視す
ることにしよう……………） こんなところに呼び出すだなんて……………い
つたい何の用があるんですか？（大汗）」

シトリン

「はい。じつはパロットさんをお願いしたいことがあるんですが……………
えぐっつと、そちらの方々は……………（大汗）」（部外者の方にお話
するのはちょっと……………）

エフアイト

「……………（じいっつ） ドラゴンファンクという冒険者パーテ
イのメンバーで、レベル6の戦士……………。名前は確か、フォスフォ
ファイライト。そちらの小さな子どもことは知らないが……………（ぼ
そっ）」

パロット

「あ……………、こんな姿をしているが……………じつはこの子は……………（ど
きどきどき）」

桜（フローライト）

「……………（たったった） おかあ……………さん（わゆ……………）
突然駆けだして、シリカの足に抱きつく

シリカ

「はいはい、桜ちゃん 話がややこしくなりますから静かにして
いませうね〜」(なでなで)」 桜の頭を撫でる

桜 (フローラ)

「はあ〜い (に〜)」

3コマ

エファイト

「…… (よろっ) おおお、お母さん……だと!? (大汗)
ど、どういふことだシリカ! (汗) ちゃんと説明しろ!! (怒)

「

シリカ

「う、うるさいわね……、あなたには関係ないことでしょ!! (汗)」

エファイト

「関係ないなんてことがあるか! お前の娘……ち、父親は誰だ
!?! (うが〜っ!)」 シリカの両肩を掴んで前後に
揺する

シリカ

「そ、それは…… (ちらり)」 盲目だがパロットをチラ見

エファイト

「え…… (汗)」 シリカの視線を追う

パロット

「・・・ぬ？(汗)」「(なんだ?)」

エフアイト

「くくくっ・・・。そうかそうか、そういうことか・・・(ずいじ「じいっ!」)」「怒りの炎が立ち昇る」

パロツト

「あ、いや・・・ちょっと待て!(汗)そして、どうして剣に手をかける!!(大汗)」「

エフアイト

「あるとき・・・、五年前にキサマを殺しておけば・・・こんなことには!!(ちゃきっ)」「身体を震わせながら抜刀する」

パロツト

「だから、落ち着けーーーー!!!(涙)」「

4コマ

シトリン

「あゝ、エフアイトさん?(汗)常識的に考えて・・・こんな大きなお子さん(三歳児)が突然現れるなんてありえないですよ(苦笑)」「

桜 (フローラ)

「おとーさん (ぎゅ~~~~っ)」「パロツトの足にしがみつく」

パロツト

「だ!桜、お前・・・何言ってる!?(汗)・・・へ?(大汗)」「
もの凄いプレッシャーに気づく」

エフアイト

「や・・・やはり、キサマはこの手で・・・殺す!!!(がぎゃー
ー!!!)」 剣を構えてパロットに突っ込む

パロット

「だから、話を聞けー!!って、ななっ!? (消えた!!)」

エフアイトの姿を見失う

効果音「ぶうづづん、かきーん!!」 金属同士が

ぶつかり合うような音

シトリン

「・・・え?(びっくり)」

エフアイト

「キサマ・・・どういうつもりだ・・・(ギロリ)」

アリス(フォスファイ)

「なんていうか・・・嫉妬に狂うなんて、あなた みつとも
ないわよ〜(にこっ)」 聖剣クリソベリルでエフアイト
の剣を軽やかに受け止めている

エフアイト

「レベル6の戦士ごときが・・・(ぼそっ) わたしの邪魔をする
なー!!!(うおおおっ!!)」 力押しでアリス(フ
オスファイ)を退かそうとしている

アリス(フォスファイ)

「レベル・・・(ぼそっ) あははっ そんな意味のない数値に

こだわっているようでは強くなれないわよ…… あ、そうだよ。
なんだっいたら、あたしが鍛えてあげようか…… (笑)「

エファイト

「そうか…… (ふふふつ) パロットクリソベリルより先に……
キサマが死にたいようだな!! (激怒)「

シリカ

「ちよつ、お兄……エファイト! (汗) あなた、いいかげんに
!! (叫び)「

桜 (フローラ)

「あはははっ (大爆笑)「 悪ノリしすぎ?

コメント

で……、パロットへのお願いはどうなった? (笑)

第161話 ラリマー潜入作戦!?

4コマ劇場 アイオライト―521・・・2011/06/07
シリーズ3

タイトル「ラリマー潜入作戦!？」

1コマ

ルルルクオーツ城、会議所にて・・・

突然の登場

アカアマリン 扉から入ってくる

「お待たせいたしました。では、早速、ラリマーについて対応策の話し合いを・・・って、へ!?(どびっくり)」

リウム

「あ~~~~ (るん) 」

エレメーエファイト 床でうつ伏せになっている

「くっ・・・、このような・・・レベル6程度のヤツに 後れを、取るとは・・・(ひくひく)」 小刻みに身体を痙攣させている

パロットクリソベリル

「す、すげえ・・・(汗) あの、エファイトさんが手も足も出ないだなんて・・・(どきどきどき)」

アリス(フォスフォライト) エファイトのそばでふんぞり返っている

「ふっふっん だから言ったでしょ、レベルなんて数値・・・

参考程度にしかならないって　あなたこそ、この程度の強さで最強を気取っているのなら、勘違いも甚だしいよ～～～（にこっ）
「（はつきりいって、全然弱っちいね）」

アクア

「ちよつ、姿は違いますがアリスさん・・・ですよね！？（汗）
いったい何がどうなって！！（大汗）」（しかも、桜さんがちびっ
子化してる！！）

アリス（フォスフィ）

「あれ？　おっきいアクアに・・・リウムだ～～～（久しぶりだ
ね～）」

リウム

「マスタ～～（たたっ、ぎゅっ）」　アリス（フォスフィ）
に抱きつく

パロット

「ま、マスタ～！？（どびっくら）」

アリス（フォスフィ）

「あははっ、あたしより年上なリウムちゃんに抱きつかれるのって、
かなり違和感あるな～～～（苦笑）」

リウム

「マスタ～～」　リウムは、ショウとアリスのことをマス
ターと呼んでいます

スフェーン（ペンダント）

「えっ、ちよつと、この人・・・もしかして魔族（光竜の天敵）！

？（こ、殺されるーーーー！！）「リウムは暗黒族です

説明文「やり取りだけで1話分使いそうなので・・・これ以上は端折ります（笑）」

2コマ

数十分後・・・

アリス（フォスファイ）

「なるほど〜」。隣国であるラリマーがルチルクオーツを狙っていて、手っ取り早く侵略するために・・・桜ちゃんの命を狙っていた・・・と？」

桜（フローライト）

「狙われてた〜」（にこ〜っ）

エフアイト

「・・・、本当に・・・この子がフローライトさまなのか？）どきどきどき」（シリカの娘ではなく・・・）

アクア

「はい、間違いありません（きつぱり）ですが・・・くれぐれも口外しないでくださいね（ぼそっ）」

エフアイト

「うぐっ・・・（大汗）」（アクアマリンさまが言うのなら、本当・・・なのか？）

シトリン

「これまでは単なる噂の域を出ない状態でしたが、実際にフローラ

イトさまの命が狙われて　しかも報告にあつたような巨大兵器を
ラリマーが多数所有していると．．．最悪の場合、国家間で
の戦争が起こってしまう可能性がありますね（汗）」

アリス（フォスファイ）

「でも、この国にはアクアとリウムがいるわけだから、戦争が起こ
ったとしても楽勝でしょ？　あたしがこの見かけ倒しナンバー
2に勝つたように．．．（ぼそっ）」

エファイト

「ななっ！？（怒）」（見かけ倒しだとー！ー！ー！）

アクア

「あゝ、確かに成り行きでルチルクオーツの王政に係わってはいま
す．．．。ですが、アリスさんもご承知のように、本来．．．我々
が一国家に力添えすることはパワーバランスが崩れてしまうこと
になるので禁止されています（精霊神ファリスさまの命令で．．．）
万一、戦争が始まった場合でも、ボクたちが参戦するわけにはい
きません．．．。」

リウム

「まあ、この王都に攻め込んできて、人々（特にちびっ子？）を
傷つけようものなら．．．問答無用でぶっ潰すけどね（にやり）」

アウインの勇者の称号を持っている

アクア

「ちよっ！（汗）　リウムさん！！（命令違反ですよ！）」
「憧れているだけで、アウインの勇者ではありません」

アリス（フォスファイ）

「なるほど・・・、この辺が勇者であるかどうかの差か」（ぼそっ）
「（アクアちゃん、相変わらず頭固っ！）」

アクア

「ええっ！？（涙）」（そんな〜！） 中間管理職的な立場？

（笑）

3コマ

パロツト

「で・・・、ラリマーが戦争を仕掛けようとしていることなんて今更な話だと思うが・・・。シトリンさんは、どうしてここにオレを呼んだんですか？」

シトリン

「パロツトさん・・・。あなたは、ラリマーへ入ったことがありませんよね？ あなたがボクたちの前から姿を消したこの五年の間に・・・」

「・

パロツト

「あゝ、旅の途中に立ち寄ったことはあります。ほんの数週間のことででしたが・・・、それが何か？」

シトリン

「ユークレースのギルドマスターとして命じます。パロツトクリンベリル・・・、ラリマーへ潜入し 内部状況を把握してきてください」

パロツト

「・・・・・・。・・・・・・。・・・・・・。・・・・・・。・・・・・・。はあ？（汗） ちよっ、そんなの調査部の仕事・・・あ、オレ 今

は調査部か（大汗）　で、でもオレは、砕けた聖剣クリソベリルを復元するため、光竜アレキサンドライトに会わなければならなくて！」

アクア

「え・・・？（父上に？）」

リウム

「聖剣クリソベリルが・・・砕けた！？（ギロリ）」　シヨウの形見です

パロット

「あっ、いや・・・その～～～って、リウムさん！？（大汗）　ど～～～して魔獣化するんですか～～～～！？（涙）」

リウム（魔獣型）　体長5メートルほどの漆黒な毛並みの巨大獣になる

『パ～ロット～～～（ギロリ）　あ～～～ん・・・ぱくっ』

パロットの頭から半身を啜える

パロット（声だけ）　足だけリウム（魔獣型）の口から飛び出している

『んんん！　んんん～～～～～～～～～～～～！！（じたばたじたばた）』

スフェーン（ペンダント）

『なあああ～～～～～～～～～～～～？（どびっくわくわく）』

アリス（フォスファイ）

「出た！　リウムちゃんのはむはむ攻撃　（あははっ）」

リウム(魔獣型)

『はむはむはむ』

楽しそう

パロツト(声だけ)

必死に逃れようとしている(笑)

『んんんんんー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!!(じたばたじたばた)』

効果音「ずががー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ん!!」

4コマ

アクア

「あゝ、リウムさん……。その辺りで許してあげてください……
(苦笑)」「話が進みませんから」

リウム(魔獣型)

『ちつ……。しょうがないな〜〜(でろり)』 パロツト
をはき出す

パロツト

「……。……。……。ひくひくひく」 リウムのよだれでべち

よべちよ(笑)

アクア

「なんにしても、ちょうど良かった……。パロツトさん……。」
聞こえていますか?」 ボクの父……。光竜アレキサンドライト
なんです。が、風の噂によると ラリマーにいるようなんですよ」

パロツト

「ほ、本当ですか!? (がぼっ)」 復活して身体を起す

アクア

「確実な情報……というわけではないのですが、数百年前にこの第四聖界へやって来て……。今はラリマーに身を置いているそうなんです。なんとまあ都合の良いことに（苦笑）」
それまでは第一聖界にいた

パロツト

「そういうことなら……。シトリンさんの命令がなくても、オレはラリマーへ行かなくてはならないな！（うん！）」

シトリン

「あ、パロツトさん……。先に断っておきますが、あなたの所属するパーティ……。招き猫勇者隊のメンバーをラリマーへ連れて行くことはやめてくださいね（汗）」

パロツト

「まあ、そうだな……。今回の旅は、さすがに危険すぎる（汗）
となると……。気ままな一人旅になるわけか？」（人数多いと目立ちそうだし）

シトリン

「そういうわけにもいきません。もし、ラリマーで何かあったときでも……。情報を持って帰ってくる者がやはり必要です。敵国への潜入調査なわけですから、基本は複数行動ですよ（汗）」

パロツト

「なら、どうします？　こちら側の戦力も……。そう割けないでしょ？（汗）」（体調のことを考えれば、シリカさんというわけにもいきませんし……）

エフアイト

「ふっ……（微笑）少しは頭を使ったらどうだ？（この会議に参加している人員を見ればわかるだろう……）不本意ではあるが、このわたしが」

アリス（フォスファイ）

「じゃあ、あたしが一緒に行くことにするね〜」（にこ〜）

「（もともとそのつもりだったし〜）」

エフアイト

「って、ええ—————！？（そんな—————！）」

お留守番です（爆）

効果音「ずがが—————ん！！！」

コメント

今週の『バグマン』（原作）『を見て……。これまでの流れから考えると『CROW』じゃね？（勝手な予想）

第162話 言葉巧みに・・・

4コマ劇場 アイオライト―522・・・2011/06/08
シリーズ3

タイトル「言葉巧みに・・・」

1コマ

ルルルクオーツ城、客間にて・・・

スペクトロライト ラリマーの人形使い

「……………(ひそひそ)」「おい、トリプライト……………」

ほとんど回復しているがベッドに寝かされている

トリプライト ラリマーの冒険者

「……………(ぶんぶん)」「はあく、やめとけて……………」

動けなくはないが大怪我を負っている

スペクトロ

「……………(そ〜っと)」「 出入口の方をチラ見

シーライト ユークナイトNo.11

「……………!」

!(しゅたっ!)「 手を翳して挨拶している

スペクトロ

「……………ちっ(汗)」「(我が妹ながら邪魔なんだよ!)

ポルーサイト ユークナイトNo.8

「おいおい、変な気を起こすんじゃないやねえ〜ぞ〜(ぼそっ) もし逃

げ出そうとしたら 引っ捕まえて牢屋へぶち込んでやるかならな
(ギロリ) 「 監視役です」

スペクトロ

「わかってるよ・・・(むかつ) 暗殺者で捕虜なのに、治療まで
してもらって感謝してるって・・・(やれやれ)」

サイト

「そう思っているのなら、大人しくしていることだな・・・まあ
、傷が癒えたらラリマーの情報を聞き出すため、キツイ尋問が待
っているかもしれないがな・・・(ぼそっ)」

スペクトロ

「けっ・・・。わたしたちのような下っ端から聞きだせることなん
て高が知っている・・・。せいぜいがかかりするといひさ (ふふ
っ) 「

サイト

「ぬかせ・・・(ギロリ)」

突然の登場

アリス(フォスファイライト)

「てなわけで、ラリマー潜入のためのメンバー勧誘にきました
」 (じゃっじゃーん) 「 突然、部屋の中に出
現する(煙と共に・・・)」

シーラ

「!?!(びくーっ!!) 「

サイト

「どしえー！ー！ー！ー！(どびっくり) って、どこから現われた！？(扉すら開いてねえぞ！！)」

2コマ

スペクトロ

「ら、ラリマー潜入だつて(どきどきどき) やめときな・・・、ラリマーはこの国のように平和で安全な場所じゃない。おまえたちのような甘ちゃんて死の覚悟すらない冒険者なんて・・・ラリマーでは1日も経たずに殺されちまうだろうよ(ふふっ)」

アリス(フォスフィ)

「まあ、そんなことどうでもいいから、あなた(スペクトロ)もラリマー潜入メンバーに決定ね」

スペクトロ

「ど、どうでもいいことないだろ！(汗) おまえ・・・死ぬ気なのか！？(大汗)」

アリス(フォスフィ)

「大丈夫！！ どうやらあたし・・・、もう死んじやってるみたいだから・・・(ぼそっ)」(五千年前に・・・)

スペクトロ

「・・・はあ？(どきどきどきどき)」(何いってるんだこいつ?)

サイト

「あゝ、なんだ・・・(汗) たしか、ドラゴンファングのフォスフォファイライト・・・だったよな？(大汗) もしかしなくても・・・エファイトとパロットについていくつもりなのか？ やめてお

け、その人形使いの言葉を借りるわけじゃないが おまえのような低レベル者がラリマーなんかに行けば、そっこうで死ぬぞ（ぼそっ）」

アリス（フォスフィ）

「……………（じいじいっ）」

サイトを見つめる

サイト

「な、なんだ？（汗）」

アリス（フォスフィ）

「はあ、やれやれだよ。どうしてこの時代の人は、レベルなんて無意味な数値なんかを重視しているのかな（汗） レベルなんてものは、単なる飾りでしかない……。レベルをなるべく上げないよう努力して、低レベルクリアを目指すほうが楽しいじゃん」

サイト

「同じようなセリフを……。最近どこかで聞いたような気が……。 （どきどきどき）」

効果音「ずががーーーーーん！！」

説明文「ラルドとアリスの思考パターンは……。似通っています（笑）」

3コマ

アリス（フォスフィ）

「えっつと、そっちのおじさん（トリプライト）はしばらく動けそうにないから、人形使いのあなたにだけついて来てもらっことにな

ると思うけど・・・ちゃんとラリマーの案内をお願いね〜」

スペクトロ

「わたしにラリマーを・・・祖国を裏切れというのか？（ギロリ）」

アリス（フォスファイ）

「さっきのレベルの話と重なるところがあるとは思っただけど、聖界全体で考えれば国同士のいざこざなんて些細なこと・・・。あたしにしてみれば、ラリマーも含めてこの聖界の人々が　どれだけ幸せでいられるかのほうが重要だね　もつと着目を広げないと・・・偏った考えにしかないよ〜」（苦笑）　魔王軍やらの攻撃から、精霊界を護っていた人

スペクトロ

「キサマは祖国のために戦うことが・・・いけないでもいうつもりか？（ギロリ）」

アリス（フォスファイ）

「うん、いけない・・・というわけではないんだけど、国が掲げている目標はいただけじゃないかな。他国への侵略なんて、決して誇れることじゃないでしょ？」（数年前まで、このルチルクオーツ王国もそんな感じだったみたいだけど・・・）

スペクトロ

「国土を増やし、ラリマーを少しでも豊かにすることが間違いだというのか！？（怒）」

アリス（フォスファイ）

「あ〜・・・（汗）　そのために他の国の人がどうなってもいい・・・とでも考えているのかな〜って（むっ）」

スペクトロ

「ルチルクオーツがどうなるかと……知ったことではない（ぼそっ）」

アリス（フォスファイ）

「って、うおーい！！（怒）」

サイト

「おい、ドラゴンファングの……。考えの異なる者に何を言っても無駄だ……（平行線だぞ）」

アリス（フォスファイ）

「それはそうなんだけど……（うん）……あ、じゃあ……こんな話はどっ？」

スペクトロ

「ぬ？（なんだ）」

4コマ

アリス（フォスファイ）

「じつは……ラリマーヤルチルクオーツを含めた全世界は、強大な力を持った侵略者に狙われています！」

スペクトロ

「……ちよっ、侵略者！！（汗）それって、本当なのか！？（大汗）」

アリス（フォスファイ）

「はい……。主に『緑のカエル型異星人』と『海からの使者……』

イカ的な人』に!!」

スペクトロ

「なんだってーーーーー!!」(どびっくり)「(カエルにイカ
ーーーー!?)」

サイト

「って、おゝい・・・(汗)」「(そんなウソ話、信じるなよ)」

アリス(フォスファイ)

「ヤツらは、あたしたちに気づかれないようにしながら、すでにい
るんな場所を侵略しています。今年に入ってからは、イカ的な人に
GT300クラスも侵略されてしまいました!(まあどうしましょ
う!?)」

スペクトロ

「それって・・・もう完全に侵略されてしまったのか!?(大汗)」

アリス(フォスファイ)

「いや、いまのところ優勝はしていないようだけど・・・(汗)
ベースがフェラーリだから時間の問題かもね」(大汗)「(二戦と
もハルヒに負けた・・・)」

スペクトロ

「なんてこつたい!!」(大汗)」

サイト

「おゝい、全然意味がわかんねえ〜ぞ〜」(大汗)「(フェラ〜
りってなんだ?)」

アリス（フォスファイ）

「つまり、何が言いたいかというところ、そんな恐怖の侵略者から世界を護るためには、国同士の争いなんて些細なことにこだわってはいけません！ みんなが協力し合って侵略者に対抗しなければ・・・世界は滅んでしまうの！！」

スペクトロ

「うぐっ・・・（汗）」

アリス（フォスファイ）

「確かにあたしたちと行動を共にすれば、短期的な視点からすると祖国を裏切ったように見えるかもしれない・・・でも、それは違う！！ あなたは、祖国のために・・・恐怖の侵略者からラリマーを護るため立ち上がるの！！（叫び）」

スペクトロ

「ラリマーを・・・護るため・・・（ぼそっ）」

アリス（フォスファイ）

「そう・・・、それはこれからの歴史が証明してくれる。あなたは、ラリマーを・・・祖国を救った英雄になるの」

スペクトロ

「え、英雄！？（うおおおー！！）」 テンション
上がる（笑）

効果音「ずががー！！！！！！！！ん！！」

トリプライト

「す、スペクトロ・・・（しくしくしく）」（そんな話に乗せられ

るな・・・)

サイト

「あゝ・・・。もしかして、おまえの姉さん・・・扱いやすい？
大汗）」

シーラ

「・・・・・・・・・・(うん)」「(どきどきどき)

コメント

さすがはアリスですね(笑)

第163話 アリスの心は広いのですよ

4コマ劇場 アイオライト―523・・・2011/06/12
シリーズ3

タイトル「アリスの心は広いのですよ」

1コマ

ルルルクオーツ城、会議所にて・・・

アリス（フォスフォファイライト）

「と、いうわけで〜〜〜。今回、ラリマー潜入のお手伝いをしていただくことになった〜〜〜（どうぞ）」

スペクトロライト

「ラリマーの人形使い・・・、スペクトロライトだ（汗） どうしてこうなってしまったかは、わたしにもわからないが・・・まあ、よろしく頼む・・・（ぼそっ）」

エレメーエファイト

「なーーーーーーっ！！（どびっくり）」

ジェムシリカ

「・・・・・・・・（やれやれ）」

パロットクリソベリル

「って、そいつオレらを殺そうとした・・・ラリマーの暗殺者！？
（大汗）」

アクアマリン

「うーん、さすがはアリスさん　見事なメンバーチョイスです
(ここに)」「(適材適所?)」

パロット

「いやいやいや！　どう考えてもおかしいだろう？(汗)　こいつ
暗殺者だぞ・・・(大汗)　一緒に旅をしていて、いつ寝首を掻か
れるか・・・(どきどきどき)」

アリス(フォスフィ)

「スペクトロはもう仲間になったんだから、そんなことするはずな
いじゃん・・・(ぼそっ)」

スペクトロ

「・・・え？(汗)」「(もう仲間!?)」

パロット

「しかし・・・だな？　こいつらの所為で、何度死にそうになっ
たか・・・」

アリス(フォスフィ)

「でも、誰も死んでないんだよね？　何か・・・問題があるの？」

パロット

「あ、いやまあその・・・(大汗)　そんなわけで、スペクト
ロ・・・よろしくな(苦笑)」

スペクトロ

「って、おまえらそれでいいのかよ!?(うにゃーーーー!!)」
(こいつら、どうなってるんだ!?)

効果音「ずががーーーーーん!!!」

2コマ

アクア

「それでは、ラリマーに潜入していただくメンバーは、パロットさん、アリスさん、スペクトロさんでよろしいですね」

スフェーン（ペンダント）

『わたしもいるでしょ!!!（むっ!）』

アクア

「あゝ、さきほどから気にはなっていたんですが……。やはりドラゴンの 光竜の卵だったんですね（汗） 両親以外の同族に会うのは……。ボクも初めてです（苦笑）」

スフェーン（ペンダント）

『光竜のスフェーン……。どこかの誰かさんのように、光竜の名門ベリル一族じゃないけどね〜（ぶん!）』

アクア

「あははっ……。 （苦笑） 名門とか言われても、よくわからないんですけどね〜（汗） それではスフェーンさんも、ラリマー潜入の件……。よろしくお願いします（大汗）」

エフアイト

「だが……。そのようなメンバーで本当に大丈夫なのか？ アリス……。はともかく、ナンバー13のパロットクリソベリルに……。激弱の人形使いだぞ（大汗）」（わけのわからん卵もいるが……）

スペクトロ

「げきよわだとく！（むかつ） ユークナイトのナンバー2かどうかは知らないが・・・おまえなんか我がラリマーが誇る超兵器の巨大鎧があれば一撃で・・・あ（大汗）」 何かに気づいた

パロット

「ん・・・？ どうしたんだスペクトロ？」

スペクトロ

「わたしの攻撃手段である・・・人形が無い（ぼそっ）」

パロット

「はあああ！？（汗） 人形使いのくせに人形を持ってないなんて・・・いったいどういう状況なんだよ！！（どびっくり）」

スペクトロ

「シーライト（人形）は、おまえらが全部壊したんだろーーーーがああああ！！（うぎゃーーーー！！）」

パロット

「人の所為にするんじゃないやねええええ！！（ずがーーーー！！ん！！）」

3コマ

エフアイト

「どうだアリスよ・・・。こんな役に立たないヤツよりわたしを連れて行った方がいいのではないか？（ふふっ）」 自分より強いアリスに、少し興味を持っている

アリス（フォスフィ）

「・・・・・・・・（じい~~~~っ）・・・・却下（ぼそっ）」

エフアイト

「ちよっ・・・、なぜだ!? (どびっくり)」

アリス(フォスファイ)

「なんていうかさ、あなたからは・・・エリート冒険者の雰囲気
がひしひしと伝わってくるのよね・・・弱いくせに(ぼそっ)」

エフアイト

「なっ!? (汗)」(よ、弱いだと!!)

アリス(フォスファイ)

「あなたを連れて行ったりなんかしたら・・・はつきり言って目立
っ!(叫び) 探索・・・ってことなら目立つのは論外! あなた
が来ても邪魔なだけ!! (びしっ!!)」 エフアイトを指差す

エフアイト

「邪魔ーーーーー!? (涙)」 いままでそんなこと言わ
れたことがない(笑)

効果音「ばきゅーーーーーん!!」

ジエムシリカ

「す、すごい・・・。お兄ちゃ・・・こほん(汗) あのエファイ
トに的確なダメージを与えている(大汗) こんなこと・・・はじ
めて(どきどきどき)」

アリス(フォスファイ)

「てなわけ、あなたは絶対に連れて行けない(ぼそっ)」

エフアイト

「ならどうする！？（汗） この人形使いは・・・言わば武器を持たない戦闘力ゼロの冒険者なのだぞ！！（叫び）」

アリス（フォスファイ）

「あゝ、なにか勘違いしているみたいだけど・・・」

エフアイト

「勘違い・・・？ 何がだ（むすっ）」

アリス

「別にラリマーってところへ戦いに行くわけじゃないんだから、戦闘力は関係無いし・・・。それなら、目立つあなたより土地勘のあるスペクトロに来てもらうのが筋ってもんでしょ？」

エフアイト

「うぐっ・・・（大汗）」

4コマ

シトリン

「エフアイトさん・・・。どうやら完全にあなたの負けのようですよ・・・（苦笑）」

エフアイト

「し、しかし！（汗）」

シトリン

「ボクとしては・・・、エフアイトさんがラリマーへ向かうよりルチルクオーツに残っていた方がいいがたいです。いつ、ラリマーが攻め込んでくるかもわかりませんから・・・（汗）」

スペクトロ

「まあ、ラリーマー側もいまは情報収集の時期と考えているわけだから、直ぐに戦いが始まることは無いと思うけど・・・(ぼそっ)」

パロツト

「情報収集っていうのなら、あんな巨大鎧使ってオレたちを殺そうとしているんじゃないかね・・・(ギロリ)」

スペクトロ

「あゝ・・・、あれはだな(汗) と、とにかく、シーライトの代わりとなる人形が必要だ!(大汗) なあパロツト・・・。この国に腕の良い人形職人はいないか?(どきどきどき)」

パロツト

「うゝん・・・。あの殺人パペット良くできていたからな(汗) (汗) アレの代わりになるような人形を創れる職人なんて、そう簡単に見つかるはず・・・あつ、そうだ!!(はっ!)」

スペクトロ

「職人を・・・知っているのか!？」

パペット

「職人じゃない・・・。使える人形があつたのを思い出したんだ!」

スペクトロ

「えっ、本当か!? だが、ただの人形ではあまり意味がない・・・。わたしの精霊力を通わせるため、微妙な調整をする必要が・・・」

パロツト

「そうじゃない……。おまえ、招き猫の館でフローラを殺そうと寝込みを襲ったよな？ そのときの人形がまだ残っているんだよ！」

スペクトロ

「おお〜〜 オリジナルのシーライトがまだ残っているのか！
？（よっしや〜！〜！）」

桜（フローライト）

「あゝ、あのときの人形か〜……。ぼそっ）」

スペクトロ

「……。ん？（なんだ？）」
桜がフローラであることを知らない

コメント

例の人形は……。美咲が預かっています

第164話 過去の因縁は、簡単に断ち切れ・・・ました

4コマ劇場 アイオライト―524・・・2011/06/13
シリーズ3

タイトル「過去の因縁は、簡単に断ち切れ・・・ました」

1コマ

サンストーン（招き猫）の館にて・・・

美咲

「そんなわけで、ドラゴンファンクに所属するフォスフィさんの人格が アリスさんが変わってしまったようなんです・・・（大汗）」（信じられないことに・・・）

ファリス アリスの育ての親

「なるほどね」（うん） アリスの気配が突然現われたのにはびっくりしたけど・・・そんな理由があったのか……。いつかのように、過去の時代からやって来たのかと思っていたわ」（苦笑）

美咲

「もう完全にアリスさんでしたよ」（苦笑）」（ハチャメチャな性格はそのままに）

ファリス

「それで、アリスの記憶はどれだけ戻っているの？ ショウくんたちを裏切って、十四創神アメシストとして偶数側について頃の記憶は・・・？」

美咲

「そうですね．．．。わたしの見た限りでは、シヨウさんとパー
トナーを組んでいた頃のアリスさん．．．だと思われます。もちろ
ん、そう見せているだけで、本当のところはアリスさん自身にしか
わかりませんが．．．（ぼそっ）」

フアリス

「なんにしても、アリスの人格がある状態で優子ちゃんと会わせな
いようにしないと．．．」

美咲

「え？ 優子さんに．．．ですか？」

フアリス

「そう．．．。優子ちゃんにしてみれば、アリスは最愛の兄を死な
せた張本人．．．。あの事件が起こるまでは親友だったといえ、ア
リスのことを怨んでいることでしょう．．．」

美咲

「た、確かに．．．（ごくり） 生まれ変わりであるフォスフィさ
んのときはそれほどでもなかったかもしれませんが．．．アリスさ
ん本人を前にしたら優子さんもどんな行動に出るかわかりませんね
（大汗）」

フアリス

「二人とも全ての聖界を創造せし十四人の神．．．十四創神の神力
を受け継いでいるわけだから、下手に戦いとなれば五千年前と同じ
人間界崩壊の二の舞になる。この第四聖界どころか、精霊界自
体が崩壊しかねない．．．（大汗）」

美咲

「それは・・・危険ですね〜（汗） わかりました（こくり） なるべくアリスさんと優子さんがかわりを持たないよう・・・」

突然の登場

アリス（フォスファイライト）

「美咲〜（がちゃっ！） あんたに預けていたっていう殺人人形のシーライト・・・、回収に来たよ〜〜（にこ〜っ）」
入口から飛び込んでくる

美咲

「わにゃーっ！?!?（びく〜っ!）」

2コマ

アリス

「・・・（汗） アリス・・・ちゃん?（どきどきどき）」

アリス（フォスファイ）

「ああ〜、アリスさん・・・おひさ〜〜（にこり）」
パロットたちより一足先に帰って来た

アリス

「あ〜、確かに久しぶりではあるんだけど・・・（五千年ぶり）
あなた、死人のくせに相変わらず元気よね〜〜（苦笑）」

アリス（フォスファイ）

「そうなんですよ・・・。あたし もう死んじゃってるみたいなんですね〜（苦笑） つまり、この身体の主・・・フォスファイに取り憑いた幽霊状態?（汗） ここは、美咲による除霊の出番か〜〜（あははっ）」

美咲

「いやいや、取り憑いたとかじゃなく・・・、フォスファイさんはアリスさんの生まれ変わりなわけですから、除霊したって意味が無いですよ」（大汗）」（魂は同じなんですから）」

アリス（フォスファイ）

「そうなの・・・？ まあ、なんでもいいから（笑） そんなことより、美咲に預けたっていうシーライトって人形を回収しにきたんだけど・・・（きよろきよろ）」（どこにあるのかな？）」

美咲

「ああ、桜さんを殺そうとして壊された人形のことですか？ あの人形なら、暗殺者の手掛かりになるかもしれないという理由から、いまは修復に出して・・・って、ああっ！？（どきっ！）」
何かを思い出した

アリス（フォスファイ）

「修復？ 修復って・・・どこに出したの？」

美咲

「いやっ、その（汗） 特殊な人形みたいだったので普通の職人さんじゃなく、シヨウさんからクリエイト能力を引き継いだ・・・
優子さんに預けていて（あははっ）」

アリス（フォスファイ）

「ぬ？（優子？）」（優子が直せるの？）」

3コマ

フアリス

「って、美咲ちゃん！（涙）」（二人を会わさないようにって言ったばかりなのに、なんてことを！）」

美咲

「しょ、しょうがないじゃないですかー！ わたしも途中までは自分で何とかしようと考えていたんですけど、緊急に忘却の迷宮を調査する必要がでてきちゃって」（涙）」（シリカさんの命が危なかったわけですし！）」

アリス（フォスフィ）

「だから、なんの話よ？」（ときどきどき）」

突然の登場

優子（翼あり） 天空神サファイア

「てなわけで、美咲ちゃんに依頼された人形の修理、完璧に仕上げてきたよ〜」 報酬は・・・そうね、美咲ちゃんが一日だけわたしの代わりに天空神をやるってのはどう？（笑）」

美咲

「優子さんの代わりなんて・・・できるわけ無いじゃないですかー
ー！ー！？（うにゃー！ー！）」

優子（サファイア）

「あははっ 冗談・冗談・・・って、おや？」

アリスの気

配に気づく（見た目はフォスフィ）

アリス（フォスフィ）

「……………（じい〜〜っ） 見た目はルウーにそっくりだけど……………もしかして優子？（ぼそっ）」

優子（サファイア）

「この生体波長……。あなた、アリスね！！（叫び）」

アリス（フォスファイ）

「うわあ……。・・・（汗） 天空族を嫌っていた（頑なに自分は人間族だと言っていた）優子とは思えない姿だね……。・・・（大汗）」（どういう心境の変化よ？）

アリス

「うっ……。・・・、マズイわね（大汗）」

美咲

「はい、マズイです（ときどきどき）」（精霊界崩壊の危機！？）

優子（サファイア）

「アリス！！（ギロリ）」 アリスを睨みつける

アリス（フォスファイ）

「ん……。・・・？（にこにこ）」

4コマ

優子（サファイア）

「いや、ほんと久しぶり……。・・・（ぎゅ……。・・・っ）」 アリスに抱きつく

アリス（フォスファイ）

「あははっ、あたしにしてみれば、そんなに久しぶりって感じはしないんだけどね」（苦笑）」

美咲

「あ、あれ〜？（汗）」（戦いにならないですよ？）

ファリス

「う〜ん、優子ちゃんも大人になったのね〜（大汗）」

アリス（フォスファイ）

「ところで優子〜。その修理してくれた人形なんだけど、じつは持ち主と一緒にラリマーへ行くことになっちゃってね〜。早速、返してほしいんだけど〜」

優子（サファイア）

「持ち主って・・・桜ちゃんを狙っていた暗殺者でしょ？（汗）返しちゃって・・・大丈夫なの（大汗）」

アリス（フォスファイ）

「うん、あたしたちの仲間になったから大丈夫〜（にこ〜っ）」

美咲

「・・・（汗）アリスさん、相変わらずですね・・・（どきどきどき）」

ファリス

「ほんとにね〜（苦笑）」

優子（サファイア）

「ねえ、美咲ちゃん。例の人形・・・アリスに渡しちゃっていいの？」

美咲

「は、はい。暗殺者の手掛かり・・・必要なくなっただみたいです
(苦笑)」

優子 (サファイア)

「じゃあ、はいアリス (ひよいつ) ついでに、おもしろ機能
も追加しておいたから (どうぞ)」 人形を取り出す

シーライト (人形)

『・・・・・・(ぴくっ)』

アリス (フォスファイ)

「こ、これは!?!?(どびっくり)」

数分後・・・

スペクトロライト

「・・・・・・。・・・ななっ!?!?(どびっくり)」 パニ
ツク

パロットクリソベルル

「こ、これは・・・(汗) なんとというか、怪奇現象?(どきど
きどき)」

アリス (フォスファイ)

「なんだろね~~~~(あははっ)」

シーライト (人形)

『つしゃー!ー!ー! (かたかた) ラリマーへ向けて出発だー
!ー!ー!ー! (叫び)』

スペクトロ

「わたしの・・・わたしのシーライト（人形）がああああ！？（泣）」

シーライト（人形）

『ふふつ・・・。御主人、わちきが動いていることに感動してるな』
『（にやっ）』

スペクトロ

「自分で動いて喋るなんて・・・、こんなの操り人形じゃねえええええ！！（涙）」

シーライト（人形）

『ええええええ！？（涙）』（御主人、そんな～！！）

優子（サファイア）

「ちなみに、シーライトちゃんの自我は、超獣神のファンシー機能が元になっています」

アリス（フォスフィ）

「えっ！（汗）じゃあ、この人形も・・・巨大ロボットになるの！？（大汗）」

優子（サファイア）

「さあ〜て・・・（にやり）それは、どうでしょう・・・（ふふふっ）」

効果音「ずががーーーーーん！！」

コメント

先週の『バグマン。(原作)』予想の結果は、大正解でした。)

(やっぱり『CROW』だった)

第165話 ラリマー潜入メンバーに必要な何か

4コマ劇場 アイオライト―525・・・2011/06/14
シリーズ3

タイトル「ラリマー潜入メンバーに必要な何か」

1コマ

サンストーン（招き猫）の館にて・・・

パロットクリソベリル

「てなわけで、しばらく旅に出ることになったから留守を頼む・・・
（ぼそっ）」 招き猫勇者隊ミーティング中

スファレライト

「って、どんなわけよ！ どーしてあたしたちだけ置いてけぼりなのさー！？（うにゃー！っ！）」

パロット

「あゝ、ラリマーは熟練の冒険者でも命を落としかねない危険な国だ・・・。おまえらを連れて行くわけにはいかない（汗）」

スファレ

「で、でも・・・、同じパーティーの仲間なんだからさ。危険だとわかっているところに、パロットだけを行かせるわけには・・・っというか、今は前世の人格が出てるかどうかは知らないけど・・・どーしてドラゴンファングのフォスフィは一緒に行くのよー！ー！ー！！（納得できるかー！ー！）」

パロット

「そ、それは……（大汗）」

アリス（フォスフォファイライト）

「そ・れ・は・ね〜」（にこ〜）　いわゆるテコ入ねってやつよ……（ぼそっ）」

スファレ

「テコ入れ〜〜〜！！」（どびっくり）」

効果音「ずがが〜〜〜ん！！」

パロット

「え〜っと、フォス……アリス？（大汗）」（なんだ、テコ入ねって？）

アリス（フォスファイ）

「こほん！ え〜、この『最強の勇者はヒーラーでレベル1』も、今回で165話目。今現在、パロットは最強の勇者ではなさそうなので、タイトルと違うんじゃない？……とか思われてるんじゃないかと考えられる今日この頃！！」　おいこら！（笑）

スファレ

「あ〜、意味わかりません（ときどきどき）」（今日この頃？）

アリス（フォスファイ）

「つまり何が言いたいかというと〜、このままお決まりのメンバーで冒険するってのがパターンになりつつあるから、その流れを一度ぶち壊そうかと……」

スファレ

「さっきの話、全然関係ねえええー！ー！ー！ー！（うぎゃー！ー！）」

2コマ

パロツト

「とにかくだ！ テコ入れとかわけのわからない話は措いとして・
・危険だからおまえらは連れて行けない」

スファレ

「うぐっ……、でも……」（汗）

アリス（フォスフィ）

「まあ、確かに今回のメンバーでも、心配といったら心配なただけ
どね〜（う〜ん）」

スファレ

「えっ！ パロツトが一緒でも危ないってこと！？（どびっくり）」

アリス（フォスフィ）

「いや、パロツトがどうというより……メンバーのバランスが
ちよっとね〜（苦笑）」

ロードライト

「そうですね〜。みなさん職業は攻撃系ですから……回復系がい
ないのは痛いかも（ぼそっ）」

パロツト

「って、オレがいるだろ！！（涙）」 ヒーラーでレベル1

ロードライト

「……………(じいっ) やはり回復系はほしいですね〜
〜(うんうん)」

パロット

「うおい!!(怒)」

アリス(フォスフィ)

「あははっ、なかなか楽しそうなパーティだね〜 でも、メンバ
ーにほしいのは回復系じゃない……」

ロードライト

「…………え?」

パロット

「だから、オレはヒーラーだって!!(叫び)」

アリス(フォスフィ)

「必要なのは……、そう、ずばりお笑い系!!(ぎゅっ!)
拳を握り締めて叫ぶ!

パロット

「……………(汗)」

スファレ

「……………はぁ? (どびっくり)」

3コマ

アリス(フォスフィ)

「これから行くラリマーって国が危険だからこそ、お笑い系が……
このパーティでいうところのスファレ的な存在が必要となる!」

スファレ

「あたし、お笑い系……!? (涙)」

パロット

「あゝ、アリス？ おまえの話……さっきから意味不明だぞ (聞いてて頭痛がする……)」

アリス (フォスフィ)

「あまゝい あんたたちはお笑い系の存在を甘く見すぎている！

！」

ロードライト

「え〜っと、どういうことですか？ (どきどきどき)」

アリス (フォスフィ)

「たとえば……、ラリマーで絶体絶命の危機に陥ったとする……

」

ロードライト

「はい…… (「くり)」

アリス (フォスフィ)

「このままじゃ、メンバーは全滅…… (汗) しか〜し! (叫び) そこにお笑い系がいれば ギャグで流せる (ぼそっ)」

大真面目

ロードライト

「……って、えええええ……!? (叫び)」

パロット

「なんじゃそりゃーーーーー!!! (うにゃーーーーー!)」

効果音「ずががーーーーーん!!!」

スファレ

「た、確かに……、これまでの冒険でも、危機的状況をギャグで流せたことがあったかも(どきどきどき)」

パロット

「おいーーーー!! (怒)」 (どんな状況だよ!!!)

4コマ

アリス(フォスフィ)

「でも、今回の旅ではただのお笑い系じゃ役不足かもしれない…… (うーん) やっぱり、へっぼぐらい笑いの神様の加護を受けていないと…… (ぼそっ)」

スファレ

「ちよっ……、へっぼこってお笑い系だったのーーーーー! (涙) あっ、でもその理屈でいうと……へっぼこ戦士であるあたしが一緒に行ったほうがよくない? (るん)」

アリス(フォスフィ)

「あなたのへっぼこ度は……まだまだみたいだからダメ!」

スファレ

「やっぱりダメなのーーーーー!?! (涙)」

アリス(フォスフィ)

「はやり、ここはへっぽこマスター青山七瀬ぐらいのへっぽこでないと・・・(うん) あ・・・、そういえば美咲も天然系へっぽこだったよね？」

美咲

「昔の話です。忘れてください(しくしく) いたのかよ！」

アリス(フォスフィ)

「そんなわけで、ラリマーへ行くメンバーにお笑い系・・・できればへっぽこを入れたいわね(汗)」

パロット

「なあ、アリス?(汗)」(ちょっといいか?)

アリス(フォスフィ)

「ん? (なに?)」

パロット

「いや、今のおまえ 充分お笑い系だと思うんだが・・・(どきどきどき)」

アリス(フォスフィ)

「だれがお笑いかーーーーー!!! (激怒)」

効果音「ばきゅ~~~~~ん!!」

スフェーン(ペンダント)

「あ、わたしもパロットと同意見かな(苦笑)」

アリス（フォスファイ）

「って、うおい！！（涙）」

コメント

今現在、スファレの他にもう一人へっぽがいます・・・（笑）
七瀬じゃないよ

第166話 想いとはなかなか届かないものでして

4コマ劇場 アイオライト―526・・・2011/06/16
シリーズ3

タイトル「想いとはなかなか届かないものでして」

1コマ

ルルルクオーツ王都にて・・・

ダイ

「へえ〜、なかなか活気のある都だな〜〜（きよろきよろ）」

アクロアイト ドラゴンファングのリーダー

「ルルルクオーツ王国唯一の都市だから、活気があって当然といえ
ば当然かな〜（苦笑）」

アメトリン

「まあ、王都がこんなに平和な状態になったのは、王様がフローラ
イトさまに代わってからだけだね〜」

ハックマナイト

「そうだな〜、前国王のときは常にどこかへ戦いをしかけていたな・
・・・最後に戦いをしかけていたのは、天空界だったか・・・？（
う〜ん）」 小説『桜のひみつ』での話

ダイ

「天空界？（なんだそれ？）」

アメトリン

「あゝ、えつとね。背中に翼の生えた・・・精霊族より霊体に近い種族の国みたいで〜」

レイチエル

「あう〜・・・。天使様みたいな感じなのかな〜？」(宗教画に出てくるような〜?)

アメトリン

「そうそう、そんな感じ〜」

アクロ

「だが性格は好戦的で、戦闘資質も精霊族とは比べ物にならないほど高い・・・といわれている(汗)」

ダイ

「う〜ん、ドラゴンボール風にいうと、戦闘種族サイヤ人みたいなものか〜」 お〜い(笑)

ハツク

「サイヤ人?(なんだそれ?) しかし、以前は恐怖の種族の象徴みたいな天空族だったが・・・今ではみんなの憧れの存在になっている(ふふふっ)」

ダイ

「・・・なんでまた?(大汗)」

ハツク

「その理由とは・・・これだー！ー！！(叫び)」 店頭
に平積みされている冊子を手にとってダイに突き出す

ダイ

「こ、これは!?(大汗)」(どびっくり)

レイチエル

「優子ちゃんシリーズハイパープラス『優子ちゃんの翼は純白なのよ(ハート)』……発行元:ルシフ屋創本舗(大汗) あう、このシリーズ……まだ続いているんだ……(びっくりだよ)」

ダイ

「ふふっ……、優子ちゃんのかわゆさは時代を超越して受け継がれるのさ てか……、優子ちゃんとその天空族との間に、どういった関係があるんだ?」(写真の人も、優子ちゃん似の金髪さなんだが……)

ハツク

「いや、どういった関係って……(大汗)」

アクロ

「このシリーズにある優子ちゃんとは、天空族の長……天空神サファイアさまだ(汗)」

ダイ

「だから、その天空神サファイアさまと優子ちゃんの関係は!?(大汗)」

2コマ

突然の登場

優子 (サファイア)

「もちろん、同一人物だよ」

(ぎゅゅゅゅっ)

ダイの背

中から抱きつく(シーライトを届けた帰り)

ダイ

「どわあああー！ー！(どびっくり)」「(な、なんだ?)

アクロ

「ゆゆゆ、優子・・・ちゃん!? (どきどきどき)」「ファン
です

ハック

「す、すげえ、本物だ〜(感激だぜ〜)」「同
じくファン

優子 (サファイア)

「どうも〜 (よろしくね)」「

レイチエル

「あつっ！ いつまで抱き付いているつもりですか・・・ダイから
離れて!! (むかつ!)」「ダイと優子を引き離す

優子 (サファイア)

「つととと(汗) いや、レイチエルさんもお久しぶりね〜
にっっ)」「

レイチエル

「あう!?! わたしのこと・・・知ってるんですか!! (どびっく
り)」「

優子 (サファイア)

「知ってるもなにも・・・(苦笑)」「

ダイ

「あああ・・・(大汗) ほ、本当に・・・優子ちゃん?(どきどきどき)」(たしかに優子ちゃんっぽいけど・・・)

優子 (サファイア)

「そうよ」 ダイちゃんのお隣りに住んでいた同じ年で幼馴染み・・・。如月優子、当年とって五千十八歳 (じゃじゃ〜ん)」

ダイ

「五千・・・(汗) てか、嘘だーーーーー! 優子ちゃんなら・・・本物の優子ちゃんならオレのことももの凄く嫌っていて、半径1メートルの距離に近づきでもすれば、問答無用にケリが飛んでくるはず!!! (大汗)」

優子 (サファイア)

「やだな〜、大切な幼馴染みにそんな酷いことしないよ〜」(あははっ)」 五千年前はそんな酷いことをしていた人(笑)

ダイ

「絶対偽者だ! 優子ちゃんがオレに対してこんなに優しいはずがない!!! (わぎゃーーーーー!!!)」

優子 (サファイア)

「って、なによそれーーーーー!!! (涙)」

効果音「ずががーーーーーん!!!」

3コマ

数分後・・・

レイチエル

「あう~~~~(じい~~~~っ)」 ダイと優子の様子をジト目で見つめている

優子 (サファイア)

「そっか、ダイちゃんたちは五千年前からこの時代に時空間転移してきたのか~~~~(なるほどね~)」

ダイ

「そういうこと。四聖界を崩壊から救うため・・・あるアイテムを探しにな〜(汗)」 優子の雰囲気あまりにも違いすぎて戸惑っている

アクロ

「ご、五千年前・・・(大汗)」

ハツク

「おいおい、マジなのか〜?(どきどきどき)」

アメトリン

「五千年前っていうと〜、この聖界が創造されたころ!?(どびっくり)」

優子 (サファイア)

「そうだよね〜。ダイちゃんは普通の人間族だから、とっくの昔に死んじゃってるはずだし・・・(ぼそっ)」

ダイ

「って、死んでるのかよオレ!?(大汗)」

優子 (サファイア)

「そりゃそうでしょう。人間族の寿命なんて、7〜90年が普通だし(地域にもよるけど)」

ダイ

「それは・・・そうなんだが・・・(ときどきどき)」

優子 (サファイア)

「わたし、ダイちゃんにはもう会えないって思っていたんだ。だから、今はすごく嬉しいの。ねえダイちゃん、もう一度・・・きゅって抱きついていい?(えへへっ)」(懐かしいよ)

ダイ

「え・・・?(汗) いや、その、なんていうか・・・(でれでれ)」 以前から優子に惚れています

レイチエル

「あうっ、ちよつと待ったー！ー！(叫び)」 ダイと優子の間に割って入る

ダイ

「えっ? レイチエル・・・?(大汗)」(どうしたんだ?)

4コマ

レイチエル

「たしか優子はダイをもの凄く毛嫌いしていたはず・・・。それなのに、どーしてダイに抱きつこうとするの!!!(がああああ!!!)」

「

優子 (サファイア)

「そう・・・ね。五千年前・・・わたしが自分をまだ人間族と信じて疑わなかったころ、ダイちゃんのわたしに向けてくれている好意が　とても辛かった時期もあった。それは、わたしにはお兄ちゃんという心に決めた人がいたから・・・。お兄ちゃんには、わたしとダイちゃんが仲良くしている姿なんて、絶対に見せたくはなかった・・・。でも・・・、お兄ちゃんが死んでしまつて　わたしのダイちゃんに対する見方が徐々に変わってきたの・・・ (照れ)」

ダイ

「・・・え？ (もしかして)」

優子 (サファイア)

「ダイちゃんは、ずっとわたしだけを見てくれていた・・・。それは、とても幸せなことだつて　やっと気づいたの」

ダイ

「おお～～～　ついに、オレの気持ちが届いたのかーーーーー！」

レイチエル

「そ、それって両思い・・・ (ぼそっ)　あうあわわっ! (大汗)
「 (まずい、まずい、まずいーーー!)」

優子 (サファイア)

「わたし・・・ダイちゃんのことを・・・ (ぼっ)」

ダイ

「はいっ!! (叫び)」　　期待度MAX!

レイチエル

「だ、ダメー！ー！ー！ー！(涙)」(わたしのダイが！！)

優子 (サファイア)

「お兄ちゃんが死んでから・・・なんともおもわなくなっちゃった
」(てへっ)」

ダイ

「・・・・・・・・・・。へ？(汗)」(大好きとかじゃなく?)

レイチエル

「・・・あう？(あれ?)」(どきどきどき)

優子 (サファイア)

「いや、ほら・・・。わたしってば見ての通り天空族だったみたい
で、人間族のダイちゃんとは種族が違うことになるのよ。そう考
えると、ダイちゃんとは何の進展も無いわけじゃない？ まさにあ
りえないって感じで・・・(ぼそっ)」

ダイ

「あ、ありえない!?(がーん!)」

優子 (サファイア)

「わたしは、ダイちゃんのこと好きでも嫌いでもない・・・。だか
ら、ダイちゃんに抱き付いても全然平気なの。さあ、ダイちゃん、
ぎゅ~~~~とさせて (にゅっ)」

レイチエル

「あう、優子・・・(汗) それ以上ダイの心の傷に・・・荒塩
をすり込まないで・・・(ぼそっ)」

優子 (サファイア)

「え？(汗)」

ダイ

「うおおおー！(泣) こんなんだったら、嫌われていたと
きのほづがマシだったー！ー！ー！(うにゃー！ー！ー！)」

優子 (サファイア)

「あ、あれ？(大汗)」

悪気はありません

効果音「ばきゅ~~~~~ん!!」

コメント

優子のターン！ 改心の一撃……。ダイの心に5000ポイン
トのダメージを与えた!! (爆)

第167話 へっぽこは最初から狙われていました

4コマ劇場 アイオライト―527・・・2011/06/17
シリーズ3

タイトル「へっぽこは最初から狙われていました」

1コマ

ルルルクオーツ王都にて・・・

優子（サファイア）

「それで、ダイちゃんたちは四聖界崩壊を防ぐため・・・时空族の遺産を探している？」

ダイ

「そういうこと・・・。離ればなれになろうとしている4つの聖界を固定させるために必要なものだから、それこそ新しい聖界を創造するときの中心核となりうるほど強力な何かが必要となる。つまり、その『何か』こそが时空族の遺産だという結論に辿り着いたわけさ」

レイチエル

「あうっ・・・。スファレの持っていた時の宝珠は、期待していた1千分の1も力がなかったの（しくしくしく）」 結局、貰わなかった

優子（サファイア）

「なるほどね〜。着目点はなかなかだと思っただけど・・・結論は微妙だね〜（う〜ん）」

ダイ

「び、微妙って・・・（汗） これでも、オレたちなりに必死に考えて・・・（苦笑）」

優子 （サファイア）

「そんなどこにあるかわからないアイテムを探すより、聖界を創造できる十四創神に頼んだ方が早いと思うんだけど・・・（ぼそっ）」
限りなく小声で呟く

レイチエル

「あう？（な〜に？）」

優子 （サファイア）

「ううん、なんでもないよ。面白くなりそうだから黙ってしよう・・・なんて思っていないから」（あははっ）」

ダイ

「・・・はい？（大汗）」（面白って・・・）」

説明文「ちなみに、優子と同じ考えに辿り着いたカナリーは、ラルド（時空神）の元へ残っています」

2コマ

レイチエル

「あう・・・。優子〜、あなたこの時代では偉い立場の人（天空神）なんですよ。強力な時空族の遺産がどこにあるのか 知らない？」

優子 （サファイア）

「そうね〜・・・（う〜ん） 時空族の遺産ってほぼ例外なく国宝

級のお宝にされているからな。それでも、そんな強力な時空族の遺産の話は聞いたことがないわね。」「(汗)」

ダイ

「そつかく、優子ちゃんでも知らないとなると・・・、この聖界にも無いかもしれないな。」「(困ったな)」

レイチエル

「でも、しばらくはこの聖界で探してみるつもりなんだよね。」「汗)」

ダイ

「うん。ただ発見されていないってだけで、迷路深くに眠っているって可能性もあるからな。」「

優子 (サファイア)

「迷路深く・・・。あ、そうだ。わたしは知らないけど、もしかすると知っているかもって人(?)に心当たりがあつたんだ。」「

ダイ

「優子ちゃん、それ本当!?(どびっくり)」

優子 (サファイア)

「元十四創神の一人、光竜アレキサンドライト・・・。ドラゴンって種族は多かれ少なかれ収集癖があるわけだけど、このアレキサンドライト・・・アレクさんは、いろんな聖界を旅しながらその聖界にしかないお宝の収集を趣味にしているの。」「

ダイ

「光竜・・・アレキサンドライト? どっかで聞いた名前だな。」「

(大汗)「」

レイチエル

「あうう、わたしも聞いたことがある・・・(どこだったかな?)」

優子 (サファイア)

「あらかたのお宝を集めたら次の聖界へ移る・・・。そんな生活ばかりしているもんだから奥さんに愛想を尽かされちゃって、だいぶ前から別居中・・・って噂を聞いたことがあるわ(苦笑)」「(なんていうか)『なんでも鑑定団』的な展開?)」

ダイ

「奥さんと 別居・・・って、あああああ!!(思い出した!!)」「」

レイチエル

「あうう!アレキサンドライトって・・・たしかミントベリルさんの旦那さん!?(どびっくり)」「」

優子 (サファイア)

「あれ・・・、もしかしてアレクさんの奥さんと知り合いなの?(大汗)」「」

ダイ

「あう、ミントさんってば、四聖界に住んでいるからなう(苦笑)」「」

効果音「ずがが—————ん!!!」

優子（サファイア）

「それなら話は早いかもね。今、アレクさんはこの聖界にあるラリマーって国に住んでいるらしいの。アレクさんに聞けば、この聖界どころか・・・他の聖界のお宝のことも聞けるかも。それに、もしかしてだけど、アレクさんのコレクションの中に、聖界の中心核となりうる時空族の遺産があるかもしれないんじゃないかな〜」

勝手な想像だけど・・・（ぼそっ）

ダイ

「なるほどね〜・・・。可能性は高そうだな・・・（じくり）」

レイチエル

「あつっ、目指すはラリマーに住む光竜アレキサンドライト さつそくみんなで出発しましょう（お〜〜っ）（「」

アメトリン

「って、ちょっと待ちなさいよ！！（叫び）（勝手に決めるな〜！）（「」

レイチエル

「あつ？」（どうしたの？）（「」

ハックマナイト

「ラリマーという国は、世紀末救世主伝説に出てくるような暴力が支配する弱肉強食の世界・・・（じくり）」（お〜い（笑）

アクロアイト

「ボクたちが行くのは、あまりにも危険すぎる・・・（大汗）」

アメトリン

「それに、ラリマーってルチルクオーツに戦争を仕掛けようとして
いるって噂のある国でしょ？ ラリマーに行つて、もし捕まりでも
したら、ルチルクオーツに攻め込む口実を与えちゃうことになるん
じゃない？（汗）」

レイチエル

「あう~~~~（汗） でも、アレクさんに会わないと、時空族の
遺産についての情報が~~~~（大汗）」

ダイ

「~~~~（う〜ん） じゃあ、こつしよう」

レイチエル

「あう？」

ダイ

「ルチルクオーツの国民じゃないオレがラリマーへ入り込んで、光
竜アレキサンドライトに会つて情報を聞いてくる！」

レイチエル

「あうっ！ それならわたしも！！（汗）」

ダイ

「いや・・・、レイチエルはこの王都に残つていつも通りの方法で
時空族の遺産について情報を集めてくれ。四聖界崩壊までそれほど
時間は残されていないんだ。手分けしたほうが効率的だろ？」

レイチエル

「で、でも~~~~（あう~~~~）」

4コマ

ダイ

「大丈夫！ オレにはグランゾルやアウイナイトがついている。もし戦いになったとしても、なんとかなるさ」

レイチエル

「あう〜……。でも、アウイナイトって、例のごとくバッテリー切れで休眠中だよね（ぼそっ）」

別空間（異次元）にて……

アウイナイト（ぬいぐるみ）

青龍の機獣神アウイナイト

『すぴー〜〜っ（ねむねむ）』

元の空間にて……

ダイ

「な、なんとかなるさー！（大汗）」（どきどきどき）

優子（サファイア）

「……（じい〜〜っ）へえ〜、こっちの世界ではダイち

ゃんってかっこいいんだ〜（ぼそっ）」（ぼそっ）「すぐく見直した？」

ダイ

「……ぬ？（なにか言った？）」

優子（サファイア）

「うっん（ぶんぶんぶん）なにも〜（苦笑）」

レイチエル

「あう~~~~(じと~~~~っ)」「　　ダイと優子をジト目で見つめる

優子 (サファイア)

「でも、やっぱりダイちゃんだけじゃ心配かな。せめて、あと2〜3人は仲間がいないと・・・(うん)」

突然の登場

アリス (フォスフォファイライト)

「だったら、このへっぽこ・・・あたしたちが貰っていくね~~~~」

(へっぽこ勇者、ゲットだぜ)」「　　ダイの背中から抱き

つく

ダイ

「どしえー~~~~!!!(びく~~~~っ!)(~~~~)再び背中に柔らかな感触が!?)」

レイチエル

「あうあわわあああ!!!(どびっくり)」「

優子 (サファイア)

「アリス・・・(あなたって人は・・・) あ、そういえば、アリスたちもラリマーに潜入するって言ってたわね・・・(汗)」

アクロ

「えっ、フォスフィ・・・(大汗)」「(本当なのか!?)」

アリス (フォスフィ)

「ラリマーへ潜入してアレキサンドライトを見つける……。目的はダイとまったく同じ!!(ぎゅ~~~~っ!)(どつだ、まいったか~~~~)　　ダイを本気で締め付けている

ダイ

「痛い痛い痛い!?(ぎゃ~~~~す!)」

レイチェル

「あうっ、だったらわたしも行く~~~~!!(うにゃ~~~~っ!)(ダイから離れて~~~~!!)」

アリス (フォスフィ)

「あははっ、良いではないか良いではないか~~~~(ぎゅぎゅ~~~~っ!)」

ダイ

「死ぬ死ぬ死ぬ……。あ、ちょっとだけ……。気持ちよくなってきた……。かも(かくっ)」　　堕ちました(意識を失いました)

レイチェル

「だ、ダイ~~~~!!?(泣)」「いやああ~~~~!!)」

アリス (フォスフィ)

「あはははははっ (大爆笑)」

効果音「ずがが~~~~ん!!)」

コメント

アクロたちドラゴンファングのメンバーは、フォスフィの変貌に戸惑っています（笑）

第168話 はたして無事に出発できるのか？

4コマ劇場 アイオライト―528・・・2011/06/21
シリーズ3

タイトル「はたして無事に出発できるのか？」

1コマ

サNSTOON（招き猫）の館にて・・・

美咲

「なるほど・・・（ごくり） 見事なへっぽごぶりですね・・・（
どきどきどき）」

アリス（フォスフォファイライト）

「でしょ～～～」（笑）

ダイ

「へっぽごいうなーーーーー！！（涙）」（わぎゃーーーーー！！）
強引に連れてこられた

パロットクリソベリル

「たしか、巨大ロボット 超獣神の操縦者で・・・（汗）」

スファレライト

「レイチエルの・・・彼氏さん？（ぼそっ）」

レイチエル

「え？（ぼっ）」 一応ついてきた

ダイ

「彼氏じゃねえええーよ！！（怒）」（あくまでもパートナ
ー！！）

レイチエル

「あうー！ー！ー！！（涙）」（そんなー！ー！ー！！）

効果音「ずががー！ー！ー！ーん！」

2コマ

アリス（フォスフィ）

「それで・・・、ラリマーへはどうやって行くつもりなの？ 空
を飛んでいけば・・・飛べない人はグランゾルに乗せてもらえば数
分で着くはずだけど、うちのおじいちゃん（ラルド）の方針で・・・
修行のために基本は歩きになると思うんだ」

グランゾル（ぬいぐるみ型）

『うむ・・・、それには賛成だ。便利だからといって乗り物代わり
にされたのではたまらないからな・・・（ぼそっ）』　これで
も四聖界の神

パロット

「こちらとしても、あのような金属の塊りに乗って飛ぶなどお断り
だな・・・。あんな得体の知れないモノが空を飛ぶなど・・・あり
えないだろ？（ときどきどき）」

ダイ

「得体の知れない・・・って（汗）　あ・・・、でも確かにグラン
ゾルがどうやって飛んでいるのか　よくわかんないんだよね」（
苦笑）」

グランゾル（ぬいぐるみ型）

『ちよっ、ダイ!!!（大汗）』（おまえまで何を言って!）

スペクトロライト

「あゝ、色んな方法があるようだけど・・・、普通にハーキマー山脈を越えて行くからな（汗）」

アリス（フォスフィ）

「ハーキマー山脈?」

スフェーン（ペンダント）

「・・・ハーキマー山脈とは、ルチルクォーツとラリマーを分断するように聳える山々で、砂漠地帯をさらに進んだ山岳地帯・・・エリアFのことね」（ぼそっ）」

パロット

「スフェーン、おまえ・・・洞窟に引きこもっていたわりに、よく知っているな」（関心するぜ）」

スフェーン（ペンダント）

「ふん！ 引きこもりじゃないやい!!」（むっ）」

3コマ

アリス（フォスフィ）

「とにかく、まずはラリマーに向けて出発しましょう 後のことは、そのときになって考えればいい・・・」（にやり）」

パロット

「おいおい、適当だな」（苦笑） まあゝ、アリスの言うとおりな

んだけど……(ふふうん)」「こいつも適当な性格

ダイ

「よっしゃー！ さっさと行って、光竜アレキサンドライトに
会うぞー！ー！ー！(おー！)」 何も考えていません(笑)

ロードライト

「……(汗) え〜と……スペクトロさん?(ど
きどきどき)」

スペクトロ

「ぬ?」

ロードライト

「三人のこと(面倒)……よろしくお願いします(ペリリ)」

スペクトロ

「って、わたしがかー！ー！? (どびっくり)」 ラリマ
「潜入メンバーの中で一番まとも?(爆)」

効果音「ずがー！ー！ー！ー！ーん!」

パロット

「それじゃあ、後のことは頼む……」

スファレ

「はいはい 行ってらっしゃい(にこ〜)」 妙に聞
き分けがよい(笑)

パロット

「……………(汗) スファレ……………(ぼそっ)」

スファレ

「はい?(なにかな?)」

パロット

「いいか? くれぐれも、後からついて来る なんてことはする
なよ……………。絶対にな!!」(ギロリ)」

スファレ

「うゝわあ! バレちゃってるよゝ!!」(どびっくり)「(なんでわ
かったんだろ!?)」

パロット

「って、マジでついて来るつもりだったのか!」(うぎゃ……………
!!)」

スファレ

「だって……………!!」(涙)「(やっぱりわたしも行きたいし……………
……………!)」

4コマ

アリス(フォスファイ)

「あははっ(苦笑) やっぱいいコンビだね……………」(ポケと
ツッコミのバランスがちょうど良い?)」

ファリス

精霊神でサンストーン(招き猫)の館の管理人

「アリス……………(ちよっど)」

アリス(フォスファイ)

「ファリスさん、なに〜?」

ファリス

「あなたに、コレを渡しておきます・・・(すーっ)」
何か
を差し出す

アリス(フォスファイ)

「えっ! こ、これって!?(どびっくり)」

ファリス

「・・・・・・」
大きくて綺麗な宝石をアリスに渡す

アリス(フォスファイ)

「これって・・・、あたしの・・・風の精霊石(汗)」

ファリス

「あなたのことだから、これが必要になってくるとは思わないけど・・・念のため持って行きなさい。今のあなたなら、これを使うことができるでしょう・・・」

アリス(フォスファイ)

「でも、この身体の元人格であるフォスファイは、ファリスさんの五精霊じゃないわけでしょう?(汗) いくらあたしの意識があつたとしても、この身体で五精霊化したらフォスファイって子・・・死んじゃうんじゃない?(どきどきどき)」(あたしはもう死んじゃつてるからいいけど・・・)

ファリス

「だ〜か〜ら〜、念のためだつて〜(苦笑) この聖界で五精霊化するような事態に陥ることはまずないでしょうし」

アリス（フォスフィ）

「突然、魔界からどこかの魔王軍が攻めてくる・・・」

ファリス

「あゝ・・・（汗）　ここ最近、きな臭い噂を聞くことも・・・あ
るかなゝゝゝ（大汗）」

アリス（フォスフィ）

「あるいは、何かの拍子に暗黒族が復活して再び魔獣化事件が起
こっちゃう・・・とか（ぼそっ）」

ファリス

「えゝつと、それ・・・笑えないから（大汗）」（どきどきどき）

説明文「魔獣化事件は、アリスが生きていた時代の人間界で起こっ
てパニックとなった。リウムが誕生した事件でもある・・・が、何
にしても『最強の勇者はヒーラーでレベル1』にはあまり関係あり
ませ・・・いや、あるのか？（爆）」

コメント

五精霊とは、精霊神を護る守護精霊のことで、精霊界では神とし
て崇められています。

ちなみに、精霊神ファリスの五精霊は、光のシヨウ、風のアリス、
大地のルウー、炎のシン、水のユウコ（優子とは別人）です。

第169話 エルバイト大妄想！

4コマ劇場 アイオライト―529・・・2011/06/24
シリーズ3

タイトル「エルバイト大妄想！」

1コマ

サンストーン（招き猫）の館にて・・・

パロットたちが出発して数時間後・・・

ロードライト

「・・・パロットさんたち、いつちゃいましたね〜）はぁ〜（
ちよっぴり寂しい

スファレライト

「うん・・・」 気の無い返事

ロードライト

「・・・で、スファレさんは・・・どうするつもりなんですか〜？
（ぼそっ）」

スファレ

「もちろん、パロットたちに気づかれないよう後をつけて！・・・
と言いたいところではあるんだけど〜（苦笑）」

ロードライト

「あれ？ 追いかけないんですか？（意外です）」

スファレ

「うーん、パロットだけに迷惑がかかるってのなら、間違いなく追いかけるんだけど……。下手をすれば戦争になるかもしれない状況において、軽はずみな行動はできないでしょ？（大汗）」

美咲

「スファレさん、良い判断です（うんうん）」

桜（フローライト）

「スファレちゃん、えらい（にこ〜っ）」

スファレ

「あ〜……。汗） そんなことで褒められても……。苦笑）」

ジェムシリカ

「まあ、ラリマーでの情報収集は、パロットくんたちに任せましよう（にこり）」

スファレ

「そう……。ですね（うん） ところで、シリカさま？」

シリカ

「はい？（なんですか？）」

2コマ

スファレ

「シリカさまと桜ちゃんは……。この館に住むってことでよろしいんですよね？」

シリカ

「はい……。わたしの病状を抑えるためには、桜ちゃんから時空力を供給してもらわないといけません。ですが、桜ちゃんと離れすぎると時空力の供給がストップしてしまいます。さすがにお城に住むわけにもいきませんから（桜ちゃんもちびっ子化してますし）、ご迷惑と思いますが……。しばらくの間、この館でご厄介になります（ペこり）」

スファレ

「シリカさまなら大歓迎です　ね、ロードライト　（にこっ）」

ロードライト

「はい　シリカさんに住んでいただければ、この招き猫の館の格もますます上がります」

ファリス

「え、ロードライトちゃん……。一応、この建物はサンストーンの館ね（苦笑）」

ロードライト

「ああ、そうでした（苦笑）」（あははっ）

効果音「わいわいがやがや」

エルバイト

「……………はっ！（何かに気づく）　パロットが旅に出たことで女だらけの館に男はオレ一人！！　これって、ギャルゲーにはよくあるパターンで……。まさにハーレム状態！？（うお、すげえー！）

ロードライト

「あゝ、エルバイトさん・・・勘違いな思考が口から駄々漏れですよゝ（汗）」（なにがハーレムですか・・・）

3コマ

エルバイト

「こんな状態では、うっかり着替えをのぞいてしまったり」

スファレ（エルバイトの想像） 下着姿

『きゃーーーーっ、エルバイトのえっちゅーっ！（涙）』（あつちに行けーーーー！） 回想の中ではエルバイトと呼んでいる

エルバイト

「オレが風呂に入っていたら、誰かが間違えて入ってきたり」

シリカ（エルバイトの想像） タオルで前を隠しているが全裸

『あら、エルバイトさんが先に入っていたんですね・・・ですが、わたしも既に服を脱いでしまっています（困りました） なので、エルバイトさんさえよろしければ、お風呂・・・ご一緒しませんか？（にっこり）』

エルバイト

「うおおおお！ テンション上がったきたーーーーー！（うがーーーーー！）」

スファレ

「って、なんて想像してるかなーーーーー！！（いやーーーーっ！）（この変態ーー！）」

効果音「ずががーーーーーん！！！」

エルバイト

「そんなどつきイベントが続いているうちに・・・、そのうちにみんながオレのこと意識しはじめるんだ。そして、陰では女性陣によるオレ争奪戦が勃発！！（いや、まいったな〜）」

シリカ

「妄想、激しすぎですね・・・（どきどきどき）」

エルバイト

「だが・・・みんなすまない！！（叫び）」

シリカ

「えっ？（びくっ！）」

4コマ

エルバイト

「オレにはもう心に決めた人がいる・・・。だから・・・だからみんなの気持ちにはこたえられないんだ！！（かつ！）」
目を
見開く

スファレ

「やかましいわー！！！！（怒）」（がぎやー！！！！）

好きでもないのに、一方的にふられた状態？（笑）

シリカ

「・・・（汗）ちなみに聞きますけど・・・、アルバイトさんの心に決めた人とは？（誰ですか？）」

エルバイト

「ふふっ、もちろん我が麗しのエンジェル・・・シンセティックさんさ〜」

突然の登場

シンセティック

「えっ！（大汗） わ・・・わたしがどうしましたか？（どきどきどき）」
直前の会話しか聞こえなかった

エルバイト

「ししし、シンセティックさん！？（どびっくり）」（ぎゃーーーす！！）

ロードライト

「あゝ、お姉ちゃん、いらっしや〜い 今日はどうしたの〜？
もしかして、新たなDCの仕事が入っちゃったとか！？（汗）」

シンセティック

「あゝ、あなたたちの事情はある程度聞いていますから（パロットくんも留守なんだよね？）、緊急の要件以外・・・しばらくはDCも回さないから安心しなさい」（DCの仕事はたくさんあるけどね〜）

ロードライト

「じゃあゝ、持ち家の見回り？」

シンセティック

「まあ、そんなところ・・・かな？ ドラゴンファングとの勝負に負けたあなたたち招き猫勇者隊が出て行ったとき、この館をどう使おうか・・・その検討を含めての見回りね」

スファレ

「ちよっ、その勝負・・・まだ有効だったんですかーーーーー!?
(どびっくり)」

シンセティック

「当たり前でしょ・・・(なに今更なこと言ってるのよ)」
冗談言わない人

エルバイト

「し、シンセティックさん・・・。オレの気持ちを・・・どうか察
してください!!!(叫び)」 このタイミングでかーーーーー
!?(爆)

シンセティック

「え〜っと、なにが〜?(どきどきどき)」 伝わりませんで
した (笑)

効果音「ずががーーーーーん!!!」

コメント

招き猫勇者隊は、パロットと自分たちの館の使用権を賭けて勝負
しています パロットが勝った方のメンバーに、負けた方は
シンセティックとの専属契約切られ屋敷を出て行かないといけない。

第170話 全てが2倍速な世界

4コマ劇場 アイオライト―530・・・2011/06/27
シリーズ3

タイトル「全てが2倍速な世界」

1コマ

エリアD、砂漠地帯にて・・・

パロットクリソベリル

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・(汗) こゝろな〜に〜疲〜れ〜る〜だ〜な〜ん〜て〜、い〜っ〜た〜い〜ど〜う〜い〜う〜こ〜と〜な〜ん〜だ〜」

スペクトロライト

「って、えらいゆっくり喋るようになったな〜(大汗) 歩く速度もスローペースだし〜(苦笑)」

パロット

「お〜前〜ら〜こ〜そ〜早〜口〜早〜歩〜き〜じ〜ゃ〜な〜い〜か〜(大汗)」「(王)都〜を〜出〜て〜か〜ら〜ず〜っ〜と〜」

ダイ

「そ、そうだそうだ〜(汗) もっとゆっくり歩きやがれ〜」
大汗)」「ただバテているだけです(笑)

スペクトロ

「はあ？ 何いってるんだよお前たち・・・(どきどきどき)」

スフェーン（ペンダント）

「ねえ、アリス……。わたしの気のせいかもしれないんだけど・・・、パロットの周りにおかしな力の流れを・・・感じない？（大汗）」

」

アリス（フォスファイライト）

「ああ、気のせいじゃないよ」（スフェーンよく気づいたね）」

パロット

「ん・・・？ お〜か〜し〜な〜力〜の〜流〜れ〜？（汗）」

2コマ

アリス（フォスファイ）

「たぶん、おじいちゃん（ラルド）のしわざだと思うんだけど、パロットの周りに時空力を感じる・・・。これって、あたし自身も小さい頃に同じ修行をさせられたんだけど・・・、今のパロットは2倍速の世界で動いているの」

パロット

「はあ〜？（どきどきどき）」

ダイ

「えっ？（汗） 単に『』を使って文字数を稼いでいたんじゃないのかなったのか！？（大汗）」

アリス（フォスファイ）

「あははっ、違う違う（苦笑）」

効果音「ずががーーーーーん!!!」

スフエーン（ペンダント）

『に、2倍速の世界って？（汗）』

アリス（フォスファイ）

「あゝ、パロツト以外の全てが2倍速っていったほうがいいかな？
パロツトの持ち時間が1/2・・・通常の半分になっちゃっているの」

パロツト

「意〜味〜わ〜か〜ん〜ね〜え〜ぞ〜ぞ（大汗）」

アリス（フォスファイ）

「う〜ん（説明するの苦手なんだけどな〜）、例えば〜1分間って
60秒でしょ？ 今のパロツトには、それが30秒しかないわけ」

パロツト

「・・・は〜あ〜？」

3コマ

アリス（フォスファイ）

「時速300キロで走るF1マシンも、パロツトから見れば時速600キロで走るサイバーマシン（サイバーフォーミュラ）になるわけよ」

パロツト

「だ〜〜〜か〜〜〜ら〜〜〜（汗）」（意〜味〜が〜さ〜っ〜ぱ〜り〜）

アリス（フォスファイ）

「つまり、思考も2倍速、行動も2倍速、喋りも2倍速にしなければ

ば・・・あたしたちと同じ標準倍速にはならない。戦闘とかも2倍速でがんばらないと、今まで勝っていた相手に負けちゃうかもしれないよ〜〜（笑）」

パロット

「全〜て〜の〜行〜動〜を〜2〜倍〜速〜に〜・・・あ〜・・・、こ〜う〜い〜う〜と〜こ〜か？」 早口で喋ってやっと普通に聞こえます

アリス（フォスフィ）

「あ〜、上手い上手い」（さすがに呑み込みが早いね〜）

スフェーン（ペンダント）

『でもさ〜、そんなことをして・・・いったい何の意味があるの〜？』

スペクトロ

「いや、まて・・・（汗）もし、2倍速に慣れてしまえばパ

ロット自身が2倍の速度で動けるってことだよな？」

アリス（フォスフィ）

「そういうこと（スペクトロ賢い〜）逆に言えば、パロット以外・・・全ての速度が1/2となる（ぼそっ）」

パロット

「そ〜れ〜が可能なら、もの凄いことだな・・・（どきどきどき）パロット的には早口です

ダイ

「いわゆる、2倍界王拳みたいな感じだな」

パロット

「なんだよカイオウケンって・・・(汗)」
2倍喋りになれた(笑)

4コマ

アリス(フォスファイ)

「まゝ、結論から言っちゃうと、HDDレコーダーやHDDメディア
プレイヤーの動画再生には2倍速・・・最低でも1.3倍速が絶
対に必要なだってことよ!!(叫び)」

ダイ

「その意見には賛成だが、パロットの話とは全然関係ねええええー
ー！！！！(うがー！！！！)」

効果音「ずがー！！！！！！！！！！ん！！！！」

パロット

「あゝ・・・、なに言ってるんだこいつら・・・?(大汗)」

スペクトロ

「さ、さあゝ?(大汗)」

アリス(フォスファイ)

「いや、なんていうかさゝ、PS3の動画再生ってかなり微妙じゃ
ない?」

ダイ

「・・・?と、いひや?」

アリス(フォスファイ)

「動画を1.5倍速で再生すると、音声ガビガビになっちゃう……
(ぼそっ)」

ダイ

「ああ、あるある」

アリス(フォスフィ)

「PSPの方では音声滑らかに再生できて、しかも最大2倍速再生まで可能……。それなのに、PS3では1.5倍速までで音声ガビガビ！それが改善されれば、メインのメディアプレイヤーとして活躍できそうなのに 非常に残念！！(叫び)」

ダイ

「PSPできて、どうしてPS3ではできないんじやーーーーー
！！(うにゃーーーーー！)」

パロット

「あ、もしもし？(どきどきどき)」 理解不能 (笑)

スペクトロ

「おいパロット……。こいつら捨てていくぞ(ぼそっ)」(さっさと行こう)

パロット

「そ、そうだな……。(大汗)」

アリス(フォスフィ)

「さっさとアップデートで音声のガビガビ直しやがれーーーーー！！
！！(うがーーーーー！！)」

ダイ

「っっていうか、ストアの完全復旧・・・まだかーーーーー!!!」(叫び)
「まだだったよな?」(苦笑)

コメント

4コマ目は読まなくてもOKです (爆)

第171話 雪山でするじつといえば・・・

4コマ劇場 アイオライト―531・・・2011/07/01
シリーズ3

タイトル「雪山でするじつといえは・・・」

1コマ

エリアF、ハーキマー山脈中腹にて・・・

効果音「びゅーーーっ、ずぐーおーーー!!」 現在
のハーキマー山脈のお天気・・・猛吹雪 (笑)

ダイ

「あがががっ (がたがたぶるぶる) めめめ、めっさ寒いんですけ
どーーーー!! (涙) (うにゃーーー!!) (

パロットクリソベリル 全てを2倍速で行動しています (笑)
「まあ・・・、雪山だからな (ぼそっ) (そりゃ、寒いだろう)
全然平気そうです

ダイ

「簡単な言葉で片付けるなーーー!! (寒い寒い寒い) (

パロット

「身体の表面に精霊力を展開させて、寒さを遮断すればいいだろ?
(汗) (

ダイ

「そんな器用な真似できるかーーー!! (わぎゃーーー!!) (

「 限りなく一般人

パロット

「つて、できないのか!?(どびっくり) でも、この冷気を遮断しないと・・・死ぬぞ(大汗)」(厚着しているわけじゃないんだから・・・)

ダイ

「だから、死にそうだって言ってるだろーが!!(激怒)」

パロット

「そのわりに、元気そうに見えるのだが・・・(どきどきどき)」

ダイ

「元気じゃねええええよ!!(がたがたぶるぶる)」 いや、
元気そうですよ(爆)

説明文「ダイはへっぽこ勇者なので、凍て付くような寒さなんて平気です(ずががーん!)」

2コマ

効果音「びゅーんーん、ずんおーんーん!!」 猛吹雪

スペクトロライト

「しかし、来る時もあったんだが・・・こんな雪山のすぐ隣りにあの砂漠地帯が広がっているなんて、ルチルクオーツとは変わった国だよ~~~~(汗)」(ふう、やっと中腹かよ・・・) 精
霊力をコントロールしてるから寒さは平気

パロット

「まあ、変わった国かどうかは知らないが・・・環境の大きく変わるところでエリア分けされている。つまり、砂漠地帯のエリアDと山岳地帯のエリアFでは、まったく違っていいほど環境が違う・・・。エリアDは真夏のようだが、こちらは完全に真冬だからな（あははっ）」

ダイ

「地球温暖化現象はどうなったんだよ！！（寒くて死ぬー！！）」

パロット

「は？（どきどきどき）」（温暖化現象？）

ダイ

「あゝ、二酸化炭素の排出量が増えてだな・・・太陽熱を宇宙へと逃さないような状態になってしま・・・って、それより！！（汗）」

パロット

「おまえから話をふってきたんだろゝが・・・（大汗）」（よく叫ぶヤツだなゝ）

ダイ

「隣の国へ潜入するのに、どーしてこんな雪山に登らないといけなんだ！？（汗） 雪の少なかった・・・騎士団が監視していたあつち側から国境を越えれば楽だったんじゃないのか！！（大汗）」
後方を指差す

パロット

「そんなことをすれば、ラリマー側に気づかれてしまうだろう・・・（汗）」（向こうでも監視しているだろうし・・・）

スペクトロ

「同じ理由で、わたしたちがルチルクオーツへ潜入してくるときもこの雪山を越えて来たぞ（ぼそつ）　ルチルクオーツの国境警備団も、まさかこんな悪環境の山脈を越えてくるとは思わないだろうしな（笑）」

ダイ

「あゝあゝゝ、宇宙から地球を見れば、国境なんて線はどこにもないんだけどな（よ）（やれやれ）」

パロット

「なんだそれ？（汗）　つと、そういえばフオスファイ・・・アリスのヤツはどこへ行ったんだ？（きよるきよる）」

ダイ

「ん・・・アリス？（寒い寒い寒い）」

3コマ

効果音「びゅーーーっ、ずじゅおーーー！！」

猛吹雪

スペクトロ

「アリスなら・・・ちよつと前、この雪の積もり具合を見て『ちよつと先に行くね』という言葉だけを残し、もの凄い勢いで山頂を目指していったぞ（汗）」

パロット

「ちよつ、なぜ止めなかった！（汗）　こんな猛吹雪の中で一人になるなんて・・・自殺行為だぞ！！（大汗）」

スペクトロ

「そ、そうは思ったんだが・・・、止める前に姿が見えなくなってしまって〜」（うつつ）」

パロツト

「ま、まずいな・・・（汗）今のあいつが非常識な存在だとはいえ、たった一人の状態では遭難してしまうかもしれない。しかたない・・・、捜しに行くぞ！（大汗）」

ダイ

「捜しに行くって・・・相手はアリスだぞ〜（汗）心配しなくても、そのうちに戻ってくるさ（あははっ）」

パロツト

「あのな〜、確かにアリスはお前の知り合いかもしれないが・・・元の身体は新人冒険者のフォスファイライトなんだ。突然、フォスファイの人格に戻ったりでもしたら、あいつ間違いなくパニくるぞ！！（大汗）」

ダイ

「確かに・・・そうかもな（どきどきどき）」

スペクトロ

「あ〜、アリスを止められなかったのはわたしにも多少の責任がある・・・。もし、アリスに何かがあったとしたら、夢見が悪いからな〜（汗）」

パロツト

「よし、話は決まったな・・・。早速、捜しに・・・」

アリス（フォスフォファイライト） 上の方から声が聞こえてくる

「ひゃっほーーーーーお」

パロット

「えっ！ アリスー！（どこだ！？）」 猛吹雪の中、アリス

の姿を捜す

4コマ

効果音「ぎざぎざーッ、ぎざぎざッ、びゅーッ！」

アリスが板のような何かに乗って蛇行しながら下ってくる

アリス（フォスファイ）

「おりゃ、えい、どりゃーッ うん、少しか吹雪いているけど、気持ち良い〜」（ひゅ〜ん）」

スフェーン（ペンダント）

『いえ〜い アリス、もっとスピード出して〜』

アリス（フォスファイ）

「了解（加速！）・・・っと、パロットたちがいた。おい、パロット〜」（ぎゅッ！）」 パロットたちの前で急停止

パロット

「って、アリス！（汗）おまえ、何をやってー！（怒）」

アリス（フォスファイ）

「何って・・・スノーボーだけど？（ぼそっ）」

パロット

「すのぼ〜？（ときどきどき）」（なんだそれ？）

アリス（フォスファイ）

「スノーボード！ ウィンタースポーツの一つなんだけど・・・このボードに乗って雪の上を滑る遊びなの」

ダイ

「てめえ〜アリス！ 一人だけずり〜ぞ〜！！（怒）」

アリス（フォスファイ）

「なんならダイもやる〜？ 予備のボードも人数分あるし（ばばっ）」
虚空より、スノーボードを取り出す

ダイ

「おお〜、アリス、気が利くな〜」

パロット

「だから、遊んでいる場合じゃないだろ！！（うがーーーーー！！）」
「（一刻も早くラリマーへ行かないと・・・）」

アリス（フォスファイ）

「・・・（はあ〜） パロットって頭固いわね〜（やれやれ）いい？ 何も無い雪山をただ登るだけなんて、はつきり言って拷問にしかない。でも、スノーボーディングという目的があると あら不思議・・・。雪山登山も急に楽しくなる（ほら、ダイを見なさい）」

パロット

「……………(すうーっ)」

ダイに視線を向ける

ダイ

「よっしゃー！ スノボーなんて久しぶりだけど、滑りまくるぞー！ (いえーい)」 さっきまで寒くて死にそうだった人(笑)

アリス(フォスファイ)

「パロツト、もう少し肩の力を抜きなさい……。この状況を少しぐらい楽しんだからといって、世界が終わってしまうわけではないでしょ (にっこり)」

パロツト

「……ふっ、確かにその通りだな……(微笑) よし、アリス・オレにもすのぼるとやらを教えてくれ」

アリス(フォスファイ)

「うん (にやり) (ふふっ、計画通り)」

スペクトロ

「おーい、パロツト。おまえ、上手いこと言いくるめられているぞ……(大汗)」

パロツト

「え？(汗)」

コメント

この後、スノボーで遊びはじめたパロツトたちは、約5時間かけて登った雪山を20分程度で滑り降りました (スタートに戻る)

第172話 パロットたちの様子を覗き見してみよう

4コマ劇場 アイオライト―532・・・2011/07/04
シリーズ3

タイトル「パロットたちの様子を覗き見してみよう」

1コマ

サンストーン（招き猫）の館、スファレライトの部屋にて・・・
（真夜中）

スファレライト

「うん・・・、うんん！！（汗） ああ、パロットたちのことが心配で眠れやしない！！（身体を起こす！）・・・。
はあ、気にしても仕方ないことだとはわかってるんだけどな。
っ。 やっぱり、わたしも後を追っかけようかな・・・（ぼそっ）
って、やっぱりダメだよな」（苦笑） もうパロットたちのことは忘れて寝てしまおう・・・と、その前に」
ベッドから降りて部屋から出ていく

サンストーン（招き猫）の館、1階にて・・・

ファリス

「・・・（じいじっ）」
神秘的な雰囲気で、窓越しに星空を見上げている

スファレ

「・・・ファリスさん？（汗）」
ファリスの様子に、呼びかけるのを躊躇ってしまう

ファリス

「あら、スファアレさん。こんな時間に、いったいどうしたの？(にっこり)」

スファアレ

「え〜っと……。寝付けないから、お水を一杯もらおうかな〜って(えへへ〜っ)」

ファリス

「やっぱり、スファアレさんもパロットくんたちのことが気になるのね〜(うふふっ)」

スファアレ

「いやっ！ そっとうわけでは〜。。。 (どきどきどき)」

ファリス

「それじゃあ、こっそりとパロットくんたちの様子を覗いてみましょうか？」

スファアレ

「えっ、そんなことができるんですか!？ (どびっくり)」

ファリス

「今のフォスフィさんは、前世での人格……。アリスが表に出た状態になっています。アリスはわたしの五精霊の一人ですし、彼女に風の精霊石を渡してあります。いうなれば、今のわたしとアリスはリンク状態にあり、その様子も広範囲に亘って知ることができるんです」

スファアレ

「そ、そうなんですか！（汗）　ファリスさんって、やっぱり本物の精霊神さま・・・（ごくり）　ええ〜っと、ファリスさん・・・パロットたちの様子・・・、見せていただけませんか？（お願いします！）」

ファリス

「わかりました・・・。ですがその前に・・・、ちゃんと服を着てきなさい（汗）」（女の子が何て恰好をしているんですか！）

スファレ

「へ？（大汗）」

例のごとく下着姿です

効果音「ずががー！ー！ー！ん！！」

2コマ

数分後・・・

ファリス

椅子に座っている

「え〜っと、最初に断わっておきますがこのことはあまり口外しないでくださいね（汗）　あと、プライバシーの関係もあります・・・映像および音声時々途切れることもあります。ですが放送事故ではありませんので抗議の電話はご遠慮ください（にっこり）」

スファレ

同じく

「抗議の電話って・・・（ときどきどき）」（意味わかりませんよ）

ファリス

「それでは、VTR・・・スタート」

説明文「半透明の巨大モニターに、カウントダウンが映し出される」

スファレ

「あ、どこかの様子が映った……。これって湯気……。お風呂！
？（どびっくり）」

ダイ（映像）

ギリシャ彫刻のように引き締まった肉体

『ふう〜〜、極楽、極楽』

何故かお風呂に入っている

ファリス

「うおっと！ いきなりきわどい映像ね〜〜（苦笑）」

スファレ

「あ〜、これってプライバシー的にアウトなんじゃ〜（照れ）」

遠慮がちにチラ見

ファリス

「いや、ギリギリセーフ！ 読者サービス（女性向け？）よ！！」

スファレ

「っていうか、どうしてお風呂なんかに？ パロットたち、いまだ
ここにいるんですか！？（大汗）」（もうラリマー入りしたの？）

ファリス

「え〜っと、GPSの反応を見ると……。ハーキマー山脈の
山頂辺り？」

スファレ

「まさか、山頂に宿屋でもあるんですか！？（どびっくり）」

ファリス

「おそらく、アリスが万年氷に穴を開けて、住居スペースを作ったんでしょっかね〜（汗）」 正解です

スファレ

「め、めちゃくちゃだな〜〜（どきどきどき）」

3コマ

スペクトロライト（映像）

『ところでシーラ……。おまえ、メンテナンスは必要ないのか？（汗）』

シーライト（映像）

サファイア（優子）によってファンシ

機能が追加された暗殺人形

『わちきのボディーは、基本メンテナンススフリーだよ。まあ、戦闘によって破壊されたりしたら、パーツ交換とかご主人にお願いしたいわけだけど』

スペクトロ（映像）

『って、そんなんでいいのか？（大汗）』

スファレ

「あれ？（汗） ダイとスペクトロはいたけど、パロットとアリスはどこに……。はっ！（汗） まさか二人つきりになって少年少女には見せられないような18禁な展開に！！（どきどきどき）（パロットやるな〜）

ファリス

「ああ〜、もお〜興奮しないの！！（そんなに騒いだら近所迷惑でしよー！）」

スファレ

「だ、だって〜（にやにや）」

ファリス

「確かに・・・18禁な状況になっているかもしれないわね〜
（汗）」

スファレ

「きゃ〜〜っ
」

ファリス

「ただし・・・、スファレさんが想像しているようないやいや
ラブラブ系な展開ではなく・・・、この作品には残酷なシーンが含ま
れています的な18禁の方ね（ぼそっ）」

スファレ

「す、スプラッター！！（どびっくり）」

効果音「ずががーーーーーん！！！」

4コマ

ファリスの展開した異空間バトルフィールドの様子が映し出されてい
る・・・

ファリス

「この異空間はバトルフィールドといって、外界とは完全に断絶さ
れた空間になっていて、主に修行や決戦の場として使われることが
多いの・・・。二人は間違いなくこの中でしょうね〜」

スファレ

「あんな狭い氷洞の中にこんなただっ広い空間があるなんて・・・信じられない！（汗）」（しかも、岩場で雪すら降ってない!?)

ファリス

「だから、バトルフィールドの中は異空間だって（苦笑）」

効果音「ずごくおおおーん！！」
突然、爆音が響いて遠くに土煙が立ち昇る

スファレ

「ひゃっ！（どきっ！）な、なに・・・（どきどきどき）」

ファリス

「どうやらあっちの方にいるみたいね・・・。え〜っと、方向転換して前へ進む・・・っと（ぱぱっ）」
手持ちのタッチパネルでカメラ操作する

スファレ

「え〜、ファリスさん・・・。ちなみに、その手に持っている機械って・・・（汗）」

ファリス

「ああ、これ？ これは、今度発売されるゲーム機 WiiU のタッチパネルコントローラ（じゃじゃ〜ん）
アリスちゃんっ
てば任天堂の宣伝部長でもあるから、事前に借りることができたの
」（にこ〜っ）」

スファレ

「いや、別にどうでもいいんですけどね・・・（WiiU?）
あっ、あそこに立っているのって・・・アリス!!」（汗）」

アリス(フォスフォファイライト) 映像です

『……………(ギロリ)』 土煙を睨みつけている

ファリス

「あらあら。バリバリの戦闘モードね……………(大汗)」

スファレ

「戦闘モードって(汗) いったい何と戦って……………(大汗)」

ファリス

「それはもちろん……………パロットくんでしょう (笑)」

スファレ

「え……………?(汗)」

説明文「土煙が晴れて、血だらけで地面に転がるパロットの姿が現われる」

パロット(映像)

『……………(だくだくだく)』 血だらけでピクリとも動きません

スファレ

「いやあああああー！ スプラッターー！ー！！(涙)」
(うにゃー！ー！ー！ー！ー！)

コメント

今週の『バグマン。(原作)』を見て……………。消去法で考えると

同率1位で連載は続くことに？（勝手な予想）

第173話 いちおう修行のつもりです

4コマ劇場 アイオライト―533・・・2011/07/05
シリーズ3

タイトル「いちおう修行のつもりです」

1コマ

アリスの展開したバトルフィールド（岩場）にて・・・

アリス（フォスファイライト）

「……………（じい〜〜〜っ）」 聖剣クリソベルルの切
っ先を、地面に転がるパロットに向けている

パロットクリソベルル

「……………（だくだくだく）」 血だらけでピクリとも
動かない（笑）

アリス（フォスファイ）

「う〜ん……………（大汗） え〜っと、パロット……………生きてる〜？
（どきどきどき）」

スフェーン（ペンダント）

『って、アリスちょっとやりすぎでしょー！ー！ー！（涙）』

アリス（フォスファイ）

「あははっ……………（汗） だって、アウインの勇者を名乗っている
のに、こんな弱いとは思わないじゃない（苦笑）」

スフェーン（ペンダント）

『あなたの強さが非常識なんだってー！ー！ー！(わにゃー！ー！)』

アリス(フォスファイ)

「でも、パロットはおじいちゃん(ラルド)の修行を受けている)2倍速で行動)。つまり、あたしにとってパロットは弟子も同じ……。強くなりたいっていうのなら、協力しなくっちゃ。ほらパロット……。さっさと起きる！(つんつん)」
聖剣でパロットの身体を突く

パロット

「う……。ううっ(痛っ)」。刃こぼれしてボロボロな鋼の剣を支えに立ち上がる

2コマ

スフェーン(ペンダント)

『パロット！(大丈夫！？) よし、こうなったら！！(ぴかー！ーっ！)』
光に包まれたペンダントがパロットの元へと飛んでいく

アリス(フォスファイ)

「す、スフェーン！！(どびっくり)」「(どうしたの！?)」

パロット

「う？ 傷が……。超速で回復する！(汗) はっ……。スフェーン！？(どびっくり)」。目の前に浮かぶペンダントに気づく

スフェーン(ペンダント)

『パロット……。今回はちょっとだけ手伝ってあげるから。アリスに勝ちましょー！！(叫び)』
ペンダントから卵が飛び出

し、パロットの手に収まる

パロット

「なんだかわからないが、スフェーンが協力してくれるのはありがたい！（ぱぱっ！）」
聖剣クリソベルルの柄を取り出し、スフェーンの卵と重ね合わせる

スフェーン（声だけ）

『いくよ・・・パロット！！（叫び）』

パロット

「うおおおー！！！！ 光竜剣スフェーンファイア！！（叫び）」
柄から燃えさかる炎のように煌めきを放つ刀身が現われる

アリス（フォスフィ）

「ちよっ！（汗） なにそれ、かっこいい〜〜〜〜」

3コマ

パロット

「・・・（じりじり）」
スフェーンファイアを構えてアリスとの距離を詰める

スフェーン（声のみ）

『それで、パロット・・・。アリスに 勝てそう？（ぼそっ）』

パロット

「せっかく協力してもらったのに申し訳ないが・・・勝算は万に一つも無いだろうな（汗）」（しかも、オレ的にアリスは2倍の速度で動いているわけだし・・・）

スフェーン（声のみ）
『そんな~~~~！』（涙）』

アリス（フォスフィ）
「ふふうん（よくわかつてるじゃない）」「（相手との実力差を感じ取るのも修行のうちだよ）

パロット

「まあ、スフェーンのためにも・・・無様な戦いはしない！（きりっ）」

スフェーン（声のみ）
『うぐっ・・・（照れ）　せいぜい頑張ればいいのさ！（どきどきどき）』

数十秒後・・・

アリス（フォスフィ）
「う〜ん・・・（汗）　せめて、10秒は頑張ろつよ・・・（苦笑）

パロット
「……………（ぶすぶすぶす）」　黒焦げで地面に倒れています（笑）

スフェーン（声のみ）
『ぜんぜん頑張ってるねえええー！！！！（うにゃー！！！！っ！）』（パロット激弱っ！！！！）

効果音「ずががーーーーーん!!!」

4コマ

アリス（フォスフィ）

「さあ、パロット立ちなさい。今夜は寝かせないぞ（きらりん）」

聖剣クリソベリルを構えて不気味に微笑む

パロット

「って、朝まで痛め続けるつもりかーーーーー!!!（うぎゃーーーーー!!!）」
だんだん復活が早くなってきた

スフェーン（声のみ）

『パロット！ こうなったら逃げるが勝ちじゃない!?（大汗）』
（戦略的撤退！）

パロット

「うう、ここで逃げたら・・・なんだか負けた気がする（大汗）」

アリス（フォスフィ）

「いや、逃げなくても負けてるじゃない・・・（ぼそっ）」（全戦全敗？）

パロット

「いうなーーーーー!!!（涙）」

王都、サンストーン（招き猫）の館にて・・・

スファレライト

「……………（どきどきどき）」

ファリス

「・・・っと、このように。パロットくんは無事だから・・・」
ぼそっ」

スファレ

「全然無事に見えねええええ!! (叫び)」 (生きてるのが不思議なぐらい痛めつけられていますよー!!)

効果音「ずががー！！！！！！！！！！ん!!」

コメント

直感で戦うファリスから教わることは何もありません(笑)
人に教えることなんてファリスには無理です

第174話 クリノヒューマイト

4コマ劇場 アイオライト―534・・・2011/07/07
シリーズ3

タイトル「クリノヒューマイト」

1コマ

真夜中、多くの小国が集まるラリマーの一国ヒューマイトにて・・・
効果音「ずどおおおーん！ がしゃっ！ ががあああー
ーん！！」 都の外から振動と共に凄まじい爆音が聞こえ
てくる

ヒューマイト兵1

「巨大神ペクトライト兵団・・・前へ！！」

人形使いたち

「はあああーん！！」

精霊力を込める

巨大神ペクトライト（巨大操り人形）

『うおおおーん！！（がしゃん、がしゃん！）』

数

体の巨大神が機械で出来た巨大な白虎に向って歩き出す

ヒューマイト兵2

「今度は東外壁に・・・巨大な龍が現われたぞーん！！（叫び）

ヒューマイト兵1

「ちいっ、いったい何がどうなって！ ななっ！？どびっくり）

巨大神ペクトライト

『が……がびびっ（パシパシパシ！）』 首筋を白虎に噛み
付かれ、裂かれた装甲から火花が散っている

巨大白虎

『ぐるるう……。ががあああ！！（がしゅっ！）』 巨大
神の首を噛み千切る

巨大神ペクトライト

『……。ぷしゅ〜（がくっ）』 片膝について動かなくなる

ヒューマイト兵³

「ば、バカな！（信じられない） 我がヒューマイトの切り札……
巨大神ペクトライトがこうも簡単に！！（大汗）」

ヒューマイト兵¹

「くっ、あの魔物は何なんだ……。いいか！ 絶対に都へは入れ
さす……。クリノさま！？（どびっくり）」

突然の登場

クリノヒューマイト ヒューマイト国の王（見た目24歳？）

「ほお……。こいつが新種の魔物……。ぼそっ」 腕
を組み外壁の上でふんぞり返っている

ヒューマイト兵¹

「クリノさま！ 危険です。お下がりください！！（大汗）」

クリノ

「では、お前たちがこの魔物を何とかするというのか？（ギロリ）」

巨大剣を抜刀して白虎を睨みつける

ヒューマイト兵¹

「うぐっ……（それは）」

2コマ

巨大白虎

『あははっ ちゃうちやう、魔物やないで〜〜（間違えんとい
て〜）』

クリノ

「ぬ？」

ヒューマイト兵³

「魔物が……喋った!!（どびっくり）」

巨大白虎

『どうやら、あんたがこの国のトップみたいやな〜 ちなみにこ
いつは魔物やの〜て いうなれば神……』

クリノ

「……神？」

巨大白虎

「そや 四聖界の神、白虎の機獣神……コーネルピンヤー
ー（どや、まいったか〜）」

効果音「ずががー……………ん!!」

クリノ

「それで……、そのコーネルピンとやらがこのヒューマイトに何用だ？（ギロリ）」

コーネルピン（聖獣機）

『あははっ、そう睨まんといて〜な（ぶしゅ〜）』
「コーネルピンの額が開いて、中から女性が姿を見せる」

クリノ

「……女？」

カナリー

「ウチの名はカナリー……。で〜、あっち（東外壁）で暴れとるのが超龍神リーンウィックとそのマスターのブルースピネル。うちらは、あんたと取り引きたいおも〜てやって来たんや〜」

クリノ

「取り引き……。だと〜（怒） ぶざけるな！ 我がヒューマイトに攻め込んでおいて何が取り引きか！！（激怒）」

カナリー

「まあまあ落ち着いて〜な（苦笑） 話聞くだけでも損は無いと思うで〜」（にやり）」

クリノ

「……ならば、聞こうか（ぼそっ）」（話半分に……）

カナリー

「ふふっ……。そうこなくっちゃ（あ〜、お前さんら、لاميを統一したエンスタイト帝国に命じられて隣国のルチルクオイツへ間者……。スパイを送り込んだみたいやな〜）」

クリノ

「・・・・・・・・・・」

3コマ

カナリー

「だんまりかいな〜。まあええけど……。そのスパイヤけど、
どうやら捕まってしまったみたいでな〜。今度は、逆にルチルクオ
ーツから……。刺客が送られてくるみたいやで〜」（にやり）

クリノ

「・・・・・・・・・・」

ヒューマイト兵1

「ななっ!?(どびっくり)」

カナリー

「刺客の中には、一騎当千の化物みたいなヤツがある。この国、攻
め込まれたら一溜まりもないんちゃうかな〜」

クリノ

「……。その刺客とやらが　キサマらではないのか(ギロリ)」

カナリー

「あははっ、ちゃうって〜　ウチらは、今のあんたらではどうに
もならん現状を教えたかっただけや　まあ、その所為で、あんた
とこの巨大ロボットを壊してもたんは悪かったと思うけど……
汗(」

クリノ

「・・・ふっ、確かに巨大神ペクトライトが束になってかかることも、キサマには勝てそうに無いようだな（微笑）」

ヒューマイト兵3

「く、クリノさま！？（何をおっしゃって!）」

カナリー

「そこで取り引きやー！ー！（叫び）　なあ・・・、ウチらを雇ってみる気ないか～～（にやり）」

クリノ

「・・・なに？」

カナリー

「ルチルクオーツからやって来る刺客は、ウチらが責任を持って殺したる・・・（ぼそっ）　なんやったら・・・あなたが望むんやったらエンスタイト帝国を滅ぼしてもかまへんのやで～～（くっくっくっ）」　　さすがは大魔王の妹ですね～

クリノ

「・・・いったい何が目的だ。これは取り引きなのだろう？（ギョロリ）」

カナリー

「ん～～～？（話が早くて助かるわ～）　ウチらを雇う報酬は、この国にある時空族の遺産を貰い受けることや」

クリノ

「時空族の・・・遺産？」

4コマ

カナリー

「あゝ、この国の中で、一番力の強いお宝のことや……（苦笑）もちろん、報酬は後払いでかまへんよ」
時空族の存在は一部の人にしか知られていません

クリノ

「……………」
何かを考えている

ヒューマイト兵1

「クリノさま……（汗）」

クリノ

「いいだろう（ぼそっ）」

カナリー

「よっしゃー！ 契約成立や〜〜」

ヒューマイト兵1

「く、クリノさま……！」

クリノ

「今後、彼女らのことは客人としておもて成ししろ（いいな！）」

ヒューマイト兵3

「はっ！！（ぴしっ）」
姿勢を直す

クリノ

「カナリー……といったな。おまえに城の一室を与える。時が来るまで……くつろいでおけ（ぼそっ）」

カナリー

「城に一室って・・・(汗) ええんか？ 本当はうちらが刺客で、あなたの寝首を掻こうと狙つとるかもしれへんのやで」(にやり)「

クリノ

「おまえが刺客であれば・・・、既にわたしの命は無いのであろう？(にやり)「

カナリー

「あつはっはっ、気に入ったで〜クリノ これから、よろしゅ〜頼むわ(にこっ)「

クリノ

「ああ・・・(こちらこそ)・・・ところでカナリー」

カナリー

「なんや？」

クリノ

「契約を交わしたというのであれば・・・アレをなんとかしろ(ひよいつ)「 東外壁の方を指差す

カナリー

「アレ？(どれどれ?)「 東外壁に視線を向ける

ヒューマイト兵2

「あああああ！ 外壁が・・・このままでは外壁が崩れるー！ー！ー！ー！(涙)「

ヒューマイト兵4

「負傷者は退却させる！ ええい、この化物め……！！」（怒）
投石器で攻撃！

リンウィック（聖獣機）

『がぎやわ……！！』（叫び）』

カナリー

「ああ、ちよつ、ブルース！（汗） もう話ついたから終いやでー
……！！（それ以上、暴れんな……！！）」

リンウィック（聖獣機）

『あんぎや……！！』（叫び）』 『ずがが……！！』
ん！！（

コメント

カナリーとブルースはラルドの情報を聞いてヒューマイトに来た
んでしょうか？ わかりません（爆）

第175話 招き猫勇者隊、当面の目標は!?

4コマ劇場 アイオライト―535・・・2011/07/09
シリーズ3

タイトル「招き猫勇者隊、当面の目標は!?!」

1コマ

サンストーン（招き猫）の館にて（みんなで朝食中）・・・

エルバイト

「ふう〜〜〜、食った食った〜 朝からこんな美味しい飯が食えるなんて・・・このパーティに入って良かった〜（一人のときじゃ、こんな豪勢な朝食は考えられないぜ〜）」

ロードライト

「あははっ、ありがとございます（美味いだなんて、そんな〜）でも、エルバイトさんは仮メンバーなんですから、正規メンバーになれるようがんばってくださいね（にっこり）」 一応、招き猫勇者隊のリーダー

エルバイト

「うぐっ・・・（汗） って、もう2回もクエストに参加しているわけだし、正規メンバーとして認めてくれても〜〜〜（汗）」

ロードライト

「う〜ん、とは言っても・・・アルバイトさんまったく活躍しませんでしたし〜〜〜（苦笑）」（正規メンバーに向えるメリットが無さそうで・・・）

エルバイト

「何を言う！ オレの職業はレンジャーで、盗賊のスキルを持っているんだぞ！！（冒険には必要だろ？）」

ロードライト

「あゝ、大変申し上げにくいことなのですが・・・盗賊スキルならばボクも持っているんですよ（苦笑）」

エルバイト

「・・・え？（汗）」

ジエムシリカ

「確かに・・・、DC ダンジョンクリエイターとして盗賊スキルは必須ですね」

桜（フローライト）

「しかも、レベル4のレンジャーに比べて、盗賊スキルも高いわけですし・・・（ぼそっ）」

エルバイト

「ちよっ、桜・・・てめえ〜！ こんなときだけこども口調を戻してるんじゃないええええ！！（怒）」

桜（フローラ）

「・・・おにいちゃん、やくたたず〜？（はてな？）
急にこどもっぽい口調になる

エルバイト

「可愛い姿で酷いこというなー！！！！！！（涙）」（じにゃー！！！！！！）

美咲

「あ、あはははっ……（苦笑）」

スファアレライト

「あ、あの！！（がたっ！）」
急に椅子から立ち上がる

2コマ

ロードライト

「……はい？（汗）」（スファアレさん、どうしましたか？）

スファアレ

「わたし……強くなりたい（ぼそっ）
ううん、強くならなくちゃダメなの！！（叫び）」

エルバイト

「スファアレ、おまえいつたい何を言って……（大汗）」

スファアレ

「今回、パロットはわたしたちを残してラリマーへ行った。それは、わたしたちを連れて行くと危険だから。すなわち、わたしたちが弱いつて、パロットに思われているからでしょ？」

ロードライト

「まあ、実際パロットさんと比べたら、ボクたちは弱いんですけどね〜（苦笑）」

スファアレ

「でも、わたしたちが強かったらパロットも『ついて来るな……』
とは言わなかったんじゃない？」

シリカ

「それは……どうでしょう。ラリマー潜入は、危険ということもありますが……あまり目立ってはいけないという理由もありました。強いからといって、大勢で向うべきではありません」

スファレ

「それでも！……問答無用にメンバー候補から外されることはなかったはずですよね！！」

シリカ

「それは……、そうかもしれませんが……（大汗）」

スファレ

「だから、わたしは冒険者として強くなるうと思うの……。外界を見てみたいというだけで冒険者になったけど、それではいけないって気づいたの！ パロットが帰ってくるときまでに、びっくりするくらいレベルを上げて……」

突然の登場

ファリス サンストーン（招き猫）の館の管理人

「はいはい、強くなる前に……。あなたたちにはやる必要があるでしょ（やれやれ）」

スファレ

「え？ やること……ですか？（どきどきどき）」（いったいなんでしょっ?）」

3コマ

ファリス

「ところで、今日の朝食はどうでしたか？」

スファレ

「・・・はい？（汗）」（いきなり話が変わった）

エルバイト

「ああ、すげえ美味かったぜ」

ファリス

「それは良かった（ロードライトちゃん、お料理が上手いですからね）で・・・、ここで問題です。え、あなたたちはこの館で快適に暮せていますが、その食費・・・というより生活費は、いったいどこから出ているのでしょうか？（にこっ）」

スファレ

「そ、それは・・・（大汗）」

エルバイト

「あ、やっぱりクエストの戦利品・・・とかじゃないのか？」

ファリス

「あら、あなたたちが換金できるようなアイテム・・・何か持ち帰ったことがありますでしょうか？（にこにこ）」

エルバイト

「うぐっ・・・（大汗）」

スファレ

「クエストの成功報酬　も、攻略してないんだから貰ったことな

いし・・・(汗)「

ファリス

「ちなみに、美咲さん、桜ちゃん、シリカさんからは生活費を入れてもらっています」

スファレ

「そ、そうなんですかー！?!?(どびっくり)「

エルバイト

「じゃ、じゃあ、何も出してないのは、オレとスファレ、パロツトに・・・ロードライトだけなのか?(大汗)「

ファリス

「あなたたち招き猫勇者隊のメンバーは、桜ちゃん以外・・・ロードライトちゃんに養ってもらっているんです!!(怒)「

エルバイト

「なにー！ー！ー！ー！(どびっくり)「

スファレ

「ああ、やっぱり・・・(どきどきどき)「

効果音「ずがー！ー！ー！ー！ー！ー！ん!!!」

4コマ

ファリス

「しかも、掃除・炊事・洗濯、その全てをロードライトちゃんに任せっきりで自分たちだけ快適な生活を送っているなんて・・・恥ずかしいとは思わないんですか!!!(めっ!!)「
もちろんファ

リスは手伝っています

スファレ

「うぐっ……」

ロードライト

「あゝ、ファリスさん……（苦笑）　ボクは好きでやっているんですから、そんなことを言う必要は……（あははっ）」

エルバイト

「そうだそうだ！　人には適材適所つてのがあるだろ」

ファリス

「うゝん、仮メンバーで完全な居候が一番偉そうなのは……どうしてなのでしょう？（はてな？）」　　悪気はありません

エルバイト

「があああー……ん！！（涙）」　　ショックを受けています

スファレ

「そ……そうだよね（苦笑）　お金が降って湧いてくるわけじゃないんだから……（うゝん）　ロードライト、知らないうちに迷惑かけていたみたいで……ごめんね（ぺこり）」

ロードライト

「め、迷惑だなんて……そんな！（あせあせ）」

ファリス

「と……というわけで、強くなるとか　そんなことを言ってい

る前に、スファレさんと居候くんには最低でも自分たちの生活費を稼いでもらいます」

エルバイト

「稼ぐって言ったって・・・いったい何をすればいいんだ? (大汗)」

ファリス

「それはもちろん、アルバイトでしょう (にっこり)」

スファレ

「あ、アルバイト! (どびっくり)」

エルバイト

「ん、オレが・・・どうしたって? (汗)」 (意味わかんねえぞ・・・)

ファリス

「あ、居候くんは、自分の名前にこだわりを無くしちゃったみたいね〜 (汗)」

エルバイト

「ああ? 何の話だ!? (大汗)」 他のメンバーからはア

ルバイトと呼ばれています

効果音「ずががーーーーーん!」

コメント

ちなみに、純粹な精霊族であるファリスは、食事を取らなくても

平気です

第176話 賢沢を言わなければ仕事はたくさんあります

4コマ劇場 アイオライト―536・・・2011/07/12
シリーズ3

タイトル「賢沢を言わなければ仕事はたくさんあります」

1コマ

ルルルクオーツ王都にて・・・

スファレライト

「うん・・・(汗) お金を稼ぐため、アルバイトしろっていわれてもな～～(とぼとぼ)」 当てもなく歩いている

エルバイト

「まったく！ オレたちはあくまでも冒険者・・・。アルバイトなんて、ちまちましたことやっつてられるかってんだ！！(怒)」

ロードライト

「あははっ・・・(苦笑) 出来ればアルバイトよりクエストで稼ぎたいというのには同意しますけど～～(汗) とにかく、一度・・・冒険者管理組合へ行ってみませんか？ 割の良いクエストが見つかるとは思いません・・・」

エルバイト

「そう・・・だな。できれば、何もせずに大金が転がり込んでくるクエストがいいな」

スファレライト

「うお～～い！！(どきどきどき)」(そんなのあるわけないでし

よ！)

ルチルクオーツ城、冒険者管理組合にて・・・

リユーコガーネット

「あら、招き猫勇者隊の・・・へっぽこさん。DCの任務から戻ってきたのね。お帰りなさい (にっこり)」

スファレ

「へっぽこじゃないやい！！ (涙)」「(ずががーーーーん！)

リユーコ

「まあまあ、気にしたら負けよ (苦笑)」

スファレ

「何が負けなんですか！ (汗) っと、そんなことより。リユーコさん・・・、わたしたち、手っ取り早くお金を稼げるクエストを探しているんですけど・・・ (何かありませんか?)」

リユーコ

「手っ取り早く・・・ねえ (うぐん) あ・・・そういえば、パロットくんは王宮の任務で某所へ出ているのよね？ だったら、あなたたち招き猫勇者隊が外界へ出るのはNGですからね (ぼそっ)」

ロードライト

「・・・え？ (大汗)」

エルバイト

「な、なんだよそれ！ クエストっていったら、外界・・・王都の外へ出るのが基本じゃねえか！？ (叫び)」

リユーコ

「基本はそうでしょうけど・・・、あなたたちの平均レベルでは外界へ出ることは許可できません（ぼそっ）」

2コマ

スファレ

「ちよっ、いまさら許可できないって・・・どういことですか！
？（大汗）」（これまでも外界へ出てたっというのに！）

リユーコ

「あなたたちに外界へ出る許可が下りていたのは、メンバーにユークナイトのパロットくんがいたから・・・。パロットくんがいない以上、あなたたちだけで外界へ出ることは危険です（許可できませんねっ）」（ロードライトだけなら問題ないけど・・・）

スファレ

「うぐっ・・・（汗）　こんなやり取り、第1話でもやった気がする・・・（どきどきどき）」

リユーコ

「別に、お金を稼ぐなら王都内のクエストでも充分でしょ？（わざわざ危険を冒さなくても）」

スファレ

「それは・・・そうなんですけど・・・（苦笑）」（面倒くさそうっていつか～）

エルバイト

「そういうからには、割の良い依頼があるんだろうな」（ギロリ）」

リユーク

「って、なんだか偉そうなヤツね……。まあいいわ。え〜っと
(ぱらぱら)、あなたたちでもできそうな王都内クエストだと・
・(依頼リストを確認している)」

スファレ

「はい(どきどきどき)」 王宮内クエストは受けたことがない

リユーク

「自然公園の清掃、ペットのお散歩、手紙や荷物の配達……。ぐら
いかな〜(ぼそっ)」

エルバイト

「なんじゃそりゃ！ そんなの冒険者の仕事じゃねえ〜だろ！！
うがーーーーー！！)」

リユーク

「……………(むかつ)」

ロードライト

「ちよっ、アルバイトさん！！(大汗)」(それらも立派な冒険者
の仕事ですよ！)

3コマ

リユーク

「何か勘違いしているみたいだけど……。別に良いのよ〜、あなた
たちが依頼を受けてくれなくても(ぼそっ)」(強制じゃありません
ので)

ロードライト

「いや、そんな！（汗） あ……の！ ちょっと二人とも！！（こっちに来てください！）」 二人を引き寄せて内緒話を始める

スファレ

「え？（ロードライトどうしたの？）」

エルバイト

「……ぬ？（なんだ？）」

スファレ

「リユーコさんを不機嫌にさせてはダメです！（ひそひそ） もしリユーコさんが怒っちゃって、依頼を回してもらえなくなったりしたら……直接依頼人が来ない以上、ボクたちは冒険者として何もできなくなっちゃいますよ！！（大汗）」（DCの仕事は別ですけど）

スファレ

「じゃあ……、さっきの依頼 引き受けてみる？（ぼそっ）」

ロードライト

「それも、一つの手だとは思ってますが……（ちらり）」
リユーコをチラ見

リユーコ

「ん？（こっこり）」

ロードライト

「あゝ、リユーコさん……。依頼のことなんですけど、引き受けさせていただくかどうかは……。もう少し検討させていただくこ

とにしますね（あははっ）」

リユーコ

「そう？ でも、引き受けるつもりなら早めにいってね。こづいた依頼は、結構人気があるから」

ロードライト

「あゝ、はい（苦笑） そのときは・・・よろしく願いします」（大汗）」

4コマ

中央広場にて・・・

スファレ

「・・・さて、これからどうする？」（汗）」

ロードライト

「うゝん、お金稼ぐことは、簡単なことではありませんからね（苦笑） 確かに、生活費を稼ぐ・・・というのなら、簡単な依頼をこなしたりアルバイトをする・・・ってのもアリだとは思いますが、それらを目的にしまうと今度は冒険者として身動きが取れなくなる場合が考えられます」

スファレ

「パロットがラリマーへ行っている間、ずっとアルバイトをしているってわけにもいかないしね。今朝（前回）も言ったけど・・・わたしパロットに認めてもらう程度には強くなりたいから・・・（ぼそっ）」

エルバイト

「じゃあ、どうするんだよ？（汗）　これ以上、ロードライトに迷惑をかけるわけにはいかないんだぞ・・・（大汗）」

ロードライト

「ボクとしては、それほど気にしていただく必要はないと思うんですけどね〜（苦笑）　あ〜、なんにしても・・・ボクに一つ提案があるんですけど　聞いていただけますか〜？」

スファレ

「え、提案？」

エルバイト

「なんだ・・・？　管理組合に黙って・・・外界へ出ようっていうのか〜（にやり）」

ロードライト

「って、そんなことしたら冒険者ライセンスを剥奪されてしまいます・・・じゃなくって！！（大汗）　え〜とですね〜、ボクたちがいま住んでいるサンストーン（招き猫）の館って、なかなかいい場所にあるとおもいませんか？」

エルバイト

「・・・どういうことだ？（汗）」

ロードライト

「いや、東街地区の外れではありますが・・・すぐ近くには観光地もあるわけですし、平日でも人通りは多い方だと思います。そこで提案です。サンストーン（招き猫）の館を利用して　何かお店を開いてみるってのはどうでしょう？」

スファレ

「……お店ええええ……!? (どびつくり)」

効果音「ずがが………ん！」

コメント

次回から、ラリマー編が始まる予定です

今週の『バグマン。(原作)』を見て……。先週の予想、外れ
ちゃった〜(同率2位かよ!)

第177話 ラリマー入りしたのは良かったけど・・・

4コマ劇場 アイオライト―537・・・2011/07/14
シリーズ3

タイトル「ラリマー入りしたのは良かったけど・・・」

1コマ

ラリマー側、ハーキマー山脈麓の樹海にて・・・

アリス（フォスフォライト）

「ふう〜・・・、やっと下山できたみたいだね〜」（やれやれ）

スフェーン（ペンダント）

『アリス、お疲れ〜』

アリス（フォスファイ）

「いやまあ、そんなに疲れているってわけじゃないんだけど・・・

（苦笑）」（なんていうか、気分の問題？）

パロットクリソベリル 2倍速で動いています

「おまえらな」（汗） もうラリマーに入ったんだ。気を引き締めないと・・・」

スペクトロライト

「・・・しっ！ 隠れて・・・（ぼそっ）」 巨大樹の陰に身体を隠す

パロット

「ん!？」 何かの気配に気づく

50メートルほど前方にラリマー兵の小隊が確認できる・・・

ラリマー兵1

『・・・・・・・・・・・・・・・・!?!?』 なにやら騒いでいる

ラリマー兵7

『・・・・・・・・!・・・・・・・・!』 ちゃんと聞こえない

パロット

「・・・・・・・・、まさかオレたちを捜している・・・・・・・・とか? (ひそひそ)」

スペクトロ

「いや・・・・。あいつらはこの国の連中だ・・・・。おそらくエンス
タタイト帝国の命令を受けて、ルチルクオーツ側へ入る調査をして
いるのだらうよ (ひそひそ)」

アリス (フォスフィ)

「この国・・・・エンスタタイト帝国? (なにそれ?)」

2コマ

スペクトロ

「・・・・・・・・。ラリマーという国は、47の小国から成り立ってい
て、それぞれが覇権を握ろうと長い間争いを続けていた。だが3年
ほど前・・・・、最北にあるエンスタタイトという国が大規模な戦い
を始め、僅か2年でラリマー全土を支配した (ぼそっ)」

パロット

「ちょうど、ルチルクオーツの王様がさく・・・・フローラに代わっ

た頃の話だな（汗）」

アリス（フォスフィ）

「なるほどね．．．（うん） そのエンスタイト帝国．．．、
ラリマーは統一しちゃったから次に隣国へと目を向けたってわけか
．．．（やれやれだね）」

パロット

「なんて迷惑な．．．と言いたいところだが、フローラが王様にな
る前はルチルクオーツも隣国にちよっかい出していたからな．．．あ
まり強くは言えない（大汗）」

スペクトロ

「そういうこと．．．（ぼそっ） そして、ルチルクオーツの理不
尽な侵略を防いで 耐えていたのがこの小国ってわけだ。つまり．
．．．」

パロット

「ルチルクオーツは、この小国の人たちに相当怨まれているってこ
とだな（大汗）」

スペクトロ

「そうだ．．．。だから、お前たちがルチルクオーツからの密入国
者であることを知られるわけには．．．」

アリス（フォスフィ）

「ちよっくら、周りの情報収集に行つてきまゝす （たたっ）」
まるで疾風のように姿を消す

スペクトロ

「って、おい！！（怒）」（話を聞いていたのかーーーー！！）

効果音「ずががーーーーーん！！」

3コマ

アリスが凄まじいスピードで樹海の中を駆け回っている・・・

アリス（フォスファイ）

「うん、外側にラリマー軍の駐屯地・・・、樹海の内側には7小隊・・・。どうやら、侵略を開始する前の調査ってところね」

スフェーン（ペンダント）

「・・・、ねえアリス」（汗）」

アリス（フォスファイ）

「ん？（なに？）」

スフェーン（ペンダント）

「アリスが強いつてのは理解できているんだけど、一人で行動するのって・・・やっぱり危険じゃないかな？（汗）」

アリス（フォスファイ）

「一人じゃない・・・スフェーンと一緒にだよ（あははっ、何言ってるのよ）」

スフェーン（ペンダント）

「いやまあ、それはそうなんだけど・・・（大汗）」

アリス（フォスファイ）

「そんなに心配しなくても大丈夫だって」

ラリマー軍に見つか

らないように樹海を抜けるため、地形を確認しているだけ……うつ？（ズキーンッ！）」
突如、強烈な頭痛を感じて片膝をつく

スフェーン（ペンダント）

『ど、どうしたの……アリス!?（大汗）』

アリス（フォスファイ）

「あ〜うん、ちょっと頭に違和感が……って、ううつ！（ズキズキッ！）」
頭を抱えて地面へ倒れこむ

スフェーン（ペンダント）

『なっ、アリス！ ねえアリス、しっかりしてー！ー！ー！（叫び）』

4コマ

アリス（フォスファイ）

「……………あれ？（むくっ）」
不意に起き上がる

スフェーン（ペンダント）

『ちよっ、アリス〜（汗） もあ〜、心配させないでよね〜〜（汗）』（やれやれ）

アリス（フォスファイ）

「え……、アリス？（ぼそっ） ねえ、スフェーンちゃん、ここって……どこ？（大汗）」（きよるきよる）

スフェーン（ペンダント）

『はい〜？ 何を言……って、あれっ!?（どびっくり） さっきまでのアリスと……雰囲気が違う（汗） それに、この生体波

長って・・・、もしかして　フォスファイ？（ときどきとき）』

フォスフォファイライト

「うう〜（汗）　　いつたい何を言っているのかわからないけど・・・
あたしはあたしに決まっているじゃない（大汗）」　　お久しぶり〜

スフェーン（ペンダント）

『えええええー！！！（汗）　　なに、フォスファイ・・・。元の
人格に戻っちゃったのー！！！？（大汗）』

フォスファイ

「元の人格とか・・・わけわかんないんですけど（苦笑）　　そんな
ことより〜、ここってどこなの？　さっきまでいた・・・エリアG
じゃないよね？（ときどきとき）」（あの仮面の子は・・・どこい
ったのかな〜？）　　エリアGでブルースに殺されそうになった

スフェーン（ペンダント）

『ま、まずいわね〜、完全に戻っちゃってるよ〜（汗）　　なんとか
敵と遭遇する前に、パロットたちと合流しないと・・・（大汗）
あ、ちなみにフォスファイの質問に答えると〜、ここはルチルクオー
ツから見たハーキマー山脈の反対側・・・、つまりラリマーの領土
内ってことになります（ぼそっ）』

フォスファイ

「・・え
ええええー！！！？（どびっくり）」（何であたしがラリ
マーなんかに！？）

効果音「がさがさっ！！！」

???

『ん！ 誰かいるのか！！（叫び）』

フォスファイ

「ひゃっ！？（びくーーーーっ！）」「（て、敵！？）

スフェーン（ペンダント）

『ふお、フォスファイ・・・逃げるわよ！！（急げーーーー！！）』

フォスファイ

「え、ええっ！（汗） 逃げるのーーーー！！？（涙）」「ず
がーーーー！！ん！！（脱兎

コメント

はたしてフォスファイとスフェーンの運命は！！（笑）

第178話 捕らわれのフォスフィと魔竜の噂

4コマ劇場 アイオライト―538・・・2011/07/17
シリーズ3

タイトル「捕らわれのフォスフィと魔竜の噂」

1コマ

ルルルクオーツ王都、サンストーン（招き猫）の館にて・・・

ファリス

「……………あ（汗）」

美咲

「え？ ファリスさん・・・どうしましたか？（変な声を出して）」

ファリス

「いや・・・なんというか、ラリマーへ向ったみんなのことなんだけど〜〜」

美咲

「はい」

ファリス

「何かトラブルが起こったのか・・・（汗）突然、アリスとのリンクが切れちゃったみたい（てへっ）」

美咲

「……………な、なんですって……………!?（どびっくり）（ずがが……………ん!）」

説明文「精霊神ファリスとその五精霊であるアリスには、目には見えない繋がりが存在しており・・・お互いの状況がある程度知ることが出来ます」

同時刻、ラリマー側ハーキマー山脈麓に広がる樹海にて・・・

ラリマー兵25

「ぬ！ いたぞー！ー！ー！！（叫び）」

フォスフォファイライト 人格がアリスから元に戻った（笑）

「ひゃっ！！（涙）」

ラリマー兵28

「逃がすな、取り囲め！！（叫び）」 剣を抜刀する

ラリマー兵23

「うおおおおお！！（どたどたどた）」

フォスファイ

「きゃわ~~~~！！（びくっ）」

スフェーン（ペンダント） 光竜の卵

『アリス・・・じゃなかった（汗） フォスファイ絶対に止まるな、止まったら殺される！ー！ー！！（涙）』

フォスファイ

「い、いやああああ！（涙） こんなところで死にたくないよ~~~~
く！！（大泣き）」

ラリマー兵22

「待てー！ー！ー！（怒） 待たないと・・・殺すぞー！ー！ー！
ー！ー！（激怒）」

フォスファイ

「どっちにしたって、殺されるのかー！ー！ー！ー！（うにゃー！
ー！ー！）」

スフエーン（ペンダント）

『とにかく走れー！ー！ー！ー！（涙）』

2コマ

一方、取り残されたパロットたちは・・・

スペクトロライト

「なあパロット・・・。様子を見に行ったアリス、少し遅くないか
？（ぼそっ）」

パロットクリソベル

「うむ、かれこれ1時間は経過しているが 周囲の状況を詳しく
調査するってのならこれぐらい普通じゃないか？（ラリマー兵に
見つからないよう動いているわけだし・・・）」

スペクトロ

「いやいやいや、2倍速で行動しているおまえには1時間しか経っ
ていないように感じられるだろうが、実際には2時間も経っている
んだぞ！（汗） 何か・・・アリスの身に起こったと考えるべきじ
やないのか？（大汗）」

パロット

「に、2時間・・・（大汗） 確かに時間がかかりすぎている気もするな〜」（大汗）」

スペクトロ

「捜しに・・・行ったほうがいいんじゃないか？（汗）」

パロツト

「うーん、オレたちがここを離れてしまうと、今度はアリスが戻ってきたときに合流できなくなってしまふ。かといって、単独行動は控えた方がいいだろうし・・・（どうするか）」

ダイ

「っていうかさ、そんなに心配しなくても、アリスなんだから大丈夫じゃね？（ぼそっ）」

パロツト

「・・・・・・・・・・（汗）」

スペクトロ

「・・・・・・・・・・（あ〜）」

ダイ

「ぬ？（汗） なんだ？（どうしたんだ？）」

パロツト

「そういえば・・・、おまえもいたんだっただな〜」（大汗）」

スペクトロ

「ここ最近、セリフがなかったからすっかり忘れていたぞ・・・（ぶぎぶぎぶぎ）」

ダイ

「って、出番が無かったからといって、忘れてるんじゃないわええええ
ー！ー！ー！(うがー！ー！ー！)」 一応、ラリマー編
(グランゾル編)の重要キャラクターです

効果音「ずがー！ー！ー！ー！ー！ん！」

3コマ

ラリマー軍の駐屯地、テントの中にて・・・

フォスファイ

「……………(はぶ~~~~)」「 手足を縛られて猿ぐつわされている

スフェーン(ペンダント)

『あははっ、見事に捕まっちゃったね~~~~(苦笑) まあ、あ
そこで抵抗していたら、間違いなく殺されていたと思うけど・・・
(ぼそっ)』

フォスファイ

「ひゃひっ！(びくっ)」「(がたがたぶるぶる)

スフェーン(ペンダント)

『とにかく、パロットたちが助けにくるのを待つべきね~~~~。そ
れが一番生存率高そうだし・・・(ぼそっ)』

フォスファイ

「……………(はぶ~~~~)」「(汗)」「

スフェーン(ペンダント)

『そうね、アリスの人格なら別だけど、いまのフォスファイでは下手に動かないほうが身のためでしょうね』

フォスファイ

「……………（しくしくしく）」

突然の登場

???

「ほお、コイツは驚いた……。ただの初級冒険者かと思えば、ドラゴンの卵にそれほど懐かれていようとは（ぼそっ）」

フォスファイ

「!?(びくっ!!)」

スフェーン（ペンダント）

『懐くだなんて、人(?)をペットみたいになー！！（うがー！）』

???

「!!(本気でびくっ) かなり知能が高そうだな……もしかして、おまえ竜族か!?(喋りも片言じゃない!)

スフェーン（ペンダント）

『うぐっ、やばっ……（大汗）』（バレちゃったよ）

???

「ま、まさか……、エンスタタイトの魔竜に 関係している者か?(ごくり)」

スフエーン(ペンダント)

『エンスタタイトの・・・魔竜？(どきどきどき)』(なにそれ？)

4コマ

数分後・・・

フォスファイ

「うう・・・(涙) 手足に縄の跡が残っていてヒリヒリと痛い・・・

・(さすりさすり)「 やつと解放されました

デンドライト デンドリチック国代表

「あゝ、手荒なまねをしてすまなかつたな(苦笑) で、話は戻るが・・・エンスタタイトの魔竜とは、その名の通りエンスタイト帝国に現れた・・・光竜族のことだ。そいつが現れた所為で、このデンドリチックを含め、ラリマー47国はエンスタイト帝国に支配された・・・。今では我が国も帝国の小間使い。隣国ルチルクオーツへ攻め込むための準備をさせられているというわけだ・・・
(やれやれ)「

スフエーン(ペンダント)

『竜族の長である光竜族がそんなにたくさんいるはずも無いし・・・
。もしかしてその光竜族 アレキサンドライトって名前じゃ・・・

(汗)『

フォスファイ

「アレキサンドライト!(びっくら)「

デンドライト

「・・・知っているのか?(ギロリ)「(やはり関係者!?)

スフェーン（ペンダント）

『わたしたちは、そのアレキサンドライトがラリマーにいるって噂を聞いてここまでできたの……。砕けた聖剣……。クリソベリルの修復をお願いしにね（ぼそっ）』

デンドライト

「聖剣クリソベリルねえ」（汗）　アウインの勇者シヨウと同じくアリスが使っていたという伝説の聖剣。そんなモノが本当に存在しているというのか？（大汗）」（眉唾の話だな）

スフェーン（ペンダント）

『存在するものにも、このフォスフィの持っていたのが……。かつてアウインの勇者アリスが使っていた方の聖剣クリソベリル……。』

デンドライト

「あのバカ重い剣がか！！」（どびっくり）　　兵士6人がかりで別のテントへと運んだ

スフェーン（ペンダント）

『そうよ〜　あと、せいぜいこのフォスフィに恩を売っておきなさい。彼女の前世こそ……。アウインの勇者アリスその人なんだから』

デンドライト

「なっ！？　ほ、本当……。なのか？（どきどきどき）」

フォスフィ

「あ……。苦笑）　そんなのあたしに聞かれても〜〜（大汗）」

デンドライト

「す、す、す……あのアリス　伝説の勇者の生まれ変わり（
じくろ）」

スフェーン（ペンダント）

『サイン……してほしい？（ユルッ）』

デンドライト

「ぜひ……（ぱっ！）」　なぜか色紙を差し出す（笑）

フォスファイ

「って、ちょっと……！！（涙）」（あたしを無視して話進
めるな……！！）

効果音「ずが………ん……！！」

コメント

フォスファイのサインは、デンドリチックの国宝になりました

第179話 一波乱ありそうです

4コマ劇場 アイオライト―539・・・2011/07/20
シリーズ3

タイトル「一波乱ありそうです」

1コマ

デンドリチック国ラリマー軍の駐屯地、テントの中にて・・・

デンドライト デンドリチック国代表

「まあなんだ・・・。今後のことをどうするにしても、しばらくここにいることだな。ルチルクォーツとは違って・・・ラリマーは危険なところだからな（ふふっ）」 テントから出て行く

フォスフォファイライト

「・・・といつても」（汗） ねえスフェーン・・・。あたしって一緒に来たパロットたちとはぐれた状態なんだよね？（大汗）」
旅に出た記憶がありません

スフェーン（ペンダント）

『・・・フォスファイ（ぼそっ）』

フォスファイ

「ん〜？（なあ〜に？）」

スフェーン（ペンダント）

『あのデンドライトって人・・・、あまり信用しないほうがいいかも（ぼそっ）』

スフェーン（ペンダント）

『さらに、フォスフィは女の子なんだから、拷問も苦痛を与えるよ
うなヤツじゃなく・・・絶対にえっちうヤツだね！（間違いない！）
』

フォスフィ

「ちょーっつ、ちょっと！！（大汗）」（なんてことを口走って
るかな〜この子は!?!）

スフェーン（ペンダント）

『情報を得るためには手段を選ばない・・・。戦争するのはそーい
うものでしょ?』

フォスフィ

「いやいやいや、それはどうなのかな〜」（汗）それに、実際
にまだ戦争が始まると決まったわけでもないし・・・（どきどきど
き）」

スフェーン（ペンダント）

『フォスフィ、楽観視しすぎ・・・（ぼそっ） えっちう拷問は、
まあ〜半分冗談だけ〜』

フォスフィ

「半分本気なのね・・・（しくしくしく）」

スフェーン（ペンダント）

『でも、このデンドリチック・・・というよりラリマー全体が戦争
を起こそうとしているのは間違いない。その中心となっているのが
エンスタイト帝国、そして、エンスタイトの魔竜 光竜アレ
キサンドライトが関わっているってことでしょうね〜（じくりり）』

フォスファイ

「光竜アレキサンドライトって、ルチルクオーツの王政に携わっているアクアマリンさまのお父さんだよな〜？ どうしてそんな人（？）が戦争を起こそうとしているのよ？（汗）」

スフェーン（ペンダント）

『それはわからない……。でも、アレキサンドライト自身は、手を貸しているつもりはないんじゃないかな〜。エンスタイト帝国の方が光竜アレキサンドライトの威光を笠に着ているみたいなの〜ん（）」

フォスファイ

「まあ、なんにしても会ってみるしかないってことだね……。くり（）」

スフェーン（ペンダント）

『そうということ』

効果音「じーーーーーっ」 テントの支柱に隠しマイクが仕込まれている

3コマ

別のテントにて……

デンドライト スピーカーから流れてくるフォスファイたちの会話を聞いている

「ふむ……。卵といえどさすがは光竜というべきか、なかなか頭が切れるようだな（にやり） まあ〜、見当違いな仮説が多いようだけど……。苦笑（）」

女騎士

「デンドライトさま。あの者たちを……いかがなされるおつもりですか？」

デンドライト

「期待に応えるよう……えっちい拷問でもしてみるか」にやり」

女騎士

「……………(じい〜〜っ)」

デンドライト

「あゝ、こほん(汗) こいつらの話からすると……はぐれた仲間がいるようだ。樹海調査隊に捜し出すよう通達しろ(ぼそっ)」

女騎士

「はい(こっこり)」

デンドライト

「あと、ヤツらがどうしてもエンスタイト帝国を目指すつもりなら、この国にいる間だけでも護衛を付けてやれ……。仲間とやらがどれほどの冒険者かは知らないが 数名で行動するにはラリマ―は危険すぎるからな(ぼそっ)」

女騎士

「では、わたくしが彼女たちの護衛に付きましよう……。帝国よりの命令 樹海探索任務の最中、護衛のために兵をさくわけにもいきませんから」

デンドライト

「おいおい、お前が行ったらオレの護衛はどうなるんだ？」

女騎士

「デンドライトさまには護衛など必要無いと思われませんが……」
ふふっ（）」

デンドライト

「くっ……、言ってる（苦笑）」

説明文「デンドリチック国にはいい人が多そうですね（笑）」

4コマ

ルルルクオーツ王都、サンストーン（招き猫）の館の正面にて……

美咲

「では、行って参ります（ぺこり）」

ファリス

「ごめんなさいね、美咲ちゃん……。本来なら、五精霊の誰かに
行ってもらうべきなのでしょうけど（ぼそっ）」

美咲

「シンさん、ユウコさんは、精霊界に外界から侵略者が入り込まない
よう見張っているわけですし、天空族のルーさんでは逆に目立
ってしまいそうですからね（苦笑） 比較的自由に動けるわたし
が行くのは当然のことでしょう」

ファリス

「そう言ってもらえると助かります（にこり）」

スファレライト

「・・・あれ？ 美咲ちゃん・・・どこかに行くの？」

美咲

「あ、はい。緊急事態のため、これからパロットさんたちを追いかけよう・・・」

ファリス

「ちよつ、美咲ちゃん！！（しいーっ！）」

美咲

「うぐっ！！（しまった！）」 基本的に嘘をつけない性格です

スファレ

「・・・。。。。。。そう。。。。。。なんだ。それじゃ、気をつけて行ってきてね〜」（そそくさ）」 何事も無かったかのように館の中へ入っていく

ファリス

「・・・あれ？（大汗）」

美咲

「うーん、てつきり『美咲ちゃんだけズルイ！！』とか言って騒ぎ出すかと思っていたんですけど・・・（どきどきどき）」

ファリス

「スファレさんが行ったら迷惑になることは、もう充分にわかっているはずですからね・・・。それに、この館を使ったお店の計画も

「ありますし」

美咲

「そう……ですね。それでは、スファレさんの気持ち揺らがないうちに、出発することになりますね」(ペこり)「南街門へ向かって歩き出す」

ファリス

「美咲ちゃん、いつてらっしゃい」

手を振る

スファレ

物陰から様子を窺っている

「……(きゅぴん!)」 瞳が妖しく光っている(爆)

コメント

スファレ、何か企んでいそうですね(苦笑)

第180話 追いかけてこの結末は・・・

4コマ劇場 アイオライト―540・・・2011/07/21
シリーズ3

タイトル「追いかけてこの結末は・・・」

1コマ

ラリマー側、ハーキマー山脈麓の樹海にて・・・

デンドリチック国樹海調査兵1

「ま、待てーーーーい！（叫び）
というか話を聞けーーーー！！
（うがーーーーー！）」

ダイ

「ふふっ・・・（にやり）
待てと言われて待つバカはいない！！
（うおおおーーーー！）」
全力で逃げている

グランゾル（ぬいぐるみ）

『だがダイよ・・・（汗）
あの者たちは、話を聞け・・・と言っ
ているようだが（ときどきどき）』

ダイ

「そんなの逃げた後から考える！！」
一切の迷い無し（笑）

グランゾル（ぬいぐるみ）

『まあ、捕まってしまうよりそっちの方が選択肢も増えるだろうが・
・・・（大汗）』（少しぐらい話を聞いても・・・）

デンドリチック国樹海調査兵5

「ぜえぜえぜえ……。いったい何なんだアイツらは～～～！ 体力お化けか……。って、なにっ!? (びっくり)」 前方に立つ人影に気づく

スペクトロライト

「……。! (ばっ!)」 腕を交差させて、精霊力の糸を展開させる

デンドリチック国樹海調査兵2

「なっ、アイツは……。 (大汗)」

デンドリチック国樹海調査兵3

「数週間前、ルチルクオーツに潜入した……。ヒューマイトの人形使い!! (どびっくり)」

突然の登場

シーライト (殺人人形)

『うけけっ (不気味な笑い) 別に操られなくてもわちきは動けるんだけどね～～ (ギリリ)』 両手にナイフを構える

効果音「びゅーっ、さくっさくっ!」 シーライトが素早い動きで調査兵に突っ込み、連続して薄皮一枚を切り裂く (完全に威嚇)

デンドリチック国樹海調査兵4

「ぎゃわわっ!? (痛っ)」

2コマ

数分後、駐屯地のテントにて……

デンドリチック国樹海調査兵1（包帯でぐるぐる巻き） 代
表で報告に来た

「ヤツラは思いのほかすばしく・・・完全に見失ってしまいました（ペこり）」 片膝ついて頭を下げている

デンドライト 椅子に座っている

「逃げられておいて、そんな報告はないだろー！（怒）」（大げさに包帯なんか巻きやがって〜！）

デンドリチック国樹海調査兵1

「も、もうしわけございません（大汗）」

女騎士

「ヒューマイトの人形使い・・・（うゝん） 行動を供にしているということは フォスフィさんとスフェーンちゃんはヒューマイトに与した・・・と考えるべきでしょうか？（汗）」（それが事実だとすれば・・・お二人の扱い、困っちゃいますね〜）

デンドライト

「人形使いが樹海を通ってルチルクオーツ入りするとき、デンドリチックからも冒険者を同行させたよな？」

女騎士

「はい。たしか・・・ブライト・ノアという冒険者を〜」

デンドライト

「って、それじゃあ白目の無いホワイトベースの艦長だろう・・・」

（大汗）」 何の話だ！（笑）

女騎士

「あゝ（汗） えゝっと、トリ……ケラトプス？（どきどきどき）」

デンドライト

「どこの恐竜だよ！（怒） トリプライト、ヤツの名前はトリプライトだ！」（叫び）」

女騎士

「あゝ、そうでした。トリ……さんでしたね（にっこり）」

デンドライト

「自国で有名な冒険者の名前ぐらい、覚えておいてやれよ……（大汗）」

女騎士

「あ、あははっ（苦笑）」

デンドライト

「やれやれ……（はあ）（絶対に憶えないだろうな）」

3コマ

女騎士

「それで……、そのトリさんは一緒ではなかったのですね」

デンドリチック国樹海調査兵1

「はい。ヒューマイトの人形使いの他には男が二人……喋る操り人形が一体、自ら動くぬいぐるみが一体……（大汗） ですが、冒険者トリプライトの姿はありませんでした」

デンドライト

「動くぬいぐるみって、なんだよそれ・・・（大汗）」（しかも、操り人形が喋るのか!?!）

女騎士

「別にヒューマイトと協力体制ではありませんが・・・ルルクオーツでトリさんに何かあったとするならば、ちゃんと報告してほしいものですね」

デンドライト

「あるいは、ヒューマイトはエンスタイト帝国を裏切ることにして、ルルクオーツの間者を招き入れた可能性がある。その場合、デンドリチックの冒険者であるトリプライトは邪魔となり・・・ルルクオーツ側と協力して殺害したのではないか？」

女騎士

「もしそれが事実であるとすれば 帝国に報告することでヒューマイトは失脚することになるでしょう。エンスタイト帝国に・・・報告されますか？」

デンドライト

「御免だね」（ふふん）

女騎士

「先々、事実が発覚したとき・・・報告しなかったことでデンドリチックが罰せられる可能性も考えられますが（ぼそっ）」

デンドライト

「オレは、ヒューマイト以上に・・・エンスタイトが嫌いなんだよ！ ヤツらの有益になるような情報・・・絶対に渡せねえ（あははっ）」

効果音「ずががーーーーーん!!」

女騎士

「帝国嫌い、徹底していますね・・・（苦笑）それなら、まずは逃げ回っているフォスフィさんの仲間・・・密入国者をなんとかすることにしましょう（にこっ）」（ヒューマイトのことは、その後で・・・）

4コマ

ラリマー側、ハーキマー山脈麓の樹海にて・・・

パロットクリソベリル

「・・・。。。。。。どうやら諦めてくれたようだな（ぼそっ）
物陰に隠れている

ダイ

「はあはあはあ（大汗）・・・ったく、しつこいんだよアイツら（ふう〜）それよりスペクトロ・・・。おまえヤツらに面が割れてしまったようだけど　大丈夫なのか？」

スペクトロ

「さあ、どうだろうな・・・（ふふっ）ルチルクォーツに協力していることを帝国に知られたら、わたしの祖国ヒューマイトは攻め滅ぼされてしまうかもしれないな（苦笑）」

パロット

「なんにしても、これ以上表立った行動は避けたほうがいい。アリスを見つげ出し、はやく樹海を越えないと・・・」

突然の登場

女騎士

「樹海を越えデンドリチックに入り……一体何をするつもりですか？」

ダイ

「ななっ!?(誰だ!)」

スペクトロ

「ちっ……、厄介なヤツに見つかってしまったようだな(苦笑)」

ダイ

「何……、どういうことだ?(汗)」

スペクトロ

「ヤツはここ数年で頭角を現してきたデンドリチック国の騎士……。国の代表であるデンドライトの近衛を努めるほどの実力……(じくり)」

パロット

「あれ? セレン……セレンディバイトか!?(大汗)」

セレンディバイト(女騎士)

「え……? あ、パロット……クリソベリル(うそ!)」

ダイ

「って、知り合いなのかよ!?(うがーーーーー!!)」

効果音「ばきゅ~~~~ん」

コメント

パロットの名前は憶えているのだ・・・、トリプライトがかわい
そう)()

第181話 セレンディバイト

4コマ劇場 アイオライト―541・・・2011/07/22
シリーズ3

タイトル「セレンディバイト」

1コマ

3年ほど前、デンドリチック国の片田舎にて・・・

セレンディバイト

「ねえ、パロット」。これからいつもの稽古つけて」
剣
を抜刀してやる気満々

パロットクリソベリル

「あのな・・・(汗) オレはセレンを鍛えるためにラリマーへ
来たわけじゃないんだぞ」(大汗)」

セレン

「いいでしょ、あなた居候なんだから(ぼそっ)」「(今もぼそっ
としているだけだし・・・)」

パロット

「うぐっ・・・(汗) それを言われると・・・辛い(どきどきど
き)」
現在、セレンの紐状態です (笑)

セレン

「あなた、年のわりにめっちゃくちゃ強いんだからさ、少しぐらい
教えてよ」

パロット

「セレンは騎士を目指しているんだっただな……。でも、この国じゃあ騎士なんかより冒険者として有名になった方が良くないか？」

セレン

「いいの！ わたしの夢は、立派な騎士になって……。デンドリチツク国に仕えることなんだから（にこ〜っ）」

パロット

「はいはい。それは立派な心がけで……。やれやれ（）」

セレン

「ああ〜、バカにしているな〜（もぉ〜！）」

パロット

「いや、そういうつもりではないんだが……。苦笑（）」（顔に出てたか〜？）

効果音「わいわいがやがや、わいわいがやがや（）」

2コマ

現在に戻り、ラリマー側、ハーキマー山脈麓の樹海にて……

セレン

「パロット……。ほんとうに……。パロットクリソベルルなの？（どきどきどき）」

パロット

「ふっ……。微笑（） その姿……。どうやら夢が叶ったようだな。セレン（）」

セレン

「きゃーっ、パロツト久しぶり~~~~~」(がっ、ぎゅ
~~~~)「抱きしめ」

パロツト

「ちよっ、セレン!(汗)フルプレートの鎧で抱きつくなー  
ー!!!(痛い痛い!)」

ダイ

「.....(じい~~~~)パロツトに、新たな女性の影  
が.....(ぼそっ)「スファレ、シリカ、フォスフィに続き  
?(笑)」

パロツト

「ななっ!?(びっくり)」

スペクトロライト

「これは...本妻であるスファレライト(?)に報告しておくべ  
き事態だね(うんうん)「(浮気の現場を目撃!!)」

セレン

「えっなに?パロツト、結婚したの~~~~!?」(どびっくり)  
「(しかも本妻って.....)」

パロツト

「するか~~~~!!!(涙)「(誰が誰の本妻だ!!)」

効果音「ずがが~~~~ん!!」

数分後・・・

スペクトロ

「てことは、なんだ〜。さっき追いかけてきたデンドリチック兵（？）はアリス・・・、あ〜フォスフィを保護しているって知らせに来てくれていた・・・わけだ（じい〜っ）」  
ダイをジト目で見つめる

ダイ

「うぐっ・・・（汗） だって、追いかけてきたら普通逃げるだろ？（苦笑）」  
逃げはじめた張本人

グランゾル（ぬいぐるみ）

「だから少し話を聞いたほうが良いと、あれほど・・・（やれやれ）」

ダイ

「って、結果的にアリスの居場所がわかったんだから、それでいいじゃないか！！（大汗）」

シーライト（人形）

「無駄に体力使わされたわけだね〜（ケタケタケタ）」

ダイ

「お前に体力は関係ないだろ！！（うがーーーーー！！）」（人形のくせに〜！）

シーライト（人形）

「・・・わちき、精神的に疲れた（はあ〜）」

ダイ

「そんなわけ、あるかー！ー！！（激怒）」

パロット

「まあまあ・・・（苦笑） そのおかげでオレはセレンと再会できたわけだし、フォスフィの無事も確認できたし・・・」

セレン

「ふふつ（微笑） なんだか楽しそうなパーティだね それじゃあ、フォスフィさんのところまで案内しましょう。ヒューマイトの人形使いさんにも、少しお聞きしたいことがありますし・・・（ちらり）」 スペクトロをチラ見

スペクトロ

「うぐっ・・・（汗）」（やはり面は割れてるよな〜）

突然の登場

デンドリチック国樹海調査兵1

「せ、セレンデイバイトさま・・・大変です！！」 大慌てでやって来る

セレン

「どうしましたか？（落ち着きなさい！）」

4コマ

デンドリチック国樹海調査兵1

「はあ、はあ、はあ・・・（汗） え〜・・・、じつは駐屯地で保護していたルチルクオーツからの侵入者ですが・・・（大汗）」

セレン

「フォスファイさんとスフェーンちゃんが・・・どうかしましたか？」

デンドリチック国樹海調査兵1

「・・・ちよつと目をはなした際に、テントから姿が消えてしまいました〜!!」(涙)「(申し訳ありません!!)」

セレン

「・・・・・・・・・・・・・・・・。ええええええー！！！！(どびつくり)」

効果音「ずがががぁー！！！！！！！！ん！！！！」

デンドリチック国、樹海から続く街道にて・・・

フォスフォファイライト

「う〜ん・・・、黙って出てきちゃって・・・本当に良かったのかな〜(とぼとぼ)」 街を指して歩いている

スフェーン(ペンダント)

『なにフォスファイ・・・。えっち〜拷問・・・してほしかったの？(ぼそっ)』

フォスファイ

「そ、そんなわけないでしょ!(あせあせ) でも・・・、あたしただけでエンスタイト帝国を目指すのって大丈夫なのかな〜(汗) やっぱり、今から戻ってパロットたちに合流したほうが・・・(どきどきどき)」

スフェーン（ペンダント）

『いま戻れば確実に捕まるよ……。しかも、今度は簡単に逃げられない牢屋とかに入れられて……即えっち拷問……。ぼそっ』

フォスファイ

「ああ〜もお〜わかった、わかりました！ パロットたちには心配させることになっちゃうけど……。このままエンスタイト帝国を目指す方が良いつてことね？」

スフェーン（ペンダント）

『そついうこと』

フォスファイ

「ああ〜、なんでこんなことに……。涙） っていうかさ〜、どーしてあたしがラリマーなんて危険な場所に来てるのよ！？ そもそもそれが納得できない！！（うにゃー……っ！）」

スフェーン（ペンダント）

『それは〜、フォスファイの前世での人格であるアリスが決めたことだから……。汗）』

フォスファイ

「アリスなんて知らないもん！（涙） っていうより、あたし……。ルチルクオーツに帰っちゃダメかな〜（しくしくしく）」

スフェーン（ペンダント）

『うう……。汗） いけいけな性格のアリスとは全然違う〜（大汗）』（フォスファイって、意外に後ろ向き？）

フォスファイ

「他国の冒険だなんて・・・あたしには荷が重すぎるよ〜」 (泣)

「

スフエーン (ペンダント)

『まあ、わたしもそう思っけどね・・・ (大汗)』

効果音「ばきゅ〜〜〜ん」

「

コメント

フォスファイ・・・がんばれ (笑)

## 第182話 先手必勝

4コマ劇場 アイオライト―542・・・2011/07/24  
シリーズ3

タイトル「先手必勝」

1コマ

デンドリチック国ラリマー軍の駐屯地、テントの中にて・・・

デンドライト      デンドリチック国代表

「ほお・・・、おまえがセレンの師匠にあたる冒険者か・・・  
なるほど） 想像していたよりも・・・若いな（ぼそっ）」

パロットクリソベリル

「確かに剣技は教えていたが 師匠というわけではない（ぼそっ）  
今の強さは、純粋にセレンの実力だ・・・」

デンドライト

「ふむ・・・、そうかそうか その謙虚さに免じて・・・三年前  
の不法入国は見逃してやろう（笑）」

パロット

「とうとうとは、今回について見逃すつもりは無い・・・と？」  
ギロリ（ 「 デンドライトを睨みつける

デンドライト

「頭の回転も速そうだな・・・」

パロット

「いや……、今は二倍速で考えないといけないから、じつはかなり必死だ……（ふふっ）」

デンドライト

「なんだよ二倍速って……（苦笑） まあ、こちらにもフォスフイとスフェーンに逃げられた落ち度がある。デンドリチックを混乱させるような悪巧みでも企んでいなければ許してやろう……（ぼそっ）」

パロット

「オレたちはラリマーにいる光竜アレキサンドライトに会いに来ただけだ。まあ、ついでにルチルクォーツへ攻め込む準備がどれだけ進んでいるかを見てくるようにも言われているがな……（ぼそっ）」

デンドライト

「正直なヤツめ……気に入ったぞ（にやり）」

パロット

「そんなことより、オレたちは一刻も早くフォスフィを捜しにきたいのだが……」

デンドライト

「まあ待て……。いまセレンがヒューマイトの人形使いから話を聞いている。それに、フォスフィのことは心配するな……。ここ数カ月で、この辺りの魔物を一掃した。よっぽどのことがない限り……フォスフィに危険が及ぶことはない」

パロット

「なるほど……（ぼそっ） とりあえずは安心というわけか……」

(うーん) 「でも心配

2コマ

数分後・・・

セレンディバイト

「お待たせしました・・・」 テントに入ってくる

デンドライト

「で・・・、どうだった？」

セレン

「結論から言いますと、ヒューマイトの人形使いスペクトロライトは、現在ルチルクオーツの管理下にあるそうです」

デンドライト

「祖国を・・・裏切ったというのか？」

セレン

「うーん、そう考えるのは・・・微妙ですねえ。人形使いにヒューマイトを裏切ったという認識はなく・・・、それどころか自分は祖国のために動いているのだと言い張っていました(汗)」

デンドライト

「ん・・・、どういうことだ？」

パロット

「つまり、スペクトロは馬鹿げた戦争を回避するために行動しているんだよ(ぼそっ)」「(アリスの洗脳によって・・・)」

セレン

「ああ、そういうことか……（なるほど）」

デンドライト

「馬鹿げた戦争ね……。確かにその通りだ（苦笑）　ということ  
は……スペクトロライトはヒューマイトとは関係なく、エンスタ  
タイト帝国にケンカを売っているというわけか……（くくくっ）」

セレン

「デンドライトさま？（汗）　ど、どうしたんですか、そんな不気  
味な笑みなんか浮かべちゃって」（ときどきどきどき）」

デンドライト

「よしっ、そのケンカ、オレにも……デンドリチックにも一枚噛  
ませろー！（叫び）」

パロット

「はあ〜？（大汗）」（本気か!?!）

セレン

「……………ええええええ……………!?（どびっ  
くり）」

効果音「ずがー……………ん!?!」

3「マ

駐屯地、テント前にて……

パロット

「と、いうわけで、ルチルクオーツ側の考えに賛同して　今回

の旅に全面協力してくれることになった……」

セレン

「デンドリチックの騎士……セレンデイバイトです（ぺこり）  
デンドリチック代表のデンドライトさまもついて来る気満々でしたが、わたしが全力をもって阻止しました（邪魔になりそうだったので……）」

ダイ

「ルチルクオーツ側の考えというところ……戦争反対？」

パロツト

「ま、そういうことだ。あと、もう一つの目的でもある光竜アレキサンドライトの居場所も判明した。ラリマーを統一し……戦争を起こそうと計画しているというエンスタイト帝国にいるらしい……」

スペクトロライト

「帝国にいる……？　ちよつ、パロツトの捜しているアレキサンドライトって……エンスタイトの魔竜のことか！？（どびつくり）」

パロツト

「情報を纏めると　そういうことになるだろうな」

スペクトロ

「ってことは、つまり……（じくじく）」

パロツト

「目指せ、エンスタイト帝国！（お）（）」

スペクトロ

「……………(ざーっ)」 顔から血の気が引く

ダイ

「戦争始まる前に、黒幕をぶっ倒そうってことだな (ナイスアイディア)」

グランゾル(ぬいぐるみ)

『確かに、戦争が始まってしまえば止めることは容易ではない……。開戦の前に黒幕を倒すというのには賛成だ!』

パロット

「だろ〜〜 (にっ)」

スペクトロ

「ちよっ、おまえら何考えて…… (大汗)」

4コマ

セレン

「当然、デンドリチック国とこのメンバーだけでエンスタイト帝国を倒せるとは思えません。ラリマーを旅しながら、信頼のできる賛同者を集める必要がありますね」

ダイ

「そんなの集めなくても、オレとグランゾルだけで充分だぜ〜〜 (へへ〜ん)」「アレキサンドライトとの戦いにならなければ、マジで楽勝です (笑)」

セレン

「帝国からの命令でもある進軍の下準備ですが・・・そちらはデンドライトさまに適当な理由を付けていただき、達成期間を引き伸ばしてもらおうようにします。これだけでも、かなりの時間が稼げるはずですよ」

スペクトロ

「こ、こいつら本気で帝国にケンカを売るつもりか・・・？（大汗）」

「（頭、大丈夫か・・・）」

パロット

「どうやら、フォスフィヤスフェーンもアレキサンドライトの居場所を聞いたらしい。つまり、エンスタイト帝国を目指せば、二人と合流できる可能性が高いわけだ。それに、アリスの人格がまた表に出るようなら、戻ってくるかもしれないし・・・」

ダイ

「いや、アリスのことだから、一人でもエンスタイト帝国に突っ込むんじゃないか？（苦笑）」

パロット

「マジでそうなりそうだから微妙に笑えない・・・（大汗）」

セレン

「えっ、なに！？（汗）　フォスフィって・・・そんな子だったの！・・！（どびっくり）」

ダイ

「フォスフィじゃなく・・・アリスの方な」

セレン

「……どう違うの（大汗）」（フォスファイがアウインの勇者アリスの生まれ変わりなんだよね？）

ダイ

「え〜っと……（説明するの面倒だな〜）」

スペクトロ

「そ、そんなことより！（叫び） エンスタイト帝国に行くこと・  
・もう決定？（大汗）」

パロット

「……ああ（ぼそっ）」（何を今更……）」

スペクトロ

「あ〜……そっですか（しくしくしく）」（コイツらと連むのも  
うやめようかな〜〜〜）」

効果音「ばきゅ〜〜〜〜〜ん」

コメント

う〜ん、動きがない（苦笑）

## 第183話 ヒューマイトも行動を開始しました

4コマ劇場 アイオライト―543・・・2011/07/27  
シリーズ3

タイトル「ヒューマイトも行動を開始しました」

1コマ

ヒューマイト城、カナリーたちに与えられた部屋にて・・・

クリノヒューマイト

「どうだおまえたち、この部屋は快適・・・(かちやつ)」「  
部屋の扉を開く

カナリー

「ふ〜ん、ふふ〜ん (ぺらぺら)」「 ベッドに寝転んでフア  
ツシヨン誌を見ている

ブルースピネル

「……………(ぼ〜〜つ)」「 窓から遠くの方を眺めて  
いる

クリノ

「……………(汗) すでに自分の部屋のようにくつろいでいるな  
〜(苦笑)」「

カナリー

「ん〜、クリノ……………。なんや用なんか〜?(ぼそつ)」「 顔  
すら上げないで呟く

クリノ

「はあゝ（やれやれ） オレは別に構わんが・・・おまえたちは目的があつてこのヒューマイトに来たのではなかつたのか？（汗）」

ブルース

「・・・・・・・・（ギロリ）」 カナリーを睨みつける

カナリー

「そんなにいわれんでもわゝつてゐて この国のお宝譲つてもらうため、ウチらはあるたらに協力するってことやる？」

クリノ

「うっ・・・・・・・・（汗） わかっているのなら・・・・・・・・それでいいが（どきどきどき）」

2コマ

カナリー

「そやけど、ルチルクオーツの刺客がこんことにはウチらの出番はないわけやろ。そやから、めっちゃヒマしてんねん（苦笑）」

クリノ

「何もないに越したことはないが・・・・・・・・（汗） 昨晚のように街を破壊することはしないでもらいたいな（ぼそっ）」

カナリー

「あ・・・・・・・・、機獣神（超獣神）で戦うと 周囲の被害は避けられへんからなゝゝ（汗） そや（いいこと思いついた）」

クリノ

「ん？（なんだ？）」

カナリー

「わざわざルチルクオーツの刺客が来るの待ってる必要ないよな？  
こっちから出向いて殺したればいいんじゃないか？」

ブルース

「……………」

クリノ

「た、確かにその通り……なのだが、この広いラリマーから誰もわからない刺客を見つけ出すとでもいうのか？（大汗）」

カナリー

「心配あらへん 刺客が来るとすればルチルクオーツと隣接している場所からに決まっとる。つまり、こっから東側を重点的に調べれば見つけれられるはずや」

クリノ

「……兵は出せんぞ（ぼそっ）」「（いるかどうかすらわからない刺客を捜すために……）」

カナリー

「大丈夫……（にやり） ウチ一人で……（ぼそっ）」

ブルース

「オレが行こう……（ギロリ）」

カナリー

「はい~~~~!?!?（びっくら）」

ブルース

「刺客と接触できなかったための、どちらかはヒューマイトに残らないといけない。だからオレが行く！（カナリーは残れ）」

カナリー

「ちよつ、なに勝手に決めとるんやー！　ウチが行くゆゑとるやないかゝ！！（怒）」（おまえこそ残れやー！！）

ブルース

「いやだ（ぷいっ）」　　そっぽを向く

カナリー

「なっ！？（むかつ）　だいたい、刺客の中に知り合いとかおつたら・・・ダイヤレイチエルとかがおつても、おまえは殺せるっていうんかゝ！？（叫び）」（あゝ？）

ブルース

「オレの目的は、あくまでも強力な時空族の遺産を手に入れること・・・。そのために必要だというなら　躊躇わない（ぼそっ）」

カナリー

「へえゝ、ええ覚悟やないかゝ（にやり）　そやったら、ブルースに任せよ・・・っとでもいうと思つたかゝ？　ウチはそう簡単に引っかからへんでゝゝゝ（ふっふゝん）」

ブルース

「・・・ちっ（舌打ち）」（ダイなら簡単に引っかかるのに・・・）

クリノ

「・・・・・・・・・・。じゃあ、刺客討伐には・・・・ブルースに行つて  
もらつとしよう(ぼそっ)」

カナリー

「なにー！ー！ー！(うにゃー！ー！ー！)」

効果音「ずががー！ー！ー！ー！ー！ん！ー！」

4コマ

ブルース

「ほお〜・・・・(こいつ、なかなか)」

カナリー

「ちよつ、なんでや！(汗) いいはじめたんウチやのに、なんで  
ブルースに行かせるんやー！ー！ー！(叫び)」

クリノ

「ああもお〜うるさいヤツだな〜・・・・(汗) 別に、どっちが行  
つたつていいだろうが(大汗)」

カナリー

「そやつたら、ウチが行つてもええはずや〜」

クリノ

「はあ〜(やれやれ) 二人とも行きたいんだから、意見はなかなか  
纏らない。だったら、他の誰かが決めるしかないだろう。行くの  
はブルースだ・・・・(大汗)」

カナリー

「そ、そんな〜〜（涙）」

クリノ

「ふう〜・・・（やっと納得したか〜）」

ブルース

「クリノ・・・（ぼそっ）」  
クリノに向かい合う

クリノ

「ぬ？（なんだ？）」

ブルース

「オレ、お前とは友だちになれそうな気がする・・・（ぐるぐる）  
手を差し出して握手を求める

クリノ

「そんな奇妙な面を憑けているヤツとはお断りだ（ぼそっ）」  
拒絶！

ブルース

「えええええー！！！！！？（そんなー！！！！！）」

効果音「ずががー！！！！！ん！！！」

カナリー

「ああ〜、これからも・・・しばらくヒマな時間が続くんかい！！  
（しくしくしく）」

コメント

ブルースとリーンウィック、デンドリチック圏へ向けて出発

## 第184話 クラリアンアース

4コマ劇場 アイオライト―544・・・2011/08/01  
シリーズ3

タイトル「クラリアンアース」

1コマ

説明文「今回のお話は、パロットたちの世界（4コマ側）とは違う  
時空軸、シヨウとアリスの戦いによって人間界が消滅しなかった世  
界（原作側）・・・、プラネットクリエイター野乃原真菜によって  
創造された とされる惑星クラリアンアース（人間界）から始ま  
ります」

サファイ 13歳ぐらいの少女

「りく、陸、リクーーーーー！！ とーーーーー！（どすっ）  
ベッドで寝ている誰かの上に身体を投げ出す

陸 サファイとアヴァター契約して、クラリアンアースから自  
身の存在を消された16歳の少年

「ぎゃふっ!?!?（痛っ!） って、サファイー！ 起こしてく  
れるのはありがたいが・・・この起こし方はやめてくれっていつて  
るだろーーーーーが!?!（怒）」

サファイ

「だって、リク・・・なかなか起きないんだもん（ぼそっ）」

陸

「起きないじゃねえ、痛いんだよ！（うがーーーーー!）・・・  
で、いったい何の用だ、こんな朝っぱらから（ふぁあああ）」

大あくび

サファイ

「あ、うん、え〜っと……。ねえリク〜、せつかくの長期休暇なんだから、どこか遊びに行こうよ〜」  
（にこ〜っ）

陸

「あ〜……。サファイさん？（汗）」

サファイ

「ん〜？（なあに〜？）」

陸

「わかつているとは思うが……。（汗） クラリオンアースの住人であるオレとエターナルアースの住人であるサファイが一緒にいられるのは、どういう原理かわからないが優子さんが創ったこの洋館の中だけ……。洋館を一步出たらそれぞれの世界へ戻るだけで、一緒に出かけることなんてできないだろ！！（大汗）」（お互い携帯端末で会話ができるけど）

サファイ

「へへ〜ん そのことについては大丈夫なんだよ」

陸

「……。なに？（汗）」（嫌な予感が……）

2コマ

サファイ

「じゃじゃ〜ん （何かを取り出す） このデータチップをジ  
ユエルタイプの携帯端末に読み込ませることによって、  
クリスタルファンタジー  
結晶幻想曲

をプレイ中のユーザーとそのアバターが同時にプラネットメーカーで創造した惑星へ転移することができちゃうのです!! (凄いでしょ)

陸

「ちょっと待て・・・(汗) それって、この前優子さんからテストプレイを依頼されて、オレが恐竜だらけの惑星へ投げ込まれたプログラムのも、バージョンアップ版なんじゃ(どきどきどき)」  
テイラノに甘噛みされて死にかけました (笑)

サファイ

「うん、そうだよ。なんか優子さん・・・早いとこコレを商品化したいんだって・・・(あははっ)」

陸

「じよ、冗談じゃねえ!(汗) あんなマッドサイエンティストに関わっちゃ、命がいくつあっても足りねえ・・・(大汗) サファイ、今からでも遅くはないから断わってきなさい(どきどきどき)」

サファイ

「ヤダ・・・(ぼそっ)」

陸

「・・・サファイ?(汗)」

サファイ

「サファイは、陸とお出かけしたいの!! (涙)」

陸

「だから、危険だって言ってるだろーーーーーが!!! (うぎゃー)

「――！」

効果音「ずがが――！！ん！！」

3コマ

サファイ

「・・・ねえリク（ぼそっ） リクって・・・サファイの何？（じい  
〜〜っ）」 陸を見つめる

陸

「うぐっ・・・。そ、それは・・・サファイのアヴァター（汗）」

サファイ

「それじゃ、サファイは？」

陸

「サファイは・・・クリスタルファンタジー結晶幻想曲とかいうリアルネットワークゲームの  
プレイヤーの一人（大汗）」

サファイ

「いつもいつも邪険にするけど、リクはアヴァターなんだから・・・  
もっとサファイに優しくしてよね！！（ううっ）」 目尻に涙が  
浮かんでいる

陸

「って、こんなことで泣くなよ！！（あせあせ）」

サファイ

「泣いてないもん！！（涙）」

突然の登場

菜月 神代菜月。陸が憧れている学校の先輩で、如月優子と  
アヴァター契約を結んでいる

「陸くん、何を朝から騒いでいるのかしら？」

陸

「あ、菜月姉え〜（汗）」 現在は菜月の弟という立場

サファイ

「ナツキお姉ちゃん〜、リクがいじめる〜〜（抱きっ）」  
菜月に抱きつく

菜月

「陸くん!!!（怒）」

陸

「いじめてねええええ〜〜〜〜〜!!!（オレは無実だ〜〜〜〜〜  
!!!）」

効果音「ばきゅ〜〜〜〜〜ん」

4コマ

数分後・・・

菜月

「なるほどね〜。つまり、このプログラムによって、プラネットメ  
ーカーのシミュレートによって創造された擬惑星の中に入り込む・  
・ってことよね？ でも、プログラムである陸くんは問題ないに  
しても、生身の人間であるサファイちゃんが擬惑星に入るなんて・

・大丈夫なの？（大汗）

サファイ

「優子さんの御墨付きもあるんだから大丈夫でしょ（ぼそっ）」

陸

「それが一番信用ならないんだけど・・・（どきどきどき）」

菜月

「ええ〜っと、付属していたこの説明書によると、行き先はプラネットメーカーによって創られた擬惑星を元にしたファンタジー世界？（汗） 約五千年ほど未来の精霊界・・・第四聖界クリスタルのラリマー47国のデンドリチックって小国に転移するみたい（へえ〜〜〜）」

陸

「えらい具体的だな〜（汗） って、ちょっと待て！（びっくら） プラネットメーカーで創造された惑星の中で、文明が発生したのはここクラリオンアースだけじゃなかったのか？（大汗）」

サファイ

「うん、クリスタルファンタジー結晶幻想曲はじめるときに、優子さんからそう聞いた・・・」

菜月

「とういことは、純粋な擬惑星じゃなく、優子さんの用意したプログラム・・・つまりゲーム世界にダイブするってこと？」

陸

「普通に考えると・・・そういうことになるだろうな〜（汗）」

菜月

「リアルネットワークゲームの中で、さらにゲーム世界へ行くなんて・・・わたしもついていこうかしら？」（ぼそっ）「（すぐく面白そう）」

陸

「え？（どきどきどき）」（菜月姉え？）

サファイ

「うん、ナツキお姉ちゃんも一緒に行こうよ」

陸

「待て待て待て！ 薫のヤツはどうする？（たしか明日まで帰ってこないはずだよな？） 出かけるにしても薫だけ残しておけないだろ！？（大汗）」（仲間はすれにしたら、あいつ拗ねるぞ！）

菜月

「置き手紙とデータチップを残しておけば大丈夫でしょ」（そのうち薫ちゃんもやって来るでしょう）

サファイ

「それじゃあ、早速出発しよ〜〜」

陸

「って、せめて寝間着から着替える時間をくれーーーー！！（うにゃーーーー！！）」

説明文「小説『クラリオンアース』の主要メンバー、ラリマー編に参戦！？」  
「なんだか混沌としてきましたね（苦笑）」

## コメント

4コマ版では人間界は消滅していますが、原作版では『なんちゃ  
らプラネット』『ケラリオンアース』と歴史が続いています

第185話 扉の向こう側は・・・

4コマ劇場 アイオライト―545・・・2011/08/03  
シリーズ3

タイトル「扉の向こう側は・・・」

1コマ

時空の狭間に浮かぶ、時空戦艦アレックス改のブリッジにて・・・

効果音「ずどどっ！ ビービービービー！」 激しい振動の後、回転灯が点灯し、警告音が鳴り響く

パイロップ 長身で美しいプロポーションの女性

「ちよっ、なんだいなんだい！ いったい何が起こったんだい！？  
(大汗)」 椅子の背もたれにしがみつく

グロツシュラー 針金のようにとんがった髭を生やしている  
痩せ男

「ど、ドロンジョさま大変です！ 何者かがこの時空間に転移して  
くる模様です！！」

パイロップ

「誰がドロンジョだい、誰が！！(怒)」(ぎゅ〜〜〜っ！)  
グロツシュラーの頭を抱えて締め上げる

グロツシュラー

「痛い痛い痛い！（涙） ああ、でも後頭部に柔らかな感触が・・・  
(ぼっ)」「

パイロップ

「っと、そんなことより・・・（グロツシュラーを解放する）時空間転移してくるってことは、その何者かが時空族の遺産を持っている可能性もあるわけなのかい？」

グロツシュラー

「あるいは、時空能力者・・・とも考えられますね～～～（うん）」

パイロップ

「なんにしても・・・そいつを捕まえればわかることだよ！ さあ、戦闘準備をしな！！（叫び）」 椅子の上に立ち上がって右手を突き出す

グロツシュラー

「あらほらさっさ～～～」

ツアボライト

ゴリラのように強靱な筋肉に覆われた厳つい男

「ぶがーーーーー！（叫び）」

時空戦艦アレックス改の浮かぶ時空の狭間にて・・・

光の塊り

『ごおおおおおーーーーー！！』 巨大な彗星のように尾を引きながらアレックス改に突っ込んでくる

パイロップ（声だけ） アレックス改の中から声が聞こえてくる

『おまえたち、やあ～～～っておし・・・え？（大汗）』 光の巨大さに気づく

グロツシュラー（声だけ）

『き、緊急回避・・・が間に合いますえーん！！（いやあああ  
あぁー！！！！）』

効果音「どごつ、ひゅーーーーーっ！！」

光の塊り、ア

レックス改を簡単に弾き飛ばす

パイロップ（声だけ）

『い、やかな感じーーーーー！！（大泣き）』

ツアボライト（声だけ）

『ふがーーーーー！！（涙）』

説明文「時空戦艦アレックス改は、時空の狭間の星になりました（  
きらりん）」

## 2コマ

デンドリチック国、樹海から続く街道にて・・・

フォスフォファイライト　上空を見上げる

「・・・え？ あれって流れ星！？（びっくり）」

スフェーン（ペンダント）

『いや・・・、昼間にあれだけはっきり見えているんだから、流れ  
星じゃなくて彗星でしょ？（汗）』

フォスファイ

「えっ！（汗）　彗星っていうとアレでしょ、天変地異の前触れ・・・  
た、大変だ！！　空気が吸えなくなる前に酸素ボンベを買いだ

めしとかないと!?(大汗)「(尾のところには有毒ガスが含まれているんだよね!!)」

スフェーン(ペンダント)

『あんだ、いったいいつの時代の人間よ・・・(どきどきどき)』

フォスファイ

「と、とにかく、なんかアレ(彗星)こっちに近づいてきているよ  
うな気がするから、安全なところへ避難しないと・・・(大汗)」

スフェーン(ペンダント)

『いや、あのサイズの彗星が大気層を突き破って地表に衝突すれば、  
広範囲にわたって被害がでるから、今からどこに逃げてても同じだよ  
』

フォスファイ

「・・・広範囲って、どれくらい?(どきどきどき)」

スフェーン(ペンダント)

『このラリマーとルチルクオーツは・・・一瞬で壊滅するでしょう  
ね~~~~(もちろん生存者は無し)』

フォスファイ

「そ、そんな~~~~!?(涙)・・・って、えっ!!!(どびつく  
り)」 後方に凄まじい気配を感じる

突然の登場

リーンウィック(聖獣機)

限りなく生体に近い機械ででき

た巨大な龍

『・・・・・・・・・・』 空中に浮いている

ブルースピネル 仮面を付けた少年

「・・・・・・・・・・」（ギロリ）「 龍の額の上に乗リフォスファイを睨みつけている

フォスファイ

「あ、あの人って!?!?」（大汗）「 エリアGで殺されかけました

ブルース

「リーン・・・・」（ぼそっ）「 龍の額の宝石に身体が吸い込まれていく

リーンウィック（聖獣機）

『があああああ!?!』（叫び）『 命の炎が灯ったように動き出す

3コマ

バックミュージック「蒼い閃光リーンウィック2011」

フォスファイ

「ちよっ、なにこれ?（汗） どころからカッコいい音楽が流れてきた!?!（どびっくり）「

スフェーン（ペンダント）

『い、嫌な予感が・・・・』（エリアGの二の舞い?） フォスファイ、逃げましょ!?!（汗）『

フォスファイ

「えっ、スフェーンちゃん!?!?」（大汗）「

ブルース（声だけ）

『リーンウィック・・・、バトルモード・チェンジ!!』

リーンウィック

『オオオオーーーーーッ!!（ガシャン、ガシャン!!）』

ありえない変形をして、騎士型の巨大ロボット・・・超獣神となる！

ブルース（声だけ）

『超龍神リーンウィック・・・ここに見参!!（びっし!）』

地上に降りたリーンウィックがかっこよくポーズを決めている

スフエーン（ペンダント）

『やっぱり出たよ・・・巨大ロボット!?（どびっくり）』

フォスファイ

「だから、なんなのよアレーーーーー!?（泣き叫び）」「（アルフォーニのお友だちーーーー!?!）」

効果音「ずががーーーーーん!!!」

スフエーン（ペンダント）

『まずいわね~~~~（汗） 彗星も落ちてくるかもしれないっていうのに（ちらり）・・・あ（大汗）』

フォスファイ

「って、いつの間にか直ぐそこに!?（どびっくり） は、早く逃げ・・・（ぴかっ!）」 地表に当たった瞬間、辺りが眩い光に包まれる

ブルース（声だけ）

『うおっ！（なんだ!？）』

リーンウィック、腕で光を遮る

フォスファイ

「……（どきどきどき） あ、あれ？ あたしたち……  
生きている!?（大汗）」（どうして?）

4コマ

スフエーン（ペンダント）

『うそ……でしょ！（汗） 衝突した彗星はどうなった……は  
い?（大汗）』 間の抜けた声を上げる

説明文「フォスファイたちの前の地面に1メートルほどの光の棒が横  
たわっており、それが徐々に上へと浮き上がってくる。光の棒が通  
過した箇所には木でできたピンク色の板（?）が現われ、フォスフ  
イの目線ほどの高さになったとき……それが扉の一部であること  
に気づいた」

フォスファイ

「え〜つと……（大汗）」

スフエーン（ペンダント）

『ちよつ、なにこれ？ ノブがついてて……扉!?（汗） なん  
で、こんなところに扉が現われるのよー！ー！（叫び）』  
軽くパニック！

フォスファイ

「……知っている（ぼそっ）」

スフエーン（ペンダント）

『えっ、フォスファイ……これ見たことあるの!! (大汗)』

フォスファイ

「ううん、見たことは……ない。でも知っている……。なぜだかわからないけど……。あたしはコレを知っている!!」

スフェーン (ペンダント)

『おそらく魂の……前世での記憶ね (またアリスの人格が現われる前兆かな?) で、フォスファイ。これはいったい何なの!?!』

フォスファイ

「そう……。これは、自身の記憶から行ったことのある場所へ瞬時に繋がるという伝説のアイテム……。その名も『どこでもドア』!! (叫び)」

スフェーン (ペンダント)

『水色の猫型ロボットの秘密道具……!? (わぎゃ……)!! ( ) (そうこう言っている間に、扉が完成しちゃった!!)』

天空界、コランダムにて……

サファイア (如月優子)

秘密道具を創った人 (笑)

「へっくちっ!!」 可愛くくしゃみをする

効果音「ずがー……ん!!」

再び、デンドリチックの街道にて……

フォスファイ

「…………… (くり) あれがあたしの知る『どこでもドア』だ

とするのなら、中から誰かが出てくるはず・・・（大汗）

スフェーン（ペンダント）

『誰かって、誰なのさーーーーー!!』（叫び）『敵？ 味方!？』

突然の登場

サファイ

「到着ーーーーー」（とう）「開いた扉から勢いよく飛び出してくる

陸

「あつ、バカっ！ 知らないフィールドなんだからまずは状況調査をしないと!!（大汗）」（空気あるのか!？）

菜月

「陸くん。状況調査・・・とか言っている場合ではなさそうですね（ほら）」 フォスファイに視線を向け、上空を指差す

陸

「え?（ひょいっ） って、なんじゃありゃーーーー!!（どびつきり）」（巨大ロボットーーーー!?!）

リンウィック

『・・・・・・・・（じいっ）』 陸たちを見ている

スフェーン（ペンダント）

『・・・ねえ、フォスファイ（ぼそっ） リンウィックはあいつらに任せて・・・そっつと逃げない?（大汗）』

フォスファイ

「あゝ、うん。そうだね・・・（どきどきどき）」

コメント

じつは、陸とブルースには因縁があります（汗）

## 第186話 フュージョン・チェンジ

4コマ劇場 アイオライト―546・・・2011/08/05  
シリーズ3

タイトル「フュージョン・チェンジ」

1コマ

デンドリチック国、樹海から続く街道にて・・・

リンウィック（超獣神）

『……………（じい〜〜〜っ）』  
突然現われた陸たちを  
見下ろしている

サファイ

「す、すっご〜い なにあの巨大ロボット・・・（汗） この世界の魔物なの!？」（近未来ファンタジー!?!）

陸

「魔物だとしても、どう考えてもザコ敵 じゃないよな〜（汗）  
スタート地点で中ボスクラスとの戦闘があるなんて・・・どんな  
クソゲーだよ、まったく・・・（ぶつぶつぶつ）」（メンバーが全  
滅しないと、ストーリーが進まないとか?）

菜月

「いえ、あのロボットを敵だと決め付けてしまうのは早計ではない  
でしょうか? よく見てください。スーパーロボット大戦の主人  
公機でもおかしくないほどカッコいいですよ」

陸

「え、どうかな〜」（汗）色合いも寒色系だし・・・なんだ  
か装甲がトゲトゲしているから、主人公機というよりはライバル機  
じゃないかな〜？（大汗）」 鋭いですね

菜月

「そう？」

サファイ

「でも、かつこいいのは間違いないよね」（にこ〜っ）「（ファイ  
ギョアとかでありそう）」

効果音「わいわいがやがや、わいわいがやがや」

フォースファイライト

「……………」（汗）」 啞然

スフェーン（ペンダント）

『なんなの、この人たち……………（どきどきどき）』

2コマ

菜月

「それで……………、どうしますか陸くん？」

陸

「うーん、襲ってこないみたいだから、今のうちに逃げちゃおう」

サファイ

「え、逃げるの？（びっくり）」 うう……………、逃げるのってなんだ  
か負けのような気がする（大汗）」 RPGとかでは、ザコ敵  
も全て蹴散らしていくタイプ

陸

「あんなのと戦えば、オレたちにも被害が出るだろ？ 戦うにしても、ちゃんと準備をしてだな〜」（汗）」  
無駄な戦闘は極力避けるタイプ

菜月

「そうですね。魔物と戦うより先に、この世界のことをちゃんと調べないと（回復ポイントの場所とか?）」  
ラングリッサーでは傭兵を全く雇わないタイプ（意味不明!!）

リンウィック（超獣神）

『……（汗）ブルースよ、突然現われたこいつら……どうする?（大汗）』

ブルースピネル（声だけ）

『むこうには戦う意思はないようだ 放っておけ（ぼそつ）それより、オレたちの目的は……あくまでもルチルクオーツからの刺客を始末することだ!』

陸

「………ブルース?」

フォスファイ

「ちよっ!（汗）ルチルクオーツからの刺客って……も、もしかして!（大汗）」

スフェーン（ペンダント）

『どう勘違いしたらそんなオモシロ状況になるのかはわからないけど、たぶんわたしたちのことでしょうね〜』（苦笑）』

フォスファイ

「やっぱりー！ー！ー！？（涙）」（早く逃げとけばよかったー！ー！）

効果音「ずががー！ー！ー！ー！ー！ん！ん！ん！」

3コマ

陸

「ブルース・・・、ブルース？（うん？）」  
何か引つかかっている

サファイ

「リク・・・、どうしたの？」（唸ったりなんかして・・・）

陸

「いや、どこかで聞いたことがある気がするんだよね。ブルースって名前・・・（どこだったかな？）」

サファイ

「ああ、あれじゃない？ リクがわたしの神アヴァター乃化身になってからすぐ、神の資質を調べるって襲ってきた結晶クリスタルファンタジー幻想曲第三の管理者アドミニストレータ・・・。その規定外プログラムの名前が確かブルース・・・ブルースピネルじゃなかったかな？」（リクから聞いたんだよ、この話）

陸

「ブルー・・・スピネル（ぴくっ）」  
思い出しました

菜月

「でも、名前が同じでも・・・同一人物とは限らないでしょ？（汗）」

陸

「いや……、あの技には見覚えがある（ぼそっ）」

リンウィック（超獣神）

『八寒地獄 虎虎婆（じゅうば）！！』

説明文「リンウィックが氷槍八寒地獄を地面に突き立てると、先の鋭く尖った巨大な氷柱が出現し……フォスフィに向って伸びていく」

フォスフィ

「ひゃひっ！？（涙）」 身体を投げ出して巨大氷から逃れる

スフェーン（ペンダント）

『って、こいつら（原作キャラ）が絡んでくると、ストーリーのバランスが崩れるって！！（うにゃー！）』（戦闘力が違いすぎー！）

効果音「ばきゅ~~~~~~~~ん!!」

4コマ

サフィ

「ねえリク。なんでもいいけど、あの人助けないとまずいんじゃないかな~~~~？（大汗）」（このままじゃ、殺されちゃうよ）

陸

「あの子がどうなるかと……関係ない（ぼそっ）」

菜月

「り、陸くん!! (なんてことを!)」

陸

「ただし・・・、あの巨大ロボット・・・ブルースだけはオレがぶつ倒す! (怒) サファイ! (叫び)」 ジュエルタイプの携帯端末を握り締める

サファイ

「そうこなくつちゃ いくよりク!! (ぎゅ〜っ)」 同じ  
くジュエルタイプの携帯端末を握り締める

陸 & サファイ

「フュージョン・チェンジ!! (叫び)」 光の塊りとなつた二人が重なり合う!

効果音「ずごごごごごごご!」 光の柱が立ち昇る

スフェーン (ペンダント)

『な・・・、なに? (どびっくり)』 (いったい何事!?)

ブルース (声だけ)

『ま・・・、まさか (大汗)』

突然の登場

??? ベースは陸の姿で背中に純白の翼が生えている (サ

ファイ姿バージョンもある)

『奇数月9月のジュエルナイト 天空神サファイア・・・誕生!

! (叫び)』 陸とサファイが融合した姿

フォスファイ

「……………」  
ええええー！？(どびっくり)「(そんなバカな〜)！」

コメント

サファイとは愛称で、実際のプレイヤー名は『サファイア』です

第187話 操作系の向上を・・・

4コマ劇場 アイオライト―547・・・2011/08/08  
シリーズ3

タイトル「操作系の向上を・・・」

1コマ

デンドリチック国、樹海から続く街道にて・・・

陸（サファイア） 陸とサファイがフュージョン・チェンジ  
した姿

『・・・・・・・・・・』 全身に凄まじい天空力を纏っている

サファイ（声のみ） 陸の身体から声が聞こえてくる

『へへ〜ん、クリスタルファンタジー結晶幻想曲をプレイしている十二人のプレイヤーには、  
全ての聖界を創造したとされる十四創神の力が与えられていてね〜。  
その中でサファイは奇数月九月のジュエルナイト宝石騎士サファイアの力を受け継いで  
いるんだよ〜〜』（すごいでしょ）』

陸（サファイア）

『って、サファイ・・・。そんな説明をするより先に、あの巨大ロボ  
ットを何とかする方が先だろ（汗）』

サファイ（声のみ）

『陸こそ何を言ってるのよ〜。せっかくの登場シーンなんだから、  
しっかり名乗り口上しないとイケないでしょ〜』

陸（サファイア）

『口上は前回やったような気が・・・。何にしても、ブルースはオ

レが倒す！！（ぶうううんん！！）  
虚空より宝石のような刀身の聖剣クリソベリルを取り出して構える

フォスフォファイライト

「ちよっ！（汗） あれって・・・クリソベリル！？（どびっくり）  
」

スフェーン（ペンダント）

『嘘・・・でしょ。三本目のクリソベリル・・・！ 聖剣クリソベリルは、全聖界で二本しか存在しないはず！？（大汗）』

フォスファイ

「しかも、あの姿 天空神サファイアって・・・（汗） 天空神サファイアってフローラさまのお母様・・・優子さんのことだよね！？（大汗）」

菜月

「あら・・・。あなた・・・たち（？）、優子さんのことを知っているの？」

フォスファイ

「え？ は、はい（どきどきどき）」

菜月

「この時代でも優子さんって生きているのかしら？（なんて非常識な・・・） あ、でも、ここが優子さんの創った世界プログラムだとすれば・・・優子さんの分身が存在していても不思議じゃないのかな？（うん）」

フォスファイ

「あ、あの〜（大汗）」（いったい何の話を・・・）

菜月

「あゝ、ゴメンね。じつはわたし・・・如月優子さんのアヴァターなの〜」

フォスファイ

「・・・はい〜？（大汗）」（アヴァターって何!?!）

理解

不能

効果音「ずががー！ー！ー！ーん!!!」

2コマ

リーンウィックの操縦空間にて・・・

ブルースピネル 宙に浮かぶプレートの上に立っている

「天空神・・・サファイアだと（びっくり）」

リーンウィック（メインコア） めいぐるみ型

『うむ・・・、どうやら十四創神の力をある程度受け継いだ なんちゃってジュエルナイト宝石騎士のようだな。本物の十四創神に比べて、その力は数万分の一に過ぎないようだが・・・（大汗）』

ブルース

「ああ・・・（汗） それでも、超獣神に比べれば格段に強そうだな（大汗）」（こいつは気を引き締めないといけないな!）

リーンウィック（メインコア）

『だがブルースよ・・・。あのなんちゃって天空神、基本力は凄そうだが・・・戦闘姿勢がなっていないぞ（ぼそっ）』（やたら隙だ

らけだ！)

ブルース

「どうやら、戦いに関しては素人のようだ(じいっ) 付け入る隙があるとすれば・・・そのようだな(ふっ)」「

リンウィック(メインコア)

『そういうこと・・・。長年、四聖界の守護神として戦ってきた我らの力・・・思い知らせてやるぞ!!(叫び)』

ブルース

「そうだな・・・(ふっ) だがリンよ・・・、そのためには正さなければならぬことが一つある(ぼそ)」「

リンウィック(メインコア)

『・・・なにがだ?(大汗)』

ブルース

「それは、コレだ!!(ばっ!)」「 手にしたWiiriモコン(初代)をリンウィックに突き出す

リンウィック(メインコア)

『それって・・・、超獣神の 操作装置?(どきどきどき)』  
ずががーーーーーん!!( )

説明文「4コマバージョンの超龍神リンウィックは、Wiiriモコン(初代)で操作することができます (爆)」「

3コマ

ブルース

「なんちゃってとはいえ、相手は十四創神の一人……。このWi iリモコンでは、入力にタイムラグが発生しすぎて直感的に操作ができない!!」

リンウィック（メインコア）

『た、確かに、いささか時代遅れの入力デバイス……。だな（汗）よし、この際……。操作系の見直しをしてみよう!!（うむ!）』

ブルース

「ああ、そうでないと……。ヤツには勝てない!!」

リンウィック（メインコア）

『では、現行デバイスにモーションプラス機能を追加した……。Wi iリモコンプラス』でどうだ?（ぼむっ）『空中にWi iリモコンプラス（アオ）が出現する

ブルース

「なんか、ダイの真似をしているようで嫌だ……。（汗）」  
グランゾルは、Wi iリモコン（+ヌンチャク）とモーションプラスで操作します

リンウィック（メインコア）

『うぐっ……。（汗）変更を最小限に抑えて、操作系向上を目指したんだが……。（大汗）それなら、発売して半年も経たないうちに大幅な値下げに踏み切った』ニンテンドー3DS『はどうか!（とう!）』 空中にニンテンドー3DSが出現する

ブルース

「それ、アルフォーニの操作系だろ?（汗）マネはしたくない……。（却下だ）」 アルフォーニの操作系は3DS

リーンウィック(メインコア)

『うむ……(贅沢だな) それなら『PlayStation Move モーションコントローラ』は……』

ブルース

「それこそ、Wiiriモコンと操作感は変わらないだろ……(大汗)  
」 持っていないから実際の感覚はわかりません(爆)

リーンウィック(メインコア)

『ではどうする!? (汗) うん、WiiUのコントローラはもう登場したし……。あつ、直感的に操作できて高性能なデバイス……。これならブルースも満足するだろう!! (どりゃっ!!)』  
空中にPlayStation Vita(NGP)が出現する

ブルース

「携帯機は嫌だ。据え置き型の入力デバイスがいい(ぶん!)  
そっぽを向く

リーンウィック(メインコア)

『つて、わがまますぎだろ……!! (じぎゃ……!!)』  
効果音「ずがー……!!」

4コマ

ブルース

「どれもこれも、結局はボタンを押ししたりする必要があるわけだろ?  
? オレが求めている入力デバイスは、そういったものではなく……  
・(大汗)」

リーンウィック(メインコア)

『・・・ふっふっふっ(微笑) わかった・・・ブルースの考えはよくわかった(にやり)』

ブルース

「・・・？ リーン？(汗)」(どうしたんだ？)

リーンウィック(メインコア)

『そんなわがままなブルースにはコレがおすすめ ゲーム界の黒船 Microsoftが誇る高性能ゲーム機Xbox360の最新入力デバイス・・・(ぼそっ) その名も『Kinect<sup>キネクト</sup>！(じゃじゃじゃん)』 空中にKinect<sup>キネクト</sup>が出現する

ブルース

「おお～～～ 身体の動きをカメラで認識して操作するってアレだな！！」

リーンウィック(メインコア)

『ふっふん これなら、面倒なボタン操作などの必要はあるまい』

ブルース

「まさに直感的・・・。キネクトなら身体の動きをそのままリーンウィックに伝えられる！ よし、これからリーンウィックの操作系は、キネクトに決定だ」

リーンウィック(メインコア)

『了解！ 超龍神リーンウィック・・・操作系をKinect<sup>キネクト</sup>に最適化します！！(ういーん)』 モニター下部にKinect<sup>キネ</sup>

cutを設置

ブルース

「行くぞリーン！（氷槍八寒地獄を振り回す） 必殺・・・八寒地獄、ニドス尼刺部陀！！（うおりやーーーーー！）」 モニター越しに氷槍を陸 （サファイア）めがけて振り下ろす！

リーンウィック（メインコア）

『ピピッ、エラー・・・センサーに近すぎです。センサーからもつと離れて、もう一度お試しください・・・』

ブルース

「・・・・・・・・（汗） おいリーン？（大汗）」（ま、まさか・・・）

リーンウィック（メインコア）

『うむ・・・。どうやらプレイエリアが近すぎて、キネクトKinectが動きを認識してくれないようだな・・・（ぼそっ）』（近距離プレイには対応していないみたいだ！）

ブルース

「って、意味ねええええーーーーー！！（涙）」（うぎゃーーーーー  
ーーーーー！！）」

効果音「ずがーーーーーん！！！」

コメント

お忘れかもしれませんが・・・この作品はコメディイース（爆）

## 第188話 意外にいけるかも

4コマ劇場 アイオライト―548・・・2011/08/15  
シリーズ3

タイトル「意外にいけるかも」

### 1コマ

デンドリチック国、樹海から続く街道にて・・・

ブルースピネル（声のみ） 超龍神リンウィック（巨大口  
ボット）に乗っている

『八寒地獄・・・尼刺部陀にぶた！！（ふんーーーーー！！）』（きゆる  
きゆる） 氷槍を陸（サファイア）めがけて振り下ろす！

効果音「びゅっびゅっびゅっ！ ぐわしゃーーーーーん！！」  
鋭い氷刃が無数に現われ、超速で陸（サファイア）に襲い  
かかる

陸（サファイア）  
『うおっ！？（慌てて避ける） ちよっ、氷刃が触れた瞬間、地面  
が凍て付いたぞ！（汗） しかも、周りの温度が一気に氷点下にな  
った！！（寒っ！！）』 聖剣クリソベルルをかまえる

サファイ（声のみ） 陸とフュージョン・チェンジ（融合）し  
ている  
『まさに冷房いらすだよ』 『最近暑いからね〜〜〜（

陸（サファイア）  
『いやいやいや、寒すぎだろー！！（どきどきどき）』

ブルース（声のみ）

『はああああ！（ぶんぶんぶん）』（きゆるきゆるきゆる）  
氷槍を振り回して、精霊力を高めている

サファイ（声のみ）

『にしても……、ついさっきまでピクリともしなかったっていうのに、いまはやたら動きが良いじゃないのよ……』（大汗）』

陸（サファイア）

『うーん（汗） たぶん……だけど、コントローラでも変えたんじゃないか？ ほら、PCゲームとかでもキーボードとマウスでプレイするよりゲーム用のコントローラを使った方が簡単だろ？』

サファイ（声のみ）

『それは、慣れの問題だと思っただけど……（サファイはどこちでもOKだよ） っていうより！（汗） あのロボット……コントローラで動いてるの！？（どびっくり）』

陸（サファイア）

『あ……、さすがにそれは無いか……』（苦笑）』  
『あはははっ（はっ）』

サファイ（声のみ）

『でも、このキュルキュルって音……さっきから気になってるんだけど』（汗）』  
『これって何の音？』

陸（サファイア）

『なんだか、プラスチックが擦れているような音だよ……』

ブルース（声のみ）

『うおおおお！（ぶんぶんぶん）』（きゅるきゅるきゅる）  
氷槍を振り回して、精霊力を高めている

リンウィックの操縦空間にて・・・

リンウィック（メインコア）      ぬいぐるみ型

『……………（汗） ぶ、ブルースよ……………。操作系だが……………本  
当にそれで良かったのか？（大汗）』（いまさらではあるが……………）

ブルース（声のみ）

「おお 見た目はアレだが……………なかなか操作しやすいぞ！（そ  
りゃ〜！）」（きゅるきゅるきゅる）      何かを高速回転させて  
いる

リンウィック（メインコア）

『いや、ブルースが良いなら      それで問題はないが……………（どき  
どきどき）』

説明文「超龍神リンウィックの操作系……………まさかの『さおコン  
（Wii）』に決定」（ずががーーーーーん！！）

## 2コマ

ルチルクオーツ王都、サンストーン（招き猫）の館にて……………

説明文「巨大モニターに、ファミリーフィッシング（バンダイ・ナ  
ムコ）のプレイ画面が映っている」

エルバイト

「うおっ！（激しい振動）      コイツは大物か〜！？（きゅるきゅる

きゅる）」 さおコンを操作している

ジエムシリカ かくくんを抱っこしています

「アルバイトさん、落ち着いて・・・(汗)」(メーター、レッドゾーンに突入していますよ) この人盲目です

エルバイト

「ふふうん 釣りのことはオレに任せ・・・ああ！ 逃げられた  
—————!! (叫び)」

桜 (フロアライト)

「きゃはははっ アルバイトへたくそ~~~~ (笑)」

エルバイト

「桜、やかましいぞ!! (怒)」

シリカ

「ふふふっ アルバイトさん、次こそ頑張ってくださいね (にこり)」

エルバイト

「よっしゃ—————！ 今度こそ!! (ぶふうん!)」 さ  
おコンを振り上げる

効果音「ぷちっ」 突然、モニターの電源が落ちる

ロードライト

「……………」 モニターにリモコンを向けている

エルバイト

「……あ？（汗） っ、ロードライト、なにしやがる……  
ー！！（うがー！！）」

効果音「ずががー！！！！ん！！！」

3コマ

ロードライト

「なにしやがる……って（汗） いまはこのサンストーン（招き猫）の館を使って、どんな商売をするかって相談をしているところ……でしたよね？ なのにどーして、今人気の釣りゲーしてるんですか！！（怒）」

エルバイト

「いや〜（汗） じつはこのゲームのプロデューサー、元セガの中裕司さんらしく……（ぼそっ）」

ロードライト

「誰ですか中祐司さんって！！（うにゃー！！）」

桜（フローラ）

「ドキばぐ（柴田亜美）の人だね〜」

シリカ

「しいーっ、桜ちゃん。今は余計なこと言わないの！（汗）」

桜（フローラ）

「はあ〜〜い（にこっ）」

エルバイト

「あ〜、まあ……なんだ（汗） 相談といってもだなく、別にど

んな商売でも良いんじゃないか〜（大汗）　ロードライトが適当に  
考えてくれればさ〜〜（ぼそっ）「

ロードライト

「うう・・・、なんて纏まりのない・・・（汗）　これじゃ〜相談  
している意味が無いよ〜〜（しくしくしく）」

シリカ

「まあまあ、ロードライトちゃん泣かないの・・・。所詮、アルバ  
イトさんはあなたたち招き猫勇者隊の仮メンバーなんですから・・・  
（ぼそっ）「

桜（フローラ）

「・・・役に立たない仮メンバーは、契約切られても文句はないだ  
ろうし・・・（ぼそっ）「（レベルも低いし）」

エルバイト

「さ、さあ〜て、はじめる商売について・・・色々とアイデアを  
出そうかな〜〜（どきどきどき）「（がんばるぞ〜〜）」

シリカ

「ところで・・・、数少ない正規メンバーの一人・・・スファレさ  
んはどうしたんですか？　今日はまだ　一度もお会いしていませ  
んが（汗）」

ロードライト

「う〜ん（汗）　スファレさん、まだ寝てるのかな〜〜（大汗）「  
（考えにくいけど・・・）　二階に視線を向ける

ルチルクオーツ王都、南街門にて・・・

美咲

「え、行き先を詳しく説明できませんが・・・再び王都を離れることになります」

警備兵

「樹神美咲さまは、現国王フローライトさまの恩人でもあり・・・このルチルクオーツには客人として来られているわけですから、本来なら行き先を登録していただく義務は無いわけなのですが」（大汗）

美咲

「はい・・・？（それがなにか？）」

警備兵

「ルチルクオーツ所属の冒険者と行動を共にするとすると、やはり報告していただく必要があります（申し訳ありませんが）」

美咲

「行動を共に・・・？（後ろを振り返る）　って、スファレさん！  
？（どびっくり）」

スファレライト

「あ、気づかれちゃった？（苦笑）」　　何食わぬ顔して美咲の後に続いている

美咲

「ふ、不覚です・・・。ここは人通りの多いところですが　まさか後をつけられていることに気づけなかったとは・・・（大汗）」

いえ、さすがはへっぽこ戦士……というべきでしょうか(ぼそっ

」

スファレ

「へっぽこいうなー……!!(涙)」

美咲

「ちよつ、そんなことより……スファレさん、こんなところでいたい何をしているのですか!?(大汗)」(まあ、だいたい想像はつきますけど……)

スファレ

「わたしも連れて行って!!」

美咲

「……(やっぱり) はあ、迷惑になるとわかっていてここようとするのですから どうなっても良いだけの覚悟はありそうですね……。わかりました、一緒に行くことにしましょう(やれやれ)」

レイチエル

「あう……(やった……)」

美咲

「……(啞然) ね、レイチエルさん!!(どびっくり) (いつのまに!?)」

スファレ

「それじゃあ、ラリマー目指してしゅっぴ……(いっせーい

」

レイチェル

「あつゝ（おあゝ）（）」

警備兵

「ら、ラリマー！？（どびっくり）（行き先、国外なんですかー！）（！）（）」

美咲

「あゝもあゝどうにでもなれゝゝ（しくしくしく）（合流が遅れるだろつなゝゝ）（）」

コメント

ネットで見たんですが、さおコンのキュルキュル音はシリコンスプレーで抑えられるみたいですね（今度買ってみよう）（）」

第189話 勘違い・・・ああ勘違い

4コマ劇場 アイオライト―549・・・2011/08/22  
シリーズ3

タイトル「勘違い・・・ああ勘違い」

1コマ

デンドリチック国、樹海から続く街道にて・・・

セレンディバイト      デンドリチック国の女騎士

「・・・。。。。なに、これ？（大汗）」      周囲を見て愕然としている

スペクトロライト      ヒューマイト国の人形使い

「うう〜、寒っ・・・（はあく・・・）」      吐く息が白い

説明文「気温が氷点下となり、地面が凍て付いている」

パロットクリソベリル

「・・・。（きよろきよろ）      急に環境が変わったようだが  
エリアでも変わったのか？（あく、寒っ・・・）」

セレン

「一つの地域で環境が大幅に変化するようなおかしな国は、ルチルクォーツしかありませんよ（汗）」

スペクトロ

「エンスタタイト帝国じゃあるまいし、冬でもここまで気温が下が  
ることは無い・・・（ぼそっ）」      エンスタタイト帝国は年中

氷点下

パロット

「とうとうと、この状況は・・・異様だと？」

セレン

「こんな異常気象　歴史書を紐解いても見あたらないでしょうね  
（大汗）　それに、数日前にこの辺りの魔物を一掃したけど、そのときはこんな状態じゃなかったわけだし・・・（うん）」

パロット

「つまり、ここで何かがあった・・・と考えるべきだろうな」

セレン

「そういうことでしょうね」（汗）

パロット

「・・・ん（あれ？）　ところで・・・ダイはどこに行った？（き  
よるきよる）」

セレン

「そういえば、見あたりませんね〜」

スペクトロ

「あゝ、ヤツならこの異様な光景を見た途端、奥の方へと走っていったぞ・・・（ぼそっ）」

セレン

「・・・（汗）　異常気象の原因すらわからないというのに、単独行動をさせるといふのは・・・ちょっと」（大汗）

パロット

「はあ〜・・・、昨日の雪山でもそうだったが・・・おまえ 止めるよ（やれやれ）」 前回はアリス（フォスファイ）を見送った

スペクトロ

「え〜〜、わたしが悪いのか!?!（涙）」

2コマ

パロットたちから少し離れた場所にて・・・

ダイ

「グランゾル これって・・・（ぼそっ）」 何かの破片を見つめている

グランゾル（ぬいぐるみ）

『うむ、間違いない・・・、リンウィックの装甲の一部・・・。どうやら、この場所でリンウィックが何者かと戦ったようだ・・・』

ダイ

「戦ったって・・・（汗） この聖界に超獣神と対等に戦えるほどの存在がいるっていいのか?（汗）」

グランゾル（ぬいぐるみ）

『それはわからない・・・。だが、大地すら凍て付いている状況から考えると、この地でリンウィック最強の必殺技・・・八寒地獄「摩訶鉢特摩」が使われたのだろう』

ダイ

「ブルースのヤツがマカハドマを使うほどの 超獣神の装甲を砕くほどの相手……。時空神の遺産の有無を確認するだけでは済みそうにないかもな」(苦笑)

グランゾル(ぬいぐるみ)

『命がけの戦いを……。覚悟しておく必要があるかもしれない(こくり)』

ダイ

「ああ……。(汗) といっても、余所者のオレたちにできることは限られているがな」(ぼそっ)

グランゾル(ぬいぐるみ)

『たしかに……。それに、いつものように、真面目な戦いがギャグで流れるかも……。って、げふげふっ!? (大汗)』

ダイ

「ぐ、グランゾル……。? (大汗)」

グランゾル(ぬいぐるみ)

『いいや、な……。なんでもない。なんでもないぞ……。!! (どきどきどき)』

効果音「ずがー………ん!!」

3コマ

凍て付いた地から少し離れた場所に広がる森の中にて……

陸 (サファイア)

陸とサファイがフュージョン・チェンジ

した姿

『……………(じい……………)] 木陰に身を隠し、上空を見上げている

リンウィック(聖獣機) 限りなく生体に近い機械の龍が上空に浮かんでいる

『ぎゃおおおおおー！！(叫び)』 何かを探すように空を漂う

フォスフォファイライト

「あ、あ……………(汗)」

菜月

「しいいいつ、黙って！(ひそひそ)」 小声で囁く

リンウィック(聖獣機) 上空に浮かんでいる

『……………』 諦めたのか、西の方向へ飛び去っていった

陸 (サファイア)

『や、やっとなってくれたか……………(ぴか……………！)』  
全身が光輝き、フュージョン・チェンジが解ける

サファイ 陸をアヴァターとして使っている、クリスタルファンタジー結晶幻想曲をプレイ中のユーザー

「……………(むす……………)」 頬を可愛く膨らませて怒っている

陸

「あ、サファイ……………さん？(大汗)」(なにか怒っていますか？)

サファイ

「リク、どうしてサファイに戦わせてくれなかったの？（じい〜）  
っ） サファイ、格ゲー得意だっていつも言ってるのに・・・（ぼそ  
っ）」（ソウルキャリバーとかも得意だよ！）

陸

「いや、それは・・・だな」（汗）」

菜月

「アヴァター化して戦うならともかく、フュージョン・チェンジし  
た状態でダメージを受ければ・・・サファイちゃんも怪我をしてしま  
います。陸くんは、それが嫌だったのですよね？」 助け舟を  
出しました

陸

「そ、そういうこと！！（大汗）」

サファイ

「ほんとかな〜（じい〜）っ）」

陸

「あははっ・・・（苦笑）」 サファイにゲーム技を使われたら、  
身体がボロボロになってしまうから嫌だった（笑）

4コマ

スフェーン（ペンダント）

『で・・・（ぼそっ） あなたたち、いったい何者？（じい〜）  
っ）』

フォスファイ

「ちよつ、スフェーンちゃん！（大汗）」

菜月

「あゝ、ごめんなさいね。わたしは神代菜月。彼はわたしの弟の陸くん、そしてサファイちゃん。この世界とは別の・・・え〜つと、つまり異世界からやって来たの（汗）」（こんなこと言っても信じてもらえないだろうな〜）

フォスファイ

「つてことは、ダイやレイチェルと同じように、時空間を越えて来たってこと？（びっくり）」

陸

「つて、オレたちの他にもこの世界にやって来たヤツがいるのか！？（大汗）」

サファイ

「それつて、もしかしてサファイたち以外のクリスタルファンタジー結晶幻想曲のプレイヤーなんじゃないかな!？」

菜月

「確かに、その可能性はあるでしょうね。アトミニストレータ管理者である優子さんが他のユーザーにもテストプレイを頼んでいるかもしれないし・・・」

サファイ

「つまり、優子さんを知っていて他のプレイヤーが接触しているフォスファイたちは・・・このゲームの重要キャラクター（大汗）」

陸

「フォスファイさん!! (叫び)」

フォスファイ

「は、はい!?(びくっ)」

陸

「……、まずはお友だちから始めてください。お願いします  
!!(びしっ)」 見事なお辞儀をして、右手を突き出す

フォスファイ

「えっ、ちょっ!(あせあせ)」

スフェーン(ペンダント)

『なに、なに! 突然の……愛の告白…… (きゅ……)』

陸

「…… (どきどきどき)」 返事待ち

フォスファイ

「……ごめんなさい(ペこり)」

陸

「ぎゃふっ!!」 かなりダメージを受けました

効果音「ずががーーーーーん!」

サファイ

「あははっ、陸……ふられた……」

陸

「いやいや、ふられたとかそういうことではなくって……（大汗）」

菜月

「ふふふつ（微笑） 陸くん、ちょろつとお姉ちゃんと話し合います  
しょうか？（きゅぴーん）」 瞳が妖しく輝く

陸

「だ、だから、そういう意味じゃなくって……（別の木陰へ引き  
ずられていく）……。。。。ぎゃああああー……！  
！（泣き叫び！）」

フォスファイ

「えっ、なに……なに！？（どびっくり）」（悲鳴！！）」

サファイ

「あゝ、気にしないで……。いつものことだから……。ぼそっ  
」

説明文「ダイたちは結晶クリスタルファンタジー幻想曲のプレイヤーではありませんよ」

（笑）」

コメント

なかなか更新できなくてすみません（ぺこり）」

## 第190話 第三勢力の誕生!?

4コマ劇場 アイオライト― 550・・・2011/08/25  
シリーズ3

タイトル「第三勢力の誕生!？」

### 1コマ

デンドリチック国、とある森の中にて・・・

スフェーン（ペンダント）

『それにしてはさ、陸とサフィの融合体 天空神サファイアって、ほんと見かけ倒しだよ〜。攻撃力はもの凄いの、あの巨大ロボットに攻撃があたったのはたった一回だけ・・・（ぼそっ）』（ロボットの装甲、かなり砕けたけど）

陸

「うぐっ（大汗）」

フォスフォファイライト

「ちよっ、スフェーンちゃん！（汗） 本当のことを言うにしても、少しオブラートに包むような口調で・・・はっ！！（しまった）」

陸

「しくしくしく（涙） どうせ、サフィのアバターになり立てで、実戦経験は少ないですよ〜〜だ！（泣）」

サフィ

「だから、戦闘（陸の身体操作）はサフィに任せておけばよかったのに〜（やれやれ） あゝあ、20倍界王拳、使ってみたかった

な〜〜」

陸

「うおいー！（怒）」（そんな技使ったら、身体が持たねえだろ！）

2コマ

菜月

「……………で（汗） オブラートってなに？（どきどきどき）」（やわらかな表現ってことはわかるんだけど…………）

フォスファイ

「え？（汗） オブラートってアレですよ。こどもが薬を飲むときに使う　すぐ溶ける薄い膜のような…………」（最近ではゼリーで包み込んで飲むヤツもあるらしいですけど）

スフェーン（ペンダント）

「いや…………（汗）　この際、オブラートが何であるうと関係ないでしょ…………（大汗）」

フォスファイ

「あ、まあ、そんなだけ…………（苦笑）」

つつこみ「はたして、まだ売っているのだろうかオブラート！！（爆）」

陸

「で、フォスファイに…………スフェーンだっけ？（本当にドラゴンの卵なのか？）　なんとなく戦ってしまったけど、お前らどうしてブルース…………リーンウィックに襲われていたんだ？」

スフェーン（ペンダント）

『理由なんて知らないよ！ この前だって突然襲ってきて、人格がアリスにチェンジしなければ、フォスファイ、絶対に殺されていたんだから！』』

サファイ

「人格が・・・チェンジ？（なにそれ）」

スフェーン（ペンダント）

『ふっふっふん 聞いて驚きなさい・・・（にやり） このフォスファイは、なんと伝説の勇者 アウインのアリスの生まれ変わりなのだ~~~~ で・・・、水に濡れると性別も変ったり・・・（ぼそっ）』 性別までは変わりません

フォスファイ

「だ〜か〜ら〜、あたしはそんなおかしな体質の持ち主じゃないって！！（涙）」（ごく一般的な冒険者です！）

3コマ

菜月

「なるほど・・・。やはりこのフォスファイさんは、ゲームキャラクターとして設定が創り込まれています。つまり、フォスファイさんはこのゲームにおける重要キャラクターであるというサファイちゃんの考えは正しかったわけですね（うんうん）」

フォスファイ

「あ〜、さつきから何を言っているんでしょう？（大汗）」（ゲームとかキャラクターとか？）

菜月

「………。フォスファイさん、落ち着いて聞いて（気をしっかり持ってね）いまあなたが現実だと思っっているここは、擬似惑星を創造するシミュレーション装置 プラネットメーカーで創られた世界……。自分は生きていると感じているでしょうけど、あなたたちは生命体ではなく……。プログラムで創られた仮想人格なの（ぼそっ）」（わたしや陸くん……。クラリアンスに住む人たちも、あなたと同じプログラム人格だけど）

フォスファイ

「……。……。……。……。……。……。……。……。……。……。はあ？（どきどきどき）」

効果音「ずががー……ーん！」

陸

「そんなこと、突然言われても信じられないよな……。オレも最初はそうだった（うんうん）」 フォスファイの肩に手を置き頷いている

フォスファイ

「し、信じるもなにも……。…（大汗）」

スフェーン（ペンダント）

『あなたたち、頭は大丈夫？』

サファイ

「あははっ（苦笑） NPCに心配されちゃった……。…（まいっ  
たな〜）」

スフエーン（ペンダント）

『NPCって・・・ノンプレイヤーキャラクター!?（どびっくり）』

『

フォスファイ

「あくまでもゲームキャラクター扱いですか!!（涙）」（ずがが  
ーーーーん!）

4コマ

陸

「とにかく、フォスファイは中ボスであるブルースに命を狙われているわけだから、このテストプレイをする上での重要キャラクターであることに間違いはない。しばらく行動を共にさせてもらうので・・・よろしく（しゅたっ）」  
右手を翳して挨拶する

フォスファイ

「・・・・・・。なああああーーーーー!?（大汗）」（どうしてそんな話に!!!）

菜月

「フォスファイさんと一緒にいれば、この世界における優子さんの分身に会うこともできそうだし・・・」（この状況、ちゃんと説明してもらわないと・・・）

フォスファイ

「そんな勝手に!!!」

陸

「というわけで、フォスファイ・・・仲良くしような（にこっ）」  
爽やかな笑顔で握手を求める

フォスファイ

「絶対に嫌!!! (うがああああ!!!)」

陸

「ぐはっ!! (涙)」 かなりダメージを受けました

サファイ

「玉砕イベント第二弾 (あはははっ)」

スフェーン (ペンダント)

『うっん、懲りない人だね』 (苦笑)』

菜月

「・・・陸くん (きゅぴん) 二度目は・・・二度目は笑えな  
いかな〜 (ずい〜いっ)」 背後に怒りの炎が立ち昇る

陸

「ちよっ、菜月姉え! っていうより、どーして菜月姉えが怒る・・・  
ぎゃああああー!!! (大泣き)」

効果音「ばきゅ〜〜〜ん!!!」

コメント

ちなみに、フォスファイもスフェーンもプログラム人格ではないで  
すよ〜 (ちゃんとした生命体です)

第191話 全聖界最強

4コマ劇場 アイオライト―551・・・2011/08/29

シリーズ3

タイトル「全聖界最強」

1コマ

クラリオンアース、陸たちの住む洋館にて・・・

薫

「・・・ただいま（かちやつ）」 玄関からそつと入ってくる

効果音「し～～～ん」

薫

「あれ？（やけに静かだな・・・） おゝい、陸くん、菜月さん・・・。サフィちゃん～～～ん（いま帰ったよ～～～！）」

効果音「し～～～ん」

薫

「うぐつ、みんなでお出かけしてるのかな（せつかく合宿から足先に戻ってきたのに） でも、サフィちゃんとは出かけることはできないんだから、誰か残っていてもいいとおもっただけ～～～。おゝい、ほんとに誰もいないの～～～（てくてくてく）」 リビングの方へ歩いていく

リビングにて・・・

効果音「しししししししん」

薫

「………。やっぱり誰もいない（しくしくしく）」（どうして  
しししし！）

説明文「神代薫（本名 白檀薫）。陸と同じように結晶幻想曲のプレイヤー『アメシスト』とアヴァター契約をして（陸はサファイと契約）、クラリオンアースから存在が消えてしまった不幸な少女……。いまは、菜月に頼って陸たちと共同生活中。ちなみに、薫と契約したアメシストは、通信にも全く姿を現さない謎のプレイヤー……」

## 2コマ

薫

「ふう〜〜（ソファに腰を下ろす） 久しぶりに陸くん的笑顔  
を見れると思ったのに……（残念） っていうより、異様に目立  
つそのピンク色の扉は何！！（びしっ）」 つっこむように指  
差す

説明文「なぜカリビングの中央に、ピンク色の扉だけが聳え立って  
いる（笑）」

薫

「明らかに妖しげな扉……。陸くんたちがいないのも、この扉が  
関係しているんじゃないかな？（汗） ……ん？（なにこれ？）  
テーブルの上にメモとデータチップが置いてあることに気  
づく

メモ

『薫ちゃんへ……。わたしたち三人は、優子さんの依頼でしばらくプラネットメーカーで創造された擬似惑星へダイブすることになりました。データチップをジュエルタイプの携帯端末に読み込ませ、どこでもドアを開けば薫ちゃんもこっちに来ることができます。ただし、異世界っていう設定らしいから安全の保証は期待しないほうが賢明だとおもいます。擬似惑星へダイブするもよし、わたしたちが戻るまで家でのんびりするもよし……。選択は薫ちゃんに任せます 菜月より』

薫

「……うん、どうしようかな〜」（じい〜っ） 「 データチップを見て悩んでいる

突然の登場

優子

「ちよつと待ったー！ー！ー！（叫び） 「 エターナルアース側の優子

薫

「わきゃー！ー！ー！ー？（どびっくり） ……ゆ、優子さん）  
どきどきどき（「（どうしたんですか、そんなに慌てて……）

優子

「あ、薫ちゃん！ サファイたちは……どこにいった！？（大汗）  
「

薫

「え……？ 優子さんの依頼で……擬似惑星へダイブしたんじ

やないんですか？（はい、これ・・・） 「メモを差し出す

優子

「う、うう・・・（汗） やっぱり潜っちゃったわけね（しくしくしく）」

薫

「????」

3コマ

数分後・・・

優子

「結論からいうと、これがサファイに渡すはずだったデータチップです（ぼそっ）」（中身は、簡単な原始惑星の調査作業ね）  
懐から一枚のデータチップを取り出す

薫

「・・・。。。。ええ！！（汗） ど、どうしてそれを優子さんが持っているんですか！？（大汗）」

優子

「渡し間違えちゃった・・・てへっ（しっばい、しっばい）」

薫

「じ、じゃあ、陸くんたちが使ったこのデータチップは・・・）  
「ぐらり）」

優子

「それは、実験的にプログラミングしたやつなんだけど・・・）」

汗） 時空軸をまたいだ平行世界に パラレルワールドへ繋がるように設定されたデータチップ・・・だったりして（あははっ）

薫

「・・・マジですか？（大汗）」

優子

「マジです（うんうん）」

薫

「ちよっ、どーするんですか！ 陸くんたち、とっくに出発しちゃっているみたいなんですよ！！（大汗）」

優子

「うん・・・（どうしよう） 時空間転移の中でも、平行世界に干渉することは禁忌扱いになっているからな〜」（汗） はっきりいってバレたらまずい！！（大汗）」

薫

「バレたら・・・って、誰にですか？（どきどきどき）」

優子

「それはもちろん、時空を管理する神 時空神・・・」

突然の登場

リアン 三歳ぐらいの女の子

「バレないとも思ったかーーーーー！！」（怒）」

優子

「わにゃーっ！(びっくり) さっそくバレたー！！  
(大泣き)」

効果音「ずがー！！！！！！ん！！！」

4コマ

薫

「……えーっと、優子さん？(いちばらのお子さんは？)(べ)  
これから現われて……)」

優子

「じ、じつは、この子は……(大汗)」

リアン

「ママっ……(ひっ)」 優子の足にしがみ付く

薫

「優子さんの娘……！！？」(どびっくり)」

優子

「いや、まあ……むかーしうち(如月家)であっかっていた子  
で……その正体は……(ぼそっ)」

リアン

「十四創神の一人、偶数月4月の宝石騎士ジュエルナイト……時空神ダイヤモンド  
です(ペーり)(「リアンって呼んでください)」 可愛  
くおじぎ

薫

「ほ、本物の宝石騎士<sup>ジュエルナイト</sup>!？」（サフィは偽宝石騎士）

優子

「で、ぶっちゃけていうと、二人のラスボスのうちの一人？）  
ほそっ（（もう一人は同じく時空神のラルドさん）

薫

「こんなに可愛いのに、ラスボス……ですか？（どきどきどき）」

リアン

「お姉ちゃん、しょうじきものだから好き〜」（にゅっ）

優子

「薫ちゃん、見た目に騙されたらダメだからね（ひそひそ）」

リアン

「ママは、ことの重大さがわかっていないから、少し反省しなさい  
（むっ）（むっ）」

優子

「はい、ごめんなさい……（涙）」

薫

「え、え〜っと……（汗）」（本当はどういった関係？）

リアン

「じゃあ、ちょっと行って、連れ戻してくるね〜（ぎゅっ）」

薫

「……どうしてリアンちゃんは、わたしの手を握るのかな〜（大

汗」

リアン

「薫お姉ちゃんも・・・行く（にこっ）」  
微笑みながら、データチップの情報を読み込んでいる

効果音「かちゃっ」  
誰も触れていないのに、どこでもドアの扉が開く

薫

「えっ、ちよっ・・・（汗） 優子さん！ 助け・・・（大汗）」

優子

「ごめんなさい（苦笑） リアンちゃんを止めるなんて・・・わたしには無理（あははっ）」

薫

「そ、そんなーーーーー！！（涙）」

リアン

「平行世界へ向けて、レッツゴー~~~~（とう）」  
扉の向こう、時空の渦に飛び込む

薫

「いやあああーーーーー！！（大泣き）」  
同じく、時空の渦へ消えていく

優子

「薫ちゃん・・・。巻き込んで、ほんとごめん・・・（ぼそっ）」

コメント

リアンさんはラルドの育ての親で、全ての物語で最強の存在です

## 第192話 目指せ金メダル！

4コマ劇場 アイオライト―552・・・2011/08/31  
シリーズ3

タイトル「目指せ金メダル！」

1コマ

デンドリチック国、樹海から続く街道にて・・・

突然の登場

ラルド

「はっはっはっ 久しぶりだなパロットクリソベリル！！（ふふん）」

セレンデイバイト

「えっ？（汗） だ、誰！？（どきどきどき）」

パロットクリソベリル

「出たよラスボス！（大汗） っていうか、あんただろ。オレの間を2分の1にしたの！！（怒）」（何してくれてるんだ！！）

現在、2倍速で行動中

ラルド

「いや・・・、そろそろ2分の1の世界に慣れてきたんじゃないか？（にやり）」

パロット

「あゝ、確かに最初は何をしても慌しかったけど、さすがに

慣れてはきたかな・・・じゃなくって!! (大汗)

ラルド

「この修行にあまり納得できていないようだな(苦笑) では、普段から2分の1の世界に身を置いているとどうなるか・・・実際に体感してもらおうことにしよう (ぱちっ) ( ) 軽やかに指を鳴らす

2コマ

パロット

『つて! 意味わかんねえぞ!!』 4倍速口調

セレン

「はい!?(びっくり)( ) (なんて言ったの?)

スペクトロライト

「パロット・・・、早口過ぎ・・・(ぼそっ) ( )

パロット

『え? お前らこそ、もの凄くゆっくり喋って・・・はっ! (汗) もしかして、2分の1倍速が解除されたのか!?(大汗)』  
4倍速口調

ラルド

「ふっふっふっ、そういうことだ・・・。2分の1倍速のとき、お前が早口で喋ることで周りには普通に聞こえた。時間を戻すことで、普段で2倍速 早口で4倍速口調となる。それは口調だけではない。その身体能力も以前の4倍になっているはずだ!」

パロット

『おおおおお』 4倍速口調

ダイ

「すげえ適当計算な気がする(大汗)」(パロットは何言ってるかわかんないし)

セレン

「うんうん(どきどきどき)」

3コマ

ラルド

「ならば、今から証明してやろう！ おいパロット、おまえ1000M何秒で走れる？」

パロット

「え〜っと、最近計ったことないが・・・11秒ちよつとぐらいか？(うん)」 ゆっくり口調でやっとダイたちに伝わる

スペクトロ

「ユークナイトなりに・・・意外と平凡なタイムだな(ぼそっ)」  
(わたしもそれぐらいで走れるぞ)

ダイ

「いやいやいや、充分早いって！！(汗)」 ダイは13秒ぐらい？

セレン

「4倍で行動できるっていうのなら・・・11÷4で2.75秒？  
(大汗) さすがにそれは無理でしょう(苦笑)」

ラルド

「ならば、見てみるがいい!!(ばばっ!)」  
両手を大きく  
広げる

ダイ

「なああああ! (汗) 突然、陸上競技用のトラックが出現した!」  
「……………! (どびっくり)」

スペクトロ

「しかも、パロットの服装が陸上選手みたくなってる!! (どしえ  
……………!)」  
精霊界に陸上競技あるのか? (爆)

効果音「ずがが……………ん!!」

セレン

「え〜っと、え〜〜と… (どきどきどき)」  
思考が  
追いつかないようです (笑)

4コマ

数分後…

ラルド

「ではパロットよ…。準備は良いか!」

パロット

「2分の1倍速のときのつもりで…走ればいいんだな (大汗)」  
クラウチングスタートの準備

セレン 観客席に座っている

「ほ、本当に2.75秒なんてタイム…出るんでしょうか?)」

どきどきどき)」

ダイ 同じく

「ラスボスの自信満々な様子を見ると、期待できるんじゃないかねえか？（ふふ〜ん）」

スペクトロ 以下同文

「っていうか、早いとこアリス（フォスファイ）を捜さなくてもいいのか・・・？（大汗）」（こんなことしている場合じゃ・・・）」

ラルド

「位置について・・・よい・・・ドン！！（バン！）」 ピ  
ストルで合図を鳴らす

パロット

『うおおおおおー！！！！！！（ずどどどどどっ！）』 4  
倍速で全力ダッシュ！

セレン

「速い！！（どびっくり）」

ダイ

「す、すげえ！（汗） これはマジで2秒台が！！（大汗）」

スペクトロ

「だ〜か〜ら〜、エンスタタイトの魔竜はどうなったー！！！！！！（うにゃー！！！！！！）」

効果音「パン、パーーン！」 ゴールの合図？

パロツト

『はあはあはあ、どーーーーーだ!!! (叫び)』

ラルド

「ぴ〜んぽ〜んぽ〜んぽ〜ん      ただいまの記録・・・5秒2  
5、5秒25」

パロツト

「ち、ちきしょーーーー!!! (悔しい)」

セレン

「・・・遅っ(ぼそっ)」

ダイ

「思ったほどではなかったな・・・(やれやれ)」

スペクトロ

「いやいや、充分速いだろ!!! (大汗)」(お前ら期待しすぎだ!  
!)      3コマ目のダイと同じことを言っていますね

ラルド

「うむ、重力やら風向きとの関係で、やはり計算どおりにはいかな  
いか(ぼそっ)」      適切なことを言っています(笑)

説明文「期待も大きかっただけにがっかりですが、パロツトの身体  
能力はだいたい2倍になりました」

コメント

引き続き、3分の1倍速に挑戦です      (3倍速で行動しないと周

りに追いつけない

## 第193話 時間積み立て

4コマ劇場 アイオライト―553・・・2011/09/02  
シリーズ3

タイトル「時間積み立て」

1コマ

デンドリチック国、樹海から続く街道にて・・・

ダイ

「なあラスボス・・・。身体能力が倍単位で増えるんだったら、オレの時間も2分の1にしてくれないか？」

ラルド

「・・・ぬ？」（お前は・・・グランゾルのマスターだったな）

ダイ

「じつは、何度か基本的な身体能力を上げようと努力はしているんだが・・・一向に効果がなくて・・・」（苦笑）

ラルド

「ふむ、お前の時間を 2分の1に・・・、無理だな！！（叫び）」

ダイ

「無理なのかーーーー！！（涙）」（なぜだーーーー！！）

ラルド

「飲むだけで（楽しんで）脂肪が燃焼してやせられるダイエット薬的

な感覚で……なんかヤダ(ぼそっ)」「(飲むだけではやせないぞ)

ダイ

「ちよつ、なんだそれ！(汗)」「(け、決してそんなつもりは……)

( 本心を見透かされた？(笑)

ラルド

「それに、どれだけががんばっても、へっぽこ勇者のお前では 1  
00mを8秒台で走るぐらいしか……」

ダイ

「だ〜から〜、それで充分だろ〜!!(うぎゃ〜!!!!!!)」

「(8秒台なら人間界最速だ〜!!!!!!)」

ラルド

「そんな低い目標じゃ〜鍛え甲斐が無いから、やっぱりヤダ!」

ダイ

「そ、そんな〜!!!!!!(泣)」

効果音「わいわいがやがや!」

パロットクリソベリル

「……………(じい〜っ)」

手にした懐中時計を見  
ている

2コマ

数分前、回想シーン……

ラルド

『パロツトよ……。お前にはコイツを渡しておく(ひよい)』  
パロツトに投げ渡す

パロツト

『え……。(受け取る) これって懐中時計？ なんでこんなものをオレに？(汗)』(秒針えらい勢いで回っているんだけど)  
2倍速で行動中

ラルド

『ぶつちやけて言うと、その懐中時計でお前の時間を操作しているわけだ』

パロツト

『えらいぶつちやけたな……。(汗) はっ！……。ってことは、この懐中時計をなんとかすれば、さっきみたいに通常時間へ戻れるということか！？(大汗)』

ラルド

『そういうことだ……。これから先、お前の体感時間を徐々に削っていくわけだが……。いざ戦いとなったとき、2分の1倍速とかで行動していたら勝てる戦いも勝てないだろう？ だからこそ、倍速の解除方法を教えておく』

パロツト

『……。単に嫌がらせでオレの時間を削っていたわけじゃなかったんだな(どきどきどき)』(ちよっとびっくり)

ラルド

『うおー！(怒) ち……。まあい(ぶつぶつ) だが、戦

いが終れば倍速機能を有効にするんだぞ（いいな？）』

パロット

『……（汗）ちなみに聞くけど、倍速機能がうつつとくしくて有効にしなければ……どうなるんだ？（ちらり）』  
ラルドの様子を窺う

ラルド

『そのときは……、身体能力が元に戻るだけだ』（たえ強さが何倍になっていようと……）

パロット

『うぐっ……（大汗）』

3コマ

ラルド

『いま行っているのは、感覚の慣れを利用した修行法だ……。通常時間に身を置いておれば体感時間もしばらくすれば通常に戻ってしまう。まあ、それでも身体能力の上昇は多少あるだろうがな』

パロット

『つまり、強さを維持したければ、常に時間の削られた世界に身を置いておけ……。と？（汗）』

ラルド

『そういうことだ……。常に感覚を高めておいて、いざというときにはそれを開放させて数倍の攻撃力で戦う。もちろん、倍速機能を有効にしたまま戦った方が能力値の上昇は高いがな』

パロット

『うっん、なんだかんだいってもあんたの言うことを聞いていれば強くなれそうだな〜。これからもよろしくお願いします（ぺこり）』 姿勢を正して頭を下げる

ラルド

『よかるう、オレが過去の勇者にも負けない超一流に鍛えてやろう（ふふ〜ん）』

パロツト

『あゝ、そうだ。一つ聞いておきたいことがあったんだ・・・』

ラルド

『なんだ？ 何が聞きたい！！（さあ言ってみろ）』

パロツト

『・・・この懐中時計でオレの時間が通常より2分の1になっているのは理解した。じゃあ、その減らされた分の時間は・・・一体どうなっているんだ？（汗）』（言ってるて混乱してくるが・・・）

ラルド

『気にするな・・・（ぼそっ）』

パロツト

『って、気になるわ〜！！（叫び）』

効果音「ずがが〜！！！！！！！！！！ん！！！！！！！！！！」

4コマ

ラルド

『あゝ、説明するの面倒なんだがな〜（やれやれ） 簡単に

言うとして、お前から削られた時間は・・・その懐中時計に積み立てられている(ぼそっ)』

パロット

『・・・・・・？(汗) 意味がわかりません(どきどきどき)』

ラルド

『まだ12時間ほどしか積み立てられていないから説明してもあまり意味は無いが・・・積み立てられた時間を一気に消費することで、周りの時間を数秒程度停止させることができる・・・』

パロット

『じ、時間停止！(どびっくり) それって、1日5分間だけ時間を戻せる・・・スファレの持っている時の宝珠みたいなものか！？(大汗)』

ラルド

『いや、あつちは無条件に能力が発動する超レアアイテム・・・こちらは、自身の時間を積み立てないと発動しないから、使い勝手は若干悪いといえる』

パロット

『たとえ数秒でも時間停止できるなんて、もの凄いアイテムじゃないか！ちなみに、1秒間時間を止めるのにどれだけの積み立てが必要となるんですか！？(わくわく)』

ラルド

『ざっと、1000時間だ』

パロット

『使えねええええー！！！！！(うがー！！！！！)』  
懐中時計を振り上げて、地面に叩きつけようとする

効果音「ずががー！！！！！ん！！」

ラルド

『おっと気をつけるよ〜。その懐中時計を壊したり・・・あるいは盗まれたりした場合、倍速時間を解除することはできなくなるかなら〜 (あははっ)』

パロツト

『う、ぐっ！？ (大汗)』 危つく懐中時計をぶっ壊すところだった(笑)

ラルド

『せいぜい気をつけることだな〜 (大爆笑)』

回想シーン終了・・・

パロツト

「・・・ (汗) はあ・・・面倒なことになっちまったな〜  
〜 (やれやれ)」

ダイ

「なあ〜、頼むよラスボス〜。オレの時間も2分の1にしてくれ〜」

ラルド

「ああ〜やかましい！ (怒) これ以上言つと・・・パロツトの懐中時計ぶっ壊すぞ！！ (うがー！！！！！)」

ダイ

「・・・はい？（大汗）」（何のことだ？）

パロット

「ちよっ！（汗） オレに関係ない話でとんでもないことを口走るなー！ー！ー！！」（大汗）」 隠すように懐中時計を抱え込む

ダイ

「・・・ぬ？」（なんなんだ？）

コメント

パロット時間の約42日を消費することで、1秒間の時間停止ができます

第194話 位置的には・・・ほとんど同じ場所みたいです

4コマ劇場 アイオライト―554・・・2011/09/05  
シリーズ3

タイトル「位置的には・・・ほとんど同じ場所みたいです」

1コマ

ルルルクオーツ王都、サンストーン（招き猫）の館、管理人室にて  
・  
・

説明文「モニターに美咲の姿が映し出されている」

ファリス

「やはりというべきか・・・。あなたについていっちゃったのね、  
スファレさん・・・（ぼそっ）」

美咲（映像）

『はい、すみません・・・（ペーり）』『どうしても止められなく  
て）

ファリス

「ううん、美咲ちゃんが謝ることではないわ。スファレさん・・・  
聞こえているんでしょう。姿を見せなさい！」

突然の登場

スファレライト（映像）

『あゝ、あははっ（苦笑） なんていうか・・・この通信機、もの  
凄いな（汗） すぐそこにファリスさんがいるみたいに見えるよ

~~~~ (大汗) 』

レイチエル (映像)

『あ~~~~ 裸眼スリ〜ディ〜 』 (もしかして4K2K?)

ファリス

「ちよっ!! (汗) レイチエルさんもいるの!?(どびっくり)
(4K2Kじゃなくスーパーハイビジョンよ)

美咲 (映像)

『え〜、重ね重ねすみません・・・ (しくしくしく) 』

効果音「ずががーーーーーん!!」

2コマ

通信終了・・・

ファリス

「はあ〜・・・、あの子たちにも困ったものね・・・ (やれやれ)
聖界がこんなにも大変だったときに・・・ (ぱっ) 」 別モ
ニターを拡大する

効果音「ピコン、ピコン・・・」 聖界マップの外側で白丸が

点滅している

ファリス

「これってやっぱり、ダイくんたちのように別の時空間からやって
来たっただけじゃなく、別の軸から・・・平行世界から干渉してい
る反応よね・・・ (汗) 数時間前にも同じような現象があって、
その反応はラリマーで消えた・・・ (ごくり) いったい、ラリマ

「で何が起こっているというの（大汗）」

説明文「白丸は地図上のハーキマー山脈麓の樹海（ラリマー側）まで移動して反応を消す。その瞬間、ファリスの端末に何者かの通信が入った」

ファリス

「なっ、外部からの・・・通信！！（大汗）　しかも、精霊神の専用回線に通信が入るなんて・・・一体何者！？（ぴっ）」
回線を開く

????（映像）　3歳ぐらいの少女

『あゝ、あなたが　この時代の精霊神ね・・・わたしは、訳あって別の時空軸からやって来た偶数月4月の宝石騎士^{ジュエルナイト}・・・』

ファリス

「えっ！　り、リアンさん！？（どびっくり）」（またちびっ子姿ですか！！）

3コマ

リアン（映像）

『ふあ、ファリス・・・お姉ちゃん？（汗）　あれ、ファリスお姉ちゃんって、まだ精霊神やってたの！？（びっくり）』（寿退職したんじゃなかったの！！）

ファリス

「いやゝ、なかなか次の精霊神を任せられる人が見つからなくて」（苦笑）　シヨウくんが生きていたら、間違いなく押し付けたんだけど・・・（ぼそっ）」

リアン（映像）

『あははっ、確かにシヨウくんだったら立派な精霊神になったでしょうね〜〜』

ファリス

「はいはい、どうせわたしは立派な精霊神じゃありませんよ〜だしくしくしく」

リアン（映像）

『あ〜、ファリスお姉ちゃんは、聖界の危機を救った回数・・・歴代ナンバーワンの精霊神なんだから、立派な精霊神だって（苦笑）』

ファリス

「でも、大魔王とかと戦ったのは、シヨウくんやアリスちゃんです・・・って言うより！ どーして平行世界のリアンさんがこの時空軸にやって来たんですか！？ いくら時空神とはいえ、他の時空軸に干渉することは禁じられているはずですよ！〜」

リアン（映像）

『あ〜もお〜わかつているって・・・（汗） じつは、わたしたちより少し前にこの時空軸へ手違いでやって来た人たちがいてね〜、その子たちを回収したらすぐに出て行くから〜』

ファリス

「はあ・・・、それなら良いんですけど・・・（うん）」

リアン（映像）

『でも、いまの精霊神がファリスお姉ちゃんによかった〜 頭の固い精霊神とかだったら、問答無用で拒否されているところだったよ〜〜（苦笑）』

ファリス

「でもリアンさん、くれぐれも目立った行動はしないでくださいね・
。。。下手をしたら、この時空が崩壊してしまう可能性だってある
んですから(ぼそっ)」

リアン(映像)

『そんな危険性、ファリスお姉ちゃんに言われなくてもわかってい
ますよ〜だ!(ぷいっ)』

通信終了……

ファリス

「あっ、ちよっとリアンさん!!(汗) ……ほんとうにわかっ
ているのかしら(どきどきどき)」 これでも時空神です

4コマ

ハーキマー山脈の麓、ラリマー側の樹海にて……

リアン

「まったく〜、ファリスお姉ちゃんってば、わたしのことを何だと
思っで……。あれ?(汗) ファリスお姉ちゃんって何者かに誘拐
されて、娘のアリスちゃんと一緒に行方不明なんじゃなかったけ
!?(大汗)」 それは、元の時空軸での話でしょ!(笑)

薫

「え〜つと……。リアンちゃん?(でいいのかな?)」

リアン

「あ〜、薫お姉ちゃん……。勝手に話を進めてごめんね〜(あはは

っ」(意味不明な会話、聞いててつまんなかったでしょ?)

薫

「いえ、それはかまわないんですが……ここって本当にパラレルワールドなんですか?(大汗)」(プラネットメーカーの擬似惑星じゃなく……)

リアン

「そう、ここは間違いなく平行世界　パラレルワールドだよ
ちなみにこちらの時空軸では、人間界という聖界は薫お姉ちゃん
が暮している時代から約16年ほど前に消滅していて存在していま
せん(いや、マジで……)」

薫

「……は?(大汗)」　話題についていきません

リアン

「でもまあ正直な話……。こっちの平行世界でわたしたちの時空
軸のことは関係ないわけだから、深く考えなくてもOKだよ」

『最強の勇者はヒーラーでレベル1』には関係ない話です

薫

「わああああ、ぶっちゃけたーーーーー!!!(大汗)」

効果音「ずがーーーーーん!!!」

突然の登場

???

「って、あれ!?(どびっくり)」(強大な気配を辿ってきてみれ

ば・・・)

リアン

「おや、あなたは・・・」

美咲

「ど、どうして、リアンさんがここに!?」(どびっくり)「(最強のラスボスきたー！ー！ー！)」

リアン

「あ~~~~、美咲お姉ちゃんだ~~~~」

薫

「・・・で、誰!?」(大汗)「(どきどきどき)」

コメント

ドラクエ10 利用料金必要のオンラインゲームだなんて・・・

(涙) たぶん買わない

第195話 神出鬼没のユークナイト

4コマ劇場 アイオライト―555・・・2011/09/06
シリーズ3

タイトル「神出鬼没のユークナイト」

1コマ

ラリマー最北に位置するエンスタタイト帝国にて・・・

エンスタタイト兵 片膝について頭をさげている

「ご報告申し上げます！・・・、・・・、・・・、
その結果、現在進行中のルルクオーツ調査が停滞しており、デン
ドリチック、ヒューマイトの両国がなにやら企てているという噂が
・・・」

初老の男

「もうよい・・・、下がれ！」

エンスタタイト兵

「はっ！！（びくっ）」 慌てて退出！

説明文「しーーーーん・・・」 広い部屋で初老の男が一人
になる

初老の男

「ふむ・・・。どつやら、おまえの持ってきた情報は正しかったよ
うだな・・・（ぼそっ）」 壁の陰に向けて呟いている

???

「……………(ゆらり)」 上半身は陰に隠れたまま、不気味な人影が姿を現す

初老の男

「だが、ヒューマイト出身のおまえがなぜこのような情報を……………。祖国を裏切ることになるのだぞ(ギロリ)」 人影を睨みつける

不気味な人影

「……………」 無言

初老の男

「ふっ、相変わらずのだんまりか……………。まあいい。デンドリチック、ヒューマイトの両国が帝国を裏切るといっているのであれば 蹂躞するだけ……………(にやり) その後、ルチルクォーツ進軍についても、おまえには協力してもらおうことになるぞ。ヒューマイトのフェルドスパ……………。いや、今はユークレースのユークナイト……………。シーライトだになったな(くくくっ)」

シーライト スペクトロライトと瓜二つ

「……………(ゆらりと現われる)……………(初老の男をじっと見つめる)……………(しゅたっ)」 手を翳して挨拶をする

初老の男

「どつでもよいが……………少しは喋れよ、おまえ……………(どきどきどきどき)」

シーライト

「……………?(はてな?)」

効果音「ずががーーーーーん！」

2コマ

ヒューマイト城、客室にて・・・

カナリー

「なんや、そんなんでまんまと逃げられたゆくんか？ 情けないやつちゃやな〜〜！」

ブルースピネル

「やかましい・・・(ちっ)」

カナリー

「しかも、リーンウィックの装甲の一部まで破壊されるやなんて・・・。こりや〜、自然治癒するまでだいぶかかりそうやで〜〜(うわっ、痛そうやな〜)」

リーンウィックの傷の様子を確認する

リーンウィック(ぬいぐるみ型)

『くっ、面目ない・・・(ぼそっ)』(ちなみに、それほど痛くはない・・・)

カナリー

「せやけど、そのピンク色のドアから突然現われたヤツら、気になるな〜〜(うん) なあブルース、変身したそいつ・・・ほんまに天空神サファイアって名乗ってたんか？」

ブルース

「ああ・・・」

カナリー

「うむ、いったいどういうことや（汗） 天空神サファイアゆ
くたら、この時代では如月優子が就いとって、その前は綾菜さん（
シヨウや優子の母親）やったやろ？ もしかして、世代が変って
未来から来たんやろか？（汗）」

ブルース

「いや、たしかに若干はジュエルナイト宝石騎士の力を受け継いでいたようだが
戦闘に関してはずぶの素人だった。あれが天空神サファイアのわ
けがない・・・」

3コマ

カナリー

「つまり、ジュエルナイト宝石騎士の偽者……。いうなれば、ジュエルフェイカ
……。」

ブルース

「なるほど、フェイカー……。ね（微笑）」

カナリー

「で、そのジュエルフェイカー、アリスの生まれ変わり……。フ
オスフォス（とかいったか？）に合流したんやろ？ ってことは
、そいつらが何者であろうと、ウチらの敵ってことでええんやな
・・・？」

ブルース

「ふつ、カナリーがそんなことを気にするとは珍しい……。相手
が敵かどうかなんてことは 倒してから考えれば済むこと……。・
だろ？」

カナリー

「うん……、それもそやな〜」（あははっ） ほなさっ
そく……コーネルピン、準備はええか〜」

コーネルピン（ぬいぐるみ型）
『いつでもOKだよ（にこっ）』

カナリー

「……コーネルピン、オヤジ口調（ぼそっ）」

コーネルピン（ぬいぐるみ型）

『ご、ごほん！（汗）カナリーよ……準備は万全だ！！（大汗）
『 オヤジ口調を強制させられている（笑）

カナリー

「よっしゃ！ ほな行こか〜」

4コマ

ブルース

「カナリーよ、どこへ行くつもりだ？（ギロリ）」

カナリー

「そんなん決まっとるやろ。この国にある時空族の遺産を譲り受けるため、ルチルクオーツからの刺客をぶち殺しに行くんや〜」

ブルース

「ちょっと待て……。ヤツらはオレの獲物だぞ……勝手なマネはよしてもらおう（ぼそっ）」

カナリー

「失敗しておめおめ帰ってきたヤツがなに偉そうに言ってるんや！

誰がなんと言おうと、今度はウチの出番やで〜〜〜!」

ブルース

「ちっ・・・(汗) ならばアリスの生まれ変わり・・・フォスフォスだけはオレに殺らせる(ぼそっ)」

カナリー

「ん〜、しゃ〜ないな〜(やれやれ) じゃあ、フォスフォスだけは、手〜出さんといたるわ〜〜〜(笑)」

デンドリチックにて・・・

フォスフォファイライト フォスフォスさん (笑)

「へっくち!(可愛いくしゃみ) う〜ん・・・、カゼひいたかな
〜〜〜(汗)」 額に手を当てて体温を測る

スフェーン(ペンダント)

『誰かに噂されているんじゃないの〜? あ・・・、噂っていうよ
りパロットたちに心配されているんじゃないかな〜〜〜? 人格が
アリスの状態で探索にでて、そのまま離ればなれになったわけだし

・・・(汗)』

フォスファイ

「あたしとしては、パロットたちと冒険に出た覚えもないんだけど
な〜〜〜(苦笑) しかも超危険国のラリマーにきているなんて・・・
(汗) ところで陸(だったよね?)、さっきから先導して歩い
ているけど・・・いったいどこへ向っているの?(大汗)」

陸

「どこって・・・、フォスファイは最北にあるエンスタイトって国

を目指しているんだろ？ だから、ひたすら北を目指して……」

スフェーン（ペンダント）

『はあ〜!?!?（びっくり） 北を目指してって……西に歩いてい
るヤツが何を言っているのよ!?!（怒）』

陸

「え？（西って……） だって、あそこに見えるのが北極星だろ
!?!（星空を指差す） 周りに北斗七星やカシオペア座があるわけ
だし!?!（大汗）」

菜月

「陸くん、陸くん……（大汗） ここ、プラネットメーカー（擬
似惑星）の中……（ぼそっ）」（わたしたちの知っている星の配
置じゃない可能性も……）

陸

「あああああっ、しまったー!?!?!（大汗）」

サファイ

「あははっ リク、まぬけ〜〜（笑）」

陸

「う、うるさい!?!（汗）」

フォスファイ

「ああ〜〜（汗） やっぱり別行動してパロットたちを捜したほ
うがいいよっな……（どきどきどき）」

スフェーン（ペンダント）

「ちなみに、このまま進むとヒューマイトって国に入るかな？」
（苦笑） 「地形は知識としてある」

コメント

シーライトって、いったい何がしたいのでしょうか？（笑）

第196話 隠された時空の扉

4コマ劇場 アイオライト―556・・・2011/09/07
シリーズ3

タイトル「隠された時空の扉」

1コマ

30分ほど前、エリアフハーキマー山脈（ルチルクォーツ側）の麓
にて・・・

美咲

「はあ、はあ、はあ」 黙々とハーキマー山脈を目指して歩いている

レイチエル ペンダントを握り締めている

「あう、美咲、・・・少し急ぎすぎじゃないかな、・・・（ちらり）

」 後方をチラ見

アルフォーニ（中型形態）

『・・・、・・・はあ、（やれやれ）』 体力の限界がきてしまったスファアレを背中に乗せている

スファレライト

「・・・うう（汗） もう歩けない・・・（しくしく）」

美咲

「い、急ぎすぎって（汗） わたしの考えでは、今日中にパロツト
さんたちと合流する予定だったわけで・・・（大汗）」

スファレ

「これ以上ペースを上げたら、死んじゃうよ〜」(涙)「

アルフォーニ(中型形態)

『3時間ほど前からわたしに乗っていて、自分では歩いていないと思います。』(ぼそっ)』

スファレ

「うぐっ・・・(それは、そうなんだけど) だいたい、たった1日でラリマーに入ろうだなんて無理に決まっているじゃない! エリアFまで来れたことだって奇跡的なんだよ!!」(叫び)「(ほとんど全力疾走だったでしょ!!)」

レイチエル

「あははっ、わたしも少しだけ疲れたかな〜」(苦笑)「意外に旅慣れています」

美咲

「たしかに普通なら(かなり急いで)5日ほどかけて到達する距離ですが・・・わたしたちにそんな時間的余裕はありません。早くパロットさんたちと合流し、行方知れずになったアリスさん・・・いえ、フォスフィさんを捜し出さないと(汗)」

スファレ

「それは・・・そうなんだけど(うぐん)」

2コマ

美咲

「とはいえ、これからハーキマー山脈に登るのは危険ですね(もう日が落ちましたし・・・) この辺りにベースを張り、仮眠を取っ

てから・・・夜明け前に出発しましょう」
予定が狂いまくっ
ています（笑）

スファレ
「や、やった〜（これで休憩できる〜〜）」

レイチエル
「あう〜、美咲〜ごめんね〜〜（じつはもう限界〜）」
その場に座り込む

スファレ
「それじゃあ休憩ってことで〜、ちょっとからこの辺りを探索してくるね〜（ぱぱっ!）」
アルフォーニから降りて一人で走り出す

レイチエル
「あうっ！一人じゃ危険・・・（大汗）
アルフォーニ、お願い
!！（叫び）」

アルフォーニ（中型形態）
「・・・はあ〜、やれやれ・・・ですね〜（ぱかぱっ、ぱかぱっ!）」
スファレを追いかける

美咲
「スファレさん・・・、急に元気になりましたね・・・（どきどきどき）」

レイチエル
「あう〜〜、典型的な夜型人間じゃないかな〜〜（苦笑）」

効果音「ずががーーーーーん!!!」

3コマ

アルフォーニ(中型形態)

『スファレ・・・、スファレ!(きよるきよる) うぐっ・・・見
失いました(汗) まったく、この辺りには隠れる場所など無いと
いうのに・・・。はっ! そういえば、彼女にはへっぽこ能力が備
わっていたんですね。それならば納得できます、さすがはへっぽこ
(ぼそっ) へっぽこ戦士という称号は伊達ではありません!』

突然の登場

スファレ

「へっぽこいうなーーーーー!!!(涙)」 近場の岩陰にいた

アルフォーニ(中型形態)

『す、スファレ・・・そこにいたのですね(どきどきどき)』(ま
ったく気配を感じませんでした)

スファレ

「あゝ、でもちようどいいところに来てくれた。ねえアルフォーニ、
これ・・・何だと思う?」

アルフォーニ(中型形態)

『え? どれですか?』

スファレ

「こっち、こっち(ちよつと来て)」

アルフォーニ(中型形態)

『????(汗) え〜っと、わたしにはただの岩壁にしか見えませんが・・・(大汗)』

スファレ

「いや、だからね・・・。この岩壁にある出っ張りに触れてみると〜〜(そお〜っと)」

効果音「ぶわあっ・・・ぱっ!」

アルフォーニ(中型形態)

『なあああー!?! いきなり精霊力の塊りであるオーブが大量発生して、それらが集まることによって時空の扉が創られたー!?!(どびっくり)』

スファレ

「うわっ、見事な説明口調 (笑) で、時空の扉って・・・何?(大汗)」(もしかして、どこでもドア!?)

アルフォーニ(中型形態)

『それは・・・ですね(どきどきどき)』(いいえ、どこでもドアではありません・・・)

4コマ

数分後・・・

美咲

「なるほど・・・こんなところに時空の扉が開いていたなんて・・・。スファレさん、よく見つけることができましたね〜。さすがは入っばこ(ぼそっ)」
褒め言葉です

スファレ

「だ〜か〜ら〜、へっぽこいうな〜！〜！！（うき〜！〜）」

レイチエル

「あう〜、時空の扉ってアレだよね……。各聖界に一つはあるとされている神聖樹クリソプレーズ同士を繋いで時空間転移するっていう伝説上の扉……」

美咲

「実際に五千年前の時代では、人間界と精霊界の間で時空の扉が開いていました。ですが、神聖樹のないこのような場所にどうして時空の扉が……（汗）」

スファレ

「時空の扉っていうぐらいなんだから、お師匠が設置したんじゃないの〜？」（お師匠、時空神でしょ？）

美咲

「ラルドさまが……。なんのために？」

スファレ

「そりゃ〜……。ひょいっ」 暗闇に浮かぶハーキマー山脈を見上げる

美咲

「ああ……。たしかに登り下りするのは面倒ですもんね〜（苦笑）」

レイチエル

「あつあつ(うんうん)」

説明文「それから数分後・・・。スファレたちは、隠されていた時空の扉を通過してハーキマー山脈の向こう側へ到着しました」

コメント

この時空の扉の存在がラリマー側にバレたら大変なことになります(大汗) 一気に攻め込んでくるかも

第197話 フォームチェンジ・・・アルフォーニ炎駒

4コマ劇場 アイオライト―557・・・2011/09/11
シリーズ3

タイトル「フォームチェンジ・・・アルフォーニ炎駒」

1コマ

ハーキマー山脈の麓、ラリマー側の樹海にて・・・

リアン（三歳児姿） 全ての物語のラスボスの一人

「いや、美咲お姉ちゃん、久しぶりだね〜」（にこにこ）で
、どうしてわたしがこの聖界にいるかというと〜」

美咲

「リアンさんなら何でもありって気がしますので・・・説明は不要
です（ぼそっ）」（そのやり取りだけで2コマ分ぐらいつかいそう
ですから・・・）

リアン

「あ、そう・・・（大汗）」

薫

「え〜っと、リアンちゃんのお知り合い・・・？（どきどきどき）
（パラレルワールドなのに）」

美咲

「あつ、もしかして・・・アリス（フォスファイ）さんが気配を消し
たのって、じつはリアンが原因なんですか!？（大汗）」

リアン

「何の話？（汗） っていうか、アリスが・・・なんだって？（大汗）」（アリスはこの時代から5千年前に死んだはずじゃ・・・）

突然の登場

スファレライト

「あゝ・・・ね？ なんか、知らない人が増えている・・・（大汗）」

レイチエル

「あうゝゝゝ なんだか四聖界のラスボスに似たちびっ子だねゝ

ゝゝゝ」 本人です（笑）

効果音「ずがしいいいいーん！ ぎゃわあああああ
！！」 凄まじい振動が起こり、遠くから何かの叫び声が聞こえてくる

スファレ

「ひゃわっ！（びくっ）・・・なに？（どきどきどき）」

リアン

「ああゝ・・・。この国の人々が巨大な魔物に襲われているだけだから、気にしないで（にこり）」（わたしたちには関係ないよ）

スファレ

「って！ 大変なことじゃないのよーん！！（大汗）」（気になるわーん！！）

デンドリチック国ラリマー軍の駐屯地にて・・・

デンドライト デンドリチック国代表

「な、なんなんだあれはーーーーー!? (大汗)」 巨大です
んぐりむっくりした四足の獣を見上げる

デンドリチック兵 (側近)

「ま、まさかそんな・・・いや、間違いありません! あれこそテ
レビアニメの影響でペットとして飼われはじめたけど、大きくなっ
たら意外に凶暴で手に負えなくて 野に放つ人が続出・・・。知
らないうちに民家の屋根裏などで繁殖し、凄まじい勢いで数が増え
ていった生物・・・本田さん (別名ラスカル) だーーーーー!!!」

本田さん 巨大アライグマ (全国の本田さんごめんなさい・

・・・)

『わぎゃーーーーー!!! (叫び)』

デンドライト

「ちよ、ちよつと待て! 本田さんって、でかくなっても体長60
cmぐらいじゃなかったか? (ごくり) 辺りが暗くなってよくわ
からないが・・・あれってどう見ても体長20mぐらいはあるぞ!
! (大汗)」 (こんなデカイ魔物はじめて見た!!!)

デンドリチック兵 (側近)

「・・・成長期ですかね」 (ぼそっ)」

デンドライト

「そんなわけあるかーーーーー!!! (怒)」

本田さん

『ぎゃー！ー！ー！す！ー！』（ぶうぶうぶん！）』

前足を振り回す

デンドリチック兵たち（調査員）

「うわああああー！！」 纏めて吹き飛ばされる

デンドライト

「ちっ！ 兵士たちは何をやっている……。さっさと退治しろ！

」！

デンドリチック兵（側近）

「仕方ありません。いま、この地に残っているのは調査兵だけ……。戦闘兵は未だ魔物退治で各地に散らばっているのですから……

（大汗）

デンドライト

「あああ〜！ そんなこと言っている間に、調査兵が全滅した！！」

3コマ

デンドリチック兵（側近）

「いかなされますかデンドライト様……」

デンドライト

「あいつを……。オレとおまえの二人で倒せると思っか？（ぼそっ

」

デンドリチック兵（側近）

「それは無理でしょう。セレンディバイト殿がいらっしやれば、あるいは可能であったかもしれないが……。 （大汗）

デンドライト

「撤退する！！（叫び）」

デンドリチック兵（側近）

「さすがはデンドライト様！ 決断が早すぎる~~~~~」

デンドライト

「当たり前だ！ 勝てない戦いに・・・ぬ？（ひよい）」 不
意に見上げる

デンドリチック兵（側近）

「あ・・・（大汗）」 同じく見上げる

本田さん

『がぎゃ—————！！（叫び）』 牙剥き出しで突っ込
んでくる

デンドリチック兵（側近）

「わっわああああ！！（大汗）」 慌てて抜刀する

デンドライト

「ちいつ、こつなったら！！（ちゃきっ）」 同じく抜刀

突然の登場

アルフォーニ（聖獣機）

麒麟の形をした機械

『いつけえ~~~~！ アルフォー—————ニ（あう~~~~）』

効果音「どつごおおお—————ん！！」 側面から体当た
り！！

本田さん

『ぎゃぎゃふっ！！』

吹っ飛ぶ

デンドライト

「な、なんだー！ー！？（どびっくり）」

4コマ

アルフォーニの操縦空間にて・・・

アルフォーニ（メインコア）

『ピピッ、スキャン完了・・・。勝てなくはありませんが・・・戦えば長期戦となり、かなりの被害が出ることでしょう』

レイチエル

「あう・・・（じくり）　じゃあ一気にいくよ（ぴっぴ）」

ニンテンドー3DSのタッチパネルを操作する

アルフォーニ（メインコア）

『ライムベリル・プログラム・・・確認。フォームチェンジ・システム始動します！』

レイチエル　ブルースと同じような仮面をつける

「あう、この仮面つけるのも久しぶりだな〜（ちゃきっ）」

かっこよくポーズを決める

アルフォーニ（メインコア）

『レイチエル・・・いいえ、ライム・・・（やれやれ）　そろそろ、行きますよ』

レイチエル（ライムベリル）

「よお~~~~し！ 隠しコマンド入力（ぴっぴっぴっ） フォー
ムチェンジ、アルフォーニ・・・炎駒えんく！！（叫び）」

説明文「レイチエル（ライム）が叫んだ途端、黄色だったアルフォ
ーニ（聖獣機）の鬣たちかみや鱗が紅色となった」

アルフォーニ炎駒（聖獣機）

『くおおおー！！！！（叫び）』

デンドライト

「ちよっ、今度は何だーーーーー！？（大汗）」

デンドリチック兵（側近）

「なっ、紅麒麟の姿が・・・変形し始めた！？」

アルフォーニ炎駒（超獣神）

『バトルモード・チェンジ！ 超麟神アルフォーニ炎駒・・・ここ

に見参！！（叫び）』 複雑な変形を経て巨大ロボットとなる

効果音「ずぎゃーーーーーん！！！」

デンドリチック兵（側近）

「お、おお~~~~！！（どびっくら）」

デンドライト

「か、かっけ〜（どきどきどき）」

コメント

後に、デンドリチック国では巨大ロボットブームが到来しました

(笑)

第198話 アレキサンドライト

4コマ劇場 アイオライト―557・・・2011/09/13

シリーズ3

タイトル「アレキサンドライト」

1コマ

早朝、ラリマーの北西に位置するシテラゾート国の奥地にて・・・
説明文「時空戦艦アレックス改が地面にめり込んでいて、機体の一部から黒煙が立ち昇っている」

グロツシュラー 脱出

「うゝん・・・、なんとかこの聖界に辿り着くことはできましたが・・・(びっぴっぴっ)」 タブレットPCを使って機体をチェック中」

パイロープ

「・・・で、どうなんだい?(汗)」

ツアボライト

「・・・うが(大汗)」

グロツシュラー

「完全に壊れちゃっていますね(苦笑) いかがいたしましょうか、ドロンジヨさま?」

パイロープ

「誰がドロソジョだい、誰がーーーーー!!! (ずげしっ!)」
ハリセンでつつこみを入れる

グロツシユラー

「痛たたっ…… (涙) ですが、このままではこの聖界から離脱
できない可能性も考えられるわけで…… (汗)」

パイロープ

「そうじゃなく! あたしの名前はパイロープだっつーの!!! (う
がーーーーー!)」

グロツシユラー

「いやはや、そんなどうでもいいことは置いといて…… (苦笑)」

パイロープ

「何が……何がどうでもいいだ!! (激怒)」

効果音「がさっ、がさがさっ!」 背後から聞こえてくる

ツアボライト

「うがっ!?!」 ぱつと身構える

パイロープ

「ちよっ、落ち着くんだよツアボライト! (汗)」 (現地人なら危
害を加えるんじゃないよ!!!)

グロツシユラー

「ですが、魔物という可能性も…… (大汗)」

ツアボライト

「うがうが!! (うんうん)」

パイロープ

「そ、それは・・・そうなんだけど (大汗)」

2コマ

突然の登場

???? 40〜50歳ぐらいの男性

「ほお、こいつは驚いた・・・。まだ、このような時空跳躍船が動いているとは・・・ (ぼそっ)」 アレックス改を見上げる

???????? 10歳ぐらいの男の子

「時空・・・跳躍船? (なんだそれ?)」

?????

「時間の流れや空間を飛び越えて、色々な聖界の過去や未来を旅することができる・・・いわゆる時空族の遺産というやつだ」

?????????

「それは、アレクが探しているお宝だな」

アレク?

「時空族の遺産だけを限定して探しているわけではないがな (ふふっ)・・・ぬ? (おや?)」パイロープたちの存在に気づく

パイロープ

「二人とも気をつけな! (汗) 時空族の遺産のことを知っているなんて・・・この聖界の現地人じゃないみたいだよ!! (大汗)」

ツアボライト

「うがー!!(ぎろり)」

身構えて相手を睨みつける

グロツシユラー

「いやはや、単に他聖界の事情に詳しいだけの方かもしれませんよ(汗)」

パイロープ

「そうかもしれない・・・(ぼそっ) だけど、まずはとっ捕まえ
てからゆつくりと話しを聞けばいいんだよ! グロツシユラー、ツ
アボライト、やあ~~~~っっておしまい!!(びっしっ)」 アレ
ク? たちを指差す

グロツシユラー & ツアボライト

「「あらほらさっさ~~~~!!」「」

効果音「ずががーーーーーん!」

3コマ

アレク?

「まてええええー!~~~~い!!(叫び) 話しも聞かず、一方
的に敵視して攻撃を仕掛けようとするなど、お主ら・・・何かやま
しいことでもあるのか!!(怒)」

パイロープ

「うぐっ・・・(凄まじいプレッシャー) あたしたちは、突然の
時空風に弾き飛ばされ、やっこの思いでこの聖界に不時着した・・・
。それだけだ!」

アレク?

「ならば、どうして我らと戦おうとする？ 戦う必要など無いはずだ……（少し落ち着け）」

パイロープ

「それも……そうだな（どきどきどき）」

グロツシュラー

「ドロ……パイロープさま？（大汗）」

アレク？

「先程の話からすると、お主らは他聖界からこのクリスタルにやって来たようだな（見たところ三人とも魔族だな……） 勝手はやめてもらおう……」

パイロープ

「あたしらは艦長の……仲間の帰りを待っているだけ（ぼそっ）
この聖界をどうこうするつもりはない！」

グロツシュラー

「ですがドロンジヨさま……。アレックス改を修理するお金を集めるため、この国でインチキ商売を行わないと……」 インチキ商売ではなく、売っている商品が役に立たないだけ

パイロープ

「おまえは黙ってな……（うが……）」「（ドロンジヨいうな……）！」

アレク？

「ふむ……、お主ら金に困っているようだな……。それなら、我らに協力してみるつもりはないか？」（魔族なら下手な精霊族よ

り強いだろう」

パイロープ

「・・・なに？」

4コマ

アレク?

「我らは今、この国最大の軍勢に追われている身……。そこで、我らと共に行動し……。迫り来る軍勢から我らを護ってはくれまいか？」

パイロープ

「あたしたちを雇おうっていうのかい? (ふふっ) (安くはないよ)」

グロツシュラー

「いやはや、雇うにしても……。もう少し我々の能力を知ってからにしたほうが……」 (それほど強くはありませんよ)

パイロープ

「だから、あんたは喋るんじゃないよ!! (がぎゃー!!!!) (」

アレク?

「あははっ、お主らが弱くても問題はない。わたしだけでも追ってくる軍勢を退けることはできるからな」

パイロープ

「ん? だったら、どうしてあたしたちを雇おうとするんだい?」

アレク?

「ヤツらもわたしの強さは知っているはずなのだが・・・2人で逃げていたという事実からしつこく追ってくる。たった2人なら、もしかすると倒せるんじゃないか・・・とな（苦笑）」

パイロップ

「なるほどね。行動する人数を増やして、簡単には仕掛けて来れないようにしたいわけだね・・・。だけど、あたしたちは旅の途中でこの聖界に立ち寄っただけ。艦長が戻ってきたら、離脱することになるが・・・それでもいいのかい？」

アレク?

「お主らの時空跳躍船は、修理するまで動けないんじゃないのか?（にやり）」

パイロップ

「それは・・・そうなんだが」（大汗）」

アレク?

「とにかく協力してくれ、礼は弾もう・・・（ペこり）」

パイロップ

「・・・わかった（ぼそっ） あんたたちに協力しようじゃないかい いいね、グロッシユラー、ツアボライト!」

ツアボライト

「うがー!」

グロッシユラー

「ドロ・・・パイロップさまがそう決めたのなら、反対することもあります」

パイロープ

「で、あんたならはいつたい何者なんだい？」（グロッシユラーは後でお仕置き決定だね・・・）

アレク？

「おお、そうだったな！ わたしの名はアレキサンドライト、そしてこの子はコンドライト・・・。北にあるエンスタイト帝国から逃げておる」

パイロープ

「ふむ、アレキ・・・サンドライトねえ（うん）」（どこかで聞いた名だね）

説明文「アレキサンドライトは、四聖界にいるミントベリルの旦那さんですよ」
現在、別居中（笑）

コメント

パイロープたちの売っている「10メートルも伸びる高枝切りバサミ」は、最大まで伸ばすと重くて持てません（伸ばしてもせいぜい2〜3メートル）

第199話 本能には逆らえません

4コマ劇場 アイオライト―558・・・2011/09/15
シリーズ3

タイトル「本能には逆らえません」

1コマ

早朝、デンドリチック国ラリマー軍の駐屯地にて・・・

スファレライト

「うん・・・（伸びをしている） 今日もいい天気だね〜
（朝日が気持ちいいよ〜）」 テントの中で寝ていた

美咲

「あ、スファレさん。おはようございます（こっ）」

スファレ

「おはよ〜〜」

デンドライト

「・・・（大汗）」 スファレと美咲の様子に啞然と
している

薫

「あ・・・あははっ（汗） た、確かにいい天気なんだけど・・・
（苦笑）」

リアン

「スファレお姉ちゃん、よく眠れたね〜」（関心するよ） 周り

がこんなに騒がしいのに……(どきどきどき)」

効果音「ずががっ、ずどどしっ、ぐわしゃーーーーん!!!」

本田さん(巨大あらいぐま)

『わぎやぎやああああーーーー!!! (怒声)』

アルフォーニ炎駒(超獣神)

『えいやあああーーーー!!! (叫び)』

説明文「昨晚からの本田さんとアルフォーニ炎駒の戦いはまだ続いています(笑)」

2コマ

アルフォーニ炎駒の操縦空間にて……

レイチエル(ミントベリル) ブルースの仮面をつけている

「あう、アルフォーニ……大丈夫(まだいける?)」

ニンテンドー3DSでアルフォーニ炎駒を操作中

アルフォーニ炎駒(メインコア)

『わたしのことより、ミント……あなたのことが心配です。かれこれ12時間以上、不眠不休で戦っていますが……(大汗)』

レイチエル(ミント)

「あう、大丈夫……(がんばる!)」でも、このでっかい竜(本田さん)を倒すことは簡単んだけど、この子って……たぶんア
レだよね?」

アルフォーニ炎駒(メインコア)

『ええ……、四聖界でいうところの超進化光線を浴びて巨大化した……普通の野生動物でしょう』

レイチエル（ミント）

「あう（やっぱり） だったら倒すんじゃなく、ちゃんと元に戻してあげないと〜」（う〜ん）」

アルフォーニ炎駒（メインコア）

『ですが、このままでは戦いが長引くだけ……。かわいそうですが、倒すことも考えるべきでは……。』（汗）』

レイチエル（ミント）

「そんなのダメー……！！（叫び）」

外界にて……

本田さん

『がぎやー……！！（ぶう〜ん、ぶう〜〜ん）』
両手を振り回している

3コマ

リアン

「まずいね……。レイチエルお姉ちゃん、何かためらいながら戦ってる〜（汗） ここで倒しておかないと、あの本田さんって魔物、ますます凶暴化してしまうだけだよ〜（大汗）」

薫

「ああ、巨大怪獣と巨大ロボットの戦いって……。 （汗） これって夢オチ？（どきどきどき）」

美咲

「ここは手助けしてあげたほうがよろしいのでは？」(汗)「

リアン

「美咲お姉ちゃん、そんなんだから周りが成長しないんだよ〜〜
(汗)」「(そりゃ〜、自分たちで戦ったほうが早いけど〜)

美咲

「うっ・・・(汗) たしかに、レイチエルさんの成長のためには
手出ししないほうが・・・(大汗)「

スファレ

「っていうかさ〜、まだ戦い続けてたの〜〜?」

リアン

「スファレお姉ちゃんが眠っていた間もず〜〜とね(大汗)「

スファレ

「う〜ん・・・(考え中〜) それじゃ〜ここはスファレちゃんに
任せてもらいましょう(きゅぴーん)「 目が怪しく光る

美咲

「うっ、突然へっばこの気配が漂った!!(どびっくり)」「(どう
いうこと!?)」

4コマ

バックミュージック「へっばこマスター青山七瀬」 なぜ七
瀬のテーマ曲?(笑)

スファレ

「まずは、大きな容器・・・今回の場合、大きめのビニールプールを用意します」(実験実験実験)

薫

「はあはあはあ。ど、どーしてわたしは空気を入れなくっちゃならないんですかー！ー！(うにゃー！ー！)」(しかもプールがデカイ！) 空気入れを踏んでいる

スファレ

「次に、膨らんだビニールプールにいっぱいの水を入れ・・・」

美咲

「はあ・・・(やれやれ) 瑞雲さん、水をお願いできますか？(大汗)」 腕輪で四神刀白虎の瑞雲を召喚！

瑞雲

霧状の白虎(四神刀の化身)

『美咲・・・、こんなことで呼び出さないでください・・・(しくしくしく)』 ビニールプールに水を入れる

スファレ

「そして最後に、でっかい『わたあめ』を用意して・・・」

リアン

「へい、いらつしやい」 突然出現した露店でわたあめを作っている (爆)

スファレ

「その完成した巨大わたあめを、本田さんめがけて投げつける・・・どりゃ！！(ぶうぶうぶうん！)」

本田さん

『・・・がう?』

近くに落ちたわたあめに気づく

アルフォーニ炎駒(超獣神)

『ちよっ! 巨大竜の意識がスファレさんたちに!! (大汗)』
しまったー! (大汗)

本田さん

『・・・ (ひよい) ・・・ (きよろきよ)』

わたあめを持ち上げて辺りを見回す

アルフォーニ炎駒(超獣神)

『えっ、なに? (大汗)』

本田さん

『!! (水を張ったビニールプールに気づく) がう (うしろ) しじゃぶじゃぶ』
わたあめを水の中に突っ込み、洗いはじめる

スファレ

「本田さん(あらいくま)は、エサを食べる前に洗う癖があります。そんな本田さん(あらいくま)にわたあめを与えると、溶けてしまつまで洗い続け、消えてしまったことに驚いておるおるします」

本田さん(あらいくま)

『ががっ! (びくっ) がうがう、がうがう(おろおろ、おろおろ)』

薫

「なんですか、それー! (うにゃー!)

！)
「

効果音「ずががー————ん！！」

コメント

結局、おろおろしている本田さんを、アルフォーニ炎駒が必殺技を使って元の大きさ（体長60cm）に戻しました

第200話 単なる一つの属性です

4コマ劇場 アイオライト―559・・・2011/09/22
シリーズ3

タイトル「単なる一つの属性です」

1コマ

ヒューマイトの国境にて・・・

陸 木陰から覗いている

「・・・なんだあれ？（ぼそっ）」（警備兵か？）

フォスフォファイライト

「なんだ・・・って、国と国の境目・・・国境じゃないかな？（どきどきどき）」（向こうは、たしかヒューマイト国？）

陸

「国境？（汗）もしかして、普通には入れないのか？（大汗）」
（ゲームなのに、自由に行き来できないのか？）

スフエーン（ペンダント）

『当たり前でしょ！（ゲームって何言ってるのよ！）特にこのラリマーって国は・・・47の小国が常に覇権を争っていて、他より入国審査が厳しいんだから！！（汗）』

フォスファイ

「でも、一つの国がラリマーを統一したって噂じゃなかった？（汗）」

スフエーン（ペンダント）

『うーん、統合した……っていう割りには、戦乱の後が見られないんだよね』（国境もそのまま残っているわけだし……） 統合されたって噂が間違っているのか、何らかの要因があって……他の国が戦わずして降伏したか……（汗） とにかく、国境を越える方法を考えないと』（大汗）』

フォスファイ

「……あたしたち北を目指しているんだから、西にあるヒューマイト国へ行く必要無いんじゃないの？（汗）」

陸

「いや、最終目的地に直接向かっても意味はない。まずは、攻略する情報を集めないと（うんうん）」

サファイ

「ねえ、ナツキお姉ちゃん……。リクつてば、自分の勘違いで西に辿り着いたことを、必死に誤魔化そうとしているよ」

菜月

「陸くん……。お姉ちゃんは情けないです……。しくしくしく」（正直に道に迷ったと言わないと……）

陸

「なああああー！！！！（ち、違！！！！） 凶星です

効果音「ずががー！！！！ん！！！！」

2コマ

ラリマーの北西に位置するシデラゾート国の奥地にて……

パイロープ

「おい、コンドライト……。食料調達に行くから、一緒にきな
(がしっ)」「コンドライトの頭を鷲掴み

コンドライト

「わぎゃっ！ ちょっ、おまえ……。何するんだ！！(放せ〜！)」「
パイロープの手を振り払う

パイロープ

「……。おまえ……。だと？) 年上に対する態度がなっ
てないね〜〜) (ギロリ)」「

コンドライト

「うぐっ(汗)」「

パイロープ

「まあ、おまえでも何でもいいから、食料調達に行くよ……。)
やれやれ)」「

コンドライト

「な、なんでボク……。わたしがそんなことをしなくてはいけな
いのだ！(むっ)」「

パイロープ

「まさか、何もしないで食料が入るとでも思ってるのかい？
とある聖界の国にこんなことわざがある。『働かざるもの食うべか
らずー！』 だから食料を探しにいくよー！(さっさとしな！)」「

コンドライト

「ちえ〜、わかったよ・・・ドロンジヨ（ぼそっ）」

パイロープ

「ド・・・!?!?（怒）」

3コマ

効果音「ずげしっ、どがっ、ばしっ、ぐわしゃっ!?!」
パイロープのつつこみが炸裂!

コンドライト

「痛っ！（涙）おまえ、何するんだー!?!?!（親にも殴られたことないのに!?!）」
つつこみというよりたこ殴り?（笑）

パイロープ

「あたしの名前はパイロープ・・・（ギロリ）けっしてドロンジヨじゃない・・・（ぼそっ）」

コンドライト

「うっ・・・、だつてみんなそう呼んでるし・・・。それに、どう呼んでもいいってドロンジヨが言ったんじゃないか」（涙）」

パイロープ

「ドロンジヨはやめろつて言ってるだろー!?!（ずげしっ）」
拳骨アタック!?!

コンドライト

「わにゃっ!?!?（痛っ）こ、この〜、いい加減にしる!（むっ）
本当は内緒なんだがボク・・・わたしはエンスタイトの王なんだぞー!?!」
エンスタイト帝国の代表

パイロップ

「………。言いたいことはそれだけかい？　じゃあ、さっさと食料調達にいくよ（がしっ）」　再びコンドライトの頭を驚掴み

コンドライト

「つて、ボクの話……ちゃんと聞いてたか……!?（涙）」
（もつと大事に扱え!!）

パイロップ

「はあ……（やれやれ）　いまさら、王様やお姫様なんて属性（？）別に珍しくもない……（ぼそっ）」

コンドライト

「……え？（大汗）」（ぞ、属性!？）

パイロップ

「お姫さまっていうなら、艦長……レイチエルやカナリー（本名スペサルティン・ガーネット）もそうだし……。それに、こつちは超獣神とかいう四聖界の神様を相手にしているんだ。国の代表……王様なんて言ってしまうえば小者感覚だね」（あははっ）」

コンドライト

「そ、そんな……!!（ずがが……ん!）」　か
なりシヨックを受けています

4コマ

パイロップ

「というか、コンドライト……あんた、王様の割りにひよろひよるだね。ちゃんと肉食べてるかい？」

コンドライト

「え……、肉はちょっと……（汗）　ボクは野菜とか果物がいいな……」（大汗）」

パイロープ

「……………しばらく肉づくしだな（ぼそっ）」

コンドライト

「ええええー！ー！ー！（涙）　ちょっと、ちゃんと話を聞いてよ！！（肉は身体が受け付けないんだって！）」

パイロープ

「ああ～もお～つるさい子だね……（耳を塞ぐ）　それが嫌なら自分で用意することだね……」（ふふん）」

コンドライト

「こ、こんなところで野菜や果物が見つかるわけ……（涙）」

パイロープ

「だったら肉食え……」

コンドライト

「この人、嫌いだー！ー！ー！（わにゃー！ー！ー！）」

アレキサンドライト

「ふふふっ（微笑）　コンドライトにしてみれば……良い出会いだっただかもしれんな……」（にやり）」

グロツシュラー

「そ、そつでしようか・・・（大汗）」

ツアボライト

「うがゝ・・・（大汗）」

コメント

べつにパイロープが肉好きなのわけではありません（コンドライトが嫌がったため肉づくしになった）

第201話 悪ぶっていますが・・・いい人です

4コマ劇場 アイオライト―560・・・2011/09/27

シリーズ3

タイトル「悪ぶっていますが・・・いい人です」

1コマ

ラリマーの北西に位置するシデラゾート国の奥地にて・・・

説明文「狩りした魔物（デカイだけで野生動物です）の肉を焚き火であぶっている」

パイロープ

「どうだい？ 自分で狩った魔物の肉は美味いだろ〜」（はむ

っ）」「骨付き肉に噛り付く

コンドライト

「うぐっ・・・（汗） 肉が苦手とかじゃなく・・・こんな重たい朝食、食べられないよ〜」（涙）」

アレキサンドライト（アレク）

「まあ、そういうな・・・（苦笑）」（食べておかないと、一日の活力が出ないぞ〜）

パイロープ

「そういうことだ。というわけで、コンドライトのノルマは、これだけな〜」（ひょいっ）」「お皿に山盛りの骨付き肉を差し出す

コンドライト

「そ、そんな~~~~(しくしくしく)」「(イジワル~~~~)

パイロープ

「で、おたくら、どうしてエンスタタイト・・・とかいう国から逃げているんだい？ コンドライトは その国の王様なんだろう？」

アレク

「ふむ・・・、王位を継いだコンドライトは、いささか若すぎるのでな・・・。すでに予想しているとは思うが、お家騒動 権力争いで命を狙われておる」(複雑な理由じゃなくてすまん~~~~)

コンドライト

「.....」

パイロープ

「ちっ、それで国から逃げ出したのかい。情けないヤツだね~~~~
！(けっ!)」

コンドライト

「ええーーーーー！ 批判される流れなのーーーーー!? (大泣き)」「(哀れみとか一切無しですか!!)」

効果音「ずがーーーーーん!!!」

2コマ

パイロープ

「だいたい、権力争いで逃げ出さってどうなんだい？ そんな情けないヤツに国民が着いて来るとは思えないね~~~~(やれやれ)」

コンドライト

「……………（むかつ）　じゃあ、大人しく暗殺されていれば良かったの？（じいっ）」　ジト目で睨む

パイロープ

「あははっ　暗殺されるだなんて、そいつの注意力が足りないだけ……。そうだったら、迷わず成仏（昇天）することだね」

コンドライト

「そんなの滅茶苦茶だよ、ドロンジヨさま……（しくしくしく）
」（いったいボクはどうすれば……）

パイロープ

「だから、ドロンジヨいうな！！（うがーーーーー！）」（このやりとりは『へっぼこ』だけでいいんだよ！）

アレク

「まあ、そういじめるな……。こう見えてもコンドライトはまだ10歳だ。王として未熟であっても仕方あるまい……」

パイロープ

「ダイとかは、5〜6歳で四聖界を救っていたぞ（ぼそっ）」（年齢は関係ないんじゃないかい？）

アレク

「そのダイというのが何者かは知らんが……たしかにシヨウやアリスが第一聖界を支配していた魔王ブライを倒したのも5〜6歳のころだったな」（そういえば……）

パイロープ

「へえ、アレク・・・あなた、アウインの勇者のことを知っているのかい？（にやり）」

アレクの正体にまだ気づいていない

アレク

「ふむ。古い友人だ・・・」

懐かしむように目を細める

パイロープ

「へえ、そうなのかい　じつは、あたしたちも、ちょっとした縁があるんだよ（ふふっ）」

アレク

「ほお、それは奇遇だな（あっはっはっ）」

コンドライト

「・・・（どきどきどき）」（5〜6歳で魔王討伐？）

3コマ

パイロープ

「で・・・コンドライト」

コンドライト

「・・・え？（びくっ）」

パイロープ

「あなたはこれからどうするつもりなんだい？」

コンドライト

「じつする・・・（汗）」

パイロープ

「国に戻って王位を取り戻すのか、このまま追っ手から逃げるだけなのか……。どこかの国に亡命するってのもアリだね」

コンドライト

「そんなの……わかんないよ(ぼそっ)」

パイロープ

「わかんないじゃない……。あんたは、王様なんだろう？ これからどうするかは どうしたいかはアレクが決めることじゃない……。あんたが決めな(ギロリ)」

コンドライト

「うるさいうるさいうるさい！(うおー！) ボクだって、好きこのんで王様になったわけじゃないんだー！！(怒)」

アレク

「……………」

コンドライト

「はあはあはあ(汗)」

パイロープ

「うむ、想像以上に幼いようだね(大汗)」(逆ギレされちまったよ)

コンドライト

「幼っ！？(ガーン！)」

アレク

「ドロンジヨよ、あまりコンドライトを追い詰めるな・・・(汗)」

パイロープ

「あんたもドロンジヨいうかい！(怒) あゝ(汗) いいかい、コンドライト・・・。問題を先送りするのも、一つの手だとは思つが・・・問題の内容によつては、直ぐに決断しなければ手遅れになってしまう場合もあるんだよ(じいゝつ)」　　コンドライトを見つめる

コンドライト

「・・・・・・・・・・」　　視線を逸らせる

パイロープ

「まあゝ、色々考えて悩むのもいいことだねゝ。ただし、王であるというのなら、どんなに選択するのが難しい内容でも　即決する必要がある・・・こともある。何を重点において決断するか・・・普段から心構えをしておくのも一つの手だねゝ」

コンドライト

「うゝ、うゝっ・・・・・・・・(汗)」

パイロープ

「とはいえ・・・、あたしたち大人でも難しいことをこんなちびっ子に強要するのも酷かもしれない・・・。ん！(そうだ)　おいグロツシユラー、ちよつとこつちに来なゝゝゝ！！(叫び)」

グロツシユラー

ツアボライトと一緒に見張りをしていた

「ドロンジヨさま、お呼びですか？」

パイロープ

「はあ〜・・・（否定するのも疲れたよ〜）グロッシユラー。しばらくこのコンドライトの面倒を見てあげな〜」

コンドライト

「・・・え？（汗）」

グロッシユラー

「ふむ〜、なんだかわかりませんが・・・了解いたしました」

コンドライト

「ちよ、ちよっと!?!?（大汗）」（別に面倒みてもらわなくても・・・）

パイロープ

「こつ見えても、グロッシユラーは頼りになるんだよ。コンドライトが見習うこともたくさんあるだろうね〜」

グロッシユラー

「いやはや、照れますね〜〜（にた〜っ）こほん！では、コンドライト・・・ボクちんから言えることはただ一つ!!--」

コンドライト

「ひ、一つだけなの!?!?（びっくり）」

グロッシユラー

「・・・。。ドロンジョさまには絶対服従・・・（ぼそっ）」

コンドライト

「・・・（汗）」

アレク

「……………(大汗)」

パイロープ

「……………って、何を口走っているんだ
いあなたは—————!!(どびっくり)」

グロツシュラー

「下手に口答えすると、トラピツチェさま(ドクロベーみたいなヤツ)より恐ろしいお仕置きが待っていますからね……。この前なんか、上空一万メートルから紐無しバンジーをやらされそうになりましたから……。(がたがたぶるぶる)」

アレク

「そ、それは……酷いな(どきどきどき)」

パイロープ

「ちよ—————っ!(大汗)」(あれは単なる冗談!)

グロツシュラー

「コンドライト、気をつけなさい(ごくり) 世の中には……絶
対に逆らってはいけない存在もいるんですよ(ぼそっ)」

コンドライト

「わ、わかりました—————!!(びしっ)」 背筋を伸ば
して直立不動(笑)

アレク

「……………なるほど(汗) 流れをそつもってくるか……。(大汗)」

パイロープ

「別にそんなつもりじゃ！(汗) こゝ、コンドライト・・・あたしが言いたかったことは(大汗)」

コンドライト

「ななな、なんなりとお申し付けください。ドロンジヨさま！(涙)」「(びくっ！)」

パイロープ

「ドロンジヨいうなーーーー！！(わぎゃーーーー！！)」「(」

効果音「ずががーーーー！！ん！！」

コメント

結局、何も決断していないような・・・(笑)

第202話 ようこそ外の世界へ

4コマ劇場 アイオライト―561・・・2011/09/30
シリーズ3

タイトル「ようこそ外の世界へ」

1コマ

白虎の機獣神コーネルピンの操縦席にて・・・

効果音「ピッ、ピッ、ピッ」 モニターの地図上にいくつかの
小さな光が点滅している

カナリー

「うーん、まずったな〜（汗）」

コーネルピン（メインコア） めいぐるみ型

『状況から考えてみて、北へ向かっている反応がグランゾル・・・。
デンドリチックの東に現れた反応がアルフォーニだろっな・・・（
ぼそっ）』

カナリー

「先行しとるメンバーの中にヒューマイト出身の人形使いがあるっ
て聞くとったから、てつきり故郷へ戻ってくるおもたんやけどな〜
（汗） このままじゃ〜、クリノ（クリノヒューマイト）との約束
もご破算になってまうで〜〜（大汗）」

コーネルピン（メインコア）

『約束とは・・・ルチルクオーツからの刺客を何とかするかわりに、
ヒューマイトで管理している時空族の遺産を譲り受けるといっアレ

だな』

カナリー

「そや……。せめてルチルクオーツから来たヤツをヒューマイトの領地内に入り込んだところでボコらんと時空族の遺産は手に入らんようになる。さて、どないするか……(うん)」

コーネルピン(メインコア)

『もう、エンスタイト帝国の方を何とかすることにしようか？ 早く時空族の遺産を手に入れないと、本当に四聖界が崩壊してしまうのだぞ……(大汗)』

カナリー

「まあ、そんな焦るなやコーネルピン 最悪、この聖界における時空神に頭を下げて、時空崩壊を何とかしてもらえば……。おんや？(あれは……)」 外部モニターに映る何かに気づく

コーネルピン(メインコア)

『データベース照合……。カタカタカタ) ルチルクオーツ……。ドラゴンファング所属の冒険者フォスファイライト。ターゲットの一人だな。たしか勇者アリスの生まれ変わりとかいう』

カナリー

「ふふん、ってことは、フォスフィの近くにいる三人の誰かが……。ブルースの言った偽宝石騎士^{ジュエルフェイカー}ってことやな……」

コーネルピン(メインコア)

『で……。どうする？(汗)』

カナリー

「もちろん、全員ぶつ殺す（にやり）」

コーネルピン（メインコア）

『だが、アリスの生まれ変わり・・・フォスファイだけはブルースに任せるという約束ではなかったか？（大汗）』

第195話

カナリー

「そんな昔の約束・・・離れたな（あははっ）」

コーネルピン（メインコア）

『まあ、予想はしていたがな・・・（どきどきどき）』

効果音「ずががーーーーーん!!」

2コマ

国境近くの木陰にて・・・

サファイ

「ここはさく、やっぱりリクを囿にして・・・警備兵の注意を逸らすべきなんじゃないかな？」

菜月

「なるほど・・・（うん）その隙に、わたしたちは国境を越えるわけですね（ナイスなアイデアです）」

陸

「ちよっ！（汗）警備兵に見つかったオレは・・・どうなるんだ！？（大汗）」

サファイ

「リクは 非常に残念な結果に・・・(しくしくしく)」

陸

「おい！！(怒)」

スフェーン(ペンダント)

『あ、あははっ(苦笑) やっぱり、監視の薄いところを探したほうが良いんじゃない？ん、フォスファイ？(どうしたの?)』

フォスフォファイライト

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。。。。。。。。。。。。
・・・・・・・・！！(しゃきっ!)」 何の前触れもなく聖剣クリソベリル(真)を抜刀する

効果音「ガキーーーーー! ガガッ、ガガガガッ!!」

何者かの剣撃を聖剣クリソベリル(真)で受け止める

スフェーン(ペンダント)

『な、なあああーーーー！！(どびっくり)』

フォスファイ

「あ、あれ!?(大汗)」(あたし、何をして!) 無意識で

突然の登場

カナリー

「へえ」(ちょっとびっくり) まさか、受け止められるとは・・・
(にやり) 「 殺すつもりでナイフを振り下ろした

菜月

「だ、誰ですかー！ー！ー！！（びっくり）」

3コマ

カナリー

「・・・っと（フォスファイから距離をとる） てな訳で、フォスフォスさんには死んでもらうことになった（にこっ）」

フォスファイ

「って、どんなわけですかー！ー！ー！！（涙）」

サファイ

「り、リク・・・。フォスファイの持っている剣って・・・（大汗）」

陸

「ウソだろ・・・。オレのと同じ・・・聖剣クリソベルル！！（どびっくり）」

菜月

「いいえ。わたしが預けた・・・陸くんの持つレプリカではありません。あれは真正銘の聖剣クリソベルル・・・（ごくり）」（ゲームの中だけど・・・）

サファイ

「つまり、フォスファイはリクとは違って本物のアウインの勇者ってこと〜！？（汗）」

スフェーン（ペンダント）

『ふっふっふっ、その通〜〜り 何を隠そう、フォスファイはあのアウインの勇者アリスの生まれ変わ・・・うっ！？（どくっ！）

□

フォスファイ

「ちよっ、なに!?(汗) いま、ペンダント通じてもの凄い振動が伝わってきたよ! スフェーン・・・大丈夫なの!!(大汗)」

スフェーン(ペンダント)

『大丈夫・・・いや、これは・・・ちよっとマズイ かも・・・つて、わあああああ!!(叫び)』 大激痛に襲われる

フォスファイ

「あゝ、たしかカナリーさん・・・でしたよね! スフェーンに・・・いったい何をしたんですか!!(怒)」

カナリー

「いやいやいや(汗) ウチは・・・何もしとらんで・・・(苦笑)」

┌

フォスファイ

「なら、どうして・・・」

スフェーン(ペンダント)

『うわあああああーーーーー!!(悲鳴)』 ペンダント・・・正確には卵から眩い光があふれ出す

フォスファイ

「す、スフェーン!!(ど、どうしよう!?)」

4コマ

スフェーン(ペンダント)

『ちよつ、ダメっ！ あつ、こんな所で・・・くっ（汗） 今まで大丈夫だったのに・・・がんばれわたしーーーー！！（叫び）』

フォスファイ

「だから、何の話よーーーー！！（大汗）」

スフェーン（ペンダント）

『うぐっ！ もう限界・・・かも！？（大激痛） フォスファイ・・・下がって！！（うわあああああ！）』 ペンダントから眩い光に包まれたドラゴンの卵が飛び出す

フォスファイ

「スフェーン！？（叫び）」（ぴかあああああーーーーー！！！！）
「！！！！」 辺りが眩い光に包まれる

陸

「うっ、何がどうなって！（眩しい）」

サファイ

「目が・・・目が~~~~！！（涙）」

菜月

「いったい何なの！！（見えない）」 完全に視力がホワイト

アウト

フォスファイ

「スフェーン・・・スフェーンちゃん！！（叫び）」 同じく
目が見えない

カナリィ

「へえ〜……（ごくり）まさか、こんなレアなシーンに立ち会えるなんて……（ラッキ〜）」 全然見えています

フォスファイ

「えっ、どづいうこと!？（汗） うづっ、だんだん視力が戻って・
・はい〜!？（どびっくり）」

説明文「光が収まるとドラゴンの卵は消えており、代わりに白い毛並みでところどころ炎が揺らぐような黄色いメッシュの入った仔犬がうずくまっていた」

仔犬？

『……………』 ピクリとも動かない

フォスファイ

「えっ？ この仔犬……どこから!？（大汗）」

仔犬？

『ど、どづしよう……（ぼそっ） ゆっくりと立ち上がって振り返る』

フォスファイ

「ひっ、喋っ!？（びくっ）」

仔犬？

『我慢できずに……瞬っちゃった〜!!（うろたえる）』

フォスファイ

「瞬っちゃったって……ま、まさかスフェーンなのおー……
ー!?!?（うそおー!?!?!）」

スフェーン(仔犬型)

『あん・・・(ぼそっ)』

効果音「ずがが—————ん!!」

コメント

何かのこだわりで、スフェーンは卵から孵ることを拒んでいました
(笑)

第203話 伝説の勇者・・・再び

4コマ劇場 アイオライト―562・・・2011/10/04
シリーズ3

タイトル「伝説の勇者・・・再び」

1コマ

国境近くの木陰にて・・・

説明文「通常光竜の卵は・・・人々の手を渡りながら見聞を広め、七百年前後で幼体へと孵る。だが、スフェーンは、ほとんどの年数をダンジョンの奥底で 卵の姿で千年を過ごしていた」

スフェーン（仔犬型）

『う、ううううう・・・（涙）』（ず）と卵のままががんばってきたのに・・・（）

サファイ

「わっ、わあ〜 かわいい〜〜（ぎゅ〜っ） 「（ おも
わずギュッと抱きしめる

スフェーン（仔犬型）

『わにゃーっ、気軽に抱きつくなー！（）がるるっ！（）』

菜月

「……………マルチーズにスピッツ？」

陸

「いやいや、テリア系にコーギーとみた！」

フォスフォファイライト

「ええ〜っと(汗) いったい何の話？(大汗)」

陸

「え？ こいつの親犬がどんな種類なのかと・・・」

スフェーン(仔犬型)

『ミックス犬じゃないやい！！(涙)』(そもそも犬じゃないよ〜
〜〜〜！！)

効果音「ずががー！ー！ー！ーん！！」

2コマ

カナリー

「いやあ〜、光竜の誕生なんて・・・すっごくめでたいことやな〜
〜(おめでとさん)」

フォスファイ

「あ、ありがとうございます〜(えへへ〜)」

スフェーン(仔犬型)

『ちつともめでたくないやい・・・(しくしくしく)』

カナリー

「てなわけで〜 みんな纏めて死んでくれやー！(うけけけ
っ)」 ナイフを構えてフォスファイに襲いかかる

フォスファイ

「そういえばこの人、襲ってきていたんだった！！(大泣き)」

いやああああ!!!(

陸

「しまっ!!!(大汗)」「完全に出遅れた!!!(

スフェーン(仔犬型)

『ふお、フォスフィー————!!!(叫び)』

フォスファイ

「はへっ?(びくっ)……………(ぼお~~~~っ)」「

突然、惚けたように立ち尽くす

効果音「ががつ、ががつ!」

カナリーによる痛恨の一撃!?

フォスファイ(?)

「ふうん!!!(ヴウウウン!)」「 聖剣クリソベリル(真)

で真横に一閃する

カナリー

「ちよっ、やばっ!!!(うおっ)」「

慌てて上半身を仰げ反ら

せ、クリソベリルの刃をかわす

陸

「……………え?(どきどきどき)」「

3コマ

カナリー

「あ、危ないやろ! マジ殺す気か————!!!(がぎゃ————

!!)」「

フォスファイ(?)

「いや、スペサルティンこそあたしを殺す気満々だったじゃない。
・・(じいじいっ)」 ジト目

カナリー

「あ・・・れ?(汗) なんか、さっきまでと感じがちやう・・・
(大汗) っていうか、なんでウチの本名を!?(どびっくり)」

スフエーン(仔犬型)

『もしかして・・・というより、また表に出てきちゃったの・・・
アリス(はあ)(やれやれ)』

アリス(フォスファイ)

「そういうあなたはスフエーンちゃん いや、アクアちゃん)
の小さいころ(にそっくりだね) (にっ)」

サファイ

「え・・・、どういうこと?(汗)」(フォスファイの・・・前世?)

カナリー

「この圧倒的気配・・・アウインの勇者アリスに間違いないようや
な(ごくり) おいアリス! あんたはとくに死んでるんや
さかい、ひよいひよい出てるなやー! (うがー!)(
(ウチの見せ場が台無しや!))

アリス(フォスファイ)

「うん、元人格(フォスファイ)に戻っても意識があつたから大
体のことはわかってるんだけど・・・、どうやらフォスファイが危
機状況に陥ったとき・・・あたしが出てくるみたいね(汗)
言わば、命の保険?(ぼそっ)」

カナリー

「そんな裏技あるかー！ー！ー！ー！(叫び)」

陸

「裏技っていうより、改造コード使ってパラメーターいじった感じ・
・じゃないか？(汗)」

サファイ

「ブーブー！ それって、ネットゲじゃ反則だよー！ー！(むっ)」

アリス(フォスファイ)

「いや、そんなこといわれても(苦笑)」(あたしの意思じゃないし・・・)

4コマ

カナリー

「ええい、とにかくやー！ 四聖界の崩壊を止めるためにも、あんならには死んでもらわんとあかん・・・」

アリス(フォスファイ)

「あたしはとっくに死んでるらしいけどね(あははっ)」

カナリー

「ちいっ・・・、その余裕ぶっこいだ表情、恐怖で歪ませたる！
こいや、コーネルピン！！(叫び)」 ナイフを上空へ突き
上げる

突然の登場

コーネルピン（機獣モード） 白虎の機獣神

『がぎゃー！ー！ー！ー！』（吼える）』

陸

「うおっ（汗） また出たよ、メカ生体ゾイド！！」

菜月

「陸くん・・・それ古過ぎ（苦笑）」

カナリー

「とうとう（コーネルピンの頭部に飛び乗る） よっしゃーコーネルピン！ アリスの覚醒は想定外やったけど、ヤツらを皆殺しにするで～～～」

コーネルピン（機獣モード）

『だ、だがカナリーよ・・・（汗） わたしに乗って戦えば、おまえの力は100分の1以下になってしまうが・・・アリスに勝てるのか？（どきどきどき）』

カナリー

「あ・・・、そういえば（大汗）」 生身で戦ったほうが強い
です

コーネルピン（機獣モード）

『あ・・・（汗）』

カナリー

「へ？（きよろっ）」 地上に視線を向ける

アリス（フォスファイ）

第204話 怒りのクリノヒューマイト

4コマ劇場 アイオライト―563・・・2011/10/09
シリーズ3

タイトル「怒りのクリノヒューマイト」

1コマ

ヒューマイト城にて・・・

説明文「所々、装甲の砕けたコーネルピン（機獣モード）が横たわっている」

カナリー

「あゝ・・・（汗）」 黒煙が立ち昇るコーネルピンを見上げている

クリノヒューマイト

「こ、こいつは・・・（大汗）」（派手にやられたようだな）

ブルースピネル

「・・・あははは（無表情）」 乾いた笑い

カナリー

「って、言いたいことがあるならばつきり言いやーーーーー！！（うがーーーーー！！）」

ブルース

「自信満々で出て行ったわりに、情けないヤツだ・・・（ぼそっ）」

カナリー

「はうあっ！（ぐさっ）」

見えない剣が身体に突き刺さる

ブルース

「しかも、アリスの始末はオレに譲ると約束したくせに、攻撃を仕掛けて返り討ちにあうなど・・・話にもならない（はあく）」（やれやれ）

カナリー

「うおっ！？（ぐさぐさっ！）」

四方から見えない剣が（笑）

クリノ

「おいおいブルース（汗） 少し言い過ぎでは・・・ないか？（苦笑）」

カナリー

「そや！（クリノ、もっと言ったってー！） おまえかて、ジュエルフ偽宝石騎士エイカーに一撃喰らって、おめおめ逃げられたやないかー！？」

ブルース

「オレは負けていない！（えっへん）」

カナリー

「いやまあ、そうなんやけど・・・（どきどきどき）」

2コマ

ブルース

「だいたい、どうしてコーネルピンで戦ったんだ。たとえアリスが相手でも、生身であれば充分戦えただろう？ 大魔王ルシフォンの妹・・・スペサルティンガーネットよ」

クリノ

「だ、大魔王の・・・妹!? (どびっくり)」

カナリー

本名、スペサルティンガーネット

「あゝ、確かにノーマルのアリス(アウインの勇者状態)となら互角やったかもしれんけど・・・(汗) 五精霊クラスに精霊化チェンジされたら、勝負にもならへんで(大汗) しかも、精霊神やら宝石騎士・・・十四創神アメシストにでもなられたら、はつきりいつて終いやゝゝゝ(苦笑)」

ブルース

「そこをなんとかするのが・・・」

カナリー

「つて、なんとかなるかーーーーー!!!(怒) (わぎゃーーーーー!!)」

効果音「ずががーーーーーん!!」

クリノ

「と、とにかく、ルチルクォーツからの刺客は、確実にこのヒューマイトへと向かっているということだな・・・(うむ)(」

カナリー

「あゝ・・・、そのことなんやけどゝゝ(汗)」

クリノ

「ん?(なんだ?)」

カナリー

「じつは、うちの予想とは違ってたみたいで……やな〜（大汗）」

ブルース

「……………」
瞳を閉じて腕を組む

クリノ

「……………どういうことだ？」

カナリー

「いやな、どうも刺客が来てクリノを暗殺……って感じやなさそ
うなんや〜〜」

クリノ

「ほお……………（にやり）」

3コマ

カナリー

「ルチルクオーツに寝返ったっていうこの国出身の人形使い……」

クリノ

「スペクトロライトだな（ふむ）」

カナリー

「そのスペクトロなんやけど、ルチルクオーツの冒険者と一緒に、
隣の国をそのまま北上しとる（汗）」

クリノ

「デンドリチックを北上……つまり、エンスタイト帝国を目指
しているって？」

カナリー

「まあ〜（この国の事情、詳しくは知らんけど・・・） そういうことやるな〜」（大汗）」

クリノ

「だが、国境付近でおまえが敵と戦ったという報告も受けているぞ」

カナリー

「あ〜、あいつらは、ただ単に迷ってきただけやと思うで〜〜。異世界からの侵入者が合流するまで、ドラゴンの卵を連れたレベル6の初級冒険者が一人だけやったわけやし・・・」

クリノ

「つまりはなにか？ おまえたちは来もしない刺客を理由に、ただ単にこの城の城壁をぶち壊しただけだと・・・（ちらり）」

効果音「カンカンカン、キーン、ガガガッ！」 昼夜を通して復旧工事中〜〜（笑）

カナリー

「え〜つと・・・、結果的にはそうなる みたいやな〜（あはははっ）」

ブルース

「・・・、はあ〜（やれやれ）」（なに暴露ってやがる・・・）

クリノ

「くくくつ、か〜〜っかつかつ！（大爆笑）」

カナリー

「ちよっ、なんや!?(どびっくり)」「いきなり笑い出したりして」

ブルース

「騙されて、ヤケになったのか!!(大汗)」

クリノ

「いや、なに・・・(くつくつつ) ルチルクオーツからの刺客が存在していないことなど、とくに報告を受けておる(ふっふん)」

カナリー&ブルース

「・・・え?(大汗)」

4コマ

クリノ

「以前、この国からルチルクオーツへ修行に向かった知り合いがいる。昨晚、そいつから連絡が来てな・・・、現在ルチルクオーツが置かれている状況を聞かされたわけだ。もちろん、刺客など存在しないことや おまえたちが何かを企んでいることもな・・・(にやり)」

カナリー

「ちっ・・・(くそっ) 全てお見通しやったってことか(むかつ) っ) っ) で、ウチらを・・・どうするつもりや?(ふふっ)」

クリノ

「そんなこと・・・、言わなくてもわかるであろう(ギロリ)」

ブルース

「まあ、当然・・・戦いになるだろうな（ぶんぶんぶん、ぴしっ）」
氷槍八寒地獄を振り回して構える！

クリノ

「キサマらが破壊した城壁の修繕費分・・・働けってことだー
ー！！」（怒）」（なに誤魔化そうとしてるんだ！！）

カナリー

「はいー！ー！ー！ー！い！？（どびっくり）」

ブルース

「・・・（大汗）」（破壊は得意だが、労働は苦手だぞ・・・）

クリノ

「知り合い・・・フェルドスパーはいま、エンスタイト帝国に潜入している。フェルドスパーの報告によると、エンスタイトに魔竜の存在は確認できなかった。ふざけやがって・・・（ぎりっ）」

悔しくて歯ぎしり

カナリー

「お、おい・・・（汗）」

クリノ

「これより、我がヒューマイトはエンスタイトに反旗を翻す！
おまえたちは、オレに・・・ヒューマイトに力を貸せ！！（叫び）」

カナリー

「ふふつ（微笑） ホンマなら、ウチらが異世界の一勢力に協力するのはあかんのやけどな〜。まあ、しゃくない（協力したるわ）」

クリノ

「当然だ・・・働け！」

カナリー

「あゝ、クリノはん・・・。ウチらがエンスタイト討伐で活躍できたら〜例のモノを褒美に貰えやんやるか？（どないやる？）」

クリノ

「・・・（例のモノ？）・・・、考えておこう（大汗）」

カナリー

「よっしゃー！ エンスタイト討伐・・・気合い入れるで〜（やったるで！）」

ブルース

「だが、コーネルピンの修理に数日はかかるぞ（ぼそっ）（どうするつもりだ？）」

カナリー

「あぁー、そうやったー！！（涙）」

効果音「ずががー！！！！！！！！！！ん！！！！」

コメント

カナリーが生身で戦えば・・・一瞬で決着が付くのに(笑)

第205話 モノは凄いが買った人に見れば悪徳商売！

4コマ劇場 アイオライト―564・・・2011/10/14
シリーズ3

タイトル「モノは凄いが買った人に見れば悪徳商売！」

1コマ

シデラゾート国のある町にて・・・

パイロープ

「さあさあ、よってらっしゃい見てらっしゃい　ここに取り出したる何の変哲もないこのシール（郵便切手サイズ）・・・ただのシールじゃないんだよ」

効果音「ざわざわざわ」　　たくさんの方が集まってくる

パイロープ

「ちよいと、その奥さん　食器洗い物の最中、ついっつかりお皿を割ったことってないかい？（にやり）」

通りすがりの奥さん

「あるね　あたしゃ、うっかり屋さんだから・・・お皿を割るなんてしょっちゅうだよ」　（苦笑）

パイロープ

「うんうん、人はついっつかりしてしまうことがあるんだよね」
「。そんなとき、このシールの出番なのさ」　（ぼほっ！）
「なぜか、前につきだしたシールが輝き出す

野次馬たち

「おお〜〜」

パイロップ

「割れてしまったお皿は、もう捨ててしまっしかない。しかも、片付けている最中に、ついすっかりと怪我をしてしまうことだってある・・・（いや〜困ったね〜）」

野次馬たち

「うんうん」

パイロップ

「だけど、このシールがあれば、お皿を割ってしまったって沈んだ心もハッピーになる！ おい、コンドライト・・・準備しな」

コンドライト 既にパイロップの小間使い状態（笑）

「うん、ドロソジョさま（ぼそっ）・・・えい！（がしゃん！）」

お皿を地面に叩きつける

野次馬たち

「ざわざわざわ・・・」

2コマ

パイロップ

「あゝ、名前が違うとか・・・つつこみ所満載だけど〜（後で覚えてるよ・・・） っと、その前に〜・・・（ペタリ）」 お皿の欠片にシールを貼る

説明文「シールが貼られた瞬間、お皿の欠片が生き物の様に動き出し、一所に集まって元のお皿へと復元された」

野次馬たち

「おお~~~~、す、すごい！（どびっくり）」

パイロープ

「と、このように、割れたお皿がたちどころに元の形へと戻ってしまふ・・・（ぼそっ）この素晴らしいシールが今なら1枚2000ジラートで手に入るよ~~~~ さあ、買った買った~~~~
ー！！（ばばん！）」 ハリセンで机を叩く！

野次馬1

「3枚・・・いや、5枚くれ~~~~！！」

野次馬2

「わたしは、1シート貰うわ~~~~」

効果音「わいわいがやがや、わいわいがやがや！」

大人気

グロツシユラー

「はいはい押さないでくださいね。在庫ならたくさんありますよ~~~~」

ツアボライト

「うが~~~~！！（叫び）」 叫んでいるだけ

パイロープ

「くっくっくっ~~~~ まいどあり~~~~（にやにや）」

アレキサンドライト（アレク）

「.....（大汗）」（誘導販売か？）

コンドライト

「ドロンジヨさまって、宗教でも創めたら・・・すっごく成功しそう（どきどきどき）」

3コマ

数十分後・・・

パイロープ

「いや〜、見事に完売したね〜（ニコニコ）」

グロツシユラー

「こういった商売は久しぶりですが・・・いやはや大成功です」

ツアボライト

「うがー！ー！ー！！」
札束の詰まったリュックを背負っている

コンドライト

「それにしても、このシールって本当に凄いね〜（汗）壊れたものを元に戻しちゃうんだから・・・（ぺりっ）」
お皿に貼ったシールを剥がす

効果音「ぴきっ・・・ガシャーン！」
一瞬でお皿が砕け、破片が地面へと落ちる

コンドライト

「あ・・・れ？（大汗）」（これって・・・）

アレク

「やはりな……。非常に微弱ではあるが……。そのシール、時空力が込められているな（ぼそっ）」

グロツシュラー

「ふっふっふっ、その通り」ボクチンの大発明」『壊れて30秒以内だったら元に戻せるシール』（えっへん）時空の狭間に漂っている最中、周りに漂う時空力を取り込んでシールに固定したものです」

コンドライト

「……。……。30秒以内？（どきどきどき）」

パイロープ

「おいグロツシュラー、それだけじゃないだろ（ぼそっ）」

コンドライト

「えっ、まだ何かあるの！？（どびっくり）」

4コマ

グロツシュラー

「えっつとですね、さきほどコンドライト氏が行ったように……。30秒以内に貼り付けて元に戻せても、シールを剥がせば壊れた状態になってしまつて、壊れたタイミングを基準としています（既に30秒は経過しています）から、二度目は直せないのでですよ（いいですか）」

人差し指を左右に振りながら説明中

パイロープ

「しかもこのシール、すぐに剥がれるんだよね（ペたっ、ペりっ）」

お皿の破片に貼ったり剥がしたり（笑）

グロツシユラー

「それに・・・ですね。今回用意したシールは、上限金額2000ジラートまでのお皿限定・・・（お皿以外は直せませんよ）」

パイロープ

「この国の貨幣価値がどれぐらいなのかは知らないけど、お皿1枚・・・2000ジラートもしないだろうね」

コンドライト

「うん・・・。立派な大皿とかなら違っけど、せいぜい500ジラートぐらいかな？（うん）」

グロツシユラー

「ええ、つまり・・・ですね」

アレク

「新品を買いなおした方が効率的・・・だな（汗）」

コンドライト

「ええー！ー！（汗）じ、じゃあ、使用条件が限定されていて、1枚使うごとに2〜3倍は損をするシールを売っちゃったの〜〜！！（大汗）」

パイロープ

「いやいや、誰でも時空力を使えるんだから、これってもの凄いアイテムなんだぞ（マジで）」

コンドライト

「え・・・（汗）でも、その価値をわかっていない人が買っちゃったんだから、騙されちゃった（うまく使えない）って怒るんじゃない」

ないかな〜〜（大汗）

パイロップ

「だろっね〜〜（そそくさ荷物を纏める） だからこうして・・・
商売が終わったら 速攻で逃げるんだよ！（おまえたち行くよ！）」
全速力で走り出す

グロツシユラー & ツアボライト

「「あらほらさっさ〜！（どたどたどた）」 「 ドロ・・・パイロップを追いかける

シールを買った野次馬3

「いたぞ！ 待ちやがれ〜〜！！（怒）」（こんな使えない
シール売りつけやがって！）

シールを買った野次馬4

「ま、待って〜〜、残りのシールだけでもリコールさせて〜〜
！」 1枚使ってみた

アレク

「・・・手際良いな（大汗）」（ヤツら慣れているぞ）

コンドライト

「ちゃんとした商品だけど・・・なんか詐欺っぽいね〜（どきどき
どき）」 本来、1枚20万ジラートぐらいします

効果音「ずがが〜〜〜〜〜ん！」

コメント

こつとしてドロンジヨさまたちは、時空戦艦アレックス改の修理費を荒稼ぎしました(爆)

第206話 ルール変更？

4コマ劇場 アイオライト―565・・・2011/10/20
シリーズ3

タイトル「ルール変更？」

1コマ

ルチルクオーツ王都、冒険者ギルド『ユークレース』のマスター
ームにて・・・

シトリン ユークナイトNo.1(ギルドマスター)

「・・・、うん・・・(どうしようかな)」 机
に着いて何か考え事をしている

エレメーエファイト ユークナイトNo.2

「・・・ん？(シトリン?) そんなに考え込んで、いったいどう
したんだ？」

シトリン

「いえ、もうすぐ毎年恒例のユークナイトナンバー決定戦がありま
すよね」

エファイト

「国営放送で中継されるアレだな・・・(汗) 数々のイベントを
行い、順位によってポイントを加算・・・。トータルポイントによ
つて、今年度のナンバーズ順位が決まる 国民にとってはイベン
トの祭典・・・我らにしてみれば、プライドを賭けた戦い・・・(
大汗)」 以前は単にギルド内での順位を決める勝負だけだっ
たのだが、フローラ(桜)が王位を継いでからは娯楽要素が強くな

った（笑）

シトリン

「そのナンバー決定戦ですが・・・圧倒的にメンバーが足りないですよ〜」

エフアイト

「確かに・・・（ふむ）シトリンは他のナンバーズ全員で戦ったとしても勝てないわけだから除外して〜」

シトリン

「ちよっ!?!? ボクはまた参加できないんですか!!（涙）」

エフアイト

「・・・当然だ（ギルドマスターなんだから大人しくしてろ）で、現在クエスト任務中のメンバーを除くと、ナンバー2のわたし、ナンバー3のシリカ（ジェムシリカ）・・・、ナンバー5のペタライト殿は亡くなられ、ナンバー8のサイト（ポルーサイト）、ナンバー11のシーラ（シーライト）」

シトリン

「あ、シーラさんですが、里帰りするついでにラリマーの内情調査をお願いしています。調査の見通しが立たないかぎり、ナンバー決定戦には参加できそうにありません。それは、ナンバー13のパロツト（パロツトクリソベリル）さんにも言えることですね〜（汗）」
（パロツトさんの参加は今回の目玉だったんですが・・・）

2コマ

エフアイト

「つまり、今年のナンバー決定戦には、わたし、シリカ、サイト、

そしてナンバー12のターフェ(ターフェアイト)・・・4人だけということになるわけだな(汗)」

シトリン

「そういうことです(イベント的には物足りないでしょ?) ですが、現在進行中の任務を中断させてまで、ナンバー決定戦に参加させるわけにもいきません」

エフアイト

「ユークレース内だけであれば、たとえ4人しか参加できなくても問題はなかったが・・・(汗)」

シトリン

「はい・・・(汗) すでに、国を上げての一大イベントなわけですから(大汗) そういうわけで、エフアイトさん・・・何か良いアイデアはありませんか?(どきどきどき)」

エフアイト

「いまさら中止にするわけにもいかないというのなら・・・思い切ってナンバー決定戦の参加枠を広げてみてはどうだ?」

シトリン

「と、いいいますと?」

エフアイト

「ナンバーズ以外のメンバーにもナンバー決定戦の参加権を与える・・・。そうだな、一般メンバーではなく上級メンバー・・・各部署のトップ代行までが参加できるようにすればどうだ?」

シトリン

「ほお、それはなかなか良いアイデアですね。上級メンバーの皆さんであれば・・・忘却の迷宮に入ってもなんとかなるかもしれない（うんうん）」

エフアイト

「しかし、たとえ上級メンバーとはいえナンバーズ相手では勝負にすらならない。そこで、上級メンバーが参加する場合は・・・ユークレース以外の冒険者を雇って3〜4人パーティで挑戦できることにでもすれば良いのではないか？」

シトリン

「なるほど、パーティ制ですか・・・それは面白そうですね。」

3コマ

エフアイト

「もちろん、上級メンバーが上位に入れば、ナンバーズの称号を与えることにする。」

シトリン

「参加できないナンバーズのこととも考慮しないとイケませんから・・・全ての成績優秀者をナンバーズにするわけにはいきません。ペタライトさんの抜けた1枠・・・。最上位の上級メンバーにユークレース・ナンバー13の称号を与えることにしましょう。」

エフアイト

「ナンバーズの称号が懸かっているんだ。上級メンバー同士の競い合いも激しくなりそうだ（ふふっ）」

シトリン

「たった1枠の称号を争うわけですから、エフアイトさんの提案通

り・・・上級メンバーと組むのはユークレース以外の冒険者にすべきですね。その方が後腐れないでしょう」

エフアイト

「ただし、ユークレース以外の冒険者が命がけのイベントに参加してくれるかどうか・・・(汗)」

シトリン

「他の冒険者さんにも同じ条件を提示してはどうですか？ パーティの中でトップを取れば、冒険者ギルド ユークレースのメンバーに迎え入れるという条件を出してみてもどうでしょうか？」(一応ユークレースは、ルチルクオーツに所属する冒険者憧れのギルドですから)

エフアイト

「それは、冒険者にしてみれば魅力的な提案だな・・・(にやり)」

シトリン

「決まりですね。今年はこの条件でナンバー決定戦を行うことにします。それじゃさっそく登城して詳細を報告することにしませう。あ・・・、エフアイトさんは、王都に残っているナンバーズおよび各部門のトップ代行 上級メンバーへ詳細を伝えていただけませんか？」

エフアイト

「わたしが提案したことだ、仕方がない・・・(やれやれ) では、各部署を廻り上級メンバーへ伝えるとしよう(はあ)」

シトリン

「お願いしますね (にっこり)」

4コマ

調査部の事務所にて・・・

チャロアイト

「・・・はい？（汗）」（いまなんと？）

エフアイト

「調査部トップ代行チャロアイト・・・お前には数ヶ月後に行われるユークレースナンバー決定戦への参加権が与えられた」

チャロアイト

「ちよーりーっ！ ま、待つてくださいエレメーエフアイトさま！？ わたしはナンバーズ・・・ユークナイトではありませんよ！！（大汗）」

エフアイト

「今年はナンバー決定戦に参加できるナンバーズが少ないため、急遽、ユークレースの上級メンバーに参加権が与えられた」

チャロアイト

「つて、わたしは上級メンバーでもありません！！（涙）」

エフアイト

「文句があるなら、お前をトップ代行に選んだパロットに言え！（ギロリ）」 パロットのこと嫌っています

チャロアイト

「そ、そんな~~~~（しくしくしく）」

エフアイト

「知つての通り、決定戦の場所はエリアDにある忘却の迷宮……。たしかにおまえは上級メンバーではない……。が、これまで忘却の迷宮を散々調査してきたのだから、他の上級メンバーより有利ではないのか？（ふふっ）」

チャロアイト

「あゝ、古の巨大魔蟲を相手に、有利も何も無いと思いますが……（大汗）」（ああゝ、どうしてこんなことに……）

エフアイト

「それと、上級メンバー参加者には、ユーク雷斯以外の冒険者と最大人数4名までのパーティを組めることになっている」

チャロアイト

「パーティ……ですか？（汗）」

エフアイト

「上級メンバー内でトップだった者にはナンバー13の称号が与えられ、パーティを組んだメンバーはそのままユーク雷斯に迎え入れることになる。このことは既に冒険者管理組合から各冒険者に伝えられている。もちろん上級メンバー参加者の情報も公開されることになるから、パーティメンバーを決めるしばらくの間は己を売り込む冒険者が増えると思うが……。まあゝがんばれ」

チャロアイト

「そんな他人事……！！（うにゃ……！！）」

効果音「ずがが……！！ん……！！」

コメント

お久しぶりですねチャロアイト

第207話 チャロアイトの受難

4コマ劇場 アイオライト―566・・・2011/10/25
シリーズ3

タイトル「チャロアイトの受難」

1コマ

ユークレース、調査部の事務所にて・・・

アンバー

「おい、チャロアイト・・・（ギロリ）おまえ、上級メンバーとして今年のナンバー決定戦に出場するって・・・ほんとうなのか！（バン！）」
机を勢いよく叩く

効果音「ざわざわざわ・・・」
他のメンバーが騒ぎ出す（噂では聞いていた？）

チャロアイト

「あゝ、うん・・・（汗）わたしもさっき聞いたばかりなんだけど・・・トップ代行として強制的に参加させられるみたいで・・・」（苦笑）

アンバー

「・・・・・・・・・・」

チャロアイト

「も、もちろん、場違いなのはわかっているのよ（あせあせ）アンバーやみんなの方がユークレース・・・調査部として古株なわけだし・・・。わたしなんかに参加したって、すぐにリタイアしち

やうだろつから、他の誰かが出てくれたほうが良いかなぐぐなん
て……」

アンバー

「そんなこといつてるんじゃないやねえ！！（うがーーーー！）」

チャロアイト

「ひゃっ！？（涙） あ、アンバー……？（どきどきどき）」

アンバー

「さすがにナンバーズとは勝負にならないだろうな……（うぐん）
問題は、他の上級メンバーをいかにして出し抜くか……（ぶつ
ぶつぶつ）」

チャロアイト

「え〜つと……、なんのこと？（大汗）」

アンバー

「どうやっておまえが上級メンバーの中でトップになるかって話だ
ろーーーー！！！」

チャロアイト

「ちよつ、なんでそんな話になってるのよーーーー！！？（わにゃ
ーーーー！！）」

2コマ

アンバー

「いいか？ もしチャロアイトが上級メンバーの中でトップを取れ
ば、調査部の中からナンバーズ……ユークナイトが誕生すること
になる」

チャロアイト

「ペタライトさま・・・それにパロットさんもナンバーズでしょ？
(汗)」

アンバー

「ペタライトのジーさんはともかく、ナンバーズだからといって突然トップに就いたヤツなんか調査部のメンバーじゃねえ！！(怒)」
(しかも、代行にまかせつきりで職務放棄してるし！！)

チャロアイト

「あゝ、噂では・・・シトリンさん(ギルドマスター)の命令で極秘任務に就いているとかくはないとか(苦笑)」
知っているけど誤魔化しています

アンバー

「なんにしても！オレたち調査部は、チャロアイトをナンバーズにするため・・・全力でサポートする！！みんな、いいよな」

調査員たち

「おお~~~~！(当然だぜ)」

チャロアイト

「わ、わたしはべつにナンバーズになりたいわけじゃ！！(そんな簡単になれるわけでもないし！)」

アンバー

「まあまあ、後のことはオレたちに任せておいて、おまえはユークレース以外の冒険者を最大で3人見つけてこい(さあ行った行つた)」
チャロアイトの背中を押して事務所から追い出そ

うとする

チャロアイト

「ちよちよっ!?(汗) み、見つけて来いって言われても・・・
他の冒険者と交流があるわけじゃないし(大汗)」 ユーク
レース一筋です

アンバー

「うん・・・、同期(合格者)で仲の良い冒険者とかいないのか
? (汗)」

チャロアイト

「ユークレースのメンバーに選ばれた途端、連絡取れなくなったわ
よ!(しくしくしく)」 ユークレースは冒険者憧れのギルド
です

アンバー

「そ、それは・・・、お気の毒に(どきどきどき)」(妬まれた
んだらうな)

効果音「ずががーーーーーん!!!」

3コマ

数分後、中央広場にて・・・

チャロアイト 事務所から追い出された

「うう・・・、ナンバー決定戦か(汗) (内緒だけど・・・)
もうすぐラリマーが攻めてくるかもしれないというのに、こんなこ
として居る場合じゃないんだけどな(とぼとぼ)」 当
てもなく歩いている

突然の登場

?????

「冒険者ギルド、ユークレーズのチャロアイト殿だな!!」

チャロアイト

「え、あっ、はい(きよろ)」 慌てて振り返る

3人組み冒険者の中の厳つい男

「冒険者となつて早35年(ぼそっ) 先の戦争でもオレたちは前線に立って戦つた……。だから、必ず活躍してみせる!!(うがーーーーー!)」

チャロアイト

「え〜っと、あの〜〜〜……。 (大汗)」 (いったい何のお話で……。?)

優男風の冒険者

「ちよつと待ちな〜……。 (ふふっ) そんな無駄に年数だけを重ねた冒険者と組んだっていいことない(にやり) それならわたしと組むべきだとおもわれるが……。 (どうだ?)」

チャロアイト

「ああ〜 (ぼむっ) 組むって、ナンバー決定戦の参加メンバー! (なるほど)」

冒険者たち

「「当たり前だーーーーー!!! (怒)」」

チャロアイト

「ひゃーーーーーっ！！」(涙)

4コマ

優男風の冒険者

「レベルは低いけど戦いには自信がある！」

敵つい冒険者

「ちよつと待て！ 声をかけたのはオレたちの方が早い！！」

他の冒険者

「何を言う！ 活躍して、ユークレースに入るのはオレだー！
ー！！」

効果音「わいわいがやがや」
もはや、收拾がつかないほどの
大騒ぎ！

チャロアイト

「ああ〜〜(涙) エレメーエファイトさまが言っていた『パー
ティメンバーを決めるしばらくの間は己を売り込む冒険者が増える』
って、このことなのね〜〜(しくしくしく)」

冒険者たち

「さあ、誰を選ぶ！ さあ！！(ぐわっ)」「」
チャロ
アイトに詰め寄る

チャロアイト

「え〜つと、ご、ごめんなさい！(汗) じつはパーティメンバー
になってもらう人・・・もう決めているんです！！(ペコリ)」

敵つい冒険者

「・・・なに？（大汗）　どんなヤツだ！？（オレたちより弱いヤツなら納得いかねえ！！）」

チャロアイト

「あああ、あなたたちに答える必要はありません！（あせあせ）」

優男風の冒険者

「ふっ・・・、わたしたちから逃れるための嘘でしょう。視線が泳いでいます（にやり）」

チャロアイト

「うぐっ・・・（汗）　そ、そんなことありません！　え〜っつと、え〜っつと、一緒にナンバー決定戦に参加してもらおう冒険者は・・・この人たちです！！（がばっ！）」　　近くにいた冒険者に抱きつく

アクロアイト

偶然、近くを通りかかったドラゴンファンゲのリーダーさん　（冒険者としてはかなり有名です）

「・・・って、キミ誰！？（びっくり）」

チャロアイト

「あははっ、嫌だな〜〜　（汗）　さっき、協力してくれるって言ったじゃないですか〜〜（お願いだから話を合わせて！）」

アクロ

「ちよっ、なんだか知らないけど、厄介ごとに巻き込んでくれるな
—————！！（大汗）」（わにゃ—————！！）」

コメント

いやいや、うまくすれば大出世ですよ〜
（憧れのユークレ
ス入り）

第208話 作者的には動かしやすいんです

4コマ劇場 アイオライト―567・・・2011/10/29
シリーズ3

タイトル「作者的には動かしやすいんです」

1コマ

デンドリチック国ラリマー軍の駐屯地にて・・・

リアン（3歳児姿） ラスポスの一人

「なるほど・・・。最近、他の作品から個性の強いキャラクターばかり登場していて、メインヒロイン（女主人公）であるはずのお姉ちゃんの扱いがぞんざいになっているんだね（お姉ちゃん、かわいそ〜）」

スファレライト え、メインヒロインなのか？（笑）

「そうなのよ〜！ 退魔巫女（美咲）や巨大ロボット（レイチエル）異世界からの来訪者（薫）・・・。伝説の勇者の生まれ変わり（フオスフィ）かどうかわからないけど、ちょっとしたゲスト出演の予定だったのに、いつの間にかレギュラー顔で活躍しているって・・・酷いと思わない〜！？（怒）」（へっぽこマスター） 青山七瀬を見習え〜！！（七瀬は1回しか登場していません）

リアン

「いや〜、その理屈からいうと、わたしもそうだからなんともいえない・・・かな〜（あははっ）」

美咲

「それに、フオスフィさんはアリスさんの生まれ変わりという設定

だけで、他作品の登場人物というわけではありませんよ（汗）」

スファレ

「だったら、こころ人格入れ替わるなーーーーー！！（バランスが崩れるだろがーーーー！）」

突然の登場

ラルド もう一人のラスボス

「それについては・・・大丈夫だ！（ふむ）」

リアン

「ら、ラル！？（びっくり）」

スファレ

「お師匠さま！？（いつのまに！）」

2コマ

リアン

「えっ、ラルがスファレお姉ちゃんの師匠・・・って、そんなことより！（汗） 大丈夫って・・・どういうこと？（大汗）」

ラルド

「魂の奥底に眠っていたアリスの人格が現われたのは、ブルースのヤツが要らぬちよっかいを出したため・・・。この時代、この聖界では・・・ヤツらの力はある意味非常識だからな～～」 あんたが一番非常識ですよ（苦笑）

リアン

「ん・・・？ つまり、個性の強い他作品のキャラクターが現れた

から、アリスお姉ちゃんの人格が目覚めてしまったってこと？」

ラルド

「うむ……。すなわち、おまえさんたちを含めて、過去からの・
・他聖界から転移してきた者がいなくなれば、アリスの人格が表に
出てくることは無いはずだ」

スファレ

「なるほど……。このドタバタ劇に決着が付けば、メインヒロイ
ンとしての立場が戻ってくるわけね」

リアン

「良かったね、スファレお姉ちゃん（にこ〜っ）」

スファレ

「うん」

ラルド

「主人公よりサブキャラの方に人気が出ることはよくあること・・・
（ぼそっ）」

美咲

「ら、ラルドさま（汗）　しいーっ！　（大汗）」（話が
ややこしくなりますから！）　人差し指を口元にそえる

3コマ

ヒューマイトの国境付近にて・・・

アリス（フォスフォライト）

「くちゅんー！」　可愛くクシャミする

陸

「ん、どうしたんだフォス・・・アリス（ややこしいな）カゼか？」

アリス（フォスファイ）

「うん・・・（汗）例のごとく、どこかでぞんざいな扱いをされてる気がする（ぼそっ）」

サファイ

「いやいや、どこかでアリスに憧れている男の子が噂してるんだよ（そうに違いない!）」

アリス（フォスファイ）

「そういうことだったら、あたしの人格が表に出てきていることを知ってる人って少ないから、この身体・・・つまり、このフォスファイライトを想っている男の子ってことになるんじゃないかな（やるなフォスファイ）」

菜月

「そうですね。短いお付き合いですが・・・フォスファイさんの人となりは理解できました。フォスファイさんに憧れている男の子がいなくても、なんら不思議ではありません」

陸

「それに、フォスファイってスタイルも良いしな（あははっ）（気になっても仕方ないさ）」

サファイ

「うわあ、リクのエッチ、スケベ（むっ）」

菜月

「り、陸くん……(涙)」(お姉ちゃんは悲しいです)

陸

「そ、そんなつもりで言ったわけじゃー!!(大汗)」

アリス(フォスファイ)

「へえ、陸ってフォスファイみたいな娘が好みなんだ……(にやり) そっかそっか、陸も男の子だもんね……(ぎゅっ)」

陸の背後から首元に抱きつく

陸

「ちょー……!!? (どき……!!)」

サファイ

「わっ、わあ…… (きゃ) 」(アリスってば大胆……)

菜月

「りーー!!(大汗) ちょっ……そんなことより!!(強引に話題を変えようとする) あの子のことはどうするんですか!?!(びしっ)」(近くの木陰を指差す)

アリス(フォスファイ)

「ん……? (ちらっ)」

スフェーン(仔犬型)

『しくしく、しくしくしく(涙)』

卵から孵ってしまった光

竜の幼体

陸

「いや、わけわかんなくないぞ〜〜〜（汗）」（ある意味、有名な話だ・・・）

スフェーン（仔犬型）

『・・・へ？（大汗）』

菜月

「さ、さすがは任天堂の化身・・・（どきどきどき）」

サファイ

「あゝ、でも任天堂って、本体価格を大幅値下げしたのに3DSがあまり売れなかったんじゃ・・・なかったっけ？（汗）」

アリス

「ちっ（むかつ） そんなのマリオカートの3DS版が発売されれば、一気に挽回するわーーーー！！（わぎやーーーー！！）」

任天堂宣伝部長（自称）

陸

「な、なんだよそれ！？（大汗）」

スフェーン（仔犬型）

『うう・・・（涙） だ、誰かわたしを哀れんでーーーー！！（しくしくしく）』（任天堂な話題なんて、今はどうでもいいですよ〜〜〜）

効果音「ずががーーーーーーん！！！！」

コメント

ちなみにリアン（気分次第で年齢を変えている）は、ラルドの育ての親です
意味不明！

第209話 国境越えるための一苦労？

4コマ劇場 アイオライト―568・・・2011/11/04
シリーズ3

タイトル「国境越えるための一苦労？」

1コマ

デンドリチック国、北部の国境近くにて・・・

セレンディバイト デンドリチック国の騎士

「このまま北へ進むと、次の国、ビスマス国に入ることになるけど・・・どうするの？（ぼそっ）」 物陰に隠れている

パロットクリソベリル ヒーラーでレベル1（3倍速で行動中）

「・・・セレン。ラリマーって国は、たしか47か48の小国から成り立っているんだよね？」

セレン

「47国・・・。その47の小国が纏ってラリマー国と呼ばれているわね」

パロット

「その47国つてのがよくわからないんだよね。結局は、みんなラリマーって国なんだろ？」

セレン

「確かにそうなんだけど・・・（苦笑）昔から47国それぞれがラリマーの代表国を主張して、内戦を繰り返してきた歴史があるの」

パロット

「なんだそれ・・・（大汗）」（まさしく、どうでもいい戦いだな
〜）

スペクトロライト ヒューマイトの人形使い

「まあ、全ての国と戦うわけにもいかないから、基本は隣接している数国と戦い・・・勝国はそれなりの領土や財を得て、軍事力などを高めながら再びの戦に備える。ただし、各国の軍事力はほとんど拮抗しているわけだから勝敗に圧倒的な差はなく、下手をするとお互いの国力が消耗するだけになるわけだ・・・（ふふっ）」

セレン

「だから、デンドリチックのように外国と隣接しているような国は内戦で消耗させている場合じゃないの。下手をすると、余所の国・・・ルチルクオーツからの進軍を防ぐことができなくなる（大汗）」

パロット

「確かに数年前までのルチルクオーツは、隣国へ侵略を繰り返していたからな〜（汗） だが、今の国王・・・フローライト・S（さくら）・ルチルクオーツ十三世が王座を継いでからは、他国への侵略行為など絶対にありえないぞ」

2コマ

セレン

「・・・・・・・・。パロット、あなたの言葉を疑うわけではないけど どうしてそう言い切れるの？ まるで、ルチルクオーツ王の人格にすぎなく詳しいような・・・（ぼそっ）」

スペクトロ

「あゝ、セレン（でいいよな？） ルチルクオーツの現国王フロー
ライトなんだが 今はこのパロットとパーティを組んでいるんだ
（大汗）」（信じられないことに・・・）

セレン

「……………えええええー！？」（どびっくり）」（なに、その状況！！）

効果音「ずががー！ー！ーん！！」

数分後……

パロット 説明中

「まあ、そんな感じで……フローラは前国王と真逆の性格だ。そ
んなフローラが国王をやっているんだから、今のルチルクオーツが
他国を侵略しようとするのはありえない」

セレン

「……スペクトロ（ぼそっ） フローライト暗殺に出向いたあな
たとしての意見は……？（ちらり）」 スペクトロをチラ見

スペクトロ

「自分を殺そうとしたヤツを、情報収集のためとはいえ……簡単
に信用して見逃すお人好しだ。よほど計算高い策略家でない限り、
自ら戦争を起こすようなことはしないだろうよ（ふふっ）」

セレン

「うん……、エンスタイト帝国から聞いた情報とは随分違い
があるみたいね（苦笑） まあ、エンスタイトからの情報なん
で、わたしは最初から信用していなかったんだけど……（ぼそっ）」

「

3コマ

シーライト（暗殺人形）

『うけけけっ、あちきはフローラのヤツ、好きだじえ〜』
殺そうとしていました

スペクトロ

「ああ、一国の代表とは思えないほど親しみを感じる。うちのクリノ（クリノヒューマイト）とは・・・えらい違いだ（あははっ）」

クリノとは幼馴染み（えっ!?!）

セレン

「デンドリチックの西隣、ヒューマイト国のクリノヒューマイト王は・・・相変わらず野心家ですからね〜（苦笑）」

ダイ

「・・・ん？ 隣国同士なんだから、仲が悪いんじゃないのか？」
さっきの話からすると・・・（）」

スペクトロ

「あ〜・・・？（汗）」

セレン

「え〜っど・・・（大汗）」（どちらさま?）

パロット

「だ、ダイ・・・（汗） おまえ、いたのか?（どきどきどき）」

ダイ

「最初っからいるわーーーー！！（激怒）」（つぎゃーーーー！！）

効果音「ばきゅーーーーーん！！」

グランゾル（ぬいぐるみ）

『はあ……（やれやれ）今のパーティはダブル主人公状態のはずなのに、二人ともパツとしないな……（大汗）』

パロット&ダイ

「「ほっとけーーーーー！！（わぎゃーーーーー！！）」

4コマ

スペクトロ

「あゝこほん（汗）ボケつつこみに気が済んだようなら話を進めるぞ……（ぼそっ）」

パロット

「た……頼む（どきどきどき）」

スペクトロ

「さっきも話したが 軍事力が似通った隣国同士が戦っても、共に国力が消耗するだけ……」

セレン

「特にデンドリチック国は、古くからルチルクオーツ王国の脅威に曝されており、国内の内戦に力を割いている余裕はなかったのです」

スペクトロ

「デンドリチックが墮とされたら、次はヒューマイトが攻められる

ことになるからな。だから、ヒューマイトとデンドリチックは・・・
お互い攻め込まないという暗黙の了解が存在している」

セレン

「そのことは、ビスマス国との間にも言えること・・・（とことん）」

「突然、物陰から出る

ダイ

「ちよっ、おい！（大汗）」（見つかるぞ！）

ビスマス国境警備兵

「ん、何者だ！！（ちゃきっ）」 槍を構える

セレン

「わたしは、デンドリチック国の騎士・・・セレンディバイト。これよりエンスタイト帝国にケンカを吹っかけようと北上しております。つきましては、ここを通していただけませんか？」

ビスマス国境警備兵

「こ、これはセレンディバイトさま！ どうぞお通りください！（ぴっっ）」 姿勢を正して敬礼する

セレン

「ありがとうございます（こっこ）」

パロット

「って、それでいいのよ……!?（どびっくん）」

効果音「ずがが………ん………」

第210話 体良く追い出し？

4コマ劇場 アイオライト―569・・・2011/11/09
シリーズ3

タイトル「体良く追い出し？」

1コマ

ビスマス国、デンドリチックと隣接している国境付近にて・・・

パロットクリソベリル

「さて、セレンのおかげで国境は越えられたわけだが・・・これからどうする？」

ダイ

「どうする・・・って、戦争を仕掛けようとしている、なんちゃら帝国を目指すんだろ？」（幾つかの国を通して・・・）

スペクトロライト

「エンスタイト帝国な・・・（苦笑）」（なんちゃら・・・って、なんちゃらプラネットかよ？）

セレンデイバイト

「もちろん最終目的地はエンスタイト帝国です。でも、このままビスマス国を素通りするわけにもいきません。まずは、ご挨拶も兼ねて、ビスマス城へ向わないと・・・」

パロット

「いや・・・、あまり表立った行動は控えた方がいいだろう（ぼそっ）」

セレン

「……え？（どうして？）」

スペクトロ

「その意見には賛成だ。エンスタイト帝国へ近づくにつれて、どこに監視の目が光っているかわからない……（汗）我らと共に帝国へ反旗を翻すならともかく、下手をするとこのビスマス国の立場が悪くなる（大汗）」

シーライト（暗殺人形）

『うけけけっ 御主人、殺しとか全然平気なくせに、ときどき良人ぶるから困るじょ〜』 『みんな騙されるな。御主人……悪人だじえ（）』

スペクトロ

「この、シーライト！（激怒） やかましい〜わーーーーー！！！！（うがーーーーー！！！！）」

シーライト（暗殺人形）

『うぎゃ〜 御主人に殺されちまうじえ〜！！！！（けたけたけた）』

パロット

「……いいコンビだな（ぼそっ）」

ダイ

「そ、そっか〜？（どきどきどき）」

セレン

「でも、ビスマス国の立場が悪くなるか〜」（汗）言われてみればそうかもね（う〜〜ん）」（そこまで考えてなかったわ〜）

パロット

「ま、建て前はそんなところだ」

セレン

「・・・建て前!?（びっくり）」

パロット

「あ〜・・・、本音で語れば　これ以上新キャラが登場すると、誰が誰だかわからない状態になってしまっからな〜」

セレン

「ええ〜〜!!（大汗）」（なにその理由〜!?!）

ダイ

「うんうん（わかるわかる）　キャラが増えれば、それだけ出番が少なくなるわけだしな〜〜主人公（笑）」

パロット

「そ、そんなんじゃないええええー!!（大汗）」

セレン

「パロット・・・（汗）　せっかく感心していたのに・・・（しくしくしく）」

パロット

「ちがっ!?!（汗）」

効果音「ずががーーーーーん!!」

3コマ

数分後・・・

セレン

「では、ビスマス城へは向わず、このまま情報を集めつつ次の国へ向かう・・・ということでしょうか？（それでいいのかな？）」

パロット

「・・・（うん）さすがに事情の説明も無し・・・というのもまずいのかな〜？（どうしよう）」

セレン

「って、結局はどっちにするのよ!!」（ビスマス城へ行くの？ 行かないの!？）

パロット

「スペクトロ・・・」

スペクトロ

「なんだ？（汗）」

パロット

「おまえ、暗殺者なんだから隠密行動とか得意だよな？ 目立たないように、ちょっとビスマス城まで行ってきてくれないか？（挨拶と報告で・・・）」

スペクトロ

「なぜわたしがそんなことをしなければならんだ？（ぶん！）」
（嫌だね〜）

シーライト（暗殺人形）

『うけけけっ、御主人にお願いごとなんて無駄だじえ〜 御主人は、祖国ヒューマイトの国益になることしか動かない……。まあ、正確には、密かにお慕いしている幼馴染みで国王のクリノヒューマイトの役に立つことしか……。』（ぼそっ）』

スペクトロ

「わああああっ、わわああああ！！（大汗）」

パロツト

「……。密かに（汗）」

セレン

「お慕いしている……。？」

スペクトロ

「な、なんだよ！ お前らには関係ないだろ！？（どきどきどき）」
顔が真っ赤

シーライト（暗殺人形）

『うけけけっ、御主人、照れ屋さんだじえ〜』

スペクトロ

「お前は黙ってる！！（どがしゃっ！）」 頭を鷲掴みにして
地面へ叩きつける

シーライト（暗殺人形）

『ぎゃふっ！？（涙）』

カエルが潰されたような声

4コマ

パロット

「……………（じい〜〜っ）」

ジト目でスペクトロを

見る

セレン

「……………（じい〜〜っ）」

同じくスペクトロを見る

スペクトロ

「うぐっ……………（視線が突き刺さる）わ、わかった……………わかつ

たよ！（汗）目立たないようにビスマス城へ行けばいいんだろ！

？（大汗）」

パロット

「ああ、よろしく頼む！」

スペクトロ

「ったく、これ以上あることないこと言われたら溜まらないって〜

の！（ちい！）」

シーライト（暗殺人形）

『御主人、クリノとの関係をつっこまれたくないだけだじえ〜（

うけけっ）』

スペクトロ

「殺されたいか、シー……ライト……！（わぎゃ……！！）」

」

シーライト（暗殺人形）

『うけけけっ、うけけけけっ!?（大汗）』（御主人、剣なんか抜いて危ないだろ!!）

ダイ

「……ん（うん） あ、なるほど パロット、考えたな〜
〜（ナイスだぜ）」

パロット

「……ん？（なにがだ？）」

ダイ

「いや、うまいこと話の流れを誘導して、体良くスペクトロをパーティから追い出したな〜って（笑）」

パロット

「……はあ？（汗）」

ダイ

「重要な役回りを与え、パーティから離れるよう仕向ける……。メンバーの数が減ったら 自分の出番が増えるもんな〜主人公（大爆笑）」

グランゾル（ぬいぐるみ）

『だ、ダイよ！（汗） なにもパロットの心内をバラさなくても！
！（大汗）』

ダイ

「っと、やべ……（大汗）」（失敗失敗）

パロット

「ちよ、ちよつと待てーーーーー！ べつにオレはそんなつもりじや……（大汗）」

スペクトロ

「わ、わたし……体良く追い出されるの！？（涙）」

シーライト（暗殺人形）

『うけけつ、祖国であるヒューマイト入りするならともかく、寄り道しないで北上しているんだから、御主人の利用価値……ほとんどないじえ〜〜』

スペクトロ

「だから……捨てられたのーーーーー！？（しくしくしく）」

パロット

「す、捨てられたとか……おまえはオレのなんなんだーーーーー
ー！！（わぎゃーーーーー！！）」

効果音「ばきゅ〜〜〜ん！！！」

コメント

しばらくスペクトロ（シーライト含む）は別行動（出番無し！？）

第211話 仲間の勧誘はなかなか難しく

4コマ劇場 アイオライト―570・・・2011/11/14
シリーズ3

タイトル「仲間の勧誘はなかなか難しく」

1コマ

ドラゴンファングのアジトにて・・・

ハックマナイト

「うん・・・(汗) たしか、冒険者管理組合の発表によると・・・今年ナンバー決定戦には、ユークナイトの他に、ユークレースの上級メンバーが参加するってことだったよな～～(じろじろ)」

アメトリン

「うん、そう聞いてる～」

ハック

「・・・こんな弱そうなヤツがユークレースの上級メンバーなのか～～～? (どきどきどき)」

アクロアイト

「ハック!(汗) 失礼だぞ!! (大汗)」

チャロアイト

「あゝ、あはははっ(苦笑) 立場的には、上級メンバーではなく・・・一般メンバーで調査部代表代行です(涙)」

ハック

「ちよつ！ 部署代表の代行だなんて・・・そっちの方が信じられねえ〜（大汗） え〜っと、チャロアイト・・・だったよな〜？ おまえさん、冒険者レベルはいくつなんだ？」

チャロアイト

「き・・・（汗） 聞かないで！（しくしくしく）」

ハック

「そうだよな〜（汗） オレより弱そうだし・・・（大汗）」
ハックは猫戦士のレベル28だニヤ〜

アクロ

「おい！！（大汗）」

2コマ

アメトリン

「で、一緒に決定戦へ参加してくれる冒険者を捜しに出たのは良かったけど・・・」

アクロ

「名を売ってユークレースへ入りたい冒険者たちに囲まれて・・・」

ハック

「困っていたところに、うちのアクロが通りかかったわけだな・・・」

チャロアイト

「はい、そんなところです・・・（お恥ずかしい）」

ハック

「帰れ！！（怒）」

チャロアイト

「えええええー！！！！（問答無用ですかー！！！！？）（？）
まだお願いもしていないのに）」

ハツク

「オレは、以前にユークレースの入団を断われた！ 金輪際、ユークレースに関わらないと心に決めてるんだ！！」

アメトリン

「冒険者に成り立てのレベル1で入れてくれって門を叩いても、断られるに決まってるって・・・（あははっ）」

ハツク

「なにをー！！！！（むきー！！！！）」

3コマ

アクロ

「・・・。アメトリンは・・・どう思っている？（ちらり）」
アメトリンをチラ見

アメトリン

「わたし？ わたしもパルス」

アクロ

「・・・どうしてだ？」

アメトリン

「たしかに、他の冒険者が出場枠を取り合っているけどさ、ナン

バー決定戦なんて参加するだけ疲れるだけでしょ (笑) 」

チャロアイト

「疲れるどころか、生きて帰ってこれる可能性も低いです…… (涙) 」 (場所が場所だけに……)

アメトリン

「それに、べつにユークレースに入りたいわけじゃないしさ」

ハツク

「ルチルクオーツで一番規模のデカイ……冒険者憧れのギルドだぞ」 (笑) 「 (入ったらそれだけで自慢できる) 」

アメトリン

「うーん、規模のデカイ組織って……上からの命令で動くだけで自由に冒険してるって気分じゃなさそうじゃない？ だったら、いまのパーティー……ドラゴンファンクでいいかなって (にこって) 」 (今のパーティー楽しいし)

チャロアイト

「うっ…… (汗) 」 (否定できない)

ハツク

「まあ、そういうことだ。オレたちドラゴンファンクは協力できない……。なあ、アクロ」

アクロ

「…… (うーん) 」

アメトリン

「・・・アクロ？（どうしたの？）」

4コマ

アクロ

「オレは・・・チャロアイトさえ良ければ、ナンバー決定戦に参加してみようと思っている（ぼそっ）」

ハツク

「なにー！ー！ー！ー！ー！ー！（どびっくらん）」

アメトリン

「えっ・・・アクロ（汗） ドラゴンファング・・・抜ける気なの？（大汗）」（たしか、ドラゴンファングってアクロが作ったパーティだよな？）

アクロ

「そうじゃない・・・（汗） もし、ユークレースのメンバーになる権利を得たとしても、辞退するつもりだ」

アメトリン

「だったら・・・なぜ？（汗）」（そんな苦勞をわざわざと・・・）

アクロ

「冒険者となつてこの2年間、己の実力を試してみたい・・・（ぼそっ）」

ハツク

「出たよ、優等生的な考え・・・（やれやれ） そんなことで評価されなくても、たった2年・・・正確には1年と数カ月でレベル3まで成長した冒険者なんて、そうはいないと思うけどな」（汗）」

アクロは昨年度の新規冒険者

チャロアイト

「1年ちよいで・・・レベル32!?!? (どびっくり) す、凄い成長スピードですね!! (どきどきどき)」

アクロ

「・・・運が良かっただけさ(ぼそっ)」
ちなみに、同期冒険者のエルバイトはレベル4

チャロアイト

「あのく、もしアクロさんさえ良ければ、一緒にナンバー決定戦に出てくださいませんか?(汗)」(レベル32の方がいらっしやれば心強いです!)

アクロ

「どれだけ役に立てるかわからないけど・・・こちらこそヨロシク!」

アメトリン

「あ、アクロ・・・(汗)」

ハツク

「ちっ、勝手にしるーーーー!!!(うぎゃーーーー!!)」

効果音「ずががーーーーーん!..!」

コメント

ドラゴンファングの仮メンバーになった二人 (ダイとレイチエ

ル)は、現在、ラリマーを冒険中です

第212話 王都に出没する謎の影

4コマ劇場 アイオライト―571・・・2011/11/15
シリーズ3

タイトル「王都に出没する謎の影」

1コマ

冒険者ギルド、ユークレースのマスタールームにて・・・

シトリン 見た目10歳ぐらいの少年姿をしたギルドマスター
ー (ナンバー1)

「あ、サイトさん。お待ちしておりました」 (にっこり) 「
職業、団体職員！？ (爆)

ポルーサイト ナンバー8
「急に呼び出したりなんかして、いったいどうしたんだ？ あ・・・
(汗) 護衛クエストなら、他を当たってくれよ (大汗)」 (あんな
な退屈な依頼は二度とゴメンだ！)

シトリン
「ナンバー決定戦も控えていますから、ナンバーズおよび上級メン
バーへのクエスト依頼は全て断わっています」

サイト
「だったら、何の用だ？ ま、まさかナンバー決定戦の・・・ラス
ボス役をやれとか言うんじゃないだろうな！？ (大汗)」 (嫌だぞ、
あんなやられ役！！)

シトリン

「ラスボス役は、既に依頼済みですから安心してください」
ラルドに良い人材を紹介してくれるように（笑）

サイト

「ん〜、クエスト依頼でもない。イベントのラスボス役でもない・
・。じゃあ、何の用なんだ？（ときどきどき）」

シトリン

「サイトさんは、最近になって王都に出没する・・・と噂されている幽霊のことをご存知ですか？（ぼそっ）」

サイト

「・・・なんだそれ？」（初耳だぞ）

2コマ

シトリン

「あ〜、本当に最近のことですから、知らなくても当然ですね・
・（汗）じつは、王都に夜な夜な女性の霊が現れ、目撃した者に取
り憑こうと襲いかかってくるそうなんです（がたがたぶるぶる）」
（恐いですよね〜）

サイト

「いきなりオカルト的な展開だな・・・（汗）悪霊系の魔物が王
都へ潜り込んだってことか？（警備兵は何をやってたんだ？）」

シトリン

「いえ、どうもそういうわけじゃなさそうなんです（汗）女性の
霊は、見た目はもの凄く美人さんで、酔っ払いさんがお近づきにな
るうかな〜と声をかけてみると、真っ赤な目を見開いて襲いかか
ってくるそうなんです（ときどきどき）」

サイト

「襲われた・・・酔っ払いはどうなるんだ？（汗）」

シトリン

「はい。女性の霊に触れると、体内に残るアルコールが分解されて、一気に酔いが醒めるんだということです・・・（汗）」

サイト

「・・・（汗） 良いことなんじゃないのか？（大汗）
（酔っ払いを正気に戻してくれるんだろ？）

シトリン

「せっかくほろ酔い気分だったのに、台無しにされて怒るらしいんですよ。飲んだ分の金返せーーーーって（ぼそっ）」

サイト

「な、なんだかな～・・・（大汗）」（頭痛え～）

効果音「ずががーーーーーん！！！」

3コマ

シトリン

「そこでサイトさんには、深夜の王都警備に当たってもらい、女性の霊を捕らえてもらおうと考えています」

サイト

「ちよつと待て。なんでオレが・・・（汗）」

シトリン

「じつは、王宮よりクエスト依頼が出ており、数日後には冒険者管理組合による承認が降りて・・・冒険者へ公開される手はずになっているようなんです」

サイト

「だったら、なにもオレたちが動く必要はねえ。どうせ、クエストレベルも大したことないんだろ？」（そんなことより、ナンバー決定戦に向けて修行しないと・・・）

シトリン

「女性の霊の装備に、ユークレースのエンブレムが入っていてもですか？（ぼそっ）」

サイト

「なにっ！ー！ー！ その女性の霊って・・・ユークレースのメンバーだったのか！ー！？（大汗）」（綺麗なお姉さんを想像してたのに、冒険者の幽霊なのかよ？）

シトリン

「わかりません。ですが・・・その可能性があるのであれば、クエストが公開されてしまう前に事件を解決してほしいのです」

サイト

「なるほどね。下手するとユークレースの信用問題になっちゃう・・・（大汗）」

シトリン

「そういうことです。事が事ですので、他のメンバーを動かすわけにもいきません。サイトさんお一人で・・・極秘裏に解決していただきたいのです」

サイト

「・・・嫌だと言ったら？」

シトリン

「ナンバーズの権利を剥奪・・・(ぼそっ)」

サイト

「おおっう・・・(大汗)」(そいつは勘弁・・・)

シトリン

「えへへえ〜 (ニコニコ)」

4コマ

サイト

「ちっ、面倒だがしょうがない・・・(汗)」

シトリン

「なにを言ってるんですか。最近、出番の少ないサイトさんのことを思っ、この話を持ってきたんですよ」(笑)

サイト

「やかましいー！ー！ー！ー！(うぎゃー！ー！ー！ー！)」(大きなお世話だ！ー！)

シトリン

「では、さっそく今晚からお願いしますね」

サイト

「あゝ、昼過ぎから仮眠を取るけど・・・いいよな？」(汗)」

シトリン

「はい（もちろん） その分、お給料から引いときますね〜」

サイト

「うおーいー！（怒）（仕事だろー！）

シトリン

「で、これが被害者の話を聞いて作成した女性の霊の想像図です

（さっ）（「 一枚の紙を差し出す

サイト

「ほお、これが……。ん？（汗） なんだか……。シリカに似てるな（大汗）」

シトリン

「そうですね。目が開いていなければ、まんまシリカさんです

（あははっ）（「

サイト

「えっ（汗） 幽霊の正体って……。まさかシリカのことじゃないだろうな！？（ひょっとして）」

シトリン

「あははっ、まっさか〜〜」

サンストーン（招き猫）の館にて……

ジェムシリカ

「……へっくちー！」 可愛くくしゃみをする

コメント

幽霊・・・なのか？（笑）

第213話 過剰なスキンシップ

4コマ劇場 アイオライト―572・・・2011/11/20
シリーズ3

タイトル「過剰なスキンシップ」

1コマ

ルルルクオーツから遠く離れた第四聖界クリスタル最小の国 樹_こ
神に存在する如月家にて・・・

サファイア（優子）

「たっだいま〜〜 お兄ちゃん、いる〜〜〜?」

6歳ぐらいの少年

「あ、優子さん。お、お帰りなさ・・・」

効果音「どたどたどた!」

サファイア（優子）

「きゃーっ〜っ お兄ちゃん、可愛すぎー〜〜!〜!〜!（ぎゅ〜
〜〜っ）」 少年を抱きしめ

6歳ぐらいの少年

「ちよっ!?!（汗） ゆ、優子さん・・・くるし〜（じたばたじたば
た）」

6歳ぐらいの少女

「……………（じい〜〜っ）」 柱の陰から覗っている

サファイア（優子）

「あ、アリスちゃん。こんにちは」（にっこり）」

ちびっこアリス

「……………（たたっ）」 奥へと逃げていく

サファイア（優子）

「あちゃ〜（汗） やっぱり、嫌われてるのかな〜〜？（苦笑）」

6歳ぐらいの少年

「んんん！ んん〜〜〜！？」

サファイア（優子）の胸

に埋もれて窒息寸前（笑）

サファイア（優子）

「……………おや？（ときどきどき）」（お、お兄ちゃん？）

2コマ

数分後、リビングにて……………

綾菜 優子の母親で、元祖天空神サファイア（普段は人間族の姿）

「優子、突然戻ってきたりして……………いったいどうしたの。それに、天空神のお仕事はちゃんとこなしていますか？」 お茶を出している

サファイア（優子）

「あゝ、モノは相談なんだけど……………（汗） 天空神のお役目、ルウーに代わってもらうのってダメかな〜（大汗） ほら、わたしとルウーって双子なんだし〜、人間族として育てられたわたしと違って、ルウーなら天空神として立派にやっていけるんじゃないかな〜

って……（あははっ）」

綾菜

「ルウーは、ファリスの五精霊として、この精霊界を外敵の侵入から護る職務に就いています。そんな勝手は許されませんよ」

サファイア（優子）

「あ……、だよね……」（苦笑）」

綾菜

「って、まさかそんなことを確認するために……職務放棄してきた訳じゃないでしょうね」（じいっ）」

サファイア（優子）

「お母さんだって、昔はしょっちゅう職務放棄して人間界で過ごしてたような気がするけど……」（ぼそっ）」

綾菜

「何か言った？」

サファイア（優子）

「いやいやいや、何でもないよ」（苦笑） えっつと、今日戻ってきたのは……（きよろきよろ）」 辺りを見回す

6歳ぐらいの少年

「……っ」（大汗）」 おもわず視線が合う

サファイア（優子）

「そう、お兄ちゃん……シヨウウくんと一緒に風呂へ入るためです」

ちびっこシヨウ

「ええー！ー！ー！？（なにそれー！ー！ー！）」

効果音「ずががー！ー！ー！ー！ん！ー！」

3コマ

サファイア（優子）

「ふふふっ（にやり） ショウくんがどれだけ成長したのか（おもに肉体的な成長）、妹としては定期的に確認しておく必要があるの．．．（きゅぴん）」 瞳を妖しく輝かせながらにじり寄る

ちびっこシヨウ

「ちよっ．．．、優子さん（大汗）」（少し落ち着いて）

サファイア（優子）

「良いではないか、良いではないか（微笑）」

綾菜

「優子ちゃん．．．シヨウくんとアリスちゃんは、ファリスから預かった大切なお子さんです（汗）．．．ほどほどにね」（やれやれ）」（優子ちゃん、相変わらずね）

サファイア（優子）

「はあ〜い さあ、お兄ちゃん．．．服をぬぎぬぎしましよ
うね〜」

ちびっこシヨウ

「ちよー！ー！ー！ー！（涙）」

効果音「どたどたどた」

ちびっこアリス

「うづうづ、シヨウをいじめるなー！ー！！（ぽかぽかぽか！）
」（こいつ~~~~！） だだっ子パンチ炸裂！

サファイア（優子）

「あゝ、ごめんごめん（苦笑） ちょ〜っと、からかい過ぎたみたいね~~~~（大汗）」

綾菜

「だから、アリスちゃんに嫌われるのよ〜（ふふっ）」

ちびっこアリス

「む〜っ！（ぷく〜っ）」 頬を脹らませる

サファイア（優子）

「なるほど、そういうことか~~~~（あははっ）」

4コマ

綾菜

「それで・・・、そろそろ本題に入ったらどう？ そんなに、言いにくいことなのかしら？（汗）」

サファイア（優子）

「う〜ん・・・、そういうわけじゃないんだけど〜（汗）」

綾菜

「なら、はっきりしなさい・・・」

サファイア（優子）

「・・・桜ちゃんの治めている国ルチルクォーツに　アリスの生まれ変わりがいた（ぼそっ）」

綾菜

「・・・・・・・・・・。・・・そう（ちらっ）」　　シヨウをチラ見

ちびっこシヨウ

「ん？（はてな？）」

サファイア（優子）

「お兄ちゃんの生まれ変わりがシヨウくんのように、アリスもこの時代に生まれ変わっていた。これを偶然と考えるべきか・・・どうか（汗）」

綾菜

「あなたやルウーの兄、クリス・・・クリスタルから続くアウインの能力引き継ぎは、五千年前のシヨウとアリスの死によって輪廻から外れました。アリスが生まれ変わっていたとしても、それほど警戒する必要はないのでは？」

サファイア（優子）

「それが・・・（汗）　アリスの生まれ変わりの方もアウインの紋章を有していたりして・・・（あははっ）」

綾菜

「・・・え！？（汗）　そ、それは・・・このシヨウくんと同じように　なんらかの拍子に前世での人格が出てきちゃったり・・・するの？（どきどきどき）」

ちびっこシヨウ

「????(なに?)」

サファイア(優子)

「それは……あははっ……(苦笑)」
ばっちり前世の人格出てきています

綾菜

「え〜っと(汗) もし、前世の人格が表に出た状態で 二人が揃ったりしたら……(大汗)」

サファイア(優子)

「五千年前……二人が戦って人間界が滅んじやったように、この精霊界もどうなってしまうかわからないわね」(苦笑)」

綾菜

「つまりは、聖界崩壊の危機が迫っているってことかしら?」(大汗)」

サファイア(優子)

「そういうこと。だから、いちおう飛鳥と瑠璃にも知らせておこうかな〜っと思って、久しぶりに樹神に来たわけ」

綾菜

「飛鳥と瑠璃。今は無き……人間界の二神ですね(ぼそっ)」

サファイア(優子)

「そして……そのついでに、お兄ちゃんと一緒にお風呂を……(がしっ!)」 シヨウを確保する

ちびっこシヨウ

「わ、わああああ！！（涙）」 真剣な話だったので油断していた（笑）

綾菜

「つて、やめなイカーーーーー！！（叫び）」

ちびっこアリス

「シヨウをいじめるなーーーー！！（ぼかぼか）」 再
びだっ子パンチ

サファイア（優子）

「あはははっ」 シヨウとアリスの反応を楽しんでいます

効果音「ずがーーーー！！！！！！ん！！！！」

コメント

ちびっこシヨウとちびっこアリスは、大魔王ルシフォンと精霊神
ファリスの子どもです（事情があって綾菜が育てています）

第214話 人間界再生計画の現状

4コマ劇場 アイオライト―573・・・2011/11/22
シリーズ3

タイトル「人間界再生計画の現状」

1コマ

第四聖界クリスタル最小の国

樹神こたまにある樹神社にて・・・

サファイア（優子）

「あっ、ピジョンくん（おひさ） 相変わらず、眠っているの
ね〜」（苦笑）」

ピジョンブラッド

翼の生えた猫（竜族）

『すぴ〜』（ねむねむ）』 祭壇で約5千年眠り続けている
（笑）

突然の登場

???

「天空界の神様が、こんなところで油を売っていて良いのですか？」

サファイア（優子）

「あっ、葵さん お久しぶりです」

葵

「こんにちは（にっこり）」

説明文「葵は『もしかして怪談?』で優子に取り憑いた元浮遊

霊・・・本名樹神さやか。美咲の伯母で樹神の退魔師の長。人間族ではあるが、天空竜ピジョンブラッドの力を得たことで天空族の能力に目覚めている」

サファイア（優子）

「葵さん、飛鳥・・・いますか？」

葵

「え、なに？（汗） 伝説のアイドルグループSPINELを復活させるつもりなの！？（どびつきり！）」 優子は人間界崩壊までアイドルをやっていました（笑）

サファイア（優子）

「違いますー！ー！ー！（わにや～～～！）」

葵

「あら、それは残念ね・・・（ぼそっ）」

サファイア（優子）

「も、もお・・・（かああああ）」

顔が真っ赤

効果音「ずががー！ー！ー！ーん！」

2コマ

樹神社、奥神殿にて・・・

黄玉神（人間神）トパーズ（飛鳥）

現存する人間神の一人

「・・・。やはり聖界の創造には、十四創神の中でも時間と空間を操る時空神の一人と、それと同等の力を持つ十四創神がもう一人必要なようです」 調べ物中

青金神（人間神）ラピスラズリ（瑠璃） 同じく

「同等の力を持つ・・・（うぐん） それって、つまり・・・」

トパーズ（飛鳥）

「わたしたちのように、十四創神の魂を受け継いだ宝石騎士^{ジュエルナイト}ではなく、古の時代・・・全ての聖界を創造したオリジナルの十四創神が必要ですよ」

ラピス（瑠璃）

「オリジナルの十四創神というと・・・時空神のダイヤモンド（リアン）さまにエメラルド（ラルド）さま。あとは、暗黒神ルビー（ダークフィル）さま？」（ルビーさまにはお会いしたことありませんけど）

トパーズ（飛鳥）

「あとは、元天空神サファイア（綾菜）さまと元幻獣神アレキサンライト（アレク）さまもいますが・・・すでに十四創神を引退させていますから、お願いすることは難しいでしょうね」（聖界創造に耐えられるほど、魂の力が残っていないでしょうし・・・）

ラピス（瑠璃）

「所在のわからないルビーさまは論外ですから・・・（大汗）」

トパーズ（飛鳥）

「そう・・・（ぼそっ）」

ラピス（瑠璃）

「・・・（うぐり）」

トパーズ（飛鳥）

「聖界創造は絶対に無理ってことがここに判明しましたー！ー！ー！ー」

ラピス（瑠璃）

「えええええー！ー！ー！ー！ー！ー」

3コマ

突然の登場

サファイア（優子）

「5千年もかけた『人間界再生計画』をそんな簡単に諦めるなー！ー！ー！！（ずげしっ）」 はりせんでっっこみ炸裂

効果音「ずががー！ー！ー！ー！ー！ー！ーん！！」

トパーズ（飛鳥）

「わにやにやー！ー！ー！ー！ー！ー！ー（痛っ！！） って、優子！？（どびっくり）」 二人は幼馴染みです

ラピス（瑠璃）

「あら、優子さん……。お久しぶりですね（にっこり）」

サファイア（優子）

「ああ、うん……。汗） 瑠璃さん、お久しぶりです（あせあせ）」（みっともないところをお見せしまして）」

説明文「この時代、人間族の暮らしていた人間界は、5千年前に起こった十四創神同士の戦いジュエルウォーズにおいて消滅しています（主にシヨウとアリスの殺し合いで滅んだ） ちなみに、精霊

界第四聖界は、消滅しようとした人間界の代わりにシヨウウが中心となって創造した聖界で、彼の宝石騎士名でもあるクリスタルと名付けられています」

トパーズ（飛鳥）

「優子、いきなりなにするのよ！ はりせんでつつこみだなんて、人間神に就任してから（約5千年間）初めてのことだよ！！（むかつ！）」

サファイア（優子）

「ふふっ・・・（微笑）言葉の揺らぎ・・・軽いボケに対してつつこみを入れるのは、関西人として当然のことでしょ（にやり）」
（わたしの身体の中には、お笑いの血が流れて・・・）

トパーズ（飛鳥）

「いつから関西人になったのさーーーー！！（むきーーーー！！）」

ラピス（瑠璃）

「まあまあ、二人とも落ち着いて・・・（苦笑）」

4コマ

トパーズ（飛鳥）

「で、優子はいったい何をしにきたのかな~~~~（じい~~~~っ）」
「ジト目で見つめる」

サファイア（優子）

「あ、アリスの生まれ変わりを見つけたって報告に来ただけど・・・」

トパーズ（飛鳥）

「アリスの・・・生まれ変わり！！（どびつくり）　そ、それって、綾菜さんが預かっているシヨウくんみたいに、前世のアリスの能力を受け継いでいる生まれ変わりなの！？（大汗）」

サファイア（優子）

「まあ、そのことはどうでもいいんだけど」（うんん）

トパーズ（飛鳥）

「どうしてもよくない！！（下手をすると第四聖界まで崩壊して・・・）」

サファイア（優子）

「正直な話・・・人間界再生計画は本当に不可能なの？（汗）」
「ボケなんかじゃなく）」

トパーズ（飛鳥）

「・・・（汗）　さっきも説明したように、聖界創造には最低でもオリジナルの十四創神が二人は必要になる（そのうちの一人は時空神ね）　所在の確認できているオリジナルの十四創神がない以上、人間界再生は望めないわ・・・（ぼそっ）」

ラピス（瑠璃）

「でも飛鳥・・・。あなたはオリジナルにこだわっているようだけど、わたしたちのように魂を受け継いだ・・・いかなれば十四創神の生まれ変わりでは役に立たないものでしょうか？」

トパーズ（飛鳥）

「え〜っと（汗）　たとえば・・・オリジナルの十四創神であるラルドさまに、わたしたち三人が戦いを挑んで勝てると思う？（大汗）」

「

ラピス（瑠璃）

「そ、それは……（どきどきどき）」

サファイア（優子）

「絶対に無理でしょうね……（あははっ）」

トパーズ（飛鳥）

「それぐらい無理なことなの……（はあ） まあ、崩壊し
かかっている聖界を繋ぎとめて再生する程度なら、わたしたちでも
楽勝なんだけど（苦笑）」

サファイア（優子）

「ああ、崩壊しかかっている四聖界みたいなヤツだね」

トパーズ（飛鳥）

「そうそう、そんな感じの……（笑）」

効果音「ずがが—————ん!!」

コメント

四聖界修復は楽勝らしいです（爆）

第215話 二人目の協力者はダンジョンクリエイター

4コマ劇場 アイオライト―574・・・2011/11/25
シリーズ3

タイトル「二人目の協力者はダンジョンクリエイター」

1コマ

ルルルクオーツ、サンストーン（招き猫）の館にて・・・

チャロアイト

「え〜っと（おじゃまします） ロードライトくん・・・いますか〜〜〜？」

ロードライト

「あっ、（たしか、ユークレースの）チャロアイトさん お久しぶりです〜〜〜（ここにっ）」

チャロアイト

「・・・？（汗） あ〜、ロードライトくん・・・いますか？（大汗）」（どうしてわたしの名前を知って・・・）

ロードライト

「・・・、あれ〜？（どきどきどき）」

数分後・・・

チャロアイト

「・・・マジですか？（大汗）」

ジェムシリカ

「マジです（エェエエ）」

チャロアイト

「ロードライトくんって、女の子だったんですかーーーー!?（どびっくり）」

ロードライト

「はてしなく、いまさらですよーーーー!!（涙）」（うにゃーーーー!!）

効果音「ずががーーーーーーん!!」

説明文「チャロアイトは、冒険者バージョン（男装姿）のロードライトにしか会ったことはありません。・・・たぶん（大汗）」

2コマ

シリカ

「それで、チャロアイトは例のイベントに向けて、一緒に参加してくれる冒険者を捜しているわけね」

チャロアイト

「はい……。ドラゴンファングのアクロアイトさんにはお願いしてあるんですけど・・・あと二人に協力してもらう必要があります（苦笑）」

ロードライト

「それで、ボクたち招き猫勇者隊へ相談しに来たわけですね」

チャロアイト

「他の冒険者の皆さんとはあまり接点が無くって」（てへっ）
忘却の迷宮で招き猫勇者隊に助けられたことがあります

ロードライト

「なるほど……。でも、それってどうなんですか？」

チャロアイト

「え？ どうなんですか……。って？（汗）」

ロードライト

「ユークレースのナンバー決定戦って、かなり危険なイベントです（ユークナイトのレベルが高いので楽勝そうに見えますが……。）それに参加を求めるってことは、命を失う可能性だってあるってことですよね。招き猫勇者隊のリーダーとしては、そんな命がけのイベントにメンバーを参加させるわけにはいきません（ぺこり）」
（ごめんなさい）

チャロアイト

「あゝ、あははっ（苦笑） そっか〜〜（そだよね〜）」

3コマ

突然の登場

???

「くっくっくっ（微笑）」

チャロアイト

「だ、誰ですか!？」（大汗）」（不気味な笑い!）

エルバイト

招き猫勇者隊の仮メンバー

桜（フロアライト）

「あははっ アルバイト、ふられた〜〜（大爆笑）」

エルバイト

「やかましいぞ桜！！（激怒）」

効果音「ずがが—————ん！！」

4コマ

チャロアイト

「あ〜っと、いろいろとお騒がせしました・・・（ペこり） 残り
のパーティーメンバーについては、なんとかします（苦笑）」

ロードライト

「……………（う〜ん）」 何かを考えている

シリカ

「ロードライトさん。チャロアイトも困っているようですし、協力
してさしあげたらどうかしら？」（にっこり）」

チャロアイト

「えっ、ジエムシリカさま！？（びっくり）」

ロードライト

「そうですね〜（う〜ん） ボクたちが協力しなくてもなんとか
するでしょうが・・・ユークレース入団に目が眩んだ冒険者が何人集
まるうと活躍してくれるとは思えません・・・わかりました。ボ
クたち招き猫勇者隊も協力させていただきます！」（もちろん報酬
を頂きますが）

チャロアイト

「ロードライトくん、本当!?(やた)」

ロードライト

「……とはいえ、参加できるメンバーは限られてきそうですね」
(大汗)」

シリカ

「パロットくんやスファレさんは、ラリマーへ出向いていませんし
(しかもパロットくんは単独で参加しないと)」

桜 (フローラ)

「わたしは、シリカお姉ちゃんと一緒に (るん) (ちび
っこ化してシリカの病状を抑えている

ロードライト

「アルバイトさんは論外……(ぼそっ)」

エルバイト

「うおい!!(涙)」

ロードライト

「……ん?(までよ!) あとは、ボクしかない……のか!
?(そういえば……)」

チャロアイト

「……………ロードライトくん、よろしくお願ひします(入
声)」

ロードライト

「えっ、ちよっ……（汗） ボク、裏職業の関係で……目立つようなイベントに参加できなくて!!」（大汗）」

チャロアイト

「お願いします!!」（必死）」

ロードライト

「ええええええええええええええええ!!」（涙）」

コメント

ダンジョンマスターやダンジョンクリエイターの存在は、一部の冒険者にしか知られていません

第216話 目標に向かって突き進め!

4コマ劇場 アイオライト―575・・・2011/11/28
シリーズ3

タイトル「目標に向かって突き進め!」

1コマ

ラリマーの北西に位置するシデラゾート国の奥地にて・・・

パイロープ

「おい、グロツシュラー! アレックス改の修理状況はどうなんだい!! (叫び)」 アレックス改に向かって叫んでいる

グロツシュラー (声だけ)

外部スピーカーから声が聞こえる

『いやはや・・・、かなり広範囲に亘って壊れているようですから、いまのところなんともいえませんね。(汗) アレックスのコアは無事なようですから、自己修復機能もフル回転しているようなんです。・・・ (大汗)』

パイロープ

「アレックスも戦艦サイズになっちゃったからね。(汗) 最悪、単体で時空転移できるアレックス本体だけでも動けるようにしときなーーー! (叫び)」

グロツシュラー (声だけ)

『あらほらさっさ。(ぷちっ)』 放送(?) 終了

効果音「うーーーーーん、がががが、どどどどどど!」

突貫工事音 (笑)

コンドライト

「……………。何をやっているのか、さっぱりわからない……
（汗） っていうか、この鉄の塊りは本当に何なの！？（大汗）
（この前から気にはなっていたけどさ）」

アレキサンドライト（アレク）

「だから、前日も説明したが 時空跳躍船（汗） 時間の流れや
空間を飛び越えて、色々な聖界の過去や未来を旅することができる
時空族の遺産だ（何回も説明させるな……）」

コンドライト

「うっ？（汗） その時空ってのがいまいち理解できないんだけ
ど……（大汗）」

パイロープ

「こことは違う別の世界へ行ける船と考えれば……っていうより、
コンドライトが理解する必要はないことだよ（汗）」

コンドライト

「別の世界……（じくり） ぞ、ドロンジヨさま……！（叫び）」

パイロープ

「ああ……！（怒）（誰がドロンジヨだい！？）」

コンドライト

「ひっ！（びくっ） ぼ、ボクも……別の世界へ連れて行って！
！」

パイロープ

「やだねー！」

コンドライト

「即答ーーーーー！？（そんなーーーーー！）」

2コマ

パイロップ

「自分の逃げ道に、わたしたちを巻き込んでほしくないね〜」
ギロリ）」「 ドロンジョっていったことを根に持っています（笑）」

コンドライト

「そ、そんな〜」（涙）」

パイロップ

「だいたい、コンドライトがこの聖界からいなくなったらエンスタタイト帝国はどうなるんだい？ あんた、エンスタタイト帝国の王様なんだろ？」

コンドライト

「王様といっても、ほとんど形だけの・・・（ぼそっ）」

パイロップ

「・・・（じい〜っ）」 しょぼくれているコンドライトを見つめる

アレク

「まあまあドロンジョよ・・・。コンドライトはまだ幼い。なんでもかんでも責任を押し付けては、プレッシャーに押しつぶされてしま・・・」

パイロープ

「ちっ！（怒） あんたら側近がそうやってコンドライトをこども扱いするから、今のように国から追われる状況が出来上がったんじゃないのかい！！（うがー！！）」

アレク

「うぐっ・・・（大汗）」 これでも元十四創神です

パイロープ

「たしかにコンドライトは良い子だよ。それはこの数日で充分理解できた・・・。だけどそれだけじゃいけない。コンドライトは将来エンスタイト帝国の王様になるんだろ！！（怒）」

コンドライト

「王様になんかなりたく・・・（ぼそっ）」

パイロープ

「コンドライト！！（激怒）」

コンドライト

「はひっ！？（びくっ）」

3コマ

アレク

「だ〜か〜ら〜、あまりコンドライトを恐がらせるな（大汗）」

コンドライト

「う〜う〜う〜う〜う〜う〜（く〜く〜く〜く〜）」

パイロープ

「ちっ、この後ろ向きな性格なんかならないものかね〜」
「うん」

突然の登場

グロツシユラー

「ではドロンジヨさま じっじっのはどつでじょじっ」

パイロープ

「って、グロツシユラー!?!(いつの間に!?!)(ドロンジヨい
うな〜〜〜!?)

グロツシユラー

「さきほどのお話、立派なお話をしておっしゃっていましたが・・・結局はドロンジヨさまもコンドライトのことをこども扱い いうなれば、保護している立場にあるとおもわれます」

パイロープ

「うぐっ・・・(汗)(そう・・・なのかい?)

グロツシユラー

「保護されている状況に満足していたのでは、何を言おうと変わりようがありません。そこで!!(びじっ) コンドライトには、いまのメンバーのリーダーを務めてもらうのです」

パイロープ

「ほお〜 (それは面白そうな提案だね〜)」

コンドライト

「ちょーーーーー！ーーーー！……（どびっくら）」

4コマ

グロツシユラー

「ですがリーダーになったからといって、何も起こらなければ変わりようがありません。そこで一つの目標を掲げる必要があります」

パイロープ

「一つの……目標？」

グロツシユラー

「はい。一つのイベントをクリアするとかでは意味がありません。ここは大きく……」

パイロープ

「……（うぐり）」

グロツシユラー

「隣国を侵略しちゃいましょう（ぼそっ）」

コンドライト

「えええええーーーー！ーーーー！……（どびっくら）」（なにそれー！ーーーー！?）」

効果音「ずがーーーー！ーーーー！ん！」

パイロープ

「隣国って……このシテラゾート国のことかい？」

界の状況は勉強済み

第四聖

グロツシユラー

「いいえ、国内ではなく　ラリマーの隣国……。そうですね、比較的簡単そうなルチルクオーツ王国に戦争を仕掛けるっていうのはどうでしょうか？（ここにこ）」

パイロープ

「へえ、なかなか面白そうだね（にやり）」

コンドライト

「ちよつとちよつと〜！（大汗）」（なに言ってるのこの人たち！？）

グロツシユラー

「もちろん、この人数で戦争を起こすなど話にもなりません。侵略するためにコンドライトと一緒に戦ってくれる仲間を捜さなくては いけません」

パイロープ

「うんうん、それこそコンドライトの腕の見せ所だね〜（にこ〜っ）」

コンドライト

「決定？ その案、もう決定なの〜〜！！（涙）」

グロツシユラー

「しかも、こちらの軍事力を高めれば、エンスタタイトの追っ手も簡単に手出しできなくなりますし〜」

パイロープ

「まさに一石二鳥だね〜〜　　コンドライト……、あんたの決

意はわかった。わたしたちもできる限り協力するよ！！」

コンドライト

「って、いつのまにかボクが決めたことになってるし——！！
！（うにゃ——！！）」

アレク

「……………（どきどきどき）」（ゆかいなヤツらだ……）

効果音「ずががが——！！ん！！」

コメント

いつものことだが……なんでこんな話になったんだろう（笑）

第217話 もう一つの国境では・・・

4コマ劇場 アイオライト―576・・・2011/11/30

シリーズ3

タイトル「もう一つの国境では・・・」

1コマ

ヒューマイトの国境付近にて・・・

国境警備兵1

『・・・、・・・!!』 慌ててやって来て何かの報告)
?()をしている

国境警備兵2

『・・・!?・・・、・・・!!(たたつ)』 監視塔
の中へ駆け込む

少し離れた木陰にて・・・

陸

「・・・ん? なんだ、兵隊が・・・全くいなくなつたぞ(汗)」

サファイ

「ねえねえ)。いまなら国境・・・突破できるんじゃない?」

菜月

「そうね・・・。サファイちゃんのいうように、絶好の機会かも・・・
(ぼそつ)」「

アリス（フォスファイライト）

「えっ！？（汗） あんたたち、あの国境を越えたかったの！？
びっくり」

陸

「……………（汗）」

菜月

「……………（大汗）」

サファイ

「……………（どきどきどき）」

スフェーン（仔犬型） アリスの頭の上につつ伏せ状態で乗
っかっている

『あ……………。アリス、アリス？（汗）』

アリス（フォスファイ）

「ん〜？（スフェーン、どうした〜？）」

スフェーン（仔犬型）

『国境越えようとしていたのってあなた（フォスファイ）の方だから
（汗） 陸たちは、フォスファイに協力しているだけ……………（ぼそっ
』

アリス（フォスファイ）

「え、そっなの？（どきどきどき）」

陸

「はあ〜、こいつは……………（やれやれ）」

2コマ

アリス(フォスファイ)

「じゃあ、こんなところで時間をつぶしていないで、さっさと国境越えちゃおうよ(がさがさ)」
木陰から飛び出す

スフェーン(仔犬型)

「ちよっ、アリス!? (大汗)」

陸

「って、おい!! (叫び)」 (そんな堂々と出て行ったら!)

国境警備兵8

「ん!? (はっ!) おまえ、何者だ!! (たっ たっ たっ)
槍を構えて駆け寄ってくる

サファイ

「あちゃ〜、やっぱり見つかった〜 (大汗)」

菜月

「陸くん・・・、どうしますか? (ぼそっ)」

陸

「これだけ係わってしまったんだから見捨てるわけにもいかない。
サファイ、フュージョン・チェンジいけるか!? (叫び)」

サファイ

「やらいでか」

菜月

「いや・・・ちょっと待って!!!(あれを見て!)」
アリス
を指差す

陸

「え?」

3コマ

国境警備兵 8

「おい、おまえ・・・。そこでとまれ!!(ちゃきつ)」
槍
を構える

アリス(フォスファイ)

「あつ、どうもどうも」 お騒がせしてすみません(ペこり)
わたくし・・・こういう者です(すーっ) 「名刺を差し
出す

スフエーン(仔犬型)

『・・・・・・は?(大汗)』

国境警備兵 8

「あ、これはご丁寧に・・・(ペこり) え(なになに?) ル
シフ屋総本舗本店営業部部长・・・アリスさん? えっ、ルシフ屋
総本舗というと・・・あの!?(どびっくり)」

アリス(フォスファイ)

「はい(にこっ) うちの代表作はもちろん『優子ちゃんシリ
ーズ』です」

国境警備兵 8

「おおーーーーー!!!(すげえ!!)(わたしも優子ちゃんのフ

アんです)

陸

「……………(汗) い、いったい何の話をしているんだ？(大汗)」「(ルシフ屋)…総本舗？」

菜月

「さ、さあ？(どきどきどき)」

国境警備兵⁸

「それで……………その営業部長さんがどうしてここに？」

アリス(フォスフィ)

「はい……………。じつは、まだ極秘プロジェクトなんですけど……………(ちよいちよい)」 内緒話するから耳を貸せ (笑)

国境警備兵⁸

「ご、極秘プロジェクト……………(ごくり) それって、優子ちゃんに關係する……………うぐっ(どすっ!)」「

説明文「アリス(フォスフィ)の当て身を喰らって、国境警備兵⁸が力なく倒れ込む(笑)」

アリス(フォスフィ)

「……………任務完了 (ぼそっ) さあ、みんな、今のうちに国境越えるわよ……………(おいおいで……………)」

陸&菜月&サフィ

「……………ええ……………!!!(どびっくら)」「……………」

効果音「ずががーーーーーん！！」

4コマ

まんまと国境越え成功

アリス（フォスフィ）

「どう？ 上手くいったでしょ〜（ふっふん）」

菜月

「え〜っと、なんていうか・・・（大汗）」

陸

「あなた、滅茶苦茶するな〜〜（どきどきどき）」

サフィ

「アリス、凄〜〜い（キラキラキラ）」 憧れの眼差しで

見つめる

アリス（フォスフィ）

「でしよ〜〜」 さすがは任天堂宣伝部長

スフェーン（仔犬型）

『アリス・・・（はあ〜） その身体ってフォスフィのものなんだから、あんまり目立つことはしないようにお願いね〜（ぼそっ）』
（下手をするとフォスフィの立場が悪くなる・・・）

アリス（フォスフィ）

「わかってるって〜（苦笑） これは、国境を越えるための緊急措置で・・・あ、ところでさ〜（そういえば）」

スフエーン（仔犬型）

『・・・なに？（汗）』

アリス（フォスファイ）

「国境越えたのはいいんだけど・・・こっちの国に入って、いったい何をするの？」

陸

「ちょーっ！（汗） おまえ、何も考えずに国境越えたって言うのかー！ー！ー！（叫び）」

アリス（フォスファイ）

「えっ、なに？（汗） あたしに責任押し付ける気ー！ー！ー！？」

（涙）「（陸、ひどすぎ！）」

???

「なんや、自力で国境越えてきたんか？ さすがやな〜」

陸

「はっ、誰だ！？（ちゃきっ）」 聖剣クリソベリル（レプリ

カ）に手をかける

突然の登場

カナリー

「捜す手間はぶけたみたいやな〜（微笑） なあ、あんたら・・・、モノは相談なんやけど、一度この国の代表 クリノヒューマイトに会ってくれへんか〜？」

陸

「……………え？」（大汗）「どきどきどき」

コメント

陸たち『クラリアンアース』の世界には無いんだろっか、優子ちゃんシリーズ（笑）

第218話 あくまでも4コマです

4コマ劇場 アイオライト―577・・・2011/12/04
シリーズ3

タイトル「あくまでも4コマです」

1コマ

今から五千年ほど前に創造された聖界『精霊界第四聖界クリスタル』

創造神同士の戦い『ジュエルウォーズ』によって、崩壊への道を進み始めた人間界の代替として十四創神の一人……精霊神クリスタル（シヨウ）が同じく十四創神の時空神エメラルドの協力を得て創造した新しい聖界である。

通常、聖界創造するためには数百年もの期間を必要とするわけだが 崩壊の進む人間界からの移住を考えると、それだけの時間をかけている場合ではない。精霊神クリスタルは、十四創神の能力と引き替えに、僅か3ヶ月という短期間で聖界創造を成功させた。

その結果……、能力を失ったクリスタル シヨウは、己の半身でかつてのパートナー、十四創神アメシストの魂を受け継いだアリスによって殺されてしまった。そして、シヨウを死に追いやってしまった罪の意識から、アリスは十四創神の転生後能力引き継ぎを拒否……。自らも人間界から消滅した。

シヨウとアリスの死によって人間界崩壊は加速する。

人間界の全ての生命は、聖界創造直後の第四聖界クリスタルに移

住するしかなかった。しかし、創造直後の聖界は、大気も安定せず、とても生命の暮らせるような環境ではない。

そこで、天空神サファイアの役職を引き継いだ優子が中心となって、第四聖界クリスタルの各地に地下都市を建設する。人間界から移住してきた人々は、地下都市で数百年を暮らすことになった。

地下都市の痕跡は、五千年経った今となっても各地に残っている。ルルルクオーツ王国の砂漠地帯エリアDにある『忘却の迷宮』も、そんな地下都市の一つであった。

2コマ

エンスタタイト帝国の玉座に初老の男が座っている。王座を継いだ幼いコンドライトに代わって、全ての王政を取り仕切っていたドルールという名の前国王の弟……。つまりは、コンドライトにとつての叔父　エンスタタイト帝国の実質的な支配者であった。

ドルールの計画は順調に進んでいた。前国王の死後、コンドライトのサポートを理由にエンスタタイトにおいての実権を握る。後はコンドライトを亡き者にするだけというところで、予想していなかった事態が発生する。異世界より、この聖界の宝を収集するため、光竜アレキサンドライト（アレク）が現れたのだ。

見た目こそ人と変わらないアレクであったが、真の姿は全長10メートルを超す、まさしくドラゴンの姿であった。ドルールは、なんとかアレクを利用できないものかと考える。そして思いついたのがラリマー47国の完全統一……。全ての国を支配してしまうことであった。

伝説によると光竜の力は凄まじく、その気になれば僅か数日で聖

界すら滅ぼしてしまうと伝わっている。ドルールは、そんな伝説を利用して人々の恐怖を煽り、光竜アレキサンドライトを『エンスタタイトの魔竜』と位置づけ、周辺国に無条件降伏を呼びかけた。

当然、各国はそのような呼びかけに応じるはずもない。そのためドルールは、何も知らないコンドライトを唆し……真の姿のアレクに乗ってラリマー各国を巡ってみてはと進言する。無邪気なコンドライトにお願いされて、アレクも渋々と了承した。

数日後、ラリマー各国に激震が走る。国の上空に現れた巨大な怪物は、まさに伝説上の生物ドラゴンであったからだ。各国の代表は、それが『エンスタタイトの魔竜』であると理解する。伝説上の魔竜と戦っても勝ち目はない。各国は否応無しに降伏するしかなかった。

いかにも表面上ではあるが……ここにラリマー全土はエンスタタイト帝国によって統一された。

後はコンドライトを暗殺することで、全ての権力はドルールの手に入ってくる。コンドライトが生きている限り、ドルールは真の帝王ではないからだ。

だが、不穏な空気を察したのか、アレクがコンドライトを連れて、エンスタタイトから姿を消してしまう。それに焦ったのはドルールである。

民を捨てて逃げ出したコンドライトは良いとして、問題はエンスタタイトの魔竜であるアレクが不在なことであった。

辛うじて纏まっているラリマーではあったが、それはエンスタタイトの魔竜という恐怖があったのこと。アレク不在が知られれば、

各国による反乱の危険性がある。

そこでドルールは、かつてラリマーに進軍を繰り返していた宿敵である隣国『ルチルクオーツ王国』への宣戦布告という大きな目的を掲げた。各国の意識を魔竜の存在から逸らせるためである。

ヒューマイト国の人形使いスペクトロライトのルチルクオーツ潜入。デンドリチック国による進軍ルート確保。それらもまた、ルチルクオーツ王国への宣戦布告の下準備であった。

それ以外にも、消えたアレクたちの捜索が同時に進行されている。そしてもう一つ、エンスタタイトに残る文献の内容を調べるため、とある遺跡の調査が極秘裏に進められていた。今まさに、その遺跡調査の結果がドルールに報告されようとしていた。

3コマ

「ほお、それが例の石か……」

透明なケースに収められた3センチほどの石を見て、ドルールは怪訝そうな表情で呟いた。漆黒のガラス……いや、宝石の様に結晶化しているものの、何処にでもありそうな鉱物にしか見えなかったからだ。

そんなドルールの様子を見て、ケースを持つ老人がニヤリと微笑む。

「間違いありません。これが異世界の鉱物とされる『魔石』です」

「魔石か……。魔族という得体の知れない種族が住むとされる異世界　魔界にある鉱物だな。魔界など、本当に存在しているのか？」

「我々の祖先は、この聖界に移り住む前、人間界に住んでおりました……。つまりは別の聖界です。同じように魔界が存在していたとしても、なんら不思議ではありません。それに……」

「……ん？」

「我々の力の源には、二種類の属性があります。すなわち、精霊力属性と魔力属性です。そして、殆どの者が魔力属性……。精霊界で暮らす我々に備わる力が魔力であることから、魔界が存在している証明となるでしょう」

元来、人間族は……精霊族よりも魔族に近い種族だとされている。ただし、強大な魔力を有し、精霊族に匹敵する力を持つ魔族とは、比べものにならないほど貧弱な種族であった。

それは、精霊界第四聖界で暮らすようになって多少は改善されているわけだが……全種族の中でも最弱　それが人間族に対する評価であった。

「まあ、魔界が存在しているか存在していないかはどうでも良い。文献にある通りの力がその魔石に備わっているかどうか……」

「この魔石は、間違いなくルチルクォーツ王国にある地下遺跡通称『忘却の迷宮』の奥で発見されたものです。この魔石を回収す

るため、エンスタタイトの先兵が三十人ほど犠牲になりましたが

」

「そうか……」

忘却の迷宮には『古の巨大魔蟲』と呼ばれる大百足が無数に巣くっている。おそらく先兵は古の巨大魔蟲に喰われたのだろう。それなのに、ドルールはそのことに全く関心を示さなかった。

4コマ

「文献によると、聖界創造直後……人間界より移動してきた人々は、各地に建設された地下都市で暮らしていたそうです。人々が安定した地上に出たのは、それから数百年後のこと……。しかし、忘却の迷宮で暮らしていた者は、ただ一人として日の光を見ることは叶わなかった。聖界が安定する前に、全ての者が死んでしまったからです」

「その原因となったのが……魔石」

「そうです。魔石は生体に取り憑くことで奇跡の変化を引き起こします。身体を細胞レベルで活性させて、生体を異形の姿『魔獣』へと変化させるのです」

「魔獣化……だな」

「はい。魔獣化した者に噛まれると魔石のコピーを憑けられることになります。魔石を憑けられた者は、自身に宿る魔力や自然界に存在する魔力……。そして、人々から向けられる負の感情をため込む

「ことで……魔獣化を起こします」

「その結果、忘却の迷宮に移住した人々は滅んだ」

「閉鎖された空間では、どこにも逃げ道がありませんから」

「たった一つの魔石が持ち込まれたことによつて古の都市が滅んだか……。だが、魔獣化した生体を操ることさえできれば強大な戦力となる」

「たとえ操ることができなかつたとしても、敵国へ魔獣を放つことで我が帝国の勝利となります。我らが何もしなくとも、勝手に滅んでくれるわけですから」

「くくくつ……。よし、まずは生体に魔石を憑ける実験を始めよ。その後、魔獣によるルルクオーツ進軍を開始する！」

「ははっ、仰せのままに」

ドルールの言葉に老人は不気味に微笑む。老人にしてみれば、ルルクオーツ進軍などより、魔獣を復活させることの方が重要なのだろう。

エンスタイト帝国に持ち込まれた一つの魔石によつて、後にラリマー全土を巻き込む事件が起こることになる。魔石とは、ドルールたちが考えているより、危険な……取り扱いの困難な物であった。

だが、魔石の驚異は、なにもエンスタイト帝国だけの問題ではなかつた。

国土内に魔石の眠る忘却の迷宮を持つルチルクオーツ王国。危険度からすれば、ラリマーの比ではない。

数ヶ月後に忘却の迷宮で行われる予定のユークレース・ナンバー決定戦』も不安要素の一つである。いや、もっとも留意すべきは、ルチルクオーツ王都には……魔石に憑かれた者が存在していることであろうか

いまから五年前、忘却の迷宮で深手を負った冒険者ジェムシリカ……。彼女の胸元には、漆黒色をした魔石が憑いていた。

その事実は、瀕死のシリカを治療したユークレース・サポート部のトップ……ターフェアイトにしか知られていない。知ってはいるのだが　シリカの命を蝕む巨大魔蟲の毒素に意識が向いてしまい、魔石が危険なモノだとは夢にも思っていなかった。

魔石は、精霊力属性であるシリカに憑いたことで、急激な反応を起こさなかったようである。しかし、シリカに憑いた魔石は、周囲の人たちの魔力、自然界の魔力を徐々にため込むことで、活動を始めようとしていた。

不幸なことに、先に人間界で発生した『魔獣化事件』に関わった優子やリウムも、シリカに憑いた魔石の存在に気づかなかった。唯一、気づいていたのは美咲だったが……忘却の迷宮に眠る怨霊との関連を疑い、優子たちから聞いていた魔石とは思わなかったようだ。

シリカに憑いた魔石が発動するのは時間の問題である。魔獣化し、自我を失って、無作為に人々を襲うようになるのだろうか……。

カーテンの閉められた薄暗い自室の中で、シリカは何をするでもなく無意味に佇んでいる。しばらくして、シリカは両のまぶたをそっと開いた。巨大魔蟲の毒素によって失われたはずの視力……。開かれた瞳からは、鈍くて赤い　不気味な光を放っていた。

コメント

赤目シリカの活躍(?)も書くつもりでしたが　なんだか
笑いに走ってくれそうだったのでやめました(爆)　意味不明

第219話 赤い瞳には・・・いずれの魔王も封印されていません

4コマ劇場 アイオライト―578・・・2011/12/24

シリーズ3

タイトル「赤い瞳には・・・いずれの魔王も封印されていません」

1コマ

夜、サンストーン（招き猫）の館にて・・・

エルバイト

「・・・ん（きよろきよろ） なあ、シリカのヤツ・・・どこいったんだ？（姿が見えないようだ）」

ロードライト

「ああ、シリカさんなら、もうお休みになりましたよ」

エルバイト

「なにっ！ こんな時間にかよ！？（どびっくり） ったく、どんなお子様だよ（大汗）」

ロードライト

「うーん、シリカさんの身体は古の巨大魔蟲の猛毒におかされています。気丈に見えてはいますが・・・かなり無理をなされているのではないのでしょうか？（苦笑）」

エルバイト

「あ・・・そうだったな（汗） 普段からあんな感じだから、忘れがちだぜ（苦笑）」（元気に見えるが瀕死状態・・・）

桜（フロアライト） 三歳児姿

「アルバイト、はいりよにかけてる〜」（笑）

エルバイト

「やかましいぞ桜！！（うがーーーーー！！）」（お前は子どもなんだからさっさと寝やがれ！）

桜（フロアラ）

「きやはははっ」

エルバイト

「あれ？ そういえば、桜はシリカのそばにいないか。おまえがそばにいないと、病状が悪化するんだっただよな〜？」

桜（フロアラ）

「だいじょうぶだよ〜」

エルバイト

「って、軽いノリだが本当に大丈夫なのか〜」（大汗）

桜（フロアラ）

「……………。え〜っと、別にいつもぴったりそばにいらなくても、

王都内にいるのであれば問題はありませぬ（ぼそっ）」 真顔で

エルバイト

「その姿（三歳児）でフロアラ口調は違和感があるからやめてくれ（ぼそっ）」

桜（フロアラ）

「あはっ (にこっつ)」

2コマ

エルバイト

「にしても・・・、シリカって、本当に目が見えていないのか？
(汗)」

ロードライト

「それについては、ボクも不思議に思います。この前なんか一人で複雑なジグソーパズルを完成させましたし、テレビゲームの対戦格闘でも勝った例がないですから(苦笑)」

桜 (フローラ)

「アウインの勇者シヨウこと十四創神クリスタル・・・つまりわたしのお父さんですが、人間族の状態で平日午前8時から午後8時まで、着けているだけで視力を失って常時膨大な精霊力を消費し続けるという呪いのメガネをかけていました。でも、今のシリカさんのように、見えていないなんて信じられないほどでしたよ」

ロードライト

「へ、へえ・・・(汗)」(クリスタルさま、もの凄いです・・・)

エルバイト

「平日の朝8時から夜8時まで・・・？ それ以外の時間帯や、休日はどうなんだ？」

桜 (フローラ)

「それ以外はメガネ休暇です (にこっつ)」

エルバイト

「意味わかんねええええ！！（うにゃー！ー！ー！！）」

桜（フローラ）

「メガネを外したお父さん、美人さんでしたよ〜」（女性陣も含めて一番美人）

エルバイト

「ふむ。それは基本だな（ぼそっ）」

ロードライト

「き、基本なんですか？（どきどきどき）」

3コマ

桜（フローラ）

「え〜っと、つまり何が言いたいかというと、力の強い者にとつては視力が無くても問題ないってことです」

エルバイト

「いやいやいや、問題大有りだろ！！（汗）」

ロードライト

「うん、ボクもそう思う・・・（大汗）」

エルバイト

「っていうより、視力が無いのに周りの状況を理解する説明になってねえぞ！！（おいこら！！）」

桜（フローラ）

「あ〜、それは・・・ですね〜。うん、人を含めて物体からは微

弱なエネルギーが放出されているのは・・・知っていますよね？」

エルバイト

「・・・・・・・・？ 精霊力や魔力のことか？」

桜（フローラ）

「いえ、生体波長のことでなく・・・なんていうか（汗） 例えば、目をつむって、この箱に手を翳してください。そして、ゆっくりと手を箱に近づけていくと・・・何か感じませんか？（大汗）

「 説明下手

エルバイト

「さっぱりだ！！（叫び）」

桜（フローラ）

「じゃあ、説明を聞いても無駄だと思います（ぼそっ）」

エルバイト

「なにをーーーー！！（むきーーーー！！）」

ロードライト

「あ。なんとなくですが・・・箱の形がわかる・・・気がします」

桜（フローラ）

「そう、お父さんやシリカさんは、そのイメージをもっと完璧にして、様々な状況を把握しているんです」

ロードライト

「な、なるほど・・・？（大汗）」

エルバイト

「オレには意味がさっぱりだぞ！！（怒）」

4コマ

桜（フローラ）

「実際に聞いたわけではないのでなんとも言えませんが・・・シリカさんは、そういった物体を感じ取る能力がずば抜けているのだと思われます」

エルバイト

「つて、完全に無視かよ・・・（しくしくしく）」

ロードライト

「・・・（アルバイトさん・・・）でも、戦いなんかは・・・どうしているのかな？ 魔物とかの動きもわかるのかな？（汗）」

桜（フローラ）

「あゝ、それは、その～ですね（汗）ほら、地震が起こる前に空気の振動で地震がくるってわかる人（作者はわかります）がいるじゃないですか！ あんな感じで空気の振動をかんじているんですよ！！（大汗）」
かなり適当なことを言っています

ロードライト

「うゝん、本当にそうなのかなゝゝ（汗）」

桜（フローラ）

「と、とにかく、シリカさんは目が見えなくても問題ないってことです。もちろん、見えるにこしたことはありませんがゝゝ（大汗）」

「

夜、人気の少ない裏通りにて・・・

ポルーサイト

「はあゝ（やれやれ） 人を襲う女性の霊を調査しろって言われても・・・。第一、装備にウチの紋章が入っていたらしいけど、本当に元ユークレースの関係者だったのかゝゝ・・・。っと、な、なんだ!?（きよろきよろ）」

効果音「ずごごごごごっ!!」
なにやら霧のようなものが立ちこめる

サイト

「ちよっ、なんだ・・・この辺り、大気中に含まれる魔力密度が八ンパねえ！（汗） 精霊力属性の一般人が近づいたら、それこそ命を落しかねないぐらい高密度の魔力だぞ!!（大汗）」

???

遠くから人影が近づいてくる

「・・・」（ゆらゆら）

サイト

「ちっ・・・（汗） シトリンのヤツ、適当なこと言いやがって！何が霊の正体を確かめるだけの簡単な仕事ですだ!!（大汗）」
（相手の魔力から考えると、間違いなくSクラスのクエストだろ!）

???

瞳が不気味に赤く輝いている

「・・・ロツ・・・く・・・」（ぶつぶつ）」

サイト

「くそっ、あんな危なそうなヤツを野放しにしておくわけにはいかねえ・・・（ごくり） なんとしても、この王都から・・・って、

なにっ!?(どびっくり)「(そ、そんなまさか!?)

突然の登場

ジエムシリカ 真っ赤な瞳を見開いている

「わたしのパロットくんを奪ったのは、おまえか—————!
?(叫び)「 意味不明

サイト

「なんじゃそりゃ—————!!!(わぎゃ—————!!)」

効果音「ずがが—————ん!!!」

コメント

12月5日から、休み無しで9時〜23時出勤が続いています)
涙)

そのため来年まで更新できないと思いますので……ごめんなさい
(ペーじ)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3978o/>

最強の勇者はヒーラーでレベル1

2011年12月24日12時52分発行